

四街道市小屋ノ内遺跡(2)

縄文時代～中・近世編

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ —

[第1分冊]

平成18年10月

独立行政法人 都市再生機構

財団法人 千葉県教育振興財団



土偶



小屋ノ内遺跡空中写真

序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第557集として、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴って実施した四街道市小屋ノ内遺跡の第2冊目の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代から中・近世まで、遺構・遺物が出土していますが、とくに奈良・平安時代において、多くの竪穴住居跡・掘立柱建物跡が見つかるなど、千葉県の歴史を知る上で貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年10月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 岡野孝之

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県四街道市物井字小屋ノ内1322ほかに位置する小屋ノ内遺跡（遺跡コード228-013）である。本書には、平成元年度から平成10年度までの上層調査成果（縄文時代～中・近世）を収録した。なお、平成元年度から平成12年度までの下層調査成果（旧石器時代）は小屋ノ内遺跡(1)として既刊である。また、平成12年度の上層調査成果と、平成14年度・平成15年度の調査成果については別途刊行を予定している。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理事業の概要、担当者及び期間は第1章第1節に記載した。
- 5 本書の執筆分担は、第2章第1節～第4節を研究員大内千年、第2章第5節～第7節を所長古内茂、第3章第1節を研究員田中裕・研究員城田義友、第3章第2節～第4節、第4章第2節・第3節を上席研究員岸本雅人、第5章第2節の遺物を上席研究員渡邊高弘、第6章を上席研究員西野雅人が担当し、それ以外を上席研究員糸川道行が担当した。編集は糸川が行った。
- 6 文字資料の一部については、大学共同利用機関法人人間文化機構国立歴史民俗博物館平川南教授に判読していただき、古代の祭祀等について、知多古文化研究会坂野俊哉氏の指導を得た。また、石器等の石材は(有)考古石材研究所柴田徹氏の鑑定によった。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、四街道市教育委員会、独立行政法人都市再生機構の御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1・2・4・6～15図・第576～578図 住宅・都市整備公団（現独立行政法人都市再生機構）による物井地区現況図
第5図 国土地理院発行 1/25,000地形図「佐倉」（平成10年6月）・「千葉東部」（平成10年4月）
（縮尺変更、1/50,000にして使用）
- 9 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和44年撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方位は、すべて調査時の旧公共座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）である。
- 11 挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、次のとおりである。

	カマド		炭化物	・ 土器	遺物実測図
				・ 石器	■ 赤彩土器
	火床・炉		山砂（流失分）	■ 土製品	■ 黒色化部分 （黒色処理・漆仕上げ） （油煙等）
	焼土			・ 鉄製品	■ 緑釉陶器器面

目次

《第1分冊》

第1章 はじめに	1
第1節 上層調査の概要	1
第2節 周辺の遺跡	1
第2章 縄文時代	22
第1節 早期の遺構・遺物	22
1 炉穴	22
2 土坑	29
3 陥穴	31
第2節 前期の遺構・遺物	34
第3節 中期の遺構・遺物	34
1 竪穴住居跡	34
2 土坑	35
第4節 後・晩期の遺構・遺物	36
1 竪穴状遺構	36
2 埋甕	36
3 土坑	37
第5節 遺物集中地点・グリッド出土の土器	38
1 早期前葉遺物集中地点	39
2 早期後葉遺物集中地点	47
3 後期後葉遺物集中地点	52
4 グリッド出土土器	62
第6節 遺物集中地点・グリッド出土の石器	73
1 石器製作跡と出土石器	74
2 製作跡周辺の石器群	95
3 遺構外出土の石器群	104
4 縄文時代におけるチャート製石器製作工程	108
5 石器製作と器種	109
第7節 土製品・石製品	111
1 土製品	111
2 石製品	114
3 小型土偶について	115

第3章 弥生時代・古墳時代	123
第1節 弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡・壺棺墓・土坑、 古墳時代中期の鍛冶遺構	123
1 竪穴住居跡・鍛冶遺構	123
2 壺棺墓	167
3 土坑	169
第2節 古墳時代中期の竪穴住居跡	169
第3節 古墳時代後期の竪穴住居跡	181
第4節 古墳	210
第5節 遺構外出土遺物	224

《第2分冊》

第4章 奈良・平安時代	225
第1節 竪穴住居跡	225

《第3分冊》

第4章	
第2節 掘立柱建物跡	621
第3節 土坑墓	721
第4節 大型円形土坑	722
第5節 土坑	729
第6節 遺構外出土遺物	740
第5章 中・近世およびその他の遺構・遺物	753
第1節 概要	753
第2節 遺構・遺物	760
1 南部地区	760
(1) 土坑墓	760
(2) 地下式坑	762
(3) 溝状遺構・道路状遺構	763
2 中央部・西部地区	770
(1) 溝状遺構・道路状遺構, 土坑列, 台地整形遺構および関連遺構	770
(2) 井戸状遺構	789
3 東部地区	791
(1) 建物遺構および関連遺構	791
(2) 井戸状遺構	804
(3) 地下式坑	805
(4) 溝状遺構・道路状遺構, 土坑列および関連遺構	807

(5) 台地整形区画遺構および関連遺構	822
4 土坑	832
(1) 遺構	833
(2) 遺物	841
5 遺構外出土陶磁器およびその他の遺物	889
第6章 分析	896
第1節 貝サンプルの分析	896
第2節 土サンプル・火山灰・動植物遺体の分析	901
第3節 炭化モモ核と赤彩土器	905
第7章 まとめ	912
《第4分冊》	
写真図版	
報告書抄録	巻末

表 目 次

《第1分冊》

第1表 小屋ノ内遺跡年度別事業概要	2
第2表 小屋ノ内遺跡遺構種別一覧	3
第3表 縄文時代石器一覧表	116

《第3分冊》

第4表 SK・P位置図番号一覧	834
第5表 貝サンプル一覧	896
第6表 貝類種名一覧	896
第7表 貝類同定結果	898
第8表 貝種組成	898
第9表 貝類計測値分布	899
第10表 マガキの付着痕	900

第11表 炭化植物遺体	903
第12表 動物遺体	905
第13表 赤彩土器出土数の比較	908
第14表 竪穴住居跡観察表	919
第15表 掘立柱建物跡観察表	923
第16表 奈良・平安時代竪穴住居跡 出土土器観察表	926
第17表 金属製品観察表	1000
第18表 土製品観察表	1007
第19表 石製品観察表	1010
第20表 中・近世陶磁器・土器観察表	1013

挿図目次

《第1分冊》

第1図	物井地区の遺跡	5	第40図	SX-028出土土器(3)	55
第2図	小屋ノ内遺跡年度別調査区位置図	6	第41図	SX-028出土土器(4)	56
第3図	グリッド呼称法	6	第42図	SX-028出土土器(5)	57
第4図	小屋ノ内遺跡地区呼称図	7	第43図	SX-028出土土器(6)	58
第5図	小屋ノ内遺跡の位置と周辺の遺跡	8	第44図	SX-028出土土器(7)	59
第6図	遺構位置分割枠全体図	12	第45図	SX-028出土土器(8)	60
第7図	小屋ノ内遺跡上層遺構全体図	13	第46図	SX-028出土土器(9)	61
第8図	遺構位置図(1)	15	第47図	グリッド出土土器(1)	63
第9図	遺構位置図(2)	16	第48図	グリッド出土土器(2)	65
第10図	遺構位置図(3)	17	第49図	グリッド出土土器(3)	67
第11図	遺構位置図(4)	18	第50図	グリッド出土土器(4)	68
第12図	遺構位置図(5)	19	第51図	グリッド出土土器(5)	69
第13図	遺構位置図(6)	20	第52図	グリッド出土土器(6)	70
第14図	遺構位置図(7)	21	第53図	グリッド出土土器(7)	71
第15図	縄文時代遺構配置図	23	第54図	グリッド出土土器(8)	72
第16図	炉穴(1)	24	第55図	SX-028石器分布図(1)	75
第17図	炉穴(2)	28	第56図	SX-028石器分布図(2)	76
第18図	土坑	30	第57図	SX-028石器分布図(3)	77
第19図	陥穴	32	第58図	SX-028石器分布図(4)	78
第20図	SK-409	34	第59図	SX-028出土石器(1)	79
第21図	SI-112	35	第60図	SX-028出土石器(2)	80
第22図	SK-021	35	第61図	SX-028出土石器(3)	81
第23図	SK-306	36	第62図	SX-028出土石器(4)	82
第24図	SK-308	36	第63図	SX-028出土石器(5)	83
第25図	SK-038・055・305・618	38	第64図	SX-028出土石器(6)	86
第26図	SX-026型式別出土状況(口縁部個 体数)	40	第65図	SX-028出土石器(7)	87
第27図	SX-026撚糸文系土器と土偶出土地点	41	第66図	SX-028出土石器(8)	88
第28図	SX-026出土土器(1)	42	第67図	SX-028出土石器(9)	89
第29図	SX-026出土土器(2)	43	第68図	SX-028・026出土石器	91
第30図	SX-026出土土器(3)	44	第69図	SX-026出土石器(1)	93
第31図	SX-026出土土器(4)	45	第70図	SX-026出土石器(2)	94
第32図	SX-026出土土器(5)	46	第71図	SX-026・027周辺出土石器	96
第33図	SX-027遺物出土状況図	48	第72図	グリッド出土石器	98
第34図	SX-027出土土器(1)	49	第73図	SX-026・027周辺出土石器	99
第35図	SX-027出土土器(2)	50	第74図	グリッド出土石器	100
第36図	SX-027出土土器(3)	51	第75図	SX-026・027周辺出土石器(1)	101
第37図	SX-028遺物出土状況とピット群	53	第76図	SX-026・027周辺出土石器(2)	102
第38図	SX-028出土土器(1)	54	第77図	グリッド出土石器(1)	103
第39図	SX-028出土土器(2)	55	第78図	グリッド出土石器(2)	104
			第79図	SX-026・027周辺出土石器	106
			第80図	SX-026・027周辺、グリッド出土石器	107

第169図	SI-002 (3)	230	第214図	SI-044 (1)	284
第170図	SI-002 (4)	231	第215図	SI-044 (2)	285
第171図	SI-004 (1)	233	第216図	SI-044 (3)・045	287
第172図	SI-004 (2)	234	第217図	SI-047A (1)	288
第173図	SI-004 (3)	236	第218図	SI-047A (2)	289
第174図	SI-004 (4)	237	第219図	SI-047B	291
第175図	SI-004 (5)	238	第220図	SI-048	292
第176図	SI-004 (6)	239	第221図	SI-050 (1)	293
第177図	SI-004 (7)	240	第222図	SI-050 (2)	294
第178図	SI-005	242	第223図	SI-051	296
第179図	SI-008	243	第224図	SI-052	297
第180図	SI-009	243	第225図	SI-053 (1)	298
第181図	SI-010	244	第226図	SI-053 (2)	300
第182図	SI-011	245	第227図	SI-054 (1)	302
第183図	SI-013 (1)	246	第228図	SI-054 (2)	303
第184図	SI-013 (2)	247	第229図	SI-055	303
第185図	SI-013 (3)	248	第230図	SI-056 (1)	305
第186図	SI-013 (4)	250	第231図	SI-056 (2)	306
第187図	SI-013 (5)	251	第232図	SI-057・058	307
第188図	SI-014 (1)	252	第233図	SI-059	308
第189図	SI-014 (2)	254	第234図	SI-060	309
第190図	SI-014 (3)	255	第235図	SI-061	311
第191図	SI-015 (1)	257	第236図	SI-062	312
第192図	SI-015 (2)	258	第237図	SI-063 (1)	313
第193図	SI-015 (3)	259	第238図	SI-063 (2)	314
第194図	SI-016	260	第239図	SI-064・SK-072	316
第195図	SI-018	262	第240図	SI-067 (1)	318
第196図	SI-019	263	第241図	SI-067 (2)	319
第197図	SI-025	264	第242図	SI-069	320
第198図	SI-028 (1)	265	第243図	SI-071	321
第199図	SI-028 (2)	266	第244図	SI-072 (1)	323
第200図	SI-029	268	第245図	SI-072 (2)	325
第201図	SI-030	269	第246図	SI-072 (3)	326
第202図	SI-031	270	第247図	SI-073	327
第203図	SI-032	272	第248図	SI-075 (1)	329
第204図	SI-035	273	第249図	SI-075 (2)	330
第205図	SI-036	275	第250図	SI-077	332
第206図	SI-037	275	第251図	SI-079	332
第207図	SI-038	277	第252図	SI-080	334
第208図	SI-039	278	第253図	SI-080及び周辺の奈良・平安時代遺物 出土状況	335
第209図	SI-040	279	第254図	SD-017等SI-080周辺の奈良・平安時 代遺物	336
第210図	SI-041	280	第255図	SI-081	337
第211図	SI-042	281	第256図	SI-082 (1)	338
第212図	SI-043 (1)	282			
第213図	SI-043 (2)	283			

第257图	SI-082 (2)	339	第302图	SI-124	399
第258图	SI-083 (1)	341	第303图	SI-126	400
第259图	SI-083 (2)	342	第304图	SI-127	402
第260图	SI-085	344	第305图	SI-128 (1)	404
第261图	SI-086 (1)	345	第306图	SI-128 (2)	405
第262图	SI-086 (2)	346	第307图	SI-128 (3)	406
第263图	SI-087	347	第308图	SI-128 (4)	407
第264图	SI-088 (1)	348	第309图	SI-129A · SI-129B	409
第265图	SI-088 (2)	349	第310图	SI-130	411
第266图	SI-089 (1)	351	第311图	SI-131	413
第267图	SI-089 (2)	352	第312图	SI-132 (1)	416
第268图	SI-090	354	第313图	SI-132 (2)	417
第269图	SI-091	355	第314图	SI-133	419
第270图	SI-092	357	第315图	SI-134	420
第271图	SI-093	358	第316图	SI-135	421
第272图	SI-094	359	第317图	SI-137 (1)	423
第273图	SI-095	360	第318图	SI-137 (2)	424
第274图	SI-096	362	第319图	SI-137 (3)	425
第275图	SI-097	363	第320图	SI-138	426
第276图	SI-098 (1)	364	第321图	SI-139	428
第277图	SI-098 (2)	365	第322图	SI-140	429
第278图	SI-099	366	第323图	SI-141	430
第279图	SI-100	367	第324图	SI-142	431
第280图	SI-102	369	第325图	SI-143	432
第281图	SI-104	371	第326图	SI-144	434
第282图	SI-105	372	第327图	SI-147 (1)	436
第283图	SI-106	373	第328图	SI-147 (2)	437
第284图	SI-107	374	第329图	SI-148	438
第285图	SI-108	375	第330图	SI-149	439
第286图	SI-109	376	第331图	SI-150A	440
第287图	SI-110	378	第332图	SI-150B	441
第288图	SI-111	380	第333图	SI-151	443
第289图	SI-113	381	第334图	SI-152	445
第290图	SI-115	383	第335图	SI-153	446
第291图	SI-117 (1)	384	第336图	SI-154 (1)	447
第292图	SI-117 (2)	385	第337图	SI-154 (2)	448
第293图	SI-118 (1)	387	第338图	SI-155	449
第294图	SI-118 (2)	388	第339图	SI-156	451
第295图	SI-119	390	第340图	SI-157	451
第296图	SI-120	392	第341图	SI-158	452
第297图	SI-121	393	第342图	SI-159	453
第298图	SI-122	394	第343图	SI-160	453
第299图	SI-123 (1)	395	第344图	SI-161	454
第300图	SI-123 (2)	397	第345图	SI-162	454
第301图	SI-123 (3)	398	第346图	SI-163	455

第347图	SI-164	456	第392图	SI-312	515
第348图	SI-165	457	第393图	SI-313 (1)	517
第349图	SI-166	459	第394图	SI-313 (2)	518
第350图	SI-167	460	第395图	SI-314	519
第351图	SI-169	461	第396图	SI-315	519
第352图	SI-174	462	第397图	SI-316	520
第353图	SI-178	463	第398图	SI-317	521
第354图	SI-179	465	第399图	SI-318	522
第355图	SI-180	466	第400图	SI-319	523
第356图	SI-188	468	第401图	SI-320 (1)	525
第357图	SI-189	469	第402图	SI-320 (2)	526
第358图	SI-190	470	第403图	SI-321	527
第359图	SI-191	471	第404图	SI-322	538
第360图	SI-192	472	第405图	SI-323	530
第361图	SI-193	473	第406图	SI-324	531
第362图	SI-194	475	第407图	SI-325	532
第363图	SI-195	476	第408图	SI-326	534
第364图	SI-196	478	第409图	SI-327	536
第365图	SI-197	479	第410图	SI-328	538
第366图	SI-198	480	第411图	SI-329	540
第367图	SI-199 (1)	481	第412图	SI-330	541
第368图	SI-199 (2)	482	第413图	SI-331	542
第369图	SI-200	484	第414图	SI-332	543
第370图	SI-201	485	第415图	SI-333A (1)	544
第371图	SI-202 (1)	487	第416图	SI-333A (2)	545
第372图	SI-202 (2)	488	第417图	SI-334 (1)	547
第373图	SI-207	489	第418图	SI-334 (2)	548
第374图	SI-208	490	第419图	SI-335 (1)	550
第375图	SI-209	492	第420图	SI-335 (2)	551
第376图	SI-300	493	第421图	SI-336	552
第377图	SI-301	494	第422图	SI-337 (1)	553
第378图	SI-302	495	第423图	SI-337 (2)	554
第379图	SI-303	496	第424图	SI-338	555
第380图	SI-304	497	第425图	SI-339	556
第381图	SI-305	499	第426图	SI-340	557
第382图	SI-306	500	第427图	SI-341	558
第383图	SI-307 (1)	503	第428图	SI-342	560
第384图	SI-307 (2)	504	第429图	SI-343	561
第385图	SI-307 (3)	505	第430图	SI-344	563
第386图	SI-307 (4)	506	第431图	SI-345 (1)	564
第387图	SI-307 (5)	507	第432图	SI-345 (2)	565
第388图	SI-308	509	第433图	SI-346	566
第389图	SI-309	510	第434图	SI-347	567
第390图	SI-310	512	第435图	SI-348	568
第391图	SI-311	514	第436图	SI-349	569

第511図	SB-048	664	第556図	SB-123	717
第512図	SB-049	665	第557図	SB-124	717
第513図	SB-050・051	666	第558図	SB-125	718
第514図	SB-052(A)・052(B)	667	第559図	SB-126	719
第515図	SB-053・054	669	第560図	SB-128	720
第516図	SB-054・055	670	第561図	SB-129	721
第517図	SB-056・057	671	第562図	有天井土坑	722
第518図	SB-058・059	673	第563図	SK-164・165 (1)	724
第519図	SB-060	674	第564図	SK-164・165出土遺物 (1)	725
第520図	SB-061	675	第565図	SK-164・165出土遺物 (2)	727
第521図	SB-062	677	第566図	奈良・平安時代土坑	730
第522図	SB-063・064	678	第567図	奈良・平安時代土坑出土遺物	732
第523図	SB-065・066	679	第568図	SK-400 (1)	735
第524図	SB-067	681	第569図	SK-400 (2)	736
第525図	SB-068	682	第570図	P-851	739
第526図	SB-069	683	第571図	奈良・平安時代遺構外出土遺物 (1)	741
第527図	SB-070	684	第572図	奈良・平安時代遺構外出土遺物 (2)	744
第528図	SB-071	685	第573図	奈良・平安時代遺構外出土遺物 (3)	746
第529図	SB-072・073	686	第574図	奈良・平安時代遺構外出土遺物 (4)	748
第530図	SB-074・075	687	第575図	奈良・平安時代遺構外出土遺物 (5)	750
第531図	SB-076・077	688	第576図	中近世遺構・南部地区	756
第532図	SB-078・079・080	690	第577図	中近世遺構中央部・西部地区	757
第533図	SB-081・082	691	第578図	中近世遺構・東部地区	759
第534図	SB-083(A)・(B)	693	第579図	SK-017・018	762
第535図	SB-084	694	第580図	SK-071	763
第536図	SB-085・087・088・090	695	第581図	SD-002・013・023・024	764
第537図	SB-086・089	696	第582図	SD-001	766
第538図	SB-091・141	697	第583図	SD-012・014・015・016・026・027・ SX-016	768
第539図	SB-100	698	第584図	SD-017・018	769
第540図	SB-101	699	第585図	SD-025	770
第541図	SB-102	700	第586図	SD-022	771
第542図	SB-103・104	701	第587図	SD-028・029・034・071・072	772
第543図	SB-105	703	第588図	SD-035・038	773
第544図	SB-106	704	第589図	SD-036・037	775
第545図	SB-107・108	705	第590図	SD-030・031・032・033	776
第546図	SB-109	706	第591図	SD-020・021・040	778
第547図	SB-110	707	第592図	SD-019	779
第548図	SB-111・112	708	第593図	SX-019・SK-109	780
第549図	SB-113・114	710	第594図	SD-042	781
第550図	SB-115	711			
第551図	SB-116	712			
第552図	SB-117	713			
第553図	SB-118	714			
第554図	SB-119・120	715			
第555図	SB-121・122	716			

第511図	SB-048	664	第556図	SB-123	717
第512図	SB-049	665	第557図	SB-124	717
第513図	SB-050・051	666	第558図	SB-125	718
第514図	SB-052(A)・052(B)	667	第559図	SB-126	719
第515図	SB-053・054	669	第560図	SB-128	720
第516図	SB-054・055	670	第561図	SB-129	721
第517図	SB-056・057	671	第562図	有天井土坑	722
第518図	SB-058・059	673	第563図	SK-164・165 (1)	724
第519図	SB-060	674	第564図	SK-164・165出土遺物 (1)	725
第520図	SB-061	675	第565図	SK-164・165出土遺物 (2)	727
第521図	SB-062	677	第566図	奈良・平安時代土坑	730
第522図	SB-063・064	678	第567図	奈良・平安時代土坑出土遺物	732
第523図	SB-065・066	679	第568図	SK-400 (1)	735
第524図	SB-067	681	第569図	SK-400 (2)	736
第525図	SB-068	682	第570図	P-851	739
第526図	SB-069	683	第571図	奈良・平安時代遺構外出土遺物 (1)	741
第527図	SB-070	684	第572図	奈良・平安時代遺構外出土遺物 (2)	744
第528図	SB-071	685	第573図	奈良・平安時代遺構外出土遺物 (3)	746
第529図	SB-072・073	686	第574図	奈良・平安時代遺構外出土遺物 (4)	748
第530図	SB-074・075	687	第575図	奈良・平安時代遺構外出土遺物 (5)	750
第531図	SB-076・077	688	第576図	中近世遺構・南部地区	756
第532図	SB-078・079・080	690	第577図	中近世遺構中央部・西部地区	757
第533図	SB-081・082	691	第578図	中近世遺構・東部地区	759
第534図	SB-083(A)・(B)	693	第579図	SK-017・018	762
第535図	SB-084	694	第580図	SK-071	763
第536図	SB-085・087・088・090	695	第581図	SD-002・013・023・024	764
第537図	SB-086・089	696	第582図	SD-001	766
第538図	SB-091・141	697	第583図	SD-012・014・015・016・026・027・ SX-016	768
第539図	SB-100	698	第584図	SD-017・018	769
第540図	SB-101	699	第585図	SD-025	770
第541図	SB-102	700	第586図	SD-022	771
第542図	SB-103・104	701	第587図	SD-028・029・034・071・072	772
第543図	SB-105	703	第588図	SD-035・038	773
第544図	SB-106	704	第589図	SD-036・037	775
第545図	SB-107・108	705	第590図	SD-030・031・032・033	776
第546図	SB-109	706	第591図	SD-020・021・040	778
第547図	SB-110	707	第592図	SD-019	779
第548図	SB-111・112	708	第593図	SX-019・SK-109	780
第549図	SB-113・114	710	第594図	SD-042	781
第550図	SB-115	711			
第551図	SB-116	712			
第552図	SB-117	713			
第553図	SB-118	714			
第554図	SB-119・120	715			
第555図	SB-121・122	716			

第680図	赤彩土器出土数	908
第681図	弥生時代～古墳時代前期遺構分布図	913

第682図	古墳時代中期遺構分布図	915
第683図	古墳時代後期遺構分布図	916

図版目次

《第1分冊》

巻頭図版 土偶

小屋ノ内遺跡空中写真

《第4分冊》

図版1 遺跡周辺航空写真

図版2 小屋ノ内遺跡空中写真(1)

図版3 小屋ノ内遺跡空中写真(2)

図版4 小屋ノ内遺跡空中写真(3)

小屋ノ内遺跡空中写真(4)

図版5 平成1年・2年度調査区空中写真

平成6年度調査区空中写真

図版6 平成5年度調査区空中写真

平成7年度調査区方墳空中写真

図版7 平成7年度調査区空中写真

平成8年度調査区空中写真

図版8 SK-037・SK-045・SK-051・052・SK-064・SK-066・SK-069・070・SK-069・SK-075

図版9 SK-077・SK-078・SK-082・SK-087・SK-115・SK-115・122・SK-116～118・SK-010

図版10 SK-012・SK-112遺物出土状況・SK-112・SK-114・SK-166貝層出土・SK-023・SK-042・SK-061

図版11 SK-128・SK-401・SK-403・SK-404・405・SK-406・SK-407・SK-409・SK-021

図版12 SI-112・SI-112遺物出土状況・SI-112出土遺物・SK-306・SK-055・SX-026(20U包含層)

図版13 SX-027(20V包含層)・SX-028(19O包含層)・19O-5遺物出土状況・19O-24出土遺物

図版14 SX-001調査前・墳丘・SX-001・周溝内遺物出土状況・周溝内土層断面・墳丘土層断面・周溝内土坑炭化物出土状況

図版15 SX-005・SX-017・SX-007・周溝内遺物出土状況・SX-008

図版16 SX-009・周溝内遺物出土状況・SX-018・SX-019

図版17 SI-001・遺物出土状況・カマド・SI-002・カマド脇施設土層断面・出土遺物・SI-003・カマド・出土遺物

図版18 SI-004・貼り床状況・カマド土層断面・SI-005・カマド土層断面

図版19 SI-006・出土遺物

SI-007・遺物出土状況・出土遺物・カマド遺物出土状況・カマド

図版20 SI-008・SI-009～011・SI-009遺物出土状況

図版21 SI-012・遺物出土状況・カマド遺物出土状況・SI-013

図版22 SI-013遺物出土状況・カマド・SI-014・遺物出土状況・SI-015・遺物出土状況

図版23 SI-015土層断面・貯蔵穴土層断面・SI-016・017・SI-016カマド遺物出土状況・SI-017カマド遺物出土状況・カマド・貯蔵穴内遺物出土状況・カマド袖内遺物出土状況

図版24 SI-018・カマド遺物出土状況・SI-019・カマド

図版25 SI-020・遺物出土状況・SI-021・遺物出土状況・カマド土層断面・遺物出土状況

図版26 SI-022・SI-024・SI-025・026・SI-026出土遺物

図版27 SI-026カマド土層断面・SI-027・SI-028・遺物出土状況・カマド遺物出土状況

図版28 SI-028遺物出土状況・カマド・SI-029・土層断面・カマド土層断面

図版29 SI-030・SI-031・土層断面・カマド

図版30 SI-032・カマド袖土層断面・遺物出土状況・SI-033・炉土層断面・貯蔵穴内遺物

図版31 SI-034・土層断面及び遺物出土状況・SI-035・出土遺物

図版32 SI-035出土遺物・カマド遺物出土状況・SI-036・土層断面・遺物出土状況・炭化材出土・カマド遺物出土状況

図版33 SI-037・遺物出土状況・土層断面・SI-038・カマド遺物出土状況・支脚出土

- 図版34 SI-039・遺物出土状況・SI-040・遺物出土状況・カマド・SI-041・遺物出土状況・カマド
- 図版35 SI-042・カマド内遺物出土状況・SI-043A・B
- 図版36 SI-043遺物出土状況・カマド・SI-044・045・SI-044遺物出土状況・カマド・SI-046
- 図版37 SI-047A・遺物出土状況・カマド・SI-047B・階段状遺構?・カマド・SI-048・カマド遺物出土状況
- 図版38 SI-049・SI-050・遺物出土状況・カマド袖断ち割り
- 図版39 SI-051・カマド遺物出土状況・SI-052・SI-053・遺物出土状況
- 図版40 SI-053炭化材出土状況・カマド遺物出土状況・カマド煙道・カマド・SI-054・SI-055
- 図版41 SI-056・遺物出土状況・カマド・SI-056B・SI-057・058
- 図版42 SI-059・カマド・SI-060・カマド
- 図版43 SI-061・土層断面・遺物出土状況・SI-062・カマド遺物出土状況・カマド
- 図版44 SI-062遺物出土状況・SI-063・遺物出土状況・カマド遺物出土状況・カマド・SI-064
- 図版45 SI-064カマド遺物出土状況・カマド・SI-065・遺物出土状況・SI-066
- 図版46 SI-067・カマド・遺物出土状況・SI-068・貯蔵穴土層断面
- 図版47 SI-068遺物出土状況・SI-069・遺物出土状況・カマド遺物出土状況・カマド・SI-063・070
- 図版48 SI-071・カマド遺物出土状況・カマド・SI-072・土層断面・遺物出土状況・カマド遺物出土状況・カマド
- 図版49 SI-073・遺物出土状況・カマド・SI-074・炉・SI-075・遺物出土状況
- 図版50 SI-075遺物出土状況・カマド・SI-076・遺物出土状況・灰の分布状況・土層断面・遺物出土状況・カマド焼土
- 図版51 SI-077・焼土・カマド・SI-078・貯蔵穴・遺物出土状況
- 図版52 SI-079・遺物出土状況・SI-080・遺物出土状況・カマド・SI-081・カマド
- 図版53 SI-081・遺物出土状況・SI-082・カマド遺物出土状況・遺物出土状況・カマド支脚・カマド
- 図版54 SI-083・貯蔵穴・カマド内焼土・カマド遺物出土状況・SI-084・遺物出土状況・炉
- 図版55 SI-085・カマド遺物出土状況・カマド・遺物出土状況・SI-086・カマド遺物出土状況・カマド
- 図版56 SI-086遺物出土状況・SI-087・カマド掘り方・カマド・カマド内焼土・SI-088・カマド遺物出土状況
- 図版57 SI-088遺物出土状況・SI-089・遺物出土状況・Aカマド遺物出土状況・Bカマド遺物出土状況
- 図版58 SI-090・遺物出土状況・カマド・SI-091・カマド・遺物出土状況
- 図版59 SI-092・遺物出土状況・カマド遺物出土状況・遺物出土状況・SI-093
- 図版60 SI-093遺物出土状況・SI-094・SI-095・遺物出土状況・カマド
- 図版61 SI-096・遺物出土状況・カマド・SI-097
- 図版62 SI-098・カマド内遺物出土状況・遺物出土状況・カマド・SI-099・カマド
- 図版63 SI-100・カマド・遺物出土状況・SI-101・炉検出状況・炉
- 図版64 SI-101遺物出土状況・遺物出土状況・SI-102・遺物出土状況・カマド内遺物出土状況・SI-103・炉
- 図版65 SI-103遺物出土状況・SI-104・遺物出土状況・カマド内遺物出土状況
- 図版66 SI-105・遺物出土状況・カマド内遺物出土状況・SI-106・カマド・SI-107
- 図版67 SI-108・カマド・SI-109・遺物出土状況・カマド
- 図版68 SI-110・カマド・SI-111・遺物出土状況・カマド内遺物出土状況・Aカマド・Bカマド
- 図版69 SI-113・遺物出土状況・出土遺物・カマド遺物出土状況・カマド
- 図版70 SI-114A・遺物出土状況・炉・SI-115・カマド・カマド内支脚・遺物出土状況
- 図版71 SI-116・炉・遺物出土状況・SI-117・遺物出土状況・カマド内遺物出土状況
- 図版72 SI-117土層断面・遺物出土状況・SI-118・カマド内遺物出土状況・カマド土層断面・カマド内支脚・カマド・遺物出土状況
- 図版73 SI-118・遺物出土状況・SI-119・遺物出土状況・カマド内遺物出土状況・カマド
- 図版74 SI-120・カマド・遺物出土状況・SI-121

- 図版75 SI-122・遺物出土状況・SI-123・遺物出土状況・カマド内支脚・カマド内遺物出土状況
- 図版76 SI-124・カマド遺物出土状況・SI-125・SI-126・カマド近辺遺物出土状況
- 図版77 SI-127・カマド・SI-128・カマド・遺物出土状況
- 図版78 SI-129A・SI-129B・カマド・SI-130・SI-131・カマド内遺物出土状況
- 図版79 SI-132・カマド内遺物出土状況・壁溝・SI-133・カマド
- 図版80 SI-133遺物出土状況・SI-134・カマド・カマド内遺物出土状況・SI-135
- 図版81 SI-137・カマド内遺物出土状況・床下粘土層トレンチ・小ピット群・SI-138・カマド
- 図版82 SI-139・140周辺遺構状況・SI-139・カマド・SI-140・カマド
- 図版83 SI-140周辺遺構状況・SI-142・遺物出土状況・カマド
- 図版84 SI-143・カマド・SI-144・カマド・遺物出土状況
- 図版85 SI-145・カマド・SI-146・カマド・SI-147・遺物出土状況
- 図版86 SI-148・SI-149・カマド・SI-148周辺遺構
- 図版87 SI-150A・150B・Aカマド内遺物出土状況・Bカマド遺物出土状況・SI-151・カマド内支脚・SI-152~156・SI-152カマド・SI-154遺物出土状況
- 図版88 SI-154カマド内支脚・SI-155カマド内遺物出土状況・SI-156周辺遺構・SI-157・カマド・SI-158・カマド
- 図版89 SI-159・SI-160・SI-161
- 図版90 SI-162・SI-163・カマド・土層断面・遺物出土状況
- 図版91 SI-164・カマド・SI-165・土層断面・遺物出土状況・土器・焼土出土状況・カマド?・カマド
- 図版92 SI-166・遺物出土状況・カマド・SI-167・カマド
- 図版93 SI-168・遺物出土状況・SI-169・遺物出土状況・カマド
- 図版94 SI-170・SI-171・SI-172
- 図版95 SI-172遺物出土状況・SI-173・SI-174・遺物出土状況
- 図版96 SI-175・遺物出土状況・SI-176・遺物出土状況
- 図版97 SI-177・遺物出土状況・カマド・SI-178・カマド・遺物出土状況
- 図版98 SI-179・カマド内遺物出土状況・カマド・遺物出土状況・SI-180・カマド
- 図版99 SI-180遺物出土状況・SI-181・SI-182
- 図版100 SI-183・SI-184・SI-185
- 図版101 SI-186・SI-188・カマド・遺物出土状況・カマド内遺物出土状況
- 図版102 SI-189・遺物出土状況・SI-190・カマド内遺物出土状況
- 図版103 SI-191・遺物出土状況・カマド・SI-192・カマド
- 図版104 SI-192遺物出土状況・SI-193・SI-194・遺物出土状況・カマド内遺物出土状況
- 図版105 SI-195・198・カマド・SI-195遺物出土状況・SI-196・カマド
- 図版106 SI-196遺物出土状況・SI-197・SI-199・遺物出土状況・カマド内遺物出土状況
- 図版107 SI-200・カマド内遺物出土状況・遺物出土状況・SI-201
- 図版108 SI-202・カマド・遺物出土状況・カマド焼土・SI-203
- 図版109 SI-203遺物出土状況・SI-204・SI-205
- 図版110 SI-206・SI-207・カマド・SI-210
- 図版111 SI-300・カマド・SI-301・カマド
- 図版112 SI-302・カマド・SI-303・カマド・SI-304・カマド
- 図版113 SI-304~307・SI-306カマド・SI-307貼り床土層断面・SI-305カマド・SI-307カマド内遺物出土状況・カマド
- 図版114 SI-308・カマド・SI-309・カマド・SI-310
- 図版115 SI-311・カマド・SI-312・338・SI-313・カマド
- 図版116 SI-314・315・SI-314調査風景・周辺遺構
- 図版117 SI-316・SI-317・SI-318
- 図版118 SI-319・335・カマド・SI-320・カマド・遺物出土状況・SI-321カマド内支脚
- 図版119 SI-322・カマド内遺物出土状況・カマド・SI-323・SI-324・カマド内遺物出土状況
- 図版120 SI-325・カマド内遺物出土状況・SI-326・カマド・SI-327・328・SI-328カマド
- 図版121 SI-329・遺物出土状況・カマド付近遺物出土状況・SI-330・カマド

- 図版122 SI-331・カマド付近遺物出土状況・SI-334・SI-333A
- 図版123 SI-333A 遺物出土状況・カマド・SI-334・カマド内遺物出土状況・カマド・SI-336・カマド付近遺物出土状況
- 図版124 SI-337・カマド・SI-338・カマド・SI-339・カマド
- 図版125 SI-340・カマド・SI-341・カマド内遺物出土状況・SI-342
- 図版126 SI-343・カマド内遺物出土状況・SI-344・348・SI-345
- 図版127 SI-346・SI-349・カマド・SI-350・遺物出土状況
- 図版128 SI-352・SI-353・カマド内遺物出土状況・カマド・SI-354・カマド
- 図版129 SI-355・357・SI-357カマド・SI-356・遺物出土状況・カマド
- 図版130 SI-358・カマド・SI-359
- 図版131 SI-360・カマド・SI-361・364・SI-361カマド
- 図版132 SI-362・カマド・SI-365・カマド
- 図版133 SI-366・カマド・SI-367・カマド内遺物出土状況
- 図版134 SI-208・カマド周辺遺物出土状況・SI-209・カマド内遺物出土状況・カマド・SI-371・カマド
- 図版135 SI-372・SB-141・SI-372カマド内遺物出土状況・SI-373・カマド・SI-374・遺物出土状況
- 図版136 SI-375・SI-377・カマド・SI-378遺物出土状況
- 図版137 SI-378・遺物出土状況・カマド・SI-379・SI-380
- 図版138 SI-381・遺物出土状況・カマド内遺物出土状況・SB-001・SB-002・SB-005・006
- 図版139 SB-003・SB-004・SB-007~009・SB-012・013
- 図版140 SB-010・SB-011・SB-014・SB-017・034・SB-018・SB-019・020・SB-019 P5内遺物出土状況・P4内遺物出土状況
- 図版141 SB-015・016・SB-022~024・SB-021・SB-025・026
- 図版142 SB-027・SB-028・SB-029・SB-030・031・SB-032・SB-033・SB-039・040・SB-043・044
- 図版143 SB-034遺物出土状況・SB-035・SB-036~038・SB-041・042
- 図版144 SB-045・SB-046・SB-047・SB-048・SB-049・SB-050・SB-051
- 図版145 SB-052・SB-053・SB-054・SB-055・SB-056・SB-057・SB-058・SB-059
- 図版146 SB-060・SB-061・070・SB-062・SB-063
- 図版147 SB-064・SB-065・SB-066・SB-067・SB-068・SB-069・SB-061・070
- 図版148 SB-071・SB-072・SB-073・SB-074・SB-075・SB-076・SB-077・SB-078
- 図版149 SB-079・SB-080・SB-081・SB-082・SB-083・SB-084・SB-085・SB-086
- 図版150 SB-087・SB-089・SB-091・SB-101・SB-100・SB-102・SB-103・104
- 図版151 SB-105・SB-106・SB-107・SB-108・109・120・129
- 図版152 SB-110・117・SB-111・SB-115・SB-112~114
- 図版153 SB-116・128・SB-118・121・122・SB-115・119・123
- 図版154 SB-124・SB-125・SB-126
- 図版155 SD-002・SD-003・SD-004・SD-005・SD-012・SD-013
- 図版156 SD-014・SD-015・SD-016・SD-017・SD-017・018・SD-019・SD-020
- 図版157 SD-021・SD-022・SD-025・SD-026・SD-028・SD-029
- 図版158 SD-030・031・SD-032・SD-033・SD-040・SD-041・遺物出土状況
- 図版159 SD-042・SD-050・SX-031・SD-054・遺物出土状況
- 図版160 SD-055・SD-061・SD-062・SD-064
- 図版161 SX-002・SX-003・SX-004・SX-006・SX-010・遺物出土状況・SX-011
- 図版162 SX-011・012・SX-012土坑内出土人骨・土坑内遺物出土状況・SX-013・SX-014・SX-016
- 図版163 SX-015・SX-020・SX-022・SX-025
- 図版164 SX-013・SX-022・SX-023
- 図版165 SX-030・SX-031・土層断面・遺物出土状況・SX-032
- 図版166 SK-001・SK-004・SK-016・SK-017・SK-018・SK-022・SK-025・SK-026・027

- 図版167 SK-028・SK-032・SK-035・SK-036・SK-039・SK-043・SK-047・048・SK-047遺物出土状況
 図版168 SK-054・SK-056・SK-060・SK-063・SK-067・SK-068・SK-072
 図版169 SK-071・遺物出土状況・SK-073・遺物出土状況・SK-074・SK-081・SK-083・SK-084
 図版170 SK-085・SK-086・遺物出土状況・SK-088・SK-089・SK-090・SK-093・SK-094
 図版171 SK-095・SK-096・SK-097・SK-098・SK-099・SK-100・SK-101・SK-102
 図版172 SK-103・SK-104・SK-105・SK-106・SK-107・108・SK-109・SK-110・SK-111
 図版173 SK-113・SK-119・SK-120・121・SK-123・SK-125・SK-127・SK-130・SK-131
 図版174 SK-132・SK-134・SK-135・SK-136・SK-137・SK-138・SK-139・SK-140
 図版175 SK-141・SK-145・SK-154・SK-155・SK-156・SK-163・SK-164遺物出土状況・貝層出土状況
 図版176 SK-164・SK-171・SK-172・SK-173・SK-174・SK-175・SK-176・SK-177
 図版177 SK-178・SK-179・SK-180・SK-181・SK-182・SK-183・SK-184・SK-185
 図版178 SK-187・SK-189・190・SK-192・SK-195・SK群・SK-300・SK-301
 図版179 SK-304・SK-307・SK-309遺物出土状況・SK-310・SK-316・遺物出土状況・SK-317・318・SK-400遺物出土状況
 図版180 SK-400・SK-411・SK412・SK-414・415・SK-416・SK-417・SK-418・SK-419
 図版181 SK-420・SK-421・SK-422・SK-423・SK-424・SK-425・SK-426・SK-427
 図版182 SK-428・SK-429・SK-432・SK-433・SK-438・SK-439・SK-441・SK-442
 図版183 SK-443・SK-444・SK-445・SK-446・SK-447・SK-450・SK-451・SK-453
 図版184 SK-454・SK-455・SK-460・SK-461・SK-463・SK-464・SK-465・SK-467
 図版185 SK-468・SK-469・SK-470・SK-471・SK-472・SK-473・SK-474・SK-475
 図版186 SK-476・SK-477・SK-478・SK-479・SK-481・SK-482・SK-483・SK-489
 図版187 SK-490・SK-491・SK-492・SK-493・SK-496・SK-497・SK-499・SK-502
 図版188 SK-507・SK-516・SK-520・SK-522・SK-526・SK-527・SK-528・SK-529
 図版189 SK-530・SK-532・SK-533・SK-534・SK-538・SK-539・SK-448・449・546・547・SK-555
 図版190 SK-565・SK-566・SK-567・SK-568・SK-570・SK-571・SK-572・SK-573
 図版191 SK-575・土層断面・SK-576・SK-579・580・SK-581・遺物出土状況・SK-582・SK-583
 図版192 SK-584・585・SK-587・遺物出土状況・SK-588・SK-591・SK-592・遺物出土状況・SK-593
 図版193 SK-594・遺物出土状況・P-3・P-6・P-7・SK-596・SK-597・SK-600遺物出土状況・SK-605・SK-615
 図版194 P-062・P-067・P-131・P-264・P-483・P-484~486・P495・P-496
 図版195 P-497・498・P-499・P-500~504・P-507・P-508・P-509~511・P-512・SD-018遺物出土状況
 図版196 P-513~520・P-521・583・P-522~524・P-531・532・P-533~536・P-537~542・P-543・P-544・P-691・692
 図版197 P-551・P-552・P-553・P-554・P-555・P-556・P-557・P-652
 図版198 P-564・P-565・567・570・571・P-572~575・P-576・P-577~579・P-580・581・P-582・584~586・P-587・588
 図版199 P-589~592・P-594~598・P-599・600・P-606・P-608・P-608・609・P620~631・P-851遺物出土状況
 図版200 縄文遺構出土土器 (1)
 図版201 縄文遺構出土土器 (2)
 図版202 SX-026出土土器 (1)
 図版203 SX-026出土土器 (2)
 図版204 SX-026出土土器 (3)
 図版205 SX-026出土土器 (4)
 図版206 SX-026出土土器 (4) (5)・SX-027出土土器 (1)
 図版207 SX-027出土土器 (2) (3)

- 図版208 SX-028出土土器 (1)
 図版209 SX-028出土土器 (2) (3)
 図版210 SX-028出土土器 (3) (4)
 図版211 SX-028出土土器 (4)
 図版212 SX-028出土土器 (5)
 図版213 SX-028出土土器 (5) (6)
 図版214 SX-028出土土器 (6) (7)
 図版215 SX-028出土土器 (8)
 図版216 SX-028出土土器 (8) (9)
 図版217 グリッド出土土器 (1)
 図版218 グリッド出土土器 (1) (2)
 図版219 グリッド出土土器 (2)
 図版220 グリッド出土土器 (3)
 図版221 グリッド出土土器 (4) (5)
 図版222 グリッド出土土器 (5)
 図版223 グリッド出土土器 (6)
 図版224 グリッド出土土器 (6) (7)
 図版225 グリッド出土土器 (7)
 図版226 グリッド出土土器 (8)
 図版227 SX-028出土土器 (9) SX-026出土土製品、
 グリッド出土石・土製品
 図版228 SX-026・028出土土製品、グリッド出土土
 製品
 図版229 SX-028出土石器 (1) (2) (3)
 図版230 SX-028出土石器 (4) (5) (6) (7)
 図版231 SX-028出土石器 (8) (9), SX-028・026
 出土石器
 図版232 SX-026 (1) SX-026・027周辺、グリッド
 出土石器
 図版233 SX-026 (2) SX-026・027周辺、グリッド
 出土石器
 図版234 SX-026・027周辺、グリッド出土石器
 図版235 SX-026・027周辺出土石器
 図版236 弥生時代後期～古墳時代前期竪穴住居跡出
 出土土器 (1)
 図版237 弥生時代後期～古墳時代前期竪穴住居跡出
 出土土器 (2)
 図版238 弥生時代後期～古墳時代前期竪穴住居跡出
 出土土器 (3)
 図版239 SI-001・002・003・004出土土器
 図版240 SI-004出土土器
 図版241 SI-004・005・006・007出土土器
 図版242 SI-007・009・012・013出土土器
 図版243 SI-013出土土器
 図版244 SI-013・014出土土器
 図版245 SI-014・015出土土器
 図版246 SI-015・016・017出土土器
 図版247 SI-017・018・020・021出土土器
 図版248 SI-021・025・026・027出土土器
 図版249 SI-026・028・029・030・031・032・033出
 出土土器
 図版250 SI-032・033・035・036・038・039・040・
 041出土土器
 図版251 SI-043・044出土土器
 図版252 SI-044・046・047A・047B・048出土土器
 図版253 SI-048・050・051・052・053出土土器
 図版254 SI-053・054出土土器
 図版255 SI-054・055・056出土土器
 図版256 SI-056・060・061・062・063出土土器
 図版257 SI-063・065・SK-072出土土器
 図版258 SI-067・068・069・072・075出土土器
 図版259 SI-072・073・074・075・076出土土器
 図版260 SI-076・078・080出土土器
 図版261 SI-080・082・083・出土土器
 図版262 SI-083・084出土土器
 図版263 SI-084・085・086・088・089出土土器
 図版264 SI-089・091・092出土土器
 図版265 SI-092・095・096・098出土土器
 図版266 SI-100・101・102・103・104出土土器
 図版267 SI-104・105・108・109・110出土土器
 図版268 SI-110・113・116・117・118・出土土器
 図版269 SI-118・119・120・122・123出土土器
 図版270 SI-123・124出土土器
 図版271 SI-124・125・127・128出土土器
 図版272 SI-128・130・131出土土器
 図版273 SI-131・132出土土器
 図版274 SI-132・133・134・135・137出土土器
 図版275 SI-137・138・139・142出土土器
 図版276 SI-139・143・144・147出土土器
 図版277 SI-148・149・150A・150B・151・153・
 154出土土器
 図版278 SI-154・155・156・158・159・161出土土器
 図版279 SI-161・162・164・165・166・167・177出
 出土土器
 図版280 SI-175・178・179・180・181・182・188出
 出土土器
 図版281 SI-188・189・191・192・194出土土器
 図版282 SI-195・196・199出土土器
 図版283 SI-200・201・202出土土器
 図版284 SI-202・205・206・208・209・210出土土器

- 図版285 SI-300・302・303・304・305・306出土土器
 図版286 SI-305・306・307出土土器
 図版287 SI-307・308・310出土土器
 図版288 SI-308・310・311・312・313出土土器
 図版289 SI-313・314・317・318・320・321出土土器
 図版290 SI-321・322・323・324・325出土土器
 図版291 SI-325・326・327・328・329・330・331・
 333A 出土土器
 図版292 SI-333A・334・335出土土器
 図版293 SI-335・336・337・340・341・343出土土器
 図版294 SI-341・342・343・344・345・348・350・
 352出土土器
 図版295 SI-352・353・354・356・357・358・359・
 360出土土器
 図版296 SI-360・361出土土器
 図版297 SI-361・362・365・366・367・371・372・
 373出土土器
 図版298 SI-373・375・377・378・380出土土器
 図版299 SI-380・SB-017・019・034・036・054出
 出土土器
 図版300 SB-054・057・062・102・105・126・SX-
 001出土土器
 図版301 SX-001・007・SK-026・047・073・134・
 164出土土器
 図版302 SK-164・165・171・309・316・400出土土器
 図版303 SK-400・571・P-264・851出土土器
 図版304 SK・SD 遺構外出土土器
 図版305 SD・SX・P・SK 遺構外出土土器
 図版306 鉄製品 (1)
 図版307 鉄製品 (2)
 図版308 鉄製品 (3)
 図版309 鉄製品 (4)
 図版310 鉄製品 (5)
 図版311 鉄製品 (6)
 図版312 鉄製品 (7)
 図版313 鉄製品 (8)
 図版314 石製模造品・玉類・紡錘車・炭化物
 図版315 土製支脚 (1)・土製品
 図版316 土製支脚 (2)
 図版317 砥石・石製品 (古墳時代～平安時代)
 図版318 砥石 (奈良・平安時代)・土玉・硯その他の
 土製品
 図版319 土器転用ふいご・土製品
 図版320 土製品・瓦
 図版321 土製品・埴輪・軽石
 図版322 瓦塔 (1)
 図版323 瓦塔 (2)
 図版324 板碑・五輪塔
 図版325 中近世陶磁器・土器 (1)
 図版326 中近世陶磁器・土器 (2)
 図版327 中近世陶磁器・土器 (3)
 図版328 中近世陶磁器・土器 (4)
 図版329 中近世陶磁器・土器 (5)
 図版330 中近世陶磁器・土器 (6)
 図版331 中近世陶磁器・土器 (7)
 図版332 中近世陶磁器・土器 (8)
 図版333 土錘・泥面子その他の土製品
 図版334 砥石・石製品 (中近世他)
 図版335 砥石 (中・近世他)・種子・銭貨

第1章 はじめに

第1節 上層調査の概要

小屋ノ内遺跡の報告については、平成12年度までの旧石器時代調査成果が、『四街道市小屋ノ内遺跡(1)』として刊行されている¹⁾。本書に収録するものは、縄文時代以降の上層調査成果のうち、平成元(1989)年度から平成10(1998)年度までの調査成果である。平成12(2000)年度の上層調査成果および平成14(2002)年度・平成15(2003)年度の上層・下層調査成果は別途報告を予定している。

なお、四街道市内の千代田団地とJR物井駅を結ぶ道路が小屋ノ内遺跡内を縦貫しているが、この道路部分は四街道市教育委員会によって、調査報告されている²⁾。

通常、第1章に記載される①調査の経緯と経過、②調査の方法については、『小屋ノ内遺跡(1)』に記載されているので、ここでは補足的な記述のみ行う。年度別業務概要については第1表に記載した。

第2表は、小屋ノ内遺跡からみつかった全遺構の種別および数量の一覧表である。これには平成12・14・15年度分も掲載したが、これらについては正式な報告書で訂正される可能性がある。

遺構番号は下三桁が数字であるが、その前に遺構の種別を表す略号を付けている。遺構略号は、原則として竪穴住居跡等の竪穴建物がSI、掘立柱建物がSB、土坑・炉穴等がSK、溝状遺構・道路状遺構がSD、古墳やその他特殊な遺構がSX、小穴(ピット)がPである。しかし、SXのなかには、溝状遺構・道路状遺構や土坑に含まれるものがあり、わずかではあるが、SIのなかにも、土坑としたものがある。整理作業では調査時の名称をなるべく踏襲したため、これらの遺構名称についても変更を行っていない。その理由は、遺物注記に記入した遺構名称と、報告書中の遺構名称が同一であることを優先したためである。ただし、やむを得ず、名称変更をしたものもあり、それらについては、第2表の備考欄に記載した。なお、本書では遺構番号をSI-001、SB-001のように記載したが、第2表では間の- (ハイフン) を省略した。

小屋ノ内遺跡は調査完了面積が約8万㎡と広大である(第1表)。そのため本書では、地形上の特徴から東部・西部・南部・中央部の4地区に便宜的に区分して報告した(第4図)。なお、各区の境界は、あくまで目安程度のものである。

第2節 周辺の遺跡

遺跡の位置と地形については、『小屋ノ内遺跡(1)』に記載されているため、ここでは省略する。

周辺の遺跡については、『小屋ノ内遺跡(1)』において、旧石器時代の遺跡が取り上げられている他、物井地区の既刊の報告である『四街道市御山遺跡(1)』³⁾や『出口・鐘塚遺跡』⁴⁾でも記載されている。本節では、それら既刊の報告書の記載と重複する点もあるが、その後の調査・研究成果を加えて若干の記述を行う。

縄文時代 小屋ノ内遺跡(第1図、第5図1、以下第5図を省略)では、早期の遺構・遺物が出土しているが、周辺の遺跡では、あまり多くない。また、前期・中期の遺構・遺物も出土しているが、少量である。一方、後期から晩期にかけては、比較的まとまった資料がみられる。前期から晩期にかけての様相については、周辺の遺跡でも同様の傾向である。

第1表 小屋ノ内遺跡年度別業務概要

年度 (平成)	作業概要			期間	所長 (*班長)	担当者
	発掘面積 整理	上層	下層			
		業務内容				
元年度	確認調査 本調査	1,506㎡/15,550㎡ 6,100㎡	68㎡/1,900㎡ 182㎡	4/1~3/30	谷 旬*	岡田誠造・四柳 隆
2年度	確認調査 本調査	7,550㎡	546㎡/13,650㎡ 600㎡	4/2~3/27	谷 旬*	谷 旬・岡田誠造・四柳 隆
	整理作業	水洗・注記		4/1~3/31		
3年度	確認調査 本調査	480㎡/8,950㎡ 6,950㎡		4/2~3/27	谷 旬*	横山 仁
	整理作業	水洗・注記		4/1~3/31		
4年度	確認調査 本調査	370㎡/3,700㎡ 4,850㎡	506㎡/8,950㎡ 1,900㎡	4/2~3/26	谷 旬*	横山 仁
	整理作業	水洗・注記の一部		4/1~3/31		
5年度	確認調査 本調査		192㎡/4,300㎡	4/1~8/31	深澤克友	白鳥 章
	確認調査 本調査	5,000㎡	580㎡/14,500㎡ 558㎡	8/1~3/31		伊藤智樹・白鳥 章・糸川道行
6年度	本調査		4,342㎡	6/1~11/30		白鳥 章
	確認調査 本調査	950㎡/9,500㎡ 9,500㎡		11/1~3/28	田坂 浩	相京邦彦・白鳥 章・倉内郁子
7年度	確認調査		340㎡/7,000㎡	4/3~5/31		白鳥 章
	確認調査 本調査	180㎡/5,300㎡ 5,300㎡	140㎡/5,300㎡	6/1~11/30	矢戸三男	白鳥 章
	整理作業	水洗・注記の一部		4/1~3/31		伊藤智樹・白鳥 章・山口典子
8年度	確認調査 本調査	320㎡/6,600㎡ 4,500㎡	64㎡/6,600㎡	11/1~3/26	藤崎芳樹	平松長壽・井上哲朗
	整理作業	水洗・注記の一部~復元の一部		4/1~3/31		西野雅人・山口典子
9年度	整理作業	水洗・注記の一部~復元の一部		4/1~3/31	藤崎芳樹	岡田誠造
10年度	確認調査	200㎡/200㎡	8㎡/200㎡	7/1~7/17	石田廣美	綿貫 貴
	整理作業	復元		4/1~3/31		岡田誠造・加藤修司・井上哲朗
11年度	整理作業	復元		4/1~3/31	石田廣美	加藤修司・岸本雅人・玉井ゆかり・井上哲朗・大内千年
12年度	確認調査 本調査	2,000㎡	80㎡/2,000㎡	4/5~4/28	石田廣美	廣瀬和之・玉井ゆかり
	確認調査 本調査	2,790㎡	112㎡/2,790㎡ 50㎡	5/5~6/30		廣瀬和之
	整理作業	実測の一部		5/1~9/30		高橋博文・石倉亮治・萩原恭一・川端保夫・玉井ゆかり・沖松信隆
13年度	整理作業	実測			石田廣美	石倉亮治・萩原恭一・植草 均・玉井ゆかり
14年度	確認調査 本調査	740㎡	30㎡/740㎡	10/1~10/30	石田廣美	香取正彦
	整理作業	実測~挿図・図版作成の一部		4/1~3/31		池田大助・香取正彦・西野雅人・大塚一美・田中 裕
15年度	確認調査 本調査		270㎡/3,470㎡	8/1~11/21	古内 茂	星 勇人
	整理作業	3,470㎡		4/1~10/31		香取正彦・大内千年・田中 裕
		挿図・図版作成の一部		2/1~3/31		
16年度	整理作業	編集の一部~報告書刊行 (H11~10下層分)		4/1~3/31	古内 茂	岸本雅人・糸川道行・稲生一夫・田中 裕・石川 誠
		水洗・注記~実測の一部 (H12・14・15)		7/1~3/31		
17年度	整理作業	原稿執筆~編集 (H11~10上層分) 実測・トレースの一部		4/1~1/31 2/1~3/31	古内 茂	糸川道行・城田義友・渡邊高広

※完了面積は78,300㎡ (H11~10 69,300㎡ H12・14・15 9,000㎡)

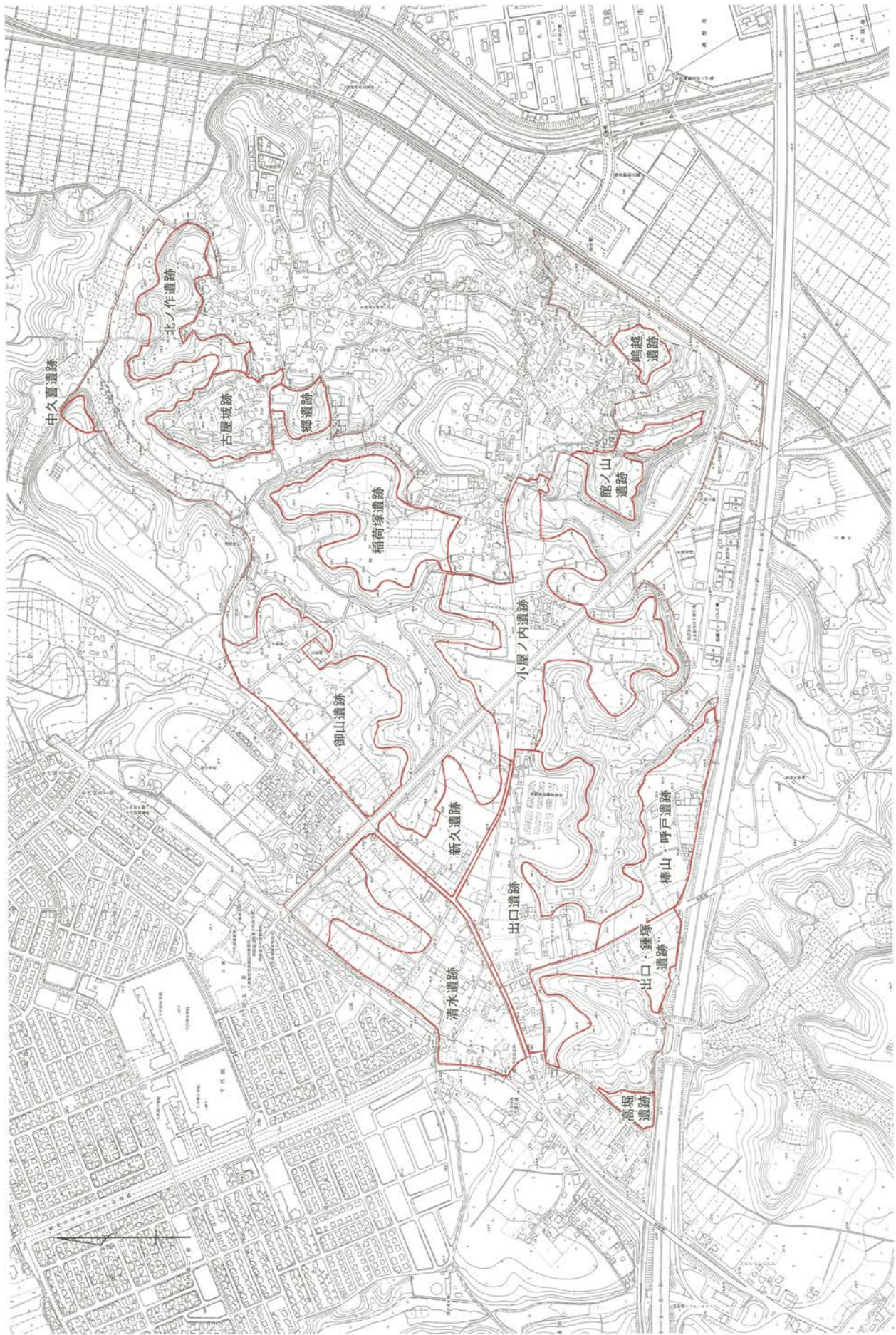
※確認調査面積は上層5,456㎡ (H11~10 5,456㎡ H12・14・15 0㎡), 下層2,936㎡ (H11~10 2,444㎡ H12・14・15 492㎡)

※本調査面積は上層72,350㎡ (H11~10 63,350㎡ H12・14・15 9,000㎡), 下層7,632㎡ (H11~10 7,582㎡ H12・14・15 50㎡)

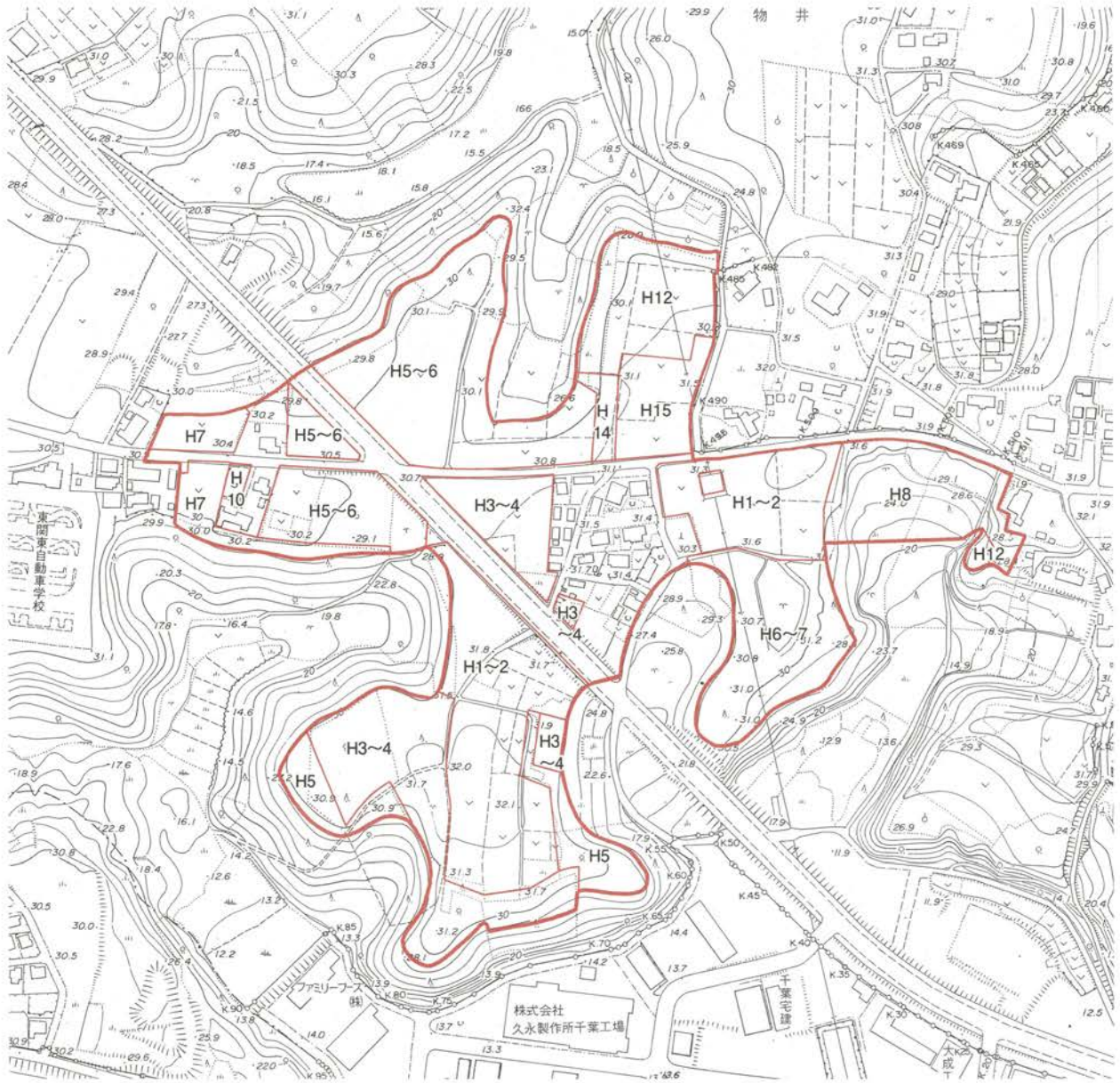
第2表 小屋ノ内遺跡遺構種別一覧

時代	遺構名	遺構番号	遺構数
縄文時代	炉穴	SK002, SK037, SK045, SK051, SK052, SK059, SK064, SK066, SK069, SK070, SK075a, SK075b, SK077, SK078, SK082, SK087, SK115, SK116, SK117, SK118, SK122, SK268	22
	陥穴	SK015, SK023, SK042, SK061, SK128, SK401, SK403, SK404, SK405, SK406, SK407, SK410	12
	土坑	SK010, SK012, SK021, SK112, SK114, SK166, SK038, SK055, SK167, SK305, SK409,	11
	小穴	P1001~P1056, P1058~P1186	185
	竪穴住居跡	SI112	1
	竪穴状遺構	SK306	1
	埋甕	SK308	1
	遺物集中	SX026, SX027, SX028	3
弥生時代～ 古墳時代 前期	竪穴住居跡	SI022, SI024, SI027, SI034, SI046, SI049, SI066, SI068, SI074, SI084, SI103, SI114A, SI116, SI125, SI168, SI170, SI171, SI172, SI173, SI176, SI181, I182, SI183, SI184, SI185, SI186, SI187, SI203, SI204, SI205, SI206, SI210, SI359, SI364, SX004	35
	壺棺墓	SK309	1
	土坑	SK171	1
古墳時代 中期	竪穴住居跡	SI006, SI020, SI021, SI033, SI065, SI101, SI175	7
	竪穴建物跡（鍛冶遺構）	SI084	1
後期	竪穴住居跡	SI003, SI007, SI012, SI017, SI026, SI070, SI076, SI078, SI145, SI146, SI177	11
古墳時代後期～ 奈良・平安時代	古墳	SX001, SX005, SX007, SX008, SX009, SX017, SX018	7
奈良・平安時代	竪穴住居跡	SI001, SI002, SI004, SI005, SI008, SI009, SI010, SI011, SI013, SI014, SI015, SI016, SI018, SI019, SI025, SI028, SI029, SI030, SI031, SI032, SI035, SI036, SI037, SI038, SI039, SI040, SI041, SI042, SI043, SI044, SI045, SI047A, SI047B, SI048, SI050, SI051, SI052, SI053, SI054, SI055, SI056, SI057, SI058, SI059, SI060, SI061, SI062, SI063, SI064, SI067, SI069, SI071, SI072, SI073, SI075, SI077, SI079, SI080, SI081, SI082, SI083, SI085, SI086, SI087, SI088, SI089, SI090, SI091, SI092, SI093, SI094, SI095, SI096, SI097, SI098, SI099, SI100, SI102, SI104, SI105, SI106, SI107, SI108, SI109, SI110, SI111, SI113, SI115, SI117, SI118, SI119, SI120, SI121, SI122, SI123, SI124, SI126, SI127, SI128, SI129A, SI129B, SI130, SI131, SI132, SI133, SI134, SI135, SI137, SI138, SI139, SI140, SI141, SI142, SI143, SI144, SI147, SI148, SI149, SI150A, SI150B, SI151, SI152, SI153, SI154, SI155, SI156, SI157, SI158, SI159, SI160, SI161, SI162, SI163, SI164, SI165, SI166, SI167, SI169, SI174, SI178, SI179, SI180, SI188, SI189, SI190, SI191, SI192, SI193, SI194, SI195, SI196, SI197, SI198, SI199, SI200, SI201, SI202, SI207, SI208, SI209, SI300, SI301, SI302, SI303, SI304, SI305, SI306, SI307, SI308, SI309, SI310, SI311, SI312, SI313, SI314, SI315, SI316, SI317, SI318, SI319, SI320, SI321, SI322, SI323, SI324, SI325, SI326, SI327, SI328, SI329, SI330, SI331, SI332, SI333A, SI334, SI335, SI336, SI337, SI338, SI339, SI340, SI341, SI342, SI343, SI344, SI345, SI346, SI347, SI348, SI349, SI350, SI351, SI352, SI353, SI354, SI355, SI356, SI357, SI358, SI360, SI361, SI362, SI363, SI365, SI366, SI367, SI371, SI372, SI373, SI374, SI375, SI377, SI378, SI379, SI380, SI381	236
	掘立柱建物跡	SB001~SB005, SB006A・SB006B・SB007A・SB007B・SB008~SB026, SB027A, SB027B, SB028~SB051, SB052A, SB052B, SB053~SB082, SB083A・SB083B, SB084~SB108, SB110~SB126, SB128, SB129, SB141	124
	柵列	SB109	1
	土坑墓	SK575, SK582, SK583, SK611	4
	井戸状遺構	SK164, SK165	2
	土坑	SI333B, SK026, SK027, SK047, SK072, SK073, SK086, SK095, SK134, SK316, SK400, SK571, P264, P851	14
	中近世・その他	土坑墓	SK017, SK018
地下式坑		SK060A, SK068, SK071	3

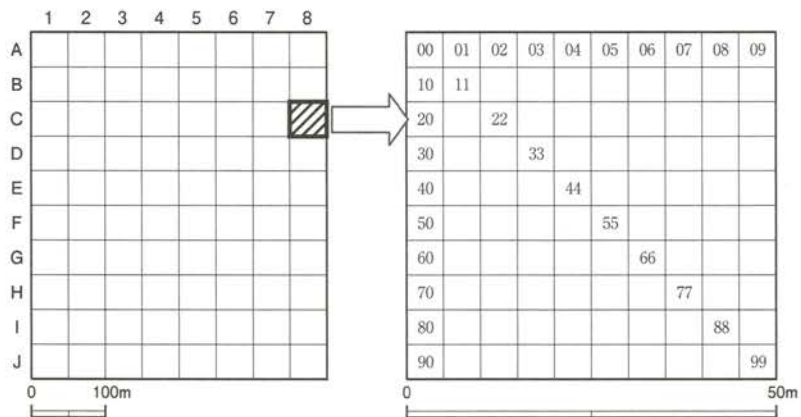
時代	遺構名	遺構番号	遺構数
中近世・その他	井戸状遺構	SK054, SK266, SK267, SK411, SK412, SK588	6
	建物遺構および関連遺構	SX010・SX011・SX012, SX020	2
	溝状(道路)状遺構	SD001, SD002・SD023・SD024, SD003・SD021・SD040・SD079・SX015, SD004, SD005, SD006, SD007, SD008, SD009, SD010, SD011, SD012, SD013, SD014, SD015, SD016, SD017・SD018, SD019, SD020, SD022, SD025, SD026, SD027・SX016, SD028・SD071・SD072, SD029, SD030, SD031, SD032, SD033, SD034, SD035, SD036, SD037, SD038, SD040, SD041, SD042, SD050, SD051, SD052, SD053・SD054, SD055・SD080・SD081, SD056, SD057, SD058, SD059, SD060, SD061, SD062, SD063, SX014, SX015, SX019, SX023, SX024, SX025	56
	地形整形区画遺構	SX013・SX029, SX022, SX030, SX031, SX032・SD064	5
	土坑	SI023, SI114B, SX002, SX003, SX006, SX024, SK001, SK004~SK009, SK011, SK013, SK016, SK019, SK020, SK022, SK024, SK025, SK028~SK036, SK039~SK041, SK043, SK044, SK046, SK048~SK050, SK053, SK056~SK058, SK063, SK065, SK067, SK074, SK079~SK081, SK083~SK085, SK088~SK094, SK096~SK111, SK113, SK119~SK121, SK123~SK127, SK129~SK133, SK135~SK146, SK141~SK151, SK153~SK157, SK159, SK161~SK163, SK170, SK172~SK185, SK187, SK189~SK193, SK195, SK196, SK200~SK205, SK207~SK238, SK240~SK242, SK244, SK245, SK247, SK251~SK257, SK259, SK260, SK262~SK265, SK300~SK304, SK307, SK310~SK315, SK317, SK318, SK402, SK408, SK413~SK437, SK439, SK441~SK462, SK463~SK466, SK467, SK468~SK478, SK479, SK481~SK493, SK495~SK497, SK499~SK507, SK509~SK511, SK512~SK518, SK520~SK535, SK538~SK551, SK553, SK555~SK566, SK568~SK570, SK572~SK581, SK584~SK587, SK589~SK610, SK611~SK614	389
	小穴	P1~P33, P58~P62, P64, P65, P67~P149, P154, P155, P157~P216, P218~P239, P241~P263, P264, P265, P269, P270, P273, P275~P277, P279~P284, P286~P301, P303~P305, P311~P387, P389~P466, P468~P481, P483~P504, P507~P567, P570~P633, P668, P670~P679, P681~P711, P713~P726, P728~P731, P733, P735~P755, P757, P760~P762, P765~P776, P778~P805, P807~P886, P893~P899, P901~P920, P922, P923~P927, P929~P942, P946~P967,	855
欠番		SI136, SI368, SI369, SI370	
		SB127, SB130~SB140	
		SX021	
		SK003, SK014, SK062, SK076, SK152, SK158, SK160, SK168~SK169, SK186, SK188, SK194, SK197, SK199, SK206, SK239, SK243, SK246, SK248~SK250, SK258, SK261, SK269~SK299, SK319~SK399, SK438, SK440, SK480, SK494, SK498, SK508, SK519, SK536~SK537, SK552, SK554, SK615, SK616	
		SD039, SD043~SD049	
		P34~P57, P63, P66, P150~P153, P156, P217, P240, P266~P268, P271, P272, P274, P278, P285, P302, P328, P306~P310, P388, P467, P482, P505, P506, P568, P569, P634~P667, P669, P680, P712, P727, P732, P734, P756, P758, P759, P763, P764, P777, P806, P887~P892, P900, P921, P928, P943~P945, P968~P1000, P1057	
平成12年度		SI382~SI392, SB142~146, SK617~622, SD065・066	
平成14年度		SI393~SI396, SB147, SK623~632, SD067~073	
平成15年度		SI397~418, SB148~153, SK633~664, SD074~078, P968~972	
備考		SB127は柱穴1個, P023~P026は正確な位置不明のため欠番。重複等による遺構番号の主な変更は以下のとおり。H10年度調査SD001→SD079, 同SD002→SD080, 同SD003→SD081。なお, 本来のSD001~003はそのままである。調査時SX026→SX030, 同SX027→SX031, 同SX028→SX032。SX026~028は整理時に縄文時代遺物集中地点に付与。Pについては, 1~967・1001~1186が調査時に付与した番号。	



第1図 物井地区の遺跡



第2図 小屋ノ内遺跡年度別調査区位置図



第3図 グリッド呼称法



第4図 小屋ノ内遺跡地区呼称図

千代田遺跡群(2)の八木原貝塚⁵⁾(a)は後期を中心とした遺跡である。その後の晩期から弥生時代前期については、千代田遺跡V区⁶⁾(b)や千代田遺跡群西方の内黒田遺跡群池花南遺跡(3)および池花遺跡⁷⁾(4)、物井地区の御山遺跡(第1図)、小屋ノ内遺跡、棒山・呼戸遺跡(第1図)があり、遺跡の分布密度が濃い。これら四街道市北部における遺跡群の動態については、渡辺修一氏が論じており⁸⁾、その特徴として「全体として絶対的な拠点遺跡が存在せず、他の遺跡が時期を追ってスムーズに継起しているように見える」としている⁹⁾。

弥生時代 小屋ノ内遺跡における遺構・遺物は後期のものであるが、周辺の遺跡をみると、池花南遺跡からは、中期前半の須和田式土器が出土し、相ノ谷遺跡¹⁰⁾(5)では、中期後半の集落が調査された。また、相ノ谷遺跡に近い西向井遺跡¹¹⁾(6)でも、後期初頭の集落が確認されている。相ノ谷遺跡・西向井遺跡は、四街道市山梨に所在するが、山梨は物井の南方にあり、物井および四街道市長岡からは、鹿島川の支流を挟んで対岸の位置にある。

物井の東方、鹿島川東岸の台地には、中期から後期にかけて、寺崎向原遺跡¹²⁾(7)や六崎大崎台遺跡¹³⁾(8)等の大規模な遺跡が所在する。

小屋ノ内遺跡の東方には、馬場遺跡(9)が所在するが、近年の発掘調査により方形周溝墓が検出されている¹⁴⁾。馬場遺跡は台地の狭くなる部分を介して、小屋ノ内遺跡・稲荷塚遺跡から続く遺跡である。

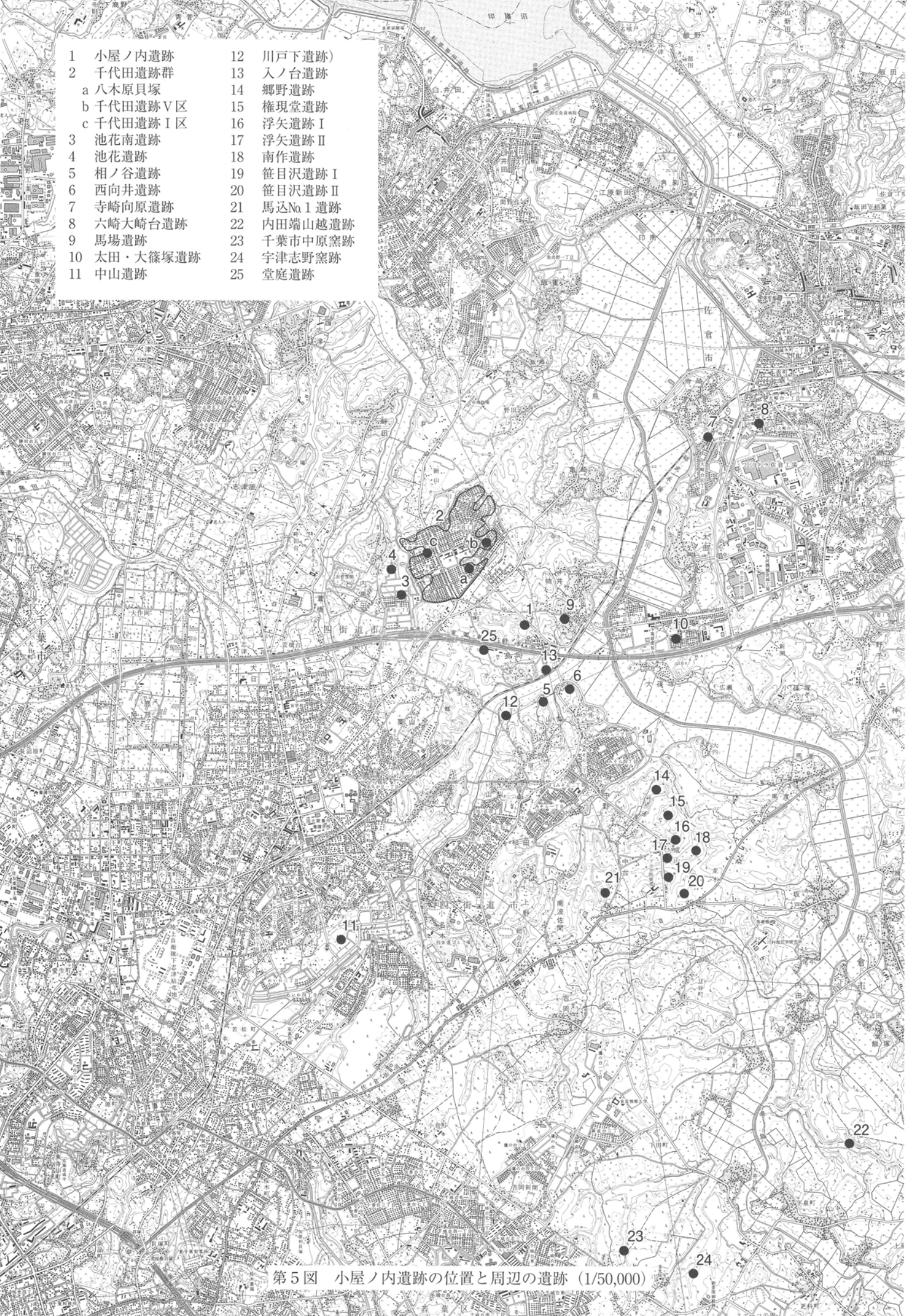
古墳時代 小屋ノ内遺跡における前期の集落は弥生時代後期から続くものである。物井地区内の遺跡では、北ノ作遺跡(第1図)や古屋城跡(第1図)からも、前期の集落が確認されている。馬場遺跡の調査成果と併せて考えると、物井周辺では、鹿島川寄りの遺跡において、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構・遺物が多いといえそうである。また、北方の千代田遺跡V区(c)でも、前期に属する若干の竪穴住居跡が調査されている。

次の中期についてみると、小屋ノ内遺跡では、小規模な集落が形成されている。近在の遺跡において、中期の遺構・遺物は少なく、鹿島川東岸の太田・大篠塚遺跡¹⁵⁾(10)でみられる程度である。四街道市和良比に所在する中山遺跡(11)では、中期の小鍛冶工房建物が調査されている¹⁶⁾が、鍛冶工房は小屋ノ内遺跡からも検出されており、技術伝播の系譜を考えるうえで注目される。相ノ谷遺跡の西方に位置する川戸下遺跡(12)¹⁷⁾からは、前期のガラス玉鑄型が出土している。この遺跡は中山遺跡と小屋ノ内遺跡の間に位置する遺跡である。

小屋ノ内遺跡では、後期の集落も存在するが、大規模なものではない。後期の大規模な集落は、長岡に所在する入ノ台遺跡¹⁸⁾(13)でみつかっている。この遺跡は、小屋ノ内遺跡からは小支谷を隔ててすぐ南東に位置する遺跡である。また、千代田遺跡V区も、比較的まとまった集落が存在する。

物井地区・千代田遺跡群内および内黒田地区に所在する古墳群については、渡辺修一氏が、その全体を「物井古墳群」とすることを提唱し、同氏によって分析が進んでいる¹⁹⁾。小規模な古墳を主体とするが、古墳の基数は多く、範囲も広域におよぶ。小屋ノ内遺跡においても、少数の古墳が存在する。物井古墳群

- | | |
|-------------|-------------|
| 1 小屋ノ内遺跡 | 12 川戸下遺跡) |
| 2 千代田遺跡群 | 13 入ノ台遺跡 |
| a 八木原貝塚 | 14 郷野遺跡 |
| b 千代田遺跡V区 | 15 権現堂遺跡 |
| c 千代田遺跡I区 | 16 浮矢遺跡I |
| 3 池花南遺跡 | 17 浮矢遺跡II |
| 4 池花遺跡 | 18 南作遺跡 |
| 5 相ノ谷遺跡 | 19 笹目沢遺跡I |
| 6 西向井遺跡 | 20 笹目沢遺跡II |
| 7 寺崎向原遺跡 | 21 馬込No.1遺跡 |
| 8 六崎大崎台遺跡 | 22 内田端山越遺跡 |
| 9 馬場遺跡 | 23 千葉市中原窪跡 |
| 10 太田・大篠塚遺跡 | 24 宇津志野窯跡 |
| 11 中山遺跡 | 25 堂庭遺跡 |



第5図 小屋ノ内遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

と入ノ台遺跡は、近接しており、その関連性が考えられる。また、小屋ノ内遺跡や千代田遺跡Ⅴ区では、古墳群と集落が近接する点が注目される。

奈良・平安時代 奈良・平安時代の遺構は、小屋ノ内遺跡において、量的に主体を占めるものである。これは、小屋ノ内遺跡の北東台地に所在する稲荷塚遺跡（第1図）でも同様である。また、東方の馬場遺跡でも比較的まとまった奈良・平安時代の集落が検出されているほか、古代の道路跡が検出されたことが注目される²⁰⁾。小屋ノ内遺跡の西方をみると、自動車学校部分が不明であるが、新久遺跡（第1図）や出口遺跡（第1図）では、奈良・平安時代の遺構分布が少なく、北西方の御山遺跡（第1図）でも同様である。これらの地域は前代の古墳群から続く被葬者の墓域と考えられる。しかし、清水遺跡の北西方に位置する千代田遺跡Ⅰ区(c)では、かなりの規模の集落が存在する。また、南方の入ノ台遺跡でも、古墳時代後期よりも少なくなるが、比較的まとまった集落がみられる。墓域の周辺には、大規模もしくは中規模の集落が存在するといえよう。

周辺の遺跡をみると、太田・大篠塚遺跡では、まとまった集落が存在する。また、近年では、四街道市中台・成山に所在する成台中土地区画整理事業地内の遺跡群から、奈良・平安時代の集落が検出されている。これらの遺跡は、郷野遺跡（14）²¹⁾、権現堂遺跡（15）²²⁾、浮矢遺跡Ⅰ（16）、浮矢遺跡Ⅱ（17）²³⁾、南作遺跡（18）、笹目沢遺跡Ⅰ（19）、笹目沢遺跡Ⅱ（20）である。とくに南作遺跡からは、多くの遺構・遺物が出土している。なかでも「山梨郷長・・・大生部・・・」と判読できる墨書土器については²⁴⁾、小屋ノ内遺跡の平成15年度調査においても、「山梨」の墨書土器が出土していることから、その関連性を考えるうえで、注目される。「山梨」の墨書土器は南作遺跡に比較的近い馬込No.1遺跡²⁵⁾（21）からも出土しており、天野努氏は千葉郡山梨郷と集落遺跡の関わりについて考察している²⁶⁾。なお、成台中地区内の遺跡群については、他の時代の遺構・遺物も多く出土しているが、ここでは省略する。

小屋ノ内遺跡からはかなり距離があるが、近年、佐倉市内田端山越遺跡²⁷⁾（22）で、須恵器窯跡が検出された。千葉市中原窯跡（23）²⁸⁾・宇津志野窯跡（24）²⁹⁾・南河原坂窯跡群³⁰⁾とともに、小屋ノ内遺跡に須恵器を供給した可能性のある窯跡と考えられる。

中・近世 中世の小屋ノ内遺跡は、少数の土坑墓が見つかった程度であり、遺構の分布は薄い。そのほか、台地縁辺を整形した区画遺構があるが、中世にさかのぼるものか判然としない。物井地区における中世を主体とする遺跡には、北ノ作遺跡と古屋城跡がある³¹⁾。ともに中世の大規模な城跡である。また、館ノ山遺跡（第1図）でも、中世の土塁や空堀が発見されている。小屋ノ内遺跡の場合、調査区内では中世遺構の痕跡が乏しいが、その字名は中・近世城館に関係するものと思われる。物井地区近辺では、長岡に所在する堂庭遺跡（25）³²⁾で、白磁壺や常滑壺等の骨蔵器、火葬骨、板碑等が出土した。遺構は確認されなかったが、中世の墓域といえる遺跡である。

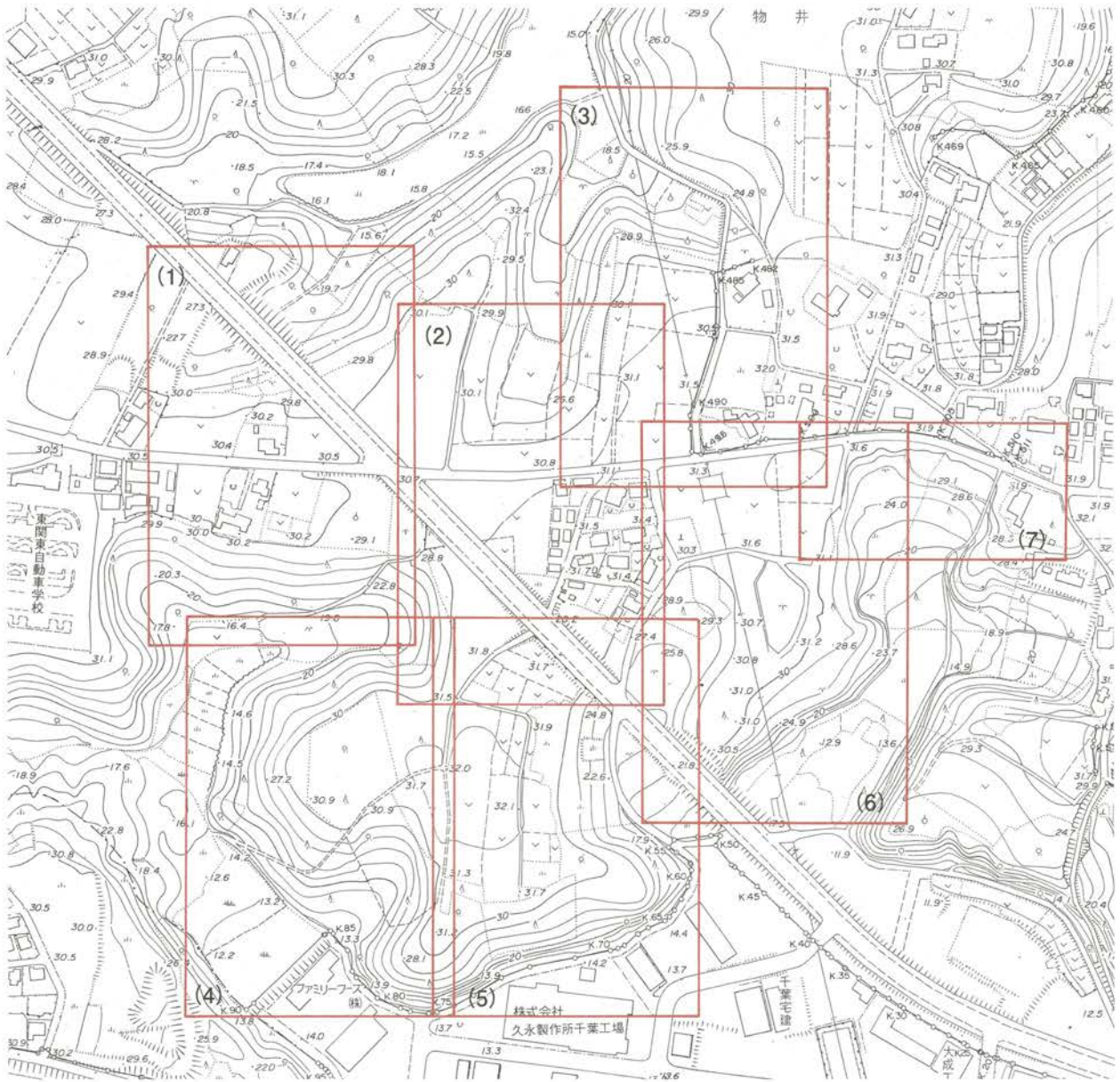
小屋ノ内遺跡では、建物遺構等の近世の遺構も検出されたが、周囲には近世の埋蔵文化財の調査例が乏しいことから、詳細は不明である。

なお、本節の記載に際して、物井地区・内黒田地区の既刊報告書のほか、とくに飯島伸一氏による『郷野遺跡』を参考とした。

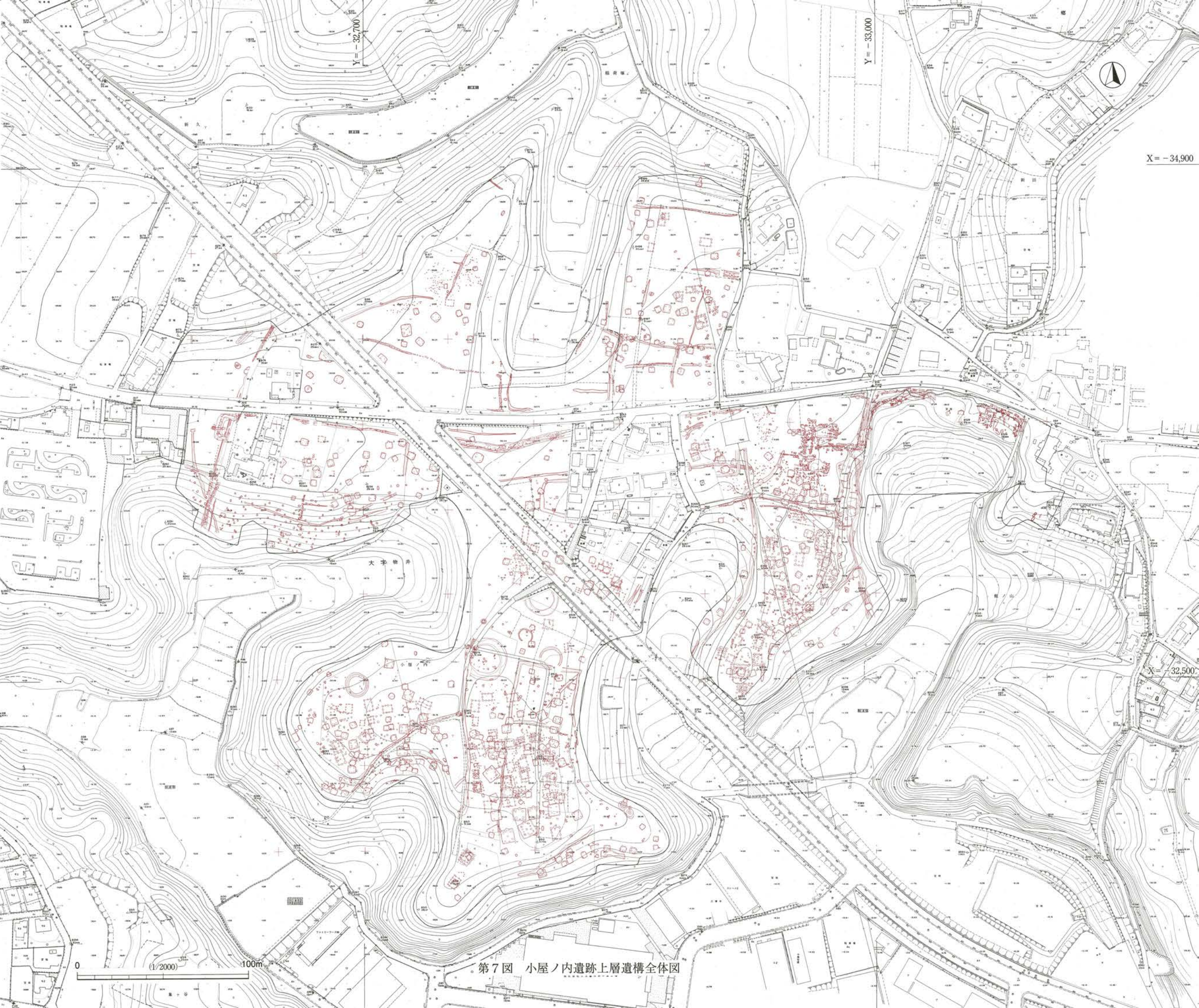
注

- 1 古内茂他 2005『四街道市小屋ノ内遺跡(1) 旧石器時代編－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』(財)千葉県文化財センター
- 2 川端弘士 1990「物井小屋ノ内遺跡調査略報」『四街道市の文化財』第16号 四街道市教育委員会
- 3 渡辺修一他 1994『四街道市御山遺跡(1)－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』(財)千葉県文化財センター
- 4 岡田誠造 1999『四街道市出口・鐘塚遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』(財)千葉県文化財センター
- 5 米内邦雄 1978『八木原貝塚調査報告書』 四街道遺跡調査会
- 6 米内邦雄 1977『千代田遺跡発掘調査概報』 四街道遺跡調査会
- 7 渡辺修一 1991『四街道市内黒田遺跡群－内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』(財)千葉県文化財センター
- 8 渡辺修一 2004「第Ⅱ部資料 第2章 遺跡・遺構と遺物 第3節弥生時代 (1)縄文時代前期から弥生時代前期の遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古4 (遺跡・遺構・遺物)』 千葉県
- 9 注7文献508頁
- 10 田川良他 1982『北総線』 東京電力北総線遺跡調査会
- 11 注9に同じ
- 12 澁谷興平他 1987『寺崎遺跡群発掘調査報告書』 佐倉市寺崎遺跡群調査会
- 13 柿沼修平他 1985『大崎台遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 佐倉市大崎台B地区調査会
 〃 1986『大崎台遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 〃
 〃 1987『大崎台遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 〃
- 14 平成17年11月現在, (財)印旛郡市文化財センターで発掘調査中である。同センター職員 松田富美子氏の御教示による。なお, (財)印旛郡市文化財センター調査地点は馬場No.1 遺跡であるが, ここでは, 広く馬場遺跡としておく。
- 15 田川良他 1978『太田・大篠塚－千葉県佐倉市太田・大篠塚遺跡発掘調査概報－』 日本文化財研究所
- 16 澁谷興平他 1987『四街道市四街道南土地区画整理事業地内発掘調査報告書』(財)印旛郡市文化財センター
 阿部寿彦 2003「第Ⅱ部資料 第2章 古墳時代 259 中山遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古2 (弥生・古墳時代)』 千葉県
- 17 新井和之他 1982『北総線』 東京電力北総線遺跡調査会
 大久保奈々 2004「第Ⅱ部資料 第2章 遺跡・遺構と遺物 第4節古墳時代 (13) 装身具」『千葉県の歴史 資料編 考古4 (遺跡・遺構・遺物)』 千葉県
- 18 新井和之・中西克也 1990『千葉県四街道市入ノ台第2遺跡発掘調査報告書』 四街道市教育委員会
- 19 渡辺修一 1991「補論4『物井古墳群』の構造的把握に向けて」『四街道市内黒田遺跡群－内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』(財)千葉県文化財センター
 渡辺修一 1994「補論1. 御山遺跡と物井古墳群」『四街道市御山遺跡(1)－物井地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－』(財)千葉県文化財センター
 渡辺修一 2003「第Ⅱ部資料 第2章 古墳時代 260 物井古墳群」『千葉県の歴史 資料編 考古2 (弥生・古墳時代)』 千葉県
- 20 松田富美子氏の御教示による。
- 21 飯島伸一他 2002『郷野遺跡－四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ)－』(財)印旛郡市文化財センター

- 22 高橋 誠 2004『権現堂遺跡－四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)－』(財)印旛郡市文化財センター
- 23 高谷英一他 2004『浮矢遺跡Ⅰ・浮矢遺跡Ⅱ－四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)－』(財)印旛郡市文化財センター
- 24 『広報誌 フィールドブック Vol.16』2003 (財)印旛郡市文化財センター
- 25 阿部寿彦 2002『平成13年度四街道市内遺跡発掘調査報告書』 四街道市教育委員会
- 26 天野 努 2005「墨書土器からみた古代房総の郷と村と集落・家族」『千葉県文化財センター研究紀要24-30周年紀年論集-』(財)千葉県文化財センター
- 27 渋谷健司他 2002『千葉県佐倉市内田端山越窯跡－市内重要遺跡確認調査報告書－』(財)印旛郡市文化財センター
- 28 関口達彦 1990『千葉市中原窯跡確認調査報告書』 千葉県教育委員会
- 29 渡邊高弘 1991『千葉市宇津志野窯跡確認調査報告書』 千葉県教育委員会
- 30 村田六郎太他 1996『土気南遺跡群Ⅶ 南河原坂窯跡群 鐘つき堂遺跡』(財)千葉市文化財調査協会
- 31 井上哲朗 1998「鹿島川流域における戦国前期城館の一形態－四街道市北ノ作遺跡の調査から－」『研究連絡誌』第53号 (財)千葉県文化財センター
- 32 川端弘士 1991『四街道市内遺跡発掘調査報告書』 四街道市教育委員会



第6図 遺構位置分割枠全体図 (1:4,000)



Y = -32,700

Y = -33,000

X = -34,900

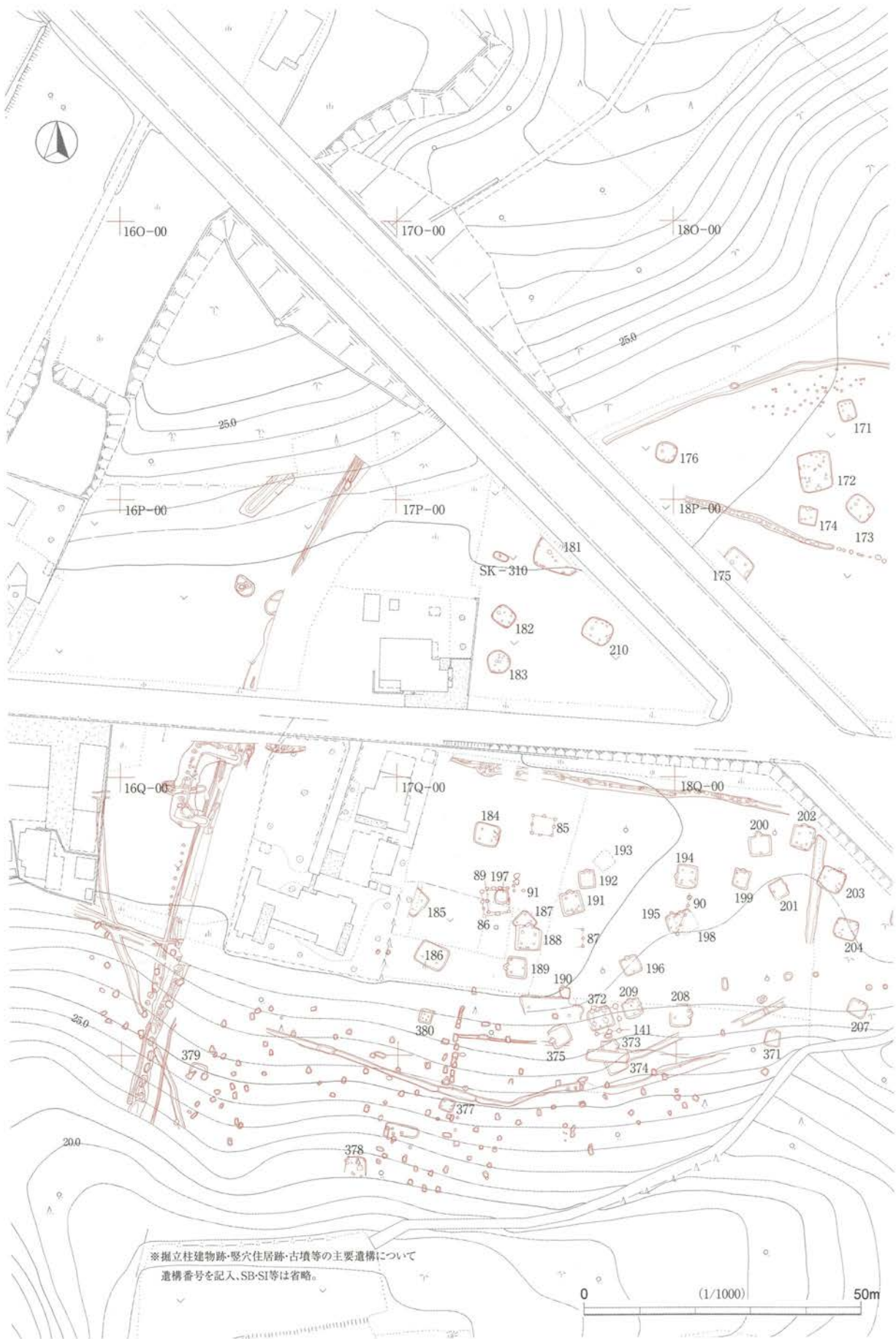
X = -32,500

大字物井

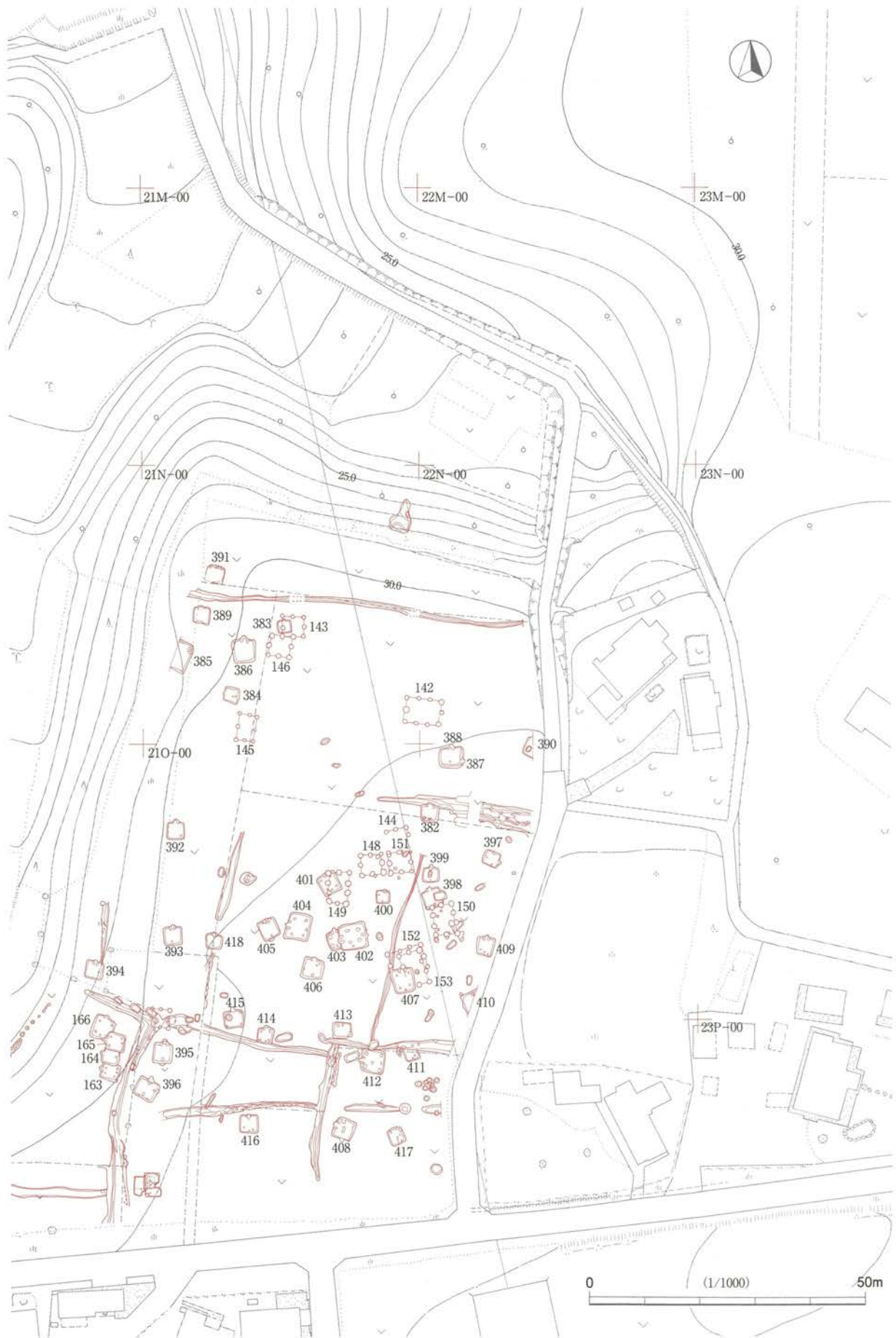
小屋ノ内

0 (1/2000) 100m

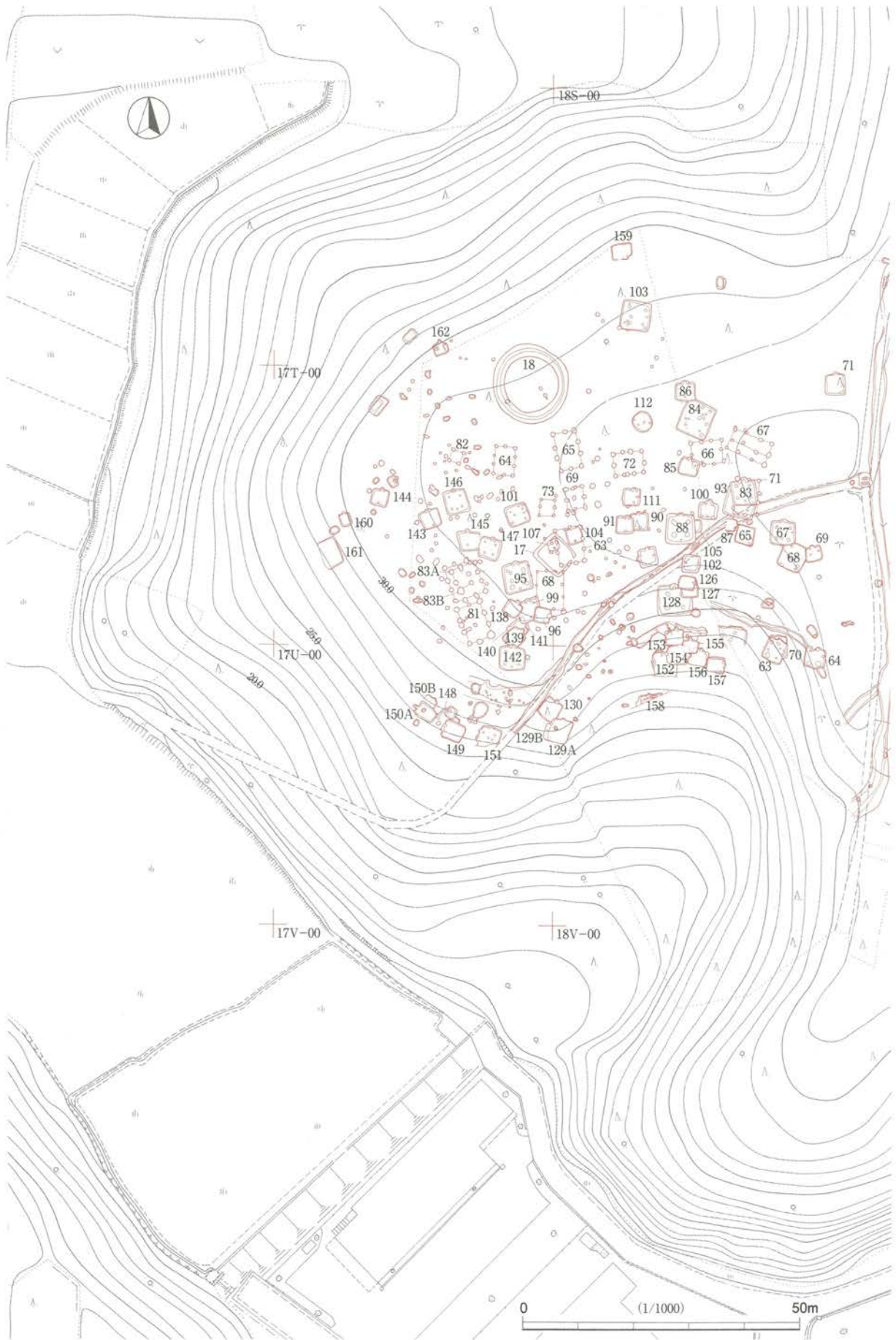
第7図 小屋ノ内遺跡上層遺構全体図



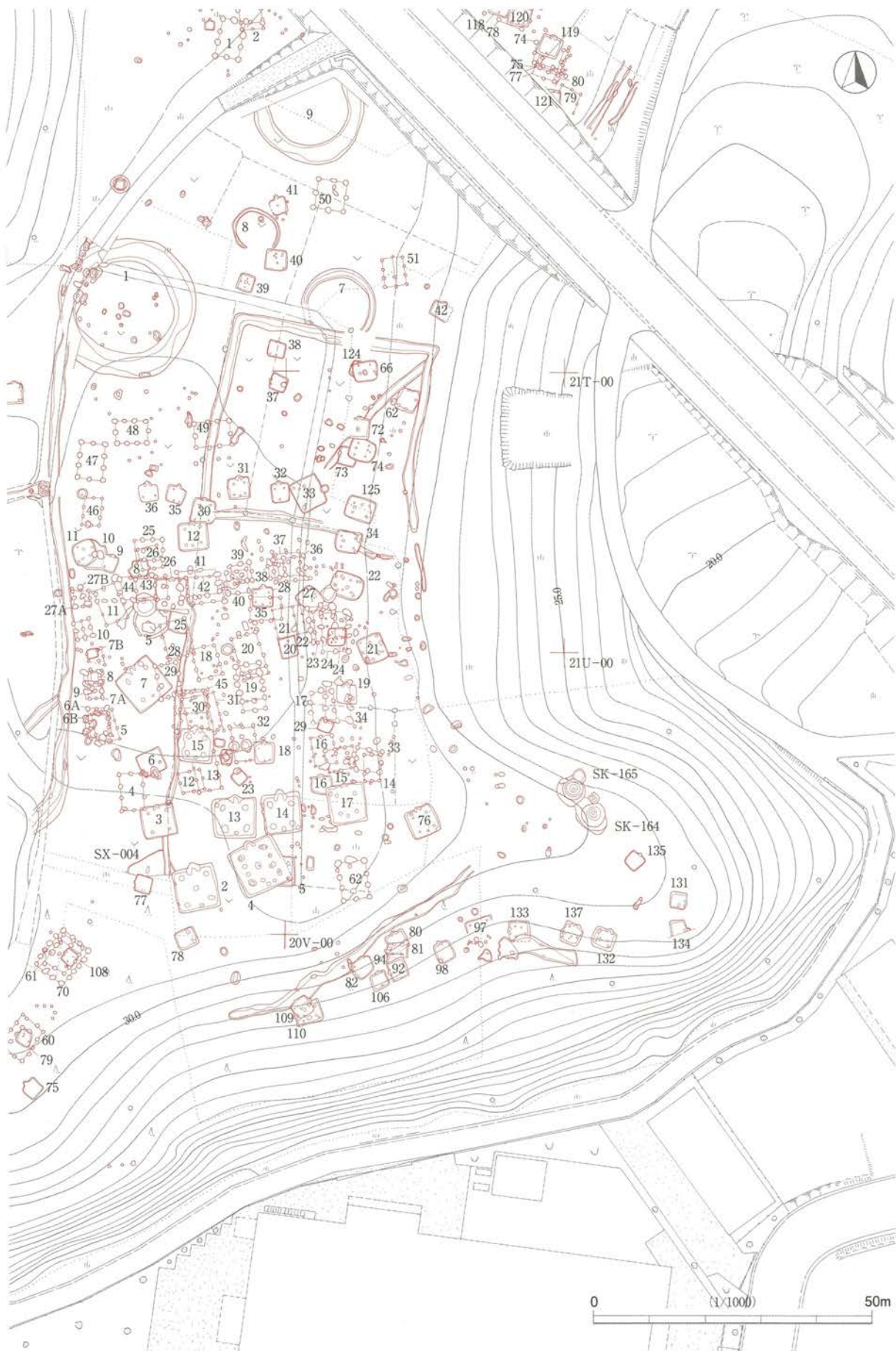
第8図 遺構位置図 (1)



第10図 遺構位置図 (3)



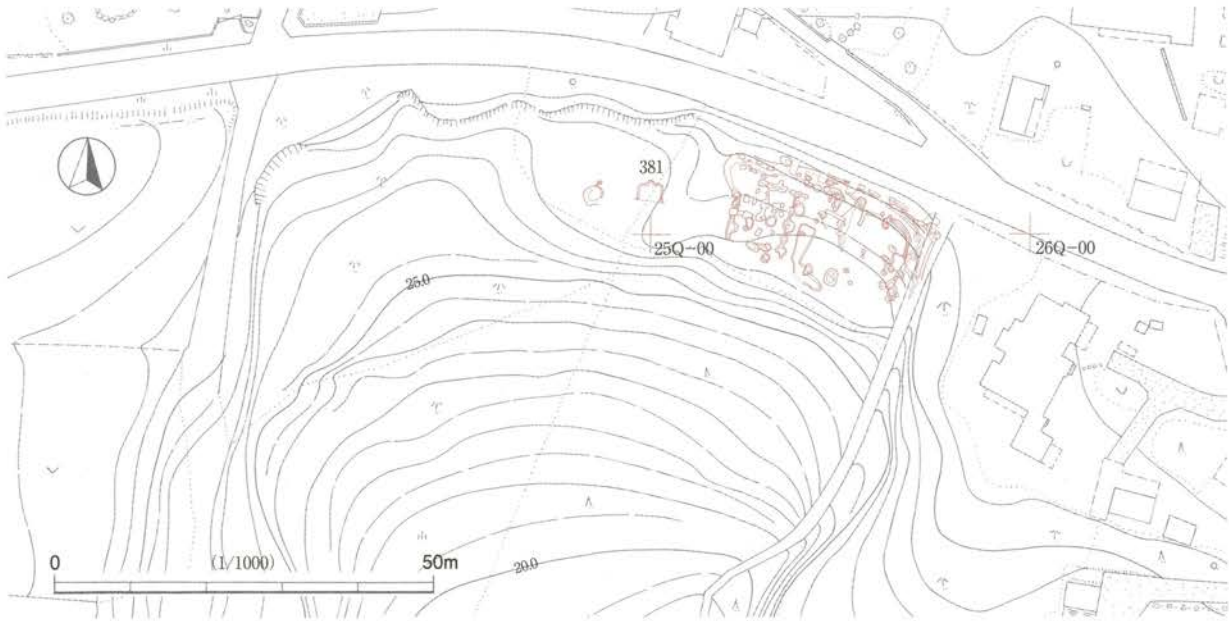
第11図 遺構位置図 (4)



第12図 遺構位置図 (5)



第13図 遺構位置図 (6)



第14図 遺構位置図 (7)

第2章 縄文時代

本遺跡では、縄文時代の遺構として、竪穴住居跡（中期）1軒、竪穴状遺構（後期）1基、埋甕（晩期）1基、炉穴（早期）16群22基、陥穴（早期）12基、土坑12基等が検出された。なお土坑の内訳は早期が6基、前期が1基、中期が1基、後・晩期が4基となっている。また早期の土坑内からは、貝ブロックが2か所で検出された。さらに遺物集中地点として、早期前葉、早期後葉、後期後葉主体の土器群が3地点で確認されている。

ここでは、まず検出された遺構について、早期、前期、中期、後・晩期の時期別に記載することとし、遺物集中地点については、遺構に準ずるものとして扱った。また遺構から出土した土器については、遺構とともに記載することとし、遺構から出土した石器については「石器」の項で記述することとした。なお、その他の製品については、そのほとんどが遺物集中地点から出土しており、これらは一括して「土製品・石製品」としてまとめた。

第1節 早期の遺構・遺物

1 炉穴（第16図、図版8・9・200）

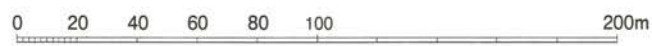
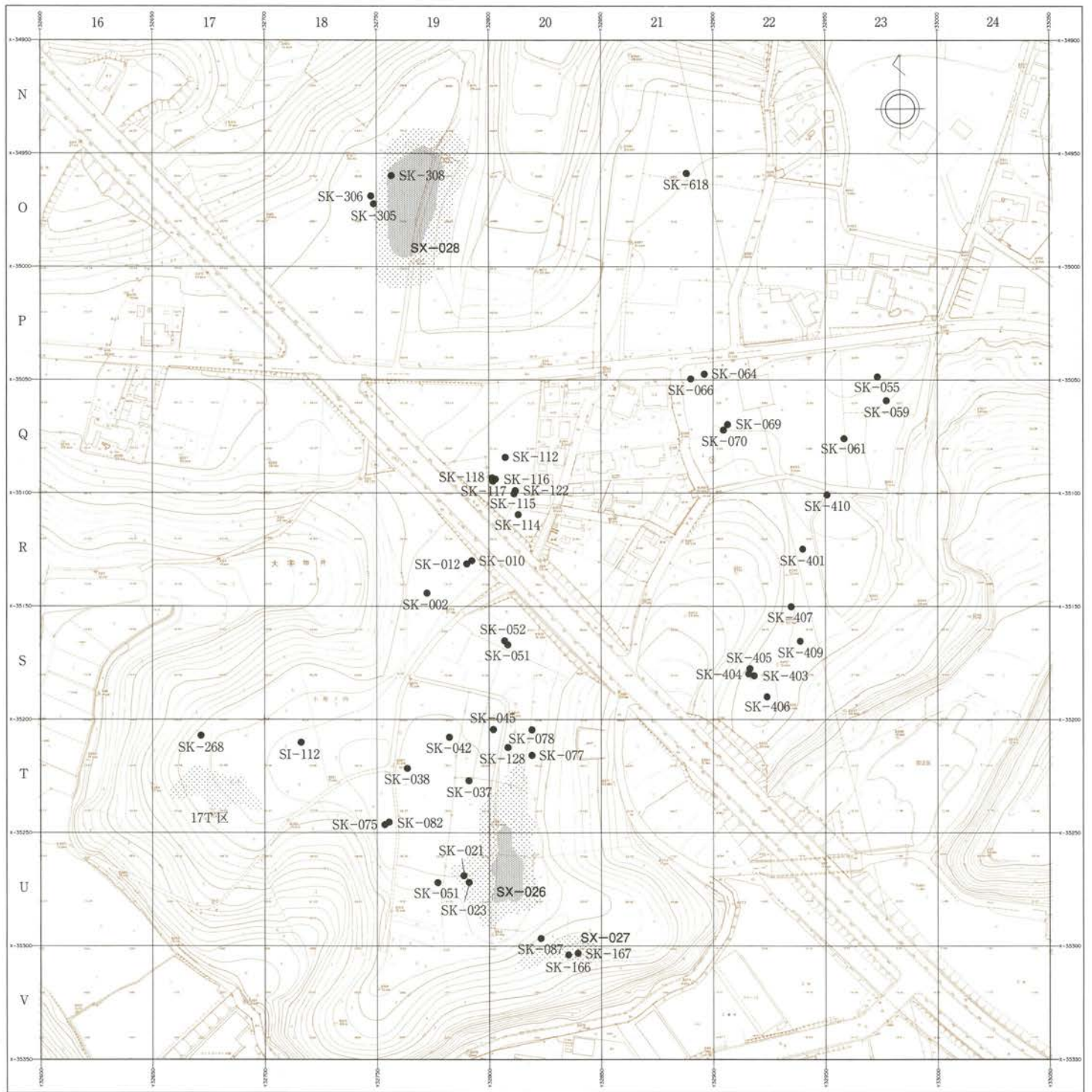
炉穴群については、燃焼部と考え得る部分が検出された遺構と、覆土中に多量の焼土を含んだ遺構を一括して炉穴として扱った。調査区全域で16群22基を検出したが、総じて遺物が少ないため、土器型式による位置づけについては困難なものが多かった。遺構としての炉穴は、その形態等から見て早期後葉以降に位置づけられるのが妥当なもの18基（SK-002・037・045・059・064・066・069・075a・075b・077・078・082・115・122・116・117・118・268）と、そうでないものが4基（SK-051・052・070・087）存在する。

SK-002

形態から早期後葉の炉穴であろう。19R-84グリッドに位置する。Ⅱ層の下部で検出された。平面形は楕円形で、南東の壁は若干オーバーハングする。長軸方向は約N-70°-Eであり、燃焼部は長軸方向の南東端に存在する。長軸方向の最大長で約1.3m、確認面からの深さは最深部で約18cmである。覆土は黒色から黒褐色土を主とし、おそらく自然堆積であろう。出土遺物は認められなかった。

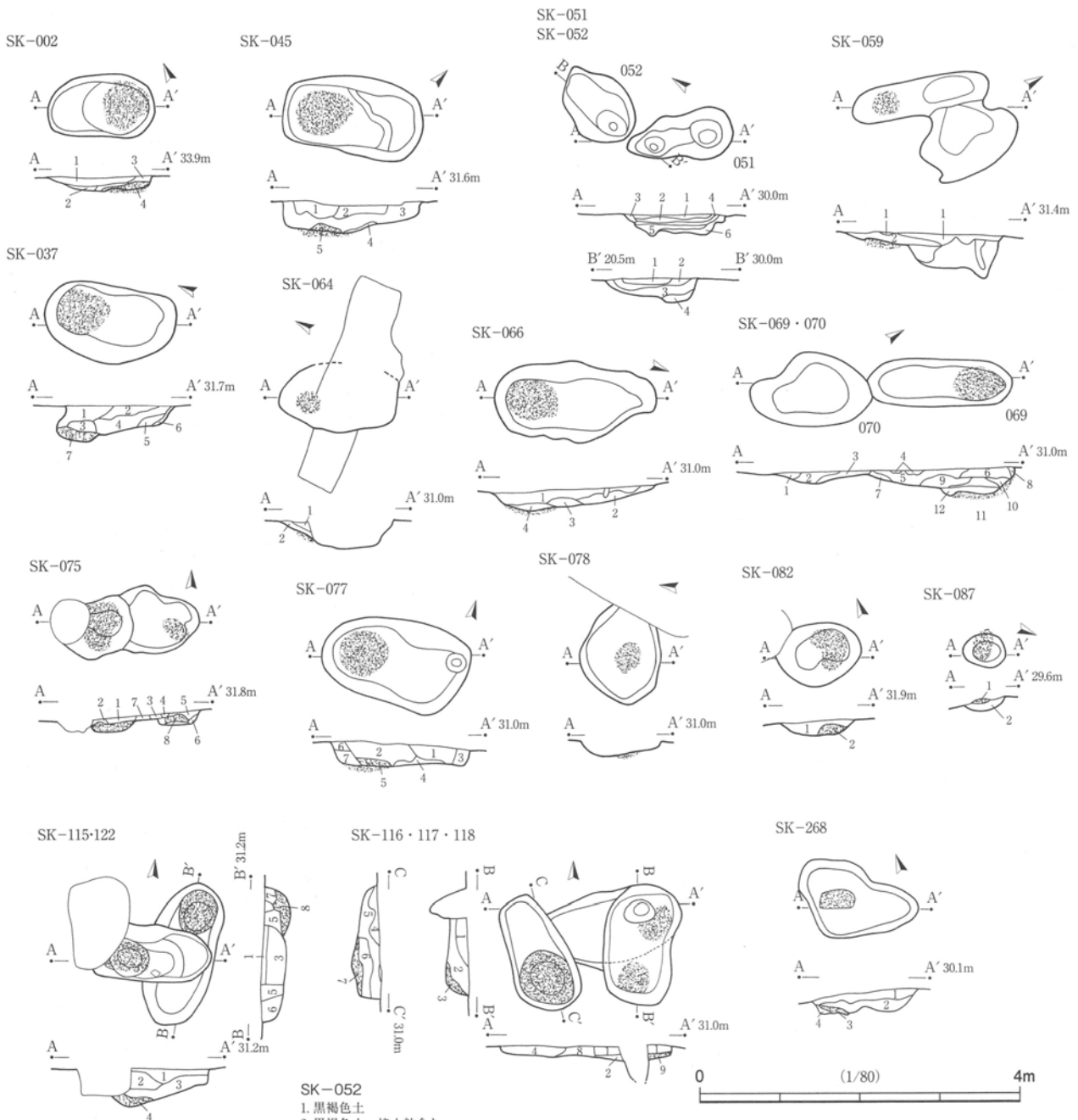
SK-037

出土土器及び形態から早期後葉の炉穴であろう。19T-58グリッドに位置する。平面形はややいびつな楕円形であり、北側の壁は大きくオーバーハングする。平面図は、このオーバーハング部分を落とした状態のものである。長軸方向は約N-5°-Wで、燃焼部は長軸方向の北端に存在する。長軸方向は最大長で約1.65m、確認面からの深さは最深部で約45cmである。覆土は黒褐色土を主とした、ロームをあまり含ない土で、自然堆積の可能性が高い。燃焼部の上面に天井部の崩落と考え得るローム主体の土が堆積していた。遺物は早期前葉の撚糸文系土器2点と早期後葉の条痕文系土器1点が出土した。いずれも小片のため、図示しなかった。



- 石器・剥片濃密分布域
- 石器・剥片分布域

第15図 縄文時代遺構配置図



- SK-052**
 1. 黒褐色土
 2. 黒褐色土 焼土粒含む
 3. 褐色土 焼土粒含む
 4. 褐色土 焼土粒含む

- SK-059**
 1. 黒褐色土 ロームブロック含む
 2. 黒褐色土 ローム粒, 焼土粒含む

- SK-064**
 1. 暗褐色土 焼土粒含む
 2. 暗褐色土 焼土粒多

- SK-066**
 1. 暗褐色土 ローム粒, 焼土粒微
 2. 褐色土
 3. 黒褐色土 ローム粒, 焼土粒少
 4. 暗褐色土 焼土粒少

- SK-069・070**
 1. 暗褐色土 焼土粒微
 2. 暗褐色土 ローム粒斑状
 3. 黄褐色土 焼土粒微

- SK-075**
 1. 暗褐色土
 2. 暗褐色土
 3. 暗褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 暗褐色土
 6. 黄褐色土
 7. 暗黄褐色土
 8. 暗褐色土
 9. 暗褐色土
 10. 暗黄褐色土
 11. 暗褐色土
 12. 暗褐色土

- SK-075**
 1. 暗褐色土 ローム粒含む
 2. 褐色土 焼土粒少
 3. 赤褐色土 焼土主体
 4. 暗褐色土 ローム粒含む
 5. 黒褐色土 ローム粒含む
 6. 褐色土 焼土粒少
 7. 黄褐色土 ローム粒多
 8. 黄褐色土 ローム粒多

- SK-077**
 1. 黒褐色土 ローム粒含む
 2. 黒褐色土 ローム粒, 焼土粒含む
 3. 暗褐色土 ローム粒少
 4. 黄褐色土 ローム粒多
 5. 赤褐色土 焼土ブロック, 焼土粒多
 6. 暗褐色土 ローム粒少
 7. 褐色土 焼土粒少

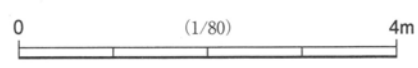
- SK-082**
 1. 黒褐色土 ローム粒, 焼土粒含む
 2. 赤褐色土 焼土主体

- SK-087**
 1. 赤褐色土 ローム粒, 焼土粒含む
 2. 暗褐色土 焼土主体

- SK-115・122**
 1. 暗褐色土 ローム粒, 焼土粒微
 2. 暗褐色土
 3. 黒褐色土 ローム粒, 焼土粒微
 4. 暗褐色土 焼土主体
 5. 暗褐色土 ローム粒, 焼土粒微
 6. 黒褐色土 ローム粒, 焼土粒微
 7. 黄褐色土 ローム多, 焼土粒微
 8. 赤褐色土 焼土主体

- SK-116・117・118**
 1. 暗褐色土 ローム粒少, 焼土粒微
 2. 黄褐色土 ローム多
 3. 赤褐色土 ローム粒少, 焼土粒多
 4. 黒褐色土 ローム少
 5. 褐色土
 6. 暗褐色土 ローム粒, 焼土粒微
 7. 赤褐色土 焼土主体
 8. 褐色土 ローム粒少, 焼土粒微
 9. 赤褐色土 ローム粒少, 焼土粒多

- SK-268**
 1. 褐色土 焼土粒含む
 2. 褐色土 ローム粒微, 焼土粒多
 3. 赤褐色土 焼土主体
 4. 褐色土 焼土粒含む



第16図 炉穴 (1)

SK-045

出土土器から、早期後葉の炉穴である。20T-01グリッドに位置する。平面形は長方形に近い。燃焼部と足場の境がやや段になっている。長軸方向は約N-50°-Eで、燃焼部は長軸方向の南西端に存在する。長軸方向の最大長は約1.75m、確認面からの深さは最深部で約45cmである。覆土はロームを多量に含んだ黒褐色から暗褐色の土で、おそらくは人為的な埋土であろう。

遺物（第17図1～3）本跡からは若干の条痕文系土器が出土している。すべて早期後葉の条痕文系土器で、条痕以外に文様を有しない。比較的薄手で、焼成は堅緻である。1、2は同一個体と考えられる口縁部破片で、口唇上にも条痕を施している。

SK-051・052

隣接した2基のピットである。両者とも覆土全体に焼土が認められたためここで扱うこととした。出土土器から、時期は早期後葉の野島式期に相当する。形態的には炉穴とは言い難く、規模や形態的には住居跡の炉である可能性も残る。20S-31グリッドに位置する。2基のピットに重複はない。平面形は両者とも不整形である。長軸方向はSK-051が約N-40°-Wで、最大長約1.2m、確認面からの深さは最深部で約26cmである。SK-052はN-20°-Eで、最大長約1.1m、確認面からの深さは最深部で約30cmである。覆土は上部が黒褐色土で、下部が褐色系の明るい土であり、全体に焼成を受けているが、硬化度は弱い。

遺物（第17図4）同一個体の破片が5点出土し、接合したものである。文様としては、器面に微隆起線が観察でき、早期後葉の野島式土器と判断できる。4bの破片は、SK-051・052の間で遺構間接合した破片である。

SK-059

出土土器及び形態的には早期後葉の炉穴となろう。23Q-24グリッドに位置する。細長い楕円形の炉穴が、不整形の別の落ち込みを切っているものであろう。長軸方向は約N-15°-Wで、燃焼部は長軸方向の南端に存在する。長軸方向の最大長は約1.75m、炉穴部分の確認面からの深さは最深部で約15cmである。炉穴部分の覆土は、黒褐色土にロームブロックを多量に含むため人為的な埋土の可能性がある。早期後葉の条痕文系土器が1点出土したが、小片のため図示しなかった。

SK-064

出土した土器から早期後葉の炉穴である。21P-99グリッドに位置する。遺構の半分程度を攪乱により壊されているため平面形ははっきりしないが、おそらく楕円形に近いであろう。長軸方向は約N-30°-Wで、燃焼部は長軸方向の北西端に存在する。長軸方向の最大長は約1.5m、残存部分での深さは最深部で約20cmである。覆土は暗褐色土主体である。燃焼部付近から比較的まとまった遺物を出土した。

遺物（第17図5～7）すべて早期後葉の条痕文系土器である。5・6は、施文具や胎土から同一個体と思われる。5は波状口縁の波頂部で、口唇上には刻目を施す。7は比較的鋭角な尖底部で、内外面とも条痕による整形後、ナデ消したような痕跡が認められる。

SK-066

出土した土器から、早期後葉の炉穴となろう。21P-98・21Q-08グリッドにわたって位置する。平面形は、ほぼ楕円形となるが足場部分では不整形を呈する。長軸方向は約N-20°-Wで、燃焼部は長軸方向の北西端に存在する。長軸方向の最大長は約2.1m、確認面からの深さは最深部で約30cmを計測する。覆土の層序はやや乱れているように見え、人為的な埋土も考えられる。

遺物（第17図8） 早期後葉の条痕文系土器であり、条痕以外に文様を持たない。比較的薄手の土器である。

SK-069・070

重複する2基の炉穴によって構成される。SK-069は出土した土器から早期後葉の炉穴となろう。SK-070は焼部がはっきりしないが、覆土中に焼土を含むため、ここで扱うこととした。22Q-41グリッドに位置し、新旧関係はSK-069が古く、SK-070が新しい。SK-069は楕円形を呈し、長軸方向は約N-25°-Eで、焼部は長軸方向の北東端に存在する。長軸方向での最大長は約1.8m、確認面からの深さは最深部で約35cmを計る。覆土の層序はやや乱れており、人為的な埋土の可能性もある。SK-070は不整形で、長軸方向は約N-25°-Eである。焼部ははっきりしない。長軸方向の最大長は約1.55m、確認面からの深さは最深部で約15cmである。覆土中には焼土を含む。

遺物（第17図9・10） 2点はSK-069から出土した早期後葉の条痕文系土器である。9は内外面ともナデによる調整痕を若干残す薄手の土器で、口縁端部の作りが特徴的である。10は条痕のみの土器で、内面はナデの調整痕を残す。

SK-075

2基の炉穴が重複したものであり、19T-90グリッドに位置する。その形状からみて早期後葉の炉穴の底面付近が残存したもののようなものである。西側のものをa、東側のものをbとすると、新旧関係でいえばbが古く、aが新しいものとなる。aは西側を別のピットにより破壊される。平面形はa、bとも整ったものではない。aの長軸方向は約S-80°-Eで、焼部は土坑の中央に存在する。長軸方向の最大長は約1m、確認面からの深さは最深部で約17cmである。一方、bの長軸方向は約S-70°-Eで、焼部は長軸方向の東端に存在する。残存長で約1m、確認面からの深さは最深部で約18cmとなる。遺物の出土は認められなかった。

SK-077

本跡は20T-33グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸方向は約S-80°-Eとなり、焼部は長軸方向の西端に存在する。長軸方向での最大長は約1.9m、確認面からの深さは最深部で約30cmを計測する。堆積土の断面をみると、5層を焼部とする炉穴が、さらに1基重複して存在しているようである。遺物の出土は皆無であった。

SK-078

本跡は、形態的には若干異なった感があるものの早期後葉の炉穴として間違いのないであろう。20T-03グリッドに位置し、東側をSI-062住居跡によって壊されている。平面形は楕円形である。長軸方向は約N-80°-Eで、焼部は掘込みの中央に位置する。長軸方向は最大長で約1.3m、確認面からの深さは最深部で約18cmと浅い。堆積土は図化しなかったが、覆土はロームや焼土粒を含む、やや乱れた層序で、人為的な埋土とも考えられた。遺物の出土は認められなかった。

SK-082

本跡は19T-90グリッドに位置し、西側で別の土坑と重複する。平面形は楕円形である。長軸方向は約S-80°-Eで、焼部は長軸方向の東端に存在する。長軸方向では最大長で約1.1m、確認面からの深さは最深部で約20cmを計測した。出土遺物は認められなかった。

SK-087

本跡は小規模の炉跡であり、規模や形態からは早期後葉の炉穴と即断はできない。20U-94グリッドに位置する。早期前葉遺物集中地点であるSX-026と位置的に重なることから、早期前葉に遡る可能性もある。平面形は楕円形で、長軸方向は約N-20°-Wを示す。長軸方向の最大長は約0.5m、確認面からの深さは最深部で約15cmと浅い。堆積土からロームを多く含んだ暗褐色土層の上部に、燃焼部と考え得る焼土層が存在する。出土遺物は皆無であった。

SK-115・122

本跡は2基の炉穴が重複するものである。出土した土器から早期後葉の炉穴となろう。20Q-92グリッドと20R-02グリッドにわたって位置する。新旧関係はSK-122が古く、SK-115が新ということになる。SK-115は西側を別の土坑に壊されている。平面形は両者とも楕円形である。SK-115は、長軸方向がN-95°-Wとなり、燃焼部は長軸方向の西端に存在する。長軸方向の最大長は約1.5m、確認面からの深さは最深部で約50cmを測る。堆積土についてみると、1層～4層がSK-115の覆土で、上部に暗褐色土、下部に黒褐色土が存在することから人為的な埋土とも考えられた。SK-122は、長軸方向がN-10°-Eで、燃焼部は長軸方向の北端に存在する。長軸方向の最大長は約1.8m、確認面からの深さは最深部で約30cmとなっている。堆積土の5層～8層はSK-122の覆土である。炉穴の中央付近を、SK-115によって切られる。遺物(第17図11) 11はSK-115出土の早期後葉の条痕文系土器である。内外面に条痕を施す。

SK-116・117・118

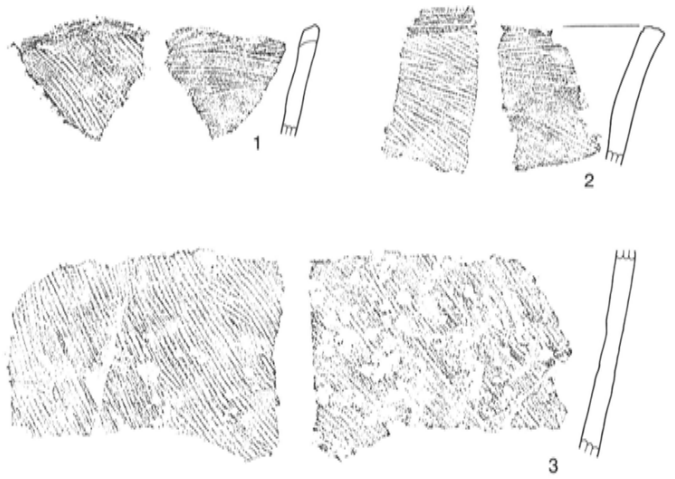
3基の炉穴が重複したものである。出土した土器から早期後葉の炉穴となる。20Q-80・90グリッドに位置する。新旧関係は、古いSK-118を新しいSK-116・117が切る。SK-116とSK-117は直接重複してはいない。SK-116・118はさらに別の小ピットによって切られているが、平面形は3基ともおそらく楕円形となろう。SK-116は、長軸方向がN-5°-Eで、燃焼部は長軸方向の南端に存在する。長軸方向の最大長は約1.4m、確認面からの深さは最深部で約30cmを測る。堆積土中の1層～3層はSK-116の覆土である。SK-117は長軸方向がN-25°-Wで、燃焼部は長軸方向の南端に存在する。長軸方向の最大長は約1.5m、確認面からの深さは最深部で約35cmであった。堆積土4層～7層はSK-117の覆土である。SK-118は、長軸方向がN-75°-Eとなり、燃焼部は長軸方向の東端に存在する。残存部の最大長は約1.7m、長軸方向の最大長は推定で1.9mほどとなろう。確認面からの深さは最深部で約20cmである。堆積土の8層・9層はSK-118の覆土である。東側はSK-116に上部を切られ、燃焼部のみがかろうじで残存したものであろう。西側はSK-117によって大きく壊されている。

遺物(第17図12~15) 図示した土器は、SK-116とSK-117で出土した土器が接合したものである。早期後葉の条痕文系土器で、内外面共に条痕が施される。比較的薄手で堅緻な土器である。13~15はSK-117で出土した早期後葉の条痕文系土器である。13・14はナデによる調整痕が残るもの。14では口縁部下に明確な沈線状のナデが残る。15は鋭角な尖底部の一部が遺存したものであり、器面に削痕状の調整痕が認められる。

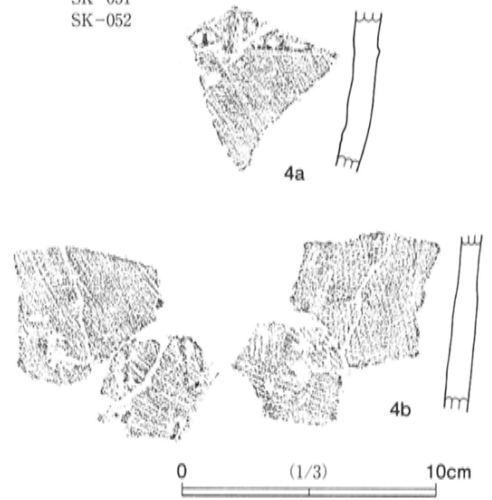
SK-268

本跡は17T-14グリッドに位置する。平面形は不整形となり、長軸方向はN-60°-Wで、燃焼部は長軸方向の北西寄りに存在する。長軸方向の最大長は約1.6m、確認面からの深さは最深部で約30cmを計測する。覆土は褐色土主体の堆積である。遺物の出土は認められなかった。

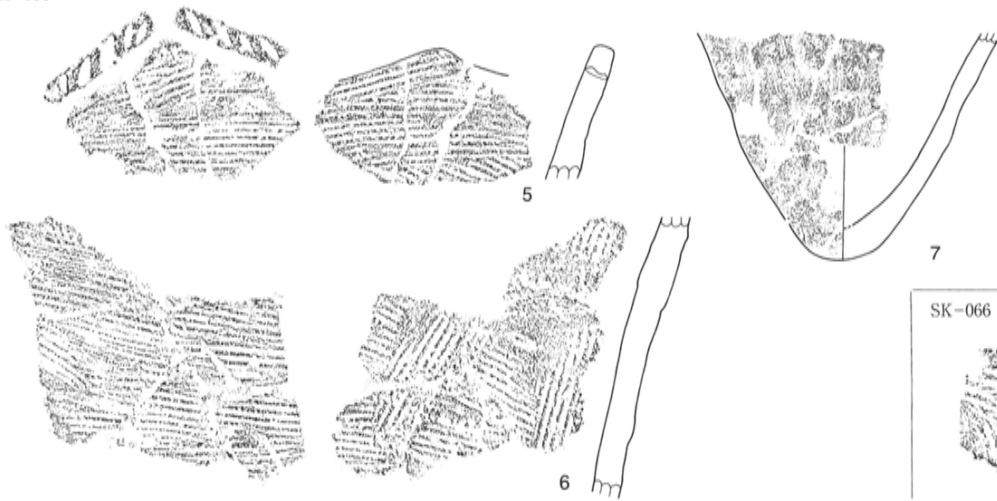
SK-045



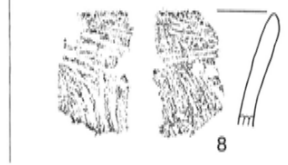
SK-051
SK-052



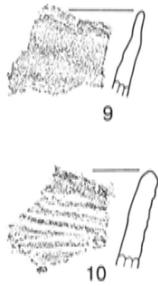
SK-064



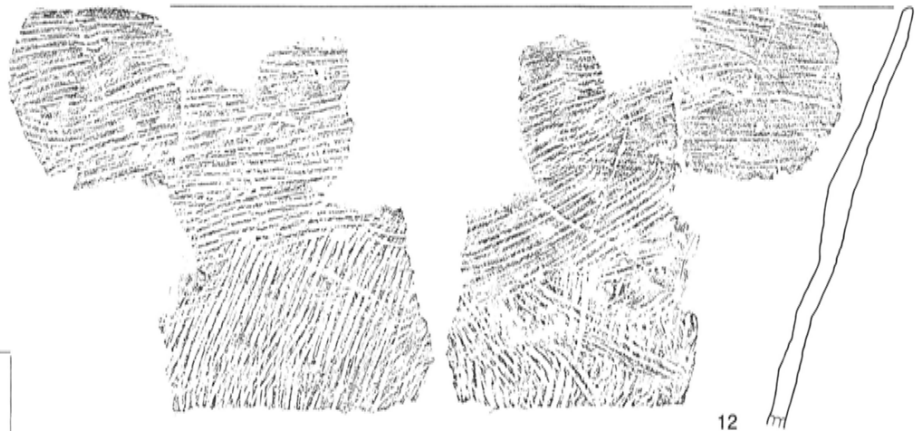
SK-066



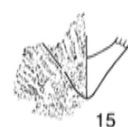
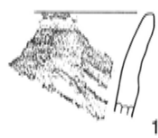
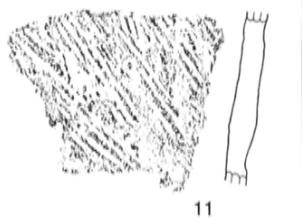
SK-069



SK-116 · 117



SK-115



0 (1/3) 10cm

第17图 炉穴 (2)

2 土坑（第18図・図版10・11・201）

本遺跡から検出された土坑は、伴出した土器からすべて早期後葉に属する土坑であった。調査区全体で6基が検出され、SK-112とSK-166の覆土中では貝層が認められたためサンプルを採取した。

SK-010

19R-58グリッドに位置する。北側を別の土坑に切られる。開口部はややいびつで、底面は円形に近い。断面形はバケツ状であるが、北側の壁はややオーバーハングする。開口部最大長で約1m、確認面からの深さは最深部で約75cmである。覆土は暗褐色土主体で、自然堆積となろう。

遺物（第18図1～5）本跡では早期後葉の条痕文系土器の良好資料が出土している。いずれも器厚は薄手で、1・2は口縁部から底部の一部までが残存している小型の深鉢である。ともに口唇部は鋭利な形態を有している。1は内外面条痕で、口縁部内面のみ横方向に条痕を施している。2は外面のみ条痕を施し、内面はナデの痕跡を残す。3・5は外面のみ条痕をもつ土器で、3の口唇部は平坦ないし丸味を持たせた作りとなっている。4は底部で、比較的薄手の作りで内面での条痕は鮮明である。砲弾形に近い形状を有する。

SK-012

19R-68グリッドに位置する。平面形は、開口部は楕円形であるが、底面ではほぼ円形となる。壁面は急な立上りを示し、底面ではやや凹凸がみられる。開口部の最大長は約1m、確認面からの深さは最深部で約30cmを計測する。覆土ではブロック状の堆積が認められた。

遺物（第18図6）早期後葉の条痕文系土器の口縁部である。内外面に条痕を持ち、口唇上にも2～3条の条痕を施している。

SK-112

本跡は20Q-61・71グリッドにかけて位置する。平面形は不整形であり、壁はやや急な立ち上りを示す。底面にはやや凹凸がみられる。開口部の最大長は約1.6m、確認面からの深さは最深部で約25cmを計る。覆土層中に小型のハイガイ主体の貝ブロックが存在した。底面までには至っておらず、本跡が廃棄された後に貝が捨てられたものであろう。

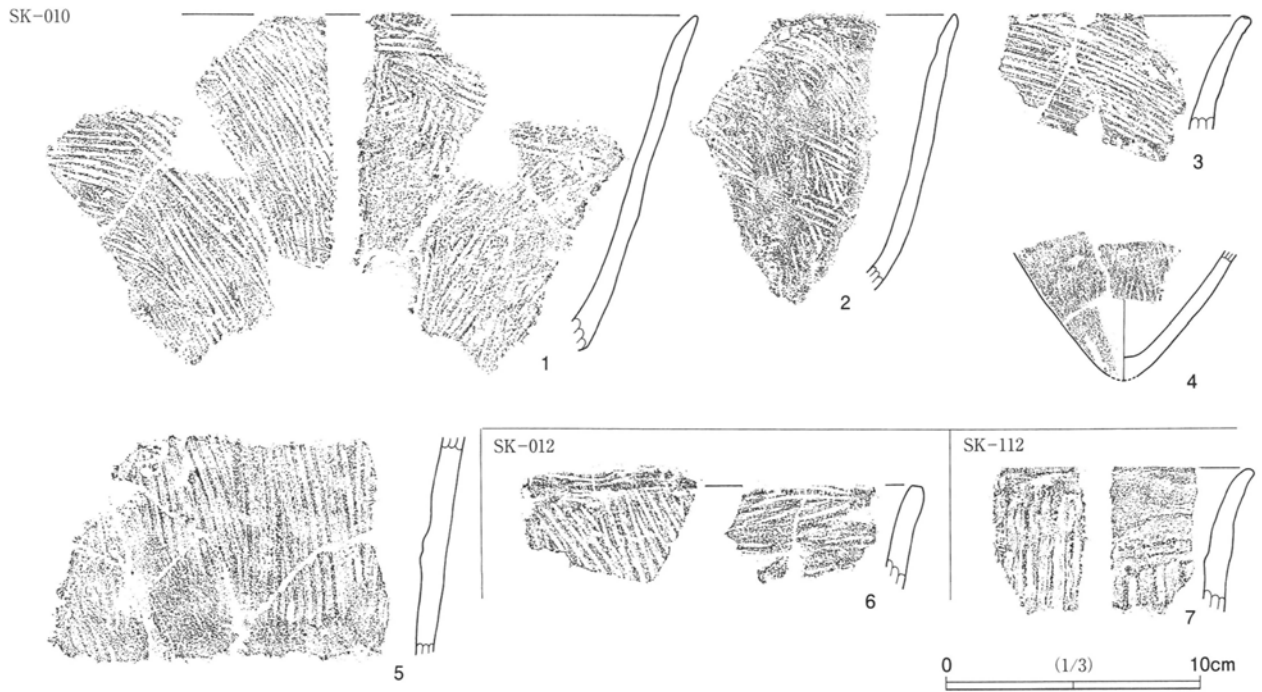
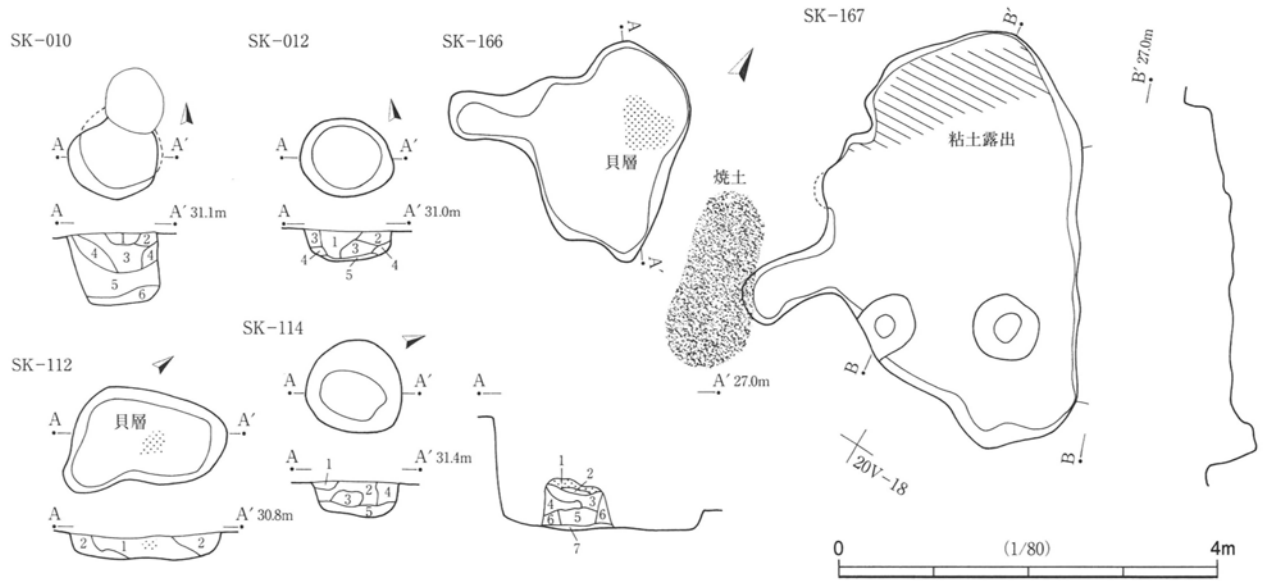
遺物（第18図7）早期後葉の条痕文系土器であり、内外面に条痕を施す。ただ口縁部内面の条痕は整形により磨り消されている。

SK-114

本跡は20R-22グリッドに位置する。平面形は楕円形、壁は急な立ち上がりとなり、底面では凹凸が認められる。開口部の最大長は約1m、確認面からの深さは最深部で約40cmを計る。覆土ではブロック状の堆積が認められ、人為的な埋土の可能性もある。遺物としては、早期後葉の条痕文系土器が少量出土したが、すべて小片のため図示は省略した。

SK-166・167

本跡は20V-07・08グリッドにかけて位置する。これは調査区南部の台地先端部斜面にあたり、両者とも早期後葉の遺物集中地点であるSX-027の南部で検出された土坑となる。上面をSX-027に覆われており、時期的には概ね早期後葉といえよう。両者とも平面形は不整形に近く、部分的に、掘込みが張り出す形状となる。規模は違うものの形態的には類似している。SK-166は西側の張り出す部分のレベルがやや高く段状を呈している。壁面は急な立ち上がりで、底面はほぼ平坦となる。開口部の最大長は約2.5m、



SK-010

- 1. 黒褐色土 ローム粒少
- 2. 暗褐色土 ローム粒少
- 3. 暗褐色土 ローム粒、炭化物含む
- 4. 暗褐色土 ローム粒やや多
- 5. 暗褐色土 ローム粒少
- 6. 褐色土

SK-012

- 1. 暗褐色土 ローム粒、炭化物少
- 2. 暗褐色土 ローム粒斑状
- 3. 暗褐色土 ローム粒多、炭化物含む
- 4. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック多
- 5. 褐色土 ロームブロック多

SK-112

- 1. 黒褐色土 ローム粒少、貝をブロック状に含む
- 2. 褐色土 ローム多

SK-114

- 1. 黒褐色土 ローム粒少
- 2. 暗褐色土 ローム粒、炭化物少
- 3. 黒褐色土 ローム粒、炭化物少
- 4. 褐色土 ローム多
- 5. 黄褐色土 ロームごく多

SK-116

- 1. 混土貝層 黒褐色土含む
- 2. 黒色土
- 3. 黒色土 ローム粒微
- 4. 黒褐色土 ローム粒多
- 5. 褐色土
- 6. 茶褐色土 ローム多
- 7. 黄褐色土 ローム主体

第18図 土坑

確認面からの深さは最深部で約50cmと深い。覆土中にハイガイを含む貝層が検出された。覆土は黒色～黒褐色土で構成されていた。SK-167の壁は急な立ち上がりを示し、底面は斜面方向にやや傾く。底面北側では、粘土層が露呈していた。開口部の最大長は約4.5m、確認面からの深さは最深部で約30cmを計測した。覆土は黒色～黒褐色土主体で構成されていた。また西側の細長い張り出しの一部は焼土によって覆われて

いた。本跡周辺は、地形的にはかなりの傾斜が認められ居住には適していないため、それ以外の活動の痕跡を示す遺構となろう。さらにSK-167の底面では粘土層が露呈していることから粘土採掘坑の可能性も考えられる。土坑周囲には、焼土がさらに数か所検出されており、また上部の早期後葉の遺物集中SX-027とも関連する遺構とも考えられる。なお遺物については後述することとしたい。

3 陥穴（第19図・図版201）

ここでは形態的に陥穴と考え得るものを一括した。調査区全域では12基を検出している。この種の遺構では、遺物が出土することは希で、時期決定という点では決め手に欠く。概ね早期後葉と思われるが、形態等を中心に記述しておきたい。本遺跡の場合、図示したように底面が方形に近いタイプと、細長いタイプいわゆる「Tピット」の二者が存在する。

SK-015

19U-45グリッドに位置する。SI-006住居跡に切られている。開口部が広がっているためわかりにくい。底面の形状から見るといわゆる「Tピット」に近いものであり、上部が別の遺構に攪乱されている。長軸方向は約N-30°-Wである。開口部の最大長は約2.5m、確認面からの深さは最深部で約1.1mとなる。覆土は暗褐色土主体の堆積であった。

SK-023

19U-48グリッドに位置する。SI-023住居跡によって上面を削平されている。開口部は楕円形で、底面の形状はややいびつとなる。平面形から推測すると、本来的には方形に近いタイプといえよう。開口部の最大長は約1.5m、確認面からの深さは最深部で約0.8mとなる。長軸方向は約N-20°-Eで、覆土は暗褐色土の中にローム層混入が主体となる。ここでは若干の条痕文系土器と、撚糸文系土器が出土しているが、採択できる土器についてのみ図示した。

遺物（第19図1～4） 1～4は、撚糸文系土器であり、夏島式～稻荷台式に相当するものであろう。1は、押型文を施文したようにもみえるがはっきりしない。文様部分が8mmほどで帯状になり、矢羽根状の文様が僅かに観察できる。2はやや肥厚した口縁部を持つ無文の土器である。3はRLの縄文を浅く施している。4の器面では、やや乱れたRの撚糸文を施文している。

SK-042

19T-16グリッドに位置する。北側は他のピットによって切られている。開口部、底面ともややいびつであるが、いわゆる「Tピット」に近いものであろう。底面の南寄りに小ピットが1か所存在する。長軸方向は約N-5°-Eである。開口部の最大長は約2.5m、確認面からの深さは最深部で約0.7mを測る。底面の小ピットの深さは約9cmであった。覆土は、堆積の状況から自然堆積のようである。

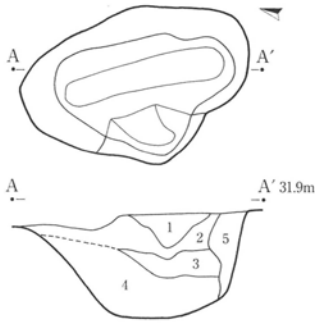
SK-061

23Q-41・51・52の3グリッドにかけて位置する。開口部はややいびつであるが、底面の形状から見ると「Tピット」としてよい。長軸方向は約N-85°-Wである。開口部の最大長は約3m、確認面からの深さは最深部で約1.2mとなる。

SK-128

20T-21グリッドに位置する。規模や平面形からみると、方形に近いタイプとなろう。長軸方向は約N-70°-Wである。開口部の最大長は約2.5m、確認面からの深さは最深部で約1.1mを計測する。覆土は暗褐色

SK-015

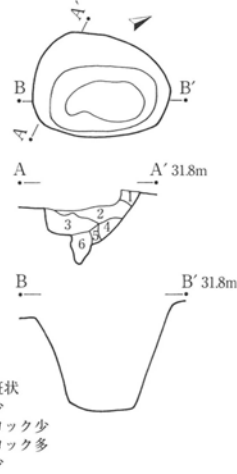


SK-015

- 1. 暗褐色土
- 2. 暗褐色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 暗褐色土
- 5. 暗褐色土

- ローム斑状
- やや暗色
- 褐色土含む
- ローム多

SK-023

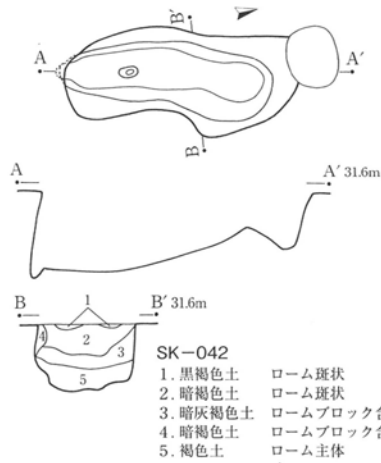


SK-023

- 1. 暗褐色土
- 2. 暗褐色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 暗褐色土
- 5. 黒褐色土
- 6. 黒褐色土

- 粘土粒微
- ローム粒斑状
- ローム粒少
- ロームブロック少
- ロームブロック多
- ローム粒少

SK-042

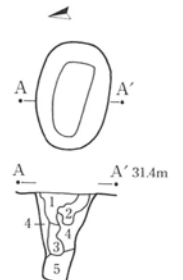


SK-042

- 1. 黒褐色土
- 2. 暗褐色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 暗褐色土
- 5. 褐色土

- ローム斑状
- ローム斑状
- ロームブロック含む
- ロームブロック含む
- ローム主体

SK-128

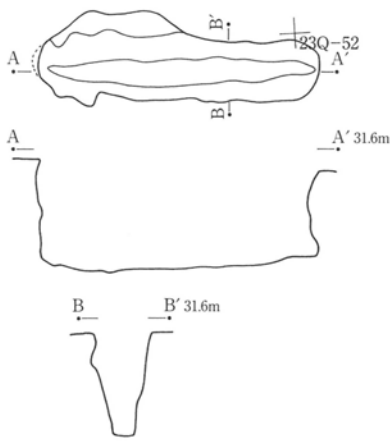


SK-128

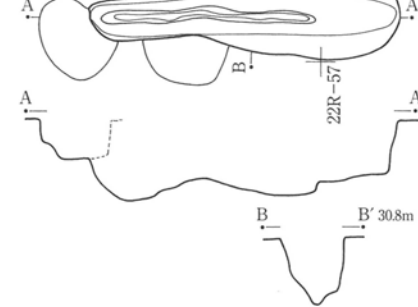
- 1. 黒色土
- 2. 黒褐色土
- 3. 褐色土
- 4. 黄褐色土
- 5. 褐色土

- ローム粒少
- ローム主体

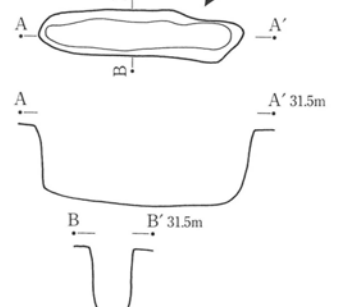
SK-061



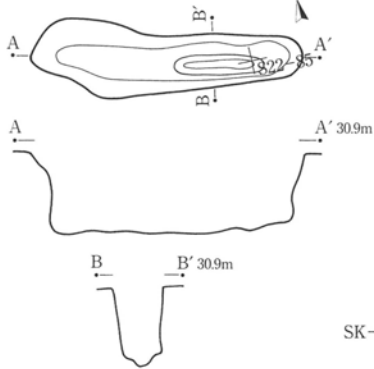
SK-401



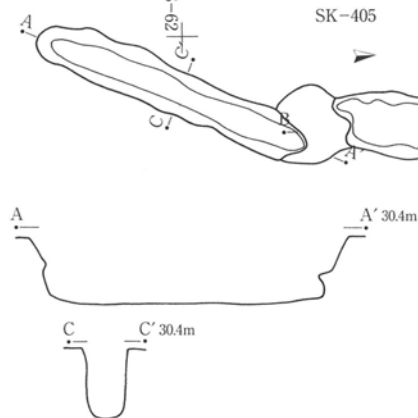
SK-403



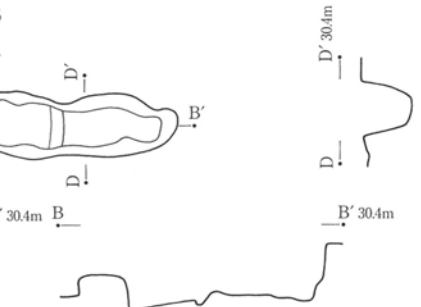
SK-406



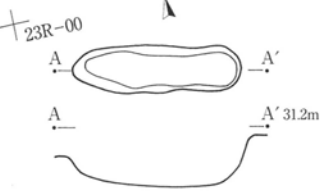
SK-404



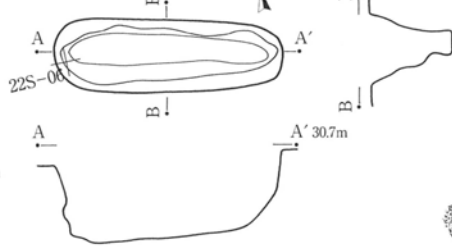
SK-405



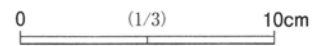
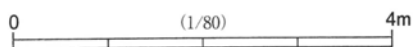
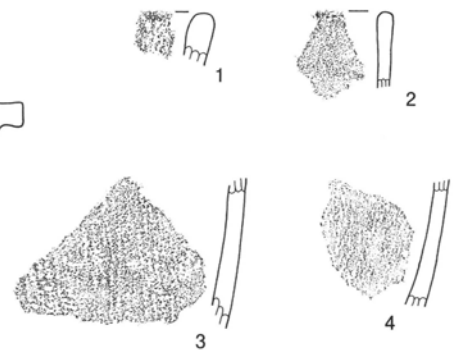
SK-410



SK-407



SK-023



第19図 陥穴

色土主体で構成されていた。

SK-401

22R-48・58グリッドにかけて位置する。開口部では南側がやや広がるが、底面の形状からみるといわゆる「Tピット」である。底面はかなり凹凸がみられ、北側と東側の上部は別の遺構に切断されている。長軸方向は南北方向を示す。開口部の最大長は約3.3m、確認面からの深さは最深部で約80cmとなる。

SK-403

22S-53・63グリッドにかけて位置する。SK-404が西側に平行するように存在する。その形状から、いわゆる「Tピット」となろう。長軸方向は約N-15°-Eである。開口部の最大長は約2.2m、確認面からの深さは最深部で約85cmである。

SK-404

22S-53・63グリッドにかけて位置し、SK-403が東側に平行するように存在する。その形状から典型的な「Tピット」となろう。北側上部は別の遺構に切られている。長軸方向は約N-20°-Eである。開口部の最大長は約3.1m、確認面からの深さは最深部で約70cmを測る。

SK-405

22S-53グリッドに位置する。南側にはSK-404が隣接するが、軸の方向は若干ずれている。開口部、底面の形状ともいびつであるが、細長く、いわゆる「Tピット」に近いものか。底面はかなり凹凸があり、一部は段になる。南側の上部は別の遺構に切られている。長軸方向は約N-0°である。開口部の最大長は約2.3m、確認面からの深さは最深部で約70cmとなる。

SK-406

22S-14・15・24・25グリッドにかけて位置する。開口部はやや変形してるが、いわゆる「Tピット」となろう。底面の東側には、約8cmの深さで溝状の落込みが存在する。長軸方向は約N-80°-Wである。開口部の最大長は約2.9m、確認面からの深さは最深部で約90cmを測る。

SK-407

22R-97・22S-07グリッドにかけて位置する。いわゆる「Tピット」である。長軸方向は約N-75°-Wである。開口部の最大長は約2.5m、確認面からの深さは最深部で約80cmである。

SK-410

23R-00グリッドに位置する。上部は溝によって大きく壊され、下部のみの残存していた。底面付近の形状からみると、いわゆる「Tピット」となろう。長軸方向は約N-80°-Wである。開口部の最大長は約2.3m、確認面からの深さは最深部で約50cmを測る。

第2節 前期の遺構・遺物

SK-409 (第20図, 図版11・201)

22S-38グリッドで検出された土坑で, 出土した土器から前期末葉の所産となろう。形状はほぼ円形を呈し, 壁は緩やかに立ち上がる。開口部の最大長は約1.2m, 確認面からの深さは約30cmとなっている。覆土堆積はブロック状を示しており, ロームブロックを含む黄褐色土が主体となっているため, あるいは人為的な埋土ということも考えられた。

遺物(第20図1) 前期末葉に位置する土器で, 器面全体に縄文が施文されるタイプである。底部は欠損し, 口縁から胴部にかけて約1/4ほどが遺存する。口径は推定で約25cmとなる。現存する器面では4段にわたりS字状の結節部が認められる。器面に施される縄文はRLで, 口唇部にまで及ぶ。



第20図 SK-409

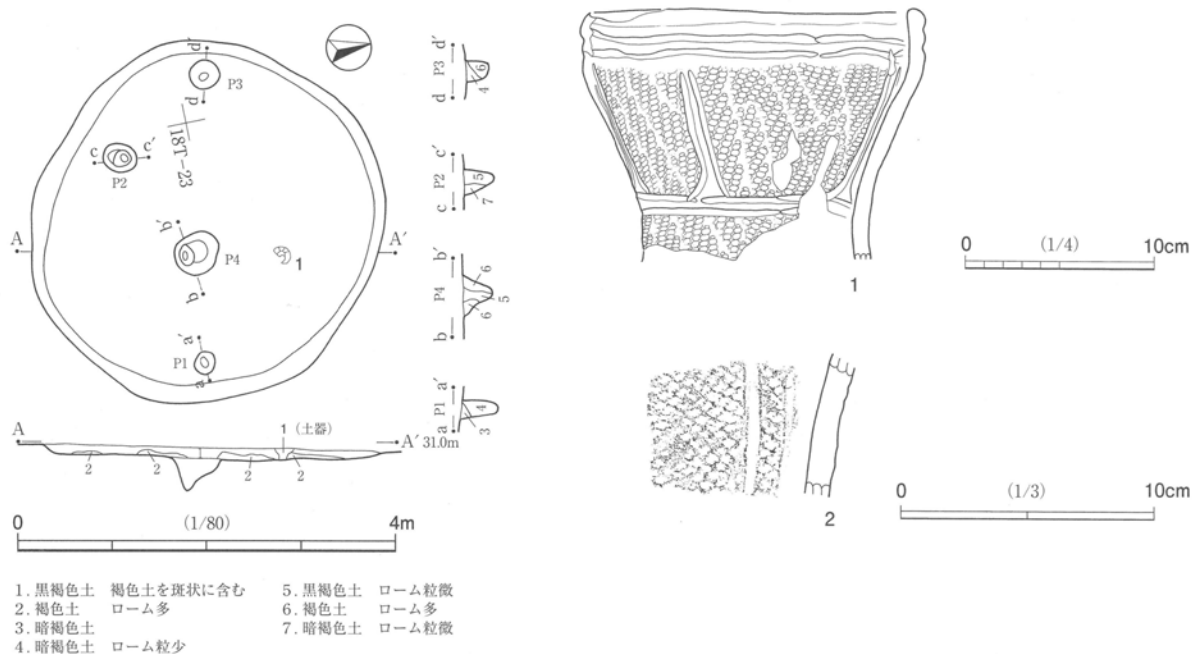
第3節 中期の遺構・遺物

1 竪穴住居跡

SI-112 (第21図, 図版12・200)

18T-12・13・22・23の4グリッドにかけて検出された住居跡である。出土した土器から, 中期後葉, 加曾利E式期前半の住居跡である。平面形はほぼ円形となる。残存した掘込みは10cmと浅く, 壁は緩やかに立ち上がる。とりわけ北側での立ち上がりは辛うじて認識できる程度であった。床面はやや凹凸があるものの, ほぼ平坦となっていた。ピットは4か所で検出され(P1~P4), いずれも30cm~40cmの深さで, しっかりと掘込まれていた。中央のP4は, 位置的には炉の可能性もあるが, 焼け跡や覆土中の焼土が認められず炉と断定するまでには至らなかった。住居跡の規模は, 最大径で約3.8m, 確認面からの深さは10cm前後であった。覆土は, 黒褐色土が主で, 床面上には褐色土がブロック状に堆積していた。

遺物(第21図1・2) 1はある程度の器形が窺える深鉢形土器で, 全周の2/3が遺存する。床面からやや浮いた状態で覆土中から正位で検出された。口縁部がやや開く器形で, 地文にRLの縄文が施される。幅広い口辺部文様帯は, その上下に2条の横位の沈線で区画される。この口辺部文様帯内では, さらに沈線で「U」字を描くように沈線を巡らす。縄文は単節LRを横位に回転させている。2はLRL複節縄文をもつ土器で, 2条の垂下する沈線が特徴的といえよう。加曾利E式期前半の土器である。



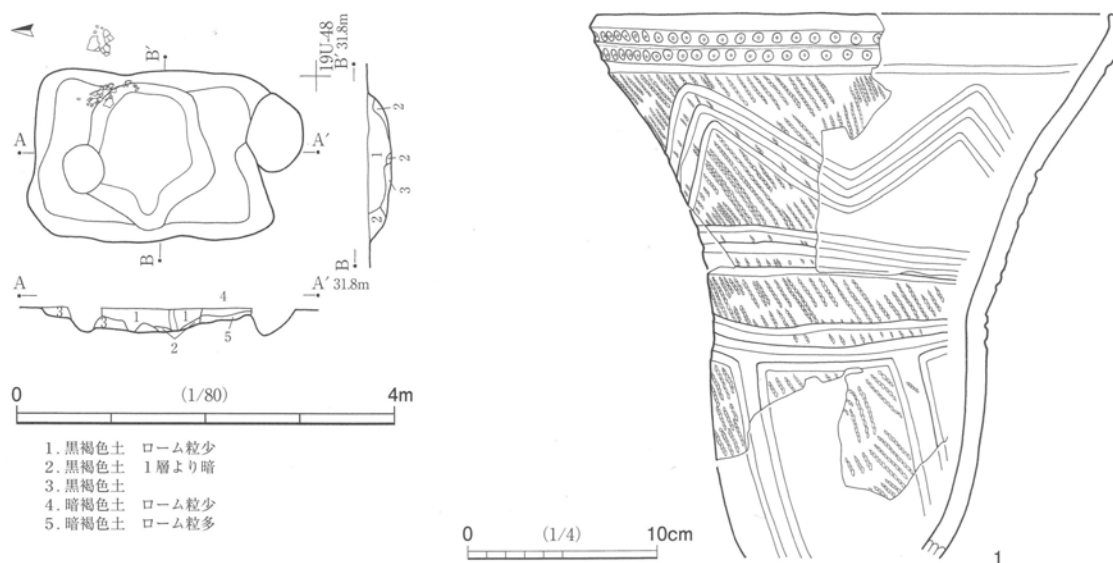
第21図 SI-112

2 土坑

SK-021 (第22図, 図版11・200)

19U-37グリッド内において検出された土坑である。出土した土器から、中期後葉加曾利E式前半期の所産といえよう。平面形は長方形に近く、中央部では不整形に一段低くなる。開口部長軸方向の最大長は約2.5m、確認面からの深さは25cmほどであった。覆土は、黒褐色土が主体の構成となっていた。

遺物(第22図1) ほぼ一括資料といえる深鉢が、北東部壁面と遺構外に隣接し集中した状態で検出された。底部を欠損するが、口縁部が外反するやや細身の器形を呈している。地文にはRの撚糸文が用いられ、基本的には3本単位の沈線で、平行・波状といった文様を描く。口縁端部の沈線には、上位の2条の沈線に重ねて丸棒状の工具による刺突が2列に整然と施される。



第22図 SK-021

第4節 後・晩期の遺構・遺物

1 竪穴状遺構

SK-306 (第23図・図版12・201)

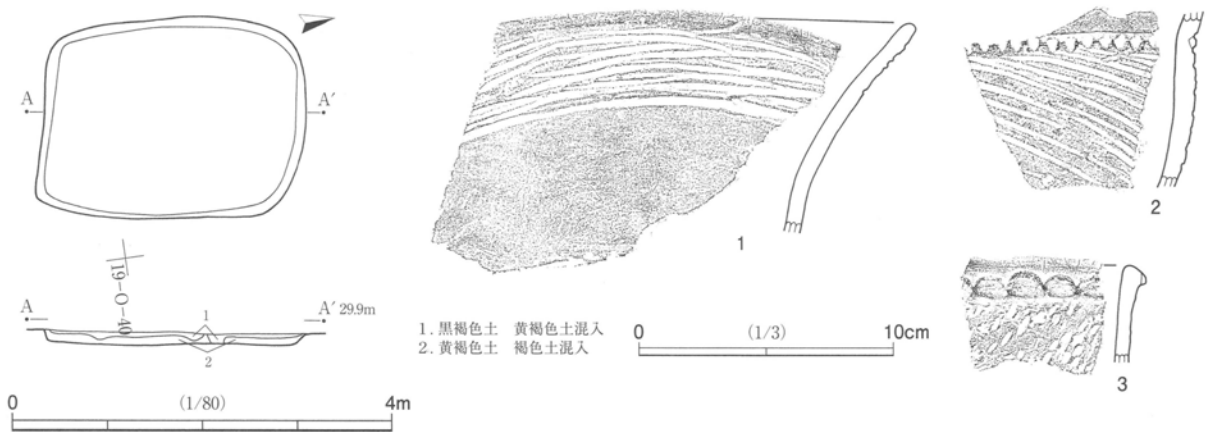
180-39・49グリッドにかけて検出された遺構であり、その規模や炉跡が存在しない点などから確実な住居跡とは断定できないため竪穴状遺構とした。出土した土器から、後期中葉加曾利B式後半期の遺構となろう。平面形は隅丸方形となり、残存する掘込みは浅い。壁は比較的しっかりとした立ち上がりを保ち、床面は平坦で全体に軟質であった。炉やピットなどの付属施設は検出できなかった。規模は、長軸方向で約2.8m、短軸方向で2.1mを計測する。確認面からの深さは約12cmと浅い。

遺物(第23図1~3) 1は明確な沈線で画された口縁部に、横位や斜位の沈線を充填させ文様帯を形成する。加曾利B 2式の中でも新しいタイプと考えられる。2も加曾利B 2~B 3式の土器で、1の胴下半部の可能性もある。3は加曾利B式の紐線文系の粗製深鉢の口縁部であるが、内面での沈線は認められない。

2 埋甕

SK-308 (第24図, 図版200)

190-11のグリッドにおいて検出された埋甕である。埋設された土器から晩期前葉の遺構となろう。その位置は第15図に示したように、SX-028とした後晩期の遺物集中地点に隣接している。形状は、ほぼ円



第23図 SK-306



第24図 SK-308

形を呈しており、長径は50cm、短径は45cmと小規模なものであった。さらに掘込みは15cm前後と浅く、埋設された深鉢の上部は耕作によって失われていた。また周囲の覆土中には焼土粒の混入（トーンにより図示）が確認できた。なお、調査時には炉の可能性を考慮し、周囲を精査したが柱穴などは確認できなかった。

遺物（第24図1・2） 1は埋設されていた土器で、精製深鉢の遺存下半部である。器面は底部付近にまで縄文が施され、沈線での区画が認められる。その間では磨消縄文による文様が展開する。型式の決め手ともなる口縁・口辺が失われているため、ここでは晩期前葉の土器としておきたい。2は複合口縁を持つ小破片で、粗雑な条痕文が認められる。時期は晩期末葉で粗製土器とも考えられる。

3 土坑（第25図，図版12・201）

SK-038

19T-42グリッドに存在し、出土した土器から後期中葉加曽利B式期の土坑とも考えられた。南側の壁面をSB-046掘立柱建物跡の柱穴痕によって壊されている。平面形はほぼ円形を呈し、北～東壁の立ち上がりはしっかりしていた。底面はほぼ平坦で、小ピットが1基存在する。規模は、開口部の最大長で約1.8m、確認面からの深さは約20cmとなり、底面小ピットの深さは10cmと浅い。覆土は暗褐色土主体で、自然堆積によるものと思われた。

遺物（第25図1） 加曽利B式の胴部破片が1点のみ出土した。粗製土器で器面にはLRの粗い縄文がみられる。

SK-055

23P-94グリッドに位置し、出土した土器から後期後葉の土坑となる可能性が高い。開口部の平面形は楕円形に近いが、断面形では2つのピットの傾斜から上部では連結していたようにも思われる。断面図は図化しなかったが、覆土はロームブロックを含んだ暗褐色土が主体となっていた。開口部の最大長は約2m、確認面からの深さは最深部で約1.2mと深く、土坑としてはピットの規模が大きい。

遺物（第25図2～4） 2は後期安行式の紐線文系粗製深鉢である。3は、その遺存部から台付鉢と考えられる。4も安行式の粗製深鉢で、底部に近い破片となろう。

SK-305

18O-49・19O-40のグリッドにかけて検出されたものである。本跡も出土した土器から後期後葉の土坑と思われた。位置的には後期後葉の遺物集中地点SX-028の範囲内といえよう。平面形は、ほぼ長方形となり、壁は緩やかな立ち上がりとなるもののしっかりしていた。開口部での長軸方向最大長は約1.6m、確認面からの深さは約40cmを計測する。覆土の堆積は乱れており、人為的な埋土の可能性も否定できない。遺物（第25図5・6） いずれも後期安行式の紐線文系粗製深鉢である。5は肥厚した口縁部が特徴的で薄い紐線状の粘土紐を貼付している。6は胴部片で横位の条線を引き、2条の沈線を垂下させている。沈線間での磨り消しまでは認められない。

SK-618

21O-17グリッドに位置し、出土土器から後期から晩期の土坑とみられる。平面形は楕円形となり、底面ではやや凹凸が認められた。底面のほぼ中央には小ピットが穿たれている。開口部の最大長は約1.8m、確認面からの深さは約55cmを計測し、小ピットの深さも約30cmと深い。

1 SX-026 (早期前葉遺物集中地点) (第26~32図, 図版202~206)

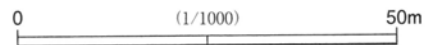
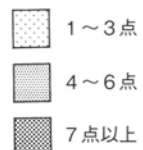
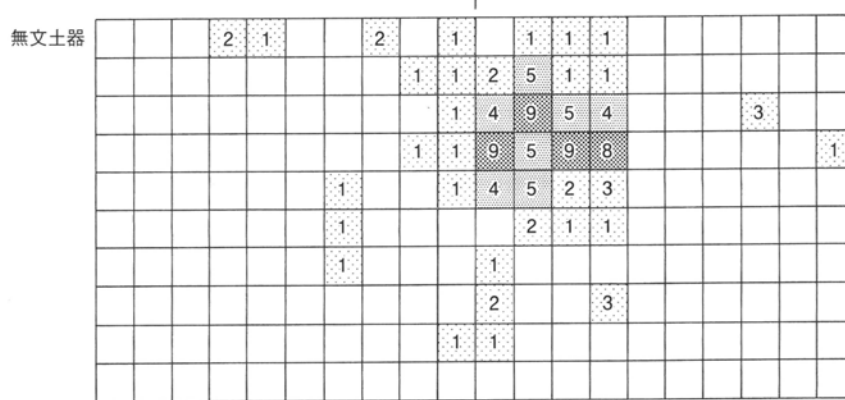
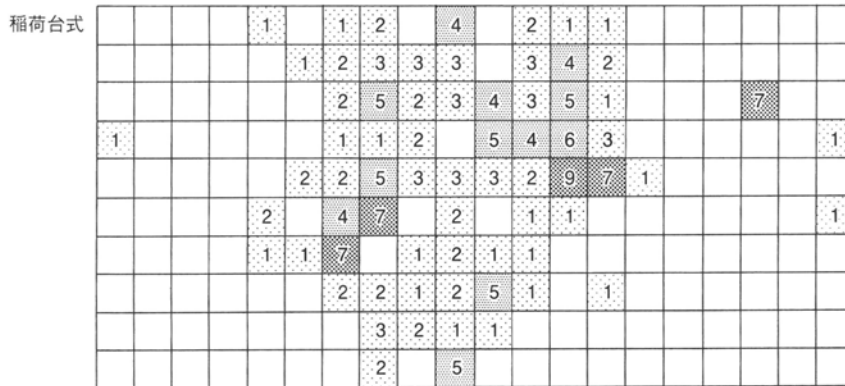
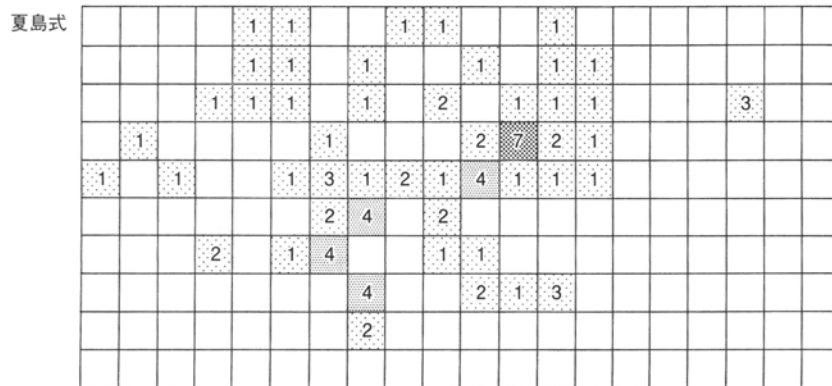
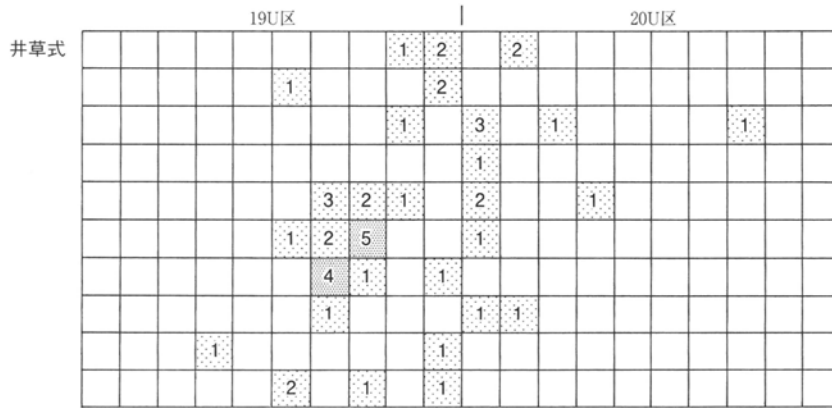
本地点における撚糸文系土器群は、図示したように19・20U区で濃密な分布が認められた。とりわけ19U-56・66の2グリッドでは型式として識別できない土器群を含めると、43点、40点という出土数を記録し、20U-12・21・32の3グリッドからはこの時期に伴う小型土偶3点の出土をみた。詳細は、土製品の項で触れることにするが、大量の土器群と土偶の存在を考慮すれば、本地点は撚糸文期の人びとによって生活の場として機能していたことが理解できる。また後述するようにチャートの剥片も多量に出土しており、石器製作も同時におこなわれていた可能性も否定できない。

出土土器群の内容についてみると、本地点では撚糸文系土器群が圧倒的に多く、中でも量的には稲荷台式が主体となり、次いで夏島式、井草式と続き、僅少なながら花輪台式土器も出土している。それ以降の土器群については、断片的に早期の条痕文系土器、前期の浮島系土器、中期の加曾利E式土器、後期の安行系土器等が散見できたが小破片ということもあり図示については省略した。

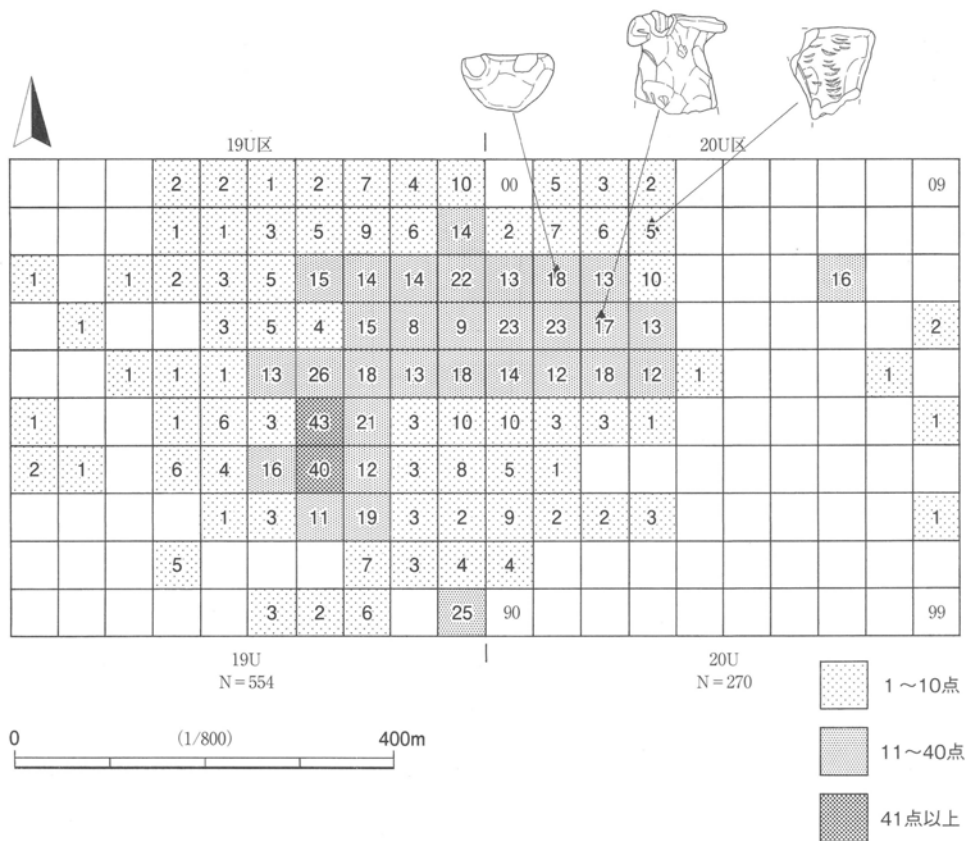
1~47は、口唇部に縄文等が施文され、肥厚・外反した口縁が特徴的な土器群を一括した。これらは撚糸文期でも初期に位置づけられる井草式に比定されよう。なかでも1・2は古式の様相を呈している。これらの口唇部成形についてみると、粘土紐の貼付(1~4・7~10・12・14・17・18・39)や口縁端部を折り返す(5・6・11・13・15・19・21・23・48・49)ことにより肥厚した口縁部の作りが特徴的となる。その他は口縁端部を単に外反させるものが多い。また口縁直下には指頭などによる連続的な押捺(1~8)も認められる。縄文の施文は、口唇部と胴部に施されるタイプが主体となっているが、口縁直下に横方向に施文するタイプ(1・2)も存在する。器面への施文では、適度に乾燥する前に施文したものか縄文が押し潰されているようなもの(22・41)もある。撚糸の原体についてみると、大半が単節でありRL(10・12・14)、LR(1~3・11)の両者が存在し、それほど偏りは認められない。これらの中には補修孔も認められる(11・15)。胎土は精選されており、若干、雲母・白色鉱物・小石などを含む。色調は赤褐色ないし褐色を呈しており、焼成は概して良好といえる。

48~53では口唇部及び胴部には撚糸文が施文される。原体には無節のL(49・53)とR(48・51・52)の二種が用いられている。なお、53は3点が接合し、他にも同一個体とみられる小破片も存在したものであり、推定口径は約32cmを計測する。これらは大丸式と呼称される一群となろう。胎土は精選され、色調は49・53が黒褐色、他は褐色となる。焼成は良好である。

54~106は縄文施文を主体とした一群を一括した。型的には夏島式から稲荷台式の中に入るものである。器面には縄文を縦方向に施文し、とりわけ54~74では縄文の間隔は密である。次いで75~88ではやや疎らな縄文となり、89~106では甚だ縄文の間隔の粗いものとなる。口唇部の成形をみると、平坦なもの(55)やそれに近いタイプ(54)も存在するが、丸味を呈したタイプが一般的といえよう。口縁部の作りは、その端部をやや外反させるもの(57~59・61・62)よりも、ほぼ垂直に立ち上がるタイプが主体を占める。縄文の施文をみると、口唇部直下から原体を回転させることが多く、これは口縁部の成形に起因するものと考えられる。原体について観察すると節の大小、縄文の間隔が密(56~58・60・67)と粗(88・90・91)など様々な要素が認められる。なかには無節のRを斜め方向に回転させているもの(65・66・87)もある。ここでも孔の穿たれている口縁部片が認められた。75は右側破損部に径3mmほどの補修孔が表裏両面から穿孔されている。また、105は器面を大きく抉っているものの貫通までには至っていない。また65・66は撚糸文に近い縄文を施文し、74・75・82、76・77は、僅かにしか痕跡を残さない縄文と胎土や色



第26図 SX-026型式別出土状況 (口縁部個体数)



第27図 SX-026撚糸文系土器と土偶出土地点

調から同一個体と考えられる。胎土についてみると、概して精選されているが小石・雲母等の混入されたもの（82・86・92・99・100）も少なくない。色調では、焼成時に炭化材等の影響で黒褐色を呈したもの（73～77・82）を除くと大半は褐色ないし淡褐色となる。ただ82のみは濃赤褐色となる。これらの焼成は概して良好と見受けられた。

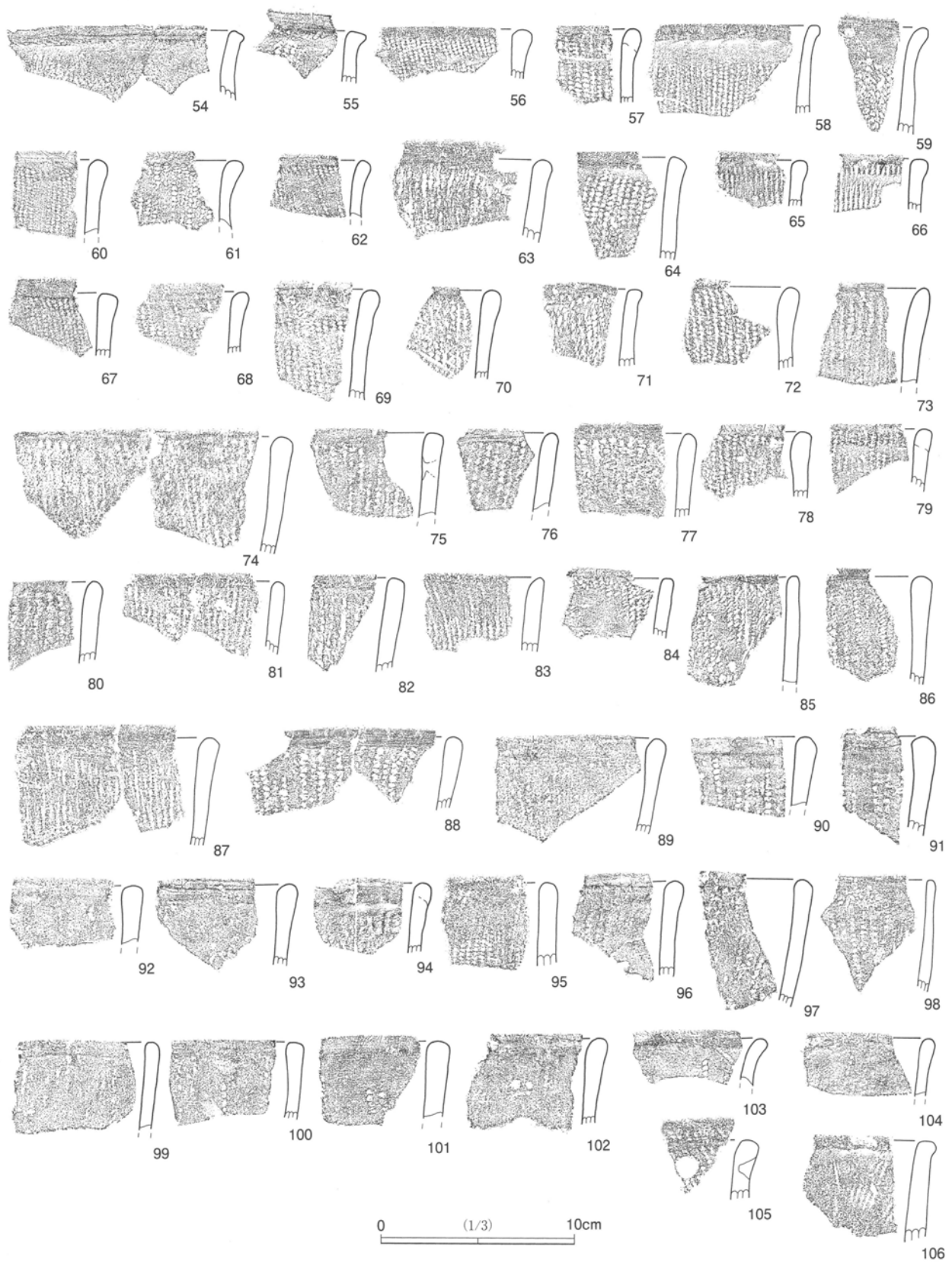
107～184は、器面を撚糸文によって飾られた一群で、原体やそれを巻きつける間隔に変化をもたせ、文様としての表現を豊かなものとしている。これらは夏島式を若干含むものの、その主体は稲荷台式土器の範疇に入るものと考えられる。ここでの口縁部の成形は、粘土紐の貼付を思わせるようなタイプ（107）や折り返しによる端部の肥厚（108）、やや外反するタイプ（108～113）も若干認められる。古式の様相を示すものといえよう。他の口縁部は、ほとんど垂直に近い立ち上がりを示す。また、これらの中には胎土・色調等により同一個体と考えられるものも存在する。110・111、116～118、122～125、128・129、144・145がこれにあたる。ここで使用されている撚糸の原体は、採拓個体数70に対し、無節のRを使用したもの62点、無節のLを使用したもの5点、判別しがたいもの3点（142・158・181）となり、圧倒的に無節のRを用いた撚糸文が卓越していた。また、いずれも小破片であるが、補修孔の認められるものが3点（146・154・160）存在する。穿孔については表裏から穿つ場合が多いが、160の例では表面のみからの穿孔である。これらの胎土についてみると、小石や雲母・白色鉱物等が含有されているものが多く、133・142・152では小石の混在が顕著であった。色調は、概ね淡褐色・褐色・赤褐色で占められていたが、焼成時に起因したものであろうか119・140・141・144～146・163・171では部分的に黒褐色部が認められた。焼成についてみると、大半は良好といえたが161では表裏に剥落が認められた。なお、182～184は胴部片



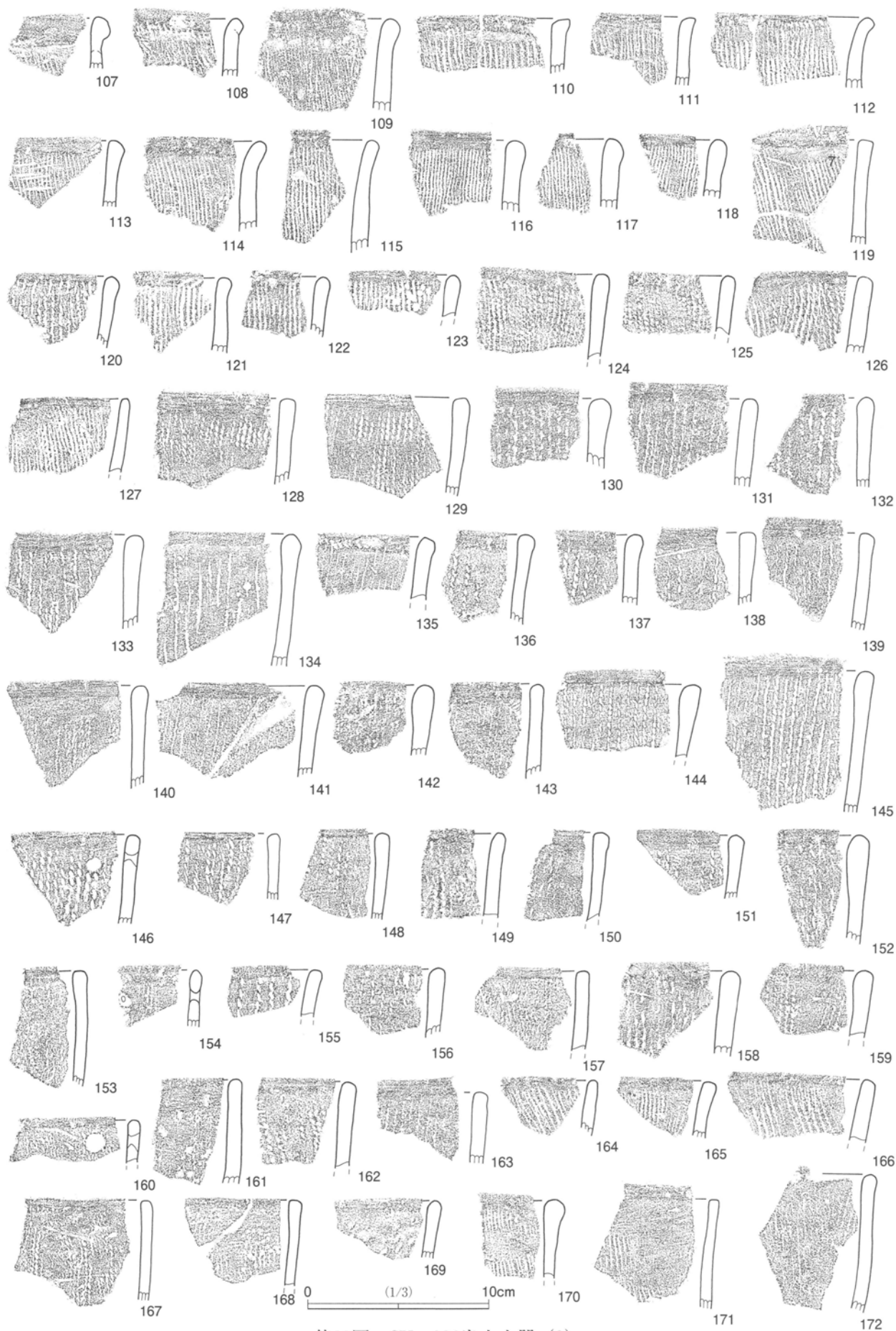
第28図 SX-026出土土器 (1)

であるが、大形の破片であるとともに施文にやや太い原体L (182) とR (183) を使用した類例として掲載した。184は4点が接合した例で、細い原体Lを密に巻きつけて器面全体を施文している。一部には整形のための磨り消しも認められる。胎土には僅かに雲母・白色鉱物を含み、褐色を呈し、焼成も良好である。

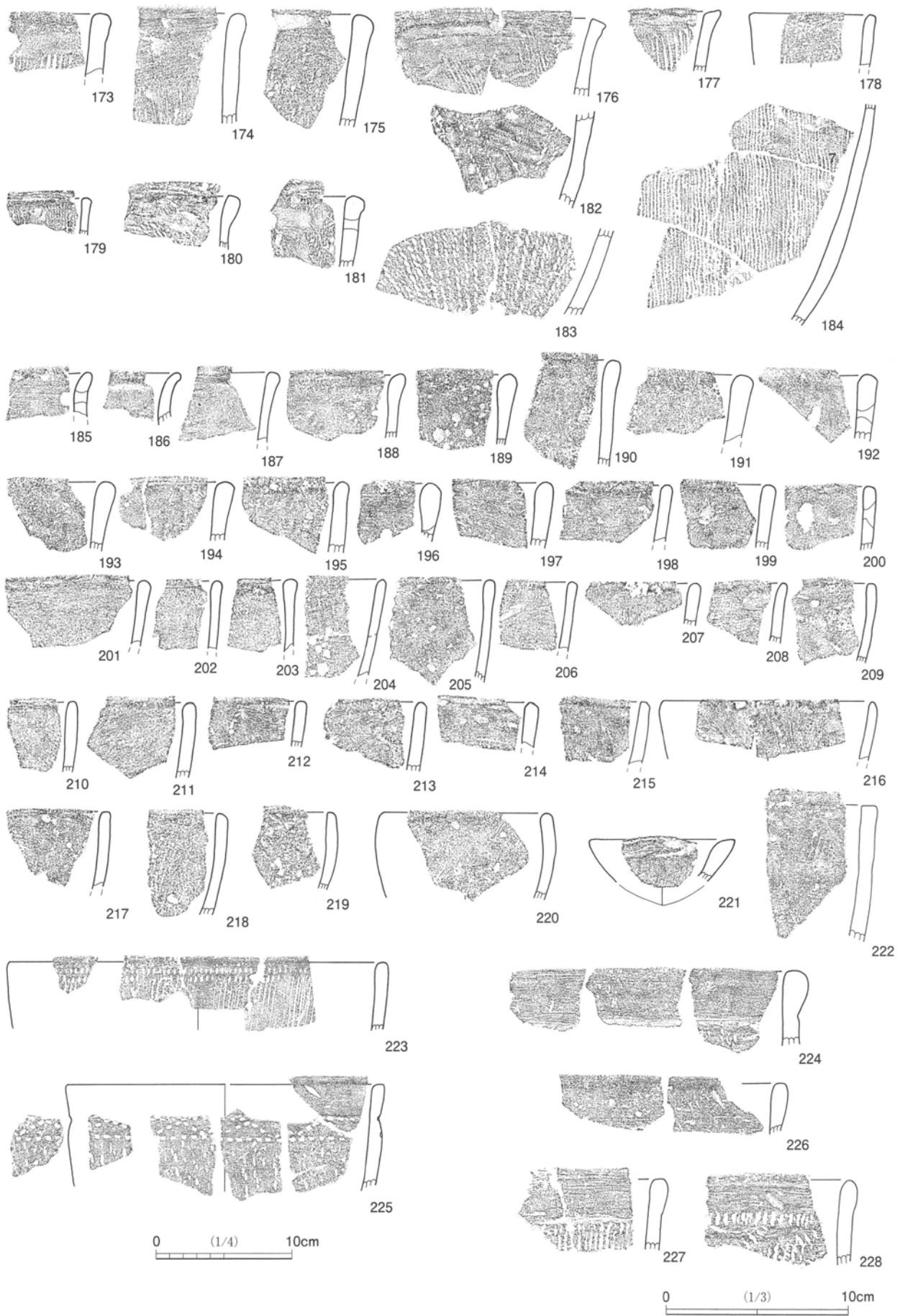
185~222は、無文土器を一括した。口縁部のみ38点について図示したが、202・203と218・219は接合に



第29图 SX-026出土土器 (2)



第30图 SX-026出土土器 (3)

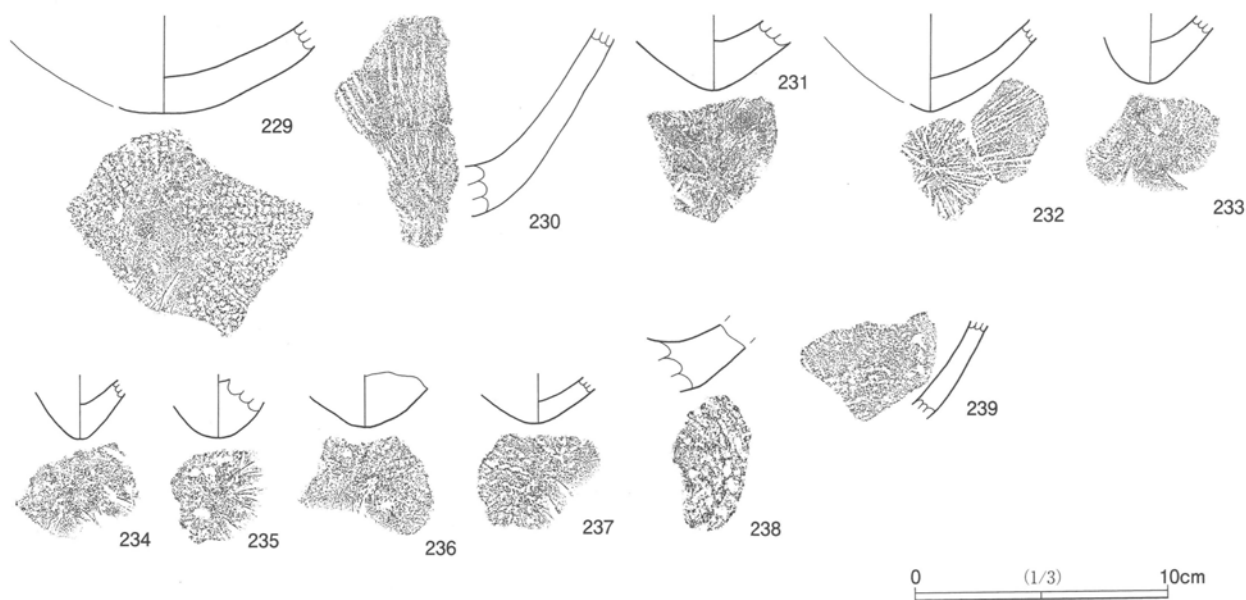


第31图 SX-026出土土器 (4)

は至らなかったが、色調や器面の整形・胎土の観察から同一個体と思われた。これらは無文であるため形式的としての具体性には欠けるが、口縁部の成形からみて夏島式～稲荷台式に属するものが主体となろう。ここでも補修孔の設けられたものが4点（185・192・196・200）と穿孔途中のもの（209）が出土している。

口縁部の成形をみると、185～187は明確に外反する口縁となるが、他はほぼ垂直に立ち上がるような形状を示す。器面についてみると、ヘラ状工具により縦方向に整形痕が残るもの（202・203・218・221）もある。器形に付いてみると、216・220・221は口縁部の外形から口縁径を推定したものであり、いずれも小型品となろう。その他に217～219も内面の反りから小型品と推定される。いずれにせよ小型品の場合、施文面積も少なくなるため無文品が多くなることは十分考えられるところである。胎土には小石・石英・雲母などがみられ（188・190・191・201・213・217・222）、これらの器面は一部に剥落を認めることができた。色調は、188・194が黒褐色を呈し、他は赤褐色ないし褐色を呈していた。焼成では概して薄手タイプに良好なものが多い。

223～228は、間隔の粗い撚糸文と、口縁部と胴部を区画するかのごとく押圧された縄文が特徴的である。また口縁部の成形では、丸味を有し肥厚した口縁部下をやや「く」の字状に成形する。これらは花輪台式土器の特徴を備えたものである。223は推定口径28cmを計測し、口縁直下に二条の押圧縄文が巡る。おそらく撚糸を巻きつけた棒状工具を押しつけたものであろう。ここでの押圧は撚糸文を施文後に施している。同様な圧痕は228でも認められる。224は丸味を帯びた口縁部の作りに特徴がみられる。225は小型の深鉢となる。推定口径は23cmを計測する。口縁直下に二条の刺突を巡らせ、その間に刺突による山形文を描く。以下は間隔の粗い撚糸文を配する。ここでの使用されている撚糸原体は、225では明確な節が観察できるため巻きつける棒状工具が変形したものと考えられる。撚糸原体には無節のLを使用しているようである。他の223・227・228は、すべてRの撚糸文である。胎土は、224～226では小石・白色鉱物を多く含有していた。器面の色調は、225・226が暗褐色、224・227・228が褐色、223は明褐色を呈している。焼成についてみると、225・226は器面に剥落が認められ若干劣るようである。



第32図 SX-026出土土器 (5)

229～239は尖底部及びそれに近い破片を一括した。時期的には前述した井草式以降花輪台式までに相当するものであるが、尖底部の小片だけでは断定しがたいところである。これらの中には丸底に近いもの(229)や明確な尖底を示すもの(230・234)などがある。図示した底部を施文で分類すると、縄文施文(229・236・238)と撚糸文(230・232・237)に分けられるが、他の4点は無文か底部のみ無文か判然としない。ただ235の胎土には繊維が含まれており、撚糸文期以後の所産となる。

2 SX-027 (早期後葉遺物集中地点) (第33～36図, 図版206・207)

SX-027は整理の過程において、早期後葉の土器群が20V区で極めて多量に出土していることが判明したため、遺物集中地点と認識して整理をすすめてきた。土器の出土状況は20V区の中でも、特に北西の部分に遺物が集中したため、この状況を図化(第33図)してみた。この地点には早期後葉の土坑と考えられるSK-116・117が存在し、その周辺に多量の土器が出土していることが理解できた。また、明確な掘込みは認められなかったが、焼土が数か所に分布していたため、これらの遺構に関連してSX-027遺物集中地点が形成されたものと思われた。一方、SX-027の存在する地点は谷に向かう斜面部に位置するため、台地上からの土器の投棄の可能性もあったので、土器の接合関係について点検してみたが、斜面上からの投棄を示すような結果は得られなかった。

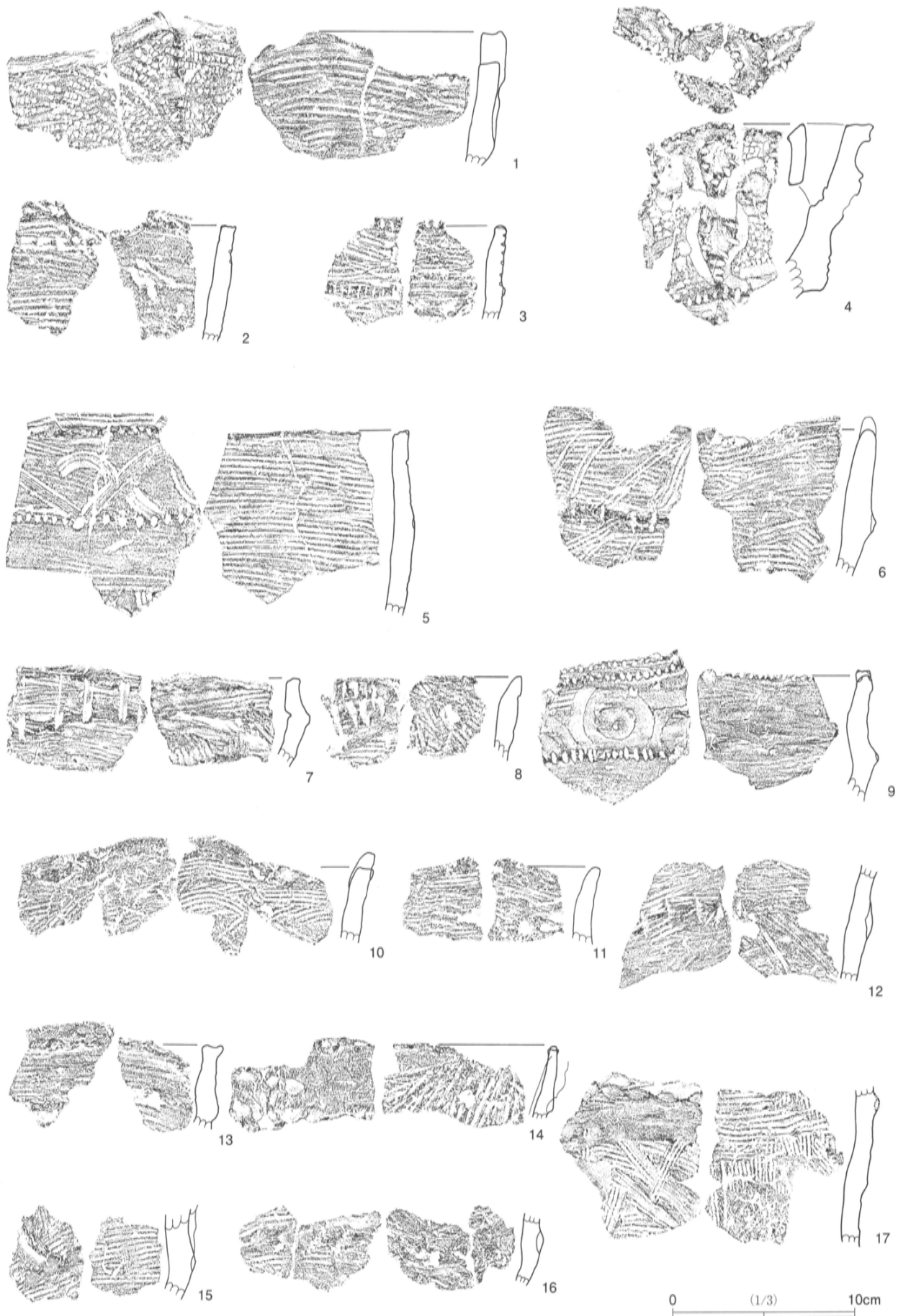
SX-027を含む20V区出土の早期後葉の土器群は、破片総数1,878点で、このうち口縁部破片は218点、底部破片は77点を数えた。その後の整理の進捗で、接合や、同一個体の認定などがあったため破片数、口縁部数とも若干数を減じているが、概ねその個体数は把握できよう。口縁部破片のうち、条痕以外に何らかの文様を有する土器は140点であった。図化した土器は34点あり、有文破片のほぼ2割弱を図化した。これらの土器群は、形式的には早期後葉の条痕文系土器の中でも、広義の茅山式の後半にあたる茅山下層式以降に位置づけられる土器となろう。茅山下層式は型的にも特徴が多く判別が容易となる。これに対し茅山下層式に後続する茅山上層式は、もともと文様が少ないことを特徴とする型式で、その認定が難しい土器でもある。広義の茅山式全般にわたって、有文の土器以上に地文のみの土器が多く出土することとも関係し、文様以外の器形などでもある程度判断が可能となるが、破片で茅山上層式と判定することは難しい場合が多い。そうした要因とも相まって、千葉県内においては竪穴住居などの確実な出土事例は増えておらず、型式としての土器群の内容は未だ判然としない。このため茅山下層式の新しい時期の土器が少数存在するものの、多くは茅山下層式ではあまり一般的ではない文様や、文様の簡素化傾向を窺えるものが多い。器形でも段とくびれが形骸化し、口縁部文様帯が狭い土器が多く、より茅山上層式に傾斜しているようである。すべての土器が確実に茅山上層式だと判断することには躊躇するものの、一部の土器を除き、ここでは茅山上層式の可能性が高い土器群であることを指摘しておきたい。

1～9は器面に文様を有する土器群である。1～3は刺突文・押引文を有するものである。1は口縁部に密な連続刺突を施すもので、茅山下層式の範疇であろう。2、3は部分的に押引文が認められるもので、狭い文様帯や、段の形骸化は茅山上層式的である。4は環状の把手を持つ土器で、指頭状工具を用いた凹線文間に刺突文を充填する。茅山下層式である。5～9は沈線文をもつ土器である。5は浅い幅広の沈線により幾何学状の文様を描く。2段の文様帯を持つことは茅山下層式的であるが、段とくびれは明らかに形骸化している。6は隆帯で下端を画されたやや狭い口縁部に、半裁竹管による斜位の沈線を引く。茅山上層式と判断して差し支えない土器である。8、9も極めて狭い口縁部文様帯に、短沈線による文様を持

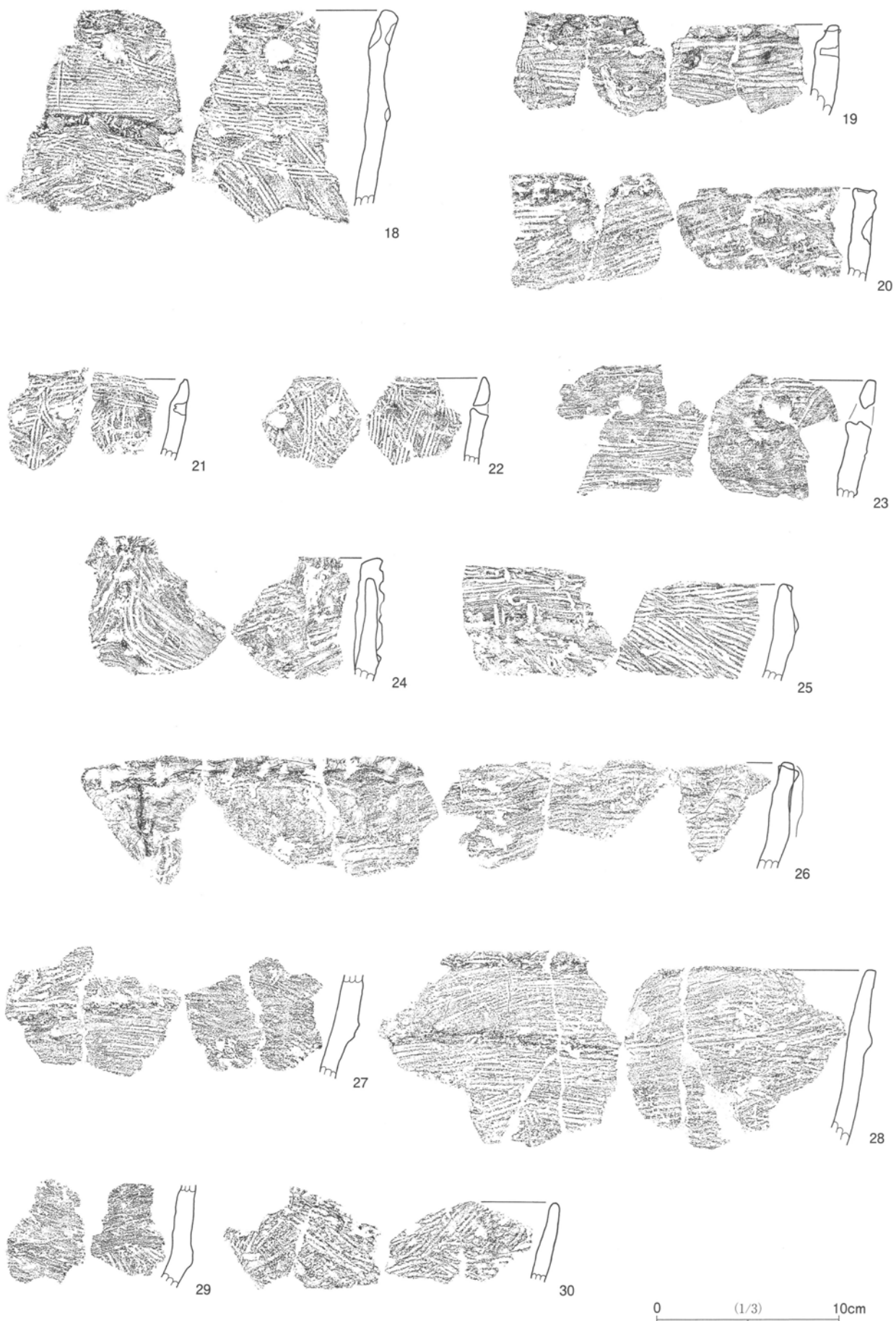


2. 黒褐色土 (遺物包含層)
 3. ソフトローム

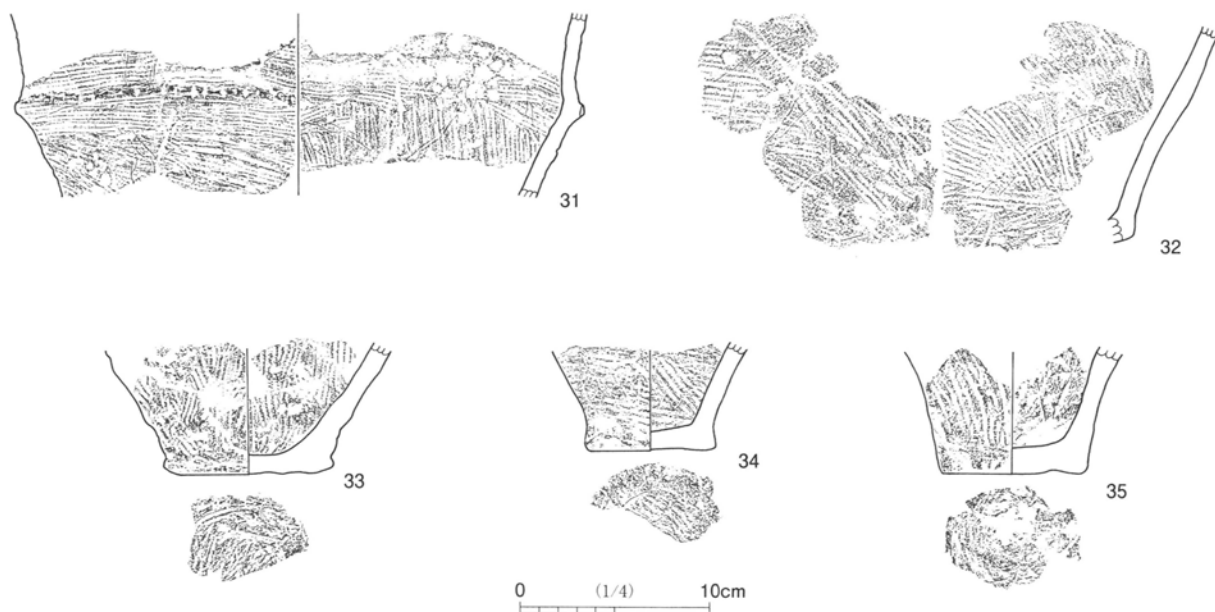
第33図 SX-027遺物出土状況図



第34图 SX-027出土土器 (1)



第35图 SX-027出土土器 (2)



第36図 SX-027出土土器 (3)

つもので、茅山上層式の可能性があるろう。7は指頭状工具を用いた凹線文の土器で、段も明瞭なことから茅山下層式であろう。

10～15は貝殻を用いた文様をもつ土器である。文様に貝殻を用いることは、条痕文自体の施文具が貝殻の場合が多いことを考えれば、広義の茅山式の中でも新しい文様要素というわけではない。ただし、鶴ヶ島台式や茅山下層式では沈線や押引文などと併用される場合が一般的で、貝殻文だけが主要な文様要素となることは少ない。10～15の場合は、貝殻文が単独で用いられており、この意味では茅山下層式以後のあり方を示す可能性がある。また、時期的に後続する早期末葉の「打越式」や花積下層式では貝殻文が単独で多用されることから、貝殻文が、茅山上層式に存在することは不自然ではなからう。10～12は肋脈のある貝による貝殻腹縁文を持つものである。10は貝殻腹縁文で山形ないし菱形を構成する。11は横方向の貝殻腹縁文を、縦に連続する。12は隆帯上の刻みに貝殻腹縁文を用いている。13～17は肋脈のある貝の貝頂部圧痕文を持つものである。13は口唇上に貝頂部を交互に押圧する。14は口縁部に垂下する隆線の周囲に、集中して多数の貝頂部の押圧を施す。15～17は隆線上に貝頂部圧痕文を連続させるものである。

18～23は土器焼成以前に穿たれた円孔文を持つものである。円孔文を有する土器は、より時期的に遡る子母口式にもみられるが、広義の茅山式の中にも少数認められるようである。最近報告された八千代市間見穴遺跡では、確実に鶴ヶ島台式、茅山下層式に比定できる土器で焼成前に円孔が穿たれる土器が複数例確認できた^(*)。少なくとも印旛沼南岸の地域では、円孔文が広義の茅山式の中で、継続して用いられた可能性が高い。ただ、間見穴遺跡の土器に見られた円孔文は、比較的丁寧な穿たれ、大きさも均一であったのに対し、18～23の円孔文は大きさにばらつきがあり、貫通しているものとしていないものが存在し、より雑多な印象を受ける。18・19は円孔文と貝頂部の圧痕文を併用する土器であり、文様からこれらの土器の編年的位置が、茅山上層式期である可能性を示唆するものとならう。18は爪痕が観察できることから、

※ グリッド出土ながら口縁部破片で3点出土している。径は約3mmと小さい。

大内千年ほか 2005『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書4-八千代市間見穴遺跡(2)-』(助千葉県文化財センター)

おそらく指で土器の内外面をつまむようにして、円孔状にしている。孔は貫通しない。口縁部を画する隆帯上に貝頂部圧痕文を連続させる。19は土器の外面から棒状工具により刺突をおこなうが、貫通させず、土器内面の孔の部分は円形に盛り上がっている。20は未貫通の大きな円孔を持ち、やはり土器内面の孔の部分は若干盛り上がっている。口唇上には半截竹管の内側を用いた連続刺突を施す。21・22は、19と同様に、未貫通の小さな円孔を持つ土器で、やはり土器内面の孔の部分が盛り上がる。22の孔の一つは、貫通してしまっている。21は貫通する大きな円孔を持つものである。ともに施文具や色調等から同一個体の可能性が高い。

24・25・31は刻目を持つ隆線以外に文様を持たないものである。24は波頂部の破片で、波頂部から隆線が垂下し、口縁部を画する隆線に繋がる。隆線で画された口縁部は狭く、茅山上層式的である。25も同様に隆線で画されたごく狭い口縁部を持つ土器である。31は図上で器形を復元した土器で、ややしっかりした段を持つ土器である。

26～29は隆線のみを持つ土器である。26は口唇上に刻目を持つ。30は条痕のみを持つ土器である。32～35は底部破片をまとめた。33～35は比較的安定した平底である。

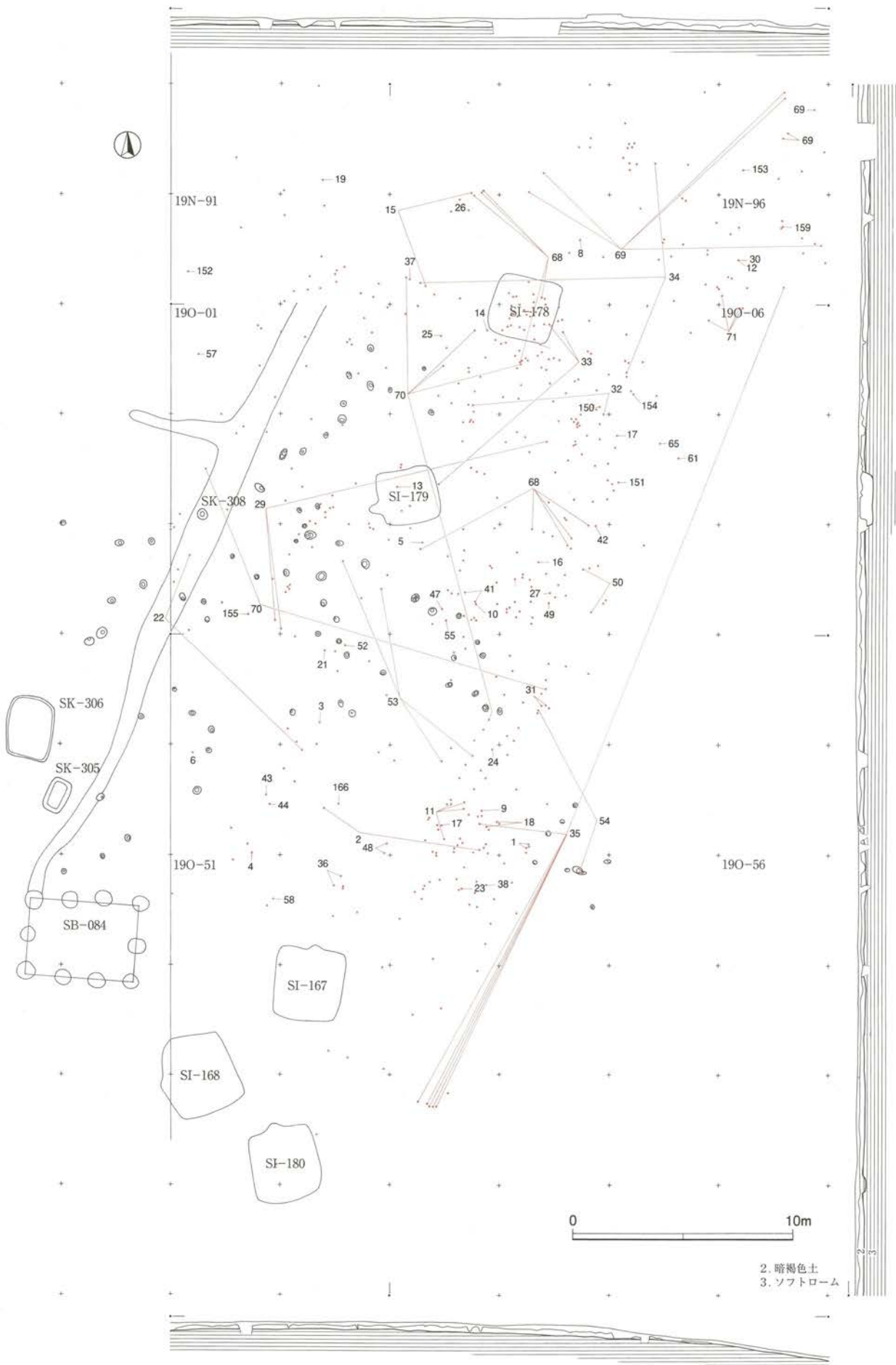
3 SX-028 (後期後葉遺物集中地点) (第37～46図, 図版208～216・227)

本地点は、土器のみならず石器群も大量に出土した地点で、グリッド配置図でいえば190区を中心として土器・石器が濃密に散布していた。出土土器の主体は後期後葉に位置づけられる安行Ⅰ・Ⅱ式で構成され、土器以外の遺物(第82・83図)としては土偶の頭部と耳栓が各1点と少ない。また本地点での調査は遺物集中地点と認識し遺構の存在を想定しつつすすめてきたが、明確な遺構を検出することはできなかった。しかし出土遺物の量から考えると、本遺跡における縄文時代人の活動の中心は、この後期後葉にあったとみて大過なからう。当然、住居跡などの遺構が存在したものと考えられるが後世の人びとの活動の結果失われてしまった可能性が高い。

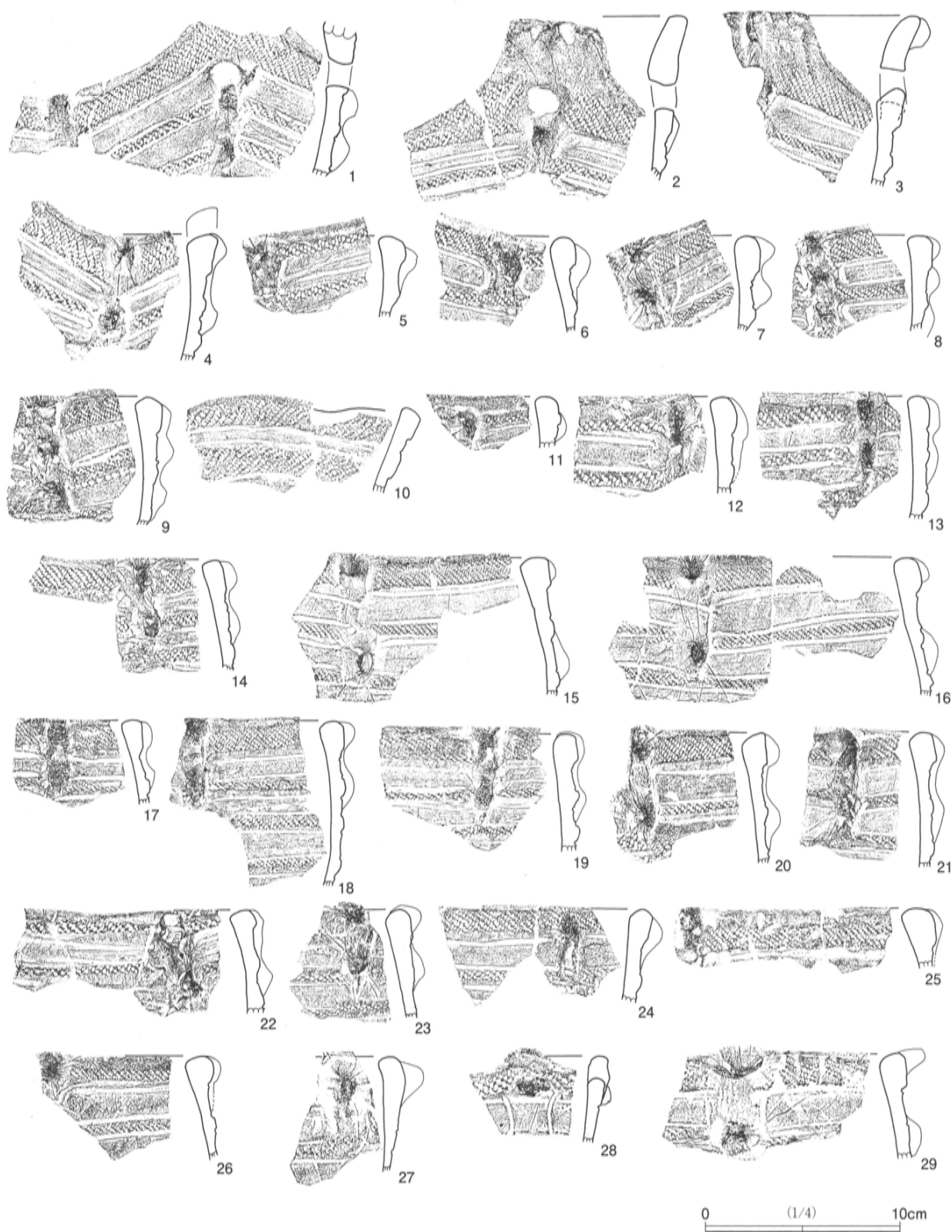
その証左としてピット群(第37図)の検出をあげることができる。グリッドでいえば、190-22グリッドを中心に径約20mの範囲に80口以上のピットが検出されている。しかも190-11グリッドでは、浅い掘り込みではあったが深鉢形土器を埋設した埋壘(SK-308)が発見され、一層、住居跡等の遺構の存在を想定させた。しかも上層では土器・石器が集中的に出土しており、調査を慎重にすすめたにもかかわらず明確な遺構は先に述べた埋壘と竪穴状遺構(SK-306)、土坑(SK-305)のみにとどまった。しかし本地点における後期後半は、縄文期のうちでもっとも人びとの活動が活発であったことは間違いあるまい。

本地点での出土土器は、安行系土器群が他を圧倒していたため、ここでは安行系土器群を中心に記述し、他の土器群については後述するグリッド出土土器として取り扱うこととしたい。

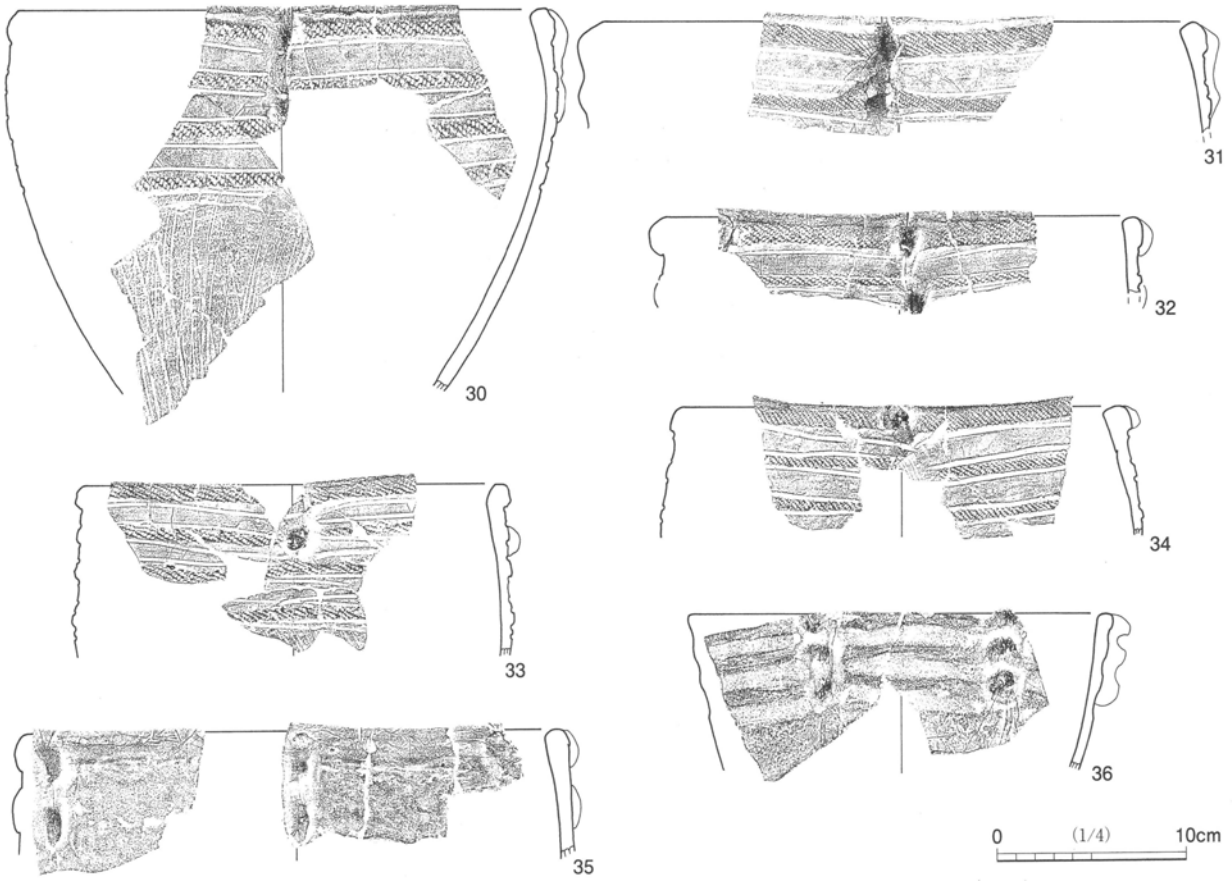
1～36は、帯縄文と口縁直下に瘤状突起を有するタイプで安行Ⅰ式の特徴をよく表現している。その中でも1～4はいわゆる扇状把手を4か所にもつ深鉢である。把手には径15mm程の孔(1～3)を認めることができる。以下5～9までは扇状把手ほど明確ではないが、口縁は波状に近いものとなる。10～29は平縁の口縁が主となるが、14・15・22などは波状に成形されたものと考えられる。30～36は平縁ないしは僅かに波状や山形に成形された口縁部をもち、胴部以下に浅い条線文が施される。胴部以下は欠損しており、推測となるが、30と同様な条線文が付されているものと思われる。これらの土器群に使用されている縄文原体は単節のRLで、35・36の口縁部では縄文は認められない。色調は赤褐色ないし黒褐色であり、焼成



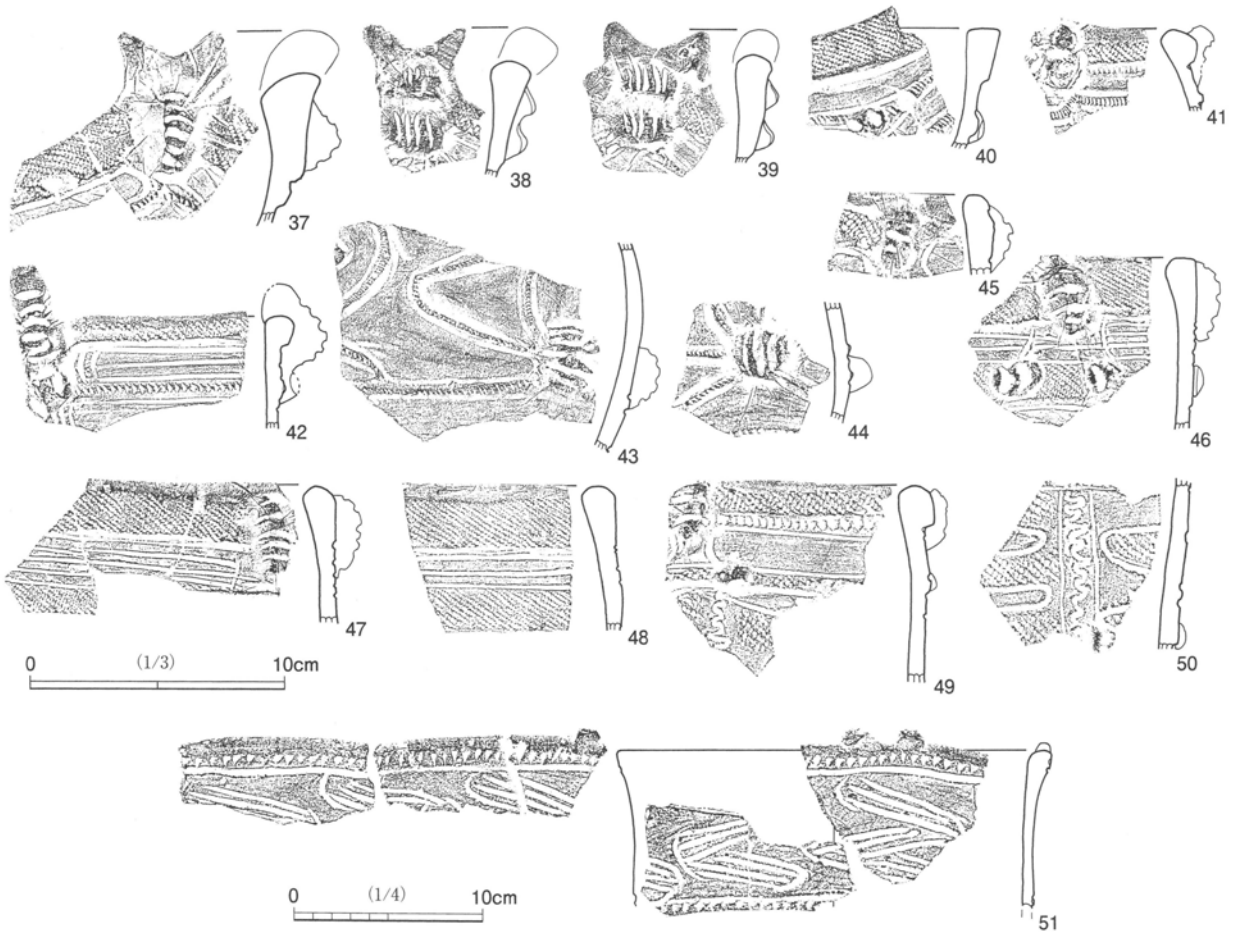
第37図 SX-028遺物出土状況とピット群



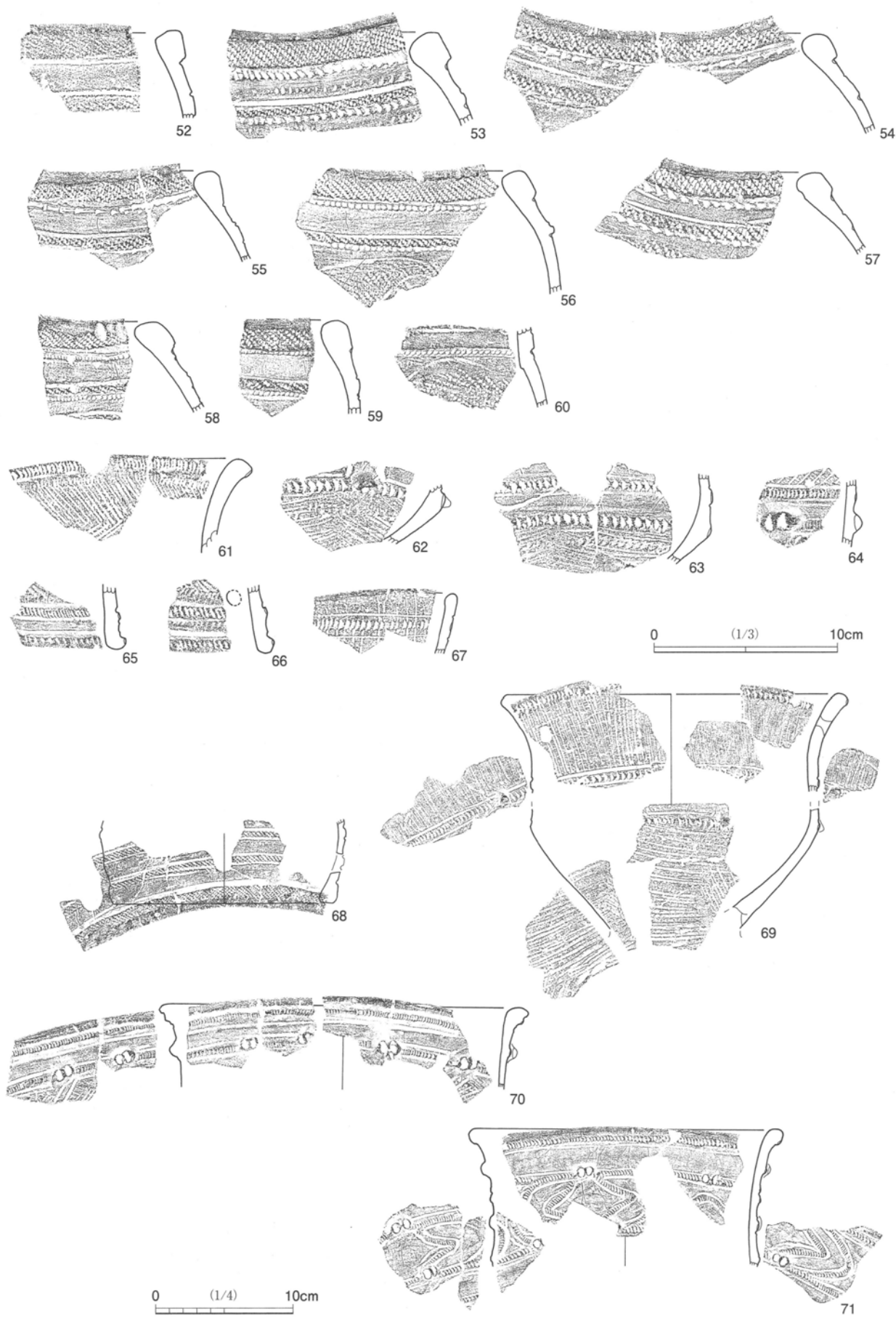
第38图 SX-028出土土器(1)



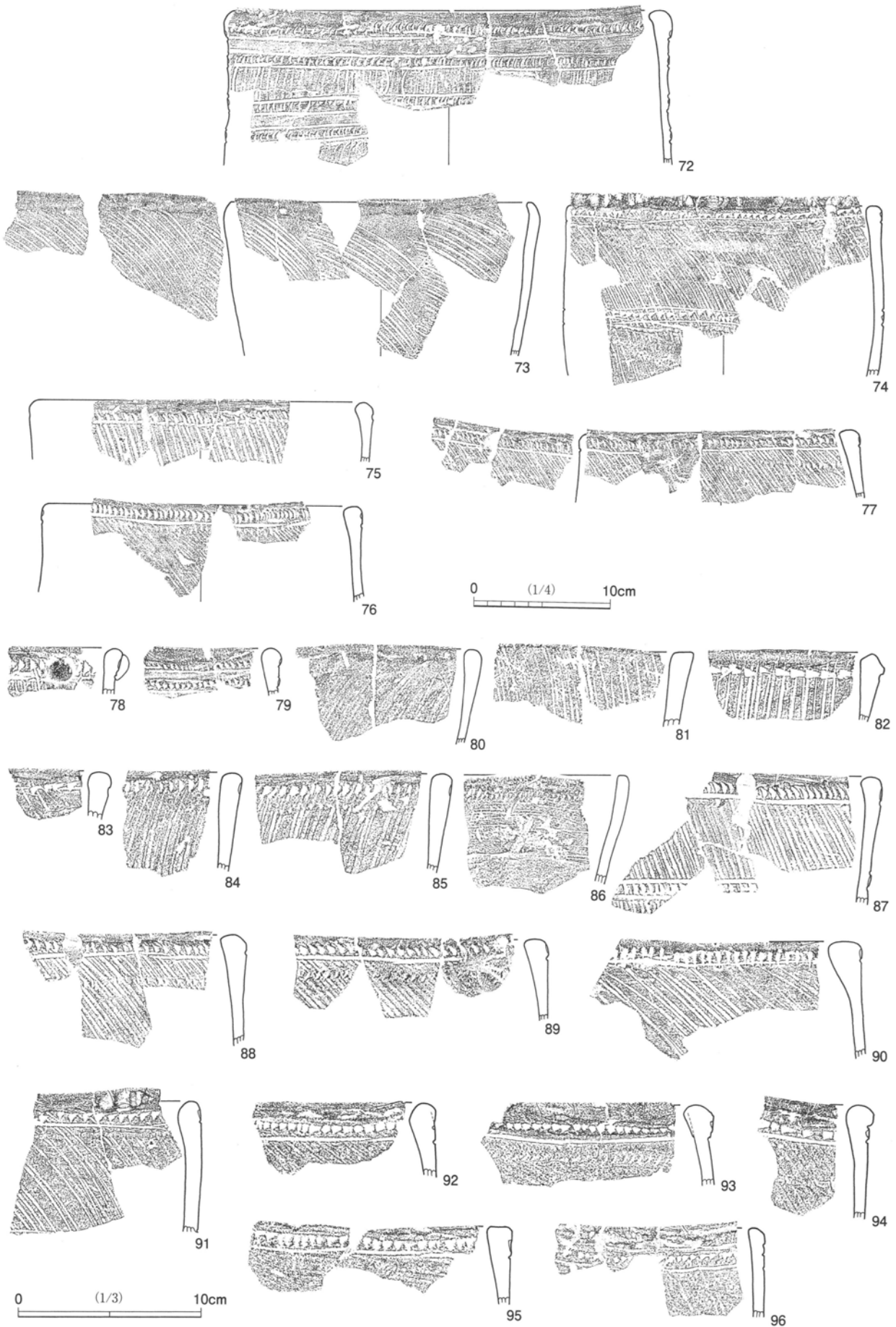
第39图 SX-028出土土器 (2)



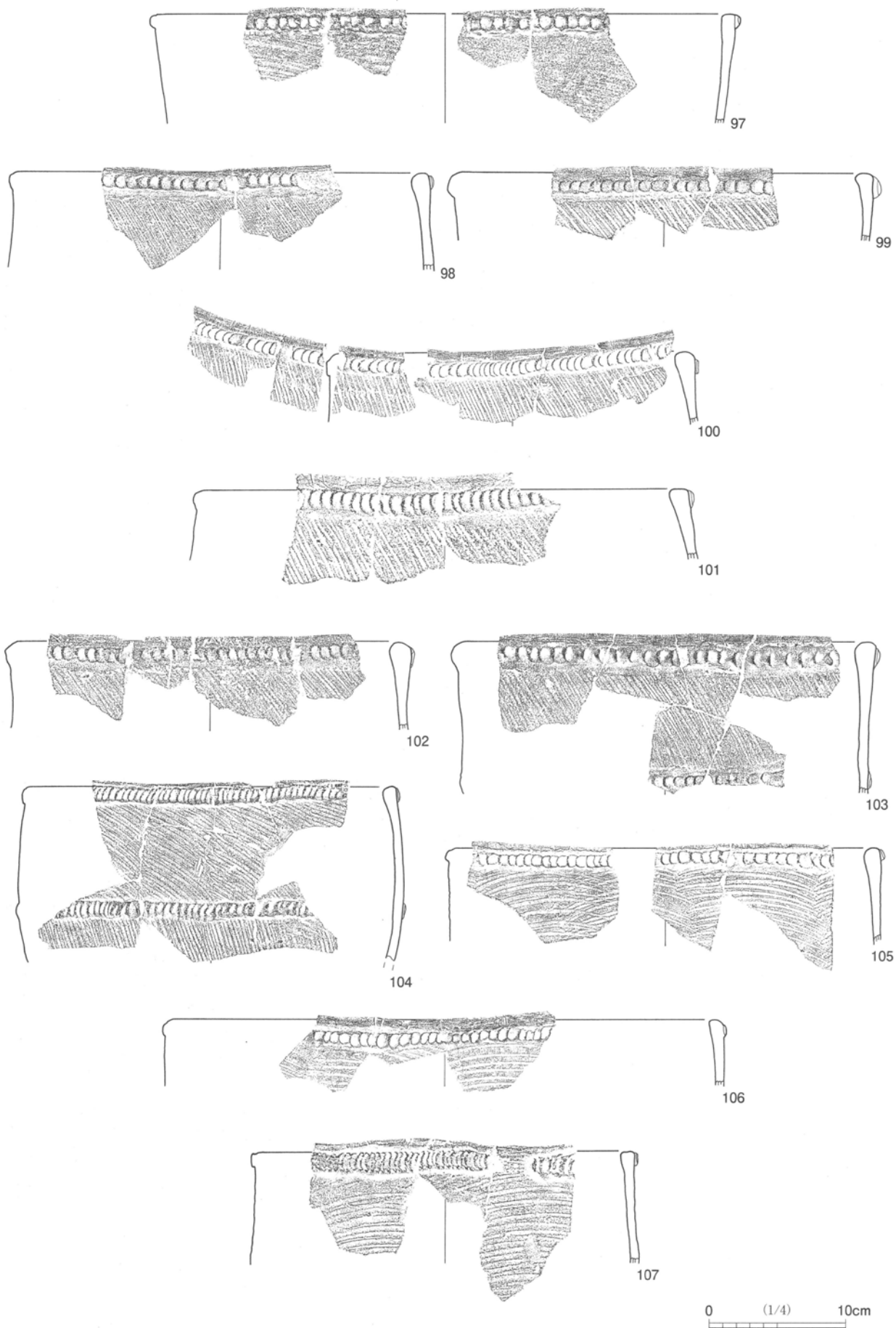
第40图 SX-028出土土器 (3)



第41图 SX-028出土土器 (4)



第42图 SX-028出土土器 (5)



第43图 SX-028出土土器(6)

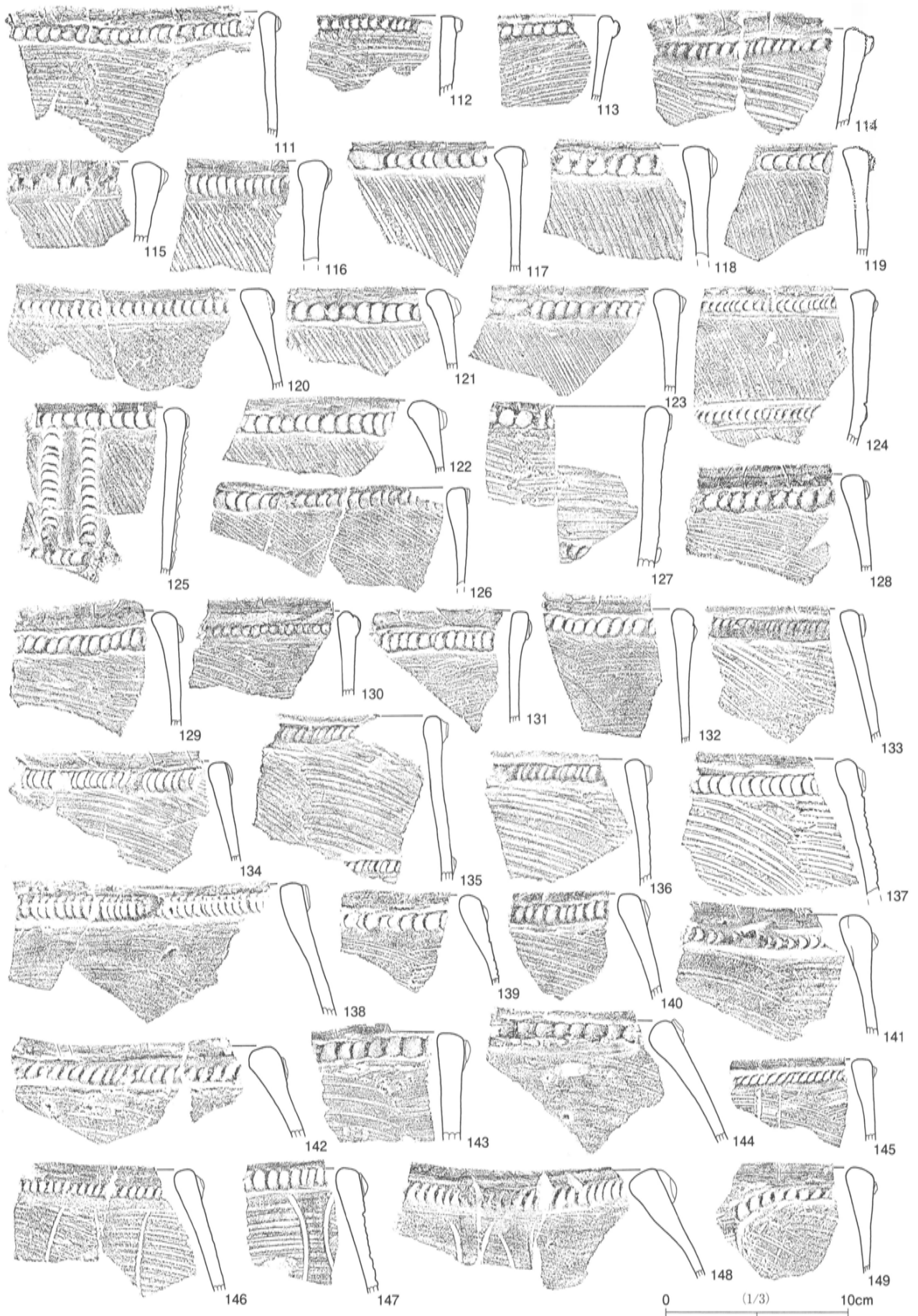


第44図 SX-028出土土器 (7)

は概して良好である。

37~71は、瘤状突起に刻目文やボタン状突起の2か所に押圧を加え、横に「8」の字を思わせる装飾を施しており、安行2式の典型的な文様構成といえる。ここでの縄文も単節のRLが多用されている。37~41は扇状把手部の破片であり、他は平縁かそれに近いものとなろう。52~60は前述した土器群に伴うもので、口縁部は大きく内湾し、口唇部の外側を肥厚させた特徴的な深鉢である。胴部にはコンパス文状の文様(62)も観察できる。51は口唇部に2個一組の突起がみられ、口径は約23cmとなる。胴上半部には、沈線による雷光を思わせる文様を描く。時期的にはやや下降するものと思われる。61~71は、台付土器あるいはその一部となろう。穿孔の痕跡が66・68には認められる。このため65・66・68は台部と見做される。この種の土器では61・69のように口縁部が強く外反するタイプがよくみられる。68は、底径やその湾曲する形状から上部の形態は69と比較しより装飾が施されていたものと推測できる。70・71も台付が想定できるためここに含めた。ともに口縁直下にボタン状突起の貼付がみられる。71の胴部にみられる文様は、43・44と共通するところがある。色調は71は黒褐色で、他は赤褐色から褐色を呈したものが主で、焼成も良好なものが多い。

72~149・164~171は、安行1・2式に伴う紐線文系の粗製土器の類である。72~96は、口縁部が垂直に近い立ち上がりを示し、裏面の肥厚などから安行1式に比定できよう。文様としては、口縁直下に半截



第45图 SX-028出土土器(8)



第46図 SX-028出土土器 (9)

竹管などにより刺突文帯を巡らす。刺突文にも若干の差が認められ、爪形に近いもの (72・75・76)、半月形 (84・85、同一個体)、三角形を呈するもの (82~96) などとなる。なお、88・89は同一個体の可能性がある。78は瘤状の突起と縦方向の沈線が認められ、前述した土器群に近いものであろう。これらの色調は、85が黒褐色、他は褐色~赤褐色で占められる。焼成についても概ね良好と思われた。97~110は粘土紐の貼付が明確な深鉢である。口縁部の成形では、ほぼ垂直に立ち上がるタイプ (97~99・111~116) と内湾するタイプ (100・104・109・110) とがある。後者は安行2式の典型であり、133~142・144~148では内湾が著しい。施文についてみると、胴部にみられる条線は左から右へ、上から下へと施文されている。その後、粘土紐を貼付しており、104~107では粘土紐の上下についての整形痕は認められない。このことにより土器製作時の最後に粘土紐を貼り付け、連続的に押圧していることが理解できる。111~149は粘土紐の貼付が明確なものを集成した。これらの色調は赤褐色ないし褐色を呈し、110にのみ焼成時の産

物である大きな黒班がみられる。

150～163は、安行2式から晩期初頭にあたる土器群を一括した。小破片のため即断しにくい点もあるが、157～162などは晩期とも考えられる。163は、平縁の口唇部に小さな粘土塊を貼付する。胴上半部は太い沈線で弧を描き、その末端には三叉文が施され、安行3a式の特徴をよく表現している。縄文は細く密なLRを用い、胴下半部を飾る。

以上がSX-028とした遺物集中地点における後・晩期の土器群であるが、図示したように本地点では安行1・2式期に盛期を向かえ、晩期の3a式期に至ると人びとの活動は急速に衰退していったものと考えられた。出土土器群の内容は、その様子を物語っているかのようである。

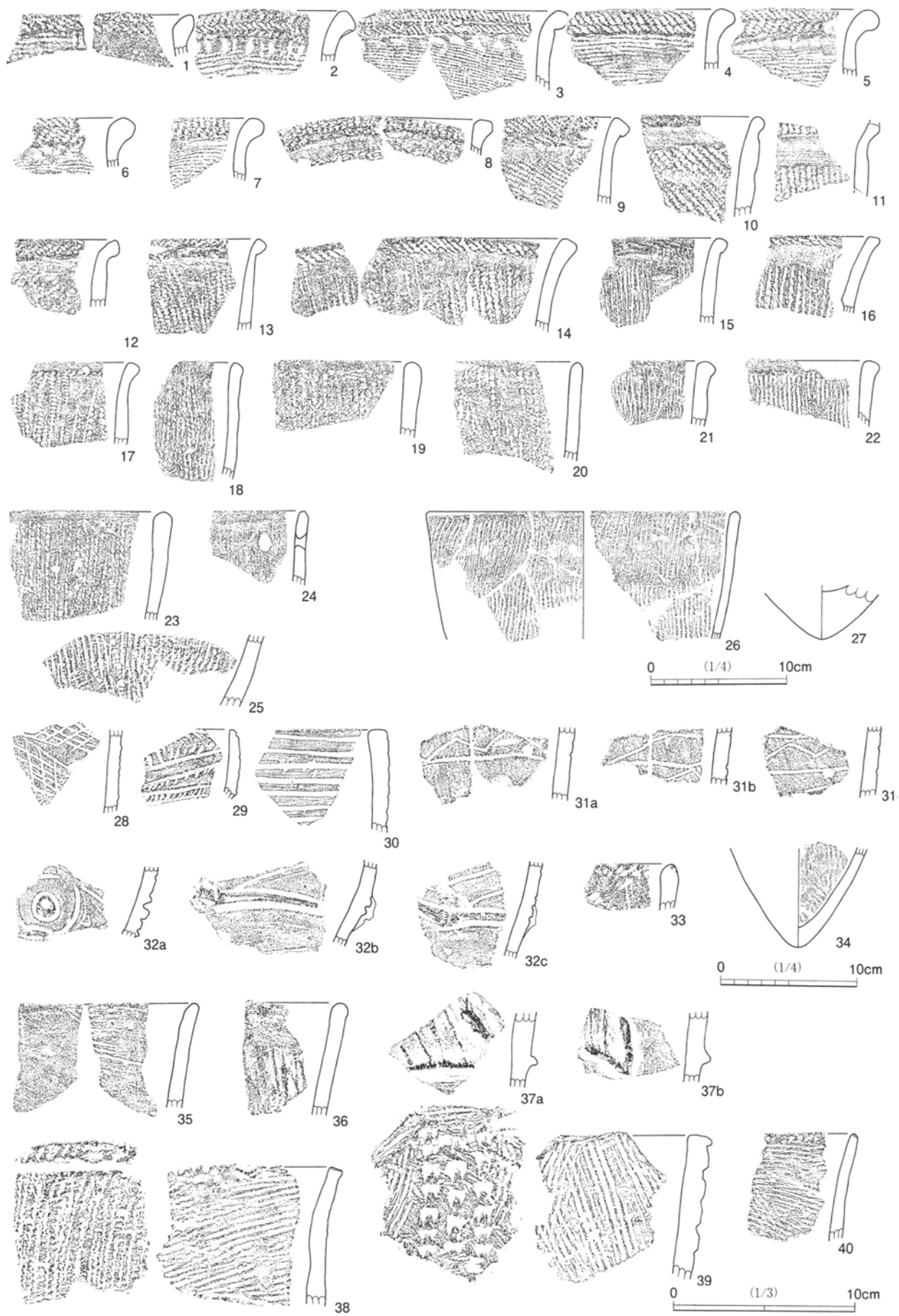
4 グリッド出土土器（第47～54図・図版217～226）

ここではグリッド出土土器として、遺構外・遺物集中地点から検出された土器群を一括して取り上げることとした。時期的には早期の撚糸文期から晩期まで継続的に各型式の土器群がみられた。つまり本遺跡は、縄文時代をとおして人びとの活動の場を提供していたものとなる。

1～27は、いわゆる撚糸文系土器群である。これらは各所に散在してはいたが、撚糸文期の集中地点SX-026周辺（16～20・24）やSX-028（3・4・12・14・25・26）からの出土が目立った。1は口唇部に縄文を施し、裏面にまで及ぶ。2・3では口縁部直下に指頭による押捺を加えており、3の観察から縄文施文後に指頭圧を施している。また縄文は横方向（1～7）にもみられることから、これらは古式に属するものである。また粘土紐を貼付した口縁部をもつ一群（1～13）は、口唇部にまで縄文が及ぶ。14は口縁部にのみ縄文を施文している。15・16は口縁・胴部に撚糸文が施文されており、大丸式とされるものである。17～20は口縁部から胴部にいたるまで縄文施文となるが、17の口縁部は大きく外反する。21～26では撚糸文のみの施文で、24・25はその間隔は粗くなっていく。また24の穿孔は焼成後のものである。26は口縁部片が接合したものであり、推定径は約23cmを計測する。27は底部で、文様は認められない。底部と胴部の接合部から破損したものである。胎土には多量の小石とともに若干の雲母が認められるため撚糸文期に属するものと見做される。

28～33は、早期の沈線文系の土器群である。出土地点についてみると、19N（31）・19T（32）区などであった。28は細い沈線を格子状に施す。29は辛うじて口縁部を残す。沈線間の空白部を小さな貝の背圧痕で充填する。30は平行沈線で口縁部を飾る。田戸下層式に特徴的な太い沈線がみられる例である。口唇部は平坦に近い。31は接合してはいないが同一固体と考えられた。細い沈線を平行・山形に配している。32も同一固体となろう。沈線と円形内の刺突は器面装飾としては見栄えのするものである。沈線に沿って貝殻の背圧痕を添えている。33は口唇部に近い部分を半截竹管で押捺しており、繊維の混入も認められないためここに含めた。色調は28・31が褐色、29・33が淡褐色、30・32が赤褐色を呈し、焼成は良好である。

34～40は、早期後半に属する条痕文系の土器群である。出土地点についてみると、SX-026・027周辺から検出されている（37・38・40）。34・35では器面の文様は認められず裏面にのみ条痕で整形している。無文・砲弾形の底部という点から子母口式に近いものと思われる。36は器面に若干条痕を残す。裏面は篋状工具による整形が施される。以上の3点は胎土に少量の繊維痕が認められた。37は、太い隆起線の中を細隆線を配した装飾を施している。おそらく口縁部に近い破片であろう。38は平縁の口縁となろう。器面には貝の背圧痕を縦方向に大胆に押しつけている。圧痕は口唇部にまで及び、裏面の条痕文とともに1個



第47図 グリッド出土土器 (1)

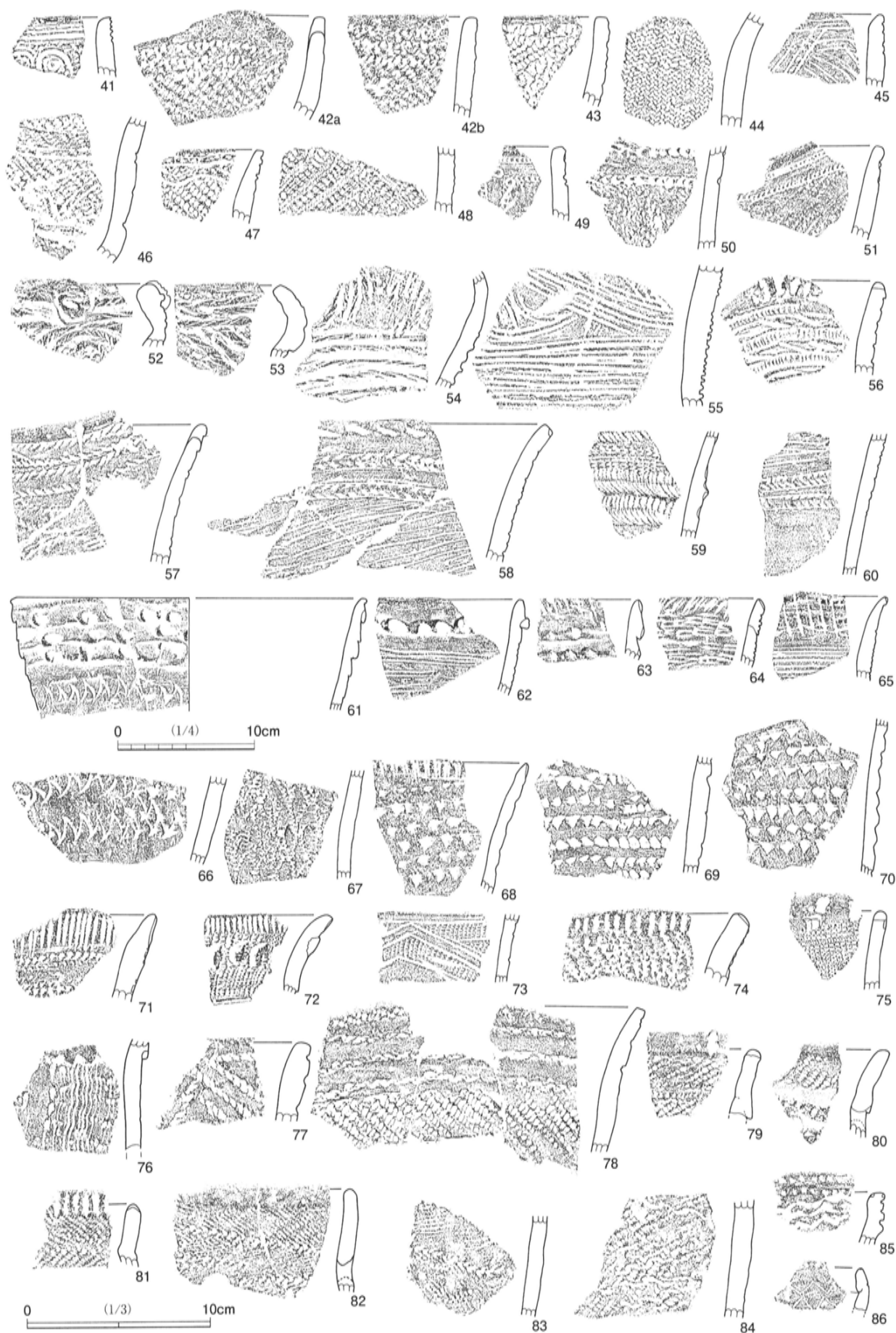
の貝殻で施文しているようである。39は波状口縁の一部で、器面の表裏には条痕文がみられ、山形の頂部めがけて3列の刺突を施す。40は器面には顕著な条痕が認められるが、裏面では使用されていない。口唇部には刺突が巡る。器厚は薄い。37～40では、繊維の混入が顕著であった。これらの色調は概ね褐色から赤褐色を呈しており、焼成も比較的良好といえた。

41～48は、前期前半に属する一群の土器で、関山式から黒浜式に至る段階の土器群で胎土には繊維を多く含む。出土地点での偏りは認められないが出土量としては少ない。41は口縁部片で口縁部に平行沈線、その下に沈線による円形文がみられる。42は縄文と色調により同一個体と判断した。口辺部では縄文原体の末端部分が3段認められる。43は縄文施文が重複しているため一部は判然としない。44はこの時期特有の組紐を原体としたものである。45では縄文は認められず、半截竹管により主文様を構成するようである。46・47も同一個体の可能性が強い。縄文地のうえを半截竹管により飾る。48の原体は異条縄文であり、L-(LR・RL)の撚糸となる。色調は暗褐色ないし褐色で、46の器面では剥落が認められるが、繊維土器としては概して良好な焼成といえる。

49～56は、前期後半の諸磯系土器群で、古墳時代以降の遺構からの出土が多い。49は竹管による文様構成が主となるが、器面の一部には縄文も認められる。50・51も同様な文様構成をとり、51大きく開く波状口縁の一部である。52・53も同一個体であろう。54も含めて器面には細い粘土紐を貼付し、その上に刻目を施しており諸磯B式土器の典型である。55～56も半截竹管により主文様を作出する。56は波状口縁の頂部となる。色調は52・53が黒褐色で、他は褐色ないし赤褐色となり、焼成については55・56では胎土の中に黒色部を残す。

57～76・93は、利根川下流域から霞ヶ浦一帯に濃密に分布する前期後半の浮島系の土器群である。出土地点はSX-028の遺物集集中地点内から検出されているもの(58・61・62・67)が目立つ。57は波状口縁で、密に施した連続爪形文が特徴的である。58は平縁で、口唇部には棒状工具での押捺がみられる。浮島式の中でも古い部分となろう。61は破片7点が接合したもので、口縁部での推定径は26cmほどとなる。口辺には輪積痕を3条残し、輪積部には補強のためか棒状工具による横からの刺突がみられる。胴部では貝殻による連続文がみられる。68～70は篋状工具による三角文を付した例であり、口縁部には半截竹管による押圧がきれいにならぶ。71～75は貝殻と半截竹管によって文様が構成される。71の口縁にみられる半截竹管による押圧や73の沈線間にみられる貝殻文は浮島系でも終末の興津式の特徴といえる。76は口辺部片と考えられ、粘土帯の貼付も認められる。施文は櫛歯状工具を縦方向に引き器面に装飾する。興津式の一部であろう。これらの土器群の色調は赤褐色ないし褐色を呈したものが主で、焼成については良好とまではいえない。

77～86・94・95は、前期末葉から中期中頭に位置付けられる土器群で、出土地点はSX-026地点(80・84)の他に、時期的に異なる遺構などから認められた。ここでは口唇・口辺部に縄文原体を強く押しつける(77～79・81)ことにより器面を飾る施文法に特徴をもつ土器群が主体となる。さらに81～83の結束による羽状縄文や84のような結節縄文は、次の中期への移行期に位置付けられよう。なお80の下部には焼成後の穿孔が認められる。94は口縁を折り返し、内面には明確な稜が認められる。器面は全面縄文で覆われるものと思われるが、口縁直下に縦方向の結節縄文が認められる。下小野式とするものに近いと思われる。85・86は小破片であるが、類例が少ないため採拓した。85は口唇・口辺部に半截竹管により施文する。86は口唇部に浅い刻目を施し、口辺には細い沈線で山形を形作る。しかも明確な輪積痕が裏面にみられると



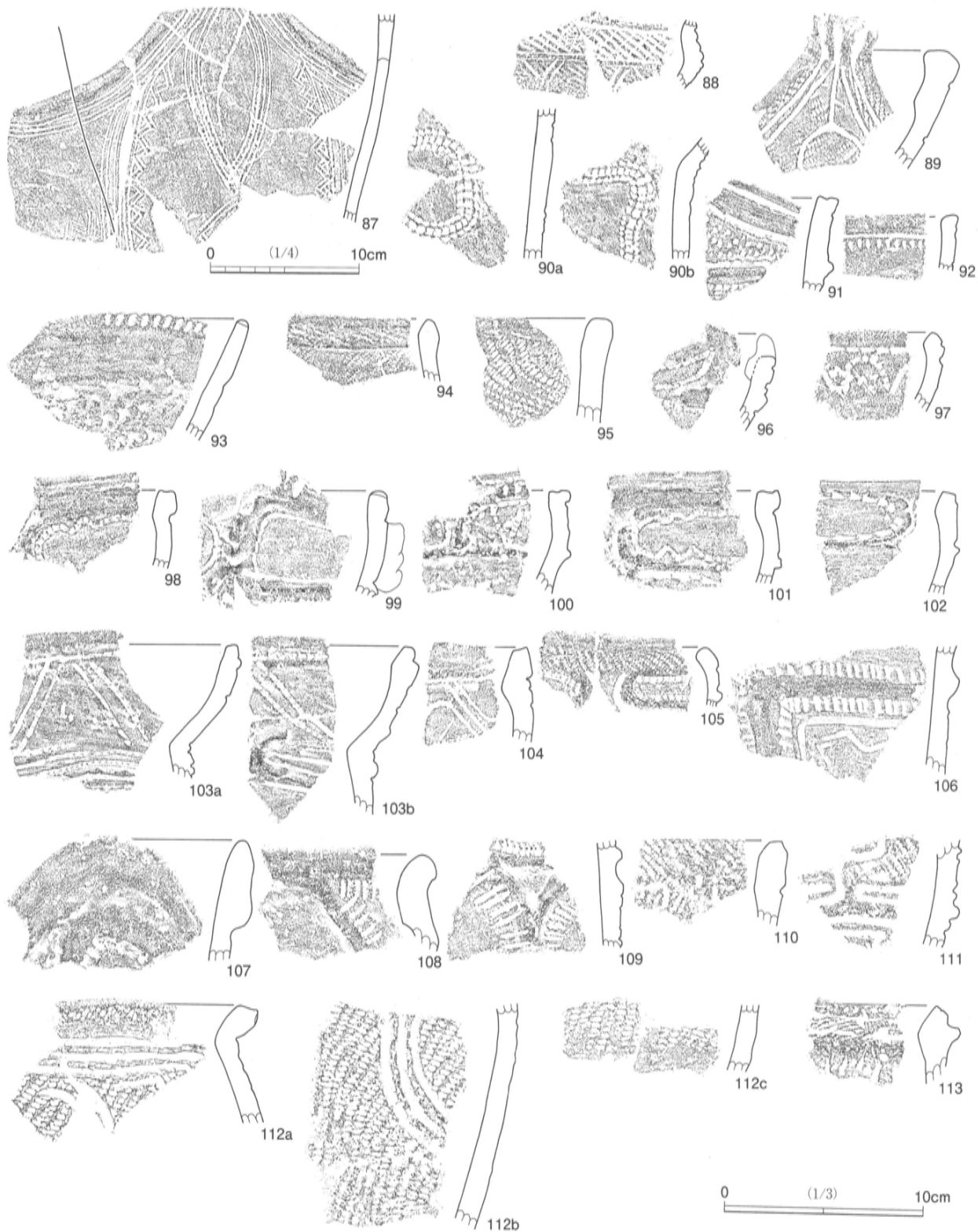
第48図 グリッド出土土器 (2)

ころも興味深い。いずれにせよ、本遺跡周辺では類例に乏しく大木系との関連も考慮せねばなるまい。これらの色調は81・86が黒褐色で他は赤褐色を呈し、焼成は浮島系とさほど変わらない。なお、85だけは胎土に白色鉱物・小石等を多く含む。

87～93・96～113は、中期初頭から前半と考えられる一群であり、87・88・89などは五領ヶ台式とみてよいであろう。96～113は広義の阿玉台式の中に入る土器群で、112・113では縄文を地文とし、3本一組の太い沈線が用いられている。口縁部の成形にも独特なものがあり、大木8a式に近いもの考えられる。出土地点についてみると、接合により大型破片となった87は19N-85グリッドから一括して出土している。他にSX-026とその周辺(88・90・98・102・105)、23S区(89・93・103)が主な出土地点となっており、他は古墳時代以降の覆土中などからも若干出土している。87は大きな波状を有する口縁となり、半截竹管による沈線で曲線と鋸歯文を描き器面を装飾する。88は口辺部破片で、沈線を格子状に施す。89は波状口縁の頂部にあたり縄文地のうえをはっきりした沈線で飾る。90に施される文様は後続する阿玉台式に類似しており雲母の混入が認められ、五領ヶ台式土器の流れをくむものと考えた。91・92では刺突の加わる文様構成となる。類例は少ないが阿玉台式に含めて考えたい。また105・109の口縁部では縄文が施文され、その下に連続した刺突文が施される。111の施文具は、112と共通するようであり、やはり大木系と考えられる。ここで使用されている胎土は87・88・92・96・103・104を除き、雲母の混入が認められ、97は多量に含まれていた。色調は赤褐色ないし褐色を呈し、焼成は概して良好といえた。特に111～113は胎土に小石・雲母を含有し、焼成は良好といえた。

114～121は、中期末葉に位置付けられる土器群である。これらの土器群は19S区での出土(114・116・117・119)が目立つ。19S区では古墳の周溝が認められており、その周辺部での土砂の移動があったにせよ中期末の人びとの活動の痕跡となろう。119～121は縄文と沈線による文様構成となる。沈線間は磨消しによるものであろう。120のように口辺部が大きく内湾するところから加曾利E3式となろう。114～118は器面を整え、縄文を施文後、粘土紐を貼付・成形し僅かな隆帯を作る。中期末葉の特徴をよく表現した土器群である。116では器面が荒れていないためよく観察できる。117では器面の磨耗が著しく、拓影も不鮮明であるが隆帯の痕跡を残す。色調は褐色ないし暗褐色で、焼成は普通である。

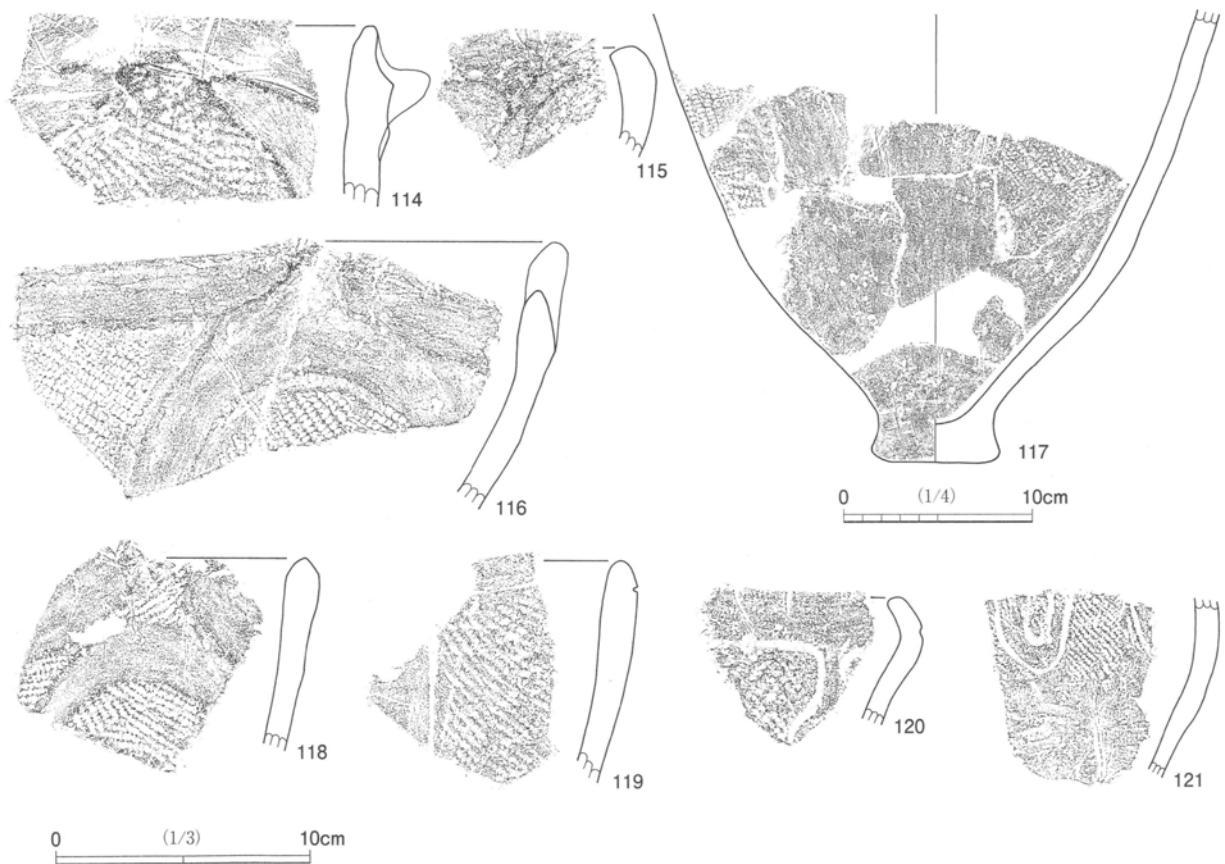
122～152は、後期中葉の堀之内2式から加曾利B式の範疇に入るものであろう。出土地点は、ここでもSX-026・028の周辺といえる。ただ器形を推測できる141・142は、141が奈良平安期の住居跡(SI-015)覆土、142もほぼ同位置(19U-47)から出土しているため、当該期の遺構の存在が想定された。122・123は縄文帯と細い沈線の配置、薄手の器壁から堀之内2式ないし加曾利B1式となろう。124・125は小型の精製土器である。127・128は大きく開く口縁の形から浅鉢か台付の浅鉢となろう。口縁は波状となるかもしれない。129は口縁部が内傾するようなタイプで、曲線を基調とした磨消縄文がみられる。このような施文はB2式によくみられる。130も同時期と考えてよいであろう。131は典型的な平縁の深鉢で太い沈線を格子目状に数本単位で引きながら施文している。132～140までは粗製の深鉢で口縁内部に沈線を施しているもの(133～138)が多い。136・137は器面の沈線と隆帯及び内面の沈線が複数認められ、同一個体となろう。141は太い縄文LRを器面全体に施文している。大きく内湾する口縁部は篋状工具できれいに整形し、内面には浅い沈線が巡る。142の口辺部は指頭による押捺を加えた紐線文を用い、口唇部は小さな突起で飾る。143は、口縁部が内湾するタイプで胴最大径はやや下部に位置する。沈線間の無文帯をみるときれいに調整され精製土器に近い。146は沈線により格子状の、148は半截竹管により横方向の施



第49図 グリッド出土土器 (3)

文によって器面が飾られる。149・150は同一個体で、無文部では調整が行き届いている。151・152は、縄文地の上を半截竹管により横方向や斜行する沈線で飾る。また縦方向の沈線間には磨消が認められる。これらの色調は赤褐色・黒褐色が多く、焼成は良好であった。

153~164・183は、安行1式を一括した。出土地点については限定することはできず、弥生時代以降の



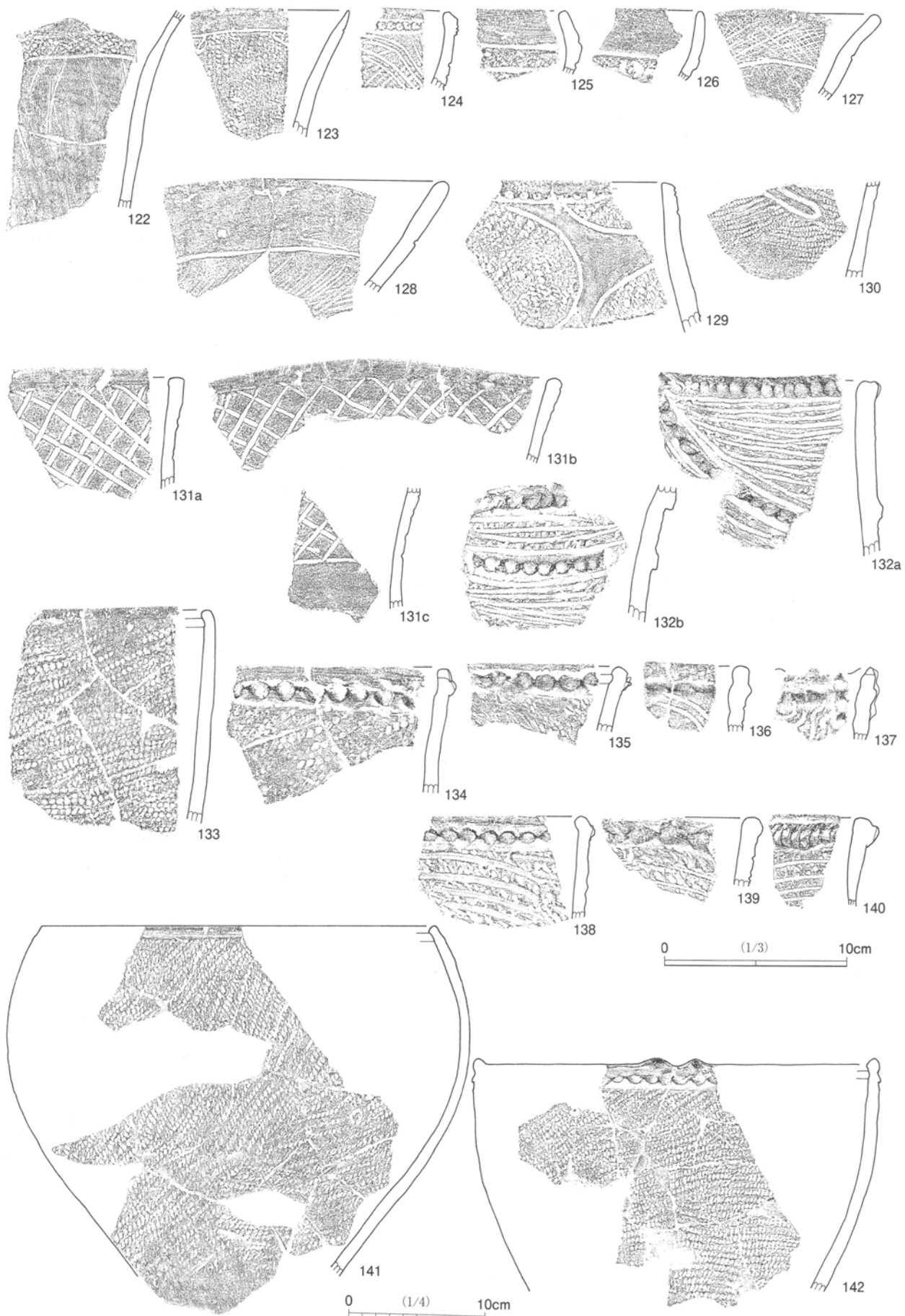
第50図 グリッド出土土器 (4)

遺構内覆土から出土したものが多く、153～157・159・183は帯縄文系の深鉢で、155は波状口縁となろう。瘤状突起が特徴的である。158は精製土器の胴部片で、沈線間によく調整されている。沈線で弧状を描くタイプとなろう。159～164は紐線文系の深鉢で、口辺部では刺突文を多用している。色調は159が淡褐色で、他は褐色ないし赤褐色を呈し焼成は良好である。

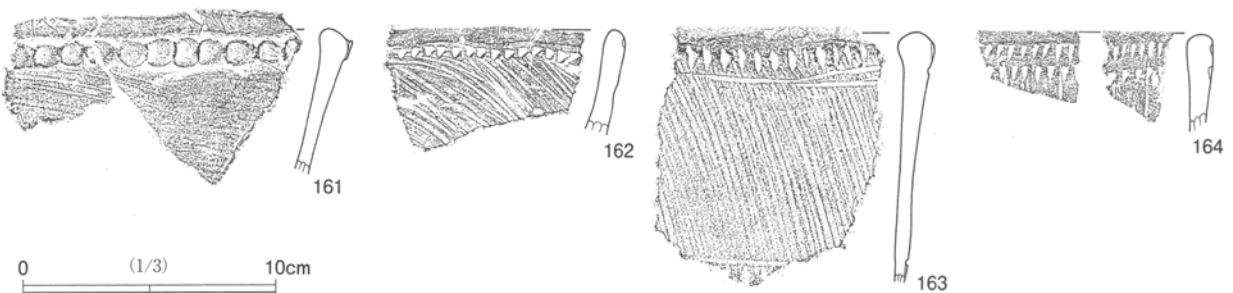
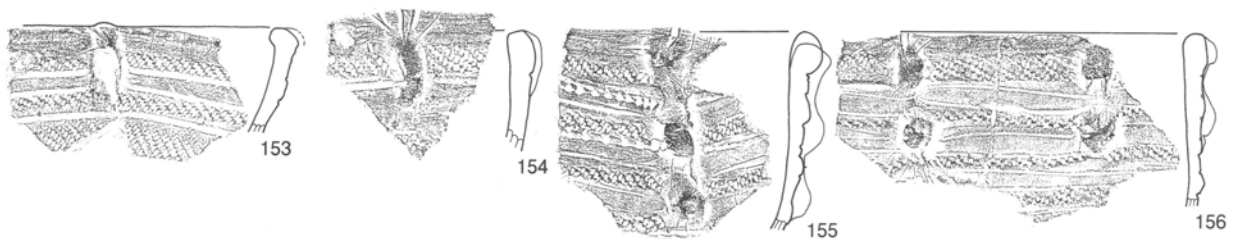
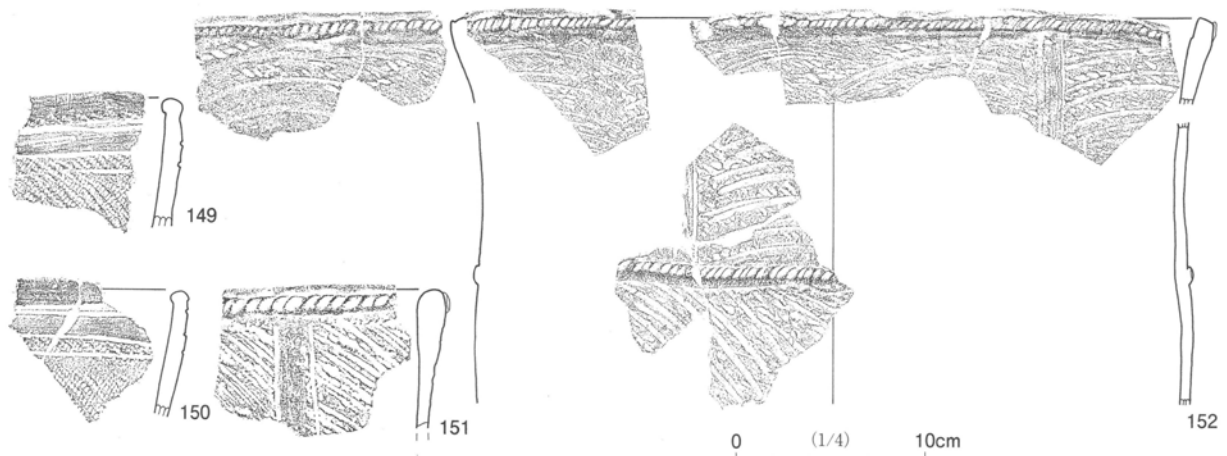
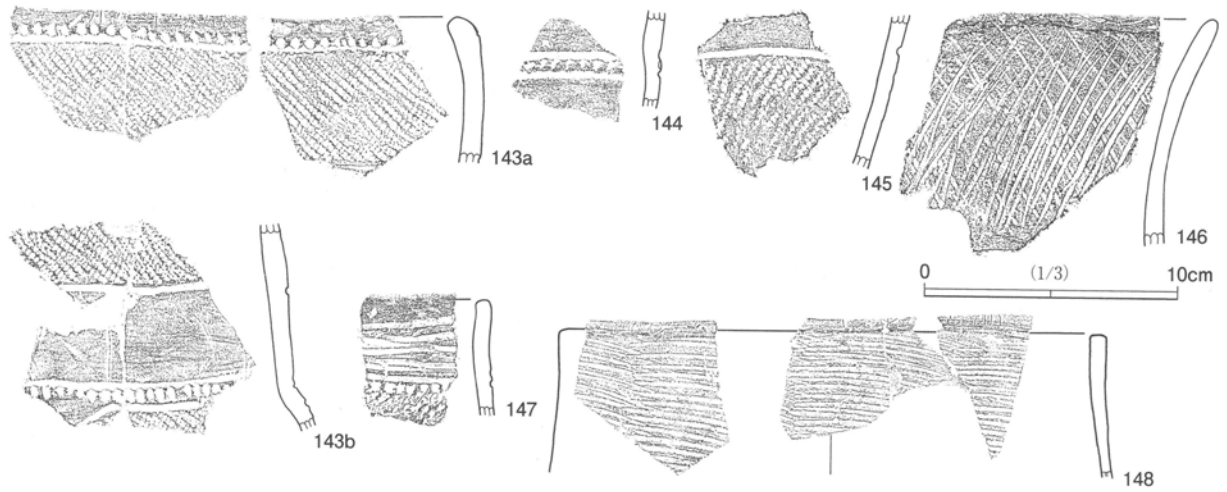
165～182・184～186は、安行2式となろう。この中には、ほぼ器形が復原できるほどの個体も検出されている。170・177は19S区古墳の周溝、171は20T区で検出された溝状遺構の覆土から検出されたものが接合し、165・167・172～174などは20U区から出土している。165～171・178～181は帯縄文系の深鉢で口縁部には扇状把手を有し、縦や横に長い瘤状突起には刻目を施す。170・171は平縁の口縁で胴部にみられる湾曲した細い隆帯には刻目が入り、繊細な文様を醸し出す。169は弧線の中に縄文を充填し、口唇部に瘤状突起を貼付する。172～177は紐線文系の土器群で口縁は内湾する。176・177は、この時期の典型的な深鉢である。182・185・186は時期的には異なる可能性もあるが一応本類に含めた。色調は褐色ないし赤褐色を呈し、焼成は良好である。

187～211は晩期後半から末葉に位置付けられる土器群であり、量的には少ないが細分して記載することとした。出土地点は、SX-028とした遺物集中出土地点とその周辺、17・18O区、17・18P区などである。

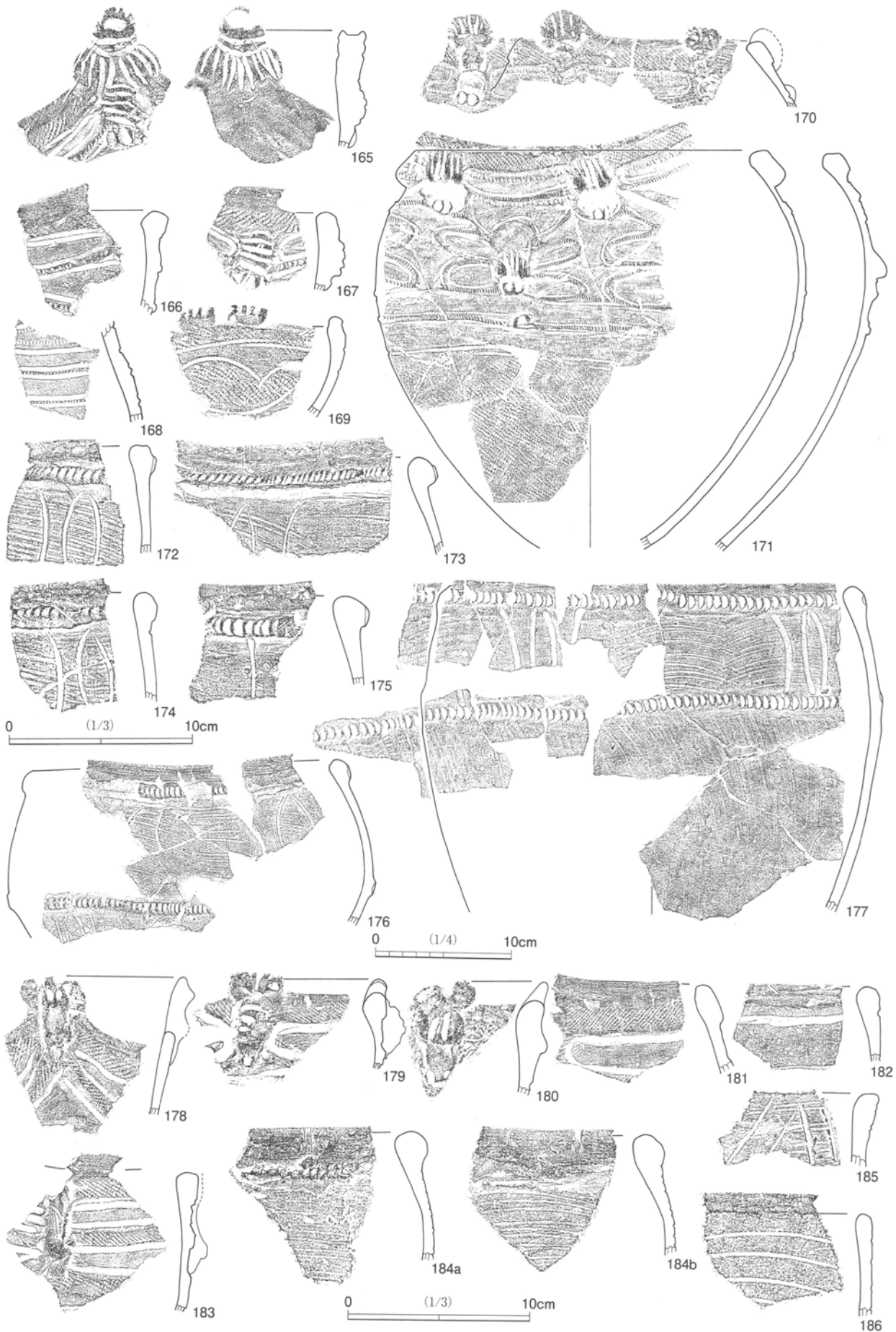
187～190は、前浦式にみられる太い沈線と縄文によって文様が構成される。187と188はRLの縄文と内面にみられる浅い沈線から同一個体と思われる。189・190は浅鉢の一部であろうか、器内外面の作りは丁寧である。187～189はSI-172(弥生期の住居・18P-06)から出土している。色調は赤褐色ないし褐色



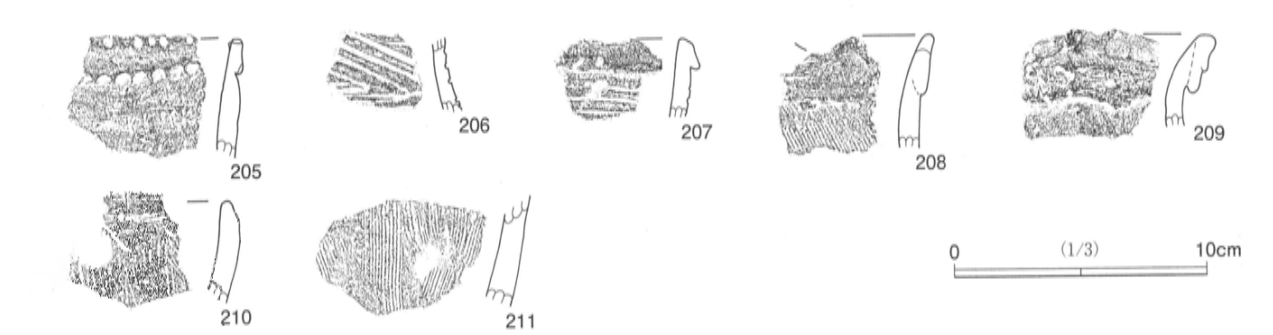
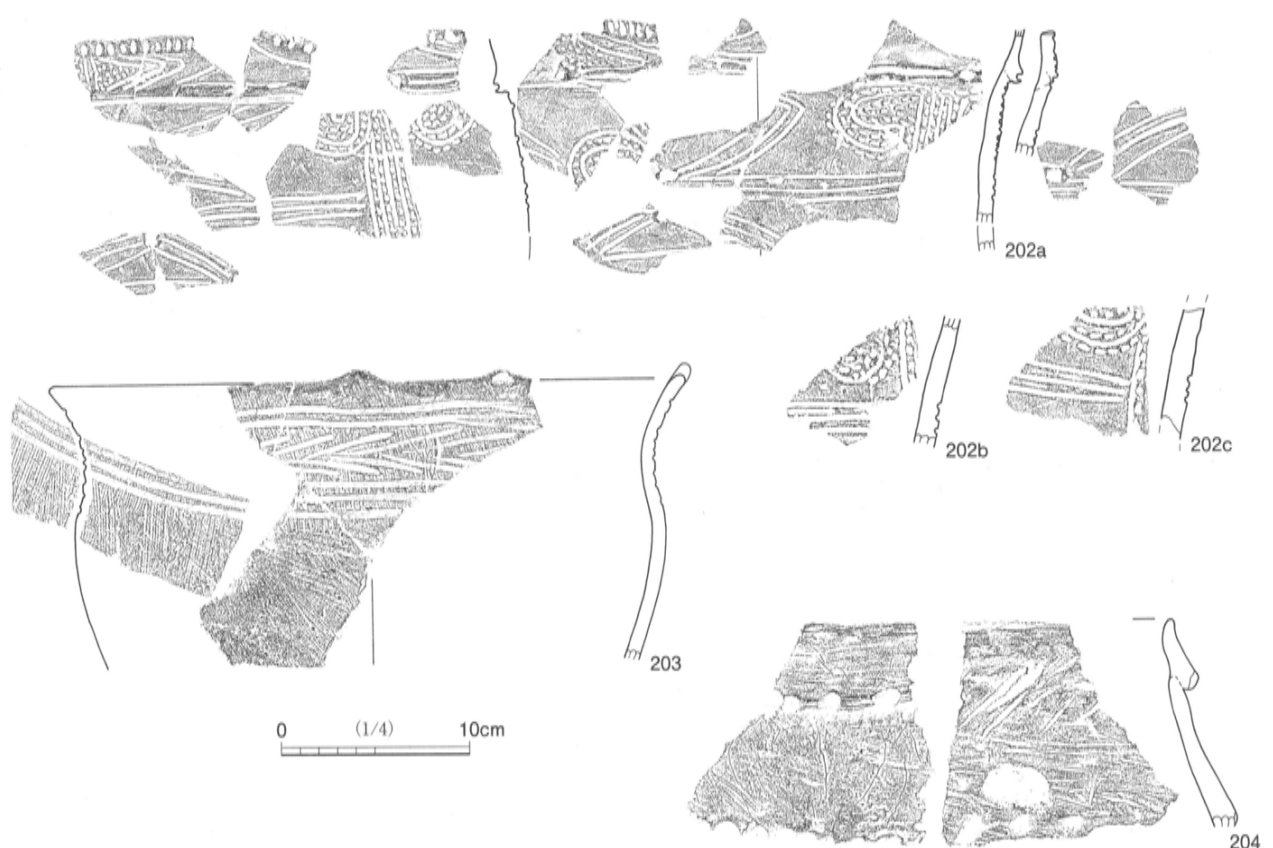
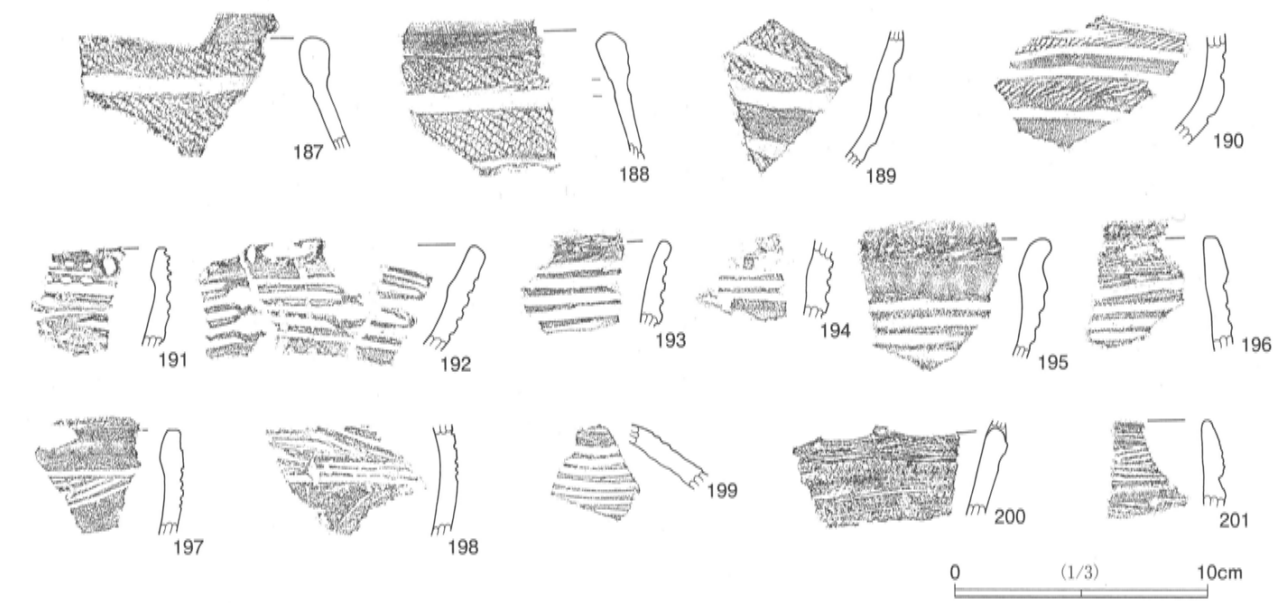
第51図 グリッド出土土器 (5)



第52図 グリッド出土土器 (6)



第53図 グリッド出土土器 (7)



第54図 グリッド出土土器 (8)

となり、焼成は良好である。

191～199・202・206は、沈線文を主文様とした一群の土器である。191の口辺部には刺突が認められ、192の文様は工字文の変形となろう。器形については浅鉢（191～195）や壺の一部（199）と思われるが、202は深鉢で、ほぼ器形が推定できる程度の遺存となる。19S区から20数片の破片が出土し接合したものである。沈線で平行・曲線を描き、その間に刺突文を施す本資料のようなタイプは他の遺跡でもしばしば出土している。これらの土器群のうち、195は砂粒を多く含むが、他の胎土はよく精選されている。色調は195・196・202は褐色、他は黒褐色となる。

200～201は、口縁部を折り返したうえに撚糸文を施す深鉢で、この時期によくみられる。2点とも撚り糸には細く密に撚ったRを使用している。200の口唇部には小突起の痕跡が認められ、内外面には整形の際に生じた数cmの長い砂粒痕が顕著であった。色調は200が黒褐色、201が褐色となり、焼成は稜である。

203・208・210・211は、刷毛状工具により器面の整形をしている。203の刷毛目は、きれいに遺存しており、工具は2cmほどの幅を有しものである。口唇部には間隔をあけて瘤状の小突起が貼付されており、頸部の文様帯では平行沈線間を沈線による綾杉で満たしている。本土器のみ小石・石英粒を含んだ胎土を使用している。色調は黒褐色、他は褐色となる。

204・205・207・209は、深鉢形を呈するものと思われる。口縁部の輪積痕が特徴的で、粘土帯の貼付痕がよく残っている。概して粗雑な仕上げといえる。205の口唇・口縁部には棒状工具による押捺がみられ、207の口辺は半截竹管による平行沈線文が認められる。色調は赤褐色で、作りの粗雑さに比較し、焼成は良好である。

第6節 遺物集中地点・グリッド出土の石器

本遺跡において縄文時代の石器群に限っては、第15図に示したように剥片を主体とした集中出土地点が2か所において認められた。他に薄い散布ながら20V区から20U区にかけての地点と17T区で剥片等の出土が認められた。その後実施した整理作業の過程では、その数量は膨大となり多量に出土した剥片・残核などから確実に当時の人びとによる石器製作がおこなわれていたことが裏付けられた。以下、述べるように石器・剥片等の夥しい出土量は、長期間に渡って石鏃などを中心とした剥片石器が製作されていたことを示すものとなろう。具体的には大グリッドでいう20U区（SX-026）と19O区（SX-028）を中心とした場所となり、両地点では前述したように大量の土器群も検出されている。前者は縄文早期いわゆる撚糸文系土器群を伴出し、後者では後期の土器群が中心となった。これらの伴出土器群から考えておそらく土器群と同一時期の所産と考えて整理をすすめた。また、遺物包含層としては、他にV20区において早期後半に位置付けられる条痕文系土器群の検出された地点（SX-027）が存在するが、ここでは図示したとおり前二者と比較すると、それほど多くの石器・剥片類とはいえなかった。また、17T区の中でも一定程度の剥片類が存在していた。このため図示したように、本遺跡における縄文時代の石器製作、とりわけ剥片石器の製作は、居住期間はさておき少なくとも4か所で確認されたことになる。

一方、石斧類を主とした礫石器の類は、磨製石斧をはじめ打製石斧・敲石・磨石・石皿といった縄文時代に不可欠な石器群も相当数の出土をみた。出土地点についてみると、剥片石器群が集中分布する場所と必ずしも一致することはなく、磨製石斧や敲石・砥石といった器種についてはSK-26・27の周辺での出土が多いようであるが、他の器種については各地点で散乱するがごとき状態で検出されている。むろん

出土地点は当時の状況をそのまま反映しているわけではないため一概に断定はできないが、調理具として石器類（磨石・敲石・石皿）は、遺物集中地点に少ないため石器製作と生活の場は若干異なる場所にあったものとも推測できた。

1 石器製作跡と出土石器

ここで取り扱う石器製作跡は、前述した土器群の集中出土地点と重複することになる（第15図参照）が、土器群と石器群については異なる整理方法をとったため本稿では主に石器製作という観点から論述してみたい。また主要石材については、後述するようにチャート・黒曜石の二種が基本となっており、とりわけチャートでは石核の類にみるべきものがあつた。このため石核の認定では、打面にできるような平坦面と剥片剥離の痕跡が確認できた場合には石核とした。また、記述の順序は前後するが、最大規模となったSX-028から順次説明をすることとしたい。

(1) SX-028（第55～68図，図版13・229～231）

本地点については、前節の「遺物集中地点の土器」で記述してきたところであるが、石器類の分布は北側に突出した台地で広範な分布域を形成していた。大グリッドでいえば、190区を中心に19N・P区に認められ、ここでもやや南北方向に広がるような傾向にあつた。石器及び剥片の散布範囲は、第55～58図（集中地点の器種分布図）に示したとおりであるが、その膨大ともいえる量は5m四方の1グリッド（190-04）で1,330点を数えるものであつた。他にも100点以上出土したグリッドは28か所に及び、総計出土点数は10,000点を超えることとなり、本地点における石材消費量の膨大さを窺い知ることができた。とりわけ190-04・14グリッドで確認調査の段階で排土した部分については、一部に分布の空白部が存在するものの剥片を主体とした濃密な遺物分布（第55図）には目を見張るものがあつた。ここで製作されていた器種は、石鏃を中心として石錐・削器・搔器・楔形石器などであり、使用石材はほぼチャート・黒曜石で占められていた。それを裏付けるかのように、剥片剥離された両者の残核が多数存在していた。また石器製作に伴うと考えられる敲石なども出土しており、後・晩期における作業場として長期間機能していた場所とすることができよう。その根拠として、本地点は石器類ほど顕著ではないが後・晩期土器群の包含層でもあり、付近では晩期にあたりと考えられるSK-305・306・308といったような土坑・堅穴状遺構・埋甕などが検出されている。このことから推察すると、本地点周辺において規模はさておき後・晩期の集落が営まれていたと考えてよいであろう。使用されている石材についてみると、下記のとおりチャート・黒曜石で約98%を占めており、この2種によって剥片石器の製作が賄われていたものと考えてよい数字といえよう。それを物語るかのように石核・残核は341点が出土しており、製品は石鏃の20点と搔削器といったスクレイパー類の他、二次剥離を施した石器が多い。特に搔削器類についてはすべてを図示することはできなかったが特徴的な挟りを有する削器（類似品）が出土しているが、これらは図中では加工剥片として取り扱った。

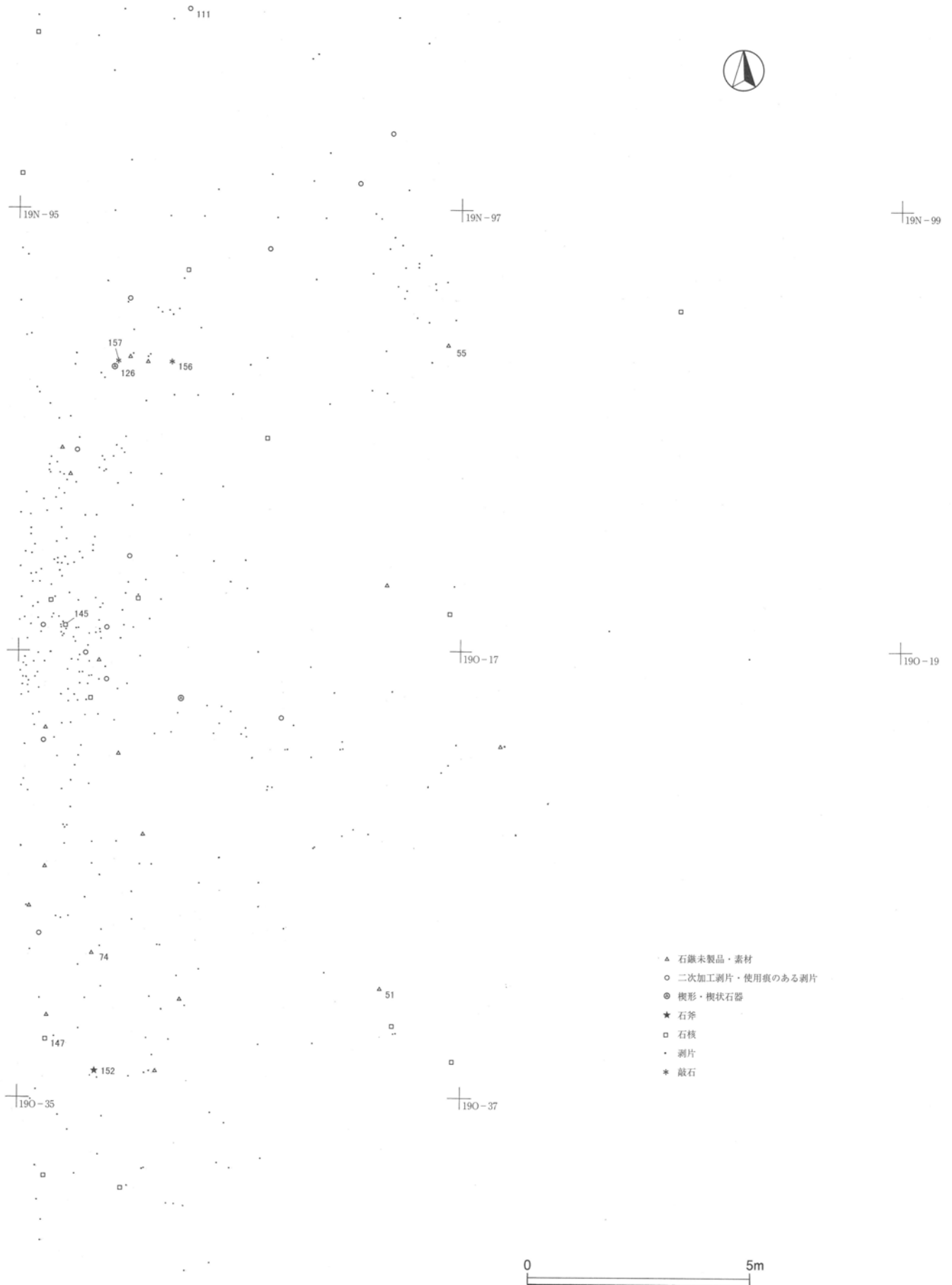
チャート 6,712点（石鏃11点・錐5点・楔3点・搔削器1点／類似26点・未製品38点・石核288点・剥片6,338点）

黒曜石 3,410点（石鏃8点・錐3点・楔0点・搔削器2点／類似22点・未製品37点・石核53点・剥片3,285点）

その他 240点（石鏃1点・錐0点・楔0点・搔削器0点／類似1点・未製品3点・石核1点・剥片234点）



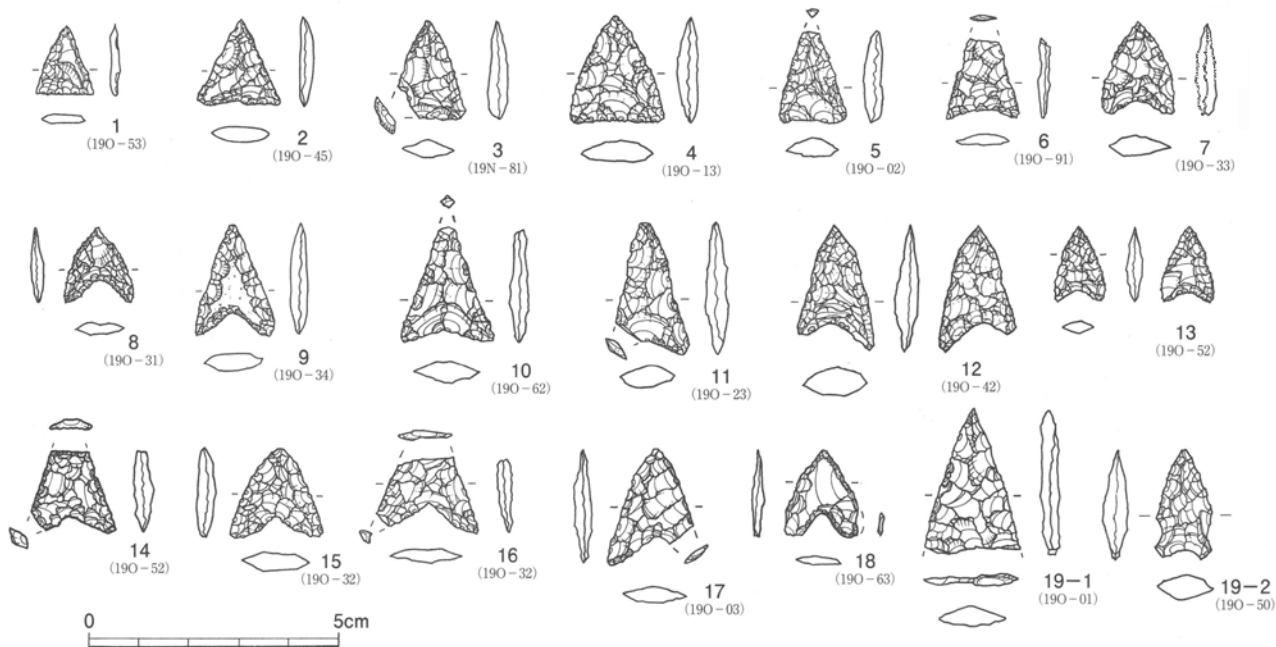
第55图 SX-028石器分布图(1)



第57図 SX-028石器分布図(3)



第58图 SX-028石器分布图 (4)



第59図 SX-028出土石器 (1)

以下、本地点及び周辺域から出土した石器群^(※)について記述していく。なお、石器の作図に際しては欠損の大きなものについては省略した。

石鏃 (第59図1～19) 本地点から出土した石鏃は20点を数え、それぞれ大小様々なタイプが認められるが、基本的には一般的にみられる三角形と基部を挟る形態で構成される。

1～5は三角形タイプで、基部の作りはほぼ直線的な形状を呈している。大きさという点からみると、1は薄い剥片を採用し表面には主要剥離面を残した小型品であり、他は同様な大きさとなる。製作面からみると、概して作りは精緻であるが、5のみ粗雑な仕上げとなっている。

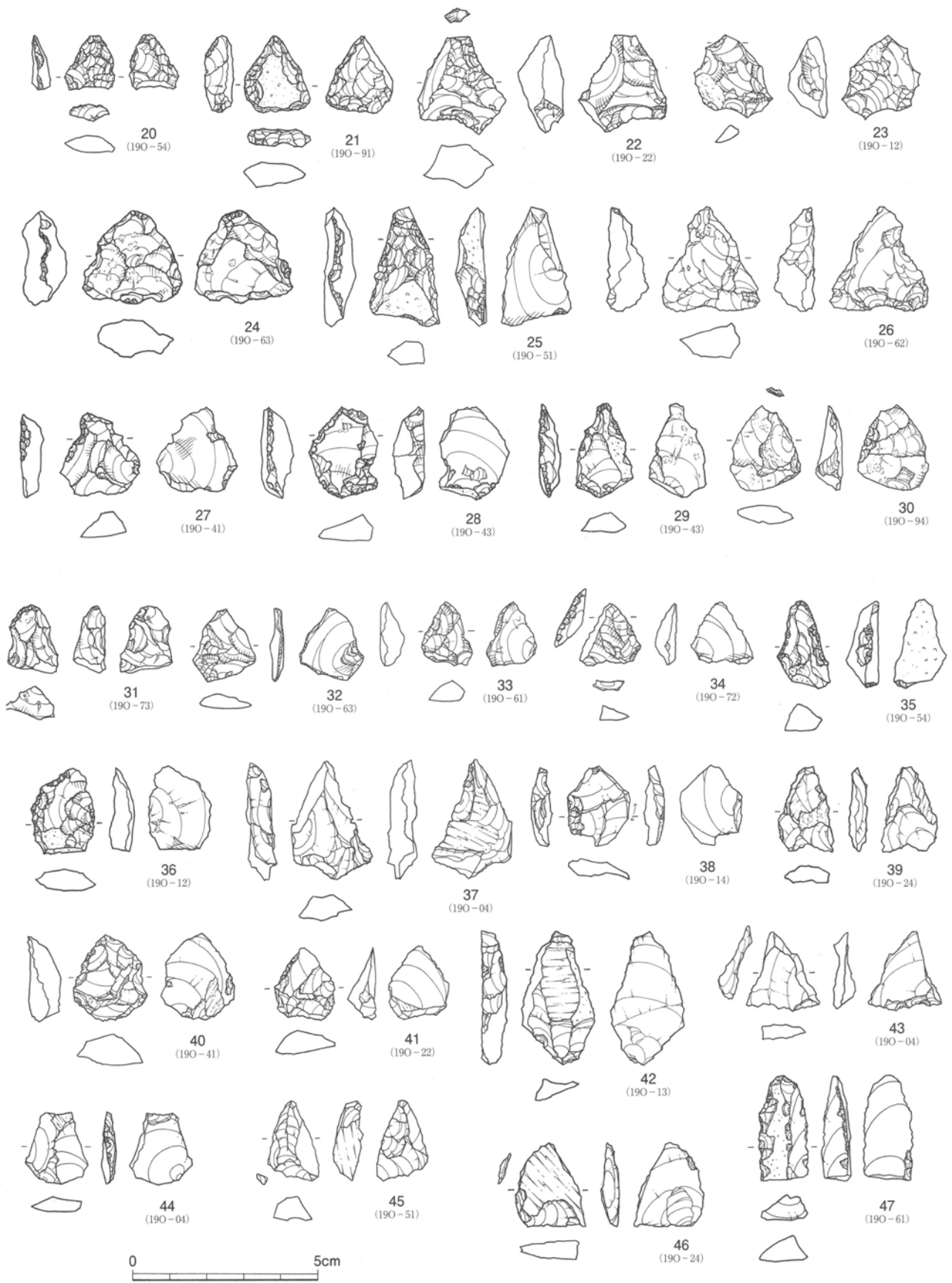
6～19は基部を挟るタイプであり、これらにも深浅の差をもつ。6・7・10・13などの基部は湾曲に近く、8・9・16～18では深い挟りで仕上げている。19は基部が欠損しているためその形状は把握できないまでも、欠損部断面観察から挟りの痕跡が窺える。形状からみると、8・13は小型品といえよう。以上の一般的タイプとは異なり、19-2は完形品で、挟りが基部の他に両側面にも認められる珍しいタイプである。この挟りは固定のためのものであろうが左右対称に、表裏両面からの剥離で挟られている。全体の仕上げも丁寧なものとなっている。

ここで使用されている石材では、1～3・6～9・19が黒曜石、4・5・10～17・19-2がチャート、18が黒色安山岩という構成であった。

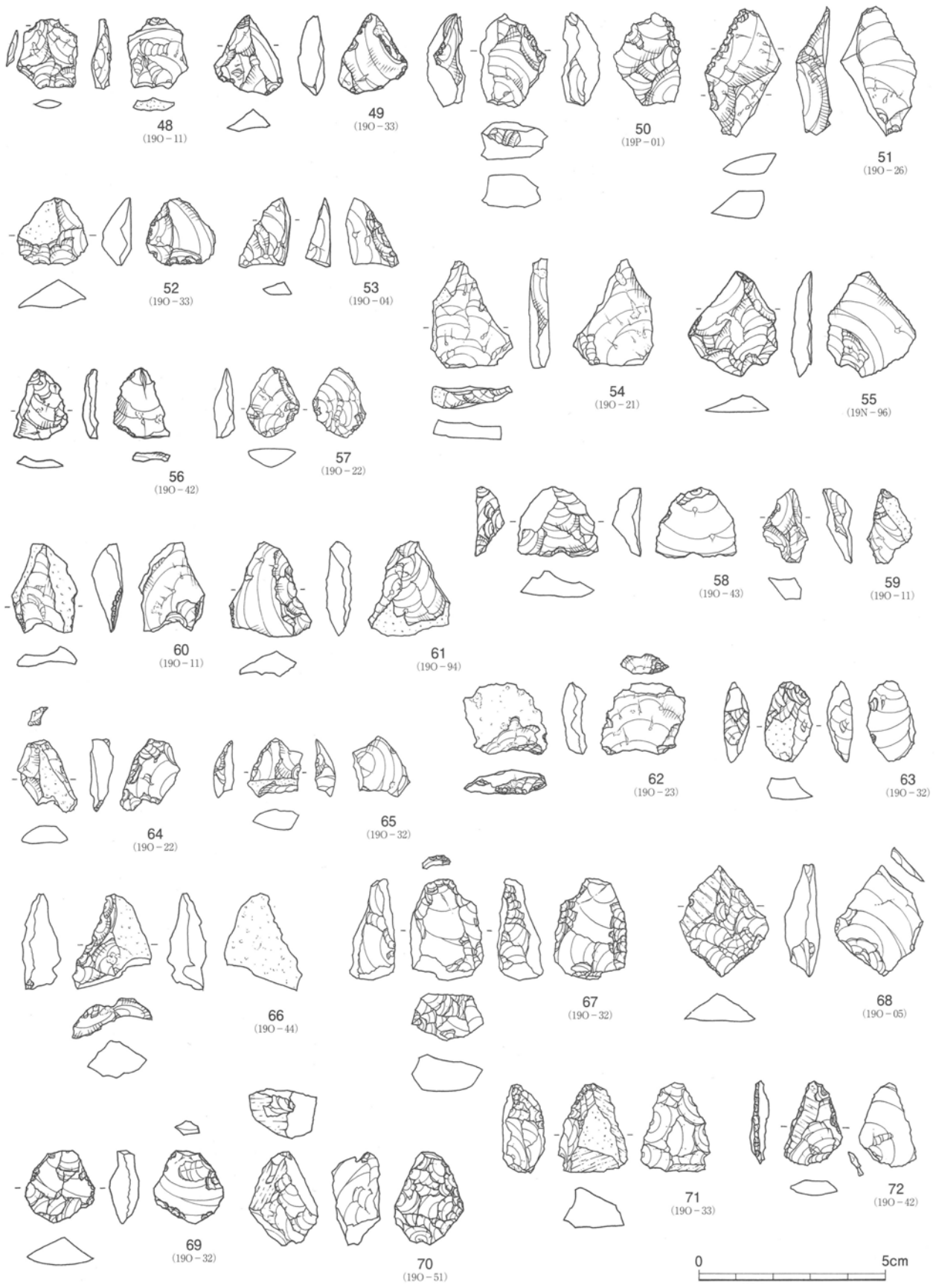
これらの石鏃については、時期的には概ね後晩期に属するものと考えられるが、早期に属する土器群や石器製作跡も検出されているためすべてを後晩期として捉えることは難しいものといえよう。

石鏃等未製品 (第60～62図20～92) 本地点では石鏃などの未製品と考えられる加工剥片が大量に検出されている。だが加工の途中ということで明確に石鏃等の製作を意図したものか、あるいは不定形石器として使用されたものかは俄に判別できないため、ここでは顕著に二次剥離痕が認められる加工剥片も含めて

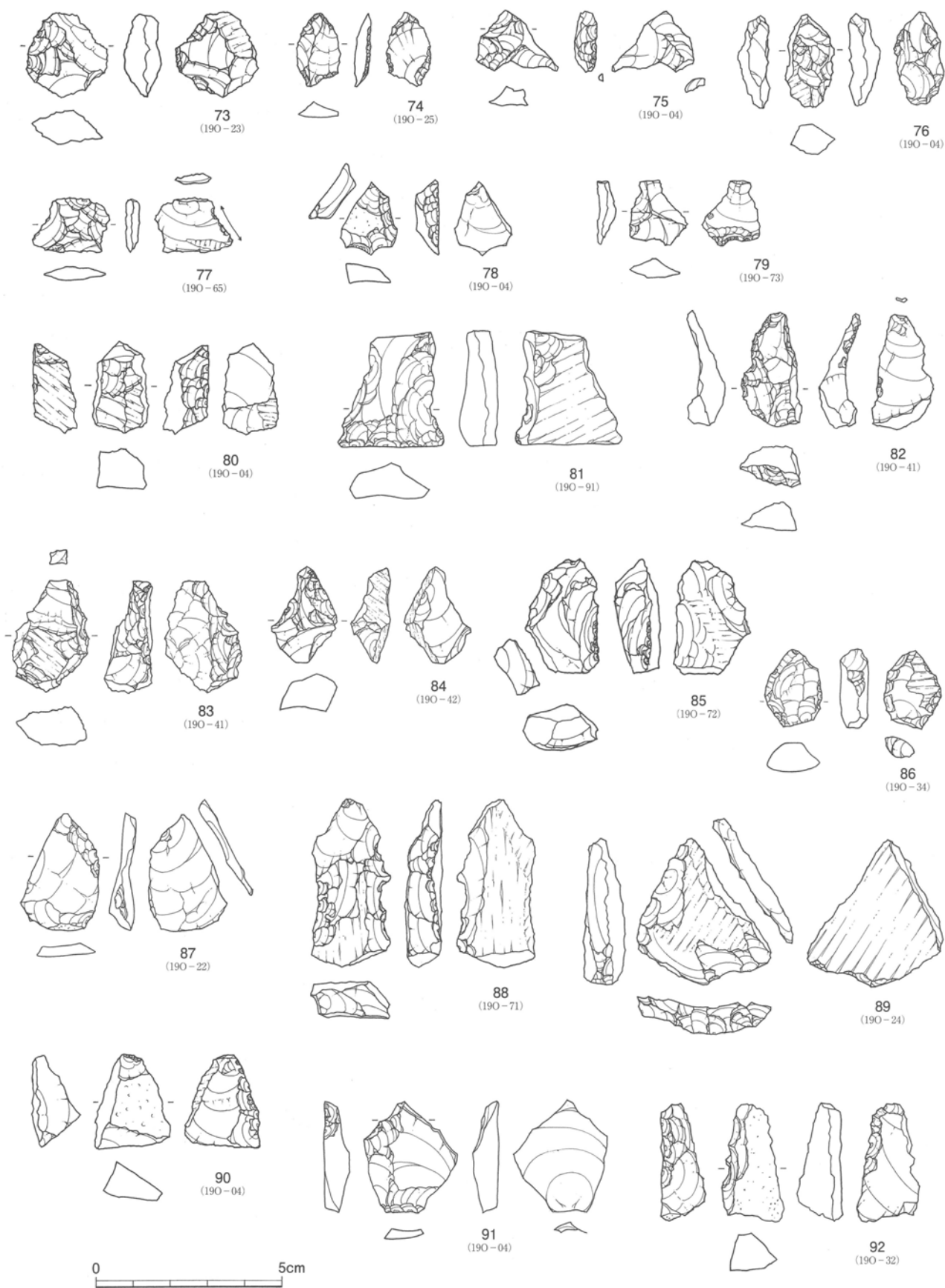
※ 石器の出土地点に関しては、相当数の石器が弥生時代以降の遺構から出土している。このため明確に縄文期に属する石器についてはグリッドに置き換えて整理しており、本文での出土地点の記載もグリッド名で表現することとした。



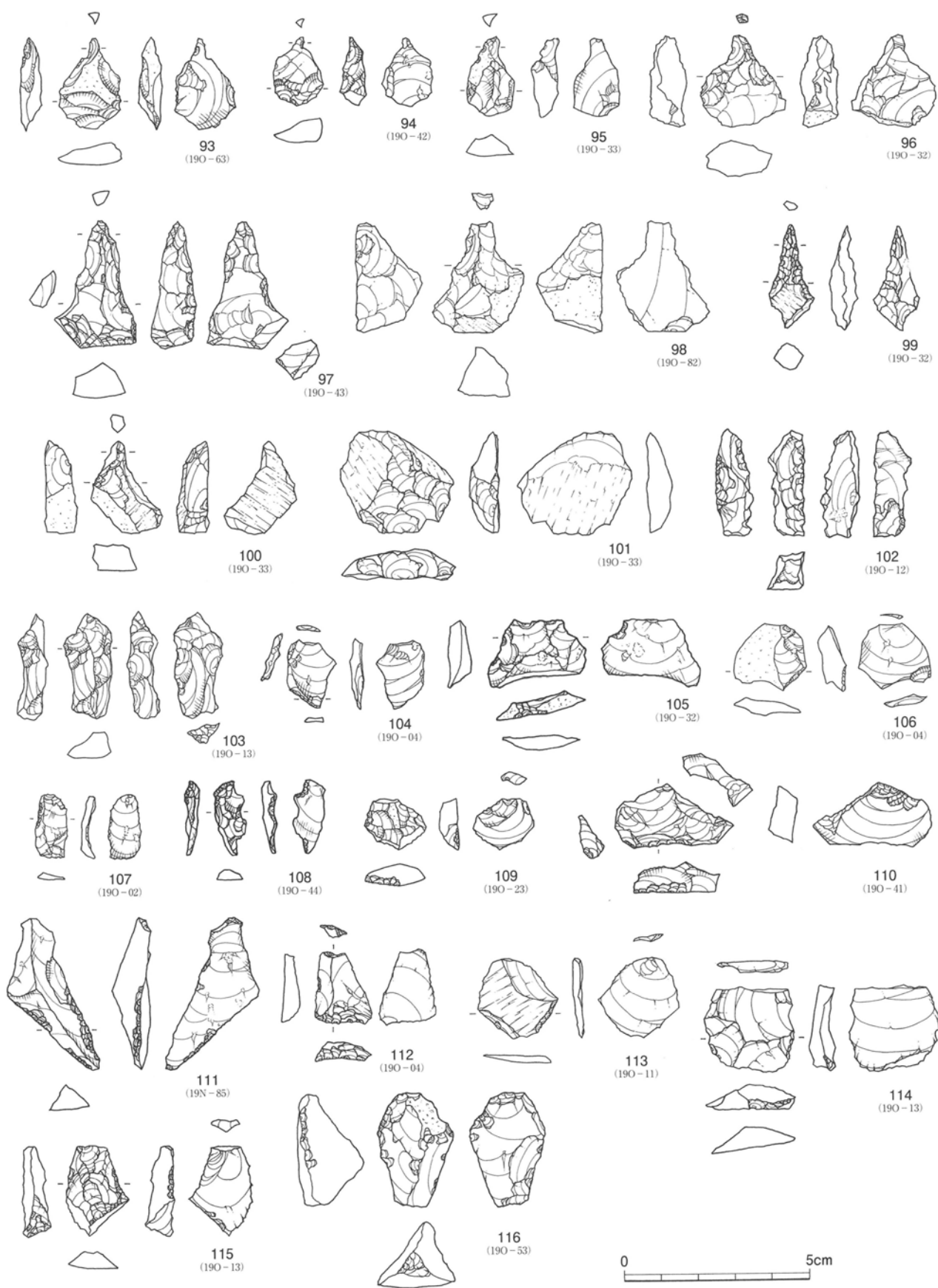
第60图 SX-028出土石器 (2)



第61图 SX-028出土石器 (3)



第62图 SX-028出土石器 (4)



第63图 SX-028出土石器 (5)

形状を重視しつつ選択したものである。なお、分布図には素材となり得る剥片も含めた。

20～47は、遺存する形状からより石鏃製作を目的とした剥片となろう。20はほぼ完成品といえよう。基部にあたる部分が欠損しており、抉り部分の作出時に破損したものの考えられる。21は表皮部を素材としたもので周囲を整形している。22～24・26は分厚い剥片を素材とており、残核に剥離を施したものととも考えられる。とりわけ22では下部に、26では裏面右側縁に抉るような剥離が認められるため削器としての機能も推測できる。25も両側面に顕著な剥離を施しており、ほぼ石鏃としての形状を保っている。29・30・34も同様な形状を示す。36は表面の周辺をきれいに加工しており、小型の削器としても十分使用できるものといえる。37以下は、形状という点では前者ほど整ったものではないが石鏃の素材としては申し分ない。40・41では周辺加工まで施されている。47は縦長の剥片を利用したもので削器としたほうが適切ともいえる。また43・46・47の欠損は形状を整えるための意識的な折断と考えられた。

石材は、20・22～36が黒曜石、37～46がチャート、21・47がメノウとなる。ただ、ここでの黒曜石は不純物を含むもの(22～24・26・29～31)、若干含むもの(20・33～36)、半透明なもの(25・27・28・32)の三タイプが存在しており、供給地の違いを示唆する石質を有している。

48～72は石鏃の素材として、遺存部から判断すれば逸脱するものもあろうが、概ね製作できる程度の大きさを保っており未製品と分類した。52・58・60・62などでは下部中央に整形剥離の一部が観察できる。また、その遺存形状から判断すると53・64・66などは製作途中で破損したものと推測できる。67・70・71は小さな素材に関わらず、分厚い遺存状態を示す。さらに平坦な面からは剥片を剥取しており石核として機能していたものであろう。

石材についてみると、48～66が黒曜石、67～72はチャートである。なお黒曜石は、その大半が不純物を若干含むものであり、50は不純物は含まず、赤みがかった縞状の帯が伴うものである。65は半透明のガラス質のタイプであった。

73～92は明らかに石鏃製作を意識したものは少なく、搔・削器等のスクレイパー類に属するものが主体となる。石鏃製作を意識したものとしては73・74・79・86・87・90などにその面影をみることができる。また78・79では下部に抉りを入れて錐状の突起を作出している。81・88は後述する、抉りを有するタイプの削器と同様な作りである。さらに82・87・89・91などはウクレイパー様の石器として使用されていたことは十分考えられる。85は残核を利用したものであろう。

石材は、78はメノウで淡緑灰色を呈している。87がホルンフェルス、91が珪質頁岩となり、他はすべてチャートである。

石錐(第63図93～100) 明確に石錐と判別できるものは8点出土している。93は表面・右側面に自然面が認められ、横長剥片の一部を抉り製品に仕上げている。94も同様で簡単な剥離で先端部を作出している。95はナイフ形石器を想起させる。先端部は小さな剥離で整形しており、いずれも簡単な作りで錐として十分な機能を果たすとは思えないような製品である。一方、96～100は頑強な作りで、特に99は石錐らしい形状の整った製品といえる。また96・98の側面には抉りが入り、削器としも使用されていたものと考えられる。

石材は、93～95が黒曜石、93では半透明なガラス質を使用している。94は黒色で不純物を含み、95では不純物は少なく半透明な石質の中に縞状の黒色帯がみられる。96～100はチャートであり、96・98・100では自然面・節理面が認められる。

搔器（第63図101） 本資料も搔器としては粗い作りとなっている。刃部は比較的大きな剥離で整形し、微細な調整は左側縁に若干施される程度である。刃部には使用による小さな刃こぼれ痕が顕著であった。

石材には黒色味の強いチャートを採用している。

削器（第63図102・103、第68図1～14） 削器としては2点の出土であるが、抉りを有するものを含めると16点出土している。102は側縁を鋸歯状に抉るように剥離して製品としている。103でも剥離法は、押圧ではなく剥片剥離と同様な剥離で仕上げており粗雑な感じは否定できない。

1～13は抉り入りの削器と考えられるタイプで、前述した中にも部分的に抉りが認められる石器が存在したが、ここに分類したものは意識的に抉りだけを作出した石器群である。抉り部の剥離は、剥片を剥ぐ要領でなされており粗雑さが目立つ。これらを総体的にみると、平坦部に打点を設定し、鋭角に数回剥離することにより湾曲部を作出する。これらの石器群は、観察から剥片を剥取するという目的から逸脱した剥離手法を有しており単なる残核とは考えられない。さらに、注意深く観察すると多数の資料に同様な痕跡が認められたため別図（第68図）に掲載した。なお、14は何ら加工は施されていない板状の素材であるが参考までに図示した。この一部に抉りを入れたものが7のような石器となろう。ここでの素材は板状の原石あるいは石核として剥片剥離を終えた残核等であり、総じて分厚い頑強な作りとなっている。なお本石器群については、最後に他地点出土資料も含めて若干の考察を加えてみたい。

ここでの石材は、第63図102・103と第68図3が黒曜石、第68図1・2・4～14はチャートとなっている。なお黒曜石は、質的に良質で半透明に近く、不純物の含有量も少ない。

楔形石器（第64図126・127） 126は小さな剥片を素材とし、表裏に小さな剥離が認められ使用痕らしき磨耗も認められる。127は分厚いながらも小さな剥片を素材とし、上下に簡単な剥離を施している。

石材はいずれもチャートであるが、126は黒色味が強く頁岩に近い。

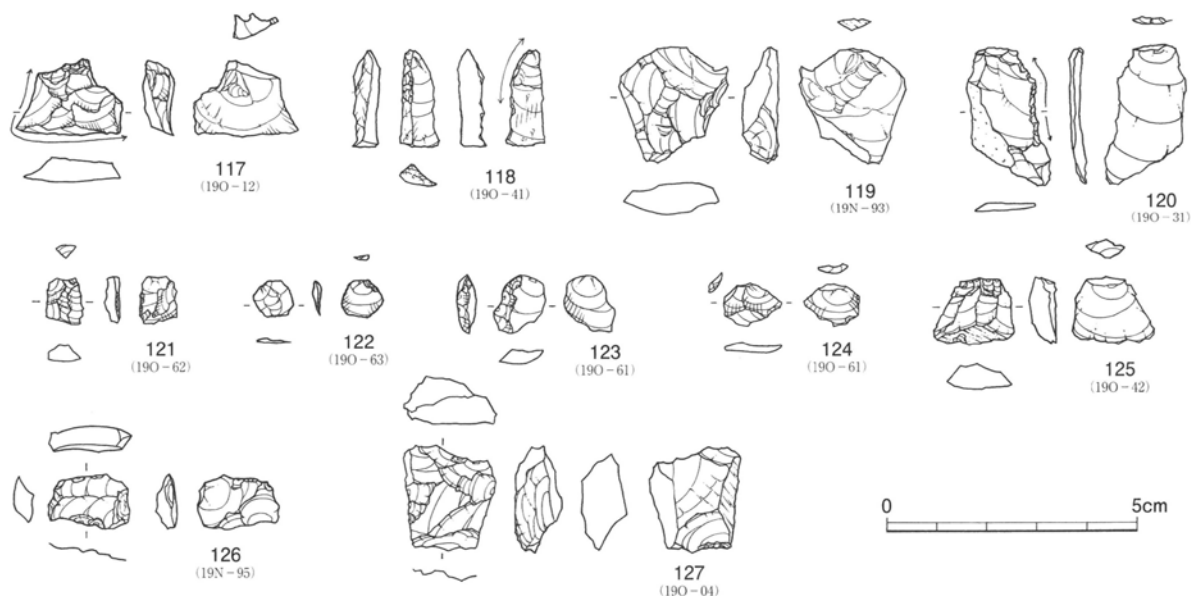
加工剥片（第64図104～120） 小剥片も含めて明確な加工が施されている剥片に限り図示したが、僅少な調整痕のみの資料は省略した。これらは図示したように剥片の下部や側縁に微細な調整を施してあり、使用されたものであろうが補完的な役割を担っただけのものであろう。108は明らかに抉りを意識した作りであり、湾曲部では顕著な使用痕が認められる。下部の突起部は錐としての機能も備えていたものと思われる。110は下部に数回の整形剥離を施した後、若干の調整を加え削器としている。111も下部は断面三角を呈しており、これも錐としての使用を想定できる。両側面では微調整が施されており、削器とも考えられる。112はその形状から搔器のような使われかたが想定できるし、他にも類似品がみられる。115・116は形状から削器のような使用法が考えられる。

石材は、104～112・117・118が黒曜石、113～115・119・120がチャート、116が瑪瑙となっている。なお黒曜石については不純物の含有は少なく良質といえた。またチャートでは114・120は淡緑灰色を呈した加工しやすい石質であった。

剥片（第64図121～125） 微細な剥離痕が認められる屑片について5点のみ図示した。このような到底石器に加工できない屑片にもしばしば調整痕が認められることから使用を想起させる。特に121～124は石器製作時に剥離された剥片となろうが、123では左側縁に緩やかな抉りを形成する。

石材は、121～124が黒曜石、125がチャートである。

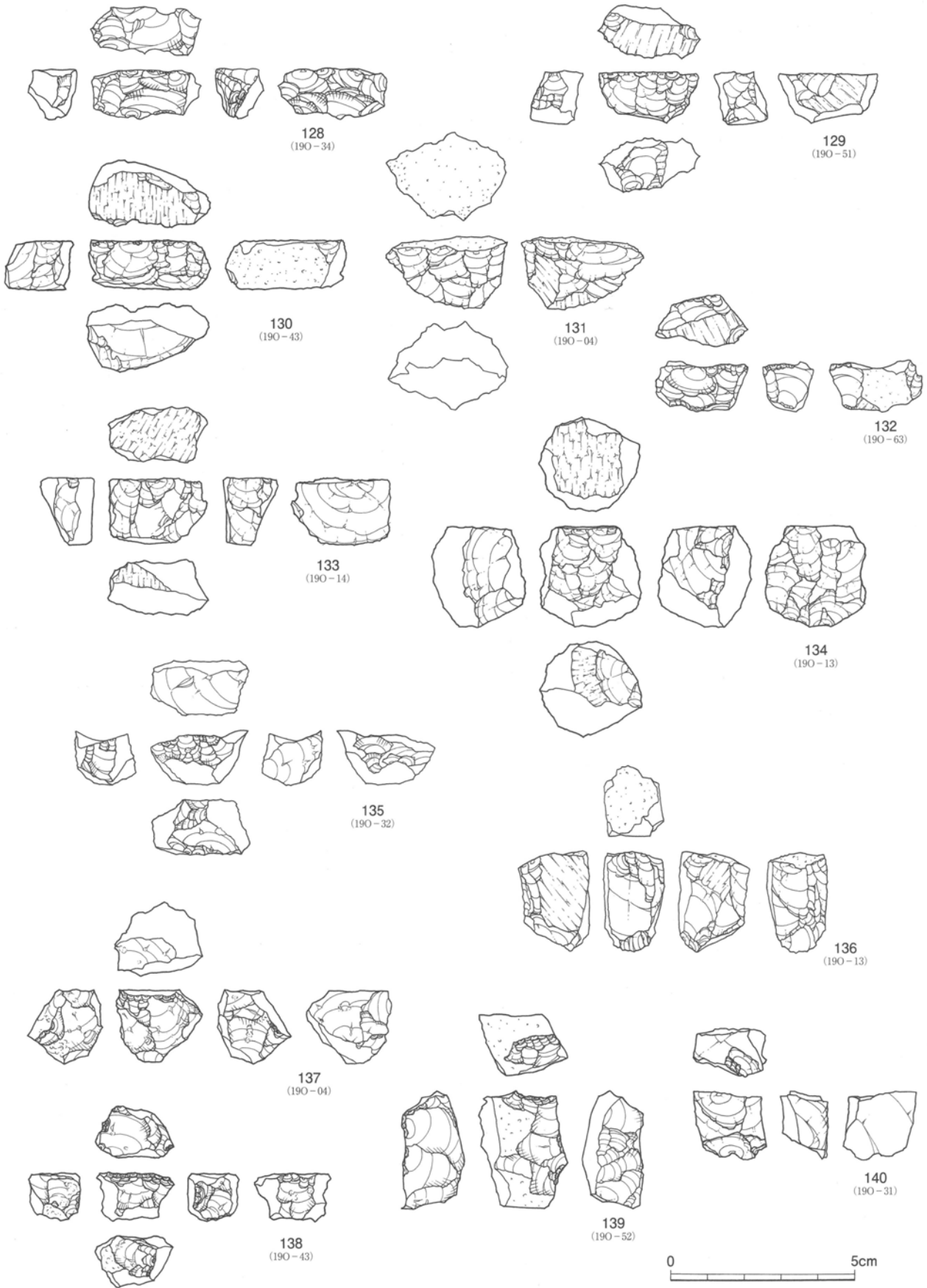
石核（第65・66図128～151） 石核及び残核と考えられる資料は多量に出土しているが、紙数の関係から代表的なものだけにとどめた。128は側面がほぼ三角形を呈し、すべての平坦面を打面として採用してお



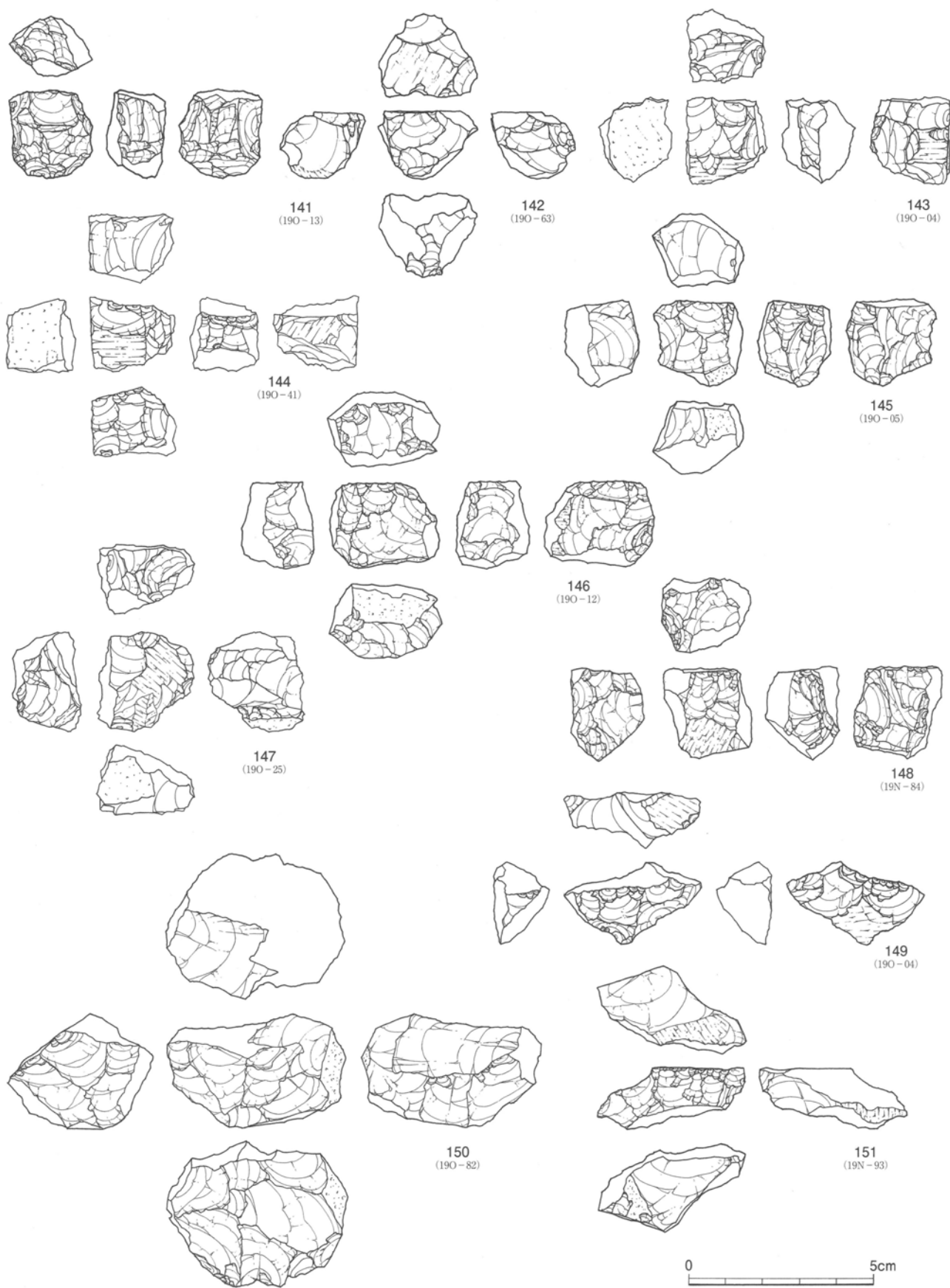
第64図 SX-028出土石器 (6)

り、良質な石材ということもあり典型的な残核となろう。129は上下両端に節理面が認められるところから母岩の厚みは15mm程度と推測できる。130も同程度の厚みを有する母岩であり、ともに小さな打面調整が認められる。131では打面調整はほとんどみられず、周囲からくまなく剥片を剥離しており、上下両端の節理面から20mmほどの厚みを有した母岩であったことが理解できる。132は、平坦な自然面と節理面の双方を打面としている。133は17mmほどの厚みをもつ母岩であり、剥離の枚数は少ない。134は石核らしい遺存状態を示しており、周囲は上下両端から剥片剥離されている。母岩は厚い部分で25mmを越えており、大きい部類に入ろう。135は打面左側がやや湾曲しており、使用痕を残すことから削器として使用されたものと考えられる。136は平坦な自然面を打面としており、石核としての形状は整っている。だが節理面が左右両側に認められ、板状母岩の厚みとしては15mm程度となる。137・138は平坦な面を利用し、くまなく剥片剥取している。139は厚みが15mm～16mmの板状の母岩で、各面では数枚の剥片を剥離後、鋭いエッジ部分に微細な使用痕が認められる。140は、石核としては小さい部類となろう。下端の湾曲部では139同様に微細な使用痕が認められる。141は全面にわたって剥片を剥取しており、いかにも残核に相応しい遺存状態を保持している。142は20mm弱の板状母岩を石核としたもので周囲三面から剥離している。143～148は下端部での節理面は剥離により確認できないため、母岩としてみた場合かなり厚みを有した板状原石を採用しているものと思われた。このためいずれの資料も残核らしい形状の遺存を示している。149は残核の打面部に使用痕が認められるタイプで、湾曲した部分では微細な剥離痕が顕著に認められる。151も同様な痕跡を有する。150は最大の石核となり、両側に認められる自然面と節理面間での厚みは45mmを計測する。打面は大きく剥離した面に設定され、自然面の部分を除き半周するように剥片剥取をおこなっている。

以上のように、これらの石核群を観察すると打面部には節理面を利用していることが多く、確実な自然面はあまり観察できなかった。このことから本遺跡に搬入された石材は板状の原石を運んでいるものと考えることが妥当のようである。素材となる板状の原石は、150のように分厚いもので5cm弱、多くは133・



第65图 SX-028出土石器 (7)



第66图 SX-028出土石器 (8)



第67图 SX-028出土石器 (9)

142のように2cm程度のものであったことが節理面までの厚さを計測することによって推測できた。

石材は、128・135・137～139は黒曜石、他はすべてチャートである。なお、128の黒曜石では不純物の含有は認められず、半透明を呈している。139は縞状の節理面が幾層にもみられ、不純物は含まないがガラス質ではなく光沢に乏しい。他の3点は黒色で小石状の不純物を含む。

磨製石斧（第67図152～155） 本地点における石斧類の出土は少なく、磨製石斧が4点出土したのみであった。152は小型品で遺存部は長さ24mm、幅13mmを計測し、頭部が若干欠損しているもののほぼ完形品といえる。形状からみて細部の加工に使用されていたものであろう。薄くきれいに研磨された刃部は、使用をものがたるかのように磨耗痕が認められる。さらに側面では研磨により明確な稜までも作出されており、小型の精巧な磨製石斧といえるものである。石材には蛇紋岩を用いている。153も小型品となろう。上部の約1/3は欠損している。遺存部を観察する限り、本資料も精巧な仕上げをしている。刃部の研ぎ出しは鑿を思わせるような鋭さを有する。側面の研磨も丁寧なものとなっている。石材は黒色を呈した頁岩である。154は楕円形の素材を採用しており、全長64mm、幅41mmを計測する。本資料は河原石状の素材を用い、全面を軽く研磨した後に両面から刃部を研ぎ出したようである。丸みを帯びた刃部には数か所に小さな破損部が認められる。また側面には敲打したような打痕も認められる。石材には緑色凝灰岩を使用している。155は刃部が欠損しており、破損後に整形し敲打具として使用されたようである。表面・側面ともにきれいに研磨されていたようであるが、器面の風化が著しくザラザラとした面に変化している。石材は輝緑岩である。

敲石（第67図156～160） ここでは明確な打痕が認められる資料について敲石と分類し図示した。本地点は石器製作跡として捉えることができるため当然のことともいえる。掲載した資料については、157を除きすべて上下端に顕著な使用痕が認められる。形状では、156・160は比較的小型品といえようが、158・159では全長が9cm前後となる。157は遺存する形状や石質から磨製石斧の破損品を再利用したものと思われる。明確な研磨痕は認められないものの、表面の一部は滑らかな感を呈している。158は使用中に破損したものであろう。

使用石材は、157が頁岩、160が石英斑岩を採用し、他は砂岩で構成されていた。

(2) SX-026（第68～71図、図版12・231～235）

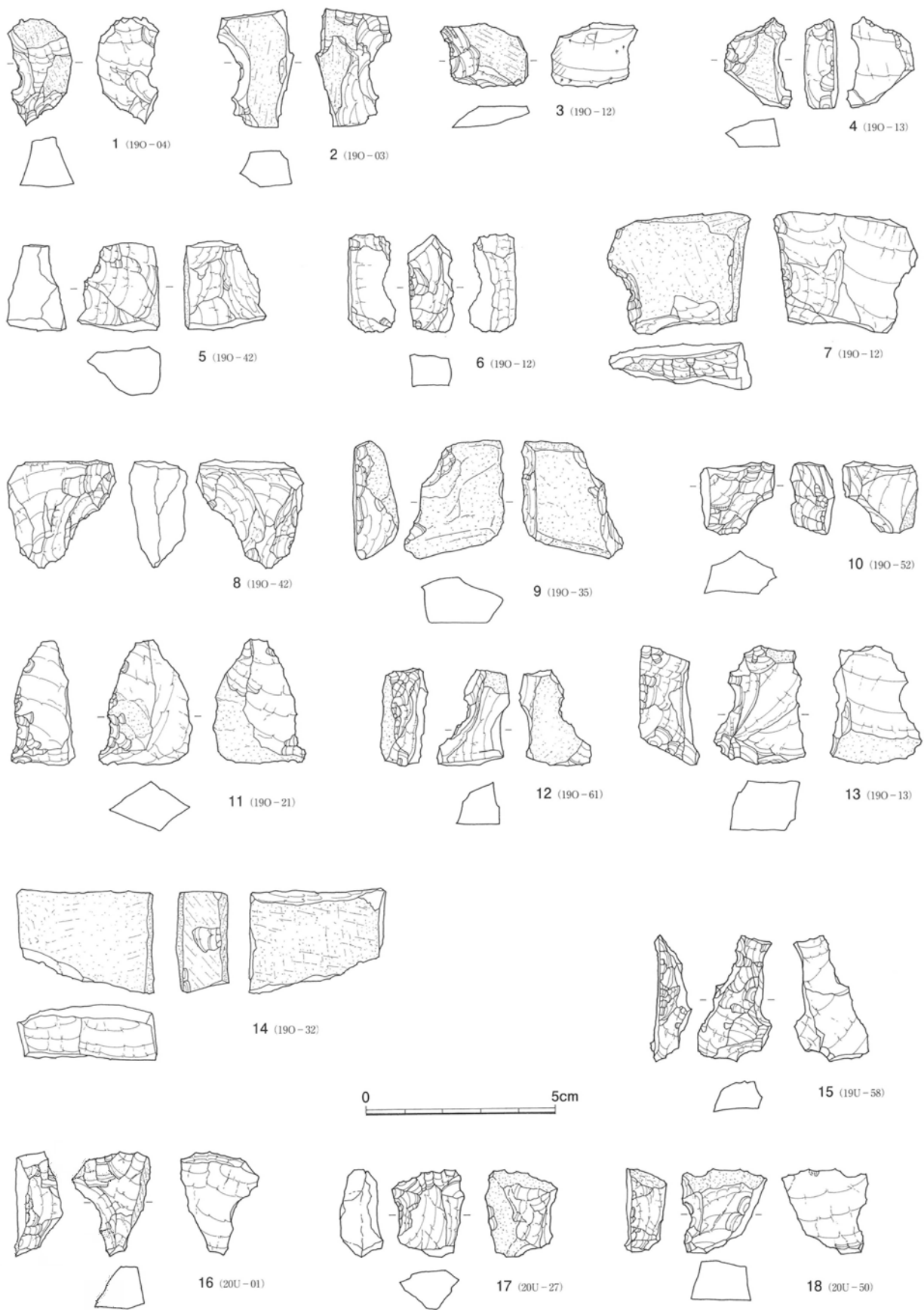
本地点は南に延びる舌状台地の先端部にあたり、土器群としては早期の撚糸文系土器が多量に出土しているが、確実に土器群に伴うという根拠は希薄である。周辺にはSK-15・23といった陥穴やSK-037・075・077・082・087といった早期後半の炉穴等も検出されている。図示したように大グリッドでいえば、20U区の西側に集中して石器・剥片が検出されており、その一部は19U区にまで及び、ほぼ南北に延びる楕円形状に分布していた。その内容についてみると、石器を含む剥片類は大グリッドで19・20U、20Tに及び、総数約1,000点を数えた。なかでも最も多く出土したグリッドは20T-91、20U-21・22の3グリッドでそれぞれ各100点を越える出土数を記録している。また本地点で使用された石材は、チャートが主で全出土数の87%を占め、次いで黒曜石となり、その他の石材は僅少で3.5%となっている。器種・石材等については、周辺部を加えると以下の内訳となった。

チャート 864点（石鏃2点・錐1点・楔1点・搔削器6点・未製品0点・石核27点・剥片類827点）

黒曜石 90点（石鏃1点・錐0点・楔0点・搔削器0点・未製品0点・石核0点・剥片類89点）

その他 32点（石鏃2点・錐0点・楔0点・搔削器1点・未製品0点・石核0点・剥片類29点）

以下、本地点及び周辺域から出土した石器群について器種別に記述していく。



第68图 SX-028·026出土石器

石鏃（第69図1～5） 本地点から出土した石鏃は5点と少ないが、すべて20U区の密に分布していた範囲から検出されている。形状は図示したように様々である。出土している土器群は早期の撚糸文系であるが、それを特徴づける石鏃とはいえない。

1は唯一完形品で、先端部に特徴を有し五角形を呈している。基部の挟りは湾曲を示す程度で強くはない。整った形状に整形された丁寧な作りとなっている。2は基部と先端部に僅かな欠損が認められるものの、細身でかつきれいに仕上げられている。3も先端部が欠損している。小型品ともいえようが中央部は分厚い。4も小型品といえよう。これも一部に欠損が認められるが、先端部は鋭い作りに仕上げられている。5は基部のみの遺存で分厚い剥片を素材としている。全容は理解できないが、その破損状況から製作時の失敗によるものと見做される。

石材は、1が黒色安山岩、2～4がチャートである。5は不純物を含まない良質の黒曜石となる。

石錐（第69図6） 湾曲した縦長の剥片を素材としており、中央部は断面三角形となる。先端の刺突部では、断面が三角でほとんど調整は加えられていない。基部は薄く持ちやすいが、作りとしては概して粗雑である。

石材は、黒みがかったチャートを用いている。

削器（第68図15～18、第69図7・8） 本地点でも第10図に示したように若干挟りの認められる削器が検出されている。4点を図示したが、明確に挟り部が認定できるものに限った。15は左側縁に2か所に挟りを設けている。主要剥離面から剥離しているが、剥片剥離とは明確に異なる二次剥離と見做される。16も分厚い素材を用い、左側縁に緩やかな挟りを微細な剥離によって形成する。挟られた部分には使用による破損も認められる。17は、その形状から楔形石器と近似するが、片側だけの剥離となっている。18も表面左に湾曲部が設定されており、ここでは平坦な主剥離面から大きな剥離により整形した後、刃部を微細な調整で湾状に作出し削器としている。

他の2点は前者と異なり、7は表面に自然面を残した大きな横長の剥片を素材に用い、基部にあたる部分を削除して製品としている。加工は表面のみならず裏面にまで及ぶ。素材が分厚いため頑強な石器に仕上がっている。8は扁平な礫を素材にしており、片面だけの加工で製品としている。

石材は6点ともチャートであるが、8だけは珪化が認められない石質である。

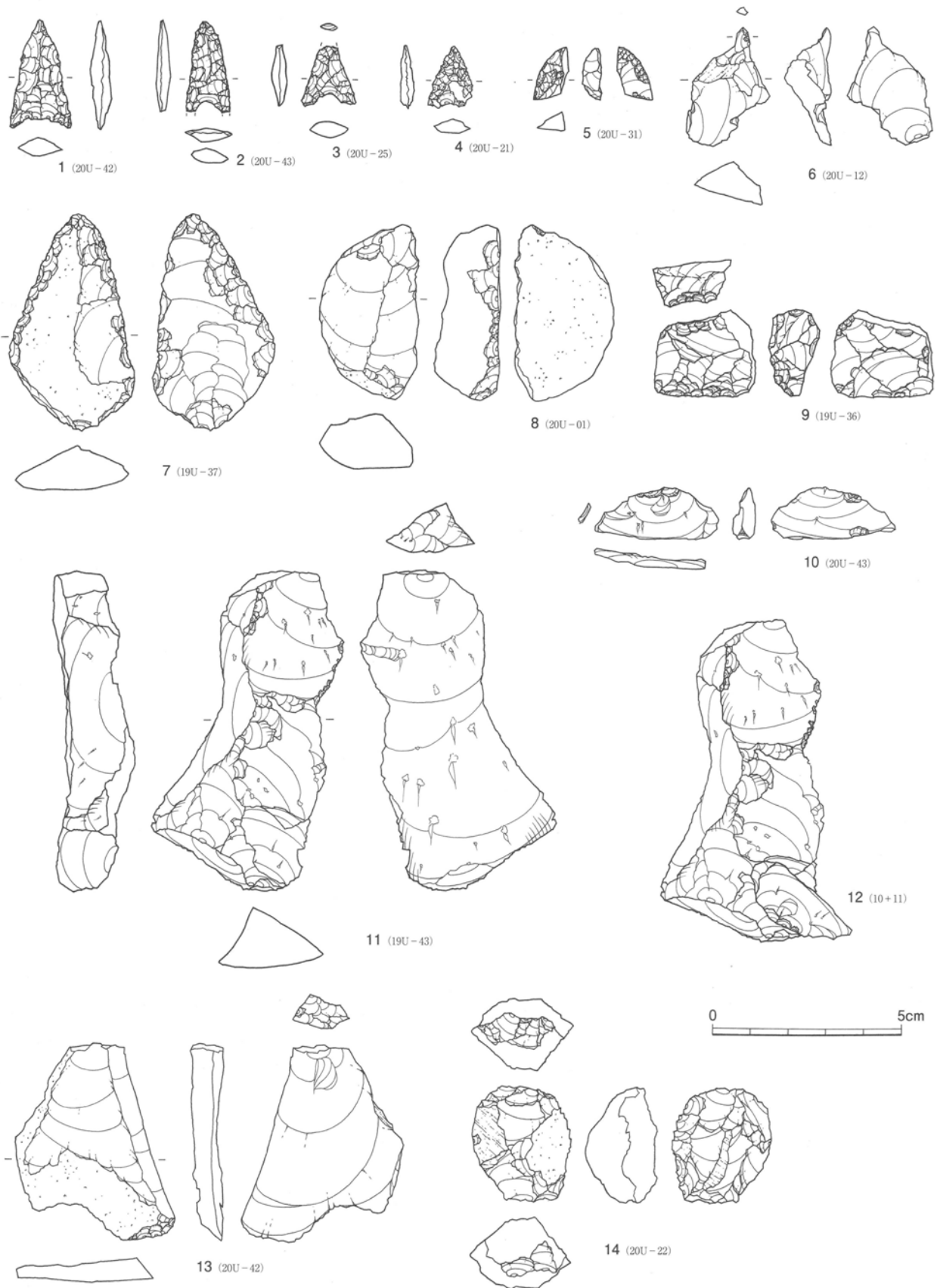
楔形石器（第69図9） 9は下端部に顕著な打痕が認められるため楔形石器としたが、残核を利用したものであろうか上部の平坦面を打面とし、剥片を剥離している。

石材はチャートである。

加工剥片（第69図10・11・13） 10・11は同一グリッドから出土した剥片で接合資料となった。先に10の小剥片が剥離され、次いで打面再生を目的として11の大型剥片が剥離されたものである。ともに石器として使用されたらしく、10では表面上部に、11では右側縁に調整剥離を施している。削器のような使用法が考えられよう。13は大型剥片の下端部を数回の剥離により刃部を作出したもので、用途としては搔器のような使用法が考えられよう。表面には自然面を多く残す。

石材は、10・11が不純物を混入する黒色みの強い黒曜石であり、13は淡い灰褐色を呈した嶺岡頁岩であった。

石核（第69図14） 14は残核で、表面に自然面か節理面が認められる。上部では打面調整が数回にわたっておこなわれたようであり、縦方向に剥離痕がみられる。だが剥離痕の観察からは良質な剥片が得られた



第69图 SX-026出土石器 (1)

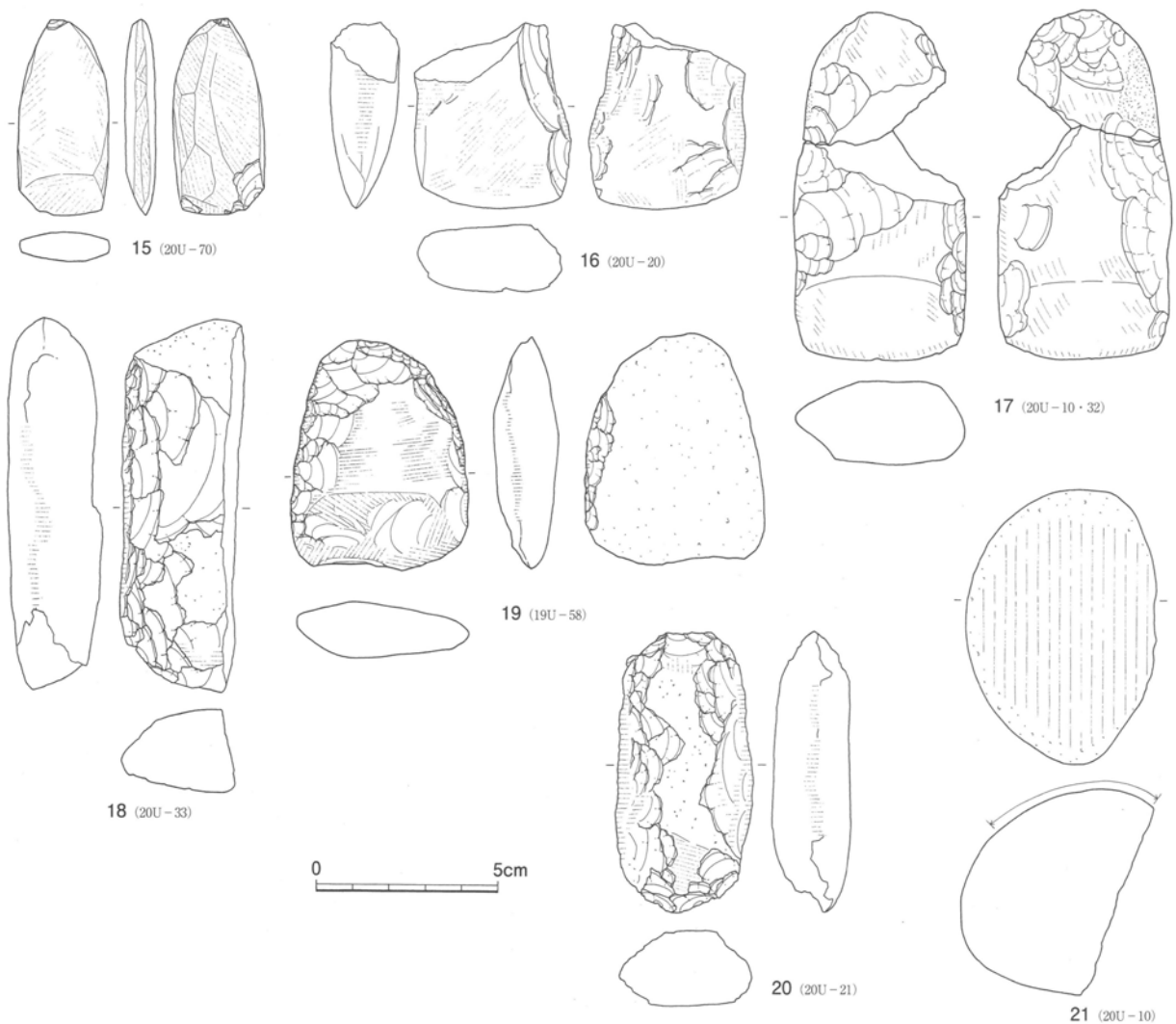
とは思えないほど裏面の凹凸が激しい。

石材は黒色みの強いチャートである。

磨製石斧（第70図15～17・19） 本地点では磨製石斧が4点検出されている。15は小型で薄く、全体が精巧に研ぎ出された石斧で刃部の一部に剥離が入るがほぼ完形品といえよう。刃部の片面が大きく研がれ片刃を思わせる。側面でも稜線が明確に形成されるほど著しく研磨しており、形状を整えた仕上げとなっている。16は上半部欠損品であるが、残された刃部では破損部の再研磨され、側面では打痕も認められる。17は、20U-10と20U-32グリッドからの出土品が接合した例であり、上半部の一部が失われている。遺存状況から推察すれば、きれいに整形された形状を保ち刃部の研磨も正確に仕上げている。19は扁平な礫の周囲を打ち欠き、刃部を研ぎ出した簡単な作りとなっている。裏面での研磨はそれほど認められない。また刃部は使用による破損が著しい。

石材は、15が頁岩、16が輝緑岩、17が安山岩、19は砂岩となっている。

打製石斧（第70図18・20） 打製石斧と考えられるものが2点出土した。18は約半分が失われており、刃部欠損と併せて石斧としたが敲石の可能性もある。側面での打痕が著しい。20の表面は円滑で、ある程度研磨されているような感を呈するが、周囲は使用と整形のための剥離が認められるため打製とした。



第70図 SX-026出土石器(2)

石材は18が角閃岩，20が緑色凝灰岩である。

磨石（第70図21） 顕著に使用された磨石が1点検出されている。欠損品ではあるが，表面は光沢を有するほどよく使用されている。このため欠損後も使用されていたものであろう。

石材は砂岩である。

(3) **SX-027**（第15図，図版13・232～235）

本地点は早期の条痕文系土器群を出土した地点であり，希薄な散布ながら一定の範囲で石器群が検出されている。第15図に示したように20V区の北側から20U区にかけて29点の剥片を主としたものであった。遺構との関係を見ると，北に近接して炉穴としたSK-087あるいは分布範囲内にSK-166・167の早期に属すると考えられた土坑が認められており，これらの石器群は時期的にも早期後半の条痕文系土器群に伴う可能性も否定できない。石材についてみると，ここでも58%をチャートで占めており，この時期でも採用する石材については変わらない。このため所属時期については即断することはできなかった。なお，石鏃等については周辺出土の項で説明することとしたい。

チャート 17点（石鏃1点・錐0点・楔0点・搔削器2点・未製品0点・石核0点・剥片類14点）

黒曜石 9点（石鏃2点・錐0点・楔0点・搔削器1点・未製品0点・石核0点・剥片類6点）

その他 3点（石鏃1点・錐0点・楔2点・搔削器0点・未製品0点・石核0点・剥片類0点）

(4) 17T区（第15図）

本地点においても若干ではあるが石器群の出土が認められた。前述した地点と比較して集中的な出土とは言い難いが，17T-43グリッドから計33点が出土しており，そのうちチャートが32点を数えた。内容についてみると，石核5点と剥片27点で構成されているため本地点でも石器製作がおこなわれていたものと考えられ本項に加えた次第である。周辺での検出遺構を見ると，本地点の北にSK-268とした早期の炉穴とともに隣接した18T区では中期に属する住居跡が確認されているが，本区の石器群と関連するような確実な資料は出土していない。また下段に示したように本区の石器群は石核と剥片とによって構成され，製品の出土は認められなかった。付近での製品出土は，少し離れて17T-09グリッドで石鏃2点が検出されている。石材についてみると，ここでもチャートが多く全体の75%を占めていた。

チャート 47点（石鏃0点・錐0点・楔0点・搔削器0点・未製品0点・石核7点・剥片類40点）

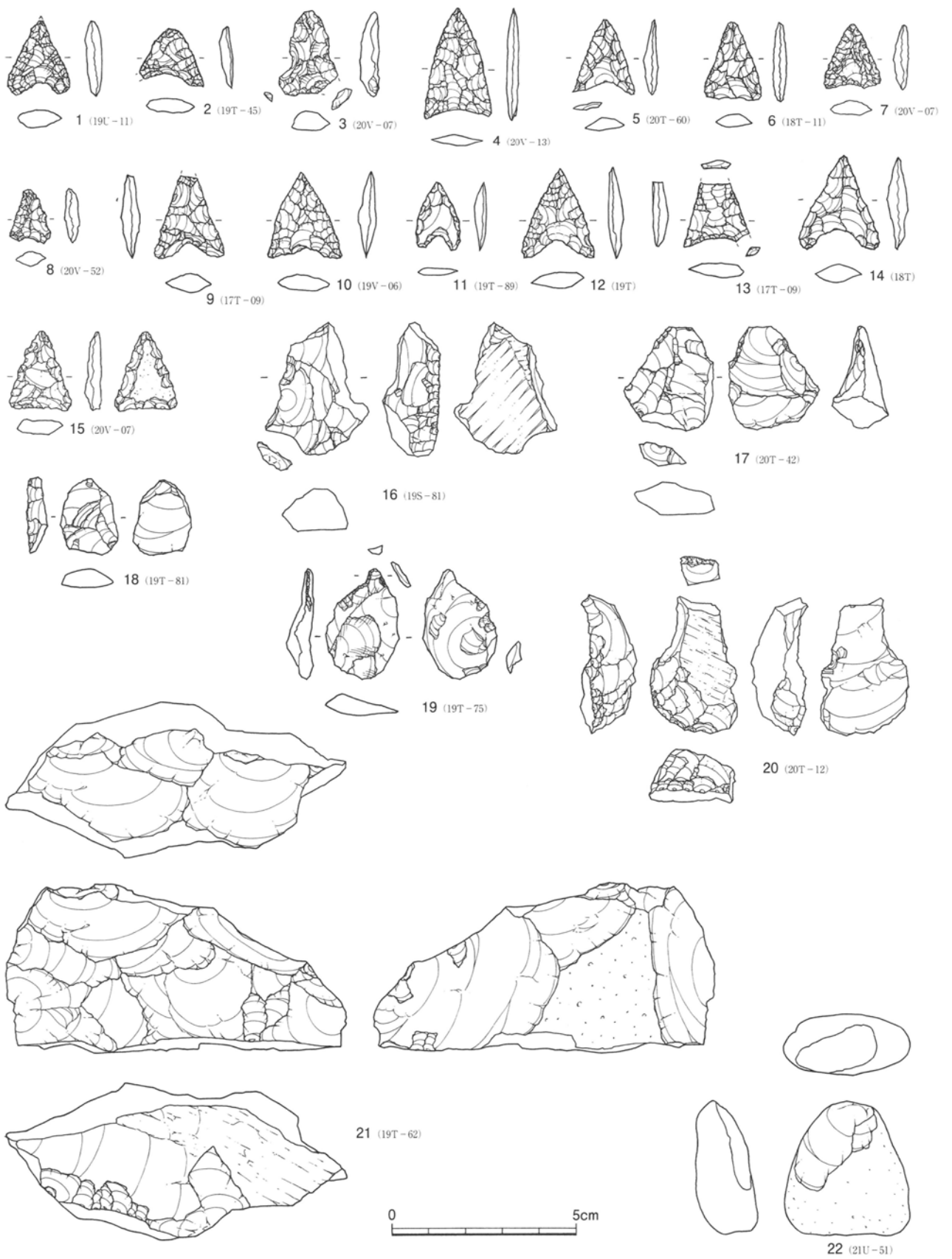
黒曜石 14点（石鏃0点・錐0点・楔0点・搔削器0点・未製品0点・石核0点・剥片類14点）

その他 1点（石鏃0点・錐0点・楔0点・搔削器0点・未製品0点・石核0点・剥片類1点）

2 製作跡周辺の石器群

ここではSX-026の中心部を除外した周辺部と，前述したSX-027・17T区を含めた調査区の南側に扇状に広がる区域で検出された石器群をSX-026・027周辺出土石器群として取り扱い一括して記載することとした。また本区域では中期に属する遺構も存在するが，検出されている土器群は早期を主体としたものであったことは前述したとおりである。しかし，早期の土器群とともに後期の土器群も出土しているため即断することは避けておきたい。

石鏃（第71図1～15） 石鏃は17～20列のS・T・U・V区などから15点が検出されている。ここでは形状別に羅列しなかったが，図示したように様々なタイプが存在する。基部の湾曲が緩やかで三角形鏃に近いものに6・15，やや湾曲が認められるタイプに4・7・10・13が該当しよう。この中でも4の作りは絶品と



第71图 SX-026·027周边出土石器

いえよう。薄い剥片を素材とし、周囲を丁寧にくまなく押圧剥離を加え左右対称に仕上げている。13も欠損品であるが、作りは精巧である。3は裏面に主剥離面を残す。基部の湾曲は小さなものであるが、両側縁に挟りを付している。その他は基部を挟る普遍的なタイプであり、11・12・14などでは深く挟られている。

石材は、1～3が黒曜石で、とりわけ1は半透明の良質品を素材にしている。ここでの3点には不純物の含有は認められない。4～9はチャートで、4は淡褐色、5・9は灰青色で、他は黒色系である。10は黒色安山岩、11はデイサイトで風化が著しい。12は碧玉、13は流紋岩、14・15はホルンフェルスとなっている。

未製品（第71図16～18）16は、その遺存状態から石器製作の素材となったものと考えられるが、石鏃と特定することはできない。左側縁には鋭い尖頭部が作出されており石鏃を意識したものとも思われるが明確な加工は認められない。17は、その形状から石鏃製作を目的としたものであろう。左上部に表裏からの剥離が若干認められる。18も石鏃を意識したものとなろう。左側縁には数回の剥離痕が認められる。

石材は、いずれも黒色みの強いチャートである。

石鏃（第71図19）横長状の剥片の一部を折断し、その後左上部に微細な剥離を施し鏃先を作出している。基部周辺での加工は認められず、作りとしては簡素である。

石材は、半透明の中に縞状の帯がみられる良質の黒曜石である。

搔器（第71図20）平坦な節理面の方向から丁寧な剥離により刃部を作出している。左側面でも湾曲状に挟るような加工が施され、削器として使用されたものであろう。

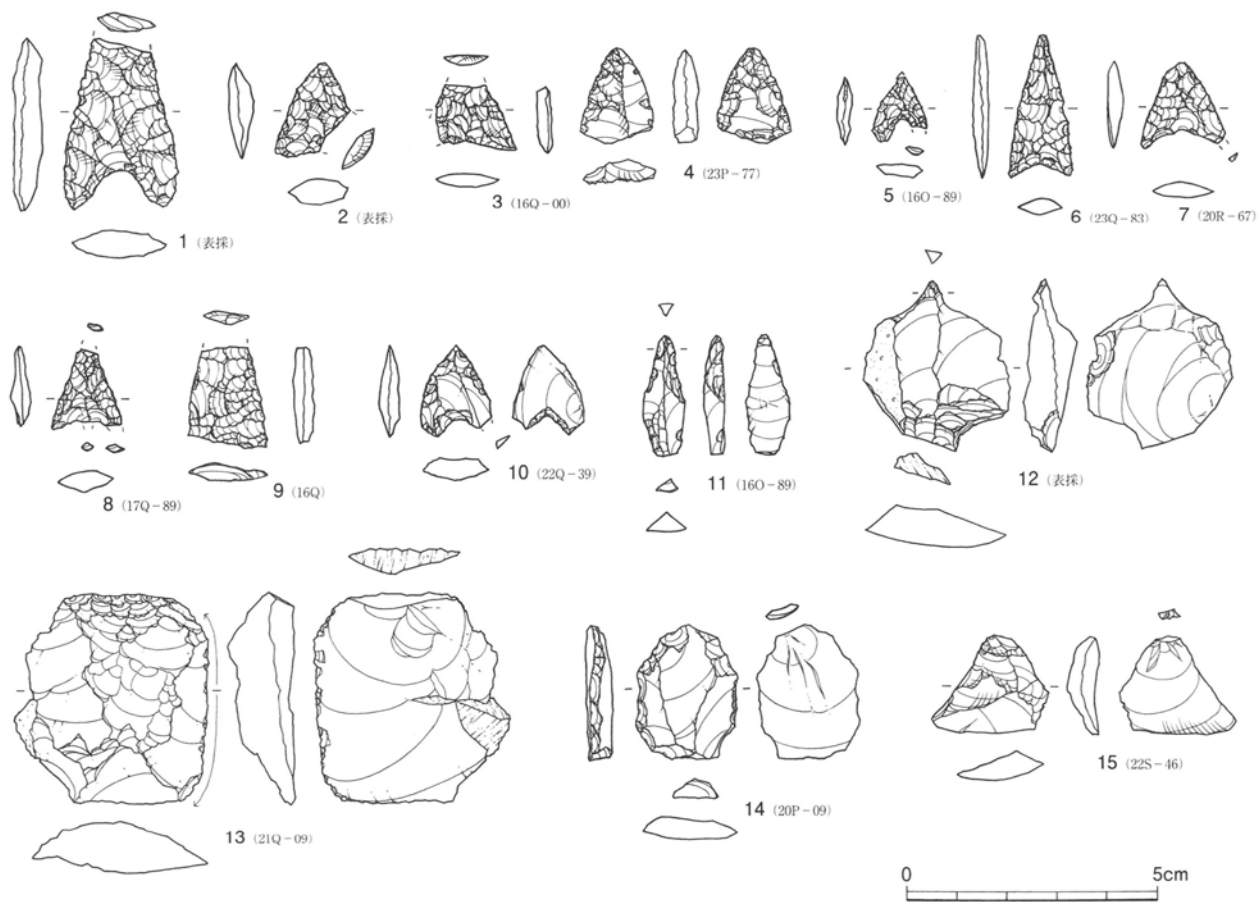
石材は、黒色系のチャートである。

石核（第71図21・22）21は石核として取り扱ったが、打製石斧の未製品とも考えられる。平坦な自然面を打面とし、周囲を大きく剥離している。一方、22は小礫の頂部に2回以上の加撃が認められる。チャート製とは明らかに異なる。石器としての使用を考えると、楔等の用途も想定できよう。

石材は、21がホルンフェルス、22が石英である。

磨製石斧（第73図1～9）ここでは9点の磨製石斧の出土が確認されている。5・6を除き遺存状態は良い。1は小型品でほぼ完形品といえる。表面は大きく磨き込まれ、裏面の研磨は僅かなものとなっている。形状としては片刃に近い。2もよく研磨され、1と同様片刃に近い形状を有し、裏面では使用の際に生じた剥離痕が認められるが、若干、再研磨の痕跡を残す。3も同様な作りで、刃部は鑿先状に精巧な研磨が施されている。頭部は使用中に生じたものか打痕を残す。4は顕著に使用されたものであろうか刃部は跡形もなく敲打による剥離痕のみを残す。本来、きれいな磨製石斧として使用されたきたが、破損後は打製石斧的な使われ方をしたものであろう。5は、大型品となろうが頭部だけの遺存となる。表面のみならず側面にも研磨痕が残る。6も本来は大型の磨製石斧であったもので、上半部を欠損後に磨石として再利用してきたと思われる。刃部を形成していた部分では使用による磨耗で丸く変形している。7は長楕円形の礫を素材とし、その一端を打ち欠いた後、刃部を研ぎ出したものである。頭部に打痕を残した完形品である。8は表面の左隅に明確な研磨痕が認められるため磨製とした。刃部は4と同様、敲打による磨耗で、その痕跡は跡形もない。9は分銅タイプの石斧となろうが、側面の湾曲部はきれいに研磨されており磨製品とした。だが石材の性質が板状に剥離し易いため、裏面はほとんど剥落した状態である。

これらの磨製石斧（1～3・7）では、遺存状態の良い刃部を観察すると明確に片面の研ぎ出しを意識しており、木製品加工具としての道具と考えることが妥当と思われた。



第72図 グリッド出土石器

石材には、1は頁岩、2・4・6・8は緑色凝灰岩、3は砂岩、5・7は安山岩、9は粘板岩となる。
打製石斧（第73図10・11） 打製石斧は2点と少ない。10は扁平な礫を右側面から加撃し、半截したものを素材に刃部を整形したものである。作りとしては簡単なものといえよう。11は全面に加工が施された打製品で、19T-95とSI-025（19T-86）からの出土品が接合したものである。

石材は、10が輝緑岩、11がホルンフェルスである。

砥石（第75図1） 欠損品で遺存状態は悪い。火気を受けているためか表面は脆く、ひびさえ認められる。ただ中央部にははっきりとしたなだらかな窪みが認められるため砥石とした。さらに表面では滑らかな部分もあり、磨石としても使用されていたものであろう。

石材は砂岩である。

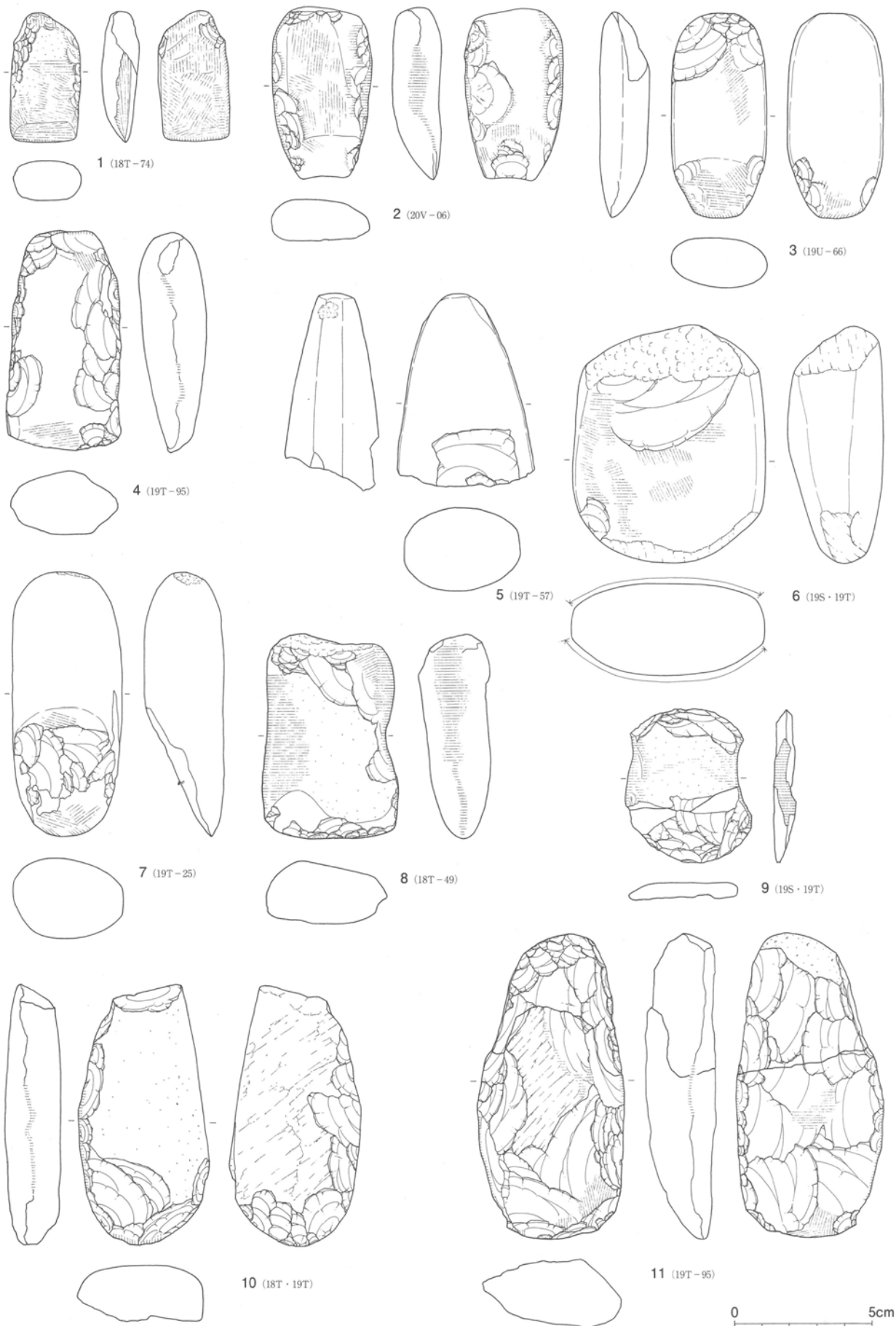
礫器（第75図2・3） 2は、2回の剥離によって鋭利なエッジを作り出している。3は同様に3回以上の剥離痕を認めることができる。確実な使用痕も認められないため明確な用途は判然としない。

石材は、2が碧玉、3が砂岩となる。

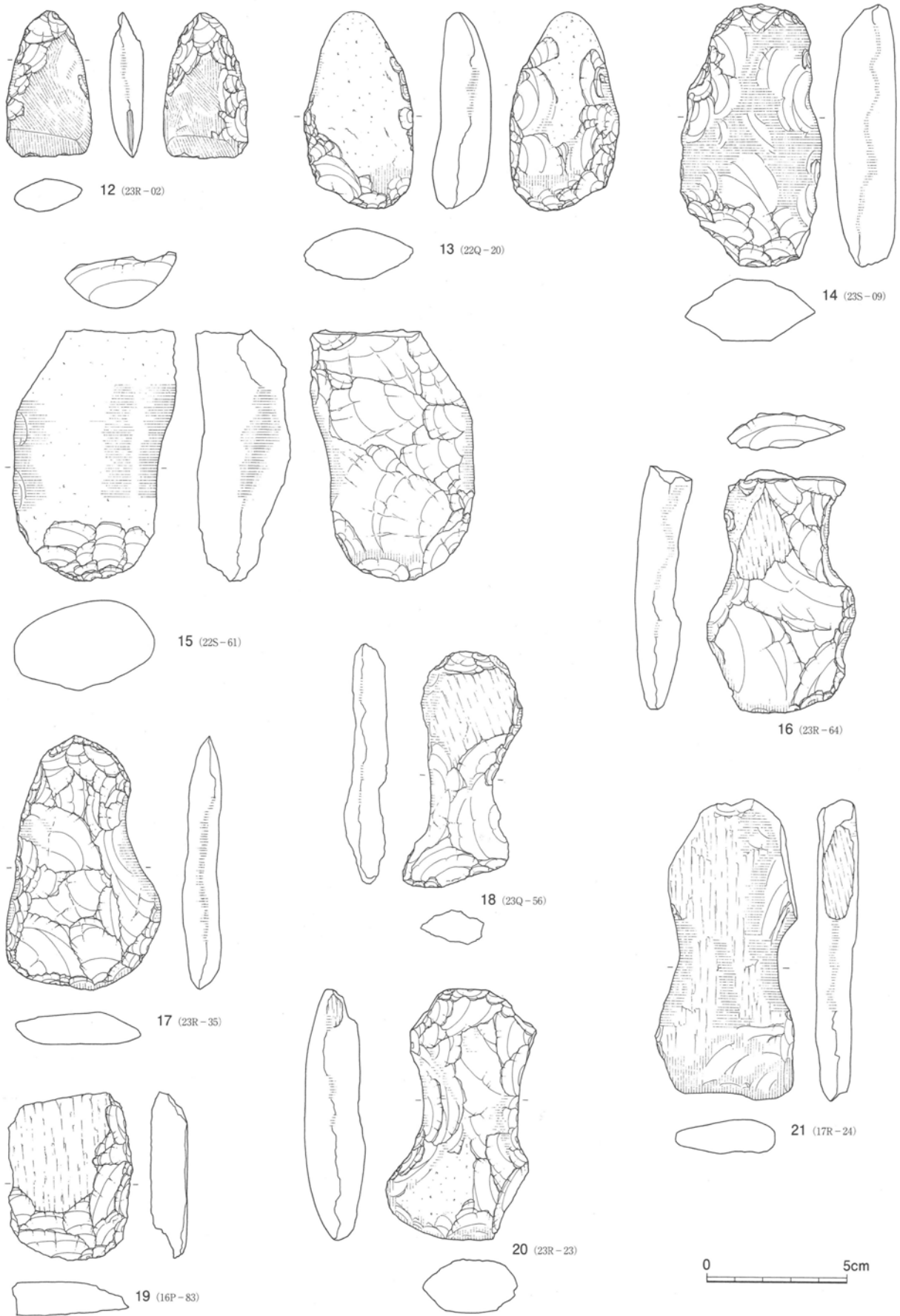
敲石（第75図4・5） 4は、敲石としては小型品となろう。上下両端に顕著な使用痕を認めることができる。5の両端も使用により磨耗している。裏面にはなだらかな窪みも認められる。表面が研磨されているところから石棒などの再利用品となろう。

石材は、4が石英斑岩、5は緑泥片岩（点紋）である。

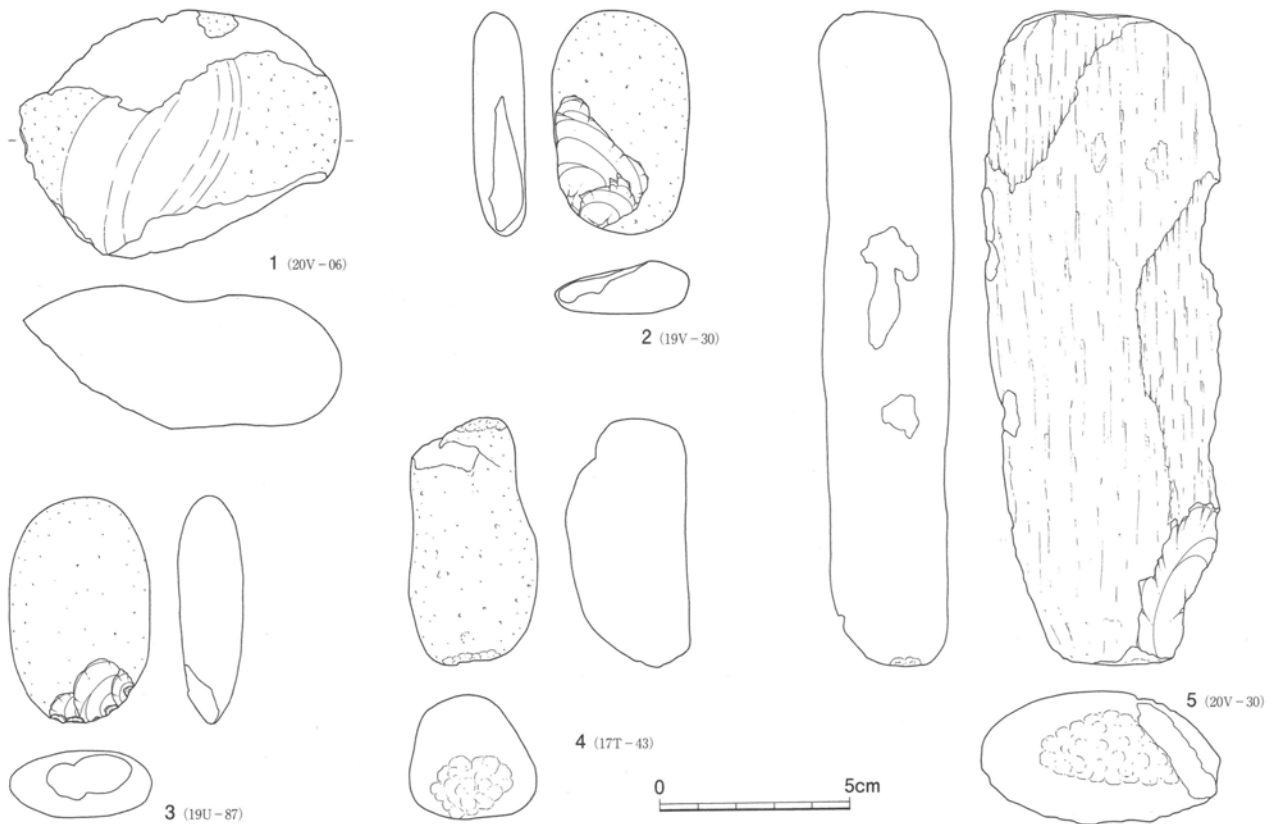
磨石（第76図1～10） 磨石として明確に使用されているものについて図示した。1は欠損品であるが、



第73图 SX-026·027周边出土石器



第74図 グリッド出土石器



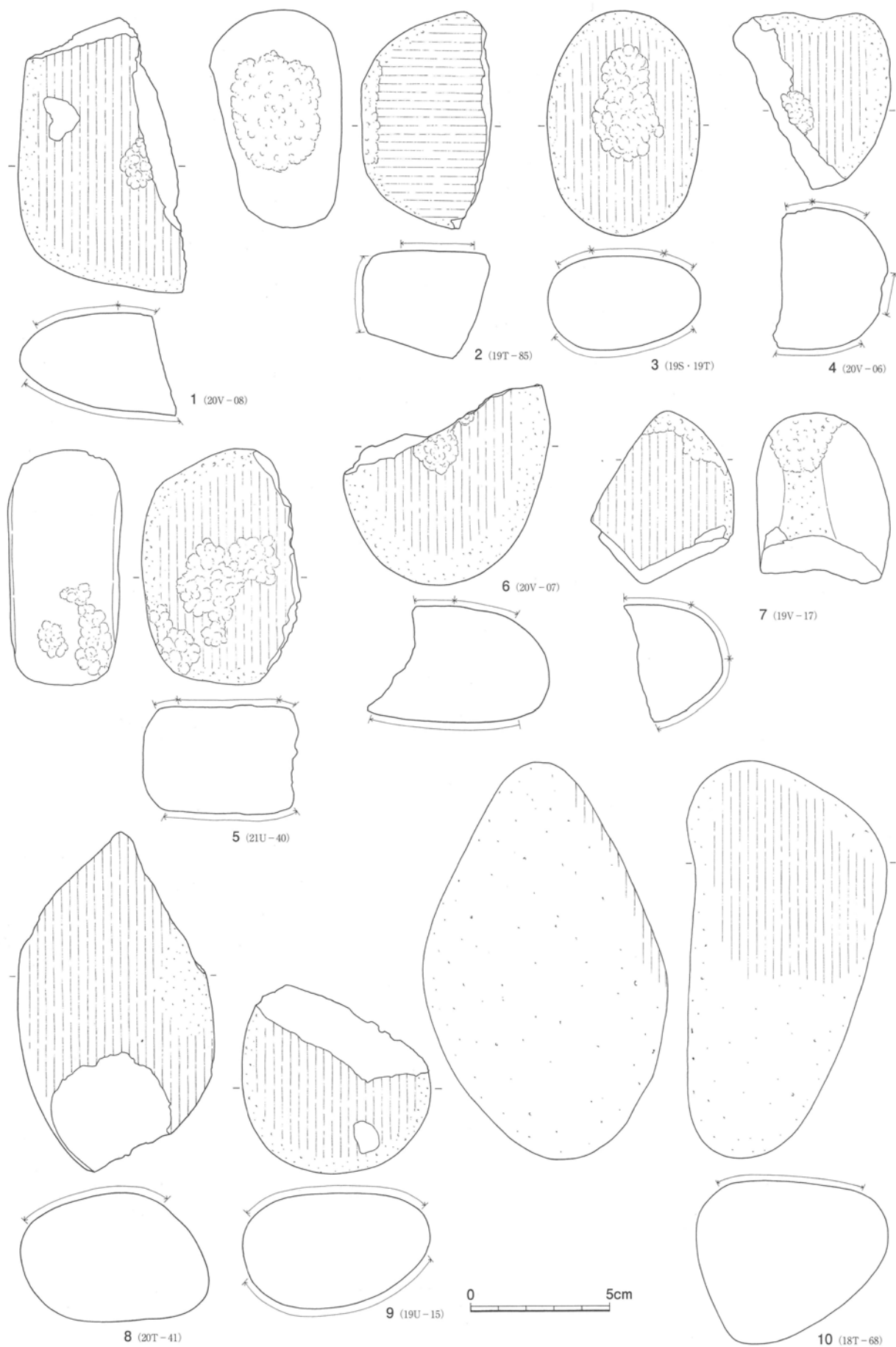
第75図 SX-026・027周辺出土石器 (1)

扁平な礫の平坦面を使用したもので表面には打痕が認められる。2も欠損品であり、遺存部の観察から長期の使用が窺われる。また欠損面での磨耗も著しく、周囲には敲打の痕跡を残す。3は扁平で楕円形の礫を用い、中央部と側面に打痕が認められる。4も欠損品であり、欠損後も上面は敲打具として使用されており、磨耗が顕著である。5は1/4程度が失われているが、長期間の使用で表裏側面とも平坦な面を形成する。6も約1/2が欠損する。表面では顕著な使用痕が認められる。7は少量の遺存であるが、表裏面は使用により滑らかに、側面では打痕が著しい。8は上部を左右から剥離し、鋭角な面を作り出し敲打具の刃部として使用していたようである。表面は円滑で若干の光沢さえ認められる。9も欠損品ではあるが、表面は滑らかで長期の使用を窺わせる。10はやや大型品となる。表面の平坦部を使用しているが、打痕は認められない。

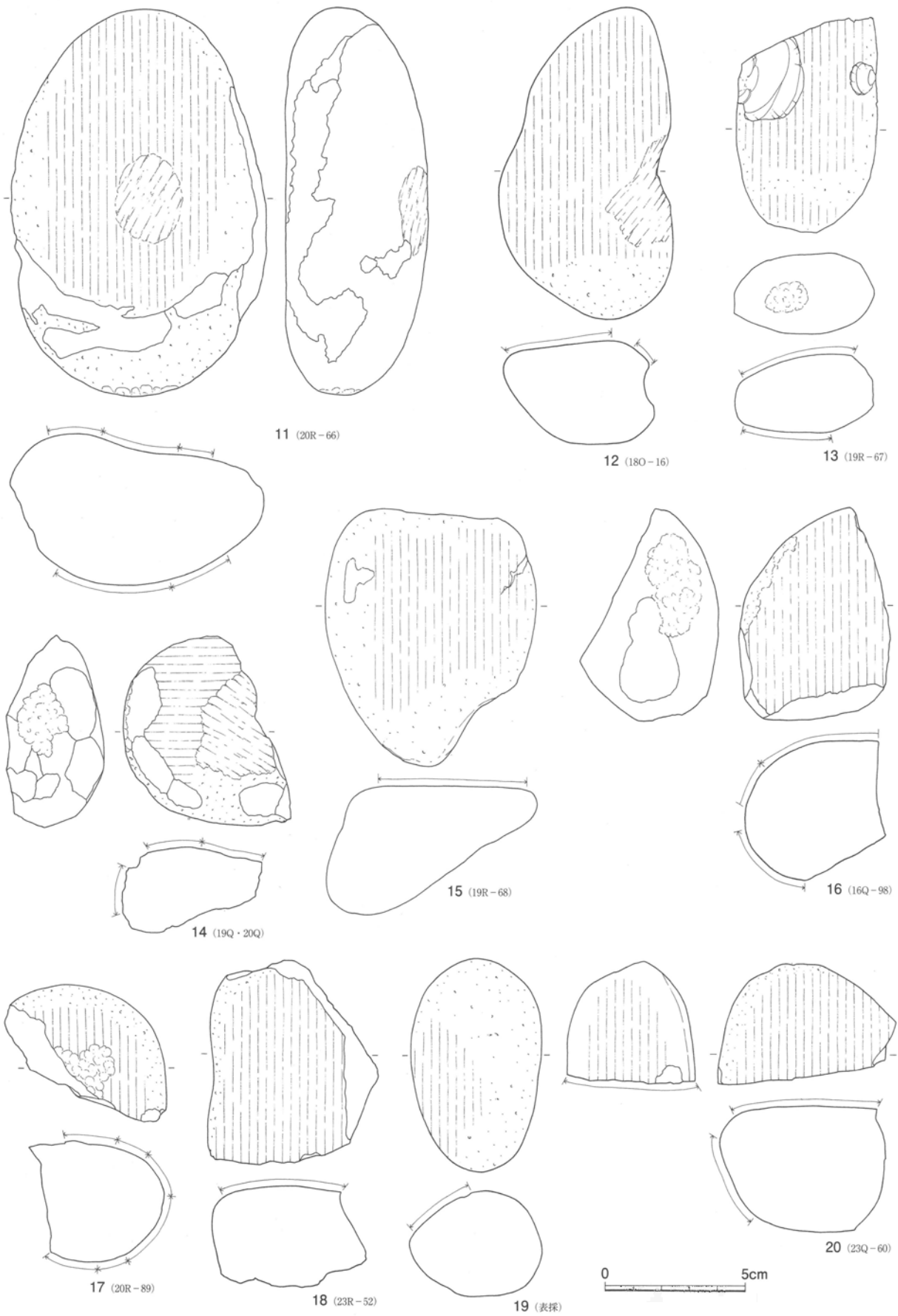
石材は、1が輝緑岩、2が花崗岩、3が斑礫岩、4・6が安山岩、5が多孔質安山岩、7が砂岩、8が流紋岩、9・10が石英斑岩となる。

石皿 (第79・80図 1～5) 1は1/4程度の遺存で、右上部に窪みの中心が位置する。裏面でも中央部が若干窪む。2は板状の素材を整形し石皿としたものである。図示はしなかったが、上部側面は砥石として使用されていた。おそらく縄文期以後に再利用されたものであろう。3は唯一の完形品である。中央部の窪みは、石皿としては小さな部類となろう。4は石皿とするには若干疑問の残るところである。これも右側面は砥石として再利用されており、光沢を有するほど円滑な面が作り出されている。5は、形状的には石皿とも思えるが、使用の痕跡は少なく磨石・敲打石の類として使用となろう。

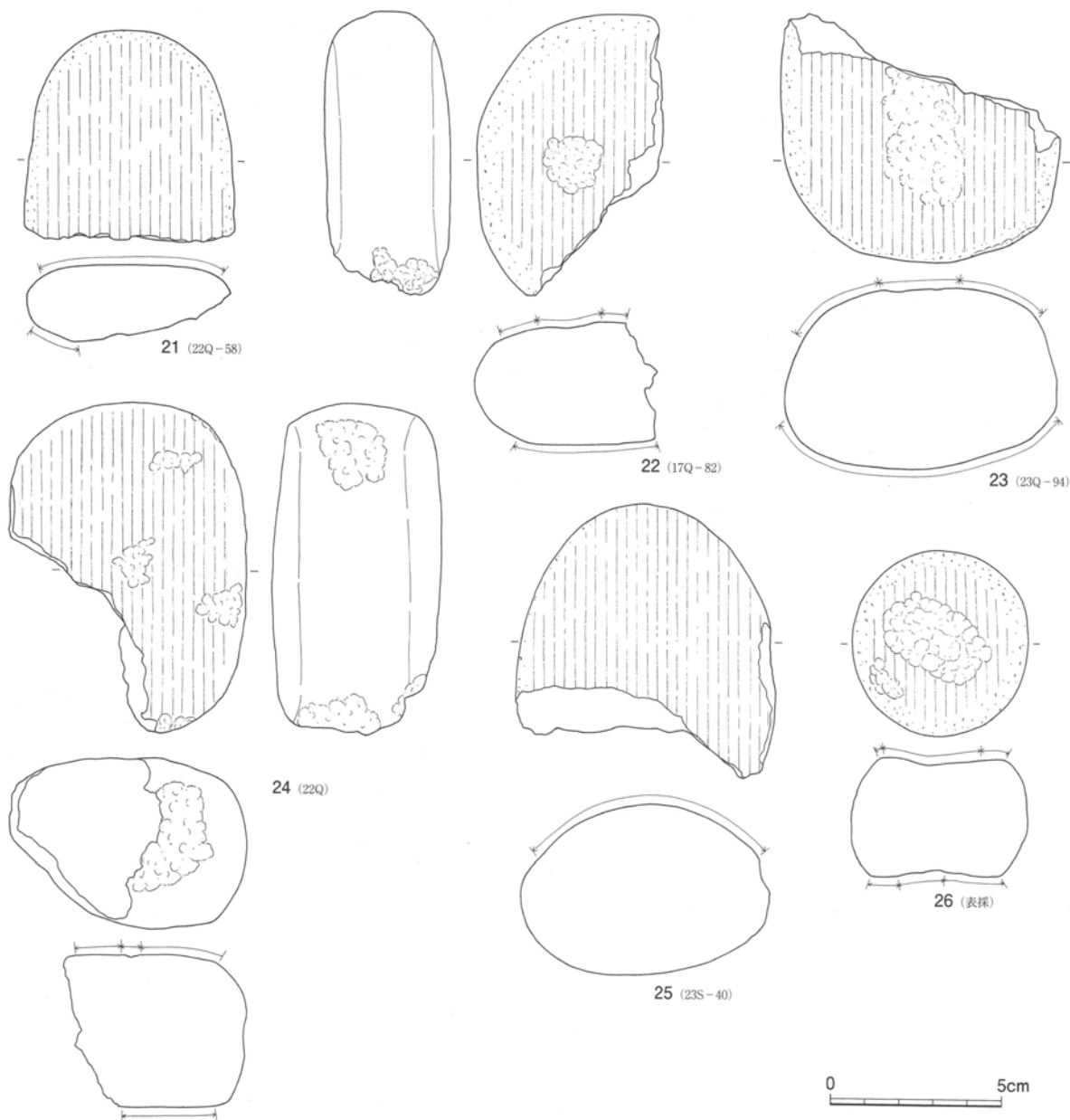
石材は、1・3が閃緑岩、2・4が片麻岩(筑波石)となる。



第76图 SX-026·027周边出土石器(2)



第77図 グリッド出土石器 (1)



第78図 グリッド出土石器 (2)

3 遺構外出土の石器群

ここでは遺構と見做して記述してきた前記4地点を除く、遺跡北側の各グリッドや遺構の覆土中から散発的に検出された石器群について集約したものである。総体的にみれば、製作跡を伴う地点よりも少ない遺物量ではあるが、図示したように一応の器種を構成している。だが、これらの石器類は各所から検出されたもので、所属時期について断定することはできない。

石鏃 (第72図 1~10) 合計10点が出土しているが、欠損品が多い。1は大型品で先端部を欠く。2は素材に分厚い剥片を用いているため作りは粗雑である。3は薄い剥片を素材としており、基部の整形も精緻なものとなっている。形状は三角形に近い。4は一次剥離面が多くみられる。周囲を加工して簡単に仕上げたものであろう。5は小型品で脚の一部と先端部を僅かに欠損する。6は細身の鏃で、左右対称にきれいな押圧剥離が施されている。6~8の基部の湾曲は緩やかな作りとなっている。なお9は欠損が大きい

が、丁寧な押圧剥離で覆われている。10は剥片の周囲を軽く加工し製品としており、裏面となっている主剥離面での調整は抉り部にとどまる。

石材は、1～5が黒曜石で、1・2では部分的に縞状の黒色帯と不純物が若干みられた。6～9はチャートで、10は凝灰岩を採用している。

石錐（第72図11・12）11は断面三角形の細身の錐で、下端の一部を欠損する。裏面はほとんど加工されていない。12は意識的に先端を作出したものではないが、一部に微細な剥離が認められるため錐とした。裏面の左側縁にも整形のため剥離を施している。

石材にはいずれもチャートを用いている。

削器（第72図13・14）13は大型品で一部に自然面がみられる。右側縁に沿って微細な調整痕が認められるため、エッジの鋭い右側縁を主に使用したものであろう。14は左右の側縁が加工されている。

石材は、13がチャートで淡褐色の縞模様が入る。14はホルンフェルスである。

剥片（第72図15）三角状を呈した剥片で、裏面の右側縁に若干の使用痕が認められた。

石材は黒曜石で、半透明な良質品といえよう。

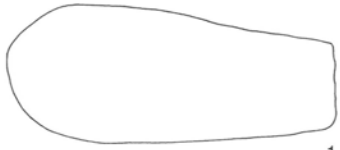
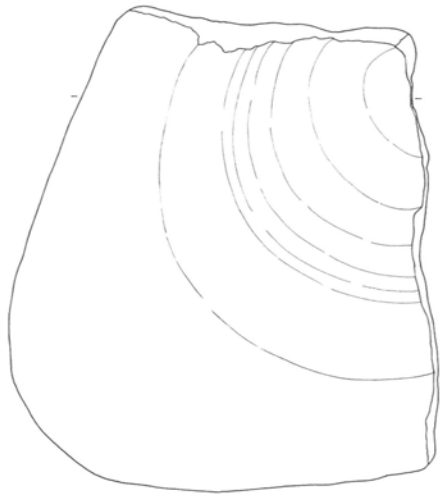
磨製石斧（第74図12・13）12は小型品で、形状は二等辺三角に近い。頭部周辺は小さな剥離で整形され、刃部の研磨は両面から同程度に研ぎ出されている。使用による刃こぼれも全面にわたり、顕著な使用を物語っている。13は一部に研磨痕らしきものが存在するためここに含めた。

石材は、12が角閃岩、13が緑色凝灰岩である。

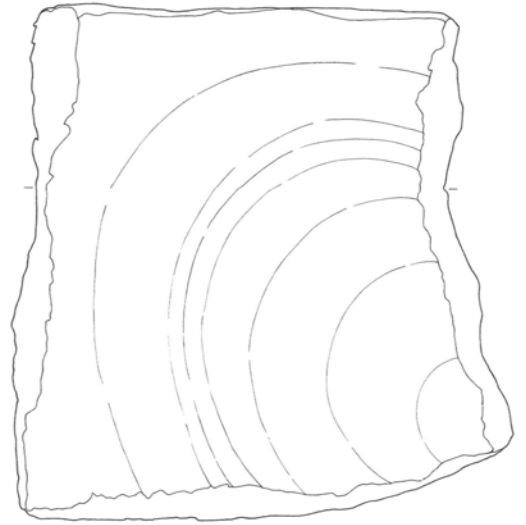
打製石斧（第74図14～21）計8点が出土した。14はほぼ楕円形で滑らかな自然面を残すが、周囲は全面に整形剥離が施されている。研磨については定かでない。15は頭部が欠損しており、表面の加工も僅かなもので作りとしては粗雑である。16～18・20・21は中央部にくびれをもつ分銅タイプとなろうが、17では片側のみみられる。また21では、下端右隅に僅かではあるが両面からの研磨痕が認められる。平坦な刃部を形成するために研磨したものと考え、打製品とした。19は明確には把握できないが、おそらく上部が欠損したものであろう。板状の石材を素材にした簡単な作りである。

石材は、14が頁岩、15が緑色凝灰岩、16・20がホルンフェルス、17が片麻岩（筑波石）、18が緑色片岩、19が石墨片岩、21が粘板岩となる。

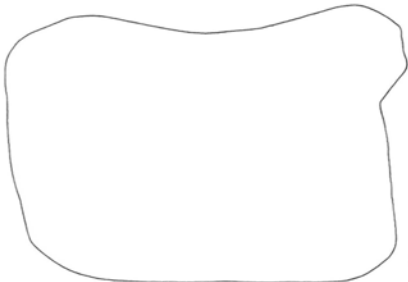
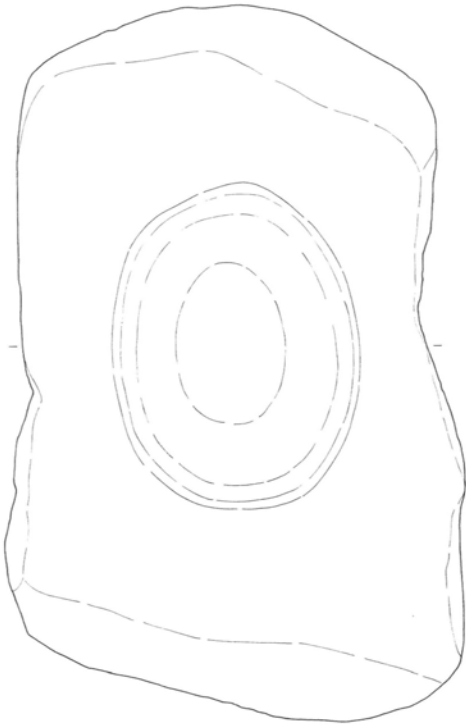
磨石（第77・78図11～26）合計16点を図示した。11は、この中では大型品となろう。周囲は使用による微細な欠損を伴う。表裏面のほぼ中央には明確な打痕を残す。12は右側面の窪みに使用痕を顕著に残す。この湾曲を利用し加工工具としていたようである。13は1/3程度を欠損する。表裏面の中央部は滑らかで側面には著しい打痕が認められる。14も欠損品であり、残された表面は滑らかに磨耗している。15は完形品であるが、表面に若干の打痕と磨耗痕が認められる程度である。16は、約2/3が失われている。円形に近い礫を用いたものであろう。表面はきれいに磨耗し滑らかな面に変化し、側面には打痕を残す。17もその遺存から16と同程度の大きさを有していたものと思われる。打痕は中央部に集中する。18も欠損が大きい。表面はよく使用されており、円滑で光沢を帯びる。裏面には節理面がみられ、その面での使用は認められないため、破損後は放棄されたものと考えられた。19は卵形を呈した礫で、上部に若干の打痕が認められる。表面での使用も僅かなものである。20大きく欠損しており、使用頻度も低い。21は扁平な礫を素材としたものであり、約1/2を欠損する。表面での使用は著しく滑らかな面に変化している。22も1/2以上を失うが、表裏面を観察すると滑らかで平坦になっているため長期間の使用を想定できた。23は大型品と



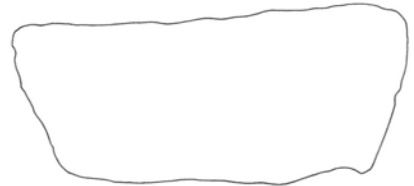
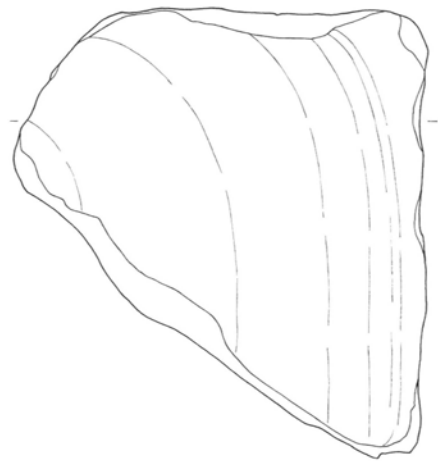
1 (20V-06)



2 (21U-84)



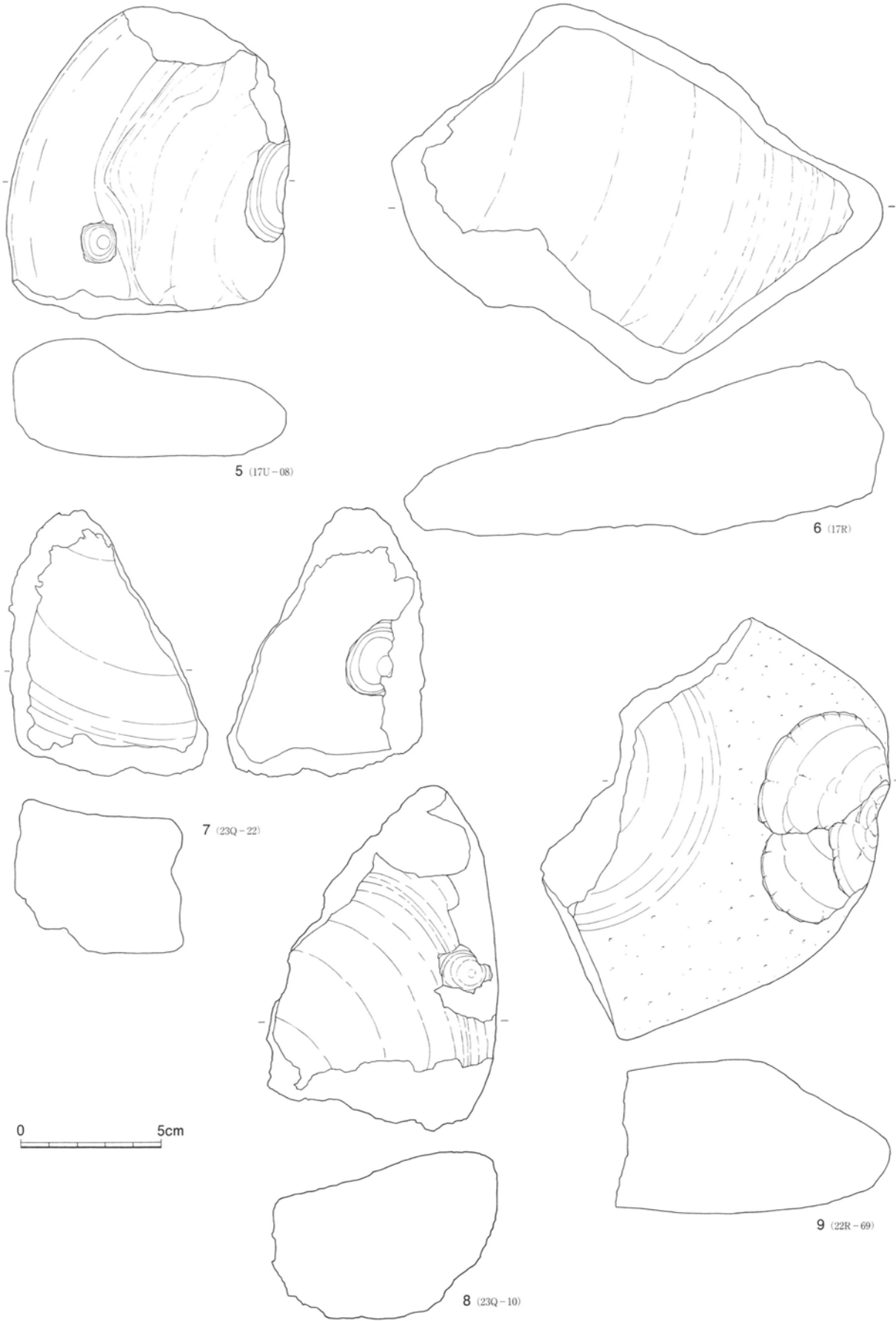
3 (20V-06)



4 (18T-94)



第79図 SX-026・027周辺出土石器



第80図 SX-026・027周辺, グリッド出土石器

なろう。表面と下部に打痕を認めることができる。磨石としても表面・側面等の形状から長期の使用が想定できた。24も著しい使用痕が観察できる。表面も平坦に磨耗し、側面では打痕も認められる。25も1/2程度欠損する。表面は使用により滑らかな面に変化している。26も磨耗が顕著で小型化するまで長期間にわたって使用してきたものであろう。

石材は、11・13・25が輝緑岩、12・14～18・21が砂岩、19・20が石英斑岩、22～24・26が安山岩となる。石皿（第80図6～9）4点が出土しており、6は中央に向かってなだらかに傾斜する。窪みのような湾曲は認められないため、石皿としては疑問も残る。7はほんの一部が遺存するだけであり、表面は大きく湾曲を描く。裏面では1点だけ凹部が認められる。8も一部分の遺存であり、中央に向かって大きく落ち込む。側面では磨耗痕も認められるため、破損後も磨石として使用されていたものであろう。9は、中央部の窪みが浅いタイプの石皿となろう。遺存は1/3～1/4程度と考えられる。

石材は、6が片麻岩（筑波石）、7が安山岩、8が多孔質安山岩、9が閃緑岩となる。

4 縄文時代におけるチャート製石器製作工程（第81図）

本節では縄文時代の石器群について述べてきたが、ここでは大量に検出された石器・石核・剥片・屑片等の観察により原石^(※)から石器製作に至るまでの工程がおぼろげながら理解できるような資料が抽出できた。そこで幾つかの資料を再掲しつつ、石器製作の工程を推測し、本遺跡での石器製作の特質を提示してみたい。

まず製作工程を遺存する資料をもとに①～⑥までに区分してみた。それらの工程での主な作業内容について説明を加えてみたい。

- ① **板状の原石を分割** 最初の段階である本工程は、搬入された原石を節理面に沿って分割したり、剥片剥離が可能となるような大きさに原石を細分しているものと考えられた。なお原石の搬入に関しては、その大きさがどの程度のものであったのかを示す資料には恵まれなかった。
- ② **石核となる母岩の選択** 剥片剥離が可能となる厚みを有した母岩ともなるべき石材を選択し、石核としての形状を整えることになる。ここで石核として不適なものについては、直ちに石器として加工されることもある。第81図2では、厚みが不十分なものであろうか下端と左側面を抉るように剥離が施される。また、同図1は分割された直後の母岩であり、ほとんど未剥離の状態を示している母岩といえよう。この種の資料としては唯一のもので、厚み、あるいは石質に問題があったのかかもしれない。この資料により母岩の形状は、これよりも厚みがあり、かつ一回り大きいものを選択し採用していたものと考えられる。
- ③ **剥片の剥離** ここでの資料提示は、同図3・4といったような残核に近いものしか存在していないが、剥片剥離に関しては節理面となっている平坦部あるいは分割折断した時の面を打面とし多方向から剥片を剥離している。
- ④ **各種石器の製作** 剥取した剥片は主に石鏃に加工されていたものであろう。それを裏付けるように未製品といえる二次加工途中の剥片が多量に出土している。剥取された剥片が大型であった場合には石錐やスクレイパー類に加工されていたようである。

※ 本遺跡に供給されているチャートは節理面にそって分割されており、その原石は特徴的で板材のような形で搬入されてきたと推測できる。原石（母岩）は形状・石質等からみて、その産地は栃木県の足尾周辺（考古石材研究所 柴田徹氏のご教示による）とのことであり、丸木舟などを使い本遺跡まで運び込まれたものと考えられる。

搔器・石錐・楔形石器といった器種がみられ、量的に注目できる器種として石鏃・削器・石錐をあげることができる。そこで10,000点を超える出土量が認められたSX-028出土資料を参考に石器製作と器種について若干触れておきたい。

石鏃 20点出土した石鏃では黒曜石10点、チャート9点、安山岩1点という石材の構成となっていた。SX-028では製品を含めた剥片等の出土量は、チャート約6,700点に対し黒曜石が約3,400点と少ない。ここで製品としての石鏃を観察すると、チャート・黒曜石ともに良質な石材を採用しており、特に黒曜石では不純物を多く含むような素材の採用はみられない。またチャートでも板状に堆積した中心部を素材としており、表面観察からは良質な部分を選択して加工していることが窺われた。このことから石鏃製作に関して、単純に出土数から推定すれば黒曜石のほうが製品とし加工し易いものということができよう。石鏃以外も含めて未製品としたものでは73点図示したが、黒曜石35点、チャート34点、瑪瑙2点、頁岩2点という構成になっていた。前文でも触れたとおりその形状から黒曜石の場合は石鏃を意識した未製品と考えられたが、チャートの場合は石錐や削器等の他器種を製作するというような意図が窺えた。

削器 図示した削器は19点にとどまるが、ここでは一般的にみられる側縁加工（第63図111）の削器（サイドスクレイパー）よりも側面に抉りを作る抉入削器（ノッチドスクレイパー）と考えられる石器が多くみられた。この類例は石核との関連でも触れたとおり、残核と考えられるような遺存形状を有する。しかし、図示（第68図）したような石器群を詳しく観察すると意識的に湾曲させるような整形剥離を施しており、単なる残核とは考えられず、石器としての目的を保持させたものと考えられた。この湾曲部を重視していくと、残核利用とはいえない石器（第68図7）も認められるため抉入削器と考えることが妥当であると思われた。このように考えると、これら抉入削器の用途としては、必然的に矢柄研磨を目的とした使用を想定することができる。その一部には、湾曲に加工された刃部には顕著な使用痕が認められる石器（第68図4・7～10）も存在する。さらに小型品では抉りというよりも鋸歯状の加工を施した製品（第63図102・108）も存在する。とりわけ108の小型品では黒曜石の薄い剥片を素材として製作されたものであり、矢柄研磨とは別な用途が想定できる。このため本削器群は、チャート製の頑強で厚みを有するタイプは矢柄研磨に用いるために製作されたものとなろう。ただ黒曜石製については、チャート製と同様に捉えられるかは疑問の残るところである。

石錐 石錐と考えられるものが8点出土し、総体的に粗雑な作りとなっている。土器群の時期から考えると刺突部が断面四角形を呈した精緻なタイプが後晩期の特徴となろうが、丁寧に作られているものは1点（第63図99）しか存在しない。他は簡単に刺突部を作出だけで旧石器時代の石錐を思わせる。これも前述したような製作工程を踏襲しているため、結果としてきれいな形状に仕上げられなかったものであろう。

以上のように、本遺跡から出土した石器群について豊富な出土量を示したSX-028地点の石器群を参考として述べてきたが、SX-026地点で出土している石器群についても同様な石器が認められる。第68図15～18に示したように抉入削器は同様な作りとなっており、さらにチャート製の石錐（第69図6）も簡単な作りでありSX-028との類似点が指摘できる。これら類似の石器群については出土地点は異なるが、同様な技術で剥離しており作業が数地点においておこなわれていた可能性を示唆するものといえよう。そして、その所属時期についてはSX-028で出土土器の主体をなした後期後葉の段階であったものと推測できる。

第7節 土製品・石製品

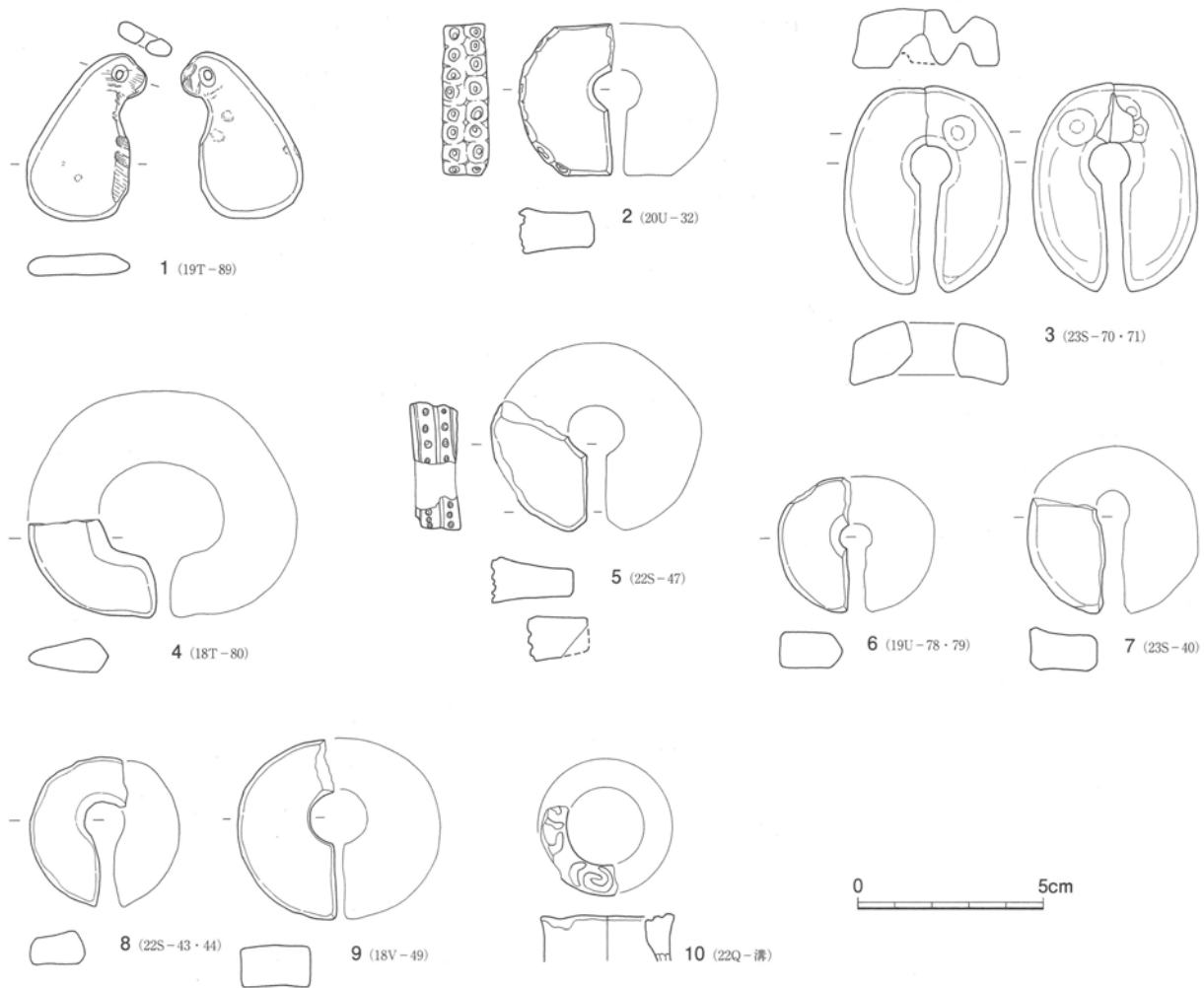
本遺跡では、土器・石器以外に土製品・石製品といった遺物も若干出土しており、ここではそれらを素材と用途により分類し説明を加えておく。大きくは土偶・挾状耳飾・土器片錘となろうが、とりわけ土偶及び挾状耳飾が注目すべき資料といえる。

1 土製品（第82～84図，図版13・227・228）

土器（第82図1～3） 特異な形態を有する土器についてのみ、ここで取り上げることとした。1は後期の小形土器で土器・石器集中地点から出土しており、文様や細かな縄文原体等から安行式期の所産となろう。全体的には僅かな傾きが認められるが、完形品である。器高は約5cm，器厚は6mm～7mmと厚く、小形ながらも安定感を有する。口縁部内径は2.4cmから2.5cmと極端に小さくなり、日常使用する土器とは考えられない。あえて推測すれば、小さな貴重品などを納める容器として用いられていたものであろうか。器面は、粘土紐による隆帯を半円状に巡らし、その上にRLの縄文を回転させている。また篋状工具による刺突文は表面のみにみられ、他では隆帯の内側に沿って同様な工具で沈線を巡らせている。重量は192.9gを計測する。2は、いわゆる手捏のミニチュア土器の類となろう。2bは住居跡から出土したものであり、明らかに同一個体と考えられた。接合作業において接点は見出せなかった。器厚は底部付近で8mm～9mmを計測し、胎土には若干繊維をふくむ。器面の上半部は条線で覆われている。出土地点は、1に近接するが、時期的には前期前半に属するものとなろう。3も小型で、口縁から頸部にかけての破片である。沈線と刺突による文様構成となる。17T区の周溝から出土しており、時期的には晩期に属するものと考えたい。

土偶（第82図4～7） 4点が出土し、うち3点は小型品である。4～6は、その形状・出土地点から早期の撚糸文系土器群に伴う土偶とみることができ。前述したように3点とも20U区で出土しており、撚糸文系土器群も濃密に分布していた地点である。4は胴部と両手の部分が遺存し、右手は肘を折り曲げたような状態を表現している。また首部にあたる部分は明らかに空洞となっており、図示したように下端の破損部でも同様の窪みがみられるため、差込み式で製作されたものと思われる。文様は付されていないが、表裏面の色調は赤褐色を呈しており破損面（淡褐色）とは異なる。このため製作時に赤彩を施している可能性も考えられた。重さは10.3gを計測する。5は、下部が破損しているため形状の詳細は把握できない。破損部から考えて、三角形か撥形となろう。表面では爪形が縦方向に連続して認められる。色調は褐色を呈し、重さは8.7gを計る。6は、略三角形を呈しており、上部中央に穿孔が認められる。確認面での孔の大きさは横4mm，縦2mm，深さ6mm～7mmを計測する。破損部はみあたらないが上部の穿孔を考えると差込みにより組み合わせて用いていたものであろう。重さは7.3gである。7は、いわゆるミミズク土偶の頭部にあたるものである。図示したように、耳の部分にあたる両側面と首部以下を欠損する。両側面では耳栓着用を想定した、穿孔の痕跡が僅かに認められる。文様についてみると、表面は太い沈線で輪郭を描いた後に小さな刺突により顔面を表現する。裏面では、頂部に至るまでRLの縄文を施文し、その後、連続的に刺突文で飾る。出土地点は19O区であり、ここでは後晩期の土器群が石器群とともに検出されており、時期的にも矛盾しない。

挾状耳飾（第83図2～9） 合計8点が出土している。このタイプは後述する石製垂飾品を含めると9点に及ぶ。その形態・素材から前期に属するものとなろう。一遺跡での出土量としては卓越している。本遺



第83図 グリッド出土石・土製品

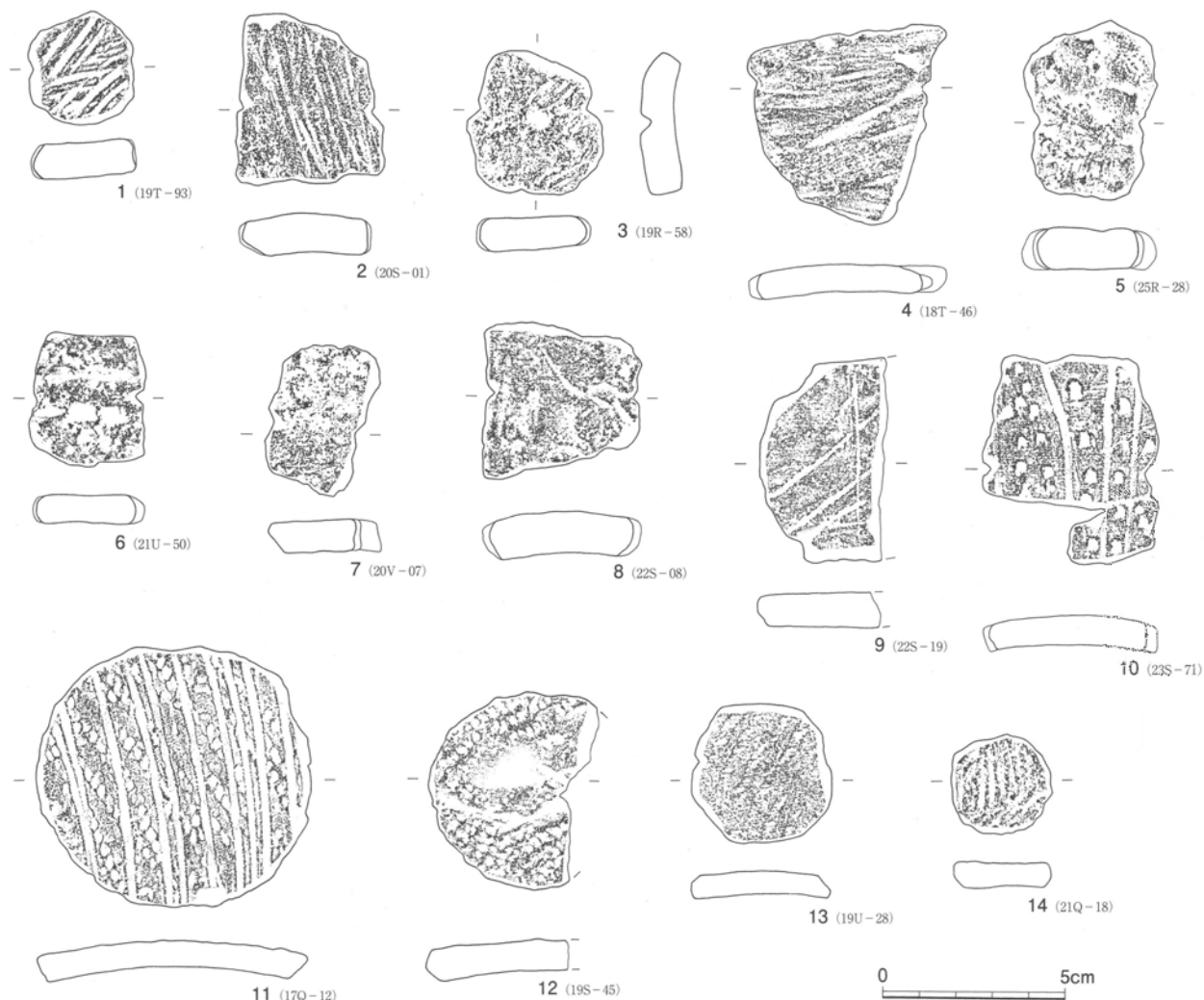
は7.9g, 9はやや大型の半欠品で15.9gを計測する。

耳栓 (第83図10) 10は耳栓となろう。少ない遺存ながらも側面の湾曲から器高は15mm程度と推測できる。表面は沈線により渦巻き状の文様を施している。本資料は前者とは異なり後・晩期に属するものである。約1/3の遺存で重さは3.0gとなる。

土器片錘 (第84図1~10) 土器片を整形加工した土錘が10点ほど出土した。1~4は、器面に条痕文が認められ、胎土に繊維を含んでおり早期後半の土器群と見做される。3は中央部に未穿孔の窪みが認められる。加工の途中で位置をずらしたものであろうか。5~8は中期の土器群で、5~7の胎土には雲母が混入され、6では竹管状工具による押引きが認められる。8は輪積痕の痕跡を残す。これらの土器群は阿玉台期となろう。9・10は後期の所産となろう。10は沈線とともに刺突文で覆われている。出土地点をみると、早期の土錘は調査区中央部で、中期では分散し、後期では調査区の中央東よりの舌状部で検出されている。

円板状土製品 (第84図11~14) 4点を図示したが、11・12は円形によく整形されており、13・14は円形までには至っていない。13の左側面では小さな抉りが認められ、土錘とも考えられる。時期的には、14が早期で表面には条痕文がみられ胎土に繊維を含む。12は中期となろう。器厚が9mmと厚い。11・13は後期の粗製土器で疎らな縄文が施されている。出土地点はそれぞれ離れている。

その他 (第82図8・9) 用途を想定できないものが2点存在し掲載した。その形状から、おそらく時期



第84図 グリッド出土土製品

的には中期の深鉢形土器の把手部にあたるものと思われる。8は表裏に沈線が認められ、窪んだ部分に赤彩の痕跡をみることができる。おそらく酸化鉄によるものであろう。

2 石製品 (第83図1)

石製垂飾品 石製装身具として唯一出土した遺物で、19T区の掘立柱建物跡 (SB-035) 周辺から検出された。この地点での土器群は撚糸文系土器が主体をなしていたが、前期後半の土器群も比較的多くみられた。製作あるいは形状についてみると、上部が穿孔され垂飾として加工されているものの、残された形状から抉状耳飾を再利用したことは明白である。上部のやや狭く整形された部分が破損したために再利用されたものである。右側面と穿孔部周辺の研磨痕は再加工時のものであろう。当時としては貴重な装身具であり、破損しても本例のように再利用することがしばしば見かけられる。いずれにせよ前期の所産となる。

石材は滑石で、暗緑色を呈した中に黒色の斑模様と雲母状の不純物を含有している。装飾品であるため表面はよく磨き込まれ、きれいに仕上げられている。重量は11.2gとなる。

以上が、土製品を主体とした土器・石器以外の遺物であり、なかでも注目できる遺物として早期の土偶

をあげることができる。ここでは3点の出土をみた早期の小型土偶について若干触れておきたい。

3 小型土偶について

本遺跡で注目できる土製品として、早期前半に伴うと思われる小型の土偶が3点出土した。この時期に伴う土偶の出土例は少なく貴重な発見となった。出土地点は20U区に限られており、この地点はSX-026地点として土器・石器ともに濃密に分布していた場所である。土器の項でも触れたが、本地点は早期前半にあたる撚糸文系土器群が主体となっていたため、3点の小型土偶はこれらの土器群に伴うと考えて間違いあるまい。ただ土器群に関していえば、形式的には井草式から花輪台式土器まで検出されているため具体的にどの型式に伴うものかは即断できないというのが実情である。

では次に3点の形状・製作等について観察すると、最も細部についてまで表現されているもの(第82図4)、板状に粘土塊を整形したもの(第82図5・6)とに分類できる。いずれのタイプにも孔が認められ、前者は製作時に穿孔し首部を差込んだような作りである。後者は、穿孔部が整っており明らかに差込み式として製作されたものと思われる。

このような二タイプの土偶は早期前半にみられる特徴的なものであり、房総の地でも以前から知られている^(注1)。このため当該期の土偶については幾つかの論考にも接することができる。これらの文献によれば、穿孔は組み合わせて一体の土偶^(注2)とし、板状の三角形を呈したものを「木の根タイプ」、より具象化されたものを「花輪台タイプ」として分類し、「木の根タイプ」から「花輪台タイプ」への変遷^(注3)が想定されている。この変遷から考えると、本遺跡出土土偶では5・6が前者となり、4が後者に該当するものとなろう。

このような早期前半の撚糸文系土器群に属する土偶は、先の文献では県下で8遺跡が確認されており、それ以後に船橋市小室上台遺跡^(注4)でも「木の根タイプ」が1点出土しており、本遺跡を含めると10遺跡を数えることになる。この遺跡数は、撚糸文系土器が展開する周辺域において卓越した分布状況を示し、初期土偶の様相を鮮明にしつつあるといっても過言ではない。これらの状況を踏まえたうえで初期土偶について考えるならば、撚糸文期の人びとの間では「木の根タイプ」の土偶は既に意識の中に存在し、いわば「定形化」した形態として捉えていたように思われる。これは穿孔を有する板状土偶の中にも乳房を表現する例や組み合わせが想定される土偶では結果的に人の形を形成したものであり、製作目的としたものは「人」であったことは間違いなかろう。明確に人物像を表現した4の土偶は、肉眼観察によると、「赤彩」に近い色彩を器面の一部で視認できた。既に特別視していたような様子さえ窺われる。いずれにせよ土器発生以前においても「岩偶」といったような類似資料が上黒岩洞穴遺跡^(注5)で発見されている。このような事実と本遺跡をはじめとして各所で発見されてきた初期土偶の製作を考えると、土器発生と時を同じくして既に製作されていたとしてもあながち間違いではないように思われる。

なお、人物をかたどった(第82図4)土偶に関しては、その表面に赤彩らしき痕跡が認められたため、赤彩塗布の有無について確認した。方法としては、蛍光X線・SEM-EDS(走査電子顕微鏡)による元素の分析という方法をとった^(注6)。その結果、土偶の表面では明確な痕跡(酸化鉄・水銀等の含有)を認めることはできなかったことを付記しておく。

挿図番号	器種	石材	重量	出土地点	遺物番号	備考
第60図47	石鏃未製品	瑪瑙	2.93	19O-61G	087	
第61図48	石鏃未製品	黒曜石	1.47	19O-11G	083	
第61図49	石鏃未製品	黒曜石	1.66	19O-33G	414	
第61図50	石鏃未製品	黒曜石	3.42	19P-01G	068	
第61図51	石鏃未製品	黒曜石	4.07	19O-26G	008	
第61図52	石鏃未製品	黒曜石	1.76	19O-33G	027	
第61図53	石鏃未製品	黒曜石	1.10	19O-04G	449	
第61図54	石鏃未製品	黒曜石	2.70	19O-21G	048	
第61図55	石鏃未製品	黒曜石	2.53	19N-96G	056	
第61図56	石鏃未製品	黒曜石	0.72	19O-42G	250	
第61図57	石鏃未製品	黒曜石	1.02	19O-22G	077	
第61図58	石鏃未製品	黒曜石	2.20	19O-43G	093	
第61図59	石鏃未製品	黒曜石	1.02	19O-11G	063	
第61図60	石鏃未製品	黒曜石	1.93	19O-11G	100	
第61図61	石鏃未製品	黒曜石	2.30	19N-94G	188	
第61図62	石鏃未製品	黒曜石	2.21	19O-23G	135	
第61図63	石鏃未製品	黒曜石	1.51	19O-32G	229	
第61図64	石鏃未製品	黒曜石	1.34	19O-22G	092	
第61図65	石鏃未製品	黒曜石	1.01	19O-32G	286	
第61図66	石鏃未製品	黒曜石	3.47	19O-44G	143	
第61図67	石鏃未製品	チャート	6.26	19O-32G	238	
第61図68	石鏃未製品	チャート	5.17	19O-05G	001	
第61図69	石鏃未製品	チャート	2.04	19O-32G	178	
第61図70	石鏃未製品	チャート	5.30	19O-51G	175	
第61図71	石鏃未製品	チャート	4.29	19O-33G	120	
第61図72	石鏃未製品	チャート	1.50	19O-42G	112	
第62図73	石鏃未製品	チャート	4.69	19O-23G	400	
第62図74	石鏃未製品	チャート	0.77	19O-25G	032	
第62図75	石鏃未製品	チャート	1.36	19O-04G	1009	
第62図76	石鏃未製品	チャート	2.60	19O-04G	668	
第62図77	石鏃未製品	チャート	1.23	19O-65G	001	
第62図78	石鏃未製品	瑪瑙	1.52	19O-04G	1083	
第62図79	石鏃未製品	チャート	1.04	19O-73G	056	
第62図80	石鏃未製品	チャート	5.18	19O-04G	1048	
第62図81	石鏃未製品	チャート	9.77	19O-91G	068	
第62図82	石鏃未製品	チャート	3.65	19O-41G	036	
第62図83	石鏃未製品	チャート	7.25	19O-41G	320	
第62図84	石鏃未製品	チャート	2.97	19O-42G	222	
第62図85	石鏃未製品	チャート	8.22	19O-72G	229	
第62図86	石鏃未製品	チャート	2.95	19O-34G	159	
第62図87	石鏃未製品	ホルンフェルス	3.25	19O-22G	212	
第62図88	石鏃未製品	チャート	10.41	19O-71G	157	
第62図89	石鏃未製品	チャート	12.96	19O-24G	001	
第62図90	石鏃未製品	チャート	4.23	19O-04G	1232	
第62図91	石鏃未製品	珪質頁岩	2.65	19O-04G	1375	
第62図92	石鏃未製品	チャート	4.84	19O-32G	377	
第63図93	石鏃	黒曜石	1.93	19O-63G	254	
第63図94	石鏃	黒曜石	1.29	19O-42G	227	

挿図番号	器種	石材	重量	出土地点	遺物番号	備考
第63図95	石錐	黒曜石	1.29	19O-33G	173	
第63図96	石錐	チャート	4.69	19O-32G	215	
第63図97	石錐	チャート	6.16	19O-43G	039	
第63図98	石錐	チャート	10.41	19O-82G	046	
第63図99	石錐	チャート	1.30	19O-32G	318	
第63図100	石錐	チャート	31.30	19O-33G	345	
第63図101	搔器	チャート	6.44	19O-33G	320	
第63図102	削器	黒曜石	2.58	19O-12G	213	
第63図103	削器	黒曜石	2.12	19O-13G	157	
第63図104	加工剥片	黒曜石	0.66	19O-04G	766	
第63図105	加工剥片	黒曜石	2.21	19O-32G	277	
第63図106	加工剥片	黒曜石	1.48	19O-04G	1387	
第63図107	加工剥片	黒曜石	0.39	19O-02G	130	
第63図108	加工剥片	黒曜石	0.46	19O-44G	047	
第63図109	加工剥片	黒曜石	0.97	19O-23G	080	
第63図110	加工剥片	黒曜石	4.12	19O-41G	358	
第63図111	加工剥片	黒曜石	3.75	19N-85G	045	
第63図112	加工剥片	チャート	1.22	19O-04G	1217	
第63図113	加工剥片	チャート	1.19	19O-11G	138	
第63図114	加工剥片	チャート	3.56	19O-13G	469	
第63図115	加工剥片	チャート	2.16	19O-13G	433	
第63図116	加工剥片	瑪瑙	7.79	19O-53G	031	
第64図117	加工剥片	黒曜石	1.48	19O-12G	242	
第64図118	加工剥片	黒曜石	0.59	19O-41G	061	
第64図119	加工剥片	チャート	3.12	19N-93G	009	
第64図120	加工剥片	チャート	0.99	19O-31G	152	
第64図121	剥片	黒曜石	0.07	19O-62G	146	
第64図122	剥片	黒曜石	0.23	19O-63G	154	
第64図123	剥片	黒曜石	0.35	19O-61G	305	
第64図124	剥片	黒曜石	0.15	19O-61G	089	
第64図125	剥片	チャート	0.93	19O-42G	180	
第64図126	楔形石器	チャート	0.95	19N-95G	065	
第64図127	楔形石器	チャート	3.84	19O-04G	260	
第65図128	石核	黒曜石	5.05	19O-34G	257	
第65図129	石核	チャート	6.02	19O-51G	029	
第65図130	石核	チャート	10.19	19O-43G	539	
第65図131	石核	チャート	14.39	19O-04G	037	
第65図132	石核	チャート	5.26	19O-63G	011	
第65図133	石核	チャート	8.47	19O-14G	304	
第65図134	石核	チャート	23.04	19O-13G	612	
第65図135	石核	黒曜石	5.51	19O-32G	139	
第65図136	石核	チャート	12.64	19O-13G	087	
第65図137	石核	黒曜石	8.71	19O-04G	1188	
第65図138	石核	黒曜石	3.99	19O-43G	261	
第65図139	石核	黒曜石	14.06	19O-52G	263	
第65図140	石核	チャート	5.73	19O-31G	145	
第66図141	石核	チャート	9.02	19O-13G	250	
第66図142	石核	チャート	10.16	19O-63G	186	

挿図番号	器種	石材	重量	出土地点	遺物番号	備考
第66図143	石核	チャート	13.07	19O-04G	936	
第66図144	石核	チャート	11.17	19O-41G	381	
第66図145	石核	チャート	12.28	19O-05G	092	
第66図146	石核	チャート	18.03	19O-12G	218	
第66図147	石核	チャート	14.18	19O-25G	011	
第66図148	石核	チャート	13.18	19N-84G	005	
第66図149	石核	チャート	7.53	19O-04G	1225	
第66図150	石核	チャート	54.52	19O-82G	047	
第66図151	石核	チャート	9.42	19N-93G	046	
第67図152	磨製石斧	蛇紋岩	3.44	19O-25G	040	
第67図153	磨製石斧	蛇紋岩	6.02	19O-21G	1776	
第67図154	磨製石斧	蛇紋岩	64.96	19O-01G	010	
第67図155	磨製石斧	蛇紋岩	169.93	19O-21G	075	
第67図156	敲石	砂岩	44.79	19N-95G	037	
第67図157	敲石	頁岩	18.08	19N-95G	048	
第67図158	敲石	砂岩	73.90	19O-13G	515	
第67図159	敲石	砂岩	138.43	19O-04G	734	
第67図160	敲石	石英斑岩	50.59	19O-24G	349	
第68図1	削器	チャート	6.69	19O-04G	1065	
第68図2	削器	チャート	7.42	19O-03G	374	
第68図3	削器	黒曜石	2.48	19O-12G	061	
第68図4	削器	チャート	3.86	19O-13G	226	
第68図5	削器	チャート	8.36	19O-42G	416	
第68図6	削器	チャート	4.69	19O-12G	061	
第68図7	削器	チャート	16.29	19O-12G	083	
第68図8	削器	チャート	11.78	19O-42G	053	
第68図9	削器	チャート	11.08	19O-35G	035	
第68図10	削器	チャート	5.00	19O-52G	018	
第68図11	削器	チャート	9.87	19O-21G	020	
第68図12	削器	チャート	5.33	19O-61G	091	
第68図13	削器	チャート	11.56	19O-13G	500	
第68図14	削器	チャート	22.99	19O-32G	032	
第68図15	削器	チャート	4.99	19U-58G	395	
第68図16	削器	チャート	6.06	20U-01G	004	
第68図17	削器	チャート	5.06	20U-27G	一括	
第68図18	削器	チャート	6.66	20U-50G	242	
第69図1	石鏃	黒色安山岩	1.51	20U-42G	001	
第69図2	石鏃	チャート	0.79	20U-43G	008	
第69図3	石鏃	チャート	0.73	20U-25G	093	
第69図4	石鏃	チャート	0.42	20U-21G	093	
第69図5	石鏃	黒曜石	0.45	20U-31G	049	
第69図6	石錐	チャート	3.09	20U-12G	001	
第69図7	削器	チャート	20.72	19U-37G	002	
第69図8	削器	チャート	22.28	20U-01G	010	
第69図9	楔形石器	チャート	11.16	19U-36G	003	
第69図10	加工剥片	黒曜石	1.59	20U-43G	004	
第69図11	加工剥片	黒曜石	47.65	20U-43G	013	
第69図12						第69図10・11の接合資料

挿図番号	器種	石材	重量	出土地点	遺物番号	備考
第69図13	加工剥片	嶺岡頁岩	13.27	20U-42G	017	
第69図14	石核	チャート	14.17	20U-22G	一括	
第70図15	磨製石斧	頁岩	14.63	20U-70G	001	
第70図16	磨製石斧	輝緑岩	52.44	20U-20G	001	
第70図17	磨製石斧	安山岩	135.26	20U-10・32G	一括・068	
第70図18	打製石斧	角閃岩	137.35	20U-33G	一括	
第70図19	磨製石斧	砂岩	64.70	19U-58G	196	
第70図20	打製石斧	緑色凝灰岩	88.26	20U-21G	032	
第70図21	磨石	砂岩	226.52	20U-10G	003	
第71図1	石鏃	黒曜石	1.10	19U-11G	001	
第71図2	石鏃	黒曜石	0.65	19T-45G	001	
第71図3	石鏃	黒曜石	1.47	20V-07G	505	
第71図4	石鏃	チャート	1.62	20V-13G	一括	
第71図5	石鏃	チャート	0.86	20T-60G	一括	
第71図6	石鏃	チャート	0.94	18T-11G	001	
第71図7	石鏃	チャート	0.71	20V-07G	094	
第71図8	石鏃	チャート	0.42	20V-52G	266	
第71図9	石鏃	チャート	1.36	17T-09G	066	
第71図10	石鏃	黒色安山岩	1.30	19V-06G	001	
第71図11	石鏃	アイサイト	0.53	19T-89G	082	
第71図12	石鏃	碧玉	1.33	19T	083	
第71図13	石鏃	流紋岩	0.99	17T-09G	154	
第71図14	石鏃	ホルンフェルス	1.60	18T	016	
第71図15	石鏃	ホルンフェルス	1.21	20V-07G	292	
第71図16	未製品	チャート	10.92	19S-81G	3074	
第71図17	未製品	チャート	6.84	20T-42G	199	
第71図18	未製品	チャート	1.74	19T-81G	3039	
第71図19	石錐	黒曜石	2.21	19T-75G	009	
第71図20	搔器	チャート	11.28	20T-12G	291	
第71図21	石核	ホルンフェルス	175.85	19T-62G	002	
第71図22	石核	石英	28.26	21U-51G	049	
第72図1	石鏃	黒曜石	3.75	表採	-	
第72図2	石鏃	黒曜石	1.02	表採	-	
第72図3	石鏃	黒曜石	0.53	16Q-00G	001	
第72図4	石鏃	黒曜石	1.15	23P-77G	001	
第72図5	石鏃	黒曜石	0.26	16O-89G	003	
第72図6	石鏃	チャート	1.05	23Q-83G	023	
第72図7	石鏃	チャート	0.72	20R-67G	111	
第72図8	石鏃	チャート	0.69	17Q-89G	一括	
第72図9	石鏃	チャート	1.46	16Q	一括	
第72図10	石鏃	凝灰岩	0.71	22Q-39G	003	
第72図11	石錐	チャート	0.78	16O-89G	007	
第72図12	石錐	チャート	7.45	表採	-	
第72図13	削器	チャート	20.06	21Q-09G	092	
第72図14	削器	ホルンフェルス	3.44	20P-09G	001	
第72図15	剥片	黒曜石	1.31	22S-46G	001	
第73図1	磨製石斧	頁岩	25.72	18T-74G	037	
第73図2	磨製石斧	緑色凝灰岩	68.47	20V-06G	158	

挿図番号	器種	石材	重量	出土地点	遺物番号	備考
第73図3	磨製石斧	砂岩	72.98	19U-66G	一括	
第73図4	磨製石斧	緑色凝灰岩	115.32	19T-95G	001	
第73図5	磨製石斧	安山岩	143.08	19T-57G	008	
第73図6	磨製石斧	緑色凝灰岩	340.00	19S・19T	1553	古墳(SX-001)より出土
第73図7	磨製石斧	安山岩	163.94	19U-25G	001	
第73図8	磨製石斧	緑色凝灰岩	143.60	18T-49G	001	
第73図9	磨製石斧	粘板岩	24.63	19S・19T	2351	古墳(SX-001)より出土
第73図10	打製石斧	輝緑岩	148.02	18T・19T	042	溝(SD-16)より出土
第73図11	打製石斧	ホルンフェルス	185.37	19T-95G	020	
第74図12	磨製石斧	チャート	26.22	23R-02G	002	
第74図13	磨製石斧	チャート	71.15	22Q-20G	001	
第74図14	打製石斧	頁岩	126.27	23S-09G	019	
第74図15	打製石斧	緑色凝灰岩	233.82	22S-61G	001	
第74図16	打製石斧	ホルンフェルス	94.55	23R-64G	101	
第74図17	打製石斧	片麻岩	80.86	23R-35G	002	
第74図18	打製石斧	緑色片岩	52.54	23Q-56G	015	
第74図19	打製石斧	石黒片岩	48.18	16P-83G	032	
第74図20	打製石斧	ホルンフェルス	113.06	23R-23G	008	
第74図21	打製石斧	粘板岩	103.54	17R-24G	001	
第75図1	砥石	砂岩	221.80	20V-06G	063	
第75図2	礫器	碧玉	45.36	19V-30G	008	
第75図3	礫器	砂岩	58.80	19U-87G	956	
第75図4	敲石	石英斑岩	96.05	17T-43G	056	
第75図5	敲石	緑泥片岩	580.00	20V-30G	587	
第76図1	磨石	輝緑岩	308.61	20V-08G	0030	
第76図2	磨石	花崗岩	223.69	19T-85G	001	
第76図3	磨石	斑糲岩	245.77	19S・19T	3082	古墳(SX-001)より出土
第76図4	磨石	安山岩	200.18	20V-06G	004	
第76図5	磨石	多孔質安山岩	304.88	21U-40G	002	
第76図6	磨石	安山岩	314.01	20V-07G	571	
第76図7	磨石	砂岩	162.92	19V-17G	001	
第76図8	磨石	流紋岩	460.00	20T-41G	049	
第76図9	磨石	石英斑岩	228.89	19U-15G	035	
第76図10	磨石	石英斑岩	1050.00	18T-68G	071	
第77図11	磨石	輝緑岩	1000.00	20R-66G	420	
第77図12	磨石	砂岩	340.00	18O-16G	001	
第77図13	磨石	輝緑岩	178.92	19R-67G	003	
第77図14	磨石	砂岩	131.74	19Q・20Q	003	溝(SD-21)より出土
第77図15	磨石	砂岩	410.00	19R-68G	002	
第77図16	磨石	砂岩	251.24	16Q-98G	001	
第77図17	磨石	砂岩	124.88	20R-89G	165	
第77図18	磨石	砂岩	178.88	23R-52G	012	
第77図19	磨石	石英斑岩	186.03	表採	-	
第77図20	磨石	石英斑岩	163.18	23Q-60G	001	
第78図21	磨石	砂岩	128.57	22Q-58G	001	
第78図22	磨石	安山岩	214.01	17Q-82G	031	
第78図23	磨石	安山岩	400.00	23Q-94G	067	
第78図24	磨石	安山岩	410.00	23Q	514	

挿図番号	器種	石材	重量	出土地点	遺物番号	備考
第78図25	磨石	輝緑岩	430.00	23S-40G	076	
第78図26	磨石	安山岩	151.39	表採	-	
第79図1	石皿	閃緑岩	1075.00	20V-06G	002	遺存4/1
第79図2	石皿	片麻岩	1120.00	21U-84G	029	
第79図3	石皿	閃緑岩	3200.00	20V-06G	003	
第79図4	石皿	片麻岩	970.00	18T-94G	013	
第80図5	石皿	緑色凝灰岩	640.00	17U-08G	021	
第80図6	石皿	片麻岩	1300.00	17R	013	
第80図7	石皿	安山岩	500.00	23Q-22G	001	
第80図8	石皿	多孔質安山岩	600.00	23Q-10G	074	
第80図9	石皿	閃緑岩	1210.00	22R-69G	050	遺存3/1~4/1

参考文献

- 注1 池田大助ほか 1981『木の根』(財)千葉県文化財センター
- 注2 篠原 正 1986「金堀遺跡出土の土偶に関する一考察」『研究紀要』1 (財)印旛郡市文化財センター
- 注3 原田昌幸 1983「発生期の土偶について」『奈和』第21号 奈和同人会
原田昌幸 1987「縄文時代の初期土偶」『MUSEUM』No.434 東京国立博物館
- 注4 船橋市遺跡調査会 1989「船橋市小室上台遺跡出土の土偶」『考古学ジャーナル』No.313 ニュー・サイエンス社
- 注5 江坂輝弥ほか 1969「愛媛県上黒岩遺跡調査速報」『考古学ジャーナル』No.37 ニュー・サイエンス社
- 注6 分析機関 千葉県産業支援技術研究所

第3章 弥生時代・古墳時代

第1節 弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡・壺棺墓・土坑，古墳時代中期の鍛冶遺構

1 竪穴住居跡・鍛冶遺構

SI-022（第85図，図版26・236・321）

遺跡の南部東寄りの20T区に位置する。5.9m×4.5mの隅円長方形をなし，確認面よりの深さは0.51mである。炉の位置から，主軸はN-69°-Wである。付近は東に少し傾斜する地形で，下辺が浅くなっているが，比較的遺存状態はよい。上辺左隅でSK-030と重複する。壁は直立せず，やや傾斜している。壁溝は認められない。炉は主軸上の西寄りに1か所認められた。径約70cmの範囲で，焼土が形成されている地床炉である。支柱穴は4か所認められた。径30cm前後の円形ないし不整円形をしており，深さは左上から時計回りに54cm，48cm，42cm，47cmと，比較的揃っている。出入口ピットは認められない。他に小穴が9か所あるが，深さは18cm～47cmまで様々である。中央部に位置する径50cm，深さ47cmの小穴と，下辺右隅に位置する径43cm，深さ31cmの小穴は，位置や深さから本跡に伴う可能性はある。しかし，付近は奈良時代の掘立柱建物跡群が「コ」の字状に配列された部分の角に当たっており，遺物を含めて，後世の遺構が複雑に重複しているものと判断される。とくに，右辺に並ぶ4か所の小穴は上部から掘り込まれた掘立柱建物跡などの一部と考えられる。床面に硬化面は確認されなかった。覆土にはロームブロックが多く，下層の5層を中心として焼土が含まれていることから，廃棄に伴う片付けや埋戻しがおこなわれた可能性がある。

遺物は多く出土している。このうち，原位置を記録できた2・3はともに確認面において出土しており，本跡との重複遺構に関係する遺物である。

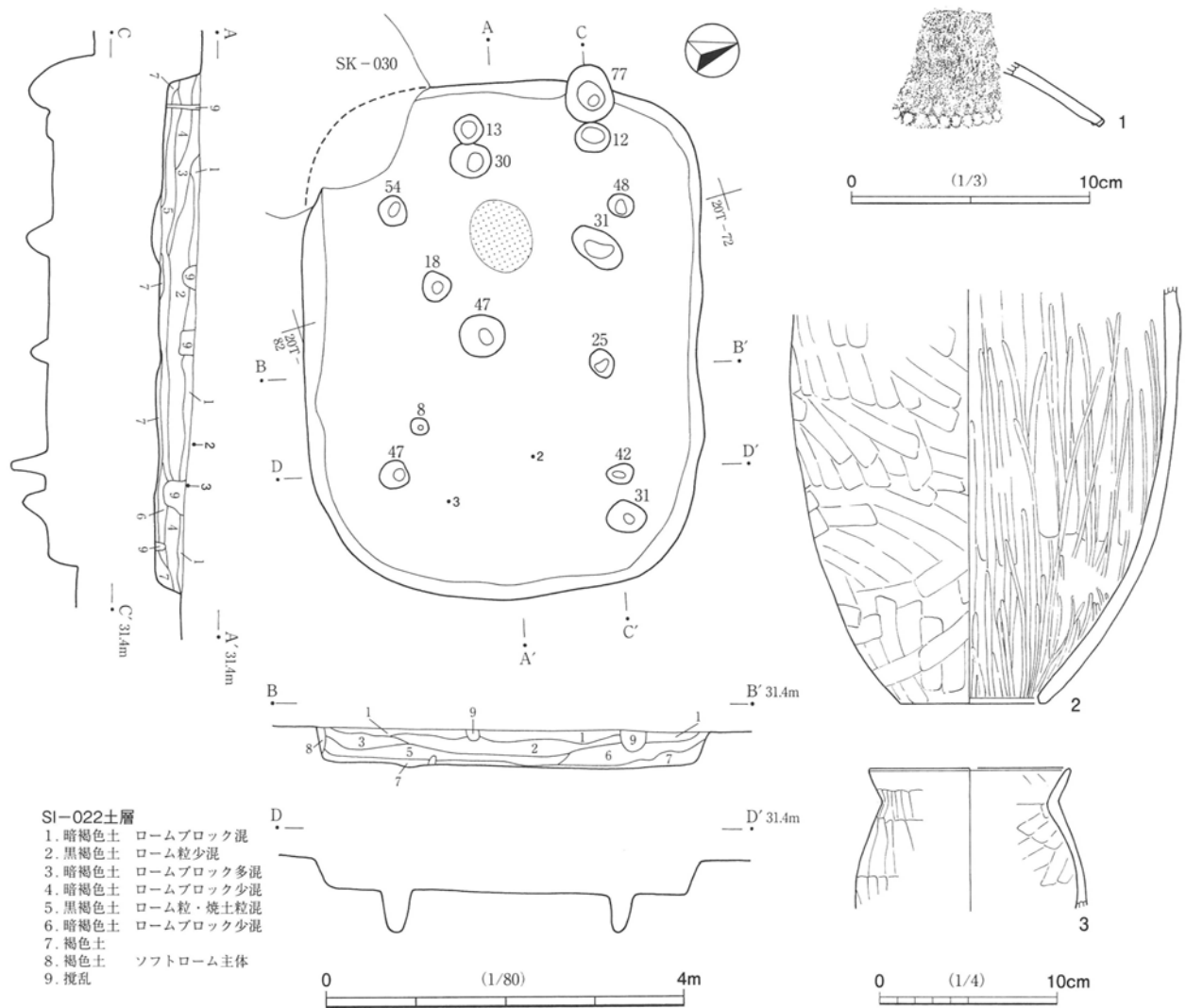
1は蓋とみられる弥生土器の細片である。端部に縄文原体によるとみられる密な刻みが施される。暗褐色で胎土に砂粒が多く，外面はナデ，内面はヘラケズリが施される。2は土師器の大型甕である。細片部分もあるが，胴部はほぼ完存する。焼成前に底が開口している。一孔である。褐色で，片面に黒斑が形成される。胎土は密である。口縁部は強いヨコナデ，外面は多方向のヘラケズリとヘラナデが施される。内面は縦のヘラケズリが入念に施され，底部付近では乾燥状態でのケズリ痕がミガキ痕のようにみえる。3は「く」の字口縁の土師器小型甕である。褐色で，胎土はやや砂粒が含まれる。口縁部はヨコナデ，のち頸部の上から縦方向の強いヘラケズリ，内面は左斜め方向に粗くヘラケズリが施される。

その他，図示していないが，軽石が1点出土している。

和泉式期以降の2を含むが，1と遺構形態から，弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

SI-024（第86図，図版26・236）

遺跡の南部東寄りの20T区に位置する。3.5m×3.2mの隅円長方形をなし，確認面よりの深さは0.41mである。炉の位置から，主軸はN-88°-Wである。SI-022の南6mに位置し，付近は平坦な地形であるが，周囲を奈良時代の掘立柱建物跡SB-024などに囲まれた状態で検出された。壁は直立せず，かなり傾斜している。壁溝は検出されていない。炉は主軸上の西寄りに1か所認められた。径50cmの円形の範囲で焼土が形成されている。支柱穴は判別できなかった。主軸の下辺寄りには出入口ピットが認められた。径40cm



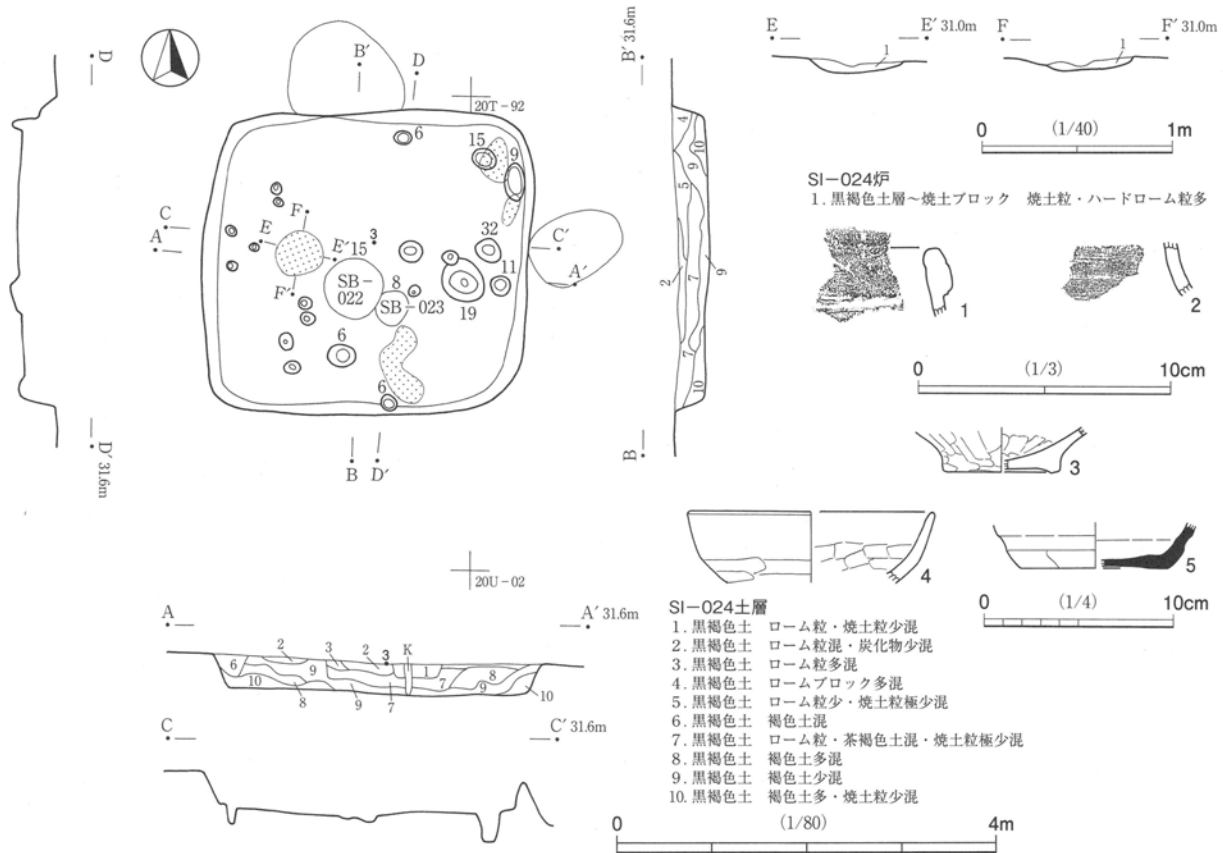
第85図 SI-022

前後の不整円形で、最深部は19cmである。ほかに小穴が19か所あるが、不規則であり、本跡に伴う証拠は見いだせない。SB-022やSB-023の掘立柱建物柱穴に切られている。硬化面は検出されなかった。左辺壁寄り、下辺右隅にそれぞれ明瞭な焼土が認められた。これは覆土の上層から下層まで焼土が含まれていることから、そのうち明瞭な範囲を示している。比較的下層の壁際に認められることから、廃棄直後に火が用いられた可能性が高い。

遺物は少なく、そのうち位置がわかる良好な遺物は3のみであったが、遺構検出面からの出土である。

1・3は無頸壺または鉢とみられる弥生土器の小片である。口縁部の1は幅1.8cmの肥厚帯が巡る以外は無文である。底部の3は滑らかに内外面ともミガキ様のヘラナデが施されて全体に赤みを帯びる。凹状の底部は中央にミガキが施される。2は甕とみられる弥生土器の小片である。被熱して赤色化している。輪積装飾があり、その上にヨコナデが施される。4は土師器杯の口縁部片である。口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ、内面底部はナデが施される。5は須恵器杯の底部片である。雲母が特徴的な茨城産の胎土と焼成である。

1～3が本跡に伴う可能性が高く、4・5は重複遺構の所産である可能性が高い。よって、弥生時代後



第86図 SI-024

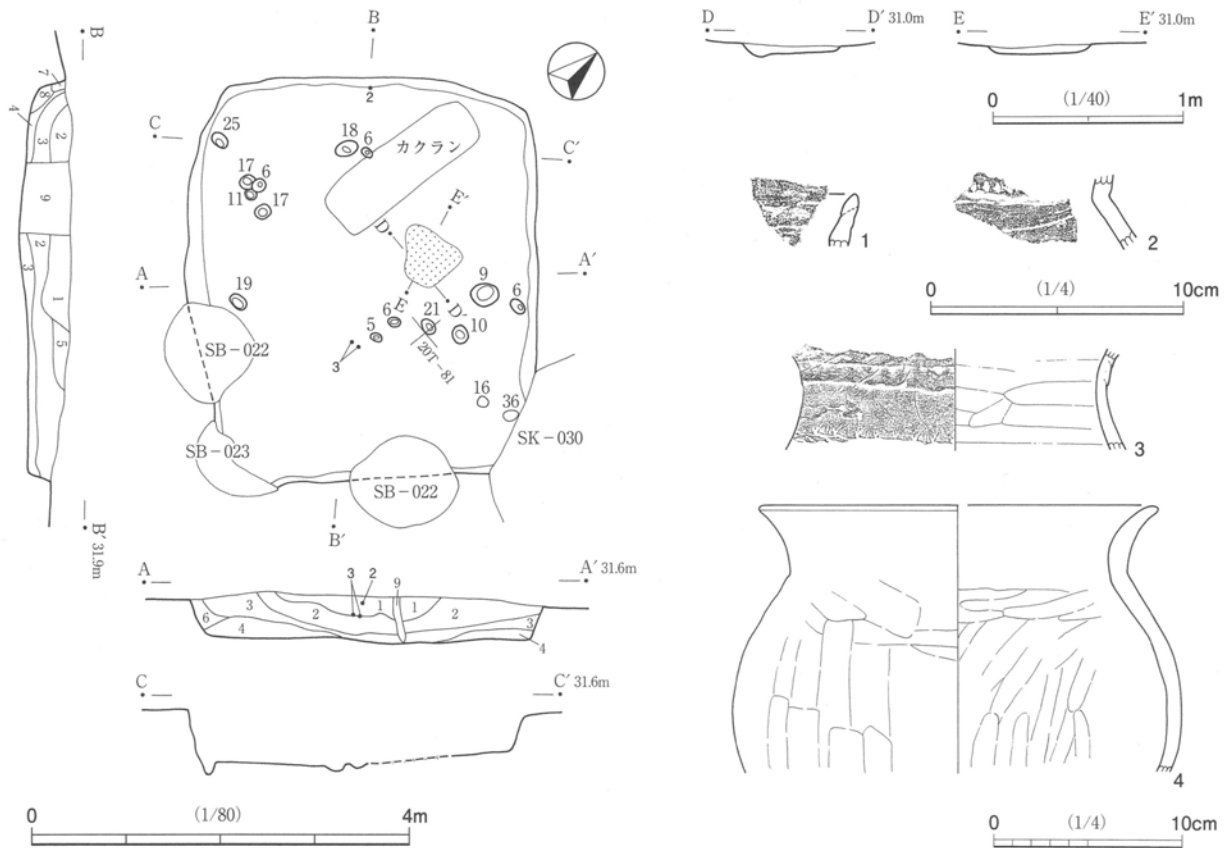
期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡と考えられる。

SI-027 (第87図, 図版27・248・236・335)

遺跡の南部東寄りの20T区に位置する。4.3m×3.7mの隅円長方形をなし、確認面よりの深さは0.47mである。長軸をとると、主軸はN-46°-Wである。SI-022の西に隣接しており、付近は平坦な地形ではあるが、SK-030に東隅を、SB-022に下辺と左辺を切られる遺構密度が濃い。また、床面までイモ穴とみられる攪乱が達している。このような状況であったが、掘込みは深いため、遺構は明瞭に検出された。壁はやや傾斜している。壁溝は検出されない。炉は主軸からはずれた北東(右)寄りに1か所認められた。60cm内外の不整形で、深さ6cmの焼土がみられる。主柱穴、出入口ピットは認められない。他に小穴が15か所あるが、深さは5cm～36cmと様々で、径が小さく規則性がないため、本跡に伴うとは認めがたい。硬化面については明確ではない。覆土は自然な埋没が想定される。

遺物は少なく、このうち位置が記録できた比較的良好なものは2・3であるが、かなり上層から出土したものである。

1・3は弥生時代後期印手式の甕である。輪積装飾がみられ、1の端部内面はヘラで明瞭な面が切られている。頸部が1/3周ほど遺存する3は緩やかに反る形状で、上部に2段以上の輪積装飾と、肩部に回転結節文及び施文に伴って付いた連続する「V」字形の傷が認められる。2は壺とみられる弥生土器の小片である。「く」の字に屈曲する頸部にヘラによる横位連続刺突文が施される。暗褐色である。4は古墳時代後期から奈良時代にかけてみられる地元特有の甕である。厚手であり、湾曲して外反する口縁部はヨコナデ、縦長の球形をした胴部には縦を基調とするヘラケズリが施される。内面にも縦のヘラケズリが乾い



第87図 SI-027

た状態で施され、一部に照りが生じる。激しい被熱が認められ、色調は暗赤褐色である。この他に、炭化した種子が出土しており、図示していないが写真を掲載した。

1～3が時期的に遺構形状と適合しており、弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

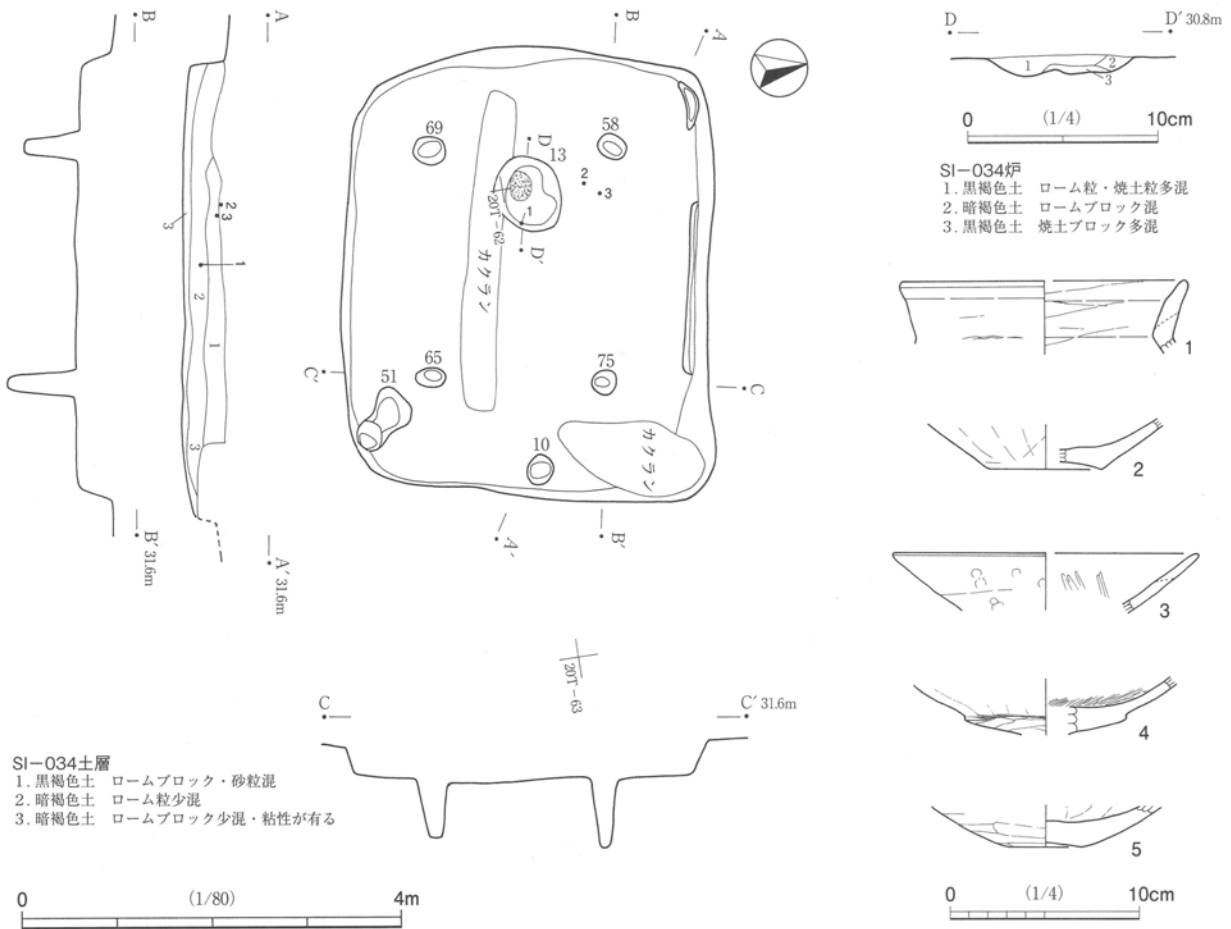
SI-034 (第88図, 図版31・236)

遺跡の南部東寄りの20T区に位置する。4.8m×3.9mの隅円長方形をなし、確認面よりの深さは最大で0.42mである。炉の位置から、主軸はN-80°-Wである。SI-022の北3mに位置する。付近は平坦であり、溝などにより覆土上部が削平されるが、ほかに大きな遺構との重複はなく良好に検出された。壁はやや傾斜がみられる。幅5cmほどの浅い壁溝が右辺で記録されているが、ほとんど巡らないとみてよい。炉は主軸上の西寄りに1か所認められた。径75cm前後の円形または卵形で、深さ13cmの凹みがみられ、内部に径28cm前後の焼土が形成されている。主柱穴は4か所認められた。主軸に対し直交方向に長い楕円形であり、35cm×25cm前後、深さは左上から時計回りに69cm, 58cm, 75cm, 65cmである。主軸の下辺寄りに出入口ピットが1か所ある。径30cm, 深さ10cmの円形である。ほかに下辺左隅に小穴が1か所あるが、深さは51cm, 極めて不整形であるため本跡に伴う施設としては認めがたい。硬化面は検出されていない。

遺物は少なく、破片が示せる程度である。このうち1は炉付近で出土しているが、位置は覆土中層である。2・3は確認面からの出土であり、直接に本跡の時期を示しているとはいいがたい。

1は土師器甕の口縁部小片である。頸部が「く」の字に屈曲する。ヨコナデが施されるとともに、内面の端部付近には強く摘んだことによる凹みが一週する。色調的にはかなり煤けている。2は土師器甕と思われる底部付近の小片である。底部は厚い作りで、やや凹底状であるが、5ほど顕著ではない。外面は粗いヘラケズリが施されるが、底部のやや凹んでいる部分は弱い調整痕である。二次被熱のため、胴部外面下部が赤褐色の色調である。内面はナデが施され、色調はにぶい褐色である。外面寄り部分の断面の色調は黒褐色である。3は土師器高杯の口縁部小片である。器面荒れが著しいが明るい褐色をしている。内面はミガキが施される。4は土師器の屈折脚高杯の杯部である。二次被熱のため赤褐色である。杯部下部に明瞭な段がつく。段の下部はヘラケズリ、上部はナデ、内面はヘラミガキが施される。5は甕の底部とみられる小片である。二次被熱を若干受けて表面の薄い赤色化がみられるが、明瞭ではない。厚く粗い作りで、凹底状に小さな平底が作られる。外面は粗いケズリ、内面はヘラナデが施されている。

遺物は1や4など和泉式期のものが主体的である。しかし出土位置を考慮すると、これらは時期的な下限を示すものに過ぎない。遺構形状の特徴からみて、弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。



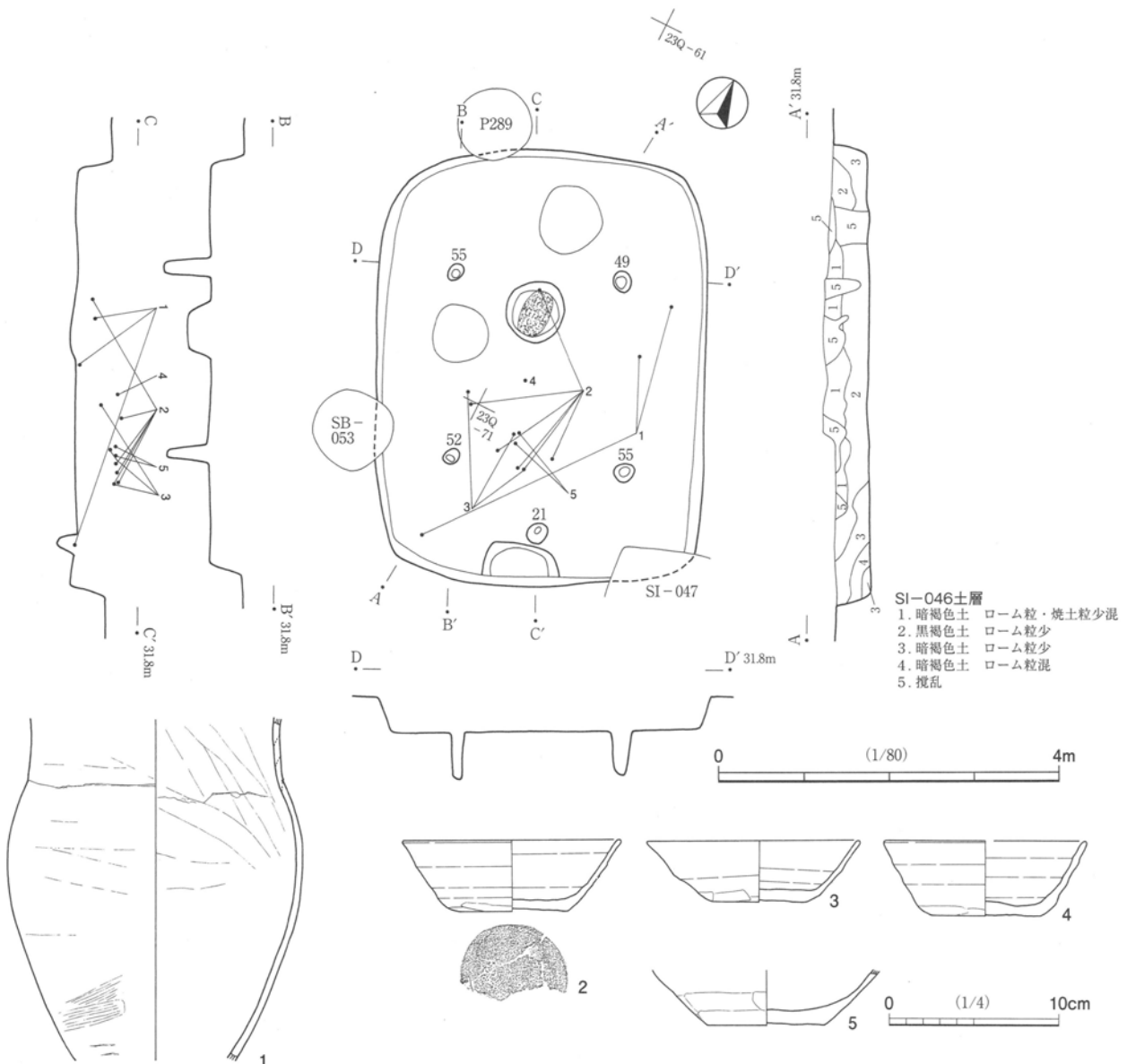
第88図 SI-034

SI-046 (第89図, 図版36・236・252・321)

遺跡の東部の23Q区に位置する。5.2m×3.9mの隅円長方形をなし、確認面よりの深さは0.42mである。炉の位置から、主軸はN-25°-Wである。付近は平坦な地形で、遺構も深い掘込みであることから明瞭に検出されたが、掘立柱建物群中で検出されたため、SB-053やSI-047など奈良時代以降の遺構が重複している。壁はやや傾斜がある。壁溝はもたない。炉は主軸上の北寄りに1か所認められた。径70cmの円形に凹んでおり、内部に50cm×40cmの焼土が形成されている。主柱穴は4か所認められた。径20cmの小円形で深さは左上から時計回りに55cm, 49cm, 55cm, 52cmである。主軸の下辺寄りに出入口ピットがある。径20cmほどの円形で、深さは21cm, 外部にやや傾斜している。ほかに壁際の半円形小穴がある。硬化面は形成されていない。覆土は自然な埋没が想定されるものである。

遺物は多いが、下層・床面から出土しているのは1のみであり、2～5は本跡の南寄り確認面付近に集積していた。よって未検出ではあるが2～5の示す平安時代の遺構が存在した可能性が高い。

1は弥生時代後期印手式期の甕である。胴部が1/3周ほど遺存する。全体形は北関東系の細筒形をなす



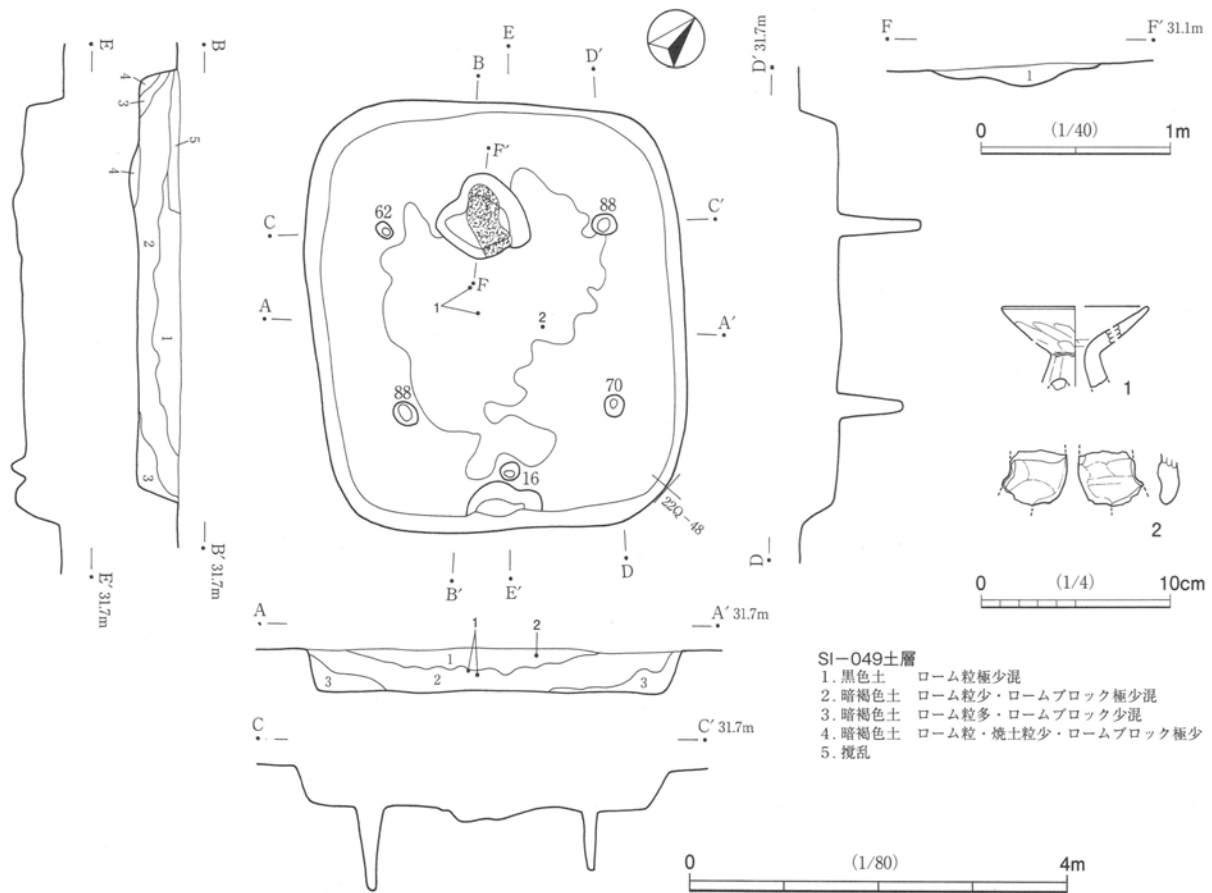
第89図 SI-046

が、浅いハケ状の筋を伴う横のナデを基調とし、薄手で、頸部に一段のみ輪積装飾を有する点は南関東系の特徴である。外面の肩部以下を中心に煤状炭化物がべったりと付着している。2~4はロクロ製土師器杯である。2は底部中央に回転糸切り痕を僅かに残す手持ちヘラケズリ、3・4は底部に手持ちヘラケズリが施され、いずれもロクロ目が明瞭であるが、2・3の内面はナデ消されている。いずれも二次被熱が認められ、4は全面が黒色化している。5は土師器甕の底部である。淡い褐色で、二次被熱はみられない。ロクロ製とみられるが、外面は横に揃ったヘラケズリが丁寧に施され、底面もヘラケズリで平坦にされる。その他、図示していないが、軽石が1点出土している。

1が本跡に伴うとみられる。弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

SI-049 (第90図, 図版38・236・321)

遺跡の東部の西寄りの22Q区に位置する。4.5m×4.0mの隅円長方形をなし、確認面よりの深さは0.46mである。炉の位置から、主軸はN-43°-Wである。付近は平坦な場所であり、他の遺構と重複することなく良好な状態で検出された。壁はやや傾斜している。壁溝は巡らない。炉は主軸上の北西寄りに1か所認められた。径90cm前後の不整形で深さ10cmの凹みが形成され、内部には主軸方向に長く78cm×30cmの焼土が形成されている。主柱穴は4か所認められた。いずれも径20cm前後の円形である。深さは左上から時計回りに62cm, 88cm, 70cm, 88cmである。主軸の下辺寄りに出入口ピットがある。径20cm前後でやや横に長く、深さは16cmである。隣接した下辺壁際にも深さ10cm程度のやや広い凹みが形成される。炉の周囲から主柱穴に囲まれた内区の床面、及び出入口ピットの周囲には硬化面が形成されている。覆土はローム粒



第90図 SI-049

が含まれるものの、基本的に自然な埋没を想定させるものである。

遺物は少ない。このうち特徴的な遺物として1と2を図示したが、本跡中央部の覆土中位から上位において出土したもので、直接的に伴うとは思われない。

1は小型器台片である。接合しない二つの破片からなる。褐色～暗褐色である。口縁端部外面に面が設けられる。中央を貫通する孔は径1.3cm、また、脚部にも円形透し孔が存在する。調整はナデである。2は焼成粘土塊である。形状は耳たぶ形で、両端が折れている。胎土は密で土師質であり、形象埴輪の一部を思わせる。褐色であり、二次被熱等は認められない。

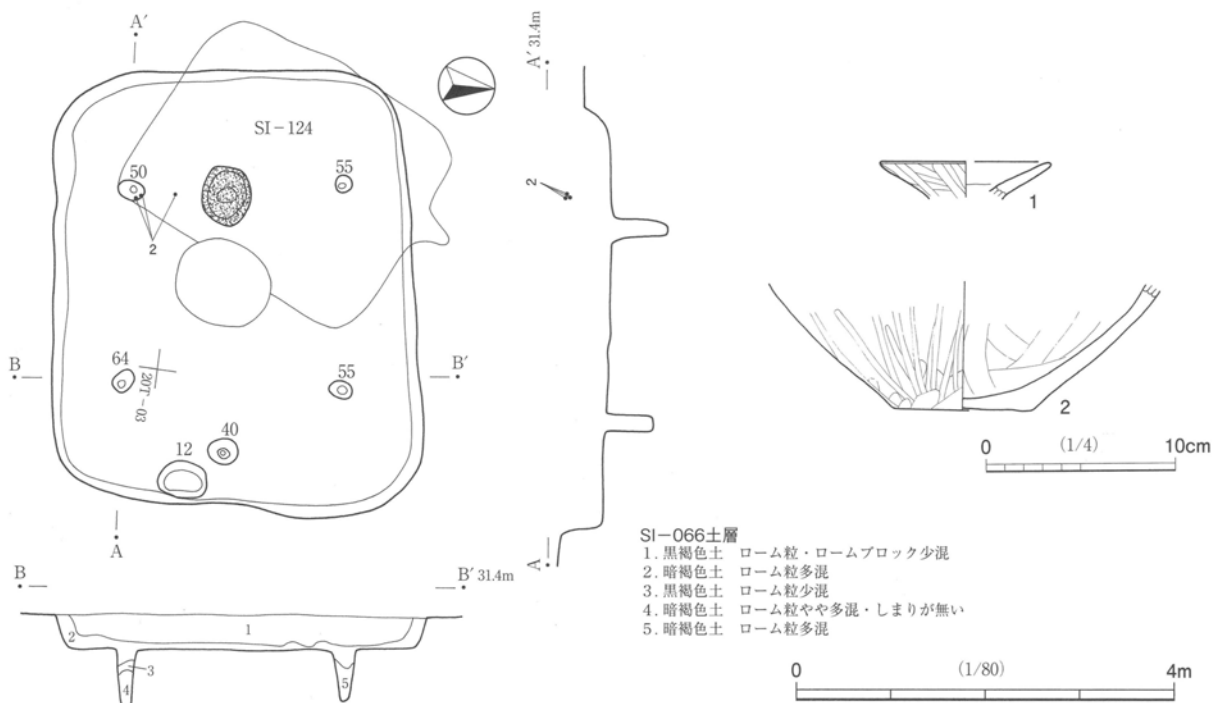
1の時期は古墳時代初頭を下限とし、遺構の形状からは弥生時代後期の竪穴住居跡とみられる。

SI-066 (第91図, 図版45)

遺跡の南部北東寄りの20S区・20T区に位置する。4.6m×3.9mの隅円長方形をなし、確認面よりの深さは0.62mである。炉の位置から、主軸はS-83°-Wである。付近は平坦な場所であるが、SI-124等に切られている。壁はやや傾斜している。壁溝は巡らない。炉は主軸上の西寄りに1か所認められた。64cm×52cmの楕円形地床炉で、内部は全面に焼土が形成されている。支柱穴は4か所認められた。径20cmの形で深さは左上から時計回りに50cm, 55cm, 55cm, 64cmである。主軸の下辺左寄りに出入口ピットがある。32cm×26cmの楕円形で、深さは40cmである。さらに下辺壁際に隣接して、深さ12cmの浅い楕円形小穴が1か所ある。硬化面は検出されない。覆土は比較的均質であり、意図的な埋土としての特徴は認められない。

遺物は少なく、良好な遺物で位置を記録できたものはない。

1は小型器台の受部片と考えるが、脚部との判別がつかない。他器種の可能性もある。外面は粗く筋がついたナデを基調とし、内面は滑らかにナデが施されている。2は壺の底部である。1/2周遺存する。厚手で、外面は縦に揃ったヘラミガキが丹念に施され、底面もヘラミガキ、内面は縦方向にケズリが施される。褐色で二次被熱はみられない。

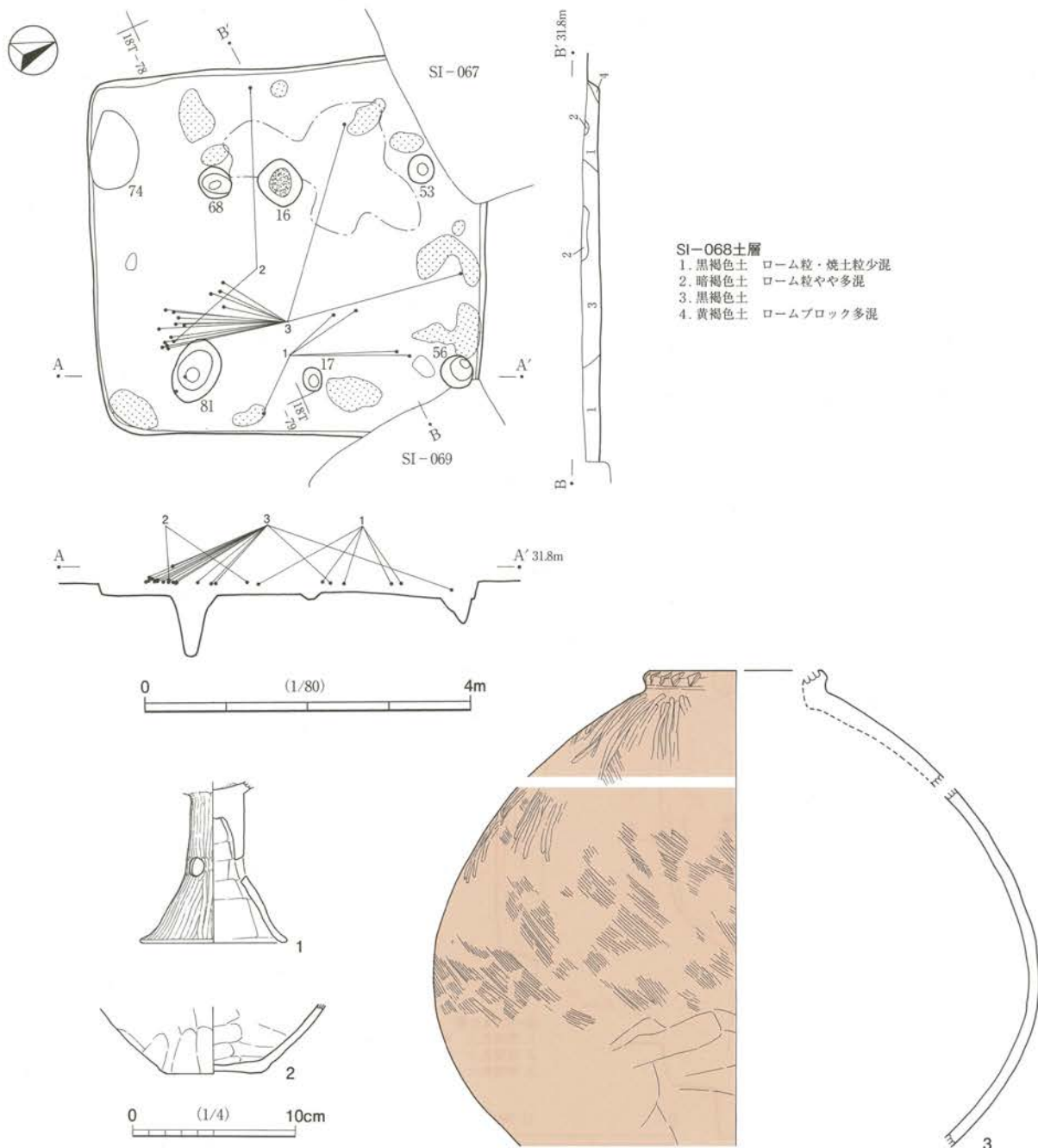


第91図 SI-066

弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居跡である可能性が大きい。

SI-068 (第92図, 図版46・47・236・258)

遺跡の南部西寄りの18T区に位置する。4.5m×4.8mの方形をなし、確認面よりの深さは0.20mである。炉の位置から、主軸はN-70°-Wである。付近は平坦であるが遺構は浅く、また周囲をSI-067やSI-069に切られていたため良好な状態ではない。壁にはやや傾斜がみられる。壁溝は巡らない。炉は主軸上の西寄りに1か所認められた。60cm×55cmの隅円菱形で深さ12cmの凹みがみられ、径40cm前後の焼土が形成されている。主柱穴は4か所認められたが、整列せず、主柱穴としてはやや疑問がある。左上から時計回りに径38cm・深さ68cm, 径30cm・深さ53cm, 径36cm・深さ56cm, 長径80cm・深さ81cmである。主軸の下辺寄りに出入口ピットがある。径22cm・深さ17cmである。他に小穴が2か所あるが、本跡に伴うとは認められ



第92図 SI-068

なかった。炉の周囲から上辺の主柱穴間にもみ硬化面が確認された。覆土は意図的な埋土の特徴はみられない。

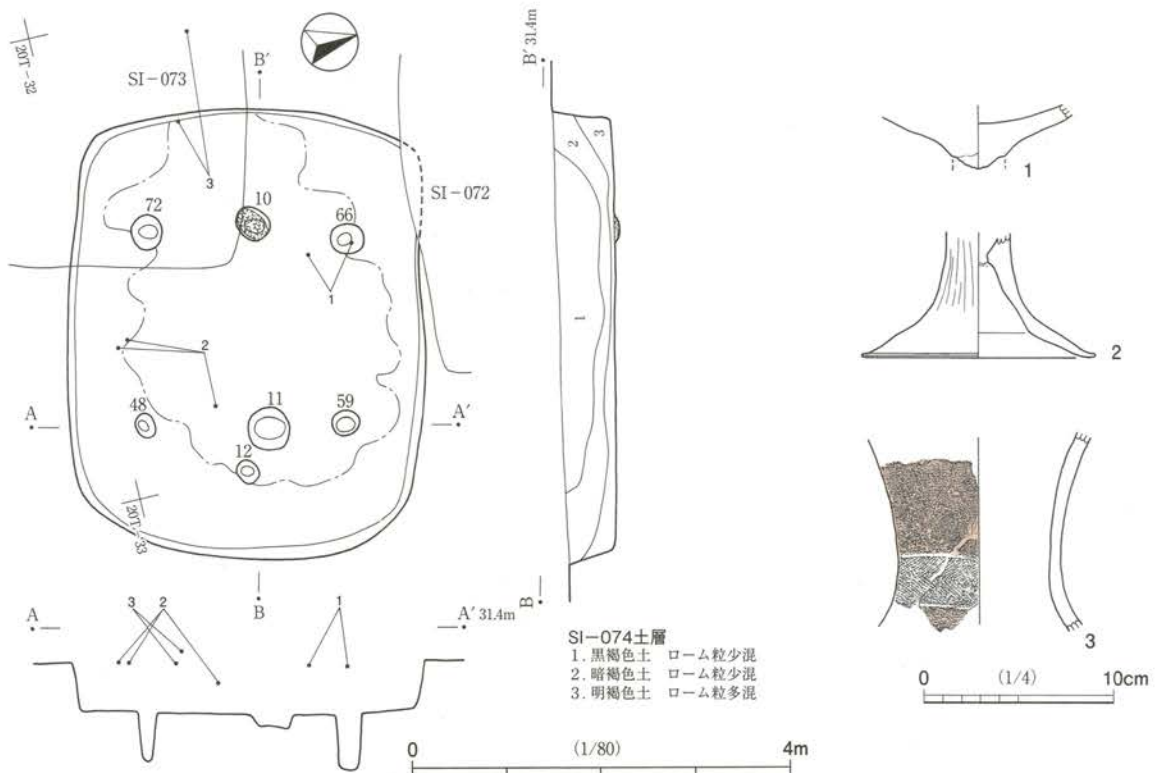
遺物は多く出土しているが、いずれも確認面で出土している。

1は土師器高杯脚部である。柱状屈折脚高杯に類似するが、設置部が屈折して開く特徴は明瞭でない。中段に2ないし3か所の円形透し孔が施される。径は1.2cm前後の大きなもので、柔らかいうちにゆっくりと穿孔している。外面は稜がくっきりとしたヘラナデ、内面は横方向のハケが施される。2は甕である。ナデを基調とし、激しい二次被熱により赤色化、内面に煤状付着物が多くみられる。薄い平底である。3は比較的大型の土師器壺である。厚手で、胎土はやや砂が多く含まれる。頸部に低い三角形突帯が巡り、そこにヘラによる連続刺突文（刻み）が施される。外面は斜めのハケが縦のヘラミガキで消され、さらに赤彩されている。内面は極めて荒れており、二次被熱に伴い黒色化している。

出土遺物はいずれも五領式の新相を示す。古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。

SI-074（第93図， 図版49・236）

遺跡の南部東寄りの20T区に位置する。4.7m×3.8mの隅円長方形をなし、確認面よりの深さは0.56mである。炉の位置から、主軸はN-76°-Wである。付近は平坦な場所であるが遺構の密集地帯であるため重複が多い。SI-072やSI-073，SD-013に切られる。壁はやや傾斜している。壁溝は巡らない。上辺と下辺は緩やかに湾曲し、全体を小判形に見せている。炉は主軸上の西寄りに1か所認められた。径30cmの円形で、内面のほぼ全体に焼土が形成される。主柱穴は4か所認められた。径30cm前後の円形で深さは左上から時計回りに72cm，66cm，59cm，48cmである。主軸の下辺寄りに出入口ピットがある。径22cmの円形で、深さは12cmである。また、そのすぐ西側には径44cm，深さ11cmの浅い円形の小穴がある。炉の周囲から上辺、主柱穴に囲まれた内区、及び出入口ピットの周辺にかけての床面に、硬化面が形成されている。覆土



第93図 SI-074

は自然な埋没を思わせる内容である。

遺物は少ない。特徴的な遺物のうち位置を記録できた1と2は、いずれも確認面付近の出土であり、本跡に直接伴うとまではいいがたい。これに対し、SI-073から出土した3は本跡に由来するとみられる。

1と2は同一個体の可能性もある屈折脚高杯である。2の遺存度が高い。褐色の綺麗な作りである。脚部の上部は筒状に細くなり、ソケットに杯部下部の突起をはめ込む仕組みである。外面は曲線を描きながら下部で急に開く。上部は縦方向のナデまたはミガキ、下部は横方向のミガキが施される。脚端部は薄く繊細な作りである。内面はしっかりとヘラケズリが施され、筒状部との境に明瞭な稜がある。3は南関東系弥生土器の壺である。頸部が1/2周遺存する。胴部との境界で欠損しており、そのすぐ上に沈線で囲まれた羽状縄文帯が設けられている。無文帯には縦方向のミガキが施され、赤彩が施されていた可能性が高い。

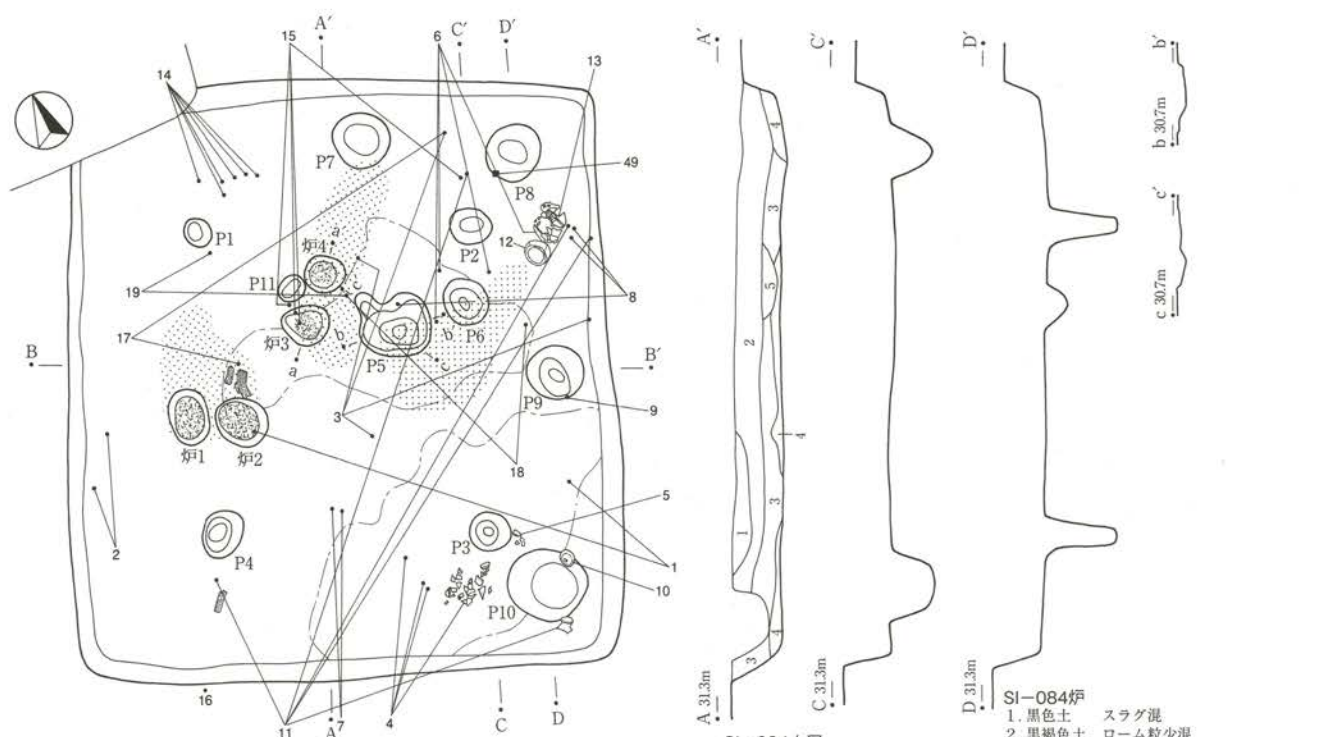
1・2は和泉式期とみられるが、3の久ヶ原式に属すとみられる壺が遺構形状に合致しており、弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

SI-084 (第94~96図, 図版54・262・263・313・314・317・319)

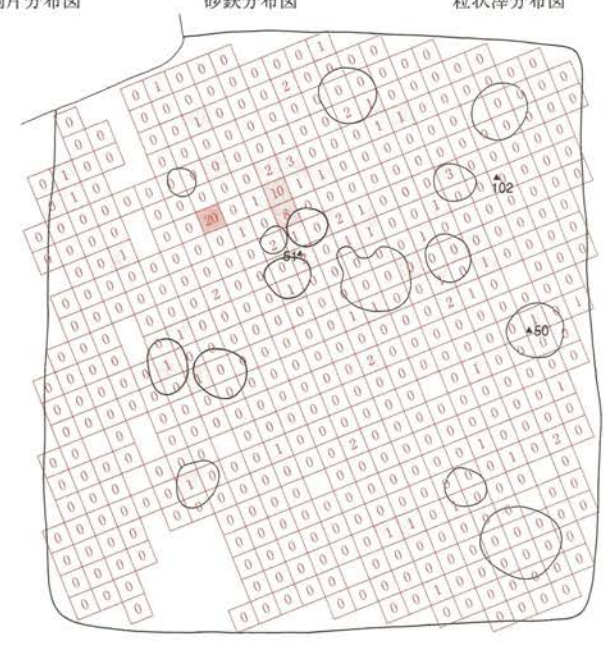
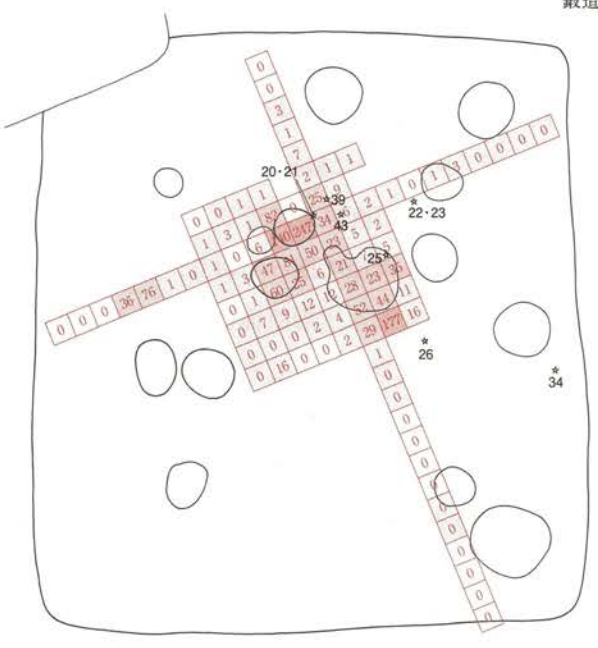
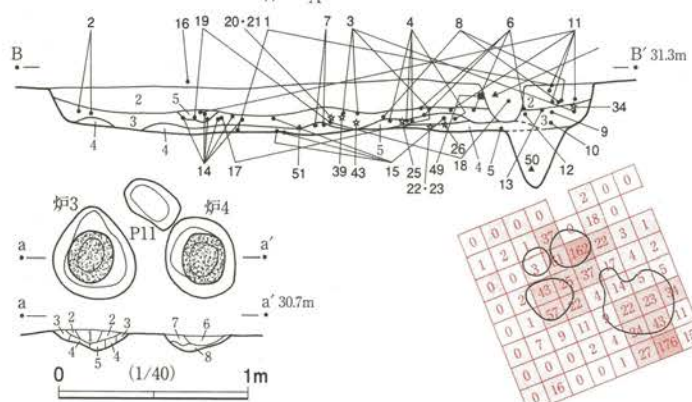
遺跡の南部西寄りの18T区に位置する。6.2m×5.7mの方形をなし、確認面よりの深さは0.51mである。長辺の方向から、主軸はN-23°-Eであるが、N-67°-Wを本来の主軸とみることもできる。記述は前者に則る。付近は平坦であり、比較的良好に検出されたが、SI-086に切られている。壁にはやや傾斜があり、壁溝は巡らない。主柱穴は4か所認められる。おおむね不整形で、左上から時計回りに径25cm・深さ37cm、径44cm・深さ77cm、径44cm・深さ76cm、径50cm・深さ60cmである。出入口ピットは明瞭ではない。下記のように多数見つかった炉の周囲と、下辺右側の主柱穴の周囲の床面に硬化面が形成されている。覆土には焼土粒が多めに含まれていたが、床面直上に形成された焼土範囲に起因するものとみられ、その他には人為的な埋土の明瞭な要素は見いだせなかった。

火を用いた痕跡が多く認められたのが、遺構における最大の特徴である。炉は4か所認識できたが、本来の炉は主軸上北寄りの炉4か、もしくは直交軸上西寄り炉2である。炉1は58cm×40cm、炉2は56cm×50cm、炉3は50cm×44cmで、範囲の違いはあるが内部に焼土が観察されている。炉4は42cm×35cmの不整形をなし、深さは9cm、径30cmほどの焼土が観察されているが、明瞭なものではなかったようである。他に炉2に隣接して炭集中地点が直交軸上の西寄りに1か所、小穴が炉に隣接して3か所認められる。さらに、右辺外区には、壁に沿って並ぶようにP8~P10の3つの柱穴が直線上に並び、さらに上辺ではP7が直角位置に設けられている。柱穴は直径56cm~75cm、深さは60cm前後で揃っており、主柱穴よりも一回り大きいことから、調査時には別の掘立柱建物と考えられた。しかし、土層断面には明らかな後世の掘込みとしては表れず、また、対称性を有する柱穴は他にないので、後世の独立した建物とみるには構造的に不十分である。柱穴の配置は竪穴方向を意識したものと観察され、二次的な竪穴利用時の柱穴であった可能性が高い。右辺中央の柱穴下層からは50の滑石製有孔円板が出土しているのが傍証となる。覆土下層には、炉などを覆うように厚さ6cmほどの焼土と炭化物の残滓が検出されており、内区西側、内区北側、内区東側の3か所ではとくに顕著であった。

遺物は多く出土している。最も注目されるのは、高杯転用羽口の存在とそれに伴う鉄滓や鍛造剥片の大量分布、そして白玉を主とする滑石製模造品とその未製品や剥片の多量分布である。これらを除く鍛冶関連以外の土器は、大部分が焼土層(5層)の上面と下層(3層)上面の間から出土しているが、1は炉2



- SI-084土層
- | | | | | |
|---------|------------|---------|----------------|---------|
| 1. 黒褐色土 | ローム粒少 | SI-084炉 | 1. 黒色土 | スラグ混 |
| 2. 黒色土 | ローム粒・焼土粒少混 | 2. 黒褐色土 | ローム粒少混 | 2. 黒褐色土 |
| 3. 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒少混 | 3. 暗褐色土 | ローム粒多混 | 3. 暗褐色土 |
| 4. 淡褐色土 | ローム粒多混 | 4. 赤褐色土 | 焼土ブロック多混 | 4. 赤褐色土 |
| 5. 赤褐色土 | 焼土 | 5. 黄褐色土 | ローム粒多混 | 5. 黄褐色土 |
| | | 6. 黒褐色土 | スラグ混 | 6. 黒褐色土 |
| | | 7. 暗褐色土 | ローム粒多混 | 7. 暗褐色土 |
| | | 8. 黄褐色土 | ローム粒・ロームブロック多混 | 8. 黄褐色土 |



鉄滓鉄塊分布図 (1/80) 滑石分布図

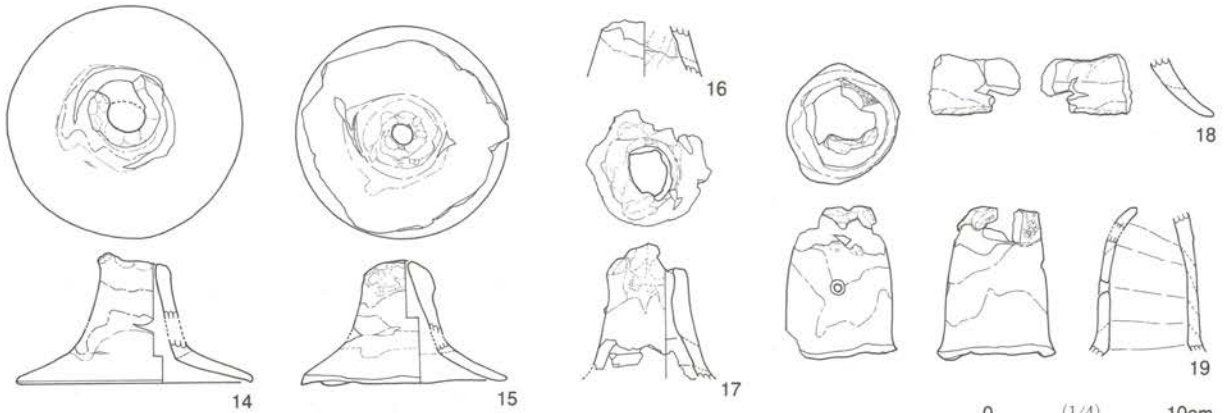
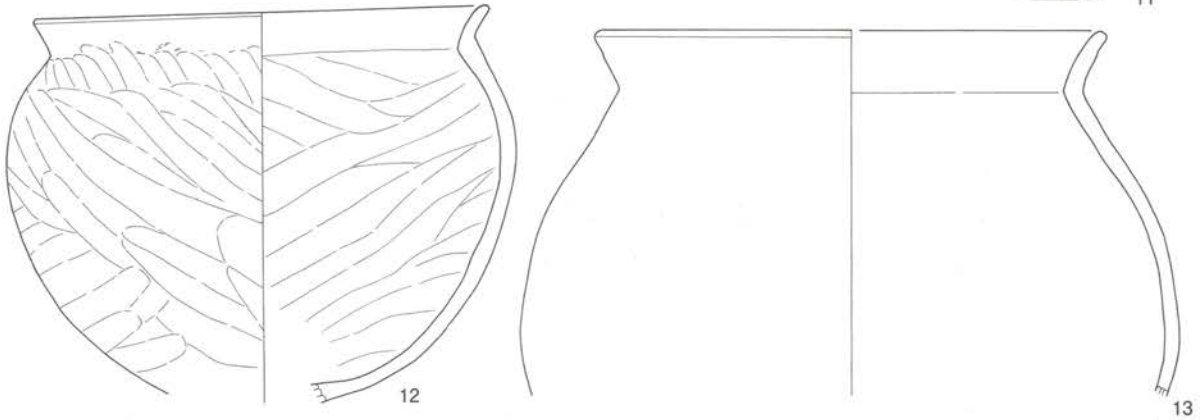
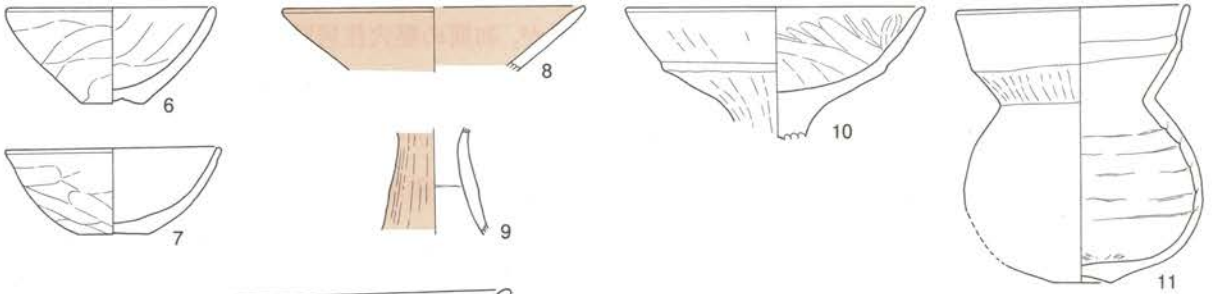
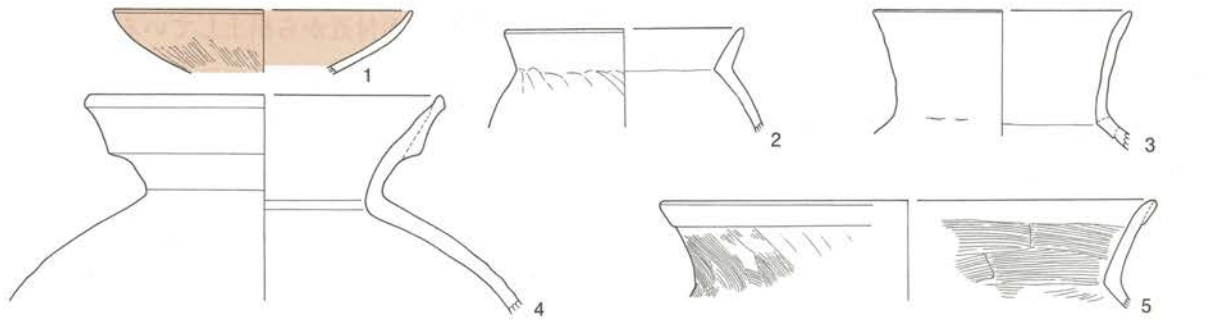
第94図 SI-084 (1)

内部から、2が左辺床面、8が右辺壁際、4・5と10が下辺右側の床面付近から出土している。二次的な柱穴内に落ち込んでいた10を除く1～5には本跡に直接伴う遺物が含まれている可能性が高い。

1は五領式の高杯または和泉式の杯であるが、前者の可能性が高い。小片である。口縁部はヨコナデ、他もナデを基調とし、全面に赤彩が施される。2は五領式の小型甕である。3/4周遺存する。「く」の字口縁で、内面に鋭利な稜を有する点で古相を示す。ナデを基調とする。二次被熱により黒色化している。3は五領式の直口壺である。1/3周遺存する。黄褐色で、砂粒が多く、作りはやや粗い。ナデを基調とする。4は五領式の二重口縁壺である。全周遺存する。折返し口縁の流れを汲むが、二重表現が山形の帯状に近い点が五領式でも最新相を示す。5は五領式の壺の口縁部片である。低い折返し口縁で、頸部及び内面にはハケ（7～9本/cm）が施される。明褐色である。以上が、初期の竪穴住居跡に関わる遺物とみられる。次に、6・7は和泉式前半にみられる平底の鉢（杯）である。いずれも八割ほどの遺存度である。6は黒斑が明瞭な褐色、7は二次被熱により黒色化が進む。口縁部はヨコナデ、外面はケズリを基調とするが稜が明瞭ではない。内面は丁寧なナデにより滑らかである。8～10は和泉式の屈折脚高杯である。8は二次被熱を受けて剥がれているが内外面に、9は外面にそれぞれ赤彩が施される。いずれもナデまたは縦方向の粗いミガキを基調とする。杯部が状態よく完存する10は、黒斑を有する淡褐色で、和泉式に特有の段がかなり上位へ移行していること、内面に斜行放射状のヘラ痕がつくのが特徴的である。11は小型丸底壺のうち、口縁部に段をもつものである。下腹部が散乱していたが、上半身は完存する。底は「凹底」になっている。口縁部はヨコナデ、ほかは丁寧なナデが施される。胴部内面には綺麗な輪積痕が明瞭に5段残されている。12は焼成後底部穿孔の甕である。覆土の3層上面で13と並んで出土し、正位の状態で置かれた可能性が高い。底部以外は完形である。平底または台付きに移行する部分から径約7cmほど打ち欠かれ、破断面はさらに二次被熱を受けて黒色化している。さらにそこから一方の下腹部にかけて10cm～12cmほどが割れて瓢箪形の穿孔になっているが、こちらは二次被熱の後に割れた部分もあるようである。甕としては厚手であり、背が低く口が広い形状は、五領式としても和泉式としても特殊なもので、粗いケズリとナデを基調とする点で和泉式に近い。二次被熱は甕の側面から受け、一方が煤状付着物に覆われ、一方は赤色化して表面が剥落している。13は甕である。覆土3層上面で12と一緒に正位で並んで出土しており、口縁部から肩部がほぼ一周遺存する。破損前に苛烈な二次被熱を受けており、肩部に円形に黒色化部分があり、その周囲が赤色化し、背面は灰色化している。厚手で、直線的な短い「く」の字口縁は古相であるが、ナデを基調とした縦長球形胴部とみられ、和泉式の甕とみられる。

〈鍛冶関連遺構〉

炉3は、内部から転用羽口である15が出土しているので、鍛冶に伴う作業用の炉とみてよい。内部からは他に、鉄滓64g、鍛造剥片が大小（砂鉄を含む可能性あり）合わせて61g出土している。同じく、炉4と隣接する浅い小穴の間から、羽口の19が出土しているので、これらも鍛冶作業用に用いられた可能性がある。炉4の内部からは20・21など鉄製品断片が数点出土したほか、鉄滓92g、鍛造剥片が大小合わせて166g出土しており、作業用であることを裏付ける。なお、炉4の内部からは87の白玉破損品等も出土している。炉2からは細かい鍛造剥片13g、粒状滓1g、鉄滓微量が出土し、炉1からは細かい鍛造剥片27gが出土している。この他、直交軸上の西側の炭集中地点から羽口の17が出土しており、本跡の焼土範囲は鍛冶に関わるものである可能性を示している。主柱穴を除く右辺の柱穴列は、これら鍛冶関連作業時に設けられた可能性が高い。



0 (1/4) 10cm



0 (1/2) 5cm

第95图 SI-084 (2)

覆土に含まれた遺物に関しては、下層で鍛造剥片が検出されたことから、その回収を目的として本跡全体を25cm方眼に分割し、それぞれ試料を採取している。剥片集中区では覆土下層を上・下・床に区分（採取レベルは任意による）して720試料が採取されており、区分なしでは493試料を採取した。土はそれぞれフローテーションにより炭化物や有機物を選り分けたのち、網目1mmのフルイにかけた。鍛造剥片と砂鉄に関しては、磁石を用い、ポリ袋を介して試料に磁石を押しつけた際、付着する黒いかたまりが目立たなくなるまで抽出し、さらに鍛造剥片や鉄滓等の選り分けが可能となる径2mm以上を抽出した。したがって、2mm以下の資料には鍛造剥片、砂鉄、鉄滓が混在する。

覆土にみられた1)鉄塊・鉄滓、2)粒状滓、3)鍛造剥片(2mm以上)、4)鍛造剥片細片ないし砂鉄(2mm以下)の分布は第94図に示した。ただし、おおよその傾向を示すため採取区画ごとの集計とし、中心部2m四方のみすべて計量し、その外側は十字に各一列を計量した結果を示した。上記の1)から4)が共通して集中するのは炉4と炉3の間である。ただし、1)鉄塊・鉄滓と3)鍛造剥片(2mm以上)のみ、炉から約1.3m離れたP5脇にもう一つの集中地点が形成される。2)は比較的高温で操業した炉において生成され、3)は熱い鉄を打った場所において最も生成されることから、2)が存在する炉4または炉3において素材を熱し、一方3)が集中するP5付近は打つ場所であったならば、作業場の有機的関係として大きな矛盾はない。

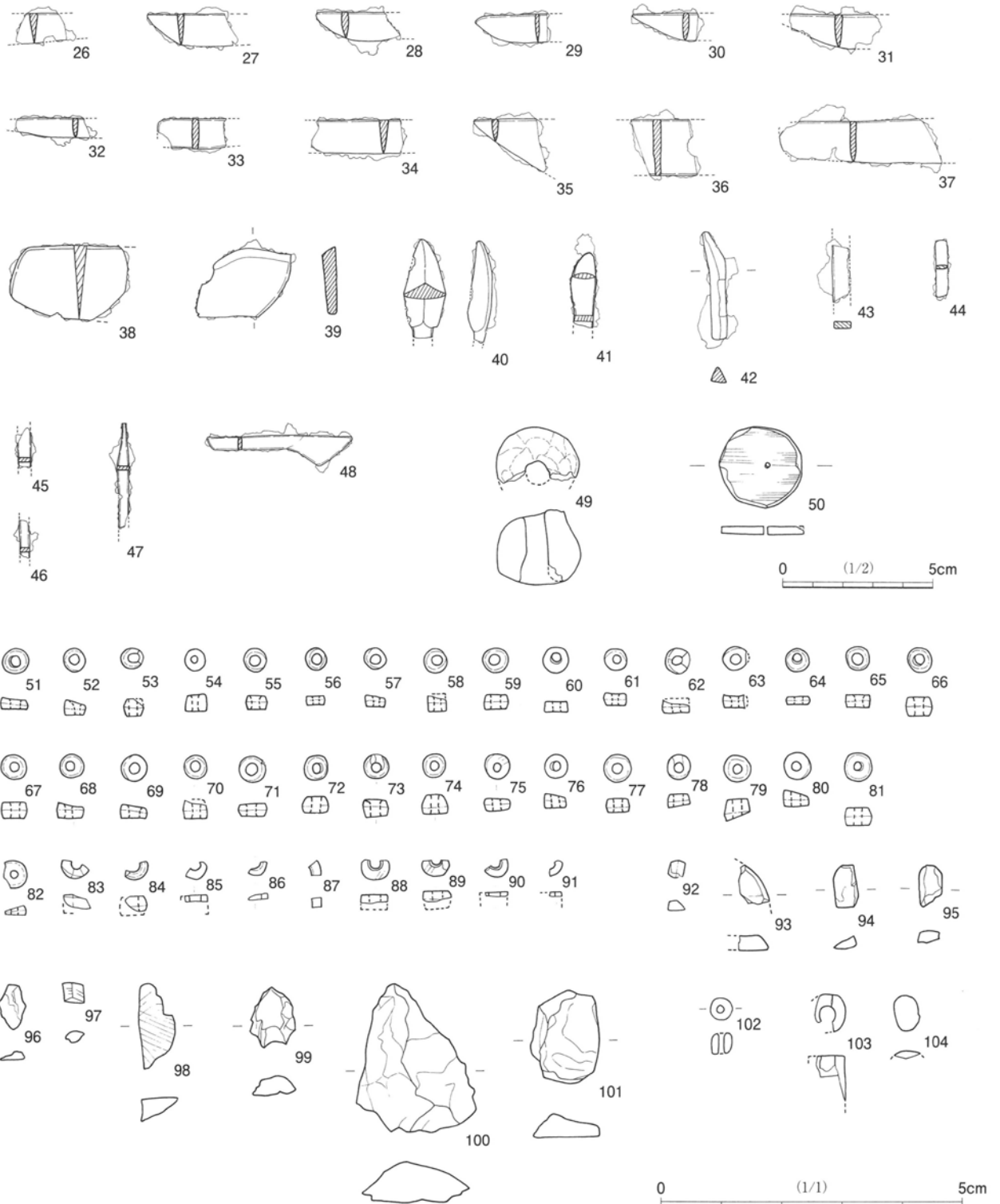
出土量は、1)鉄塊・鉄滓が1,355g、2)粒状滓が13g、3)鍛造剥片が372g、4)鍛造剥片細片・砂鉄が1,957gであり、合計3,697gの鍛冶関連遺物が出土している。1)には椀形滓も含まれていたが、量的には少なく、形成時の形状を残す大型試料には恵まれなかった。また、4)には確実に砂鉄が含まれており、比較的大粒の砂鉄を実体顕微鏡で観察すると、砂鉄はすべて角が取れ、丸みを帯びている。この他、多量の炭化物が併せて出土している。

直接的に鍛冶関連遺物といえるのは、14～19の転用羽口である。いずれも和泉式に特徴的な屈折脚高杯の脚部であり、杯部が外れた筒状の部分を炉内に置いて使用したものである。筒状部の先端には青灰色の鉄滓または溶融した発泡ガラス質の付着物がみられ、本来褐色の器面は筒状部分が灰色、さらに屈折部にかけて明色～赤色に転じる。遺存度の高い14・15はよく似た短脚のもので、外面と内面がよくナデ調整され、とくに筒状部内面が滑らかにヘラナデが加えられている点が特徴的である。和泉式でも比較的新相である。17・19は脚端部を欠損した転用羽口で、とくに19は磨り減った状況から見て、脚端部のない状態で使用されている。典型的な和泉式の高杯で、19はエンタシスをもつ。外面はともにナデ、内面は17が下部に輪積痕、上部に絞り痕を残し、18は輪積痕を残して横方向のヘラケズリが施される。16は転用羽口の筒上部、18は同じく脚端部で、二次被熱により前者は明色～赤色、後者は灰色に変色し、発泡質に転じる。

鉄製品は、ほとんどが埋没当初からの断片と観察され、完成品としての器種の識別が困難なものである。20～34は刀子とみられ、そのほとんどが切先及び切先付近の刃部断片である。切先ばかりが集中的に出土することは稀な現象である。当時の目的に沿って切り離したものと考えられ、とくに24のように刃部を細く切り取ったような断片は竪穴住居跡出土鉄器としてはあまりみられないものである。35～39は鎌とみられる。このうち35～37は比較的小型の鎌(直刃鎌ないし湾曲の少ない曲刃鎌)の断片、38・39は比較的大型の鎌の切先及び基部断片と観察されるが、断片であるため、前者は刀子との区別は困難である。刃部が観察できるものが多いが、36や39には刃部が認められない。40・41はヤリガンナとみられる。いずれも身の部分のみ遺存する。42は断面三角形の棒状の鉄塊である。他の製品等から剥がれた片割れとみられる。

43~46は細い板状（竹籤状）の鉄製品（鉄塊）である。用途の特定は困難であるが、薄いため、刃部の切れ端という可能性もある。47・48も板状鉄製品である。前者と同様の性格のものとみられるが、47は一方が針のように細く、48は逆に一方が広くなり、刀子の切先のようにみえる。

その他、図示していないが、粘板岩製の石材片が少量出土している。平坦な面の一部がやや滑らかと思われ、砥石であろうか。



第96図 SI-084 (3)

〈滑石製模造品及び玉類〉

鍛造剥片の回収のため採取した土から、滑石製模造品と滑石剥片が多量に出土した。分布は第94図のとおりである。製品としては有孔円板1点、白玉31点、白玉破損品10点があり、剥片は大小合わせて130点以上が出土している。この他、ガラス製小玉1点、碧玉製管玉破片3点、土玉（錘）1点が出土している。これらの分布は鍛冶遺構と無関係ではないが、少し異なる。白玉の製品とその破損品は広く散在しており、あえて粗密に言及するならば、炉4及び炉3の内部や直上、及びP5の南東脇にやや多い。これは鍛冶関連の遺構・遺物集中位置と一致する。これに対し、剥片は粗密が明瞭である。最も集中するのは炉4と炉3の北西側約1m地点であり、もう1か所の細片集中地点は、炉2の南側0.4mにみられる。つまり、剥片類は鍛冶遺構の場所とは一致せず、むしろその隣接空間から出土している。製作工房跡ならば、剥片類はかなり大量に出土することが予想されるが、実際はさほど出土していない。このことから、本跡は製作跡ではない可能性があり、たとえ剥片集中地点が製作跡であるとしても一時的なものしか想定しえない。また、白玉等の製品の分布は、剥片分布との間に相関はなく、製作とは別の要因で散布された公算が大きい。

49は錘とみられる土玉であるが、単独で出土した。約1/2周残存する。柔らかい状態で孔を三回は開け直しており、大きくなっている。胎土は在地の土師器と同じもので、焼成されている。

50は滑石製有孔円板である。右辺中央の柱穴下部から出土した。かなり軟質の滑石製である。多角形をなすがおよそ円形で、外径は約2.7cm、厚さ3.5mm前後、中心から外れた位置に径1.3mmの小円孔が穿たれている。表裏面に横方向にほぼ揃った擦痕がみられる。51～81は滑石製白玉、82～91が滑石製白玉の破損品、92～101が滑石の剥片である。滑石の剥片は大型のものから選択的に図示したので、図示されていないものはこれらよりも小型の剥片である。白玉は明瞭に製作時の擦痕を残し、側面に明瞭な稜を有する「算盤玉形」が9割以上を占める。総じて小さく、径は3.4mm～4.2mmである。高さは比較のあるものとなないものがあり、1.7mm～3.3mmまでばらつきがある。この組合せは滑石製模造品製作の全盛期ではなくその前後、おそらくはやや新相を示すものとみられる。石材は軟質の石質で、灰色を基調とする滑石である。10点の破損品は製作途中の破損ではなく、いずれも製品となった後に割れている。石の節理に沿って薄く剥がれたものもあるが、細かく破碎された可能性もある。剥片類はいずれも滑石とみられる。2.5cm大のものからごく小片まで有孔円板の破片である可能性もある93のほかは、特定の製品と関連する形状はもたない。未製品ではなく、削りかすに相当する。

白玉の他に、玉類がみられる。102はガラス小玉である。半透明な濃い青緑色であり、気泡は目立たない。細長く、筒状に均整な形状である。103・104は管玉破碎品である。灰味オリーブ緑色であり、くすんだ色調であるが、縞模様が美しい碧玉（ジャスパー）製である。いずれも外面がよく磨かれた状態で割れており、製品の破片である。破片は3点あるが、このうち2点が接合したのが103である。残る1点も同一個体とみられる点、極めて細かい破片である点、竪穴中央部下層に散在した点に、意図的な破碎と散布行為が読みとれる。

本跡の床面付近の出土遺物には、少ないながらも五領式最新相の特徴を有するものが含まれ、古墳時代前期末の竪穴住居跡であった可能性がある。しかし、炉をはじめとして利用痕跡が顕著なのは中期においてであり、鍛冶の施設として改造され、引き続き利用されたとみられる。出土した鉄器は製品であったものが、切先など身の一部だけ出土している場合が多く、欠けた刃部等を切断して刃を付け直す「修理」が

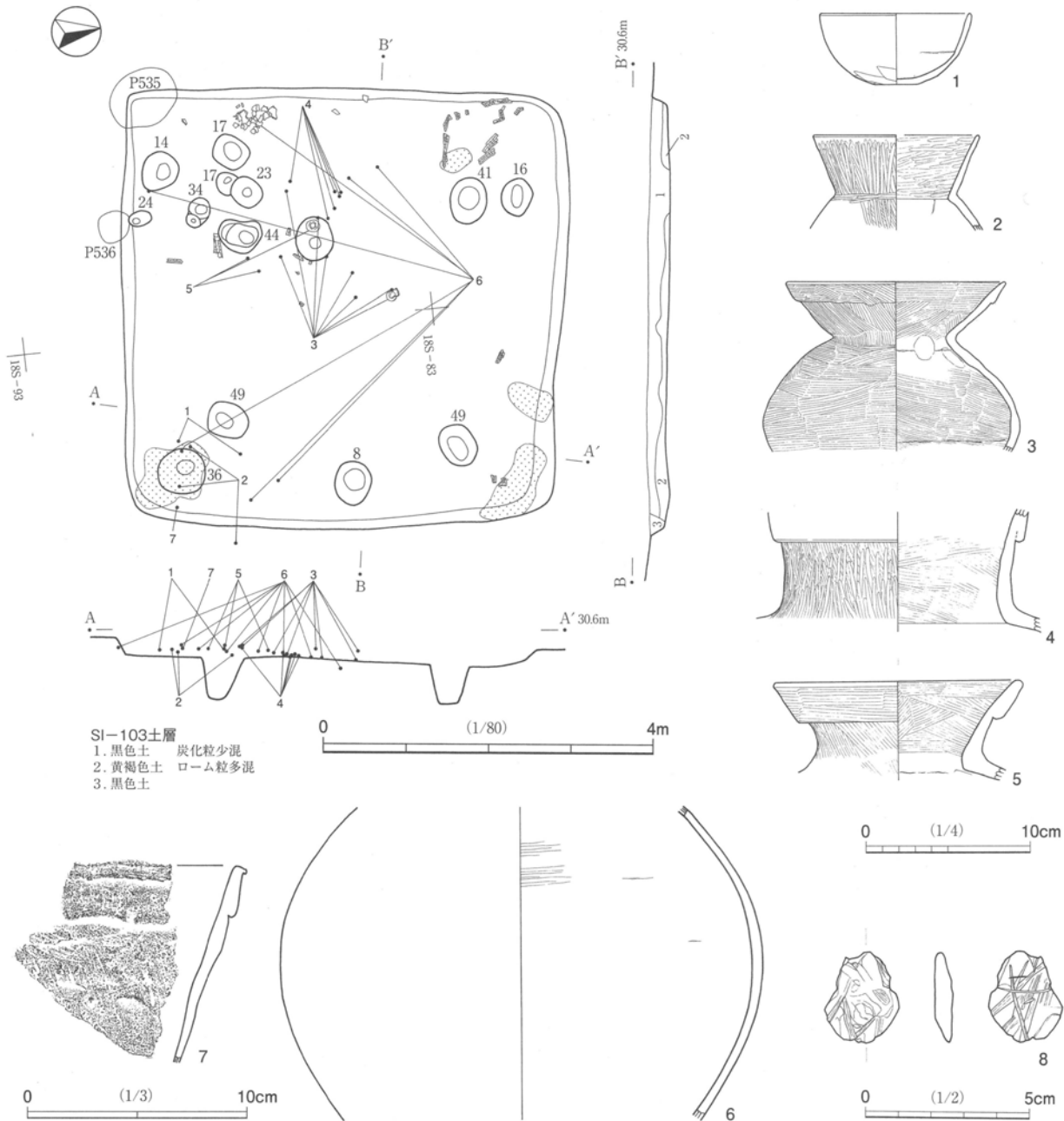
行われた可能性が考慮される。理科学分析を待つべきであるが、粒状滓の存在は比較的高温操業を物語る。しかし、炉に構造物を想定しうる要素がないので、比較的高度な修理技量を有したとしても、考古学的には小鍛冶の遺構とみるのが妥当である。滑石製模造品の工房跡としては、剥片類が極端に少なく、明確な未製品はほとんどみいだせない。このことから、滑石製模造品類が散布した事実は、模造品製作のうち一部の工程のみをここで行った可能性と、鍛冶遺構に対する祭祀的な意図をもって投入された可能性とがある。他の玉類やその破損品が出土しているので、祭祀的要素が大きいと考える。

SI-103 (第97図, 図版64・65・236・266・319)

遺跡の南部西寄りの18S区に位置する。5.4m×5.3mの方形をなし、確認面よりの深さは最大0.30mである。炉の位置から、主軸はN-80°-Wである。付近は緩やかに北西の沢奥へ向かって傾斜しており、北辺は非常に浅い状態で検出された。周囲には遺構が少なく、当該期の遺構としては単独で認められた。壁は傾斜している。壁溝は巡らない。炉は主軸からやや左にずれた西寄りに1か所認められた。52cm×48cmの楕円形の浅い凹みがみられる。支柱穴は4か所認められたが、上辺左隅には多くの小穴があり、支柱穴に充てるべきがどれかは判断が難しい。他の3穴は径60cm×40cm前後の楕円形で、深さは右上から時計回りに41cm, 49cm, 49cmである。これに比する穴は、左上小穴群では唯一、炉のすぐ左脇に位置する穴が深さ44cmと該当するが、この穴は他と整列しない。主軸の下辺寄りに出入口ピットが1か所ある。深さは8cmである。下辺左隅に径58cmの円形小穴が1か所ある。深さは36cmで、本跡に伴ういわゆる貯蔵穴とみられる。その上位を覆うように焼土を含む覆土が形成され、同様に下辺右隅、上辺右隅の覆土にも炭化材を伴う焼土が検出された。炭化材の有機的な連続性は見いだせず、即座に焼失による倒壊とは断じられない。硬化面は形成されていない。

浅い覆土ではあったが、遺物は多く出土している。このうち、3～6などはほぼ床面に近い場所から出土しており、本跡に伴う公算が大きい。

1は小型鉢である。口縁部の3/4周分は欠損している。薄手の作りで、ナデを基調とし、二次被熱を受け暗色化している。2は直口壺である。1/2周遺存する。薄手の作りで、外面は縦方向のミガキ、内面は口縁部のみミガキ様のナデが施される。二次被熱があり、弧状に煤状付着物がみられる。3～5は折返し口縁壺である。3は小型の壺で、本跡中央部床面から逆位で出土した。口縁部から肩部が全周遺存する。頸部が「く」の字に屈曲し、大きく開きつつ少し内湾する形状は珍しい部類に入る。口縁部内外面、胴部の内外面とも約6本/cmの粗く深いハケで覆われる。内面の頸部は鋭角に作られ、接合部は輪積痕と指押さえが残る粗い作りである。砂質の胎土で、胴部に二次被熱を受け、全体に暗色化・赤色化が進行し、器面が荒れている。4は比較的大型の壺で、頸部と折返し下端部は全周遺存する。炉の付近から出土していることから、この部分が炉器台として用いられた可能性がある。折返し下端部に刻みを有し、もともとは赤彩が施されていた可能性があるが、激しい二次被熱により荒れており、表面の黒色化、断面の赤色化が進行する。5は炉内から正位で出土した典型的な五領式の壺である。厚みの作りであるが、3と似た胎土である。4本～5本/cmの粗いハケが内外面に施される。肩部以下がはずれた状態で二次被熱による赤色化が認められるものの程度は浅い。本跡廃絶の直前まで炉器台として用いられていた可能性が高い。6は上辺壁際で出土した潰れた状態の壺または甕である。壺の可能性が高いが極めて薄手である。内外面ともにナデを基調とし、製作単位の境界付近など内面の一部にハケがみられる。黄褐色であるが、破片の状態ですべて二次被熱を受け、変色している。7は甌とみられる。極めて粗く不整形な作りで、ケズリの痕跡が生々



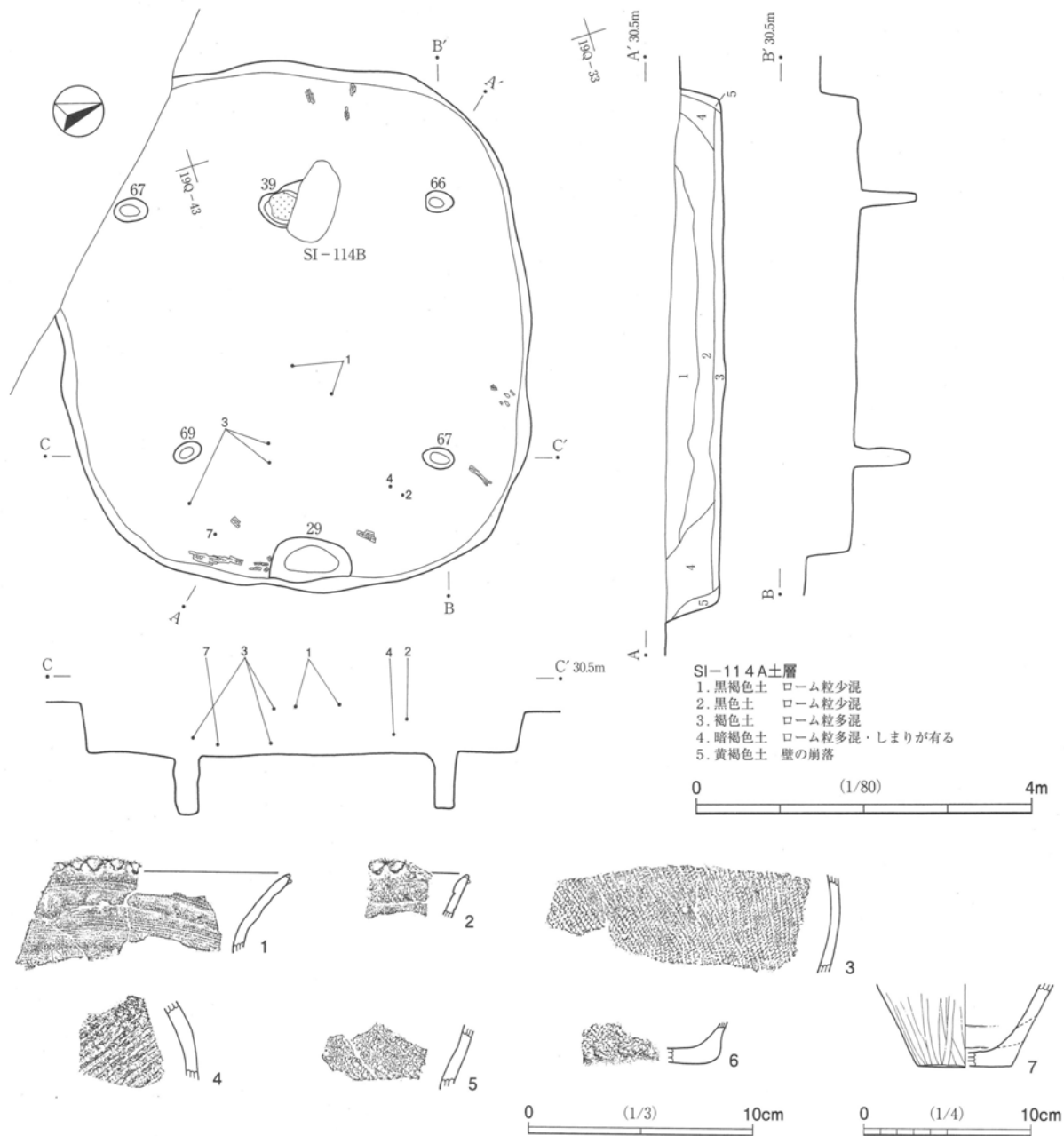
第97図 SI-103

しい。輪積状の折返し口縁を有し、内面は粗い板ナデである。表面が黒褐色、破断面は暗褐色である。8は焼成粘土塊である。破損部はない。明色である。大量の草茎が含まれていた痕跡がある。

以上の遺物はいずれも五領式に属す。古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。

SI-114A (第98図, 図版70・236・237・335)

遺跡の北部の19Q区に位置する。6.2m×5.5mの小判形をなし、確認面よりの深さは0.61mである。主軸はN-67°-Wである。付近は比較的平坦であるが、北側に入り込んできた小支谷に面する。壁はやや傾斜する。壁溝はみられない。炉は主軸上の北西寄りに1か所認められた。径45cm前後の円形で深さ39cmというかなりの凹みがみられる。主柱穴は台形に配置された4か所がある。主軸に対し横長の特徴を有する40cm×30cm以下の楕円形で、深さは左上から時計回りに69cm、66cm、67cm、69cmである。主軸の下辺際に



第98図 SI-114A

は出入口ピットとみられる深さ29cmの穴がある。硬化面は認められない。覆土はさほど埋戻しを想定できる要素はない。覆土下層には平らな層があり、壁際に炭化材が分布している。

遺物は少なく、いずれも破片で、しかも比較的多く出土しているが、覆土中の出土遺物がほとんどである。

1～7は弥生時代後期の土器群である。このうち1と2は輪積甕の口縁部片であり、ヨコナデによりかなり不明瞭になった輪積装飾と指頭痕が認められ、口縁端部には波状の刻みが施される。煤状付着物により黒色化している。3～5は甕の胴部片で、いずれも附加条縄文であり、煤状付着物に覆われる。4はとくに深い線状の施文になっている。6は甕の底部片である。表面が剥がれており、底面にわずかな木葉痕と側面に縄文が観察される。7は外面に粗いミガキを有する底部片で、無文の壺とみられるが、形状は北

関東系のものである。底面までナデ調整される。二次被熱の程度は軽い。

炉を切って構築された土坑 (SI-114B) の内部から奈良・平安時代の須恵器長頸壺が出土している (第575図の107)。よって、この土坑は奈良・平安時代のもものとみられる。

土器はいずれも細片ではあるが時期的にまとまっている。弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。この他に炭化した種子が出土している。

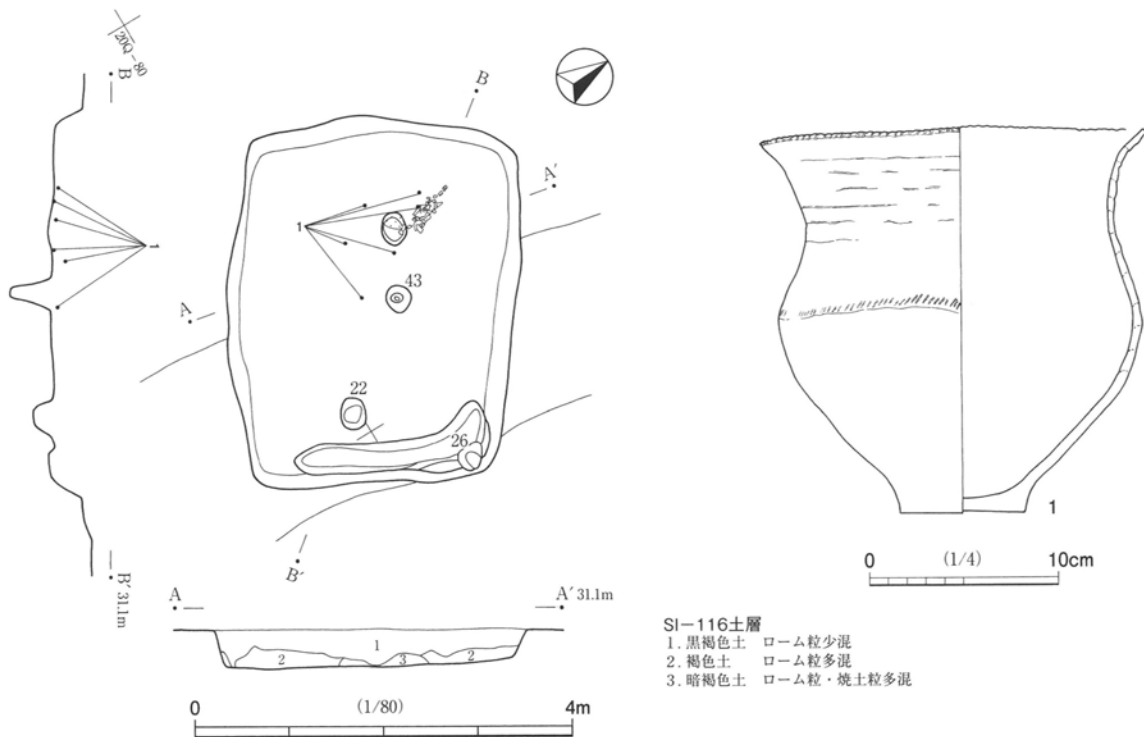
SI-116 (第99図, 図版71・268)

遺跡中央部の20Q区に位置する。3.9m×3.1mの不整長方形をなし、確認面よりの深さは0.40mである。炉の位置から、主軸はN-56°-Wである。付近は平坦な地形であるが溝が多く走っており、SX-019に切られている。壁はやや傾斜している。壁溝は巡らないが、下辺に浅い溝が走る。炉は主軸上の西寄りに1か所認められた。径35cmの円形でわずかに凹む地床炉がみられる。主柱穴は認められない。中央に径30cm、深さ43cmの小穴がある。さらに主軸の下辺寄りに出入口ピットとみられる30cm×26cmの隅円長方形の小穴がある。深さは22cmである。硬化面は形成されていない。覆土は均質な黒褐色土で、下層にロームを多く含み、最下層には焼土がみられることから、片付けられ、埋め戻された可能性がある。

遺物は少ないが、床面に置かれ、完形に復元できる1の甕が潰れた状態で出土している。

1は久ヶ原式に含まれる輪積甕であり、比較的古相の形状をしている。腹部に黒斑が目立つが明るい褐色で、二次被熱により赤色化が認められる。赤色化は外面腹部に著しい。煤状付着物は内面のみみられ、外面には認められない。薄手の作りで、口縁部に6条の輪積装飾と指頭痕、肩部にも1条の輪積段が設けられ、その上を櫛状工具による刻みが巡る。口縁端部もほぼ同一に工具による刻みが密に施される。口縁部内面には不明瞭な輪積装飾が1条認められる。無文帯はナデを基調とする。

弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。



第99図 SI-116

SI-125 (第100図, 図版76・237・271・319)

遺跡の南部東寄りの20T区に位置する。5.2m×4.3mの隅円長方形をなし、確認面よりの深さは0.47mである。炉の位置から、主軸はN-73°-Wである。付近は平坦地で、遺構密集地の近くであるが単独で良好に検出された。当該期竪穴住居跡が6軒ほど列をなすその中央に位置する。壁はやや傾斜する。上辺と左辺の一部にわずかに壁溝らしい痕跡があるものの、明瞭ではない。炉は主軸上の西寄りに1か所認められた。60cm×40cmの楕円形で若干の凹みがみられ、内部には焼土がよく形成されている。支柱穴は4か所認められた。上辺は径30径cmの円形、下辺は主軸に直交する40cm×30cmの楕円形で、深さは左上から時計回りに66cm, 50cm, 55cm, 60cmである。主軸の下辺寄りに出入口ピットがある。径33cmほどの不整円形で、深さは37cmである。下辺右の支柱穴にはこれに接して深さ50cmの柱穴があり、柱の補強や建替えが想定される。硬化面は形成されていない。覆土は自然埋没を思わせる堆積であり、とくに最上層の1層は皿状の凹みに堆積した層である。この1層下面に土器溜まりが形成されている。

遺物は多く出土しているが、ほとんどが上層の土器溜まりから出土しており、本跡に直接伴う遺物は少ない。このうち、1が炉、4・5が比較的下層から出土している。

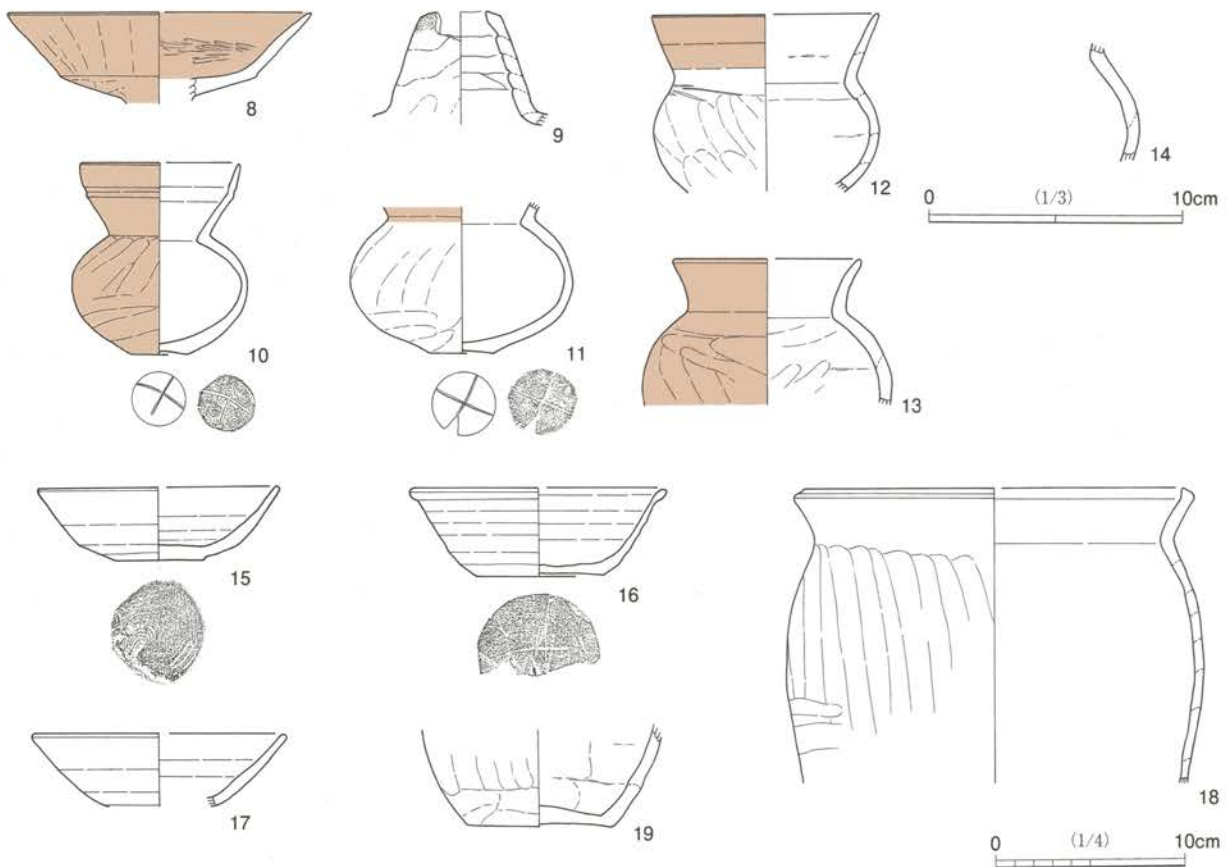
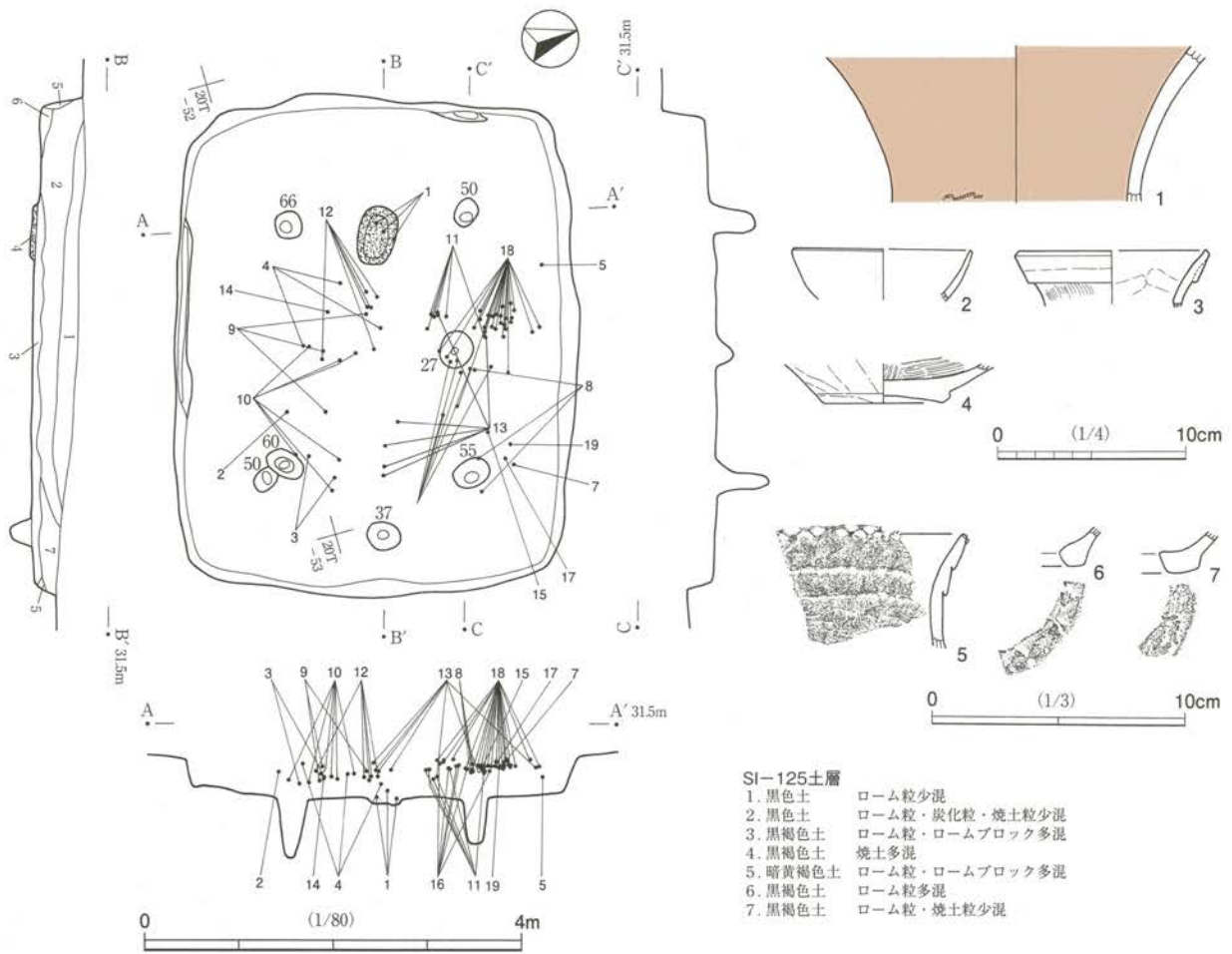
1は弥生時代後期の大型装飾壺である。頸部の細片が比較的多く出土している。内外面とも赤彩されているが、二次被熱が激しい上、内面は荒れが激しくほとんど剥がれている。胎土は砂粒が極めて多い。炉内出土であることから、筒状の頸部が炉器台または土器囲い炉に転用された可能性が高い。2は小型鉢である。1/4周遺存する。赤彩されている可能性があるが、剥がれていて判別しがたい。薄手の作りで、粗いナデが施される。3は小型の折返し口縁壺である。1/3周遺存する。折返し外面には横の、頸部外面には縦のミガキが施され、内面は粗いナデが施される。煤状付着物に覆われる。4は壺または甕の底部片であるが、ナデを基調とする輪積甕の可能性が高い。内外面、底面までミガキ様のヘラナデが施される。破損後に二次被熱し、破断面が黒色化している。5は輪積甕の口縁部片である。煤状付着物が外面に薄く認められる。口縁端部に押圧による波状の刻みが施され、輪積装飾は明瞭で、2段だけ表現される。内面は粗いナデを基調とする。輪積装飾の少なさと内面調整の粗さから、久ヶ原式に含まれる輪積甕ではなく、いわゆる北関東系土器との折衷である可能性が高い。6・7は底部穿孔の壺である。焼成前穿孔であり、穿孔部分と底面は粗くヘラケズリが施されている。器壁は極めて薄手であり、小型の壺とみられる。

炉の遺物や比較的低位置出土の遺物から、本跡は弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

〈SI-125上層土器溜まり〉

覆土の埋没過程に生じた挿鉢状の凹みから、多量の土器が出土した。土器溜まりは2時期に形成され、主軸に向かって左側(南側)の若干低い位置からは古墳時代中期の土師器、右側(北側)の最上層(確認面付近)においては平安時代の土器群が出土している。

8・9は高杯である。ともに1/2周ほど遺存する和泉式の高杯である。杯部の8は底に段を有し、ナデを基調とし、赤彩が施される。脚部の9は鍛冶の羽口に転用されたもので、発泡質の鉄滓が付着して灰色化している。屈折脚としては大きく開くが、若干のエンタシスをもち、内面に明瞭な輪積痕が残る。10~14は小型丸底壺である。丸底とはいえ、実際には10・11のように凹底を設けており、底面には「×」のヘラ書きがみられる。口縁には段をもつものと、もたないものがあり、段のある10は比較的薄手で小型に作られ、唯一内面が黒色化している点で異質である。いずれもヘラナデを基調とし、外面は全面に赤彩が施されるが、12の胴部や二次被熱して煤状付着物がみられる11では不明瞭である。



第100図 SI-125

15～17はロクロ製の土師器杯である。16・17はロクロ目をナデ消し、内湾する形状で、15の底部は高台風に厚く回転糸切りされ、無調整である。16はロクロ目が残るもので、底部は回転ヘラケズリが施される。いずれも平安時代の所産であるが、17がやや古相である。18・19は在地の土師器甕（千葉寺編年の房総S'型）である。上部が存する18は口縁端部が内側につまみ上げられるのが特徴で、外面は縦のヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。底部の19は二次被熱が著しく、稜の明瞭な粗いヘラケズリが施される。

古墳時代中期の土器溜まりは祭祀的な色彩の強い器種とされる小型丸底壺が主体であり、形成には祭祀的意図が働いたと考える。

SI-168（第101図，図版93・237）

遺跡の北部北寄りの190区に位置する。付近は平坦で、大きな重複や攪乱もなく良好に検出された。3.7m×3.2mの隅円方形をなし、確認面からの深さは0.50mである。主軸は、炉の位置からみてN-19°-Wである。壁にはやや傾斜がみられる。壁溝は認められなかったが、壁際に連続する小穴が巡っている。これは深さ4cmから26cmまで幅があり、隣同士でも明瞭な違いが認められた。杭や板材を並べて差し込んだ可能性が高い。硬化面は炉の周囲から出入口ピット付近に確認された。炉は径46cmの円形の範囲に焼土が堆積する地床炉で、主軸上の北寄りに認められた。主柱穴は検出されなかったが、主軸の下辺寄りに出入口ピットとみられる小穴があり、50cm×28cm、深さは6cmである。覆土は比較的自然的な埋没状況を思わせる。

遺物は少なく、ほとんどが小破片である。図示しえた遺物は1点で、南側出入口付近の床面から出土した。

1は強く開くタイプの台付鉢の脚部である。裾端には粘土紐の貼付による文様帯が存在したものと考えられるが、ほぼ完全に剥落している。

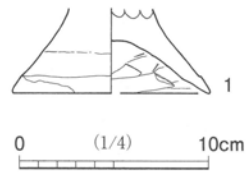
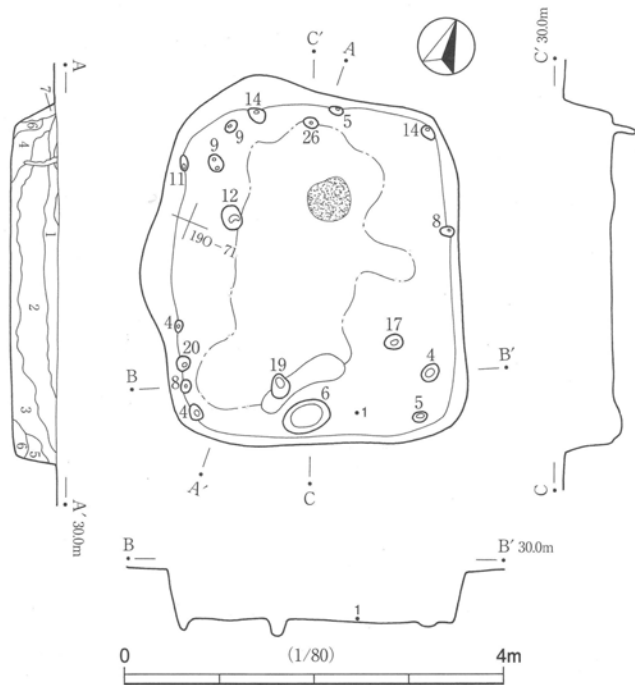
図示した床面出土遺物から、弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

SI-170（第102図，図版94・237）

遺跡の西部北寄りの180区に位置する。付近は平坦で、攪乱や重複も認められない。5.4m×4.9mの隅丸方形をなし、確認面からの深さは0.55mである。主軸は、炉の位置からみてN-42°-Wである。壁はやや傾斜がみられる。床面はほぼ平坦であるが、硬化面は確認されていない。壁溝は全周せず、北壁の北東コーナー付近に70cm、東壁の南寄りに90cmにわたって断片的に検出され、共に幅10cm、深さ2cm程度である。この他に壁際には直径10cm程度、深さ2cm～13cmの小穴が、30cm～50cm程度の間隔で断続的に26基めぐっており、壁板を押さえる杭などの跡と考えられる。炉は70cm×35cmの不整楕円形、深さ7cmの凹みが見られる地床炉で、主軸上の北側主柱穴間に認められた。火床部には焼土がよく形成されている。主柱穴は4本で、長方形の配置である。長軸35cm～40cm、短軸25cm～35cm程度の楕円形で深さは左上から時計回りに80cm、82cm、90cm、81cmである。主軸の下辺寄りに出入口ピットがあり、33cm×25cm、深さは28cm程度である。この南側壁際に、85cm×80cm、深さ16cm程度の貯蔵穴と考えられるピットが確認された。覆土はロームブロックをやや多く含む層が主体の人為による埋め戻しと考えられ、西側から投げ込まれた様子が窺える。

遺物はほとんどが小破片で量も少なく、覆土上層～中層からの出土遺物がほとんどを占める。

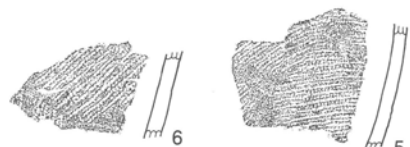
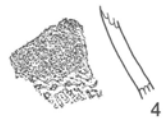
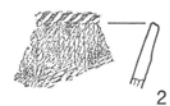
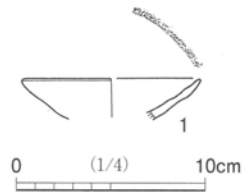
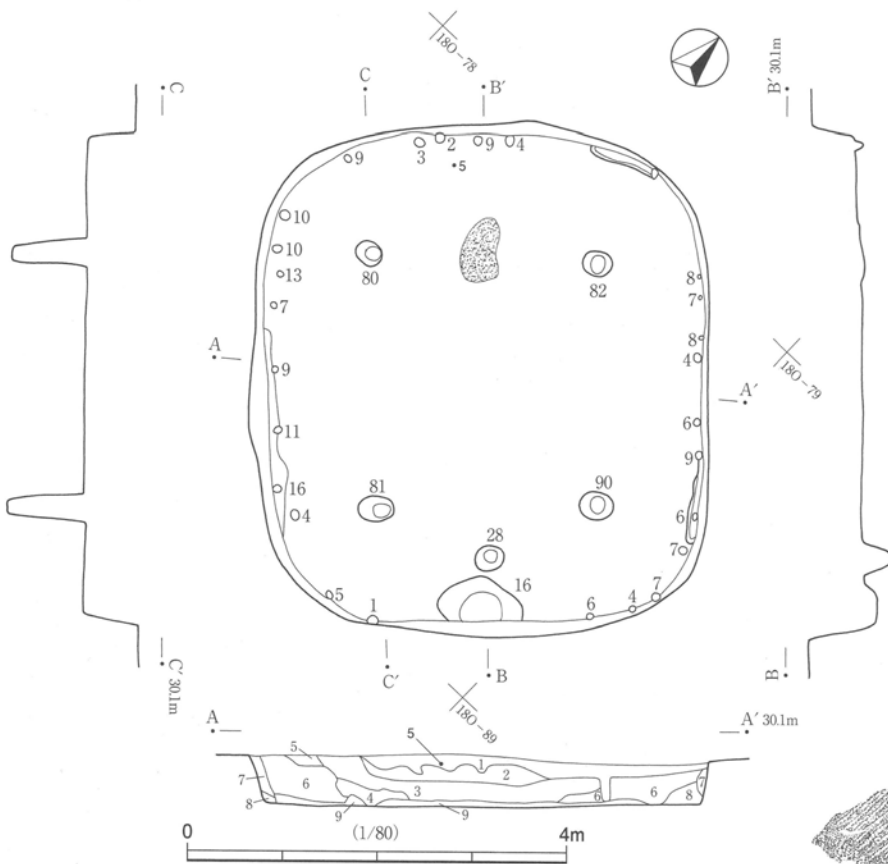
1は強く開くタイプの器台の器受部である。かなり薄手のつくりで、口唇部は尖るが、附加条原体の押捺による文様が施される。2・3は折返しによる複合口縁をもつ装飾甕の口縁部である。2は外面に附加条縄文、口唇部にはヘラ状工具による細かい押捺が施される。3は口唇部がヘラ状工具ないし棒状工具を



SI-168土層

- 1. 褐色土 褐色土・ローム粒極少混
- 2. 黒褐色土 褐色土・ローム粒やや多混
- 3. 暗褐色土 黒褐色土やや多・ローム粒多混
- 4. 暗褐色土 褐色土・ローム粒やや多混
- 5. 暗褐色土 褐色土・黄褐色土やや多・ローム粒多混
- 6. 暗褐色土 黄褐色土・ローム粒やや多混
- 7. 黄褐色土 ローム粒多混

第101図 SI-168



SI-170土層

- 1. 茶褐色土 (表土)
- 2. 黒色土 ローム粒少混
- 3. 黒褐色土 ローム粒少混
- 4. 黒色土 ローム粒混
- 5. 黒褐色土 ローム粒混
- 6. 黒褐色土 ローム粒多混
- 7. 黄褐色土 ロームブロック混
- 8. 暗黄褐色土 ロームブロック少混
- 9. 暗黄褐色土 ロームブロック多混

第102図 SI-170

用いた振幅のやや大きな波状口縁で、外面には顕著に煤が付着する。4～6は印手式の甕である。4は頸部で、外面の下端にRLの附加条縄文、その上部にS字状結節文が不明瞭ながら3段施される。5・6は胴部下半で、胎土や文様の様子から同一個体の可能性がある。外面にはLRの附加条縄文が施され、一部に煤が付着する。

遺物の出土状況が上層に偏っているため時期は詳らかでないが、遺構の形態と覆土の状況からみて弥生時代後期の竪穴住居跡と考えておきたい。

SI-171 (第103図, 図版94・237)

遺跡の西部北寄りの180区に位置する。付近は平坦で、攪乱や重複はなく、遺存状況は良好である。3.8m×3.1mの隅丸長方形をなし、確認面からの深さは0.51mである。主軸は、炉の位置からみてN-16°-Wである。壁はやや傾斜がみられる。右辺の大部分と左辺の下半部には幅5cm～10cm、深さ2cm程度の壁溝が認められる。硬化面は検出できなかった。炉は55cm×50cmの隅丸菱形、深さ2cm～3cmのわずかな凹みがみられる地床炉で、主軸上の北寄りに認められた。火床部には焼土が形成されているがそれ程厚くはない。主柱穴は確認されなかったが、主軸の下辺寄りに直径20cm、深さ15cmの出入口ピットがあり、その外側南壁際に、55cm×40cm、深さ5cm程度の貯蔵穴と考えられるピットがみられる。覆土は概してレンズ状の堆積を示しており、基本的には自然堆積と考えられる。

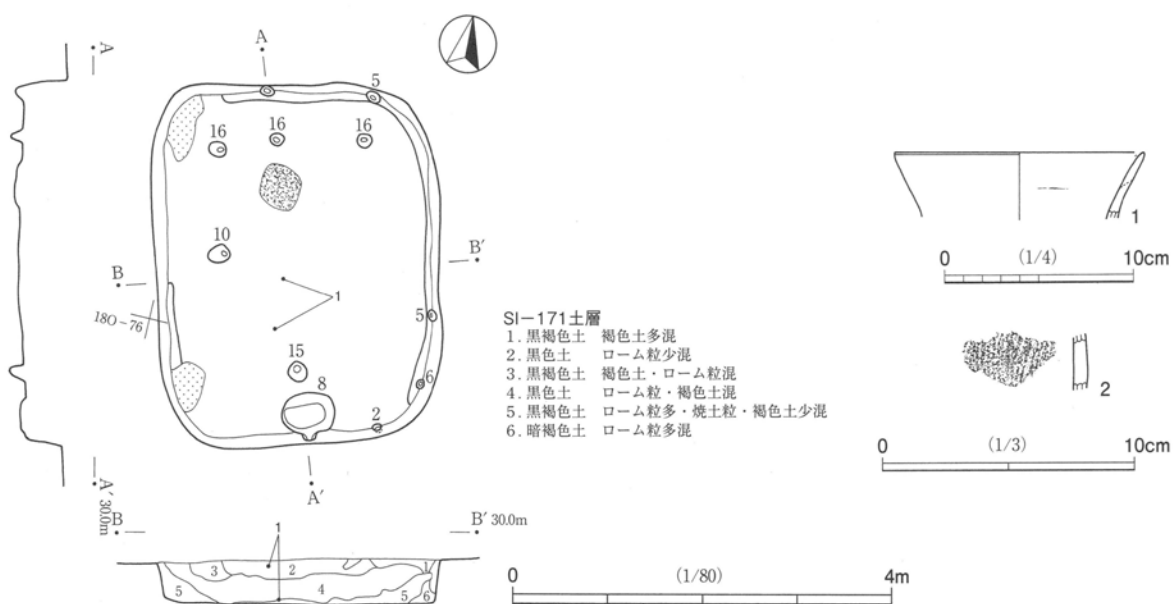
遺物は僅少で、ほとんどすべてが小破片である。

1は小型埴の口縁部で、わずかに外反する。全体無文で口唇部は尖り、焼成はきわめて良好である。赤彩は施されていないが、外面は橙色に発色している。2は甕で、外面に粗いハケメを施す。

遺物の出土状況が散漫であるため時期は詳らかでないが、遺構の形態と覆土の状況から古墳時代前期の竪穴住居跡と考えておきたい。

SI-172 (第104図, 図版95・237)

遺跡の西部北寄りの180区に位置する。付近は平坦で遺構の重複はないが、耕作による攪乱が著しい。ただ、この耕作痕は遺構の床面までは達しておらず、遺存状況は比較的良好である。7.1m×6.0mの隅丸



第103図 SI-171

長方形をなす大型住居で、確認面からの深さは0.5m～0.6mである。主軸は、炉の位置からみてN-10°-Wである。壁はやや傾斜がみられ、壁溝は存在しないが、壁際にはやや不規則な間隔で直径5cm程度の小ピットが巡り、壁板を押さえる杭などの跡と考えられる。炉から出入口ピット付近までの内区の範囲には硬化面が形成されているが遺構の面積に比して狭い。炉は90cm×60cmの逆卵形、深さ1cm～2cmのわずかな凹みをもつ地床炉で、主軸上の北側主柱穴間に認められた。火床部には焼土が形成されているが、それ程厚くはない。主柱穴は4本で、ほぼ正方形の整った配置である。径30cm～40cmの円形もしくは楕円形で、深さは左上から時計回りに69cm、67cm、44cm、70cmである。主軸の下辺寄りに、直径35cm、深さ31cmの出入口ピットがあり、その外側南壁際に、110cm×55cm、深さ5cm～17cmの貯蔵穴と考えられるピットがみられる。覆土は概してレンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積と考えられる。

遺物は多く出土しているが、ほとんどが小破片である。

1～5は印手式の甕である。1は口縁で、口唇部には附加条原体による押捺、外面にはRLの附加条縄文、その下部にはS字状結節文が施されるが、この部分から破砕しているため詳細は不明である。また外面には輪積痕が認められるが、意図して残したものではないと考えられる。2は胴部中位で、やや強く張るタイプで、外面にはLRの絡状体を施文する。外面の上半には煤、内面の下半には炭化物が付着する。3は胴部中位で、外面全面に疎らなRL縄文、中位に振幅の大きなS字状結節文を1段施す。4は胴部下半で、外面にはRLの撚糸文を施し、内面には炭化物が付着する。5は底部～胴部下端で、底面と下端はやや強いヘラナデで調整し、その上部に疎らなRL縄文を施す。胎土や施文原体からみて、3と5は同一個体の可能性が高い。6・7は胎土の状況から同一個体の可能性がある甕の頸部で、複数段の輪積痕を残すタイプと考えられる。8は器台の器受部で、口唇部は尖り、直下に棒状工具による2個単位の焼成前穿孔が施される。9はミニチュア土器で、高杯の脚部である。10は土製紡錘車である。やや精製された胎土を用い、全面がヘラナデにより調整される比較的丁寧なつくりで、厚みがあるためやや重量がある。穿孔は上面から棒状工具により行われている。

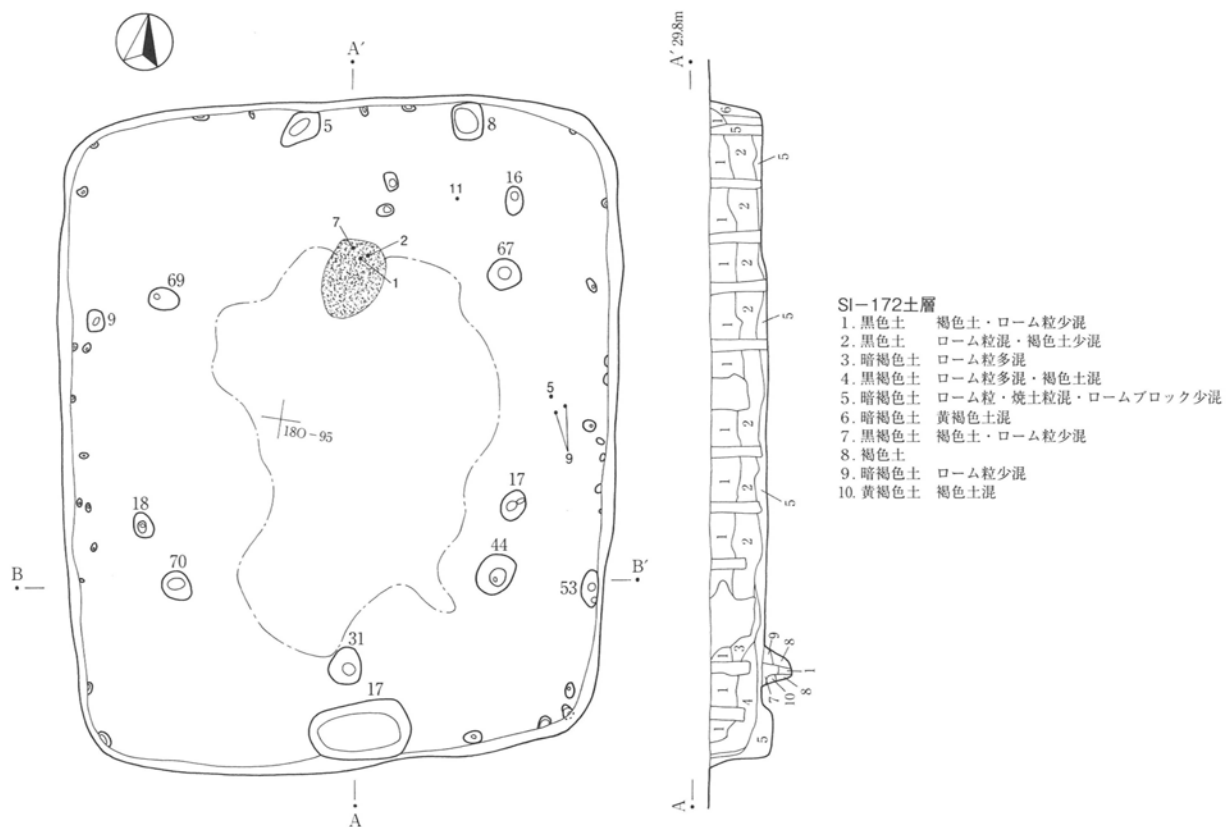
明らかに本遺構に伴う遺物は認められないため時期は詳らかでないが、下層～床面付近の出土遺物からみて弥生時代後期の竪穴住居跡と考えておきたい。

SI-173 (第105図, 図版95・237)

遺跡の西部部北寄りの18P区に位置する。付近は平坦で遺構の重複はないが、耕作による攪乱を受けているため遺存状況はあまり良くない。4.8m×4.0mの隅丸長方形をなし、確認面からの深さは0.3m～0.4mである。主軸は、炉の位置からみてN-47°-Eである。壁はほぼ垂直で、壁際には周溝や壁柱穴などは存在しない。顕著な硬化面は認められないが、床面全面がやや堅くしまっている。炉は45cm×45cmの円形、深さ5cmの凹みをもつ地床炉で、主軸上の北西側主柱穴間に認められた。火床部には焼土が2cm～3cm程形成されている。主柱穴は4本で、やや縦長の比較的整った長方形配置である。径35cm～25cmの円形～楕円形で、深さは左上から時計回りに88cm、62cm、62cm、72cmである。出入口ピットは確認できなかったが、主軸上の南東壁際には50cm～40cm、深さ15cmのピットがあり、貯蔵穴の可能性はある。覆土は概してレンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積と考えられる。

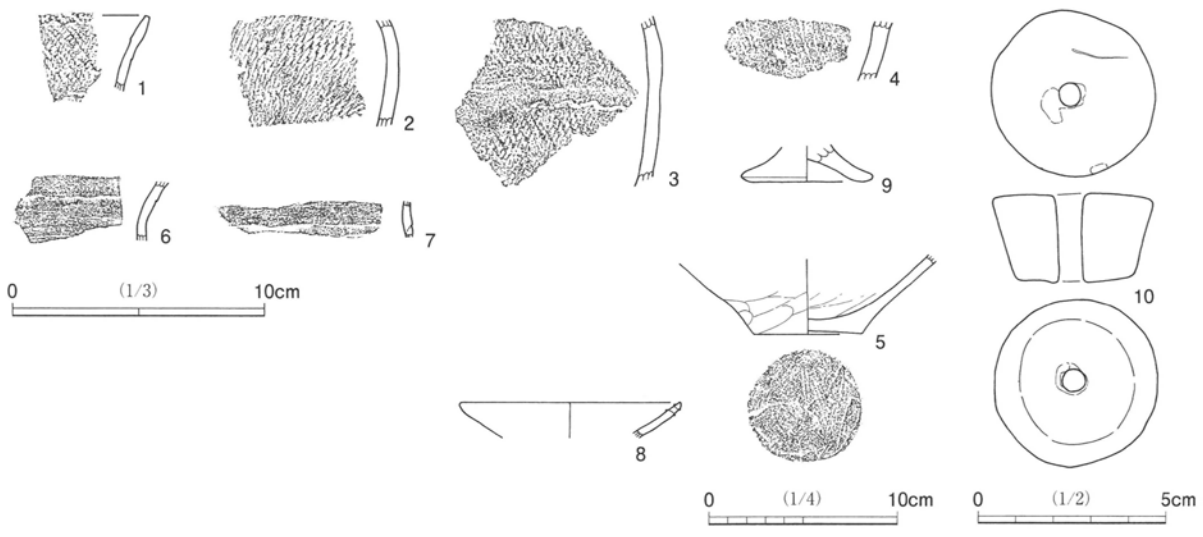
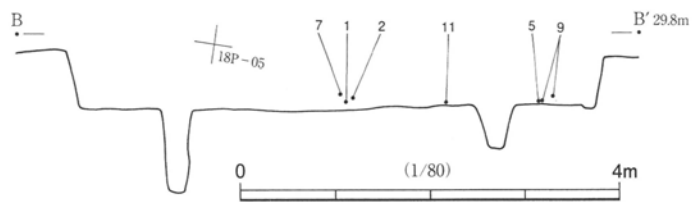
遺物は少ない。ほとんどが小破片であるうえ、いずれも覆土上層からの出土である。

1は輪積痕を複数段残すタイプの甕の頸部で、外面には煤が付着する。2・3は印手式の甕である。2は胴部中位で、外面にはやや密なRLの撚糸文が施され、外面には煤が付着する。3は胴部下半で、外面

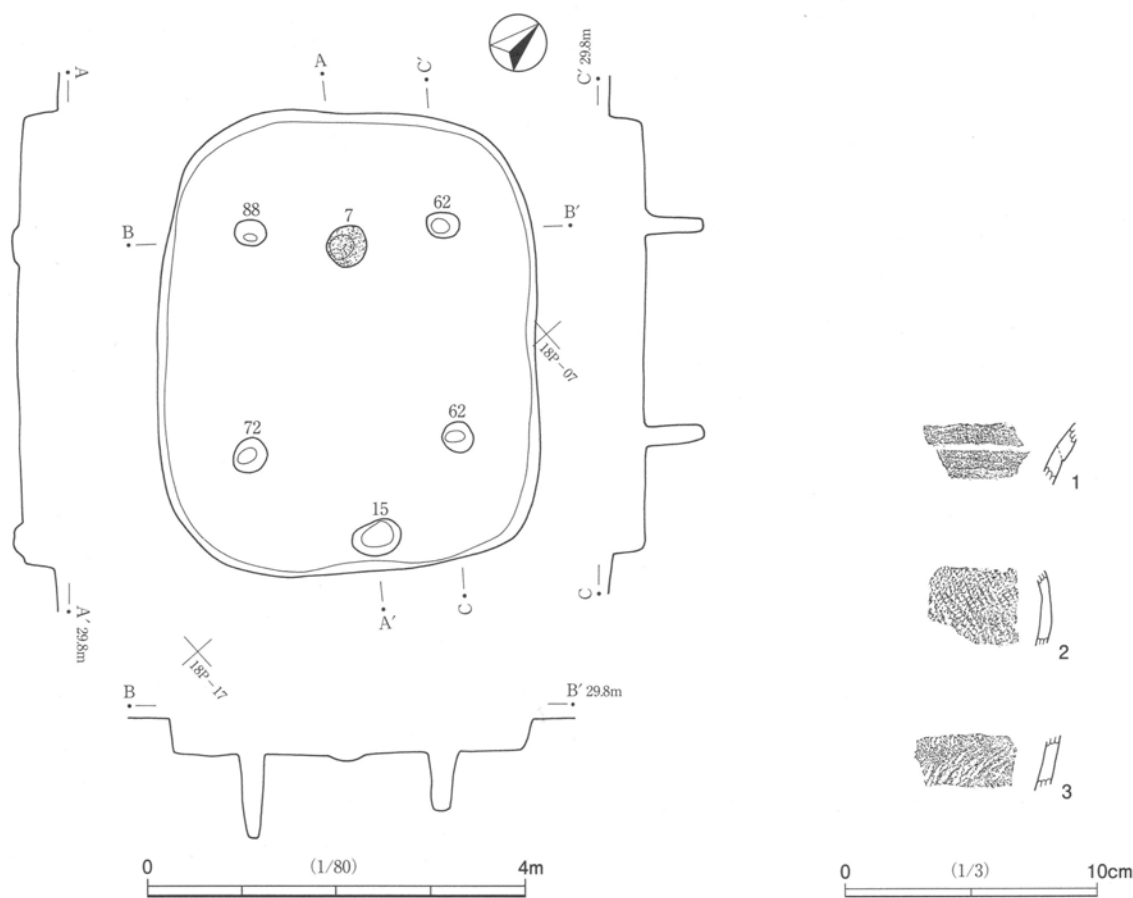


SI-172土層

- 1. 黒色土 褐色土・ローム粒少混
- 2. 黒色土 ローム粒混・褐色土少混
- 3. 暗褐色土 ローム粒多混
- 4. 黒褐色土 ローム粒多混・褐色土混
- 5. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒混・ロームブロック少混
- 6. 暗褐色土 黄褐色土混
- 7. 黒褐色土 褐色土・ローム粒少混
- 8. 褐色土
- 9. 暗褐色土 ローム粒少混
- 10. 黄褐色土 褐色土混



第104図 SI-172



第105図 SI-173

に不明瞭ながらLRの附加条縄文が施され、内面には炭化物が付着する。

遺物の出土状況が散漫であるため時期は詳らかでないが、遺構の形態と覆土の状況から見て弥生時代後期の竪穴住居跡と考えておきたい。

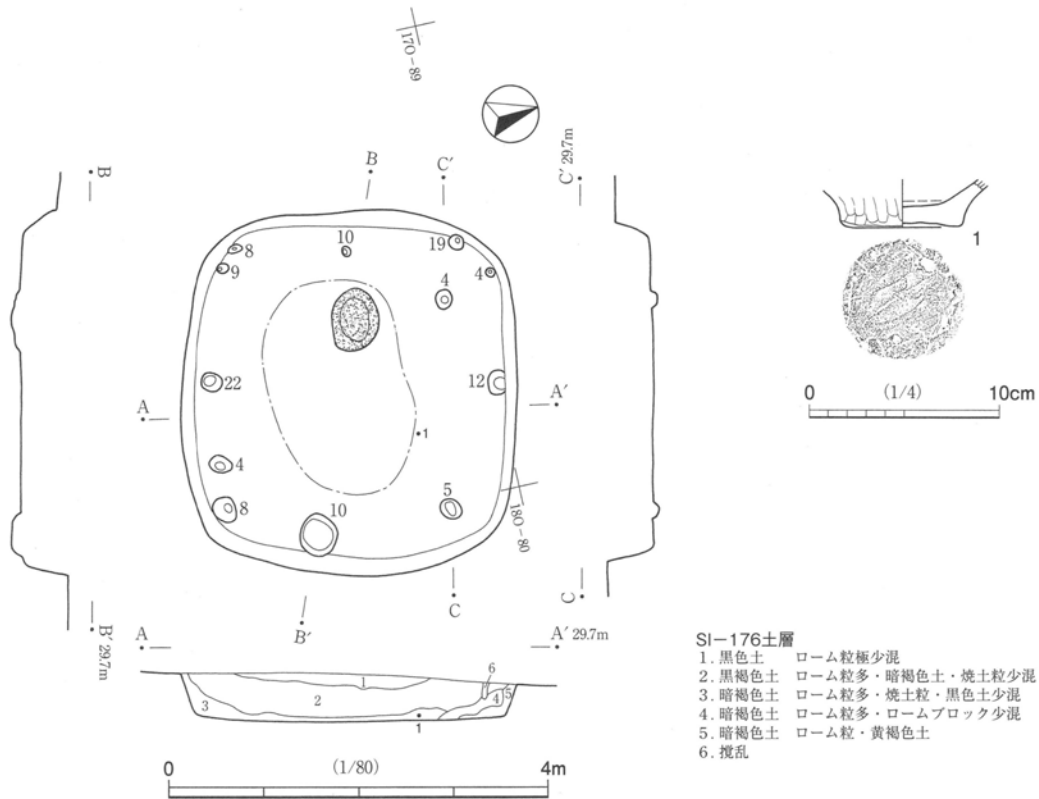
SI-176 (第106図, 図版96)

遺跡の西部北寄りの170区~180区に位置する。付近は平坦で、若干の攪乱を受けているが重複はなく、遺存状況は概して良好である。3.9m×3.5mの隅丸方形をなし、確認面からの深さは0.4m~0.5mである。主軸は、炉の位置からみてN-76°-Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁際には周溝や壁柱穴は確認されなかった。炉は65cm×50cmの楕円形、深さ2cm~3cmの凹みをもつ地床炉で、主軸上の西寄りに認められた。火床部には焼土が顕著に形成されている。主柱穴は認められなかった。主軸の下辺寄りに直径40cm程度の出入口ピットがあるが、非常に浅い。炉の周囲を含む遺構の中央付近には、きわめて顕著な硬化面が形成されており、炭化粒がこの範囲の全面に散布している。その他、遺構の外周部分には不規則な浅いピットが9基程認められるが、本遺構に伴うか否かは不明である。覆土は明瞭なレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

遺物は少なく、ほとんどが小破片である。

1は甕の底部で、外面は粗い縦ヘラナデにより調整される。底面は2枚以上の木葉痕が認められるが、中央部をヘラナデにより掻きとっているため樹種等は不明である。

遺物の出土状況が散漫であるため時期は詳らかでないが、図示した遺物と遺構の形態、覆土の状況から



第106図 SI-176

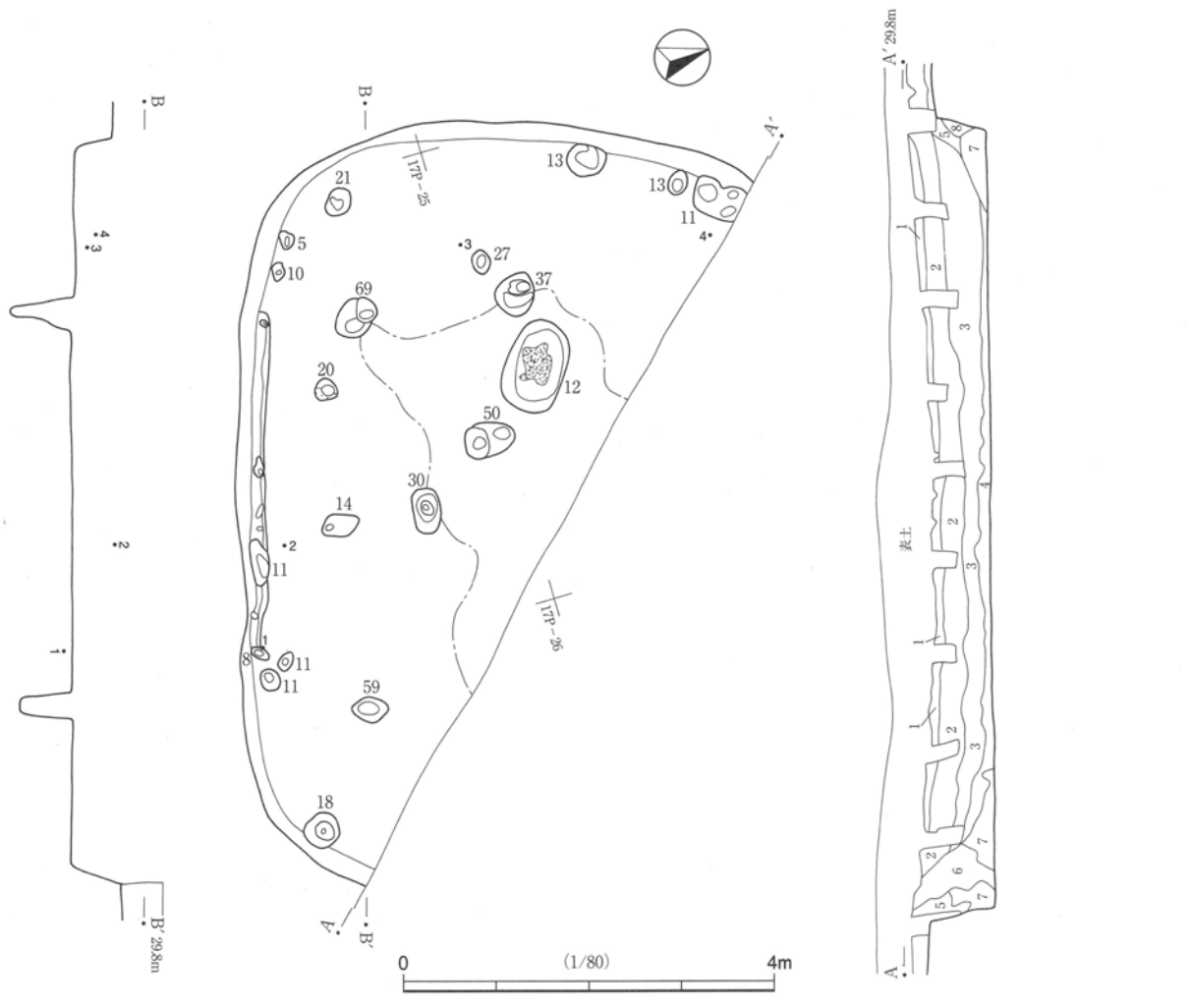
見て弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴住居跡と考えておきたい。

SI-181 (第107図, 図版99・237・280・317)

遺跡西部中央の17P区に位置する。付近は平坦で、遺構の重複はないが、耕作によって破壊されている。ただ耕作痕は床面までは達しておらず、遺存状況は概ね良好である。東側半分程度が調査区域外にかかっているため規模ははっきりしないが推定で8m×6m程度の小判形をなし、確認面からの深さは0.6mである。主軸は、炉の位置からみてN-74°-Wと考えられる。壁はやや傾斜がみられ、壁際には深さ5cm～20cm程度の壁柱穴が全周に渡って認められるが間隔は不規則である。また、左側の壁際の一部には幅20cm、深さ10cm程度の壁溝が認められる。炉は100cm×60cmの長円形、深さ10cm程度の凹みをもつ地床炉で、主軸上の北寄りに1か所認められた。中央付近の火床部には焼土がよく形成されている。主柱穴は2本認められたが本来は4本柱と考えられる。径20cm～40cmの楕円形で深さは左上が69cm、左下が59cmである。調査範囲からは出入口ピットや貯蔵穴は確認されなかった。炉の周囲から主柱穴までの内区の床面には硬化面が形成されている。覆土は自然堆積と考えられる。

遺物は多く出土しているが、ほとんどが小破片で、覆土上層～中層のものが多い。

1は遺構の西壁際床面付近から出土した印手式の甕である。口縁～胴部中位の半分程度が遺存する。頸部はやや長く、6段の輪積痕を残す。口縁部は内側に折り返され、複合口縁となるが、口唇部は尖り、無文である。胴部外面には粗いLRの附加条縄文を施し、若干量の煤の付着が認められる。2は砥石で、石材は流紋岩質凝灰岩である。扁平で比較的硬質、緻密な石材である。図下部の欠損している面以外は使用されている。3～8は断片資料である。3～6は外面に粗いハケメを施す甕で、4～6は同一個体と考えられる。7・8は外面に沈線を施し、内面がミガキで調整されるもので、鉢と考えられる。



- SI-181土層
- 1. 黒色土 褐色土・ローム粒少混
 - 2. 黒褐色土 褐色土・ローム粒混
 - 3. 黒色土 ローム粒多・褐色土少混
 - 4. 暗褐色土 黒色土・ローム粒・ロームブロック混
 - 5. 暗褐色土 褐色土多・ローム粒少混
 - 6. 暗褐色土 褐色土混・ローム粒少混
 - 7. 暗褐色土 褐色土・ローム粒多混
 - 8. 褐色土 ローム粒多混

第107図 SI-181

1の遺物と、遺構の形態から見て弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

SI-182 (第108図, 図版99・237・280)

遺跡の西部中央の17P区に位置する。付近は平坦で、攪乱や重複はなく、遺存状況は良好である。4.2m × 3.6mの隅丸長方形をなし、確認面からの深さは0.5mである。主軸は、炉の位置からみてN-55°-Wである。

壁はわずかに傾斜がみられ、壁際には周溝はないが、深さ5cm~10cm程度の壁柱穴が認められ、特に遺構の手前側半分程度の範囲では規則的な配置となっている。炉は70cm×56cmの不整形円形、深さ5cm程度の浅い凹みをもつ地床炉で、主軸上の北寄りに1か所認められた。火床部には焼土が形成されているがそれ程顕著でない。主柱穴や出入口ピット、貯蔵穴などの付帯施設は見出せなかったが、外延部を除く炉の周囲の床面には硬化面が形成されている。この他にいくつかの小ピットが検出されているが、規則性はなく、本遺構に伴うものかどうかは不明である。覆土は下層が人為的な埋戻し、中層以上は自然堆積と考えられる。

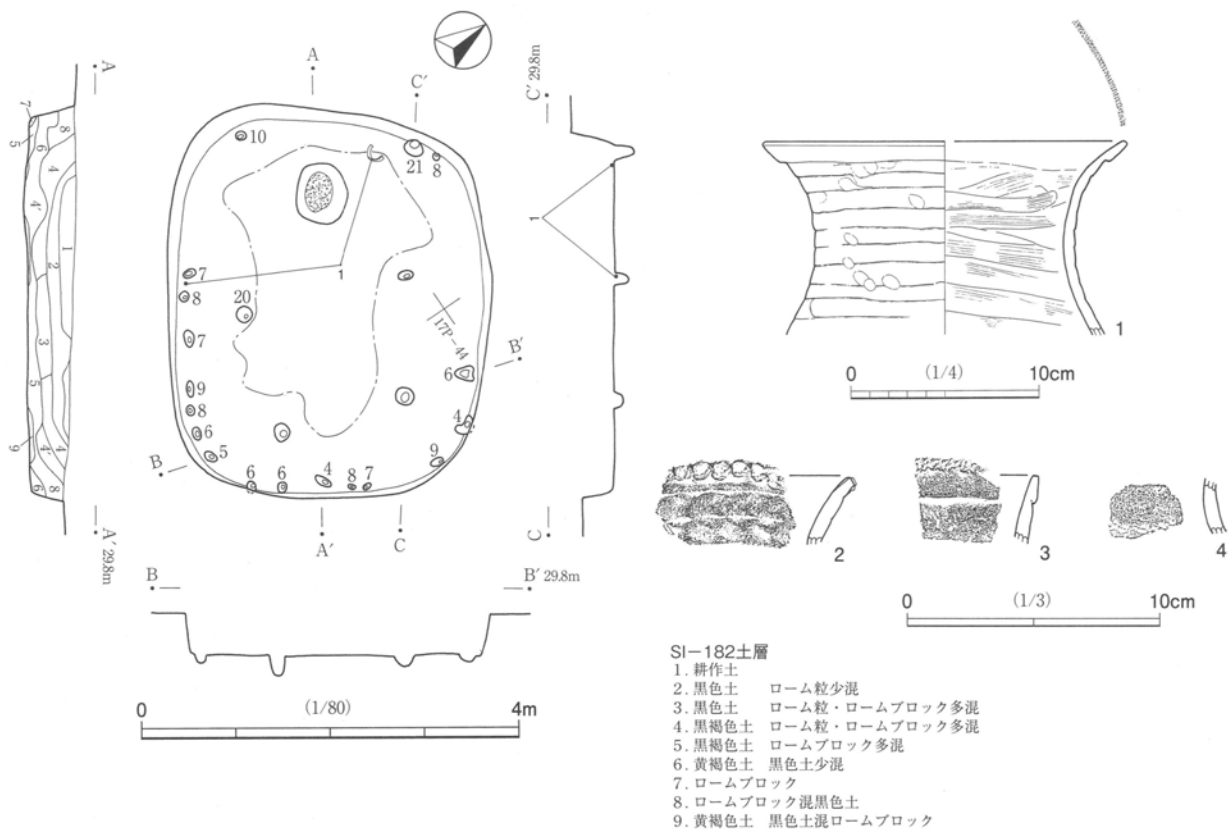
遺物は少なく、多くが小破片で、覆土中からの出土遺物が多い。

1は印手式の甕で、頸部~口縁部のほぼ半分が遺存する。床面直上から出土した。頸部はやや長く緩やかに開き、11段の輪積痕を残し、口唇部には絡状体圧痕を施す。外面は概して橙色~にぶい橙色を呈するが、帯状に煤が付着し、この部分のみ黒斑状に変色する。2~4は断片資料で、2は久ヶ原系、3・4は印手式の甕である。2は頸部に3段以上の輪積痕を残し、口唇部にはヘラ状工具もしくは棒状工具を押捺し、振幅の小さな波状口縁を呈する。頸部外面の輪積痕には指アテの痕跡が認められる。3・4は同一個体と考えられる破片である。3は頸部~口縁部に複数段の輪積痕を残すもので、口唇部には附加条縄文を押捺する。4は頸部下端にS字状結節文を施す。

1の遺物と、遺構の形態から見て弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

SI-183 (第109図, 図版100・237・238)

遺跡の西部中央の17P区に位置する。付近は平坦で、遺構の重複はないが、南側の壁が一部攪乱されている。また、検出面からの掘り込みは浅く、遺存状況はあまり良くない。直径4.2mの円形をなし、確認面からの深さは0.2m足らずである。主軸方向は不明である。壁はやや傾斜がみられ、壁際には壁溝や壁



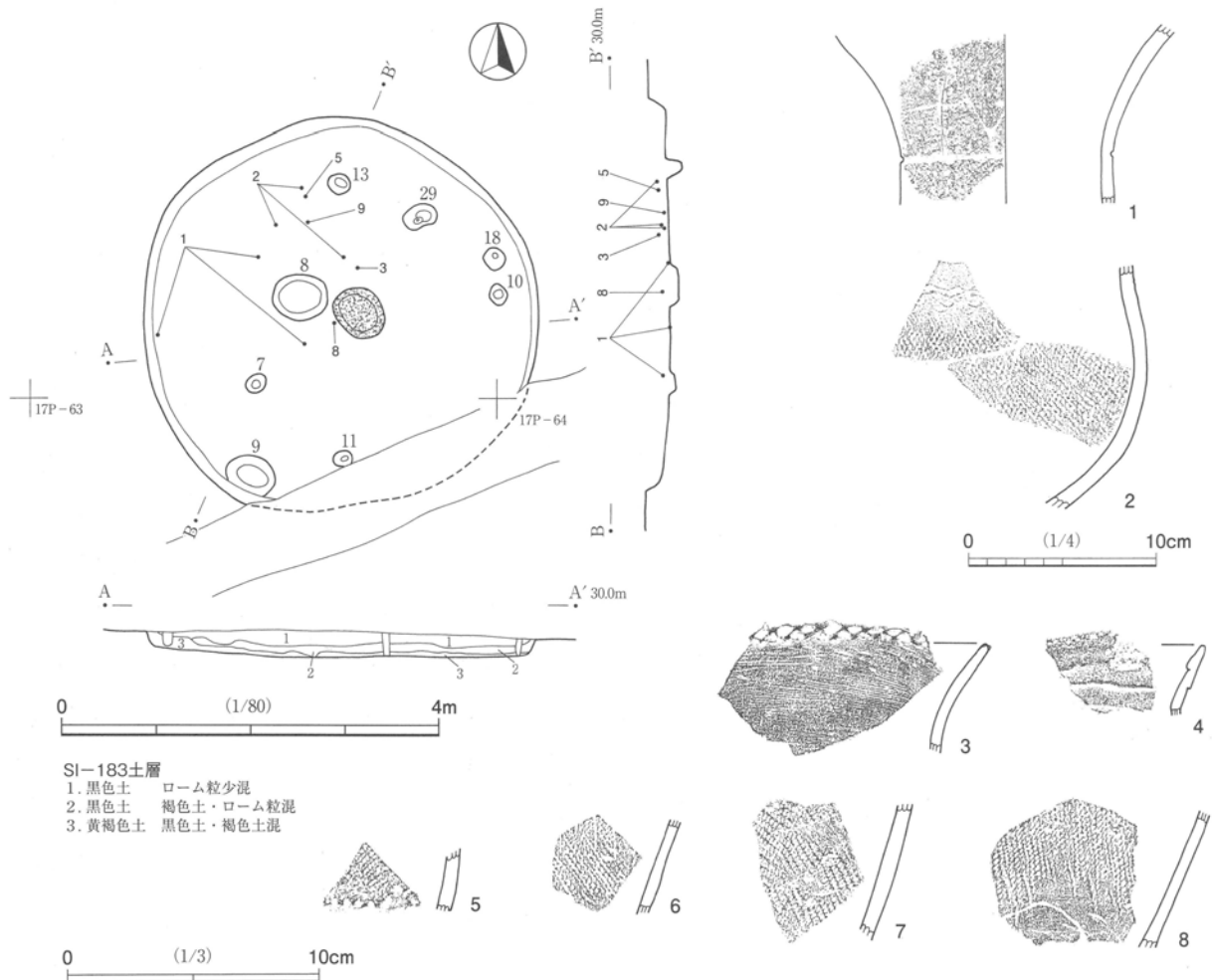
第108図 SI-182

柱穴は認められない。炉は60cm×50cmの不整円形、深さ4cmの浅い凹みをもつ地床炉で、遺構の中央付近に1か所認められた。火床部には焼土がよく形成されている。主柱穴は認められなかった。遺構の南側には径20cm、深さ11cmのピット、南西側の壁際には50cm×40cm、深さ9cmの掘込みがあり、前者が出入口ピット、後者が貯蔵穴の可能性ある。覆土は浅いためはっきりしないが、基本的には自然堆積と考えられる。

遺物は小破片が中心だが比較的多く、覆土下層出土のものが多くを占めている。

1は壺で、床面付近から出土した。頸部がやや太く直立するタイプである。頸部中位にはRL・LRの羽状縄文が2段巡り、上部を沈線で区画する。羽状縄文帯の中位にはS字状結節文を2段施すが、全体の構成は不明である。内面外面共に赤彩などの痕跡は認められない。また上端部の破断面は磨かれており、外面の剥落が顕著であることから炉体土器や器台などとして転用された可能性がある。2～8は断片資料である。2は印手式の甕で、胴部がやや下膨れ状に膨らむタイプである。外面にはRLの附加条縄文を施し、上部を2段のS字状結節文で区画する。外面全面に煤が付着する。3は久ヶ原系の甕で、口唇部に棒状工具を押捺し、振幅の小さな波状口縁となるタイプである。4～8は印手式の甕である。4は頸部に複数段の輪積痕を残し、口縁部は内側に折り返されて複合口縁状となる。口唇部は鋭く尖るが、端部に附加条原体による押捺が施される。5～8は胴部で、外面にLRの附加条縄文を施す。7と9は同一個体の可能性が高い。

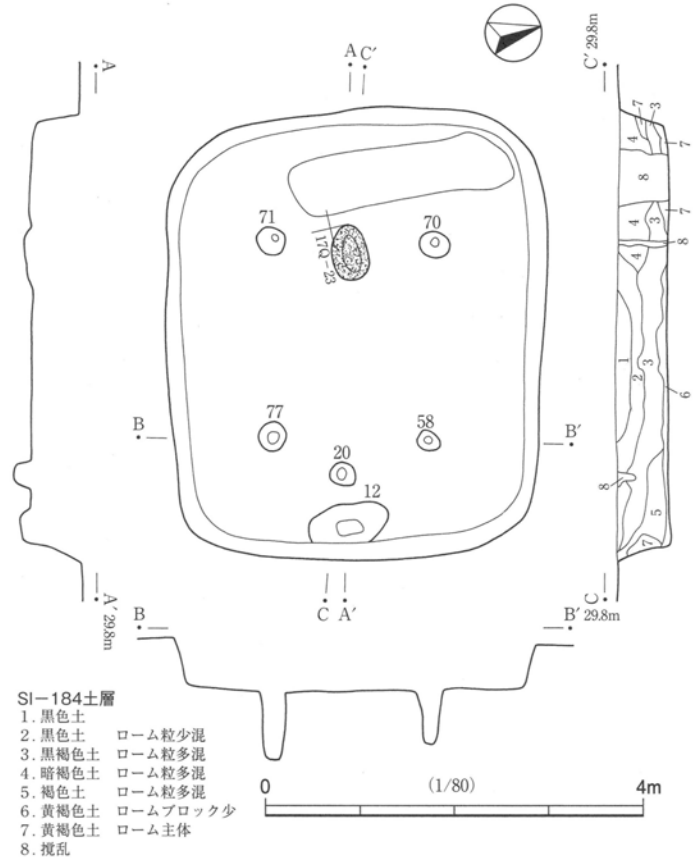
1の遺物と、遺構の形態から見て弥生時代後期の堅穴住居跡と考えられる。



第109図 SI-183

SI-184 (第110図, 図版100)

遺跡の西部南寄りの17Q区に位置する。付近は平坦で遺構の重複はないが、北側の一部が攪乱されているため、遺存状況はやや不良である。4.8m×4.1mの隅丸長方形をなし、確認面からの深さは0.6mである。主軸は、炉の位置からみてN-79°-Wである。壁はごくわずかに傾斜がみられるがほぼ垂直で、壁際には壁溝や壁柱穴は認められない。炉は60cm×40cmの楕円形、深さ10cm程度の凹みをもつ地床炉で、主軸上の北寄りに1か所認められた。火床部には焼土がよく形成されている。主柱穴は4本認められた。径20cm~30cmの円形ないし楕円形で深さは左上から時計回りに71cm, 70cm, 58cm, 77cmである。主軸の下辺寄りには径25cm, 深さ20cmの出入口ピットが、その外側壁際には90cm×40cm, 深さ12cmの貯蔵穴がある。硬化面は形成されていない。覆土は中層~下層が人為による埋め戻し、上層が自然堆積と考えられる。



第110図 SI-184

遺物は少なく、いずれも小破片であり、図示しうるものはない。

時期推定の根拠となる遺物がないため時期は詳らかでないが、遺構の形態と覆土の状況から弥生時代後期の竪穴住居跡と考えておきたい。

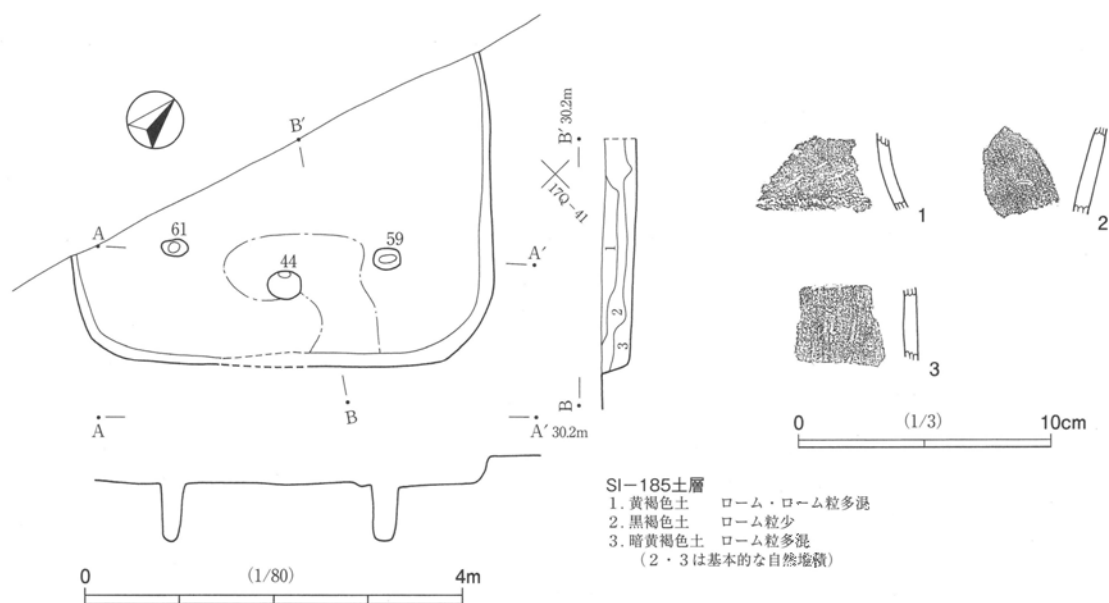
SI-185 (第111図, 図版100・238)

遺跡の西部南寄りの17Q区に位置する。付近は平坦で、攪乱や重複はなく、遺存状況は良好である。北側半分以上が調査区域外に存在するため規模は不明だが、幅4.4m程度の隅丸長方形をなすものと考えられる。確認面からの深さは0.4mである。主軸ははっきりしないが、壁の方向からみてN-44°-Wと考えられる。壁はやや傾斜がみられ、壁際には壁溝や壁柱穴は検出されなかった。炉は調査区域外に存在する可能性が高い。主柱穴は2本認められたが本来は4本で、残りは調査区域外に存在するものと考えられる。30cm×20cmの楕円形で深さは右側が59cm, 左側が61cmである。主軸の下辺寄りに40cm×30cm, 深さ44cmの出入口ピットがある。このピットの掘込みは垂直でなく、やや強く外側に傾斜している。出入口ピット周辺の東側には若干の硬化面が認められる。覆土は基本的には自然堆積と考えられる。

遺物は少なく、ほとんどが小破片であり、覆土中に散在している。

1は印手式の甕の頸部で、下部にS字状結節文を2段施す。2・3は土師器甕で、いずれも胴部である。

時期推定の根拠となる遺物がないため時期は詳らかでないが、遺構の形態と2・3の遺物から古墳時代前期の竪穴住居跡と考えておきたい。



第111図 SI-185

SI-186 (第112図, 図版101・238)

遺跡の西部南寄りの17Q区に位置する。付近は平坦で、遺構の重複はないが、東側のほぼ半分と西側の一部が攪乱されており、遺存状況は不良である。5.7m×4.3mの隅丸長方形をなし、確認面からの深さは0.5mである。主軸は、左辺の方向からみてN-64°-Wである。壁はほぼ垂直で、壁際には壁溝や壁柱穴は存在しない。炉は攪乱によって破壊されているものと推測される。主柱穴は2本認められたが、本来は4本柱と考えられる。この他の付帯施設や床面の硬化面等は検出されていない。覆土は人為的な埋め戻しの可能性が高い。

遺構の大部分が攪乱されている割に遺物は多く出土している。

1は甕で、底部～胴部中位にかけての1/3程度が遺存する。床面付近から出土した。底部は強く突出し、底面には明瞭な木葉痕を残す。外面は全く無文で、顕著に煤が付着する。2～6は断片資料である。2は頸部に輪積痕を残す甕と考えられるが、輪積痕から破断しているためはっきりしない。口唇部は明瞭な端面をもつが、細かい縄を巻きつけた棒状工具を押捺することにより振幅のやや大きな波状口縁となる。3はやや受口状となる鉢と考えられる。4～6は印手式の甕である。いずれも外面にRLの附加条縄文を施すが、5は上部にS字結節文を3段施す。5・6は同一個体と考えられる。

時期推定の根拠となる遺物に乏しいが、1と遺構の形態から見て古墳時代前期初頭の竪穴住居跡と考えておきたい。

SI-187 (第113図・図版238)

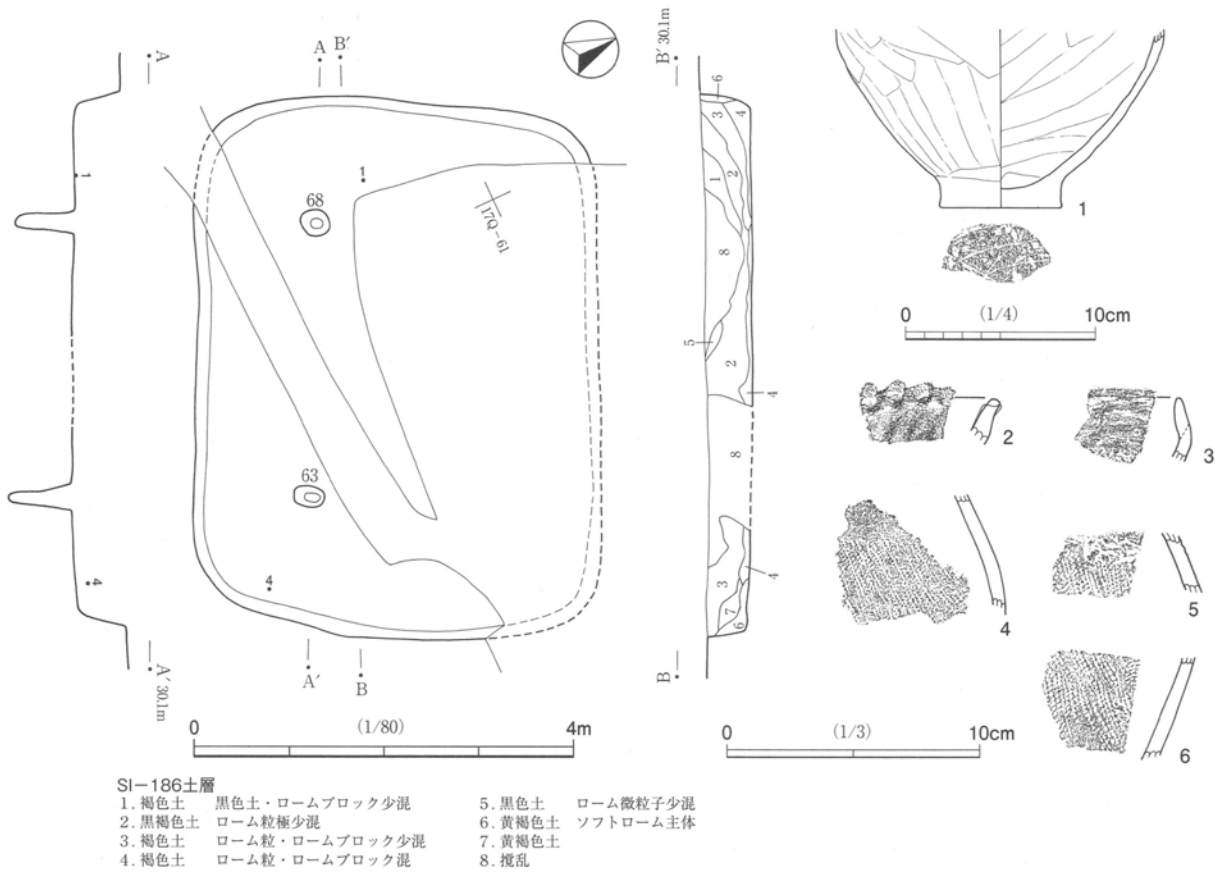
遺跡の西部南寄りの17Q区に位置する。付近は平坦であるが、SI-188住居により南側半分程度が破壊されており、遺存状況は不良である。3.4m×3.2mの隅丸方形をなし、確認面からの深さは0.2m不足である。主軸は、炉の位置からみてN-43°-Wである。壁はやや傾斜がみられ、壁際には壁溝や壁柱穴は認められない。炉は38cm×25cmの楕円形、深さ5cm程度の凹みをもつ地床炉で、主軸上の北寄りに1か所認められた。火床部には焼土がよく形成されている。主柱穴は3本認められたが、本来は4本柱と考えられる。径30cm程度の円形ないし楕円形で深さは左上から時計回りに53cm, 45cm, 58cmである。この他の付帯

施設は確認されなかった。床面もあまり硬化していない。覆土は人為的な埋め戻しの可能性があるが、浅いためはっきりしない。

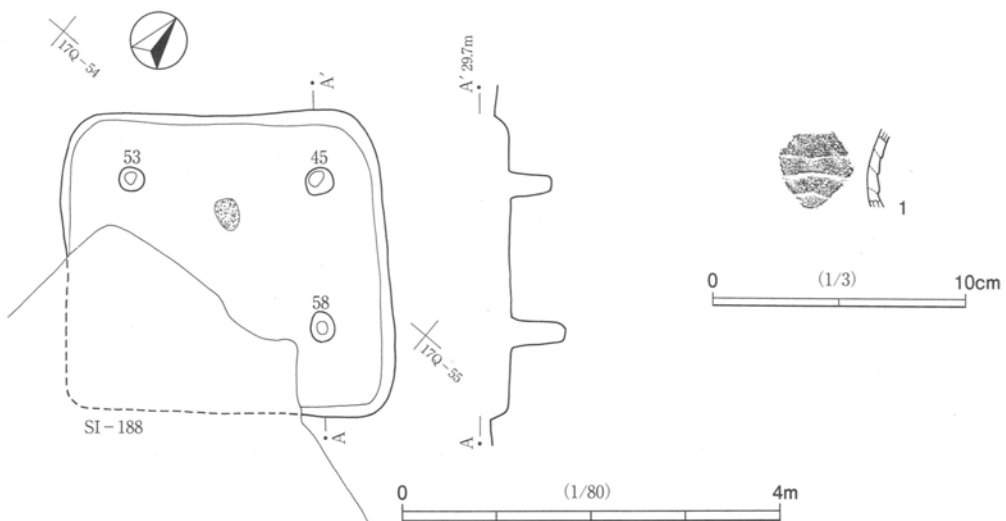
遺物は僅少で、すべて小破片である。

1は甕の頸部で、複数段の輪積痕を残すタイプである。

時期推定の根拠となる遺物がないため時期は明らかでないが、遺構の形態から古墳時代前期の竪穴住居跡と考えておきたい。



第112図 SI-186



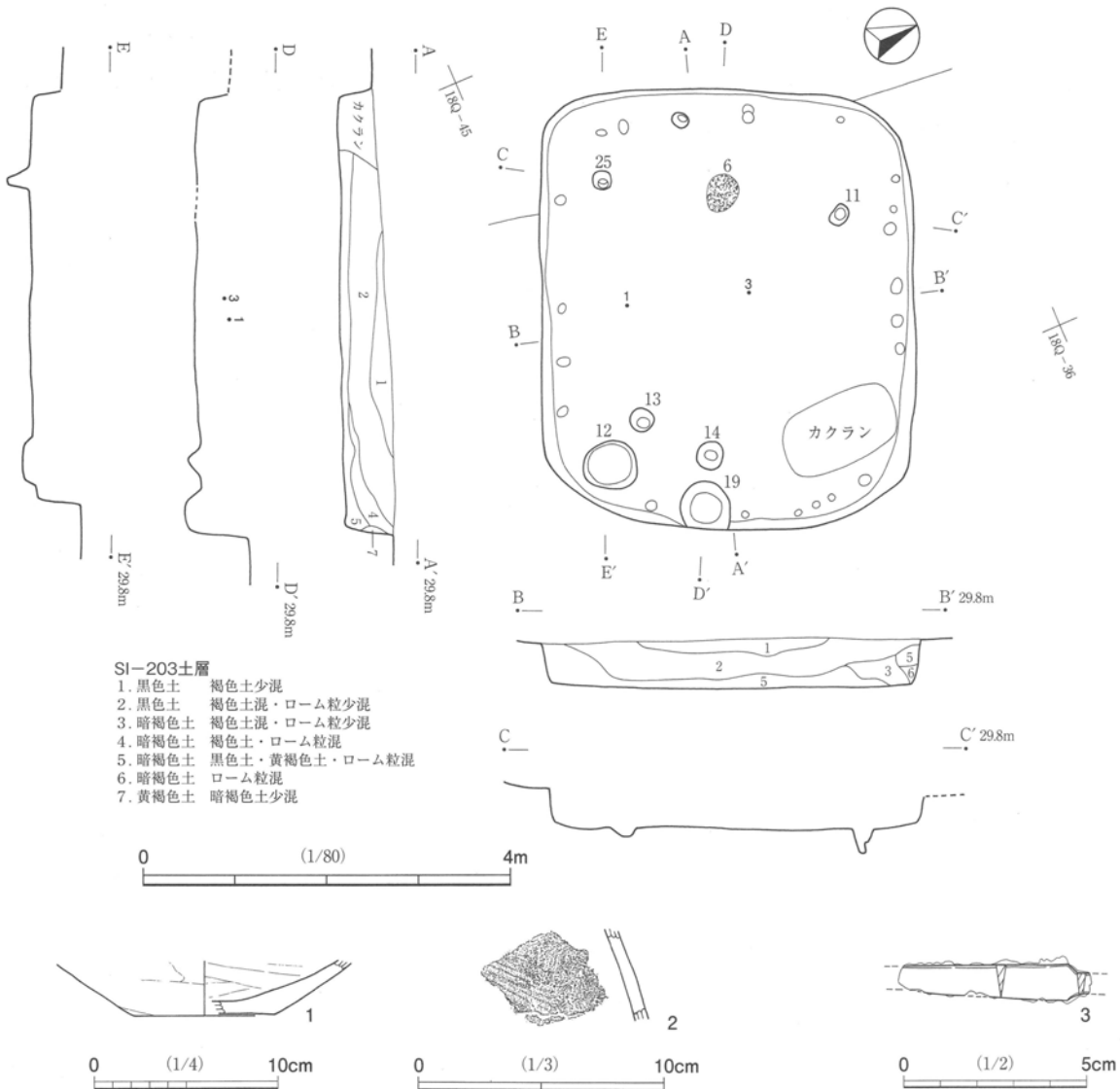
第113図 SI-187

SI-203 (第114図, 図版108・109・238・313)

遺跡の西部南東寄りの18Q区に位置する。付近は平坦で、遺構の重複はないが、東側コーナー付近の一部が攪乱されている。遺存状況は概して良好である。4.8m×4.0mの隅丸長方形をなし、確認面からの深さは0.6m~0.7mである。主軸は、炉の位置からみてN-66°-Wである。壁はほぼ垂直で、壁際には深さ5cm~10cm程度の壁柱穴が巡るが、配列はやや不規則である。炉は40cm×30cmの卵形、深さ6cmの凹みをもつ地床炉で、主軸上の北寄りに1か所認められた。火床部には焼土がよく形成されている。主柱穴は3本認められたが、本来は4本柱と考えられる。径20cm程度の円形で深さは左上から時計回りに25cm, 11cm, 13cmとかなり浅い。主軸の下辺寄りに径30cm, 深さ14cmの出入口ピットがある。左下支柱穴の外側壁際と出入口ピット外側壁際に径60cm, 深さ12cm~19cmの掘込みがあり、共に貯蔵穴と考えられる。その他の付帯施設は存在せず、床面の硬化範囲も明瞭でない。覆土は自然堆積と考えられる。

遺物は少なく、覆土から出土するものがほとんどである。

1は土師器甕の底部で、1/4程度が遺存する。覆土上層から出土した。内面外面ともにヘラナデで調整され、底部外面には黒斑がみられる。2は断片資料で印手式の甕の胴部である。外面の上部には長いS字



第114図 SI-203

状結節文が2段施されるが、全体の構成は不明である。3は鉄製の刀子で、覆土上層から出土した。刃部には研ぎ減りが認められる。

時期推定の根拠となる遺物がないため時期は詳らかでないが、遺構の形態から古墳時代前期の竪穴住居跡と考えておきたい。

SI-204 (第115図, 図版109)

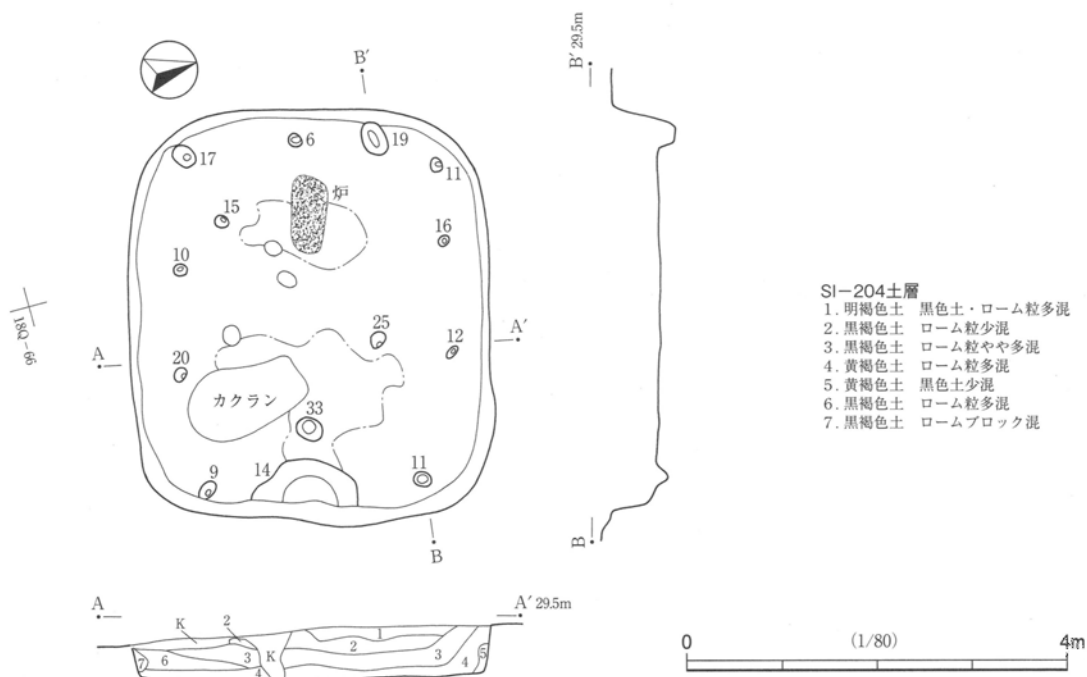
遺跡の西部南東寄りの18Q区に位置する。付近はわずかに北から南へ傾斜する地形で、遺構の重複はないが、遺構南半の一部が土坑状の攪乱によって破壊されている。概して遺存状況は良好である。4.4m×3.8mの隅丸長方形をなし、確認面からの深さは0.4m~0.5mである。主軸は、炉の位置からみてN-76°-Wである。壁はわずかに傾斜しており、壁際には壁溝や壁柱穴は認められない。炉は80cm×40cmの長円形、深さ5cmの凹みをもつ地床炉で、主軸上の北寄りに1か所認められた。火床部には焼土がよく形成されている。主柱穴は遺構のコーナー付近に4本認められた。径15cm~25cmの円形ないし楕円形で、深さは左上から時計回りに17cm, 11cm, 11cm, 9cmとかなり浅い。内区の形態はやや縦長の逆台形である。主軸の下辺寄りに径30cm, 深さ33cmの出入口ピットがあり、その外側壁際には110cm×40cm, 深さ14cmの半円形の掘り込みがあり、貯蔵穴と考えられる。炉の周囲および出入口ピット付近の床面には硬化面が形成されている。この他にいくつかの小ピットが確認されており、これらは配置からみて本遺構に伴う主柱穴とは異なる柱穴の可能性がある。覆土は下層が人為による埋め戻し、中層~上層が自然堆積と考えられる。

遺物は少なく、いずれも小破片であり図示し得るものはない。

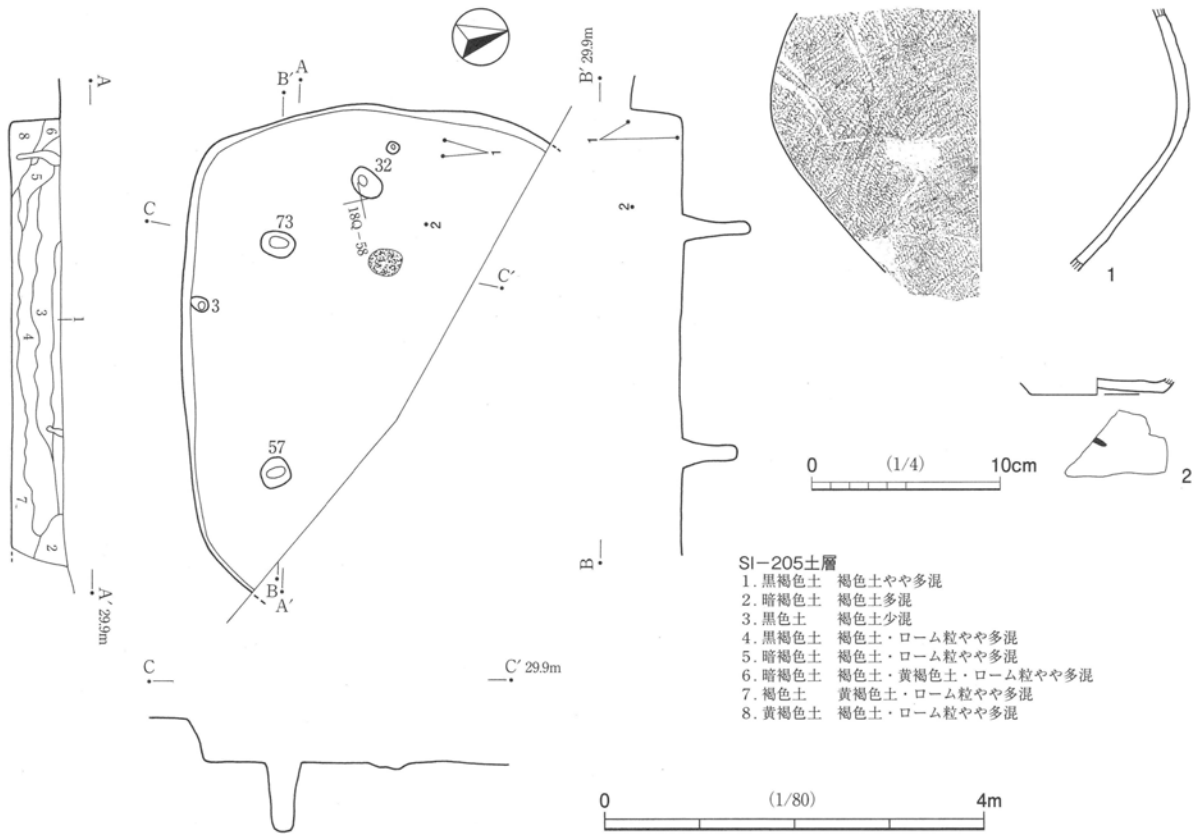
時期推定の根拠となる遺物がないため時期は詳らかでないが、遺構の形態と覆土の状況から弥生時代後期の竪穴住居跡と考えておきたい。

SI-205 (第116図, 図版109・238・284)

遺跡の西部南東寄りの18Q区に位置する。付近は平坦で攪乱や重複はなく、遺存状況は良好である。遺構の東側半分程度が調査区域外にあるため規模ははっきりしないが、推定で5m×4mの小判形をなすも



第115図 SI-204



第116図 SI-205

のと考えられる。確認面からの深さは0.5mである。主軸は、炉の位置からみてN-78°-W程度であろうか。壁はほぼ垂直で、壁際には深さ3cmの壁柱穴が1か所のみ認められた。炉は30cm×40cmの楕円形、深さ5cmの凹みをもつ地床炉で、主軸上の北寄りに1か所認められた。火床部には焼土がよく形成されている。主柱穴は2本認められたが、本来は4本柱と考えられる。いずれも40cm×30cmの横長の楕円形で、深さは左上が73cm、左下が57cmである。この他、主軸上の炉の北側に深さ32cmの小ピットが認められるが、本遺構に伴うものかどうかははっきりしない。床面はやや硬化しているが、その範囲は不明瞭である。覆土は人為的な埋め戻しの可能性がある。

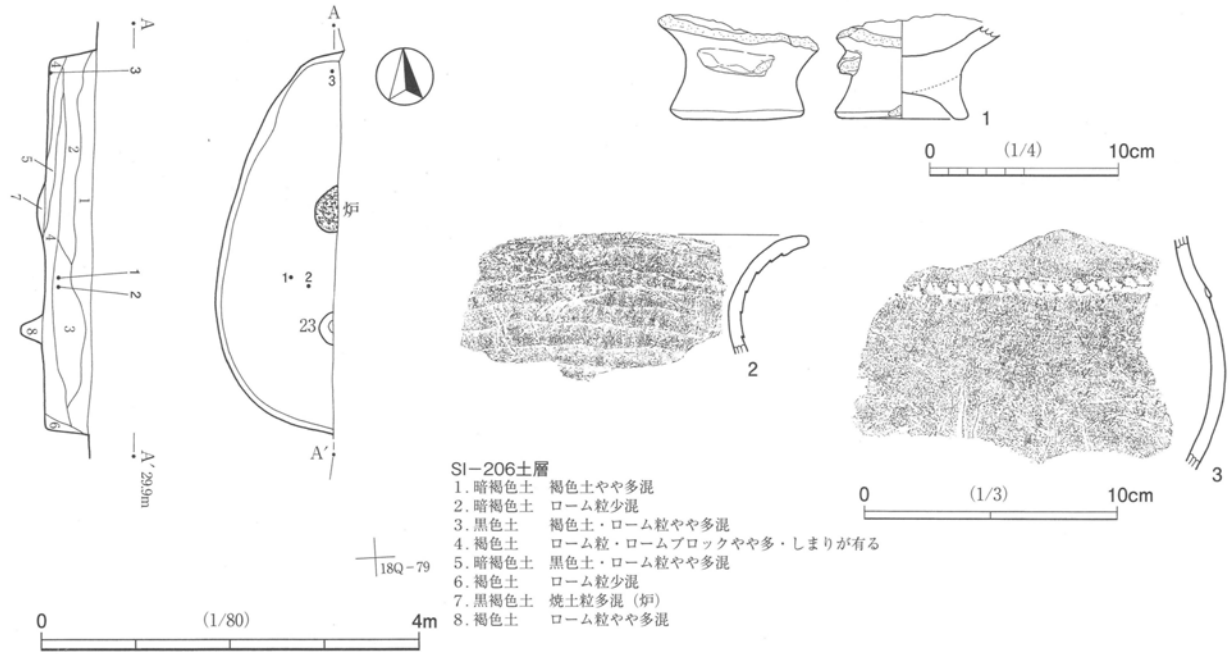
遺物は少なく、ほとんどが小破片であり、図示し得たのは以下の2点のみであるが、2については明らかな混入品である。

1は印手式の甕で、胴部がやや強く張るタイプである。胴部の1/3程度が遺存する。外面全面にやや粗いLRの附加条縄文が施され、上半部には顕著に煤が付着する。内面は若干の剥落が認められ、下部に炭化物が膠着する箇所が認められる。2はロクロ土師器杯の底部である。底面は回転糸切痕を残し、外周部のみ手持ちヘラケズリを施す。底面中央付近には明瞭な墨書があるが、判読できない。

明らかに本遺構に伴う遺物は認められないが、1と遺構の形態、覆土の状況を勘案して弥生時代後期の竪穴住居跡と考えておきたい。

SI-206 (第117図, 図版110・238・284)

遺跡の西部南東寄りの18Q区に位置する。付近は平坦で、攪乱や重複はなく、遺存状況は良好である。遺構の東側の大部分が調査区域外にあるため、規模ははっきりしない。平面形は小判形ないし隅丸長方形



第117図 SI-206

を呈するものと考えられる。確認面からの深さは0.5mである。主軸は、炉の位置からみてN-10°-E程度と考えられる。壁はわずかに傾斜がみられ、壁際には壁溝や壁柱穴などは認められない。炉は調査区域外にかかっているため規模は不明、深さ5cmの凹みをもつ地床炉である。火床部には焼土がよく形成されている。支柱穴は1本認められたが、本来は4本柱の可能性が高い。径35cm、深さ23cmの円形である。調査範囲からはその他の付帯施設は確認されていない。床面はわずかに硬化するが範囲は不明瞭である。覆土は下層～中層が人為による埋め戻し、上層が自然堆積と考えられる。

遺物は遺存状況の割に多く出土している。図示し得たのは3点であるが、1・2は覆土下層、3は床面からの出土である。

1は土師器台付甕の脚台部で、ほぼ完存する。脚台は低く、裾はまっすぐ開き、胴部がやや強く張るタイプと考えられる。接合部には突帯状に粘土紐が貼り付けられ、端部にヘラ状工具によるキザミが施されているが、大部分が剥落しているため詳細は不明である。全体に二次的に被熱しており、剥落が著しい。2・3は断片資料である。2は頸部に7段以上の輪積痕を残す甕の口縁部である。頸部はやや強くすぼまり、口縁はラッパ状に強く開く。口唇部は丸みを帯びるが装飾は施されていない。3は胴部が球状にやや強く張るタイプの甕である。頸部下端には1段のみ輪積痕を残し、端部を棒状工具により押捺するほかは遺存部分では無文である。外面には若干の煤が付着する。

3の遺物と遺構の形態、覆土の状況などから弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

なお、本住居は四街道市（当時町）が、昭和55（1980）年に調査した11号住居¹⁾と同一遺構と思われる（第9図参照）。

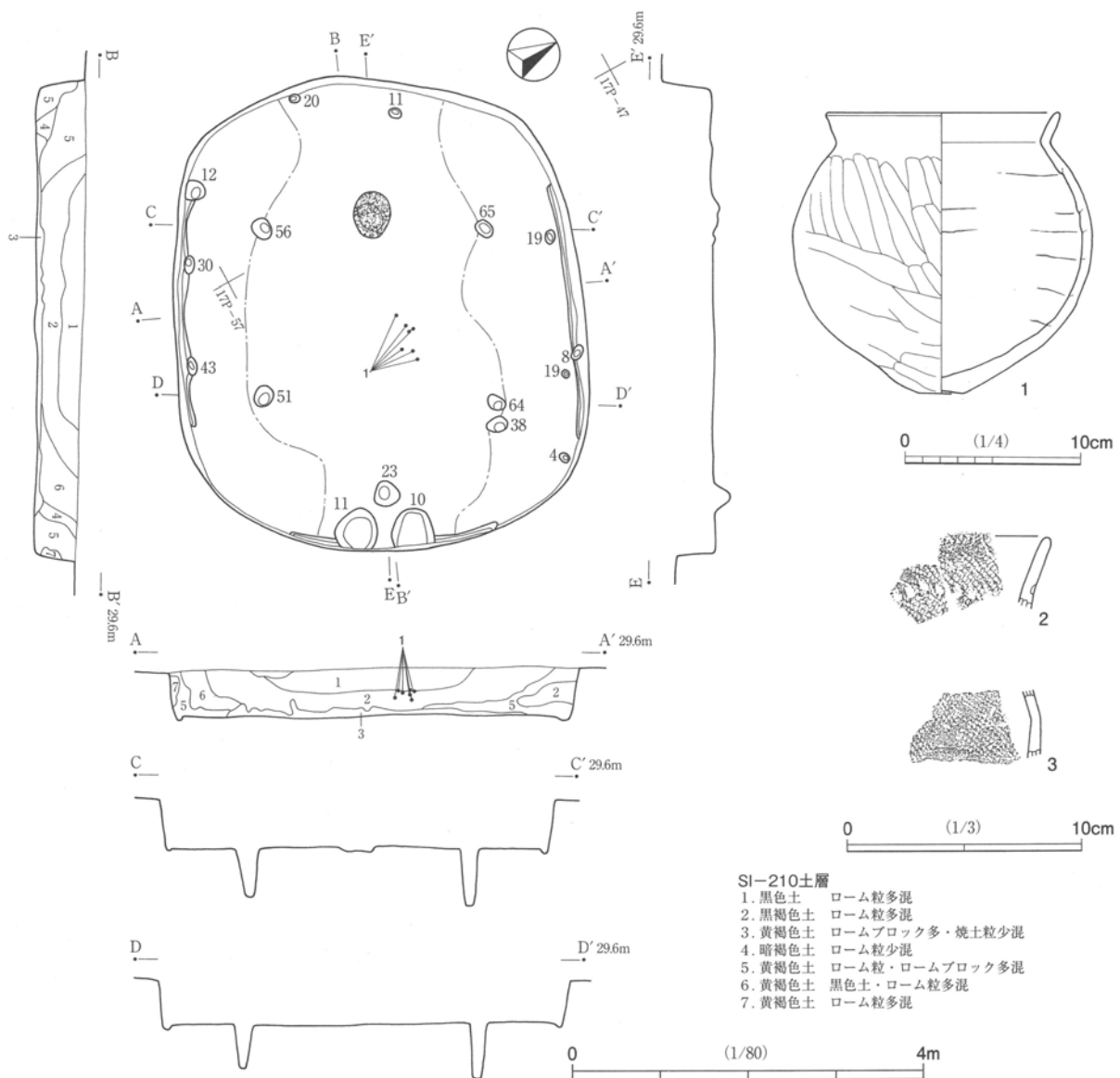
SI-210（第118図、図版110・238・284）

遺跡の西部中央の17P区に位置する。付近はわずかに北から南へ傾斜する地形で、攪乱や重複はなく、

注1 川端弘士 1990 「物井小屋ノ内遺跡調査略報」『四街道市の文化財』第16号 四街道市教育委員会

遺存状況は良好である。5.2m×4.7mの小判形をなし、確認面からの深さは0.5m～0.6mである。主軸は、炉の位置からみてN-63°-Wである。壁はほぼ垂直で、左右の両壁際には幅12cm、深さ5cm程度の壁溝が、長さ1.5mにわたって認められた。この他に、上辺と左右両辺の壁際に12cm～43cmの壁柱穴が8基存在するが、配列はやや不規則である。炉は50cm×40cmの楕円形、深さ5cm程度の凹みをもつ地床炉で、主軸上の北寄りに1か所認められた。火床部には焼土がよく形成されている。主柱穴は4本認められた。径20cm～25cmの円形で、深さは左上から時計回りに56cm、65cm、64cm、51cmと比較的そろっている。内区の形状も整った横長方形である。主軸の下辺寄りに径30cm、深さ23cmの出入口ピットがあり、その外側左右の壁際に50cm×40cm、深さ10cm～11cmの掘込みが2基認められるが、いずれも貯蔵穴と考えられる。遺構の左右両壁際から主柱穴までの部分を除く、床面のほぼ全面に硬化面が形成されている。覆土は自然堆積と考えられる。

遺物は少なく、大部分は小破片である。図示し得たのは3点であるが、このうち1は住居中央付近の覆土下層から押しつぶされた状態で出土した。



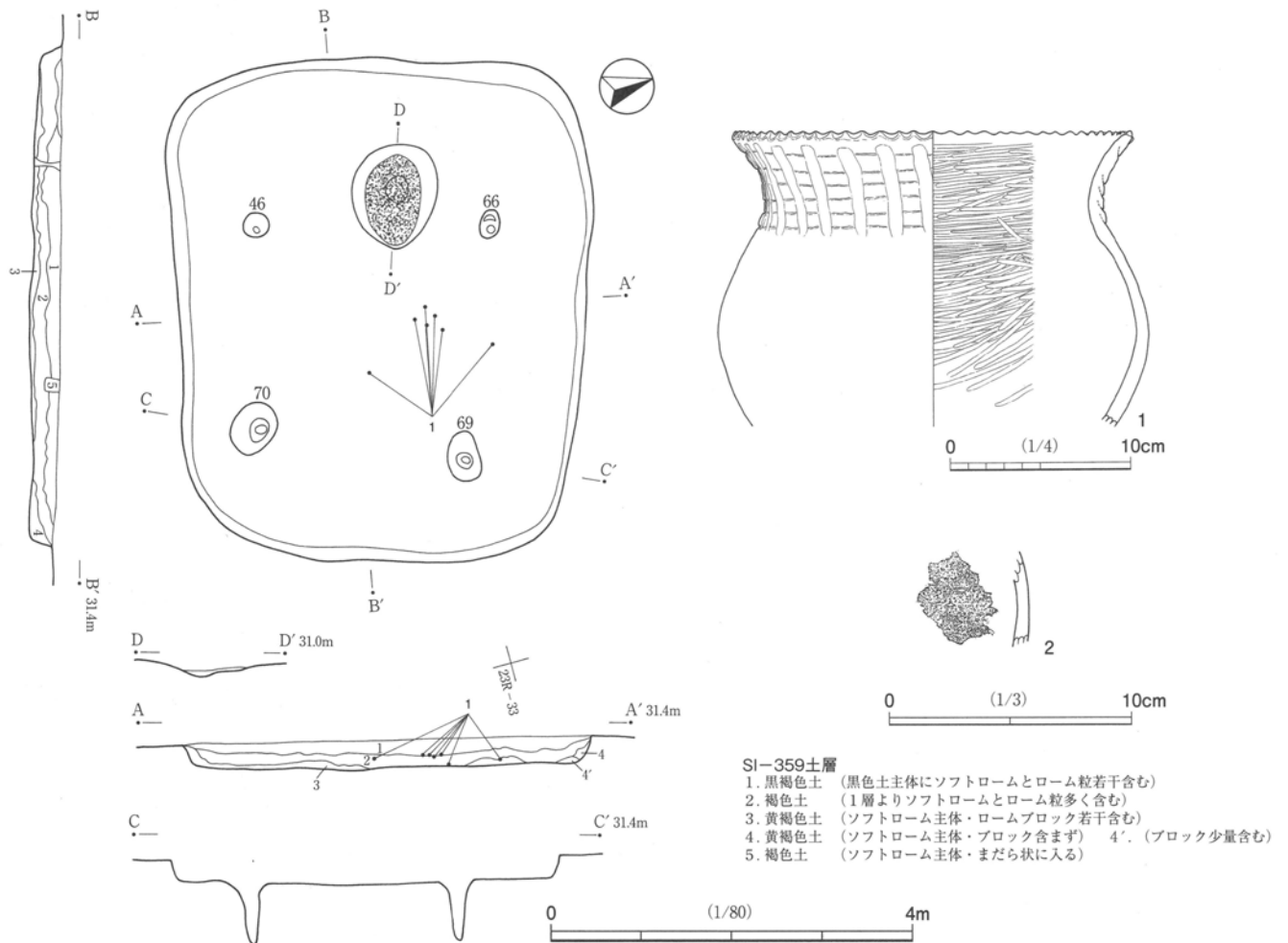
第118図 SI-210

1は土師器の小型甕である。全体的に若干の不足部分はあるが、ほぼ完形に復元できた。胴部は球状に強く張り、底部はわずかに突出して小さく、平坦でないため、甚だ据わりが悪い。口縁部は内面がハケメ状のヘラナデ、外面はヘラナデ、胴部外面の上位は丁寧なヘラナデ、下半部は横ヘラケズリで調整され、ところどころ黒斑が認められる。2・3は断片資料で、いずれも弥生土器である。2は壺の口縁部で、外面にはやや粒径の大きなRL縄文を施し、口縁部下端には棒状工具による刺突列を巡らす。口唇部にも不明瞭ながらRL縄文を回転施文している。胎土にはやや大粒の石英を多く含み、これが非常に目立つ。3は印手式の甕の胴部である。外面全面にやや細かいRL縄文を施す。

時期推定の根拠となる遺物がないため時期は詳らかでないが、遺構の形態と覆土の状況から弥生時代後期の竪穴住居跡と考えておきたい。

SI-359 (第119図, 図版130・238・295)

遺跡東部東寄りの23R区に位置する。付近は平坦で、攪乱や重複はなく、遺存状況は良好である。5.5m×4.7mのやや逆台形状の隅丸長方形をなし、確認面からの深さは0.3m~0.4mである。主軸は、炉の位置からみてN-74°-Wである。壁はやや傾斜がみられ、壁際には壁溝や壁柱穴は認められない。炉は100cm×60cmの楕円形、掘りかたはさらに一回り大きく、深さ17cmの凹みをもつ地床炉で、主軸上の北寄りに1か所認められた。火床部には焼土がよく形成されている。主柱穴は4本認められた。径15cm~50cmの円形ないし楕円形で、北側のものが小さい。深さは左上から時計回りに46cm, 66cm, 69cm, 70cmである。この他の



第119図 SI-359

付帯施設は確認されておらず、床面もあまり硬化していない。覆土は浅いためはっきりしないが、基本的には自然堆積と考えられる。

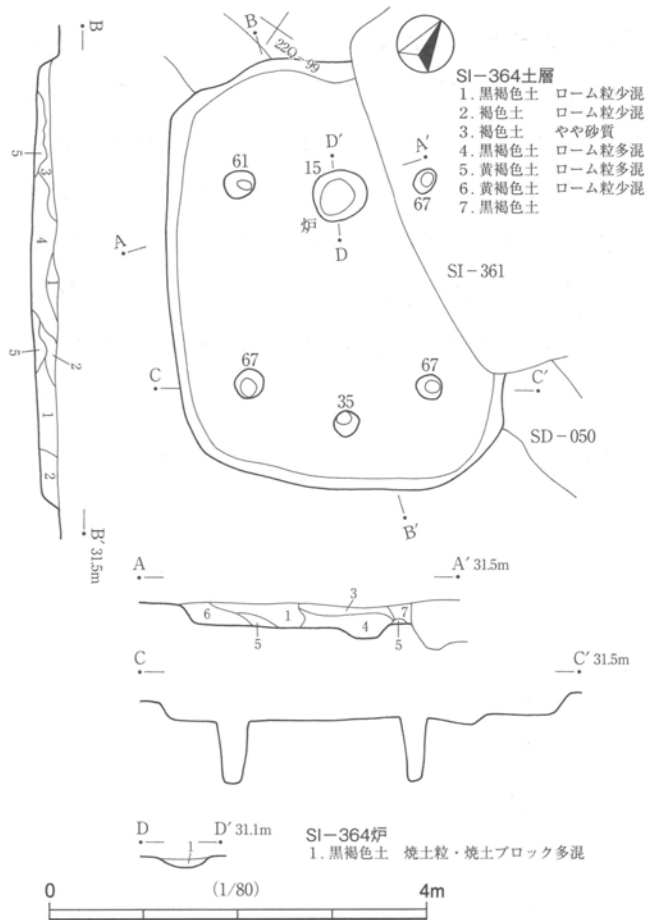
遺物は少なく、ほとんどは小破片である。図示し得た遺物は1点で、覆土下層～床面から出土した。

1は胴部が球状にやや強く張り、最大径が胴部中位にあるタイプの甕である。口縁～胴部中位にかけて6割程度を遺存する。住居跡中央付近の床面・覆土下層から出土した。頸部には6段の輪積痕を残すが、等間隔で縦スリット状に手指を用いてナデ消している。口唇部はヘラ状工具の押捺による振幅のやや小さな波状口縁である。胴部は無文であるが、ハケメ状のヘラナデにより比較的丁寧に調整されている。煤や炭化物等の付着は認められないが、外面と口縁部内面の一部には黒斑が認められる。

1と遺構の形態、覆土の状況から弥生時代後期の堅穴住居跡と考えておきたい。

SI-364 (第120図, 図版131)

遺跡東部中央の23R区に位置する。付近は平坦で、重複するSI-361住居により右辺の北側半分以上が破壊されているものの、概して遺存状況は良好である。4.6m×3.6mの隅丸長方形をなし、確認面からの深さは0.3mである。主軸は、炉の位置からみてN-39°-Wである。壁はやや傾斜がみられ、壁際には壁溝や壁柱穴は認められない。炉は径50cmの不整円形、深さ15cmの凹みをもつ地床炉で、主軸上の北寄りに1か所認められた。火床部には焼土がよく形成されている。主柱穴はSI-361により破壊されている部分を含め4本認められた。径35cm程度の円形ないし楕円形で、深さは左上から時計回りに61cm、67cm、67cm、67cmと、比較的そろっている。主軸の下辺寄りには径30cm、深さ35cmの出入口ピットがある。その他の付帯施設は確認されておらず、床面もあまり硬化していない。覆土はかなり複雑な様相を示し、北側からの投げ込みによる、人為的な埋め戻しと考えられる。



第120図 SI-364

遺物は少なく、いずれも小破片であり、図示し得るものはない。

時期推定の根拠となる遺物がないため時期は詳らかでないが、遺構の形態と覆土の状況から古墳時代前期の堅穴住居跡と考えておきたい。

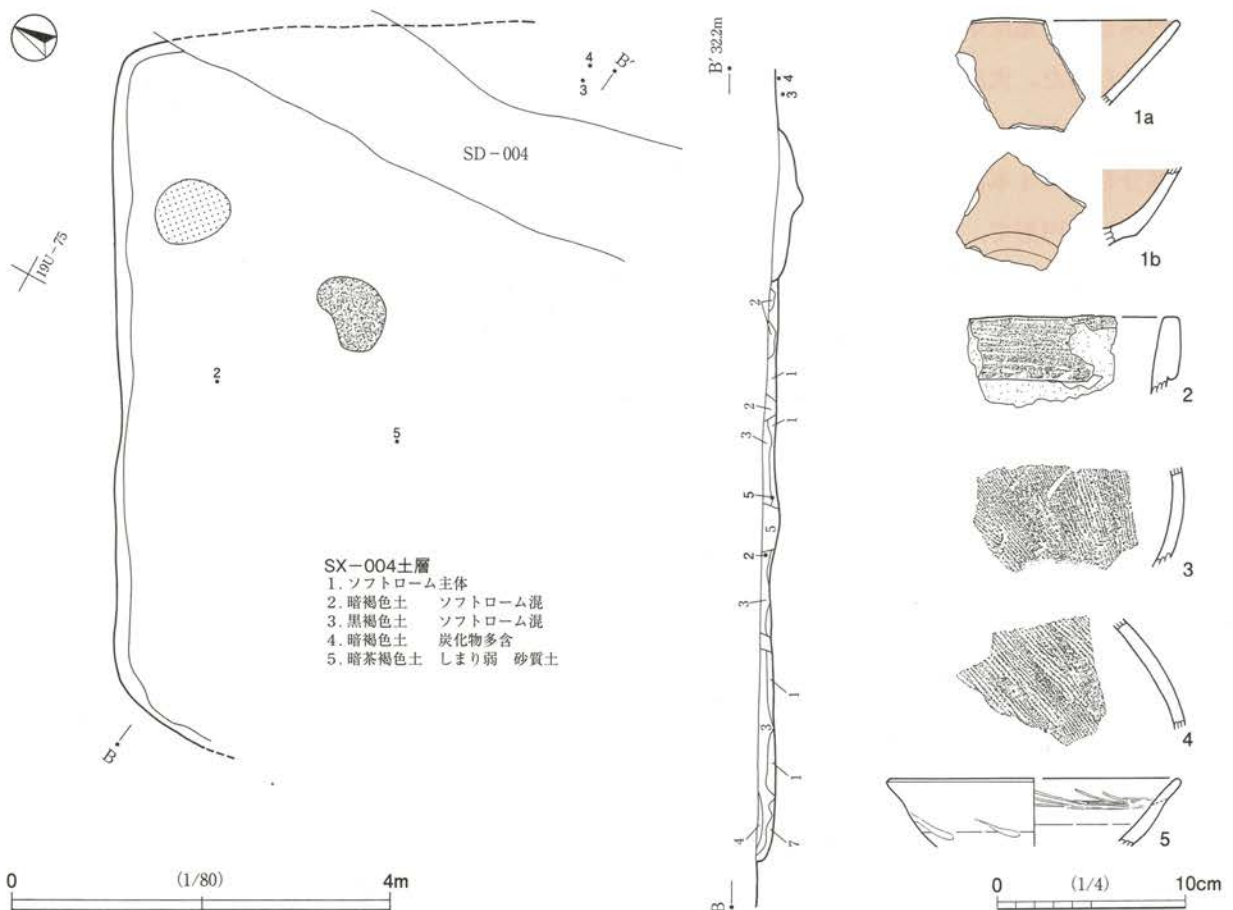
SX-004 (第121図, 図版161・238)

遺跡南部南寄りの19U区に位置する。方形または長方形の形態と思われるが、確認面から床面まで浅いために、形態・規模が不明瞭である。四辺のうち、北西壁付近が発掘されている。その長さはおよそ7mであるが、確実な数値とはいえない。深さは15cmである。図示した南側の焼土範囲が炉である。炉の位

置から、主軸方位はN-30°-Wである。北隅は直角的に発掘しているが、浅いために不確実である。西隅は鈍角的に広がっているが、これが本来のあり方かもしれない。しかし、南西壁のほとんどを発掘できていないので断定しがたい。北東壁は、北隅寄りで南北に走る溝状遺構SD-004に切られている。その先も、南東側にSI-002が存在すること等により、確認されていない。床面はおおむね平坦である。ソフトローム中にとどまるが、炉の南側の中央付近ではやや硬化しているようである。壁溝はまわっていない。支柱穴は未確認である。図示していないが、推定する北東壁寄り、南西壁寄りの対照的な位置に小ピットが認められた。この2か所のピットを結ぶ線上近くの内側に、炉が位置すると思われる。位置的に支柱穴とも思われるが、規模が小さいため断定しがたい。その他にピットはなく、壁柱穴の存在はうかがえない。北西壁際北寄りの床面に焼土範囲があるが、焼土の痕跡は炉跡よりも薄い状態である。また、炉近くの床面に細長いピットがあるが、後世の攪乱であろう。覆土は下層にソフトローム粒の包含が多いが、上層は黒褐色土・暗褐色土主体である。埋め戻しはされていないと思われる。

本住居は不整な形態のため、調査時点では竪穴住居跡と認識されなかった。その理由として、浅いことや他遺構との重複があるが、本住居のところで平成元・2年度調査区と平成3・4年度調査区にまたがったこともあげられる。さらに、平成3・4年度調査区で見つかった奈良・平安時代の竪穴住居跡SI-077が重複していることも、より本住居の遺構確認を困難にした。

出土遺物は少量の土器片で、古墳時代前期の遺物と、奈良・平安時代の遺物が混在している。後者がやや多いが、遺構の内容から本住居は古墳時代前期の竪穴住居跡である。土器片は小破片ばかりであるが、



第121図 SX-004

6点、5個体図示した。そのうち、1a・b～4は古墳時代前期の土器、5は奈良・平安時代の土器である。2は炉と北西壁中央の中間から出土し、3・4は北東壁際南寄りから出土した。5は炉の南側から出土したが、出土位置からSI-077に関わる遺物の可能性がある。

1aは土師器高杯の杯部で、口縁部片である。内外面に赤彩されている。外面はナデ、内面はハケメ後ナデが施されている。焼成は良好である。二次的な被熱により、内外面とも煤けて黒ずむ部分がある。1bは1aと同一個体と思われる。杯部下部の破片で、外面には明瞭な稜がみられる。1a・b以外に、内外面赤彩された土師器高杯の杯部口縁部片があるが、色調が1よりも明るいことから、別個体と思われる。2は土師器壺の口縁部片である。折り返し口縁で、口縁部頂部に平坦な面が作り出されている。内面はヘラケズリ的な強いヘラナデが施され、口縁部外面もハケメ後、強いヘラナデが施されている。色調はにぶい赤褐色で、焼成は良好である。3・4は土師器甕の胴部片である。3は胴部中位から下位、4は胴部上位の破片と思われる。調整は、ともに外面にハケメ、内面にナデが施されている。3の色調は外面が灰褐色、内面が灰黄褐色である。4の色調は外面がにぶい赤褐色、内面がにぶい黄褐色である。焼成はともに良好である。3・4はやや判然としないが、同一個体ではないと思われる。

5はロクロ成形の土師器杯である。口縁・体部の1/3が遺存する。口径は推定15.6cmである。内面はヘラミガキが施されているが、粗くヘラナデ的であり、あまり丁寧ではない。色調は赤褐色で、焼成はややあまい。

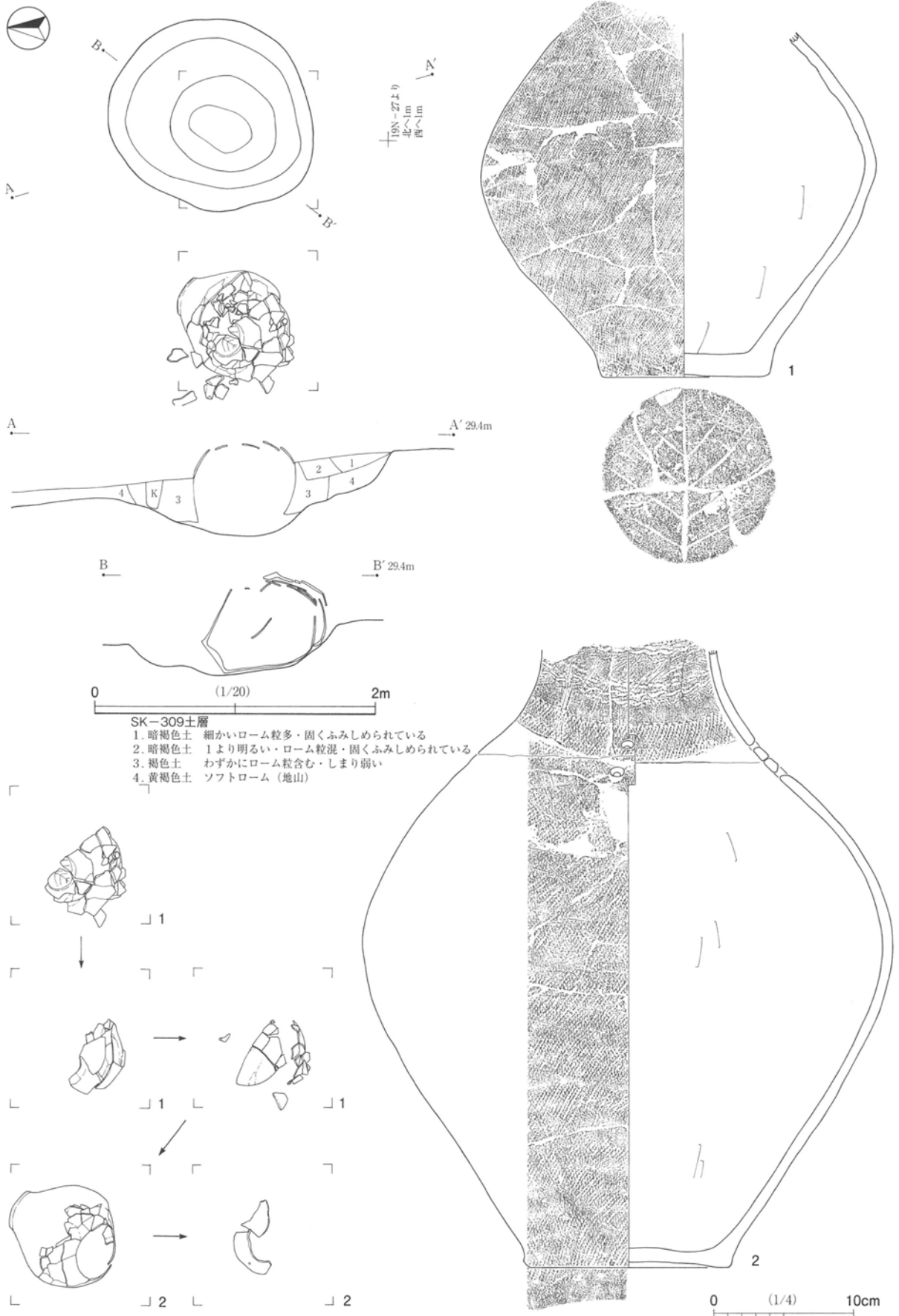
2 壺棺墓

SK-309 (第122図, 図版179・302)

遺跡西部北端の19N区に位置する。付近は平坦で、攪乱や重複はなく、遺存状況は良好であるが、表土除去段階で遺物の一部が表出したため判明した壺棺墓である。土壌は0.75m×0.7mの不整円形をなし、確認面からの深さは0.15mである。長軸方向は、N-45°-Eである。床面は浅い皿形で平坦面は小さく、壁の傾斜は遺存部分では緩い。覆土は明らかに人為的な埋め戻しである。

遺物は弥生土器の壺2点のみであり、本遺構の覆土からは他の個体の破片は出土していない。遺構の長軸方向に沿って、南向きに寝かせるように大型壺が据えられ、その上部から口縁部を打ち欠いた別個体の中型壺が被せられている。土圧によって上部の壺は押し潰されているが、本体の大型壺の下半部分はほぼ完存していた。

1は蓋として使用されていたものである。頸部以上はすべて打ち欠かれているが、胴部～底部は8割以上遺存する。胴部はやや強く張り、最大径が胴部中位にあるタイプで、底部はやや大きく、わずかに突出する。頸部～底部側縁の外面全面には、粒径の小さなLR附加条縄文が12段程度施され、底面には明瞭に木葉痕が残されている。底面外周部は顕著に磨耗している。2は本体として利用されていた大型壺である。頸部中位以上が打ちかかっているが、頸部下端～底部の8割以上を遺存する。胴部はやや強く張り、最大径が胴部中位にあるタイプで、底部はやや大きく、わずかに突出する。外形は1の壺と相似形である。頸部には3条単位のやや長いS字状結節文帯が2段以上めぐり、頸部下端～底部側面の全面に、粒径のやや大きなLR縄文が17段程度施される。底面には木葉痕はなく、特に調整の痕跡も認められない。底面外周部は顕著に磨耗している。本個体は頸部下端の輪積痕できれいに破断しており、その接合面が若干研磨されているほか、その両者の破片を結束するように上下四対の焼成後穿孔が認められることから、頭骨等大



第122図 SK-309

型の骨を収納する際に意図して頸部以上を外した可能性が高い。また、頸部中位の破断面も若干の磨耗が認められることから、壺棺として再利用する段階で、口縁部～頸部中位については失われていたものと考えられる。

遺物から見て、弥生時代後期に属するものと考えられる。

3 土坑

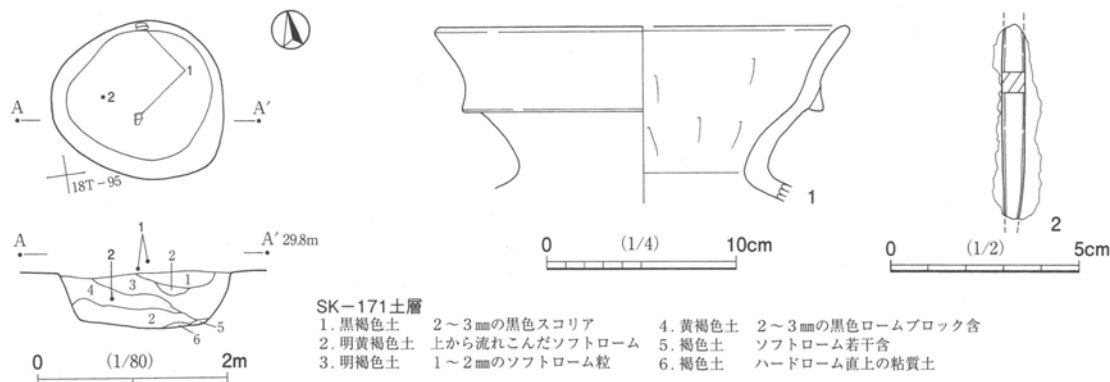
SK-171 (第123図, 図版176・302・308)

遺跡南部中央やや西寄りの18T区に位置する。付近は平坦で、攪乱や重複はなく、遺存状況は良好である。径1.8m程度の不整形円形をなし、確認面からの深さは0.5m程度、床面は平坦で、断面形状は逆台形を呈する。覆土はやや複雑な状況を示し、人為による埋め戻しの可能性がある。

遺物は少なく、ほとんどが覆土中からの出土である。図示し得たのは2点だが、1は覆土上層、2は覆土中層から出土した。

1は土師器有段口縁壺で、口縁部の1/4程度を遺存する。内面外面共にヘラナデで調整される。遺存部分は全体無文で赤彩の痕跡も認められないが、内面全面にタール状の炭化物が膠着しており、あたかも漆処理を行ったようにぶい光沢を持つ。2は断面が正方形の鉄製品で、鎌の茎と考えられる。

明らかに本遺構に伴う遺物はなく、時期は詳らかでないが、覆土の状況からみて古墳時代に属するものと考えられる。性格ははっきりしない。



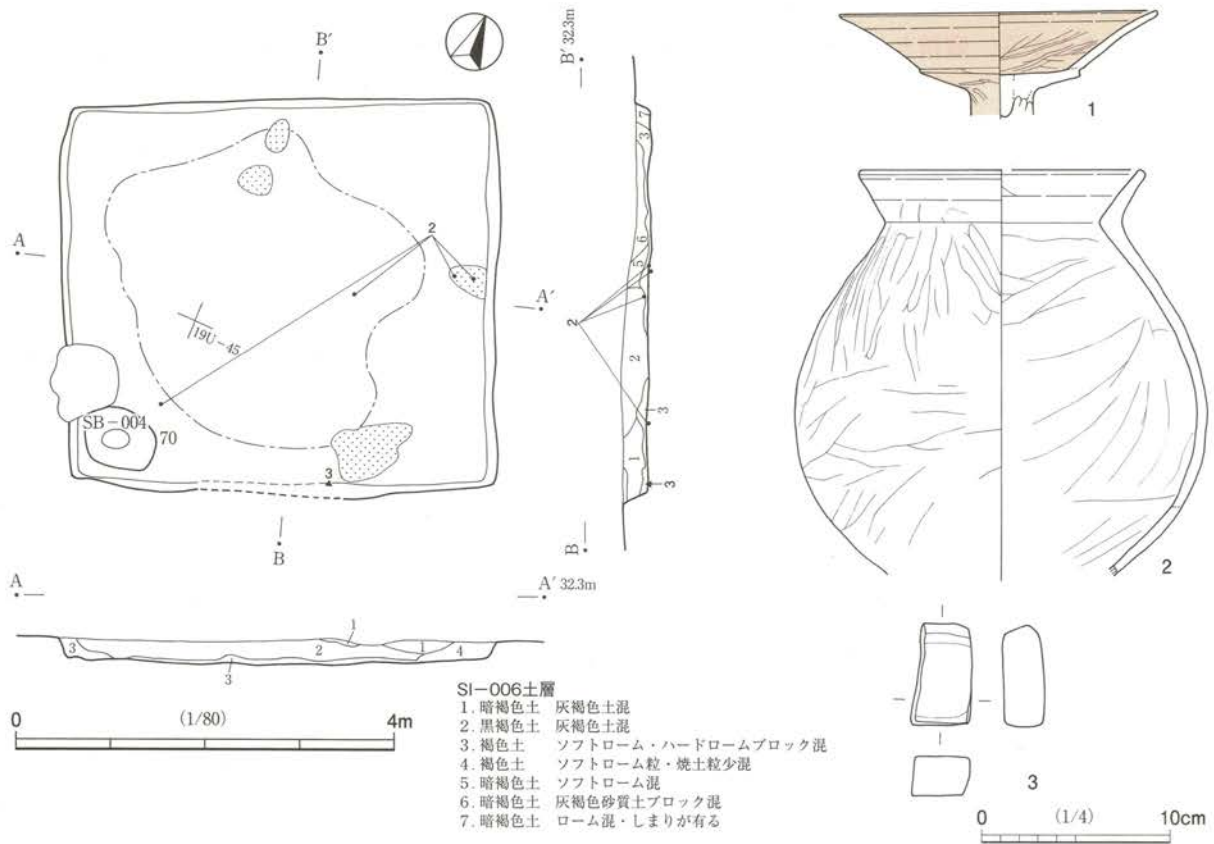
第123図 SK-171

第2節 古墳時代中期の竪穴住居跡

古墳時代中期に属すると思われる竪穴住居跡は、SI-006・020・021・033・065・101・175の7軒である。その他に、小鍛冶工房の竪穴建物であるSI-084が存在するが、これについては前節で掲載した。以上の遺構群については、遺跡北西部に位置するSI-175を除く7軒が遺跡南部に構築されていた。

SI-006 (第124図, 図版19・241・317)

遺跡南部南寄りの19U-35区に位置する。平面形は、ほぼ方形を呈す。長軸を主軸とすると主軸方位は、N-114°-Wをとる。規模は4.6m×4.2m、床面積は17.30㎡、確認面から床面までの深さは0.27mを測る。南西辺はSB-004に切られ、南東辺はSK-015を切っている。床面は中央やや広めの部分に貼床が施され、その一部はSK-015にかかっている。床面全体は若干の凹凸があり、4か所に焼土集中が認められたが、はっきりとした炉跡は検出できなかった。本跡に伴う柱穴は検出されなかったが、南側コーナー部分に貯



第124図 SI-006

蔵穴をもつ。遺物は覆土中及び貯蔵穴内から十数点出土したが、図示できたのは3点のみである。

1は土師器高杯の杯部で、貯蔵穴内覆土中層から出土した。口径16.7cm、残存器高5.5cmを測る。色調は内外面ともに赤褐色を呈し、全面に赤彩が施されている。外面一部には黒褐色の二次焼成痕が認められる。胎土は雲母・砂粒をやや多めに含み密で、焼成は良好である。調整は外面にロクロナデ、内面にミガキが施されている。

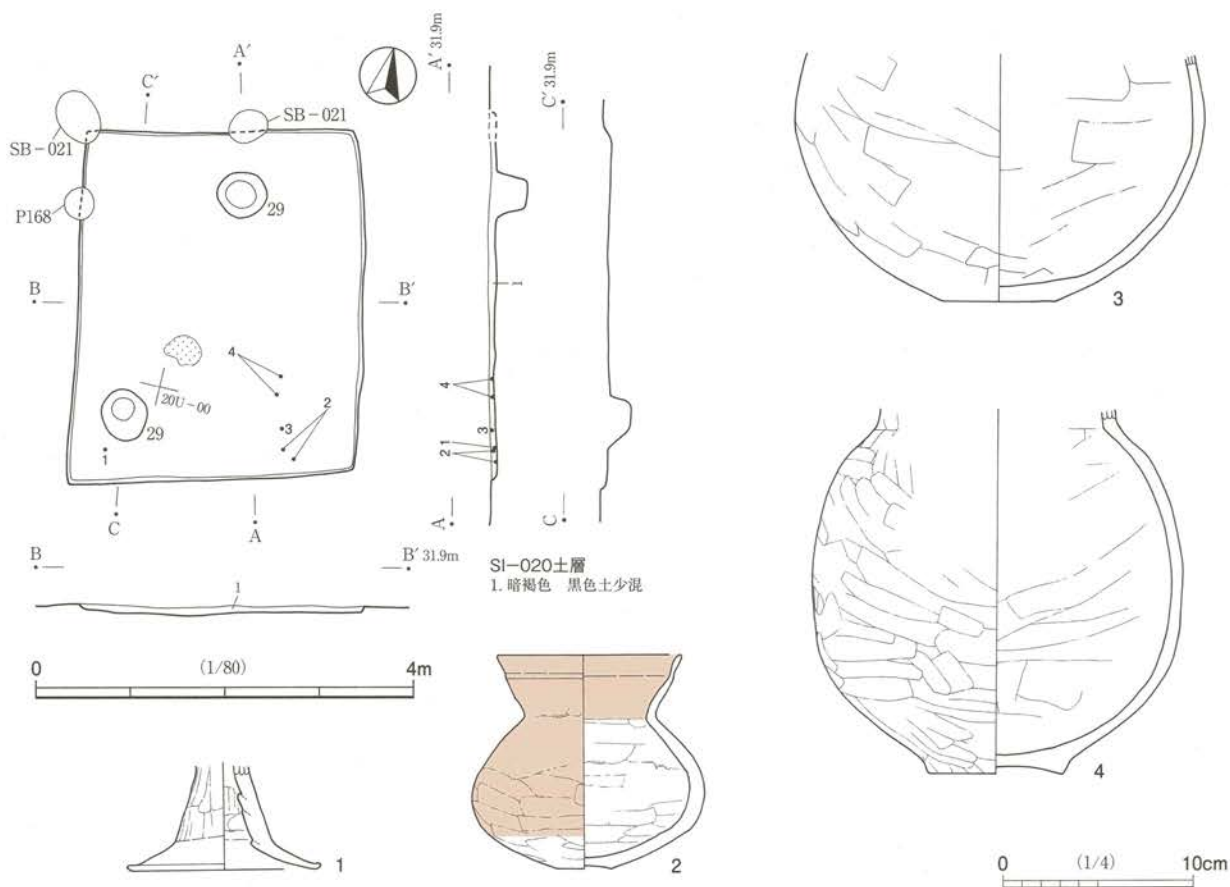
2は土師器の甕で、床面直上から出土した。復元口径14.8cm、最大径は胴部中位にあり21.7cm、残存器高21.3cmを測る。色調は内外面ともに黒褐色で部分的に赤褐色を呈す。胎土は砂粒をやや多めに含み密で、焼成は良好である。調整は内外面ともにヘラケズリを施し、上半部は軽くミガキをかけている。

3は砥石で、床面直上から出土した。石材は流紋岩質凝灰岩である。

SI-020 (第125図, 図版25・247・321)

遺跡南部南寄りの20T-90区に位置する。平面形は長方形を呈し、短軸を主軸とすると主軸方位はN-103°-Wをとる。規模は3.0m×3.6m、床面積は10.65㎡、確認面から床面までの深さは0.11mと残存率がきわめて悪い。北辺はSB-021に切られている。床面は平らで固く締まった部分は認められない。北側と南側コーナー部分には柱穴と思われるピットが検出されたが、本跡に伴うかどうかは不明である。南西側には炉と思われる焼土が検出された。遺物は床面直上から中及び貯蔵穴内から十数点出土したが、図示できたのは4点のみである。

1は土師器高杯の脚部で、復元裾径10.2cm、残存器高5.6cmを測る。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈す。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は外面脚部は縦のヘラケズリ、裾部はヨコナ



第125図 SI-020

デ、内面には輪積痕が残る。

2は土師器の小型壺で、復元口径9.7cm、最大径は胴部中位にあり12.3cm、底径2.9cm、器高11.2cmを測る。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈す。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は外面胴部中位から底部にかけてヘラケズリ、胴部中位から口縁部にかけてヨコナデ、内面口縁部はヨコナデ、胴部はヘラナデ、底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。内面頸部から外面胴部下位にかけて赤彩が施されている。

3・4は土師器の甕で、胴部から底部にかけて依存する。3は丸味をもつ甕で、胴部やや下位に最大径があり、21.6cm、復元底径6.0cm、残存器高13.0cmを測る。色調は外面褐灰色、内面灰褐色を呈す。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は内外面ともにヘラナデ、底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。4はやや長胴の甕で、胴部中位に最大径があり、19.5cm、底径7.0cm、残存器高19.1cmを測る。色調は外面褐灰色、内面にぶい赤褐色を呈す。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は内外面ともにヘラナデ、底部外面は全面に手持ちヘラケズリが施され、上げ底気味である。

その他、図示していないが、軽石が2点出土している。黒ずんだ色調のもので、黒色系のものであろうか。

SI-021 (第126・127図, 図版25・247・248・321)

遺跡南部東寄りの20T-93区に位置する。平面形はやや隅丸気味の方形を呈し、ヘツツイと思われる構築物の向きを主軸とすると主軸方位はN-110°-Wをとる。規模は4.8m×5.1m、床面積は21.17㎡、確認面から床面までの深さは0.61mを測る。中央北西寄りに炉と思われる部分(E-E')があるが、上側に山砂

を込めた様子が覆土上層の段階で検出されており、その構造から見て、ヘツツイ（カマド）の可能性が考えられる。主柱穴は全体的に北東に偏った形で4本検出された。南西寄りに貯蔵穴をもち、貯蔵穴内には、焼失したときに混入したと思われる焼土を検出した。床面はほぼ全域において硬化しており、特にヘツツイと思われる部分の周辺は、搗き固めたとと思われるほど硬化していた。本跡検出面自体が、西方向から東方向へ緩やかに下降しており、遺物の多くは覆土上層から出土しているが、覆土下層もしくは床面直上で出土したものと接合したのもいくつかあるが、図示できたのは14点に留まった。

1～3は土師器高杯である。1はやや小型の高杯で覆土上面及び中面出土のものが接合し、80%程度遺存する。口径11.3cm、裾径9.0cm、器高9.4cmを測る。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、内面には一部黒斑が認められる。胎土は白色の砂粒・雲母がやや多めに含まれ密で、焼成は良好である。調整は外面杯部にヘラケズリ、脚部にハケメ、裾部はヨコナデ、内面杯部にヨコナデ、脚部内面にヘラケズリが施されている。2は外面脚部近くに一段の稜をもつ高杯の杯部片で、覆土上面から出土した。復元口径16.4cm、残存器高4.0cmを測る。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、全面に赤彩が施されている。胎土は白色の砂粒を微量含み密で、焼成は良好である。調整は外面にヘラケズリ後ナデ、内面に丁寧なナデが施されている。3は外面脚部近くに一段の稜をもつ高杯の杯部片で、覆土上面及び中面出土したものが接合した。復元口径17.2cm、残存器高4.8cmを測る。色調は内外面ともに赤褐色を呈し、全面に赤彩が施されている。胎土・焼成ともに良好である。調整は外面にヘラナデ、内面に丁寧なミガキが施されている。

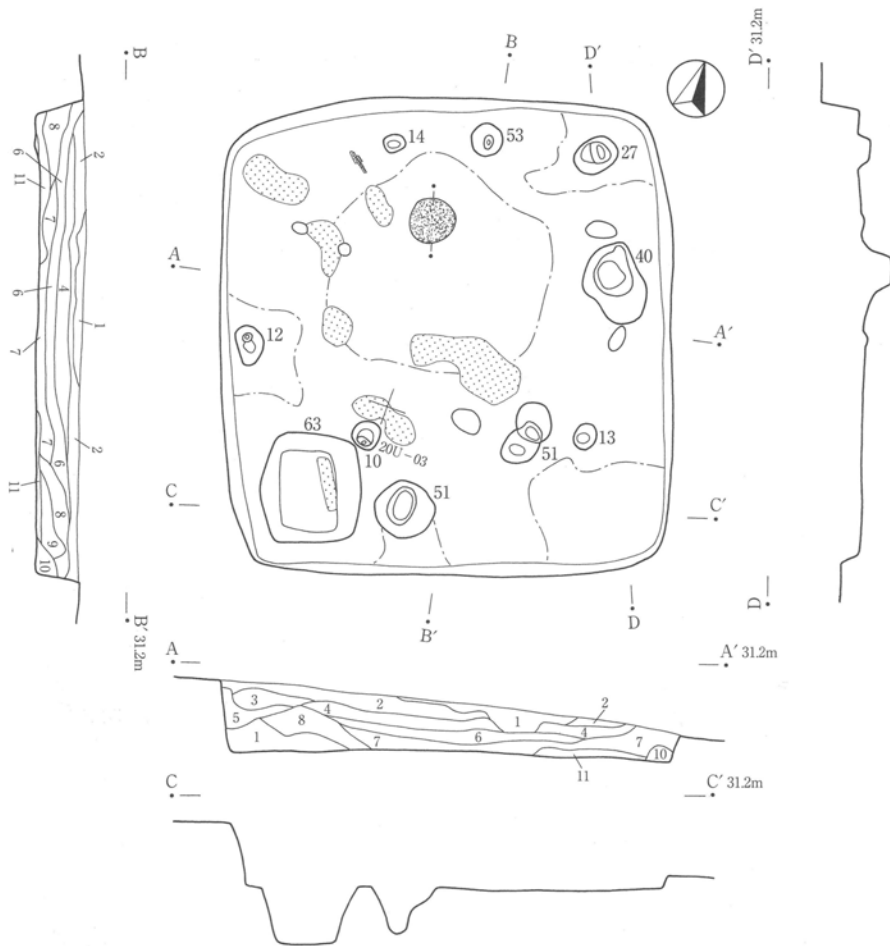
4は土師器小型丸底壺の口縁部片と思われ、覆土上面及び中面出土のものが接合した。復元口径12.0cm、残存器高4.3cmを測る。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、全面に赤彩が施されている。胎土は雲母がやや多めに含まれ密で、焼成は良好である。調整は内外面ともに丁寧なナデが施されている。

5はほぼ完形の土師器小型甕で、覆土上面から出土した。口径12.8cm、底径4.8cm、器高9.3cmを測る。色調は外面全体に煤が付着し赤味があった暗褐色、内面にも部分的に煤が付着し赤味があった暗褐色を呈し、外面全体及び内面口縁部にかけて赤彩が施されている。胎土は砂粒を微量に含み密で、焼成は良好である。調整は外面にヘラケズリ後軽いナデ、内面にヘラケズリ、底部外面は手持ちヘラケズリが施される。

6・8は土師器の埴である。6はほぼ完形で、覆土上面と中面出土のものが接合した。口径14.8cm、底径3.0cm、器高7.3cmを測る。色調は外面が部分的に煤が付着し暗褐色、内面がにぶい赤褐色を呈している。胎土は白色の砂粒と赤色スコリアを少量含み密で、焼成は普通である。調整は口縁部内外面にはヨコナデ、胴部外面にはヘラケズリ後ナデ、胴部内面にはヘラナデが施されている。8は文様つき埴で、覆土上面から出土したもので、80%ほど遺存する。文様は三角形を基本とした線刻文で、胴部内面を除く全面に施文されている。胴部中位は幅2.5cmほど極端なヘラケズリが施され、平らな面を持つ。口径11.6cm、器高7.5cmを測り、底部は微妙に平らな面を持つ。色調は内外面ともに暗褐色から黒褐色を呈し、部分的に煤が付着している。胎土は白色の砂粒と赤色スコリアを少量含み、焼成は普通である。調整は口縁部内外面にはヨコナデ、胴部外面にはヘラケズリ後ナデ、胴部内面にはヘラナデが施されている。

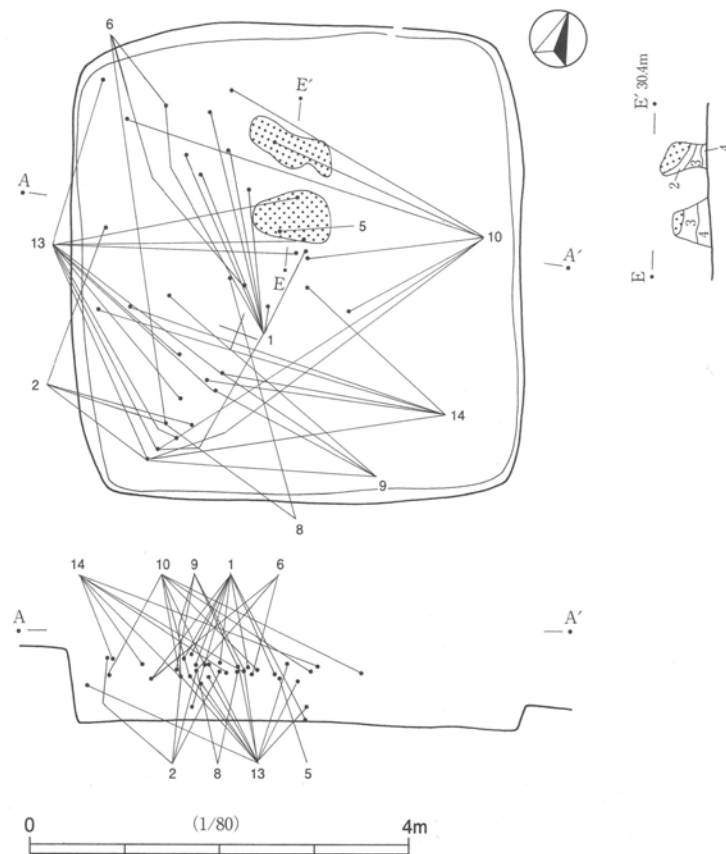
7は土師器甕の口縁部片で、覆土中面から出土した。復元口径15.7cmを測り、色調は外面黒褐色、内面ににぶい赤褐色を呈している。胎土は密で焼成は良好である。調整は口縁部内外面にナデ、胴部外面にヘラケズリ、胴部内面にヘラナデが施される。

9・10は土師器の杯である。9はやや丸底気味で、覆土上面及び中面出土のものが接合した。復元口径14.8cm、底径8.2cm、器高4.0cmを測る。色調は内外面ともに淡赤褐色を呈す。胎土は石英と赤色スコリア



SI-021土層

- 1. 黄白色砂質土
- 2. 暗褐色土 ローム粒混
- 3. 褐色土 ロームブロック少混
- 4. 暗褐色土 黒色土混・ロームブロック少混
- 5. 暗褐色土 ロームブロック多混
- 6. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒混
- 7. 暗褐色土 ローム粒少混
- 8. 暗褐色土 ロームブロック多混
- 9. 褐色土 ロームブロック混
- 10. 暗褐色土 砂粒混
- 11. 褐色土 ロームブロック多混



SI-021 E-E'

- 1. 黒褐色土
- 2. 黒褐色土 砂粒少混
- 3. 暗褐色土 ロームブロック混

第126図 SI-021 (1)



第127図 SI-021 (2)

を少量含み密で、焼成はあまり良くない。調整は外面にヘラケズリ後ナデ、内面はヘラナデが施されている。底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。10はやや丸底気味で、床面直上から出土した。復元口径15.0cm、復元底径9.4cm、器高5.1cmを測る。色調は外面がやや赤味がかった褐色、内面が暗褐色を呈す。

胎土は白色の砂粒と赤色スコリアを少量含み密で、焼成は普通である。調整は外面にヘラケズリ、内面はナデが施されている。底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。

11は須恵器杯で、床面直上から出土した。復元口径13.0cm、復元底径8.0cm、器高3.6cmを測る。色調は内外面ともに暗灰褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は外面底部周縁部に回転ヘラケズリ、体部外面から内面はロクロナデが施されている。底部外面は回転ヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。

12は須恵器高台付杯で、覆土中面から出土した。復元底径9.4cm、残存器高4.1cmを測る。色調は内外面ともに灰黄褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は内外面ともにロクロナデ、高台内部は回転ヘラケズリが施されている。

13・14は土師器の長胴の甕である。13は床面直上から出土した。口径17.0cm、底径8.2cm、復元器高33.6cmを測る。色調は内外面ともに暗褐色で、外面胴部下位には煤が付着し黒色を呈している。胎土は白色の砂粒と赤色スコリアを含み密で、焼成はやや不良である。調整は外面にヘラケズリ、内面に荒いヘラナデが施されている。14は床面直上から出土した。復元口径21.2cm、残存器高31.6cmを測る。色調は外面がにぶい赤褐色で部分的に煤が付着し黒褐色、内面が赤味がかかった暗褐色を呈している。胎土は雲母と小石を少量含み密で、焼成はやや不良である。調整は外面にヘラケズリ後ミガキ、内面に荒いヘラナデが施されている。

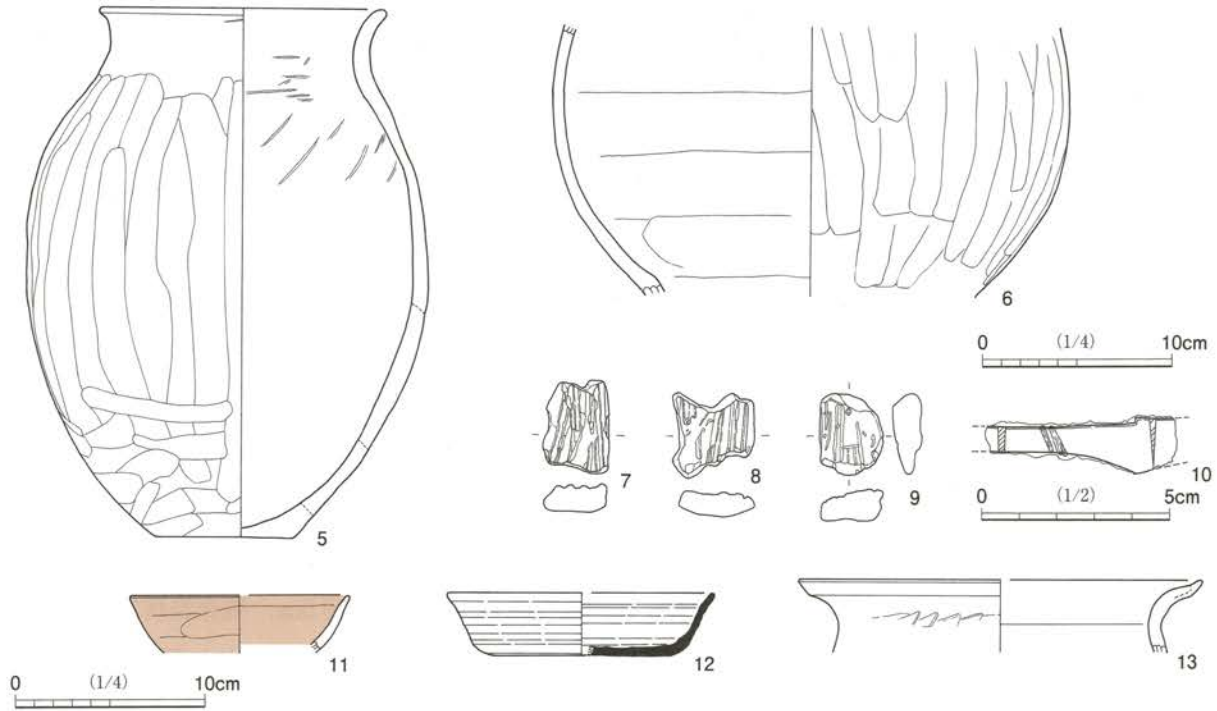
その他、図示していないが、軽石小片が1点出土している。

SI-033 (第128図, 図版30・250・315・318・319)

遺跡南部東寄りの20T-40区に位置する。平面形はやや歪んだ方形を呈し、長軸を主軸とすると主軸方位はN-24°-Wをとる。規模は5.7m×5.2m、床面積は26.40㎡、確認面から床面までの深さは0.3mを測る。東辺をSK-163が切っている。床面はほぼ平らで硬化部分はなく、全面に貼床が認められた。中央北西寄りに炉をもつ。4本の支柱穴と、西隅にやや浅めのピットが1か所検出された。支柱穴の深さは60cm～80cm、柱穴間隔はほぼ均等で柱穴間面積は7.62㎡を測る。南西側コーナーの部分には平面楕円形の貯蔵穴を持ち、長軸0.95m・短軸0.70m・床面からの深さは約30cmを測る。遺物は貼床中から出土したものも含め、13点を図示することができた。

1～3は土師器杯である。1は覆土上面一括で取り上げたものが接合し、50%程度遺存する。復元口径12.9cm、底径6.6cm、器高3.9cmを測る。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈す。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は内外面ともにロクロナデが施され、底部外面はやや上げ底気味で、回転糸切り痕が認められる。2は覆土上面一括で取り上げた底部片で、20%程度遺存する。復元底径6.2cm、残存器高2.6cmを測る。色調は内外面ともににぶい褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は内外面ともにロクロナデが施され、底部外面はやや上げ底気味で、回転糸切り痕が認められる。3は覆土上面一括で取り上げたものが接合し、70%程度遺存する。器形はやや小さめで上げ底気味の底部をもち、やや丸味を帯びた体部から口縁部に至る。復元口径12.9cm、底径4.8cm、復元器高4.6cmを測る。色調は内外面ともににぶい赤褐色で、部分的に煤が付着し黒褐色を呈している。胎土・焼成ともに良好である。調整は内外面ともにロクロナデが施され、底部外面は回転糸切り痕が認められる。

4は灰釉陶器の高台付皿で、床面直上から出土した。復元口径14.0cm、復元底径6.4cm、復元器高2.5cmを測る。色調は内外面ともに灰黄褐色を呈し、外面体部下位から内面体部下位にかけて施釉されている。



第133図 SI-003 (2)

である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面胴部に縦方向のヘラケズリ、底部周辺に横方向のヘラケズリ、内面に横方向のナデ、底部外面にヘラケズリが施されている。6はカマド周辺の覆土下面から出土した、胴部が丸味を帯びる甕の胴部片である。遺存度は10%で、復元胴部径27.4cm、残存器高14.2cmを測る。色調は外面が黄褐色、内面が褐色、一部赤褐色を呈し、全体的に煤けている。胎土は砂粒を少量含み、焼成は普通である。調整は外面胴部にヘラケズリ、外面頸部ヨコナデ、内面にヘラナデが施されている。

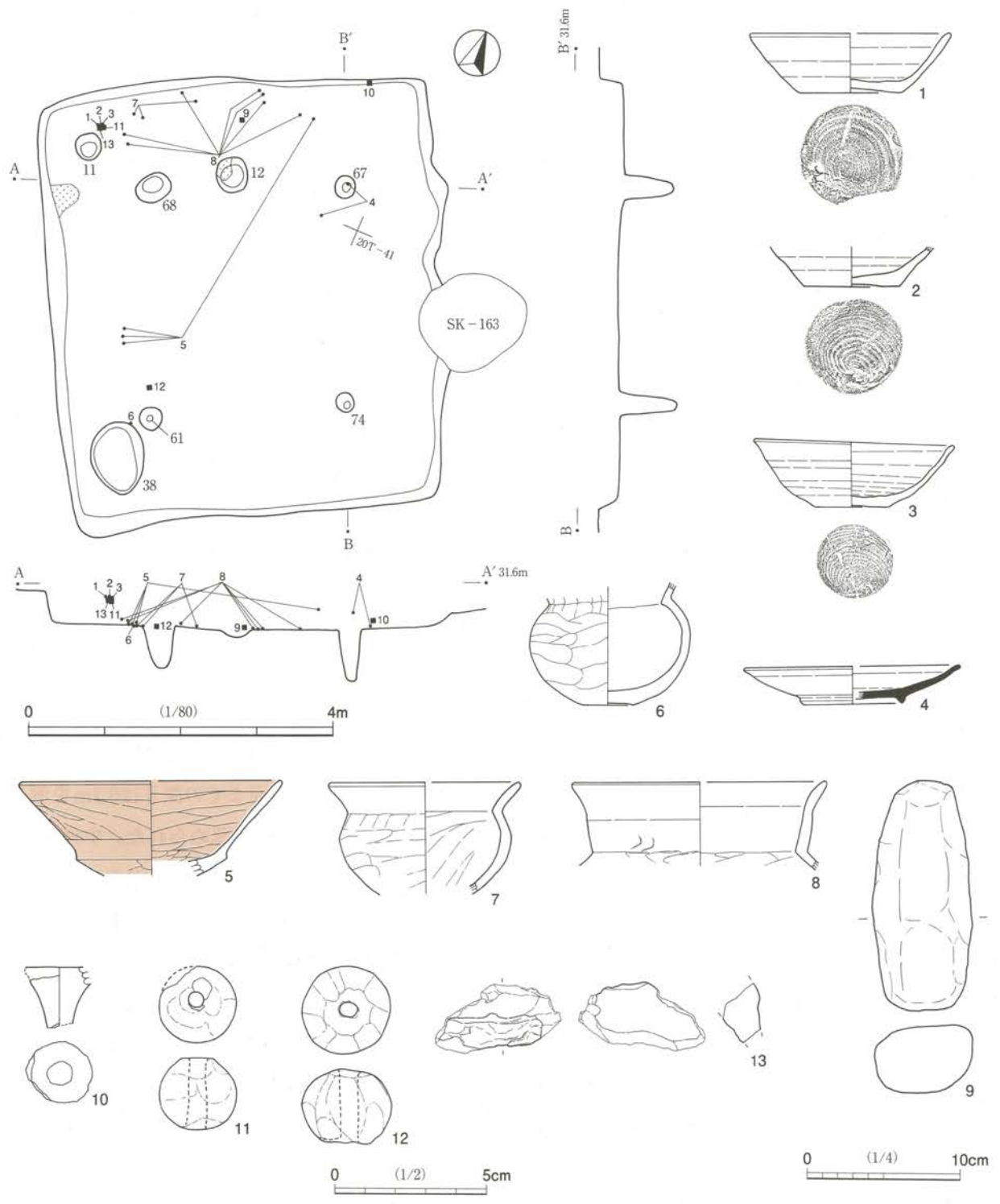
7～9は覆土中面から下面にかけて出土した焼成粘土塊である。

10は覆土中面から出土した刀子で、茎部には巻き付けた木皮の一部が遺存している。

11～13は混入品である。11は遺存度は10%の土師器杯で、復元口径11.6cm、残存器高3.0cmを測る。色調は内外面ともに赤褐色を呈し、全面に赤彩が施されている。胎土は砂粒が少量含まれ密で、焼成は普通である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面体部にヘラケズリ後にナデ、内面体部にナデが施されている。12は遺存度は20%の須恵器杯で、復元口径14.2cm、復元底径9.4cm、器高3.3cmを測る。色調は外面体部が暗褐色、底部が黒色、内面が灰褐色を呈している。胎土は雲母・砂粒を少量含み密で、焼成はやや不良である。調整は内外面にロクロナデ、底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。13は遺存度は10%の土師器甕の口縁部片で、復元口径21.4cm、残存器高3.8cmを測る。色調は内外面ともに淡褐色を呈し、胎土は砂粒を少量含み粗で、焼成は普通である。

SI-007 (第134・135図, 図版19・241・242・306・308・315・318)

遺跡南部南寄りの19U-14区に位置し、平面形は方形を呈す。規模は7.4m×7.5m、床面積は52.96㎡、主柱穴間面積は18.16㎡、深さは0.40mを測り、主軸方位はN-44°-Wをとる。北東壁から南東壁部分にかけてSB-029に切られている。北西壁中央部にカマドをもち、主柱穴は4本、北東寄りに円形の貯蔵穴、南東壁付近に出入口施設用のやや浅めの小穴をもつ。カマド右袖から住居北隅を経て1.8m延長した部分のみ、深さ3～6cmの壁周溝を検出した。床面は平らで、とくに硬化面は見られず、覆土は自然堆積と思



第128図 SI-033

胎土は石英・長石・雲母・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は内外面ともにロクロナデが施されている。

5は土師器高杯の杯部片で、床面直上から出土し、杯部外面下位に一段の稜を有する。復元口径16.8cm、残存器高6.2cmを測る。色調は外面は明赤褐色、内面はにぶい赤褐色を呈し、全面に赤彩が施されている。胎土は石英・長石・雲母・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は内外面ともに丁寧なナデが施されている。

6・7は土師器の埴で、いずれも床面直上から出土した。6は口縁部を欠損するのみで遺存度は95%である。底径3.3cm, 残存器高8.0cmを測る。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、外面は部分的に煤が付着し黒褐色である。胎土・焼成ともに良好である。調整は外面に手持ちヘラケズリ後ミガキ、内面にナデが施されている。底部外面は手持ちヘラケズリが全面に施され、切り離し技法は不明である。7は底部を欠損し、遺存度は40%である。復元口径12.3cmを測る。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、外面は部分的に煤が付着し黒褐色である。胎土・焼成ともに良好である。調整は外面胴部に手持ちヘラケズリ、外面口縁部にヨコナデ、内面にナデが施されている。

8は土師器甕の口縁部片で、ほぼ床面直上から出土した。復元口径16.4cmを測る。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、部分的に煤が付着し黒褐色である。胎土・焼成ともに良好で、調整は内外面ともにナデが施されている。

9～13は土製品である。9は支脚でほぼ床面直上から出土した。10は把手の一部で床面直上から出土した。11・12は土玉で、11は覆土上面から、12は床面直上から出土した。13は形象埴輪の一部分で、詳細については不明である。

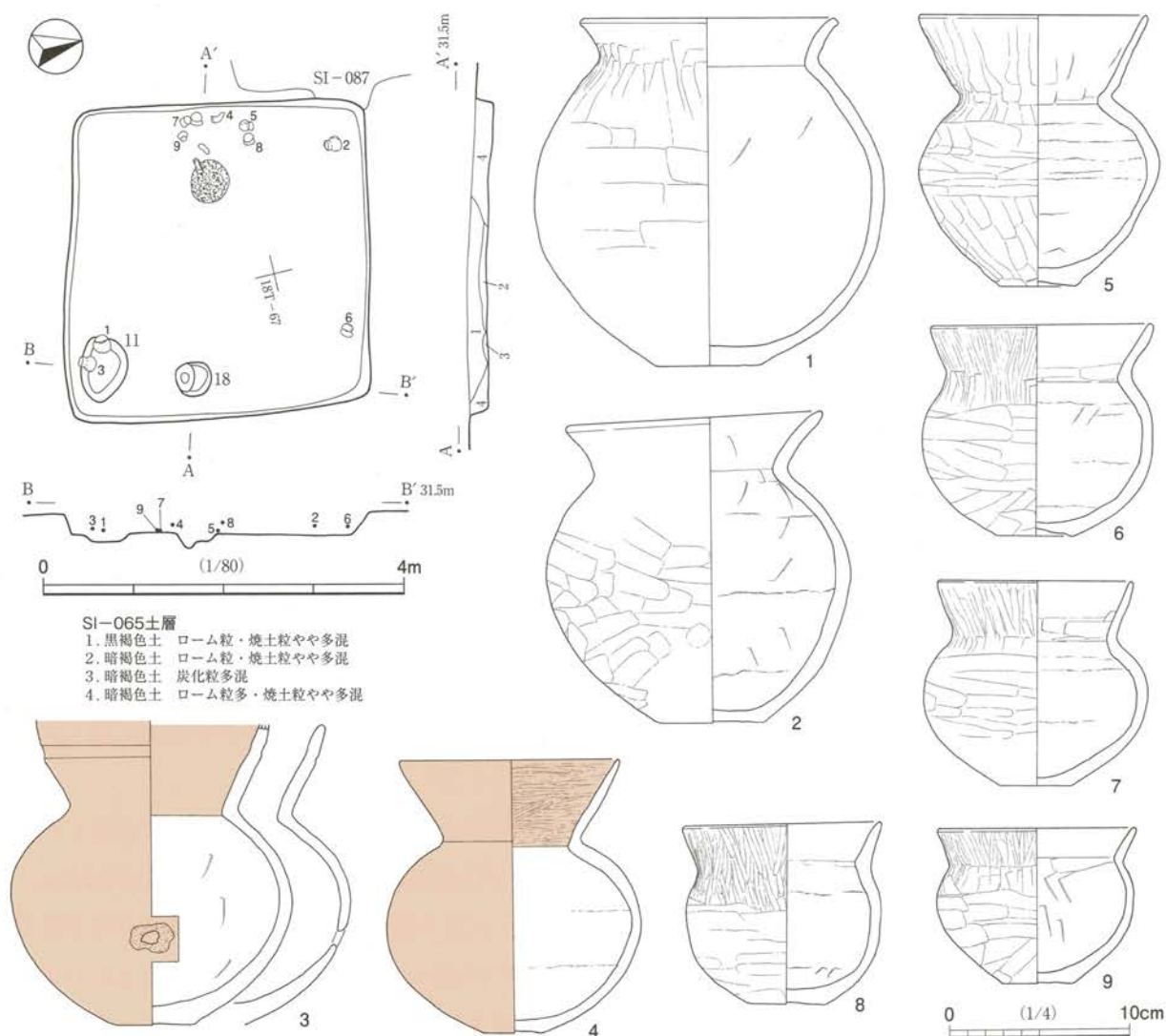
SI-065 (第129図, 図版45・257)

遺跡南部中央やや西寄りの18T-66区に位置する。平面形は方形を呈し、長軸を主軸とすると主軸方位はN-77°-Wをとる。規模は3.5m×3.4m, 床面積は10.62㎡, 確認面から床面までの深さは0.3mを測る。西辺北側をSI-087が切っている。覆土中には炭化材及び焼土が多く混入しており、焼失住居と思われる。床面はほぼ平らで硬化部分はなく、西辺中央部に炉をもつ。炉は焼土が少なく使用期間は短いと思われる。東辺に浅めのピットが1基検出された。南東側コーナーの部分には平面楕円形の貯蔵穴をもち、長軸0.74m・短軸0.62m・床面からの深さは約10cmを測る。遺物は炉周辺・貯蔵穴内等から出土したものも含め、9点を図示することができた。

1・2はほぼ完形品の土師器甕である。1は北西コーナー部分の床面直上から出土した。口径13.8cm, 底径5.7cm, 器高19.2cm, 最大径は胴部中位にあり19.3cmを測る。色調は内外面ともに橙褐色を呈し、全体に煤が付着している。胎土は石英・砂粒・小礫がやや多めに含まれ密で、焼成は良好である。調整は外面頸部にヘラナデ・胴部にヨコナデ、内面にヘラナデが施されている。底部外面は手持ちヘラケズリが全面に施されている。2は南東コーナー部分の浅い貯蔵穴内から横位で出土した。口径13.8cm, 底径5.8cm, 器高17.2cm, 最大径は胴部中位にあり16.9cmを測る。色調は内外面ともに橙色を呈し、全体に煤が付着している。胎土は砂粒・スコリアがやや多めに含まれ粗で、焼成は良好である。調整は外面口辺部には粘土が乾かないうちに雑にヨコナデが施されたためか、粘土のたまりが顕著に認められる。内面にはヘラナデが施され、ヘラのあたり及び3条の輪積痕がはっきり認められる。底部外面はヘラナデが全面に施されている。

3～9はほぼ完形品の土師器壺である。3は南東コーナー部分の浅い貯蔵穴内から横位で出土した。胴部やや下位の部分には焼成後に開けられた穿孔がある。復元口径12.8cm, 底径4.8cm, 残存器高16.9cm, 最大径は胴部中位にあり15.5cmを測る。色調は外面が明褐色、内面が褐色を呈し、外面全体及び内面頸部にかけて赤彩が施されている。内外面ともに二次焼成が顕著で全体に煤が付着している。胎土は石英・雲母・砂粒・赤色スコリアがやや多めに含まれ粗で、焼成は普通である。調整は内外面ともにヘラナデ、口縁部にヨコナデが施されている。4は炉の西側に近接した床面直上から正位の状態で出土した。口径12.0

cm, 底径3.2cm, 器高15.1cm, 最大径は胴部中位にあり14.1cmを測る。色調は内外面ともに橙褐色を呈し、外面全体及び内面頸部にかけて赤彩が施されている。内外面ともに二次焼成が顕著で全体に煤が付着している。胎土は石英・砂粒・小礫がやや多めに含まれ密で、焼成は良好である。調整は外面に丁寧なミガキ、内面口辺部に丁寧なミガキ・胴部に丁寧なヘラナデが施されている。5は炉の北側に近接した床面直上から横位の状態で出土した。復元口径12.5cm, 底径4.3cm, 器高15.0cm, 最大径は胴部やや上位にあり13.3cmを測る。色調は内外面ともに橙褐色を呈し、内面全体及び外面胴部上位にかけて煤が付着している。胎土は砂粒がやや多めに含まれ密で、焼成は良好である。調整は外面全体にヘラケズリ後ヘラナデ、内面にヘラナデが施されている。胴部内面には6条の輪積痕が認められる。6は北東側コーナー部分の床面直上から出土した。口径12.0cm, 底径4.2cm, 器高11.8cm, 最大径は胴部中位にあり12.7cmを測る。色調は外面が橙褐色, 内面が明赤褐色を呈している。内外面には部分的に煤が付着している。胎土は砂粒・小礫がやや多めに含まれ密で、焼成は良好である。調整は内外面全体にヘラナデが施されている。胴部内面には4条の輪積痕が認められ、底部内面周辺に炭化物が付着している。7は炉の南西側に近接した床面直上から出土した。口径10.6cm, 底径3.9cm, 器高11.3cm, 最大径は胴部中位にあり12.4cmを測る。色調は内外面ともに橙褐色を呈し、内外面には部分的に煤が付着している。胎土は砂粒・石英がやや多めに含まれ密で、焼



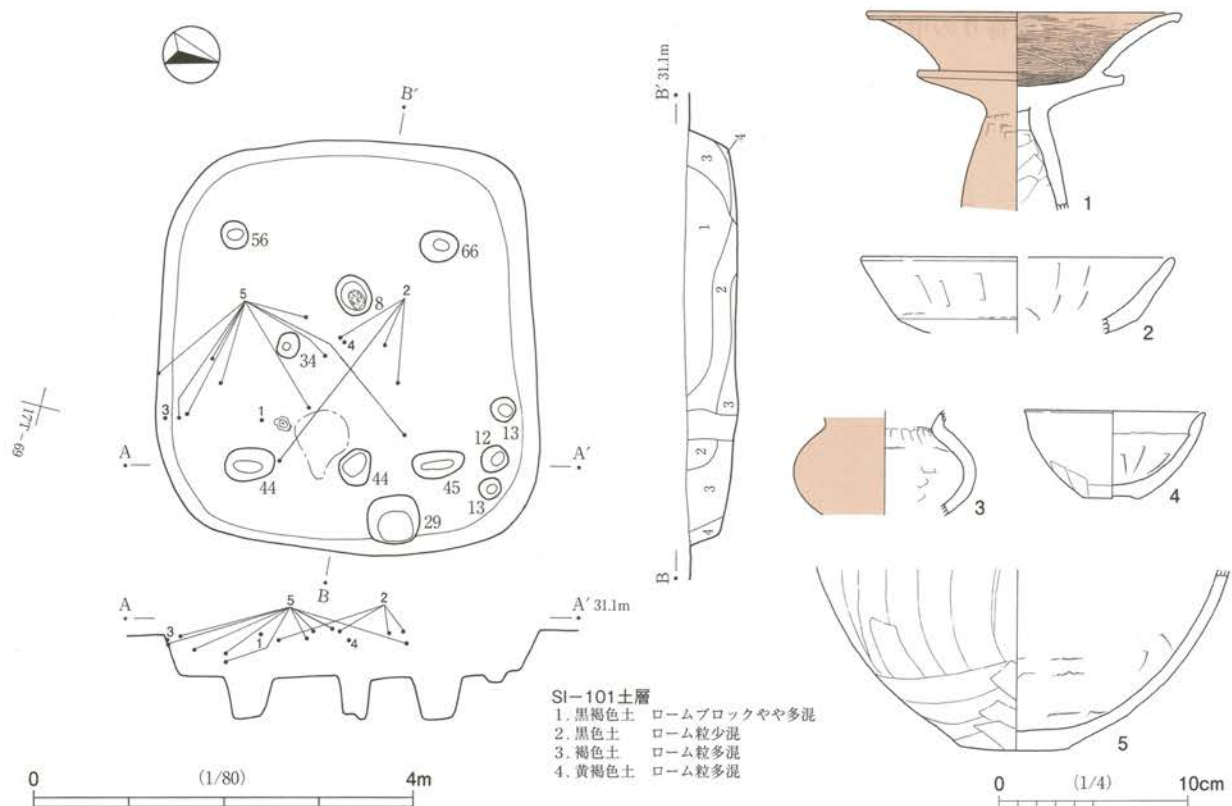
第129図 SI-065

成は良好である。調整は内外面全体にヘラナデが施されている。胴部内面には3条の輪積痕が認められる。8は炉の北側に近接した床面直上から出土した。口径10.8cm, 底径4.1cm, 器高10.1cm, 最大径は口縁部にある。色調は内外面ともに橙褐色を呈し, 内外面には部分的に煤が付着している。胎土は砂粒・石英・小礫がやや多めに含まれ密で, 焼成は良好である。調整は外面上部にミガキ・下部にヘラケズリ後ヘラナデ, 内面口縁部周辺にヨコナデ・胴部にヘラナデが施されている。底部外面は手持ちヘラケズリが全面に施されている。胴部内面には2条の輪積痕が認められる。9は炉の南西側に近接した床面直上から正位の状態出土した。口径10.8cm, 底径4.0cm, 器高8.6cm, 最大径は胴部やや上位にあり10.9cmを測る。色調は内外面ともに橙褐色を呈し, 内外面には部分的に煤が付着している。胎土は砂粒がやや多めに含まれ密で, 焼成は良好である。調整は内外面全体にヘラナデが施されている。底部外面はヘラケズリ後ヘラナデが全面に施されている。内面底部周辺には炭化物が若干付着している。

SI-101 (第130図, 図版63・64・266)

遺跡南部西端の17T-58区に位置する。平面形は隅丸方形を呈し, 長軸を主軸とすると主軸方位はN-107°-Wをとる。規模は4.1m×4.0m, 床面積は13.40㎡, 4柱穴間の面積は5.00㎡, 確認面から床面までの深さは0.53mを測る。本跡はソフトルームまで掘り込まれ, 壁はやや外反し, 床面から壁の断面形が鍋底状である。東壁側には出入口用ピットが認められ, 周辺の床面は部分的に硬化していた。支柱穴は4本で, 特に東側の2本のピットは, 出入口用ピットに平行する形で楕円形を呈する。炉は西壁寄りの中央部に位置し, 周辺は黒く濁っていた。遺物は5点を図示することができた。

1・2は土師器高杯で, いずれも覆土上面から出土した。1は杯部が朝顔形に開き, 斜下方に垂下する隆起帯によって段をなす。この隆起帯は粘土紐を貼付けてから両指でヨコナデするように成形したもので



第130図 SI-101

ある。復元口径16.5cm，残存器高10.5cmを測る。色調は内外面ともに橙色を呈し，脚内部を除く全面に赤彩が施されている。胎土は赤色スコリア・砂粒を少量含み粗で，焼成は良好である。調整は外面にヨコナデとヘラナデが，内面にヘラナデ後にミガキとヨコナデが施されている。2は復元口径16.4cm，残存器高4.0cmを測る。色調は内外面ともに橙色を呈している。胎土は赤色スコリア・砂粒を少量含み粗で，焼成は良好である。調整は外面にヘラケズリ後にヘラナデ，内面にヘラナデ後にミガキが施されている。

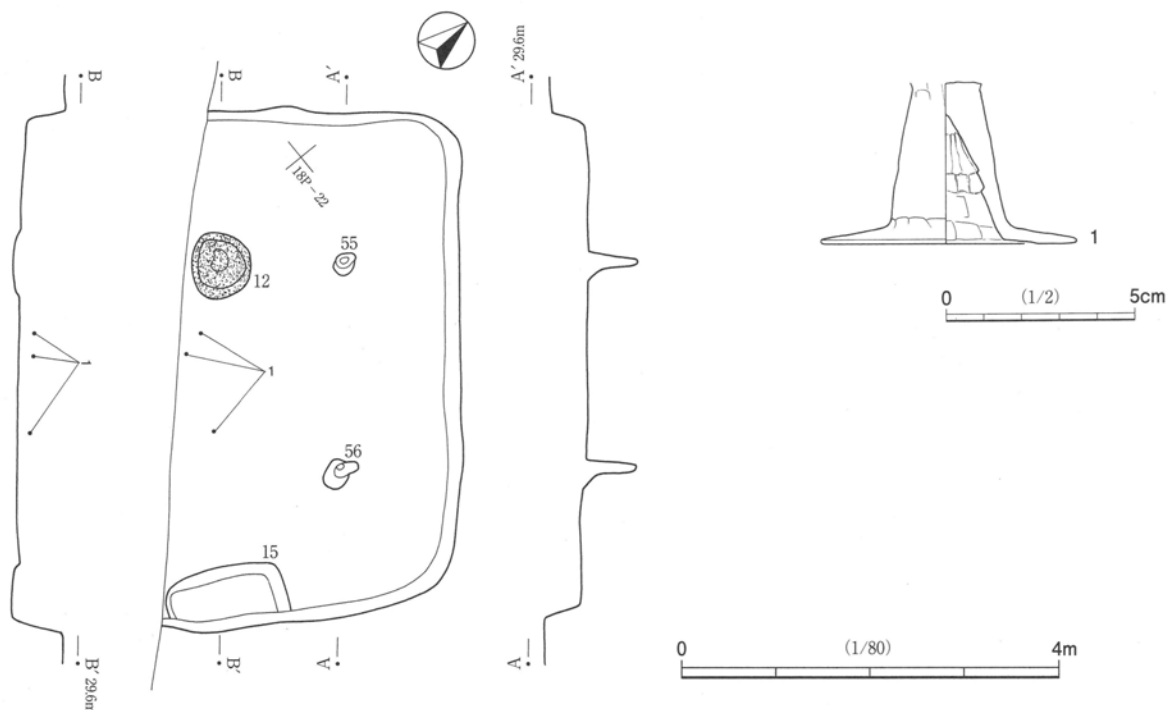
3は土師器の小型壺で，覆土上面から出土した。胴部最大径は中位にあり9.6cm，残存器高5.0cmを測る。色調は内外面ともに赤褐色を呈し，外面に赤彩を施している。二次焼成を受けており，内面には黒斑が見られる。胎土は石英・砂粒が含まれ粗で，焼成は良好である。調整は外面にヘラナデ，内面にヘラナデ及び指ナデが施されている。

4は土師器小型鉢で，覆土中面から出土した。復元口径9.4cm，底径2.8cm，器高4.6cmを測る。色調は赤褐色を呈し，胎土は赤色スコリア・砂粒を少量含み密で，焼成は普通である。調整は内外面ともにヘラナデが施されている。

5は土師器甕で，覆土上・中面から出土したものが接合した。復元底径5.7cm，残存器高9.6cmを測る。色調は外面が橙色，内面がにぶい橙色を呈し，内外面ともに煤が付着している。胎土は赤色スコリア・砂粒・小礫を少量含み粗で，焼成は良好である。調整は内外面ともにヘラナデが施されている。内面には2条の輪積痕が認められる。

SI-175 (第131図，図版96・280)

遺跡西部中央の18P-22区に位置する。本跡西側は調査実施前にすでに削平されており，約半分の検出に留まった。平面形は隅丸方形を呈し，長軸を主軸とすると主軸方位はN-51°-Wをとる。規模は5.5m×(3.0m)，確認面から床面までの深さは0.47mを測る。主柱穴は4本と思われるが，検出できたのは2本のみである。炉は北壁寄りの中央部に位置する。南壁の中央部には方形の貯蔵穴と思われるピットが見られ



第131図 SI-175

る。遺物は炉と貯蔵穴の中間付近に集中するが、遺物量は少なく、図示できたのは1点のみである。

1は土師器高杯の脚部片で、覆土下面から出土した。復元裾径13.6cm、残存器高8.5cmを測る。色調は内外面ともに明赤褐色を呈している。胎土は石英・赤色スコリア・砂粒をやや多めに含み密で、焼成は良好である。調整は外面にヘラケズリ後にヘラナデ、内面にヘラナデが施されている。

第3節 古墳時代後期の竪穴住居跡

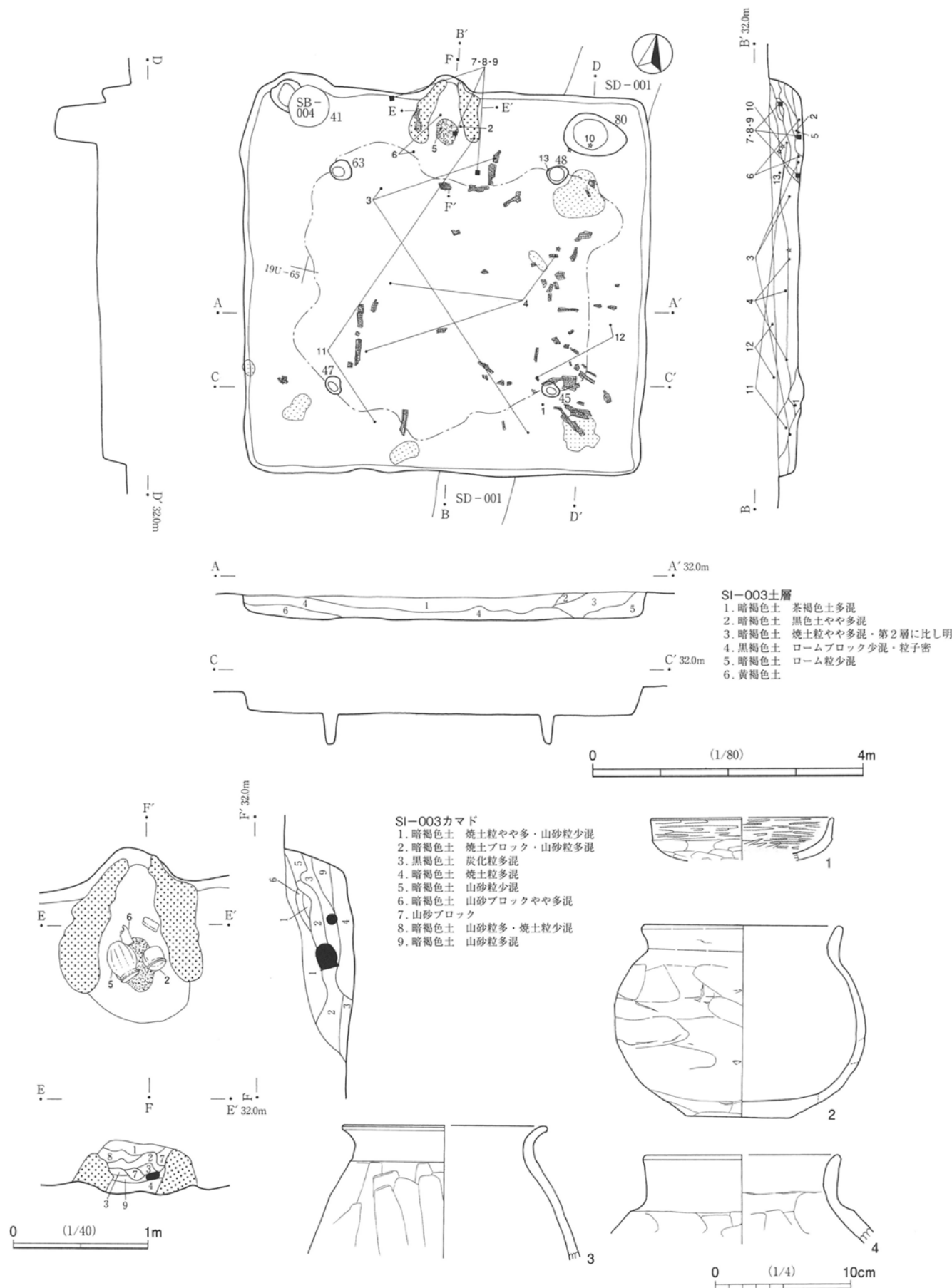
古墳時代後期に属すると思われる竪穴住居跡は、SI-003・007・012・017・026・070・076・078・145・146・177の11軒である。

SI-003（第132・133図、図版17・239・310・319）

遺跡南部南寄りの19U-55区に位置し、平面形は方形を呈す。規模は5.8m×6.0m、床面積は32.00㎡、主柱穴間面積は10.56㎡、深さは0.45mを測り、主軸方位はN-17°-Wをとる。北西側コーナー部分でSB-004に、東壁側を南北にSD-001に切られている。北壁中央部にカマドをもち、主柱穴は4本、北東寄りに楕円形の貯蔵穴をもつ。床面には、主柱穴間を中心として、住居内に硬化面が広く見られる。炭化材及び焼土が南東部付近を中心にして、カマド周辺及び南西の主柱穴付近にも散在しており、本跡は焼失住居と思われる。遺物は、覆土中層から下層にかけて散在するが、覆土上層には奈良・平安時代の遺物が混入しており、周辺の遺構状況を見ると、本遺構が廃棄されたあと、やや窪んだ地形として存在していたために、遺物の遺存状況も良かったと考えられる。カマドは全体的に残りが良く、支脚が火床部奥、右方向に倒れた状況で出土した。また、ほぼ完形の土師器甕が2点（2、5）、カマド内中央部付近より出土した。遺物で図示できたのは13点である。

1は土師器杯片で、南東コーナー部分の覆土下面から出土した。遺存度は10%で、復元口径13.6cm、残存器高3.2cmを測る。色調は外面口縁部が黒褐色で黒色処理が施され、外面体部が褐色、内面が黒褐色を呈し、黒色処理が施されている。胎土は砂粒が少量含まれ密で、焼成は普通である。調整は外面体部にヘラケズリ、外面口縁部にミガキ、内面全体にミガキが施されている。

2～6は土師器甕である。2はカマド内出土で、ほぼ完形で胴部は丸味を帯びる。口縁部及び底部は歪みが大きく楕円形を呈し、器面全体に二次焼成を受け内外面ともに荒れており、煤が付着している。口径15.0cm、最大径は胴部中位にあり18.7cm、底径7.8cm、器高14.2cmを測る。色調は内外面ともに暗赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多量に含み、焼成は不良である。調整は外面胴部にヘラケズリ後軽いナデが施され、粘土紐巻上げ痕が残る。内面胴部にはヨコナデが施されている。3は覆土中面から下面にかけて出土したものが接合した、口縁部が外反する長胴気味の甕の口縁部片である。遺存度は10%で、復元口径15.2cm、残存器高9.7cmを測る。色調は内外面ともに暗褐色を呈し、外面には部分的に煤が付着している。胎土は砂粒をやや多く含み、焼成は普通である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面胴部にヘラケズリ、内面胴部にナデが施されている。4は覆土中面から出土した、口縁部が直に立ち上がる甕の口縁部片である。遺存度は10%で、復元口径14.6cm、残存器高6.5cmを測る。色調は外面赤褐色、内面にぶい褐色、一部黒褐色を呈し、胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は普通である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面胴部にヘラケズリ、内面胴部にヘラナデが施されている。5はカマド内出土の完形の長胴甕で、若干の歪みがある。口径15.2cm、最大径は胴部中位にあり21.2cm、底径7.3cm、器高27.9cmを測る。色調は内外面ともに暗赤褐色を呈し、内面中位には煤が部分的に付着している。胎土には細砂粒を多量に含み、焼成は良好



第132図 SI-003 (1)

われる。カマドは全体的に残りが良く、カマドの焚口部から50cmのところ、火床部から掻き出したと思われる焼土の広がり確認できた。北東壁近くの床面から円錐形に近い形状の支脚を検出した。出土遺物で図示できたのは19点で、出土状況は3の土師器甕を除いて、床面から10cm以内で出土している。

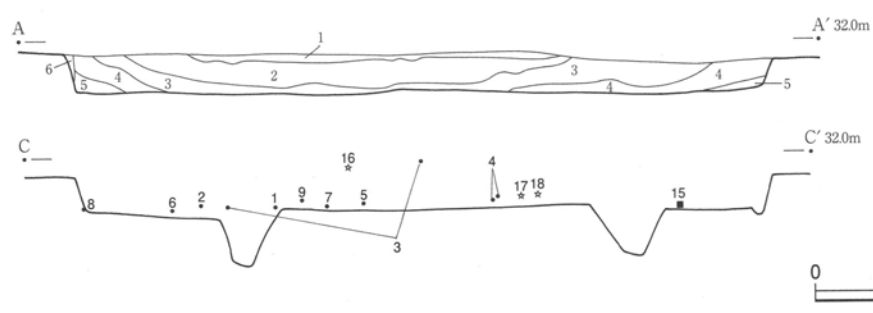
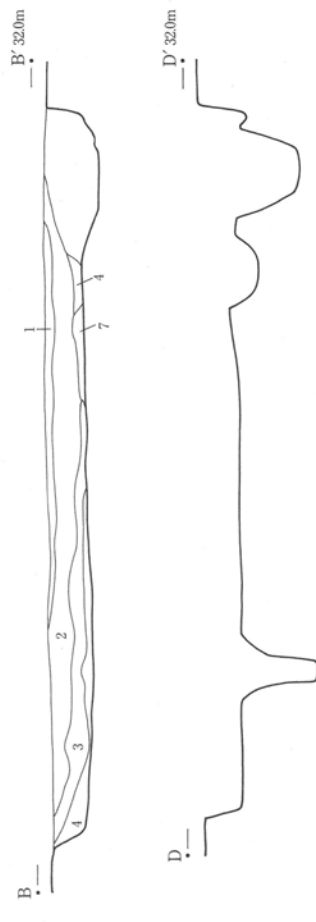
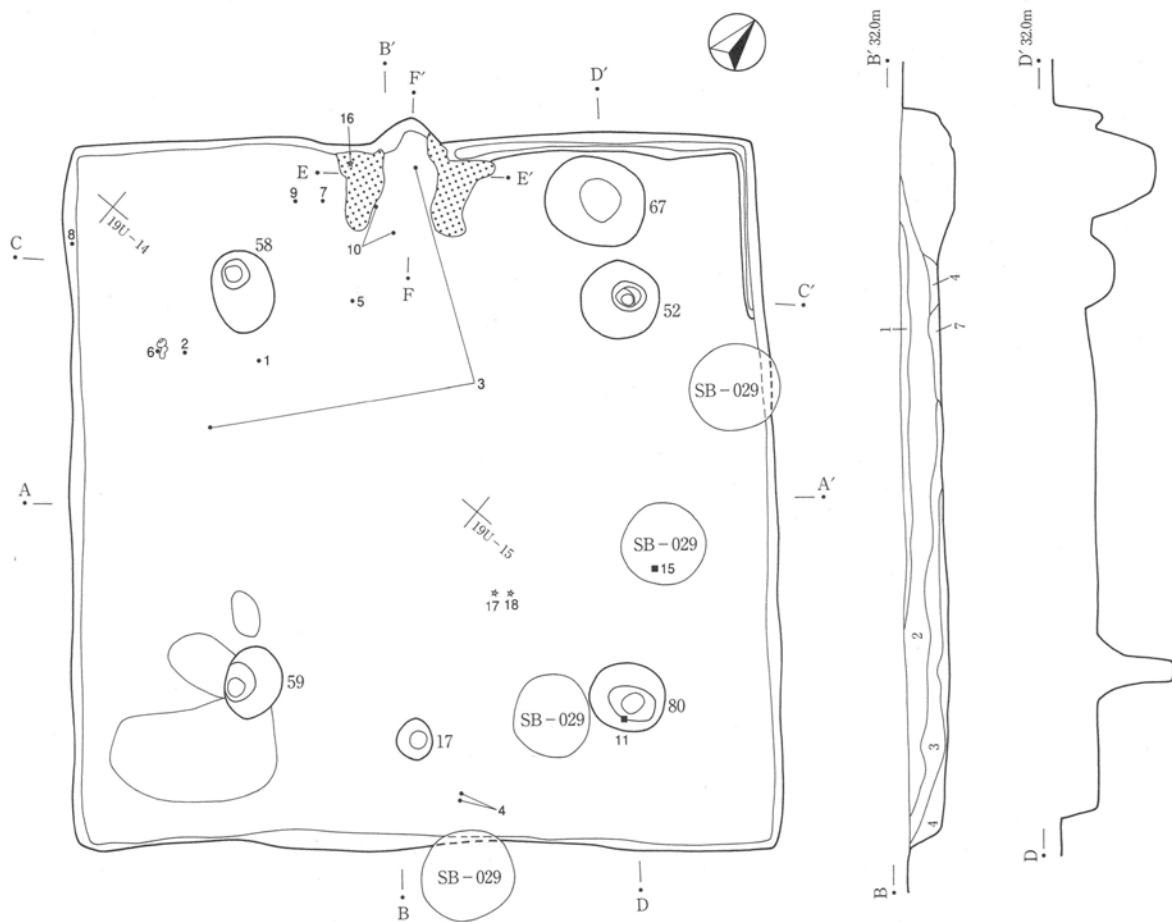
1・2は土師器杯で、いずれも西側柱穴周辺の床面直上から出土した。1は口縁部が「く」の字に内湾し、底部はやや丸味を帯びる完形品で、全面に黒色処理が施されている。口径12.3cm、器高4.3cm、最大径は口唇部にあり13.2cmを測る。色調は外面が暗赤褐色、二次焼成を受け磨耗が著しく部分的に黒褐色、内面が暗褐色を呈している。胎土は砂粒が少量含まれ密で、焼成は良好である。調整は外面にヘラケズリ後ナデ、内面にミガキが施されている。2は口縁部が緩やかに内湾し、底部は丸底で遺存度は50%である。復元口径11.6cm、器高6.4cmを測る。色調は全面に赤彩が施されており、外面が明褐色、内面が全体的に暗赤褐色であるが、二次焼成を受け磨耗が著しく部分的に黒褐色を呈している。胎土は砂粒が少量含まれ密で、焼成は良好である。調整は外面にヘラケズリ後ナデ、内面にミガキが施されている。

3・5は土師器甕である。3はカマド内出土のものと床面直上から出土したものが接合した。口縁部が「く」の字に外反し、胴部はやや丸味を帯び遺存度は30%である。復元口径19.5cm、残存器高25.5cm、最大径は胴部やや上位にあり26.2cmを測る。色調は外面が暗赤褐色で、二次焼成を受けており部分的に黒褐色、内面が暗褐色を呈している。胎土は砂粒をやや多めに含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面上半部に縦方向のヘラケズリ、下半部に横方向のヘラケズリ、内面に横方向のナデが施されている。5はカマド焚き口部付近の床面直上から出土した。口縁部がやや大きく外反する長胴の甕で遺存度は80%である。全体的に歪みがあり、口縁部と底部の中心線が一致しない。口径20.3cm、底径7.9cm、器高34.0cm、最大径は胴部中位にあり25.3cmを測る。色調は内外面ともに赤褐色を呈し、胎土は砂粒を多量に含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部に横方向のナデ、外面に縦方向、中央部は横方向のヘラケズリ、内面上半部に縦方向のナデ、下半部に横方向のナデが施されている。

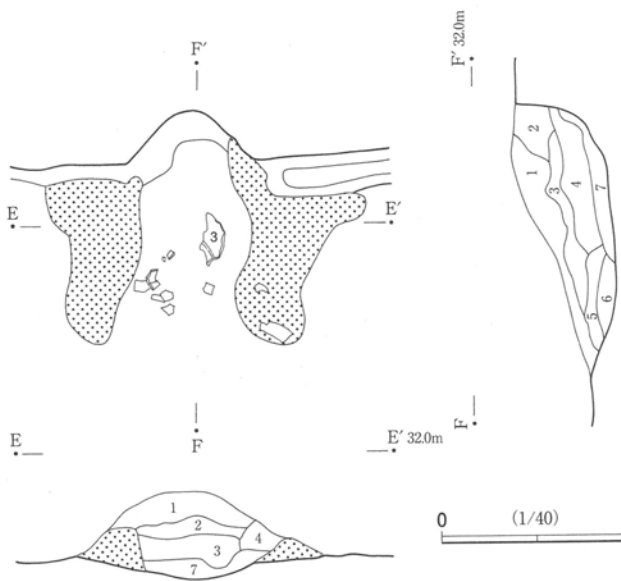
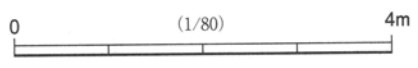
4は土師器高杯脚部片で、出入口用ピットと南壁の間の覆土下面から出土した。遺存度は10%で、残存器高7.8cmを測り、色調は内外面ともに明褐色を呈している。胎土は赤色スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は外面にハケメとナデ、内面にナデが施されている。

6は高台部を欠損する遺存度10%の須恵器甕で、北西側の支柱穴周辺の床面から出土した。復元口径14.4cm、残存器高15.8cm、くびれ部径3.1cmを測る。色調は内外面ともに全体的には灰褐色を呈しているが、施釉の部分は青灰色・緑色・肌色である。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は外面底部周辺に回転ヘラケズリ、その他の部分にロクロを使用したハケメ、内面にロクロを使用した連続刺突が施されている。

7～10は手捏土器である。7はカマド左袖近くの覆土下面から出土した。遺存度は30%で、復元口径7.6cm、復元底径6.2cm、残存器高2.6cmを測る。色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色を呈す。胎土は砂粒が少量含まれ密で、焼成は良好である。調整は全面ナデが施され、底部外面は無調整である。8は西壁コーナー近くの壁直下の床面から出土した。遺存度は30%で、復元口径7.8cm、復元底径6.8cm、残存器高2.1cmを測る。色調は内外面ともに黄褐色を呈す。胎土は砂粒が少量含まれ密で、焼成は良好である。調整は全面ナデが施され、一部粘土の貼付痕が見られ、底部外面は無調整である。9はカマド左袖近くの覆土下面から出土した。遺存度は30%で、復元口径5.3cm、復元底径4.6cm、残存器高2.0cmを測る。色調は内外面ともに暗褐色を呈す。胎土は砂粒が少量含まれ密で、焼成は良好である。調整は全面ナデが施され、一部粘土の

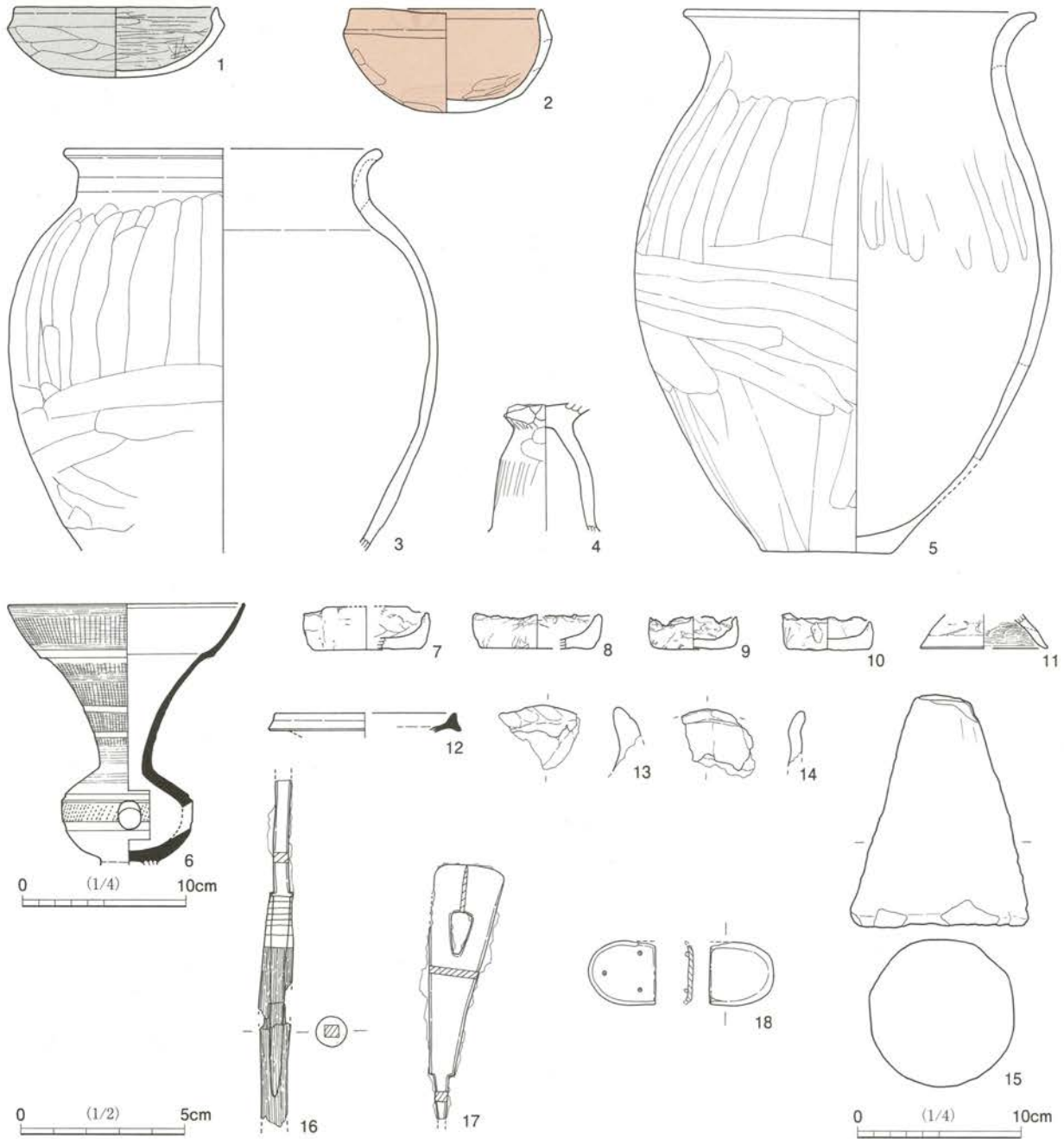


- SI-007土層
- 1. 暗褐色土 ローム粒少混
 - 2. 暗褐色土
 - 3. 黒褐色土 ロームブロック少混
 - 4. 褐色土 黒色土少混・粒子密
 - 5. 暗褐色土 ローム粒少混
 - 6. 明褐色土 ローム主体
 - 7. 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック多混



- SI-007カマド
- 1. 暗褐色土 焼土ブロック混・黄褐色山砂粒・焼土粒多混
 - 2. 暗褐色土
 - 3. 赤褐色土 焼土粒・焼土ブロック
 - 4. 暗褐色土
 - 5. 赤褐色土 ロームブロック混
 - 6. 焼土
 - 7. 暗赤褐色土 ロームブロック多混・灰・炭粒混

第134図 SI-007 (1)



第135図 SI-007 (2)

貼付痕が見られ、底部外面は無調整で線刻がある。10はカマド内下面から出土した完形品である。口径5.3cm、復元底径4.9cm、器高2.3cmを測る。色調は内外面ともに明褐色を呈す。胎土は砂粒が少量含まれ密で、焼成は良好である。調整は全面ナデが施され、一部粘土の貼付痕が見られ、底部外面は無調整である。

11はミニチュア土器で、南東側主柱穴覆土内から出土した。底径7.8cmで、色調は内外面にぶい褐色を呈し、調整は外面にナデが施されている。

12は須恵器長頸壺の口縁部片で、覆土一括で取り上げた。復元口径11.0cm、残存器高1.2cmを測る。色調は内外面ともに灰褐色を呈し、自然釉がかかり施釉部分は緑色である。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は全面にロクロナデが施されている。

13・14は焼成粘土で、いずれも覆土一括で取り上げた。

15は土製支脚で、床面直上から出土した。底径11.0cm、高14.0cmである。

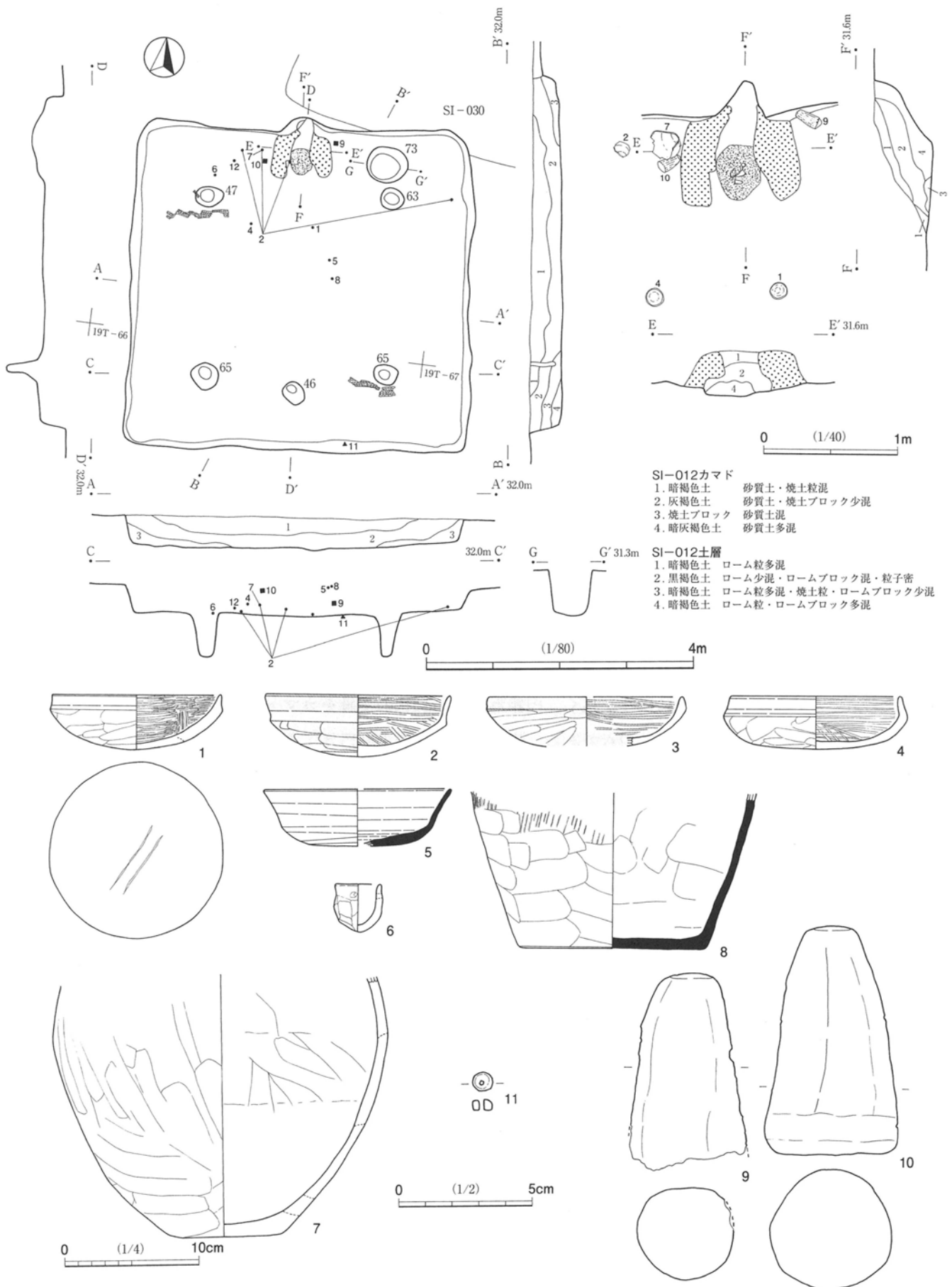
16・17は鉄鏃である。16はカマド左袖の床面から出土した。17は南東側覆土下面から出土した。16は棒状部から茎にかけての破片である。篋被部分の方形（棘状）突起は、現状でも遺存がよく、肉眼でみることができる。茎付近の篋の遺存がよく、茎は篋に全面的に覆われている。篋の上部は木皮で何重にも巻かれている。篋の材質は竹と思われ、一部表皮が剥がれている。17は方頭斧箭式の鉄鏃である。棒状部のない広身の無頸鏃であるが、長い刃部は刃部と棒状部（頸部）が一体化したものとみた方がよいかもしれない。茎は刃部から直角の両側に作り出され、茎尻は欠損する。逆三角形の透かしが、刃部中央から刃先寄りにみられる。透かしから刃先側は薄く、茎側はやや厚い作りである。数片に割れた破片を接合したため、茎が刃部の中軸線に対してやや曲がっているが、本来は一直線状になるものである。遺存する長さは7.8cm、刃部の長さは6.45cm、最大幅は2.1cmである。刃部の厚さは透かしの図上部側で1mm強、茎寄り茎の厚さと変わらない。茎の厚さは3mmである。透かしの長さは1.3cm、最大幅は6mmである。透かしから刃先までの長さは1.45cm、関部分までの長さは3.7cmである。

18は帯先金具である。裏に3鋸を配して帯に装着したもので、馬具の革帯等に使用されたものと思われる。覆土一括で取り上げた。

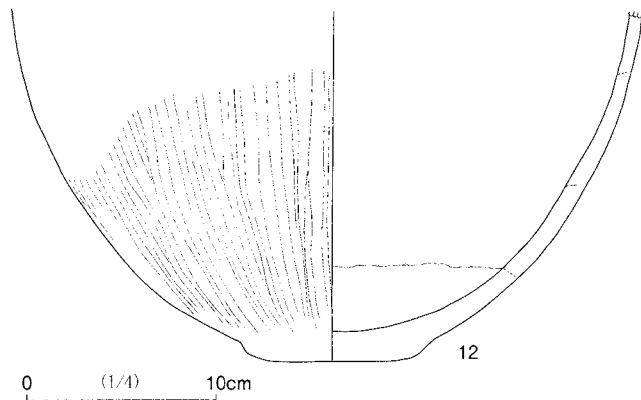
SI-012（第136・137図、図版21・242・315）

遺跡南部中央の19T-56区に位置し、平面形は方形を呈す。規模は4.9m×5.1m、床面積は22.68㎡、支柱穴間面積は7.29㎡、深さは0.45mを測り、主軸方位はN-6°-Wをとる。北東コーナー部分をSI-030に切られている。北壁中央部にカマドをもち、支柱穴は4本、北東寄りのカマド右袖脇に円形の貯蔵穴、南壁付近に出入口施設用のやや深めの小穴をもつ。床面は平らで、とくに硬化面は見られず、覆土は自然堆積と思われる。カマドは全体的に残りが良く、円錐形に近い形状の支脚をカマド両袖外部から1点ずつ検出した。出土遺物で図示できたのは12点である。出土状況は5の土師器杯・8の須恵器甕・12の土師器甕を除いて、床面直上からの出土であり、覆土の観察から見て、5・8・12は周辺の遺構からの流れ込みと思われる。

1～4は土師器杯である。1はカマド焼き口部近くで正位の状態で出土した。口縁部が直に立ち上がり、底部は丸底の完形品で、外縁の一部に赤彩がわずかに残っている。口径12.6cm、器高4.1cm、最大径は口唇部にあり12.8cmを測る。色調は外面が褐色、二次焼成を受け磨耗が著しく部分的に黒褐色、内面が暗褐色を呈している。胎土は雲母・砂粒が少量含まれ密で、焼成は良好である。内外面ともに器面が荒れている部分が見られ、調整の遺存状態はよくない。外面にヘラケズリ後ナデ、内面にナデ及びミガキが施されているようである。底部には平行した二条のヘラ書き（5cm～6cm）の線刻が見られる。2はカマド左袖外部出土で、口縁部が外反気味に立ち上がり、底部は丸底の完形品で、全面に黒色処理が施されている。口径13.6cm、器高4.6cmを測る。色調は内外面ともに暗赤褐色を呈している。胎土は雲母・スコリア・砂粒が少量含まれ密で、焼成は良好である。調整は外面口縁部の内外にヨコナデ、体部にヘラケズリ後軽いミガキ、内面にミガキが施されている。3は覆土一括で取り上げたものが接合した。口縁部が直に立ち上がり、底部は欠損するが丸底と思われる。遺存度は10%で、復元口径14.4cm、残存器高3.7cmを測る。色調は内外面ともに黒色処理が施されて、内外面ともに黒褐色から暗赤褐色を呈している。胎土は砂粒が少量含まれ密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面体部にヘラケズリ後ミガキ、内面にミガキが施されている。4はカマド焼き口部近くではほぼ正位の状態で出土した。口縁部がやや内湾気味に



第136図 SI-012 (1)



第137図 SI-012 (2)

立ち上がり、底部は丸底の完形品である。口径12.6cm、器高3.9cmを測る。色調は外面が赤褐色、内面が明褐色で一部黒褐色を呈している。胎土は雲母・スコリア・砂粒が少量含まれ密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面体部にヘラケズリ後ミガキ、内面にヘラミガキが施されている。

5は遺存度40%の須恵器杯である。遺構確認面で出土し、一括で取り上げた。ロクロ調整が施され、底部の一部が欠損する。復元口径13.8cm、

復元底径7.4cm、器高4.3cmを測る。色調は外面が灰褐色、内面が暗灰黄色を呈している。胎土は雲母・スコリア・砂粒がやや多めに含まれ粗で、焼成は良好である。調整は内外面ともにロクロナデ、底部外面には全面に手持ちヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。

6は完形の小型土器で、北西コーナー部分の床面直上から出土した。口唇部には外側から内側への穿孔が2か所ある。口径3.4cm、器高3.6cm、最大径は胴部中位にあり3.6cmを測る。色調は内外面ともに褐色を呈し、外面の一部が黒褐色である。胎土は砂粒が少量含まれ密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面にヘラケズリ、内面にナデが施されている。

7は遺存度60%の土師器甕で、胴部から底部にかけて遺存し、カマド左袖基部の床面直上から出土した。底径8.4cm、残存器高19.4cm、胴部最大径は中位にあり24.9cmを測る。色調は内外面ともに暗褐色を呈し、二次焼成を受け内面が一部黒褐色である。胎土はやや大きめの砂粒が少量含まれ密で、焼成は良好である。調整は外面にヘラケズリ、内面にナデが施されている。

8は遺存度20%の須恵器甕の底部片で、遺構確認面で出土し一括で取り上げた。復元口径14.0cm、残存器高11.6cmを測る。色調は外面が褐灰色、内面が黒褐色を呈している。胎土は砂粒が少量含まれ密で、焼成は良好である。調整は外面にヘラケズリと叩き、内面にヘラナデ、底部外面には全面にヘラケズリが施されている。

9・10は土製支脚である。9はカマド右袖側の北壁直下の床面から出土した。長さ15.0cm、計測部位径7.1cmを測る。10はカマド左袖中央の床面直上から出土した。長さ17.3cm、計測部位径8.5cmを測る。

11は土製の臼玉で、南壁直下の床面直上から出土した。長径0.8cm、短径0.7cm、厚0.4cmを測る。

12は遺存度20%の土師器甕片で、胴部から底部にかけて遺存する。カマド左袖周辺で出土したが、付近の出土遺物のレベルよりやや浮いた状態であった。底部は張り出し底部で、胴部は丸味を帯びると思われる。復元底径8.0cm、残存器高18.5cmを測る。色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は外面に縦方向のヘラミガキ、内面にナデが施される。

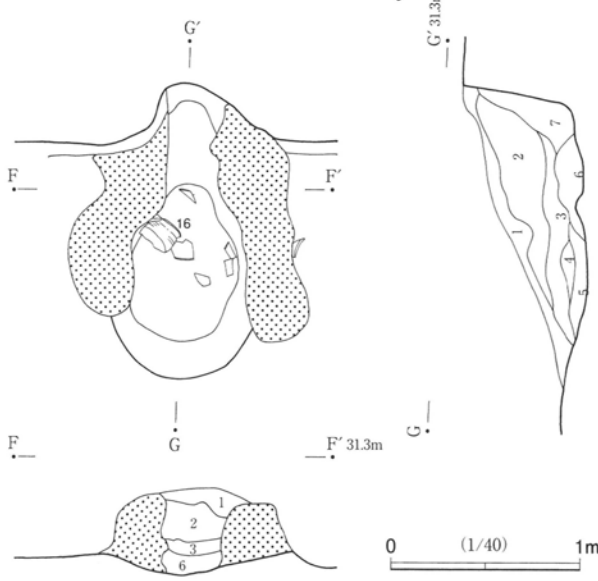
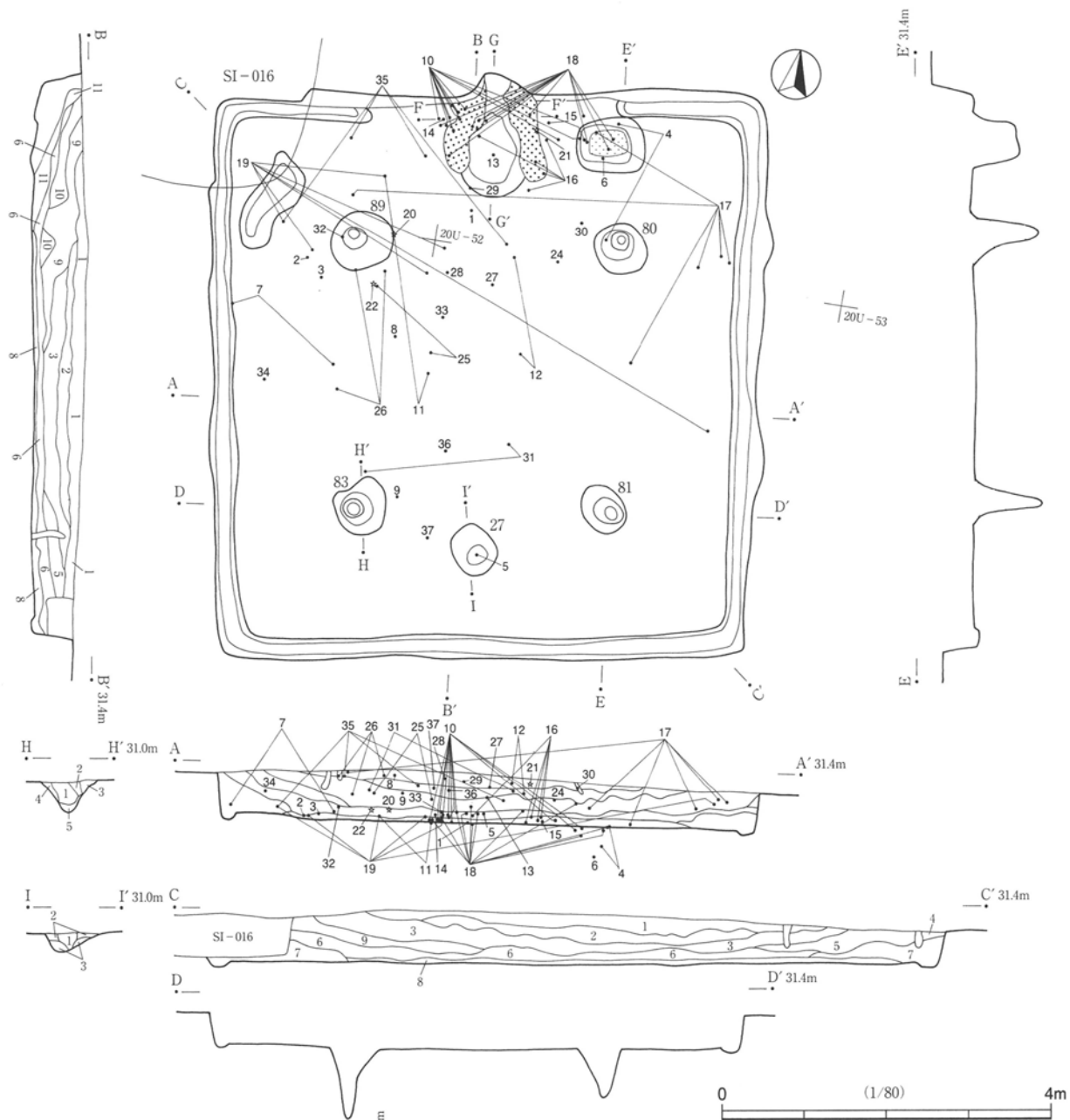
SI-017 (第138~140図, 図版23・246・247・311)

遺跡南部南東寄りの20U-52区に位置し、平面形は方形を呈す。規模は6.9m×6.6m、床面積は43.49㎡、支柱穴間面積は10.57㎡、深さは0.55mを測り、主軸方位はN-8°-Wをとる。北西コーナー部分をSI-016に切られている。北壁中央部にカマドをもち、支柱穴は4本、カマド右袖脇に隅丸長方形の貯蔵穴、南壁付近に出入口施設用のやや深めの小穴をもつ。貯蔵穴覆土下面には固く締まった焼土が集中していた。壁

溝はカマド両袖周辺部を除き3～5cmの深さで巡る。床面は平らで、特に硬化面は見られず、覆土は自然堆積と思われる。カマドは全体的に残りが良く、周辺に多くの土器が散在していた。また、カマド袖部の補強材として、土器片が多数混入されていた。出土遺物で図示できたのは37点で、本遺跡の同時期の遺構では比較的多いが、遺物番号23番以降は本遺構に伴わない流れ込みと思われる遺物である。覆土の観察からすると、本遺構廃棄後も、暫くの間大きな窪みとして残っていた可能性が高い。

1～8は土師器杯である。1はカマド焼き口部近くの床面から出土した。口縁部を一部欠損する以外はほぼ完形に近い。歪みが激しく口縁部は波打ち、平面形は楕円形を呈している。口縁部の長径は12.7cm、底径4.1cm、器高4.8cmを測る。色調は外面がにぶい赤褐色、内面が褐灰色を呈し、部分的に煤が付着している。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面体部にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。底部外面は手持ちヘラケズリが全面に施され、切り離し技法は不明である。2は北西側主柱穴周辺の床面から出土した。遺存度は10%で、復元口径12.2cm、復元底径2.2cm、器高4.9cmを測る。色調は外面が灰褐色、内面が褐灰色を呈す。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面体部にヘラケズリ、内面にヘラナデ、底部外面に手持ちヘラケズリが全面に施されている。3は2に近接した床面直上から出土した。遺存度は20%で底部を欠損する。復元口径11.6cm、残存器高4.7cmを測る。色調は外面が灰褐色で一部黒褐色、内面が灰赤色を呈す。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口唇部にナデ、外面上半部にヘラケズリ・下半部にミガキ、内面上半部にヘラナデ・下半部にミガキが施されている。4は貯蔵穴覆土上面出土のもの、北東側主柱穴覆土中面出土のものが接合した。遺存度は20%で、復元口径12.0cm、復元底径3.5cm、器高5.0cmを測る。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈す。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部にロクロナデ、外面にヘラケズリ、内面にナデが施されている。5は南壁側の出入り口施設のある覆土下面から出土した。遺存度は10%で、復元口径15.2cm、復元底径5.6cm、器高5.5cmを測る。色調は外面が明赤褐色、内面がにぶい褐色を呈す。胎土はスコリア・砂粒を少量含み普通で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面にナデ後ヘラケズリ、内面にナデ、底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。6は貯蔵穴底面から出土した。底部は丸底気味でやや小さく、体部中位には一段の稜を持ち、口縁部は緩やかに外反する。復元口径13.6cm、復元底径3.0cm、器高4.0cmを測る。色調は外面が明赤褐色、内面がにぶい赤褐色を呈す。胎土・焼成ともに良好である。調整は口縁部にロクロナデ、外面にヘラケズリ、内面にヘラナデ、底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。7は西壁側の床面直上から出土したものが接合した。底部は丸底気味でやや小さく、口縁部は「く」の字状に内湾する。遺存度は20%で、復元口径12.8cm、復元底径4.0cm、器高3.0cmを測る。色調は内外面ともににぶい褐色を呈す。胎土は砂粒が少量含まれ密で、焼成は良好である。調整は口縁部にロクロナデ、外面にヘラケズリ、内面にナデ、一部ミガキ、底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。8は本跡中央やや西寄りの覆土上面から出土した。遺存度は10%で底部は欠損しており不明であるが、体部は下位に一段の稜を持ち、口縁部は緩やかに外反する。復元口径12.6cm、残存器高3.6cmを測る。色調は外面がにぶい褐色、内面がにぶい赤褐色を呈す。胎土はスコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は内外面ともにロクロナデ、底部周縁部にヘラケズリが施されている。

9は土師器高杯の脚部片で、南西側主柱穴に近接する覆土中面から出土した。遺存度は50%で、残存器高5.6cmを測り、色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈す。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好である。



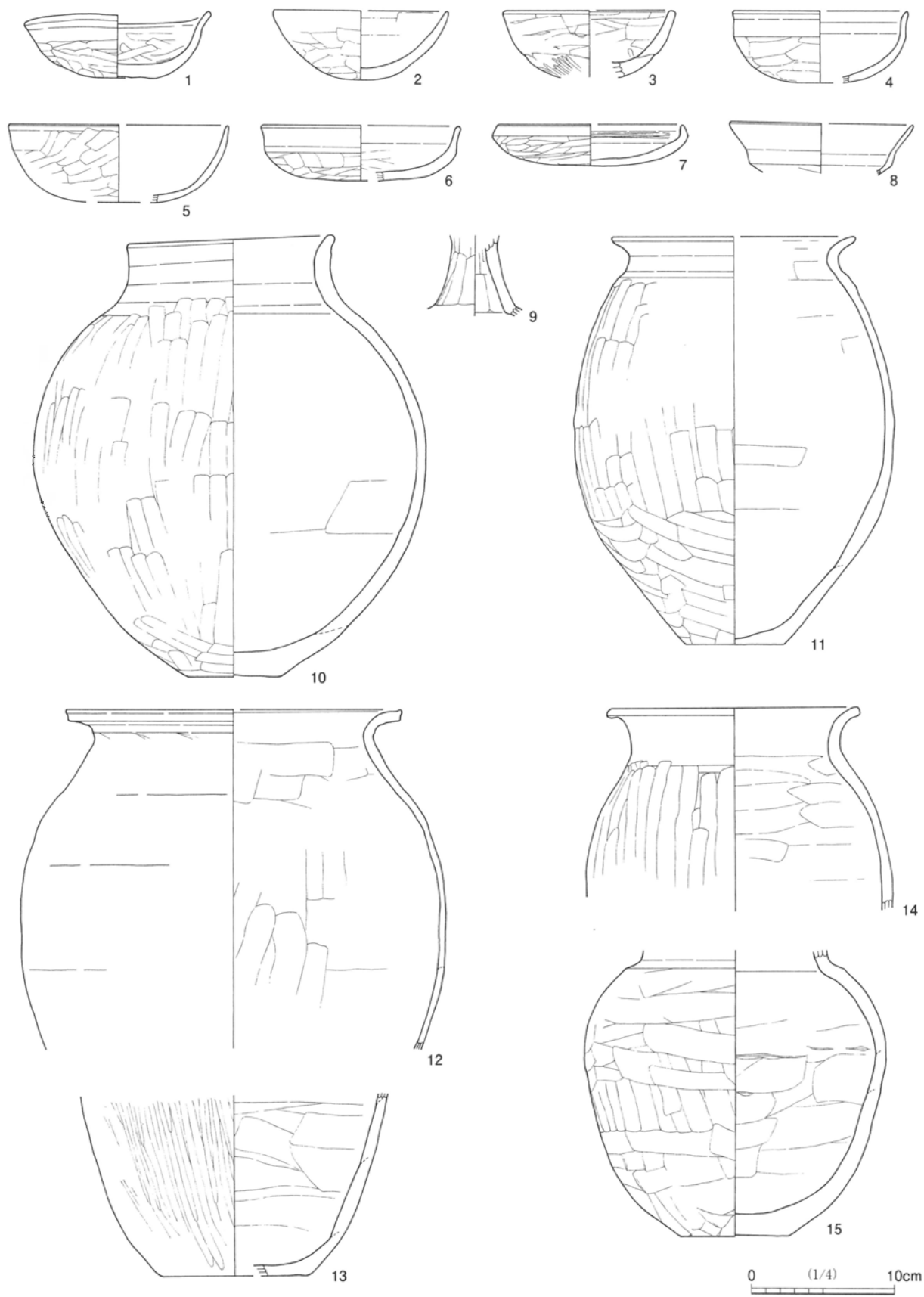
- SI-017土層**
- 1. 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒・山砂粒少混
 - 2. 暗褐色土 焼土粒・山砂ブロック多混
 - 3. 暗褐色土 ロームブロック・山砂粒少・焼土粒極少混
 - 4. 褐色土 ソフトロームブロックやや多混
 - 5. 暗褐色土 ロームブロック・山砂粒少混
 - 6. 黒褐色土 ローム粒やや多混
 - 7. 黄褐色土 ローム粒多混
 - 8. 暗褐色土 ロームブロックやや多混
 - 9. 暗褐色土 ロームブロック・山砂粒少・焼土粒多混
 - 10. 暗褐色土 ロームブロック少・焼土粒・山砂粒多混
 - 11. 褐色土 焼土粒・山砂粒少混
- SI-017ピットH**
- 1. 黒褐色土 ローム粒多・ロームブロックやや多混
 - 2. 黒褐色土 褐色土多・焼土ブロック少混
 - 3. 黒褐色土 ローム粒やや多混
 - 4. 黒褐色土 ローム粒多・ロームブロックやや多混
 - 5. 暗褐色土 ローム粒少混
- SI-017カマド**
- 1. 暗褐色土 焼土粒・山砂粒多混
 - 2. 山砂 焼土粒少混
 - 3. 山砂 焼土粒・炭化粒多混
 - 4. 山砂 ロームブロック・焼土粒・炭化粒多混
 - 5. 焼土
 - 6. 暗褐色土 ロームブロック少混
 - 7. 暗褐色土 山砂粒少混
- SI-017ピットI**
- 1. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多混
 - 2. 黒褐色土 ロームブロックやや多混
 - 3. ロームブロック

第138図 SI-017 (1)

調整は外面脚部にヘラケズリ、裾部にナデ、内面にヘラナデが施されている。

10～16は土師器甕である。10はカマド周辺部の床面及び覆土下面から出土したものが接合した。遺存度は90%である。底部は厚く小さめで、胴部は若干縦長で丸味を帯び、口縁部は外反せずほぼ直に立ち上がる。口径14.2cm、底径6.4cm、器高30.7cm、最大径は胴部中位にあり27.4cmを測る。色調は外面がにぶい赤褐色で一部褐灰色・黒褐色、内面が褐灰色を呈す。胎土は雲母・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部にナデ、外面にヘラケズリ、内面にヘラナデ、底部外面にヘラケズリが施されている。11は床面直上から出土したもので、接合関係はやや遠い。いわゆる長胴の甕で、底部はやや小さめで、口縁部は「く」の字に鋭く外反する。外面は二次焼成を受け、部分的に煤が付着している。遺存度は60%で、復元口径17.0cm、復元底径7.0cm、器高28.4cm、最大径は胴部中位にあり22.4cmを測る。色調は外面がにぶい褐色で一部褐灰色、内面がにぶい黄褐色を呈す。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面にヘラナデ後ヘラケズリ、内面にヘラナデ、底部外面に手持ちヘラケズリが全面に施されている。12は覆土上面から出土し、胴下半部から底部にかけて欠損する。胴部はあまり肩が張らず、口縁部は「く」の字に鋭く外反し、口唇部はやや受け口状を呈す。復元口径23.2cm、残存器高23.6cm、最大径は胴部中位にあり29.6cmを測る。色調は外面がにぶい赤褐色、内面が灰褐色を呈す。胎土は雲母・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は内外面ともにヘラナデが施されている。13はカマド確認面から出土し、遺存度は20%で、底部の一部から胴下半部にかけて遺存する。復元底径10.0cm、残存器高12.5cmを測る。色調は外面が灰褐色で一部にぶい赤褐色、内面がにぶい褐色を呈す。胎土は石英・雲母・砂粒を少量含み粗で、焼成は良好である。調整は外面にヘラナデ後ミガキ、内面にヘラナデが施されている。底部外面には木葉痕が認められる。14はカマド左袖部の覆土下面から出土し、遺存度は50%で胴下半部から底部にかけて欠損する。復元口径15.3cm、残存器高28.4cm、最大径は胴部中位にあり21.3cmを測る。色調は内外面ともににぶい褐色を呈す。胎土は雲母・スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。15はカマド右袖部の床面から出土し、口縁部を欠損する。底径7.6cm、残存器高19.9cm、胴部最大径はやや上位にあり21.0cmを測る。色調は外面が黒褐色で、内面が褐灰色を呈す。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は外面にヘラナデ後ヘラケズリ、内面にヘラナデ、底部外面に手持ちヘラケズリが全面に施されている。16はカマド火床部出土のものと、カマド外部周辺出土のものが接合した、やや小型の甕である。遺存度は70%で、口径14.8cm、復元底径8.1cm、器高19.5cm、最大径は胴部中位にあり18.8cmを測る。色調は外面がにぶい赤褐色で部分的に煤が付着し黒褐色、内面が灰褐色を呈す。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部にヘラナデ、外面にヘラナデ後ヘラケズリ、内面にヘラナデ、底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。

17～19は土師器甕である。17は接合関係で見ると、出土レベル及び出土範囲も広範囲のものが接合した。遺存度は30%で、復元口径30.0cm、復元底孔径9.4cm、器高20.0cmを測る。色調は外面がにぶい橙色で、二次焼成を受け部分的に煤が付着し黒色、内面がにぶい赤褐色を呈す。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面にヘラナデ後ヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。18はカマド及び貯蔵穴周辺部の覆土下面から出土したものが接合した。遺存度は60%で、復元口径29.8cm、復元底孔径9.3cm、器高24.5cmを測る。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、二次焼成を受け部分的に煤が付着し黒褐色である。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外



第139图 SI-017 (2)

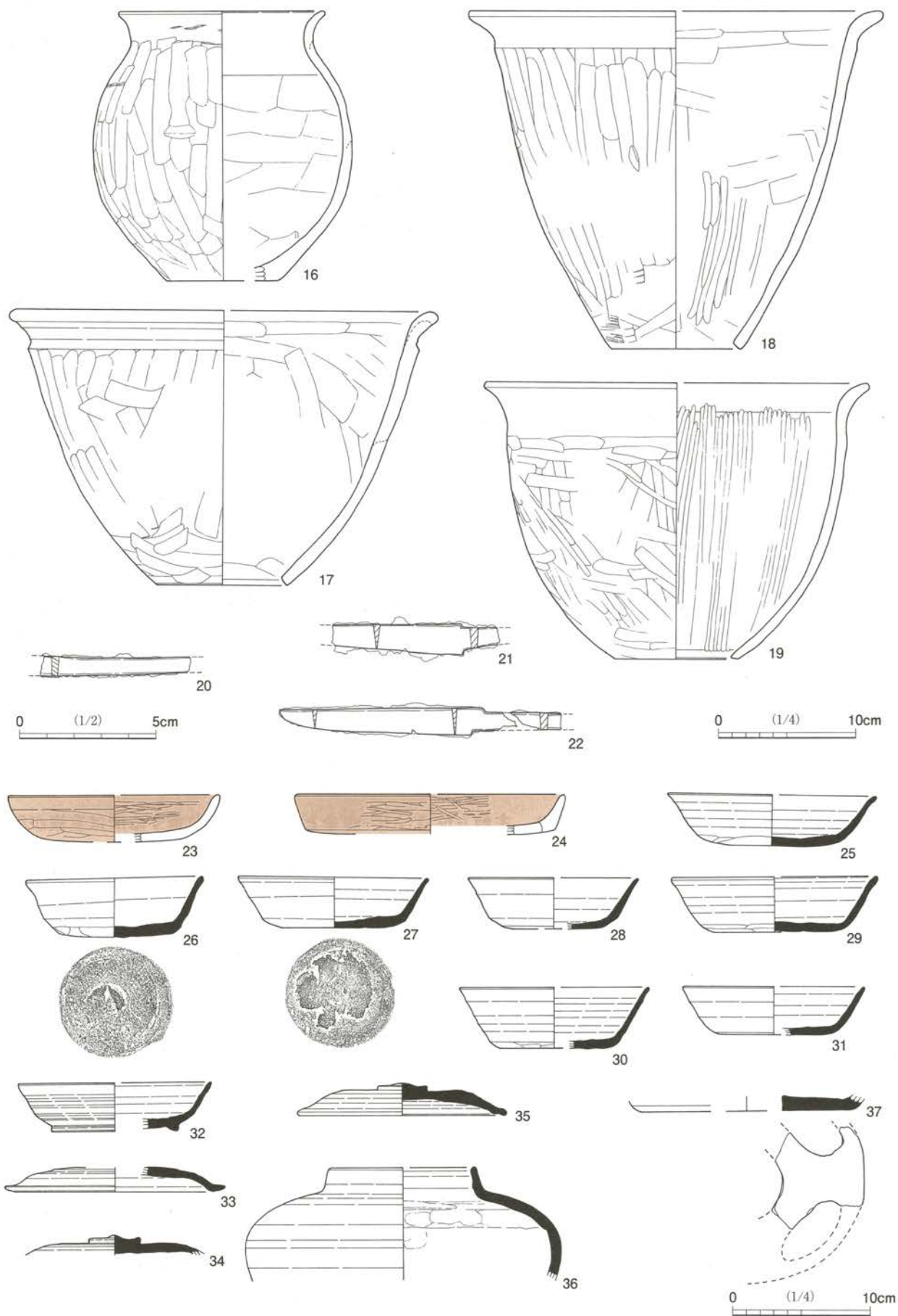
にヨコナデ，外面にヘラケズリ，下端部にハケメ，内面上半部にヘラナデ，下半部にミガキが施されている。19は接合関係で見ると，出土レベル及び出土範囲も広範囲のものが接合した。遺存度は60%で，復元口径28.0cm，復元底径9.0cm，器高20.0cmを測る。色調は外面がにぶい褐色，二次焼成を受け一部が明赤褐色・暗灰色，内面がにぶい赤褐色を呈す。胎土は砂粒を少量含み密で，焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ，外面にナデ後ヘラケズリ，内面にヘラナデ後ヘラミガキが施されている。

20～22は鉄製品で，刀子である。20は茎部分の破片である。北西側の支柱穴に近接する覆土下面から出土した。幅（断面実測部位）7mm強，背厚（断面実測部位）3mm弱を測る。21はカマドに近接する覆土上面から出土した。刀先が欠損する刀身から茎部にかけての破片で，残存長6.1cmを測る。22は北西側の支柱穴に近接する覆土下面から出土した。茎部の一部を欠損する以外はほぼ完形に近い。残存長は10.2cmを測る。

23～37は混入品である。

23・24は土師器杯である。23は遺存度10%で，復元口径15.2cm，復元底径4.2cm，器高3.4cmを測る。色調は内外面ともに赤褐色を呈し，全面に赤彩が施されている。胎土は砂粒を少量含み粗で，焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ，外面にヘラケズリ，内面にミガキが施されている。24は復元口径19.2cm，復元底径18.0cm，器高2.9cmを測る。色調は外面がにぶい赤色，内面が赤褐色を呈し，全面に赤彩が施されている。胎土は砂粒を少量含み密で，焼成は良好である。調整は外面にヘラケズリ後ミガキ，内面にミガキが施されている。

25～32は須恵器杯である。25は遺存度30%で，復元口径14.9cm，復元底径6.0cm，器高3.7cmを測る。色調は外面が灰黄褐色，内面が黄灰色を呈している。胎土は石英・雲母・砂粒・白色粒を少量含み密で，焼成は良好である。調整は内外面ともにロクロナデ，底部外面周縁部にヘラケズリ，底部に手持ちヘラケズリが施され切り離し技法は不明である。茨城産と思われる。26は遺存度40%で，口径12.7cm，底径7.7cm，器高4.5cmを測る。色調は内外面ともに黄灰色を呈す。胎土は砂粒を少量含み密で，焼成は良好である。調整は内外面ともにロクロナデ，底部外面周縁部に手持ちヘラケズリが施され，切り離し技法は回転ヘラ切りである。27は遺存度50%で，口径13.7cm，底径7.6cm，器高3.8cmを測る。色調は外面がともに灰黄褐色，内面が灰黄色を呈す。胎土は雲母・砂粒を少量含み密で，焼成は良好である。調整は内外面ともにロクロナデ，底部外面周縁部に手持ちヘラケズリが施され，切り離し技法は回転ヘラ切りである。茨城産と思われる。28は遺存度10%で，復元口径12.2cm，復元底径6.0cm，器高3.7cmを測る。色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈す。胎土は雲母・砂粒を少量含み密で，焼成は良好である。調整は磨耗が激しくヘラケズリの方向などは不明であるが，内外面ともにロクロナデ，底部外面周縁部及び底部全面に手持ちヘラケズリが施され，切り離し技法は不明である。29は遺存度20%で，復元口径14.6cm，復元底径8.4cm，器高4.0cmを測る。色調は内外面ともに灰黄褐色を呈す。胎土は石英・雲母・砂粒・白色粒を少量含み密で，焼成は良好である。調整は内外面ともにロクロナデ，底部外面周縁部に手持ちヘラケズリが施され，切り離し技法は回転ヘラ切りである。茨城産と思われる。30は遺存度30%で，復元口径13.6cm，復元底径7.8cm，器高4.4cmを測る。色調は外面が灰黄褐色，内面が黄灰色を呈す。胎土は石英・砂粒・白色粒を少量含み密で，焼成は良好である。調整は内外面ともにロクロナデ，底部外面周縁部に手持ちヘラケズリが施され，切り離し技法は回転ヘラ切りである。茨城産と思われる。31は遺存度40%で，復元口径13.0cm，復元底径7.5cm，器高3.5cmを測る。色調は外面がにぶい褐色，内面が褐灰色を呈す。胎土は雲母・スコリア・砂粒を少量



第140图 SI-017 (3)

含み密で、焼成は良好である。調整は内外面ともにロクロナデ、底部外面は手持ちヘラケズリが全面に施され、切り離し技法は不明である。茨城産と思われる。32は遺存度30%の高台付杯で、復元口径13.9cm、底径9.0cm、器高3.6cmを測る。色調は外面が黄灰色、内面が灰黄褐色を呈す。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は内外面ともにロクロナデ、高台部分は貼付後ナデが施されている。東海産と思われる。

33～35は須恵器蓋である。33は復元口径14.4cm、残存器高1.8cmを測る。色調は外面がにぶい赤褐色、口縁部は黒褐色、内面が褐灰色を呈す。胎土は雲母・スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は内外面ともにロクロナデ、外面摘部周縁にヘラケズリが施されている。34は復元口径13.0cm、残存器高1.4cm、摘部径3.8cm、摘部厚0.6cmを測る。色調は外面が灰黄褐色、内面が灰白色を呈す。胎土は雲母・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は内外面ともにロクロナデ、外面摘部周縁にヘラケズリ、摘部にナデが施されている。茨城産と思われる。35は復元口径15.0cm、器高2.4cm、摘部径3.6cm、摘部厚0.6cmを測る。色調は外面が灰黄褐色、一部暗灰黄褐色、内面が灰黄褐色を呈す。胎土は雲母・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は内外面ともにロクロナデ、外面摘部周縁にヘラケズリ、摘部にロクロナデが施されている。茨城産と思われる。

36は遺存度10%の須恵器壺で、口縁部は短く内傾して立ち上がり、胴部は大きく肩を張る。復元口径10.6cm、残存器高7.9cmを測る。色調は外面が灰黄褐色、内面が黄灰色を呈す。胎土は雲母・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は外面にロクロナデ、内面の口縁部にロクロナデ、胴部にナデが施されている。茨城産と思われる。

37は須恵器甌の底部片である。復元底径15.0cmを測り、色調は外面灰黄褐色、内面灰色を呈す。胎土は雲母・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は外面にヘラケズリ、内面にナデが施されている。

SI-026 (第141・142図、図版26・27・248・249・315・318)

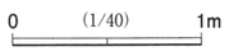
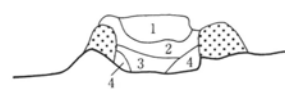
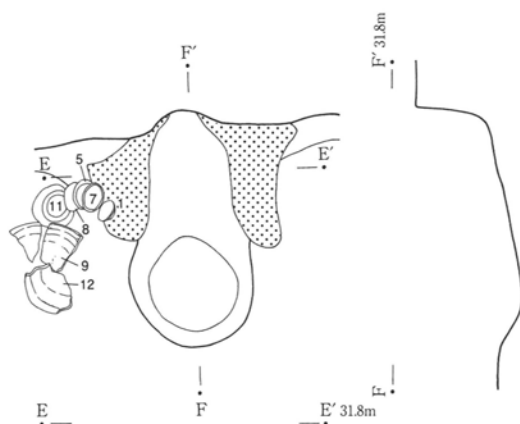
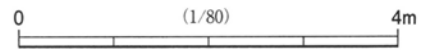
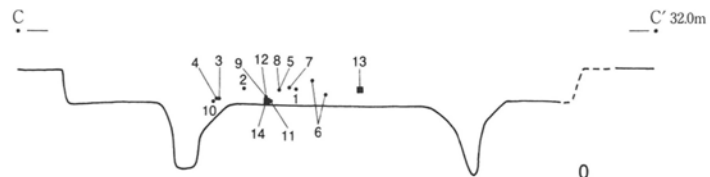
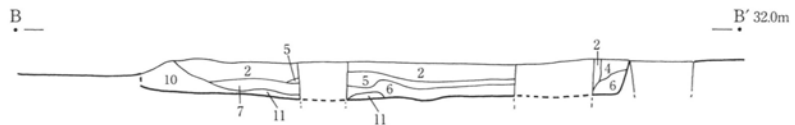
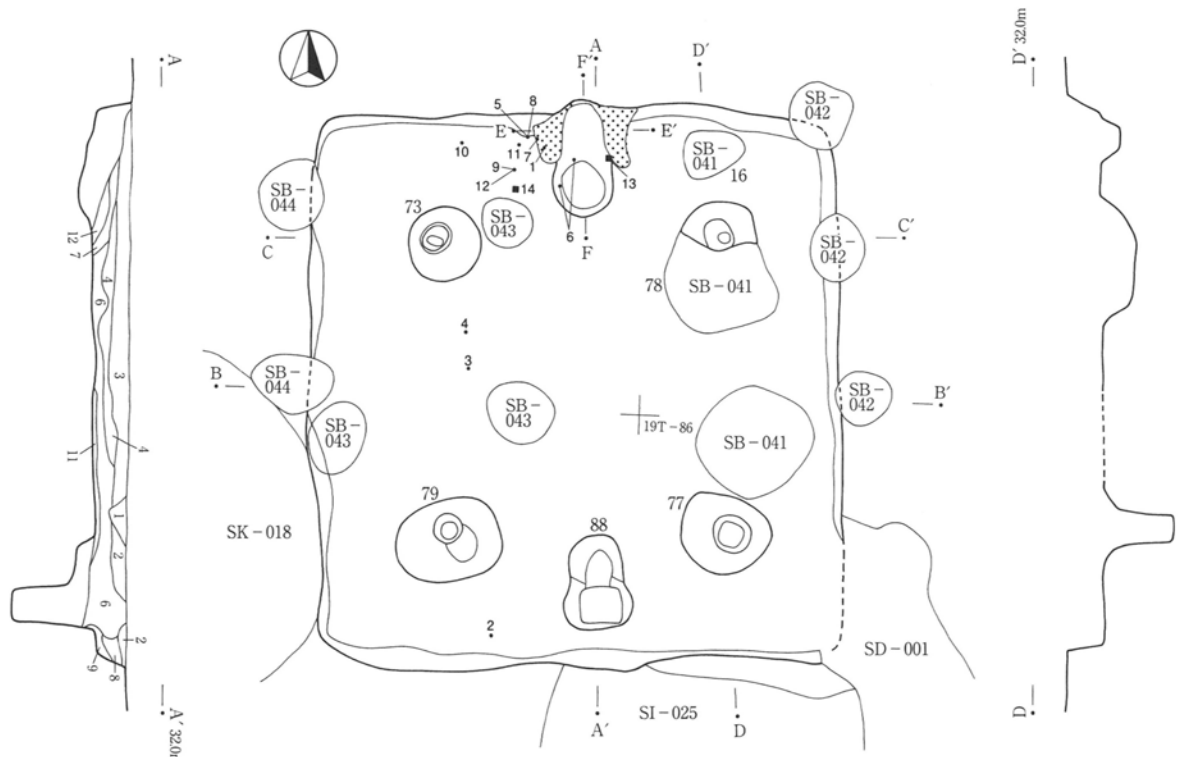
遺跡南部中央の19T-75区に位置し、平面形は方形を呈す。規模は6.0m×5.6m、床面積は30.01㎡、主柱穴間面積は9.54㎡、深さは0.48mを測り、主軸方位はN-2°-Wをとる。本跡が位置する所は重複が激しく、東部をSB-041・042、SD-001に、西部をSB-043・044に、南東部をSI-025にそれぞれ切られている。北壁中央部にカマドをもち、主柱穴は4本、南壁付近に出入口施設用の小穴があり深さ88cmを測る。貯蔵穴及び壁溝は検出されなかった。床面は重複が多く部分的に削平されているところもあるが、ほぼ平らで特に硬化面は見られず、覆土は自然堆積と思われる。カマドは全体的に残りが良く、周辺には土師器杯、鉢、甕、甌といった生活用具が、完形に近い形で出土した。全体的に遺物の出土量はそれほど多くないが、掲載遺物の約80%がカマド周辺に集中している。出土遺物で図示できたのは14点である。

1～6は土師器杯である。1はカマド左袖中央で若干西に傾斜した状態で出土した。ほぼ完形で底部は丸底、口縁部下には弱い一段の稜をなし、口縁部はやや開き気味に立ち上がる。口径14.1cm、器高4.9cmを測る。色調は内外面ともに黒色処理を施し大部分は黒褐色を呈しているが、二次焼成を受けており一部赤褐色である。胎土は石英・スコリア・砂粒を少量含み緻密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面にヘラケズリ後ナデ、内面にヘラミガキが施されている。2は南壁やや西寄りの覆土中面から裏返しの状態で出土した。完形で底部は丸底、口縁部下には弱い一段の稜をなし、口縁部はやや開き気味に立ち上がる。口径13.0cm、器高4.9cmを測る。色調は内外面ともに褐色を呈しているが、二次焼成を受けており部分的に黒色である。胎土はスコリア・砂粒を少量含み緻密で、焼成は良好である。調整は口

縁部の内外にヨコナデ、外面にヘラケズリ後ナデ、内面にヘラミガキが施されている。3は北西側と南西側の支柱穴中央部の床面直上から正位の状態出土した。完形で底部は丸底、口縁部下には一段の稜をなし、口縁部はやや開き気味に立ち上がる。口径14.0cm、器高4.6cmを測る。色調は内外面ともに黒色処理を施しているが、後に口縁部と体部の一部分を残し剥がれ、全体的に赤褐色を呈している。胎土はスコリア・細かな砂粒を少量含み緻密で、焼成は良好である。調整は外面口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ後ミガキ、内面にヘラミガキが施されている。4は3と近接した位置の同一レベルで、裏返しの状態出土した。底部を一部欠損するが完形に近く底部は丸底、口縁部下には強い一段の稜をなし、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。口径14.8cm、器高4.1cmを測る。色調は内外面ともに黄褐色を呈している。胎土は石英・スコリア・砂粒を少量含み普通で、焼成は良好である。調整は口縁部にヨコナデ、外面にヘラケズリ後ミガキ、内面にヘラミガキが施されている。5はカマド左袖基部の覆土中面から出土した。遺存度は90%で、口縁部を一部欠損する。底部は器高が低い分やや扁平な丸底、口縁部下には強い一段の稜をなし、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。口径14.0cm、器高3.4cmを測る。色調は内外面ともに黒色処理を施し大部分は黒褐色を呈しているが、口縁部から体部の一部は暗褐色である。胎土はスコリア・砂粒を少量含み緻密で、焼成は良好である。調整は口縁部にヨコナデ、外面にヘラケズリ後ヘラミガキ、内面にヘラミガキが施されている。6はカマド火床部内の覆土上面と中面出土のものが接合した。遺存度は30%である。底部は大部分を欠損しているが丸底で、口縁部下には弱い一段の稜をなし、口縁部はやや開き気味に立ち上がる。復元口径12.8cm、残存器高3.6cmを測る。色調は内外面ともに黒色処理を施しているが、全面に二次焼成を受けており黄褐色である。胎土は砂粒をやや多めに含み粗で、焼成は良好である。調整は器面が激しく荒れているため詳細は不明であるが、内外面に一部残る調整痕からすると、外面にヘラケズリ後ミガキ、内面にミガキが施されているようである。

7・8は土師器鉢である。7はカマド左袖部で1と5に挟まれる状態で出土した。完形で底部は若干上げ底気味で、口縁部下には弱い一段の稜をなし、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。口径16.4cm、底径5.6cm、器高9.3cmを測る。色調は内外面ともに赤彩を施し大部分は暗赤褐色を呈しているが、一部黄褐色及び黒褐色である。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面にヘラケズリ後ナデ、内面にヘラミガキが施されている。8はカマド左袖部で5と11に挟まれる状態で出土した。底部を全面欠損しているが他は完形で、口縁部は短く「く」の字状に外反する。口径17.6cm、残存器高11.1cmを測る。色調は内外面ともに黒色処理を施し大部分は黒褐色を呈しているが、二次焼成を受けており部分的に黒色である。胎土は砂粒を多量に含み粗で、焼成は良好である。調整は器面の荒れが激しいが、口縁部の内外にヨコナデ、外面にヘラケズリ後ナデ、内面にヘラミガキが施されている。

9～11は土師器甕で、カマド左袖部に近接する床面及び床面直上からそれぞれ出土した。9は12と折り重なるように出土し、接合の結果、ほぼ完形品となった。器形は全体的に歪みがあり、底部は厚くやや小さめで平らではない。胴部はやや下膨れ状を呈し、口縁部は「く」の字状を呈し緩やかに外反する。口径16.1cm、底径8.1cm、器高24.0cm、最大径は胴部やや下位にあり20.4cmを測る。色調は内外面ともに黄褐色を呈しているが、二次焼成を受け外面胴部が一部黒色、胴部下位から底部は部分的に赤褐色に変色している。胎土は砂粒を少量含み緻密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面にヘラケズリ後ナデ、内面にヘラナデ、底部外面にヘラケズリ後ナデが施されている。内面胴部には大きなヘラ痕が見られる。10はカマド左袖から若干離れた北壁下で、逆さまに伏せられた状態で出土した完形品である。



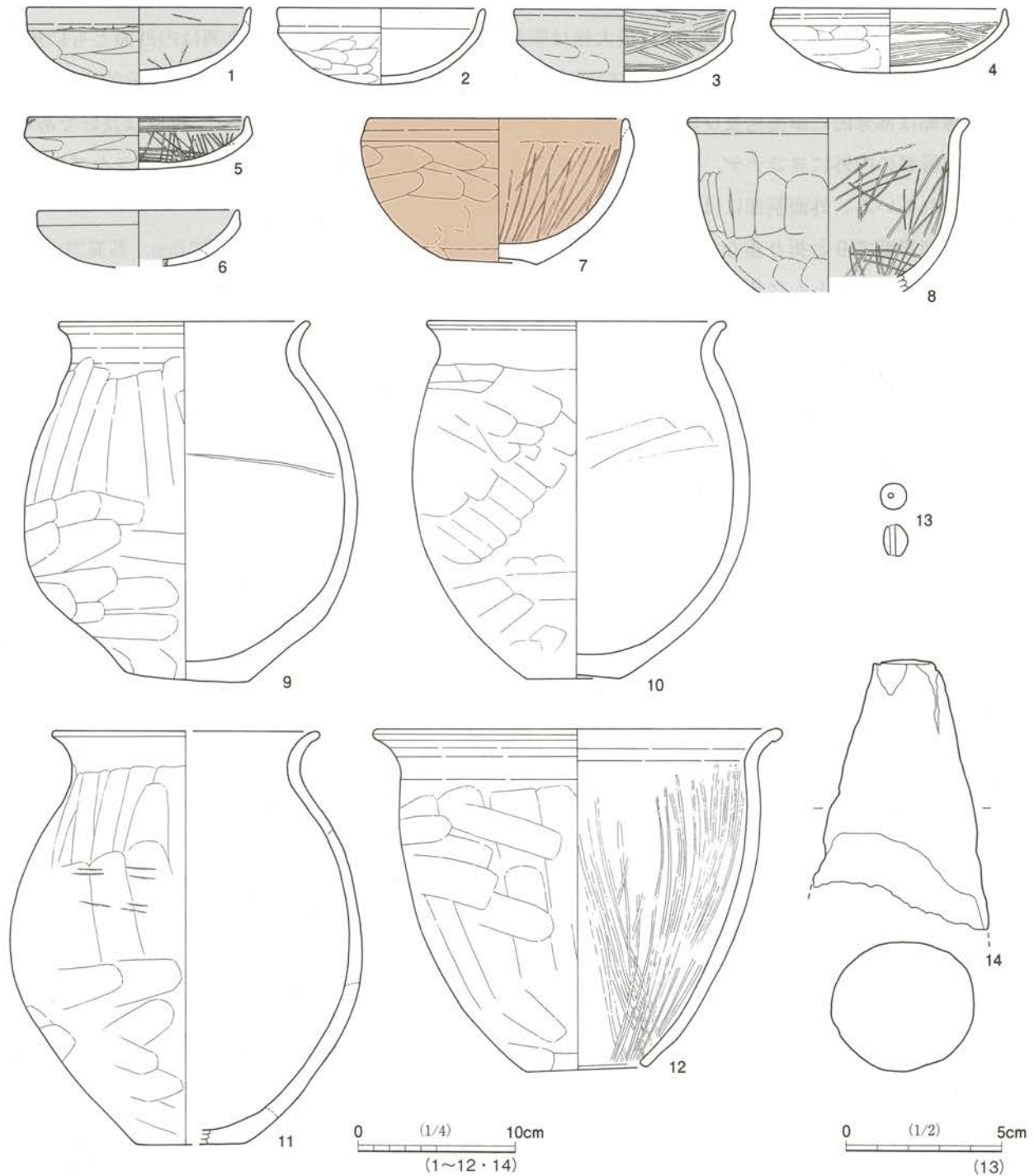
SI-026土層

- 1. 褐色土 焼土粒少混
- 2. 褐色土 砂粒混
- 3. 黒褐色土 褐色土混・砂粒多混
- 4. 黒褐色土 褐色土多混・炭化物混
- 5. 黒褐色土 褐色土多混・ロームブロック・炭化物混
- 6. 黒褐色土 褐色土多混・ローム粒・焼土粒混
- 7. 黒褐色土 やや砂質
- 8. 黒褐色土 焼土粒少混
- 9. 黒褐色土 焼土粒少混・ややしまりが悪い
- 10. 黄褐色土 ローム粒少混
- 11. 黒褐色土 褐色土多混
- 12. 明黒褐色土

SI-026カマド

- 1. 砂質土
- 2. 焼土ブロック混砂質土
- 3. 焼土
- 4. 焼土ブロック

第141図 SI-026 (1)



第142図 SI-026 (2)

底部は小さめで厚く上げ底状を呈し、胴部は均一な厚さで立ち上がり、口縁部は「く」の字状を呈し緩やかに外反する。口径19.2cm、底径6.0cm、器高22.8cm、最大径は胴部やや上位にあり21.6cmを測る。色調は外面が暗褐色、内面が黄褐色を呈しているが、二次焼成を受け外面口縁部から胴部にかけて一部黒色に変色し、内面は部分的に黒味を帯びる。胎土は砂粒を少量含み緻密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面にヘラケズリ後ナデ、内面にヘラナデ、底部外面にヘラケズリ後ナデが施されている。内面胴部には一部ヘラ痕が見られる。11はカマド左袖部の遺物集中箇所の床面から正位状態で出土した。胴下半部を部分的に欠損し、口縁部から胴上半部にかけては完形である。底部はやや小さめで厚く、

胴部はやや長胴気味で厚は上半部で若干薄くなり、口縁部は「く」の字状を呈しやや大きく外反する。口径16.8cm、復元底径6.9cm、器高26.4cm、最大径は胴部中位にあり22.5cmを測る。色調は内外面ともに黄褐色を呈しているが、二次焼成を受け外面口縁部は一部黒色、胴部下位から底部にかけては部分的に赤褐色、内面口縁部は部分的に赤褐色及び黒色に変色している。胎土は砂粒を少量含み緻密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面にヘラケズリ後ナデ、内面にヘラナデ、底部外面にヘラケズリ後ナデが施されている。外面胴部には一部ヘラ痕が見られる。

12は土師器甌で9と折り重なるように出土し、50%遺存する。口径26.2cm、底孔径7.0cm、器高21.3cmを測る。色調は内外面ともに黄褐色を呈しているが、部分的に煤が付着し黒色に変色している。胎土は砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面にヘラケズリ後ナデ、内面にヘラミガキが施されている。

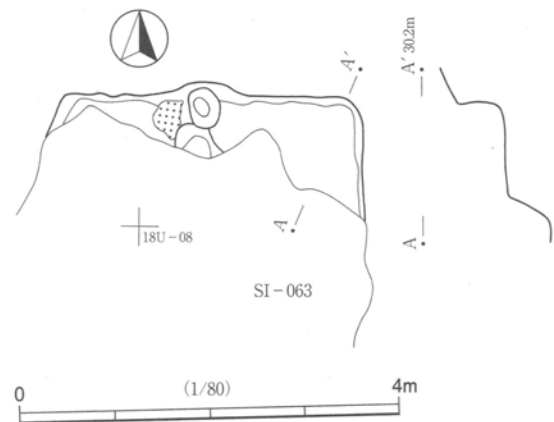
13は土玉で、右袖上面から出土した。長さ1.0cm、幅0.6cmを測る。

14は支脚で、12の下から出土した。残存長9.0cm、計測部位径4.5cmを測る。

SI-070 (第143図, 図版47)

遺跡南部南西端斜面部の18U-08区に位置する。SI-063に遺構の大部分が切られているため、カマドを含めた北辺のみ検出できた。北辺及び両端の形状から、3.2mの方形をなしていると推測される。深さは0.42mで、主軸方位はN-2°-Wである。カマドはSI-063構築時に破壊されたものと思われ、火床部の浅い掘込みと左袖部と思われる山砂が僅かながら検出できた。

本跡に伴う遺物は、1点も出土していない。



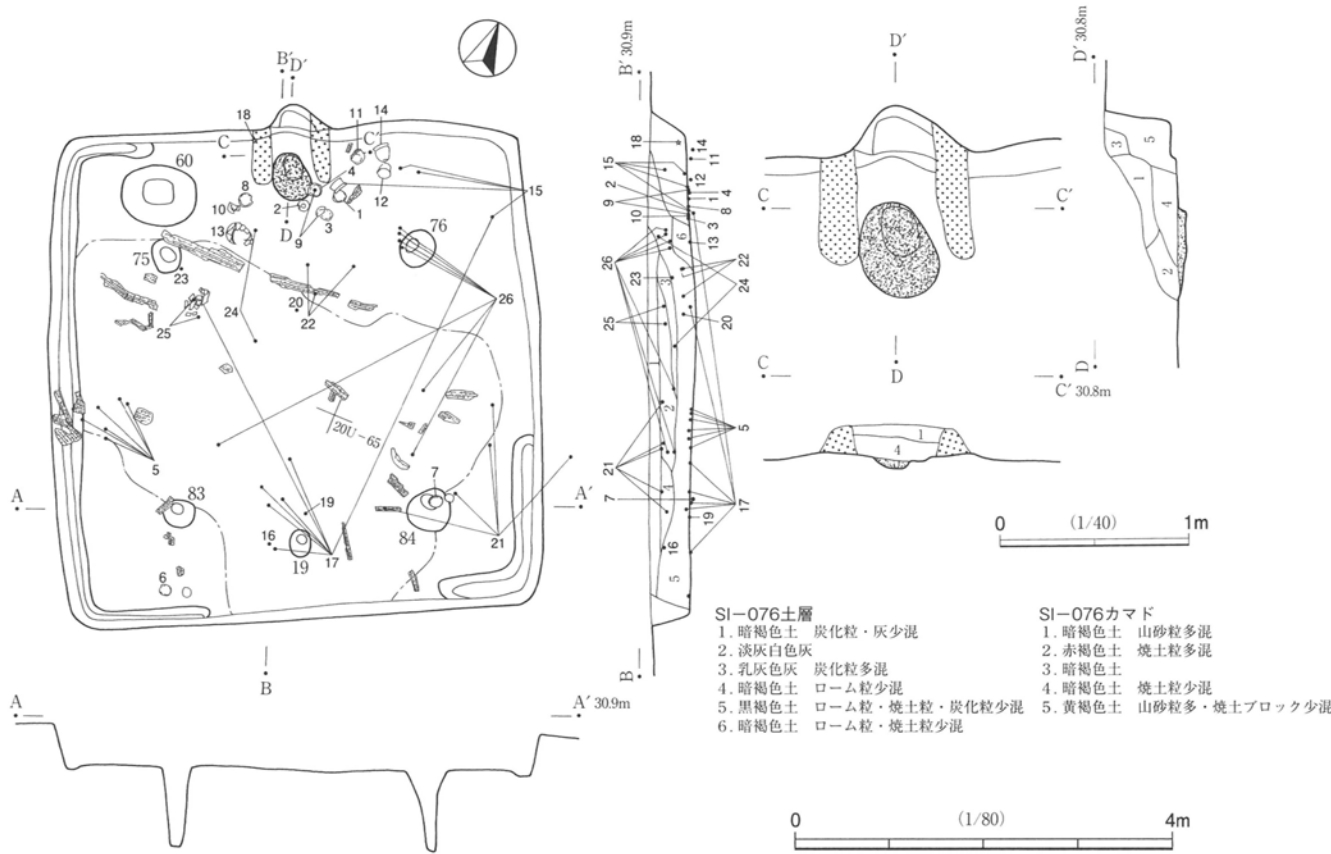
第143図 SI-070

SI-076 (第144・145図, 図版50・259・260・307)

遺跡南部南東寄りの20U-54区に位置し、平面形は方形を呈す。規模は5.2m×5.2m、床面積は24.29㎡、主柱穴間面積は7.10㎡、深さは0.46mを測り、主軸方位はN-26°-Wをとる。重複関係はなく単独で検出された。北西壁中央部にカマドをもち、主柱穴は4本、カマド左袖側の北西コーナー部分に楕円形の貯蔵穴、カマド対壁側の南東壁付近に出入口施設用のやや深めの小穴をもつ。出入口付近から南西寄りにかけて、床面が硬化している。西コーナーから南コーナーにかけて、全長7.1m、深さ1~3cmの壁周溝、東コーナーに全長2.2m、深さ3~5cmの壁周溝を検出した。覆土中層に大量の灰を含んでおり、ほぼ床面から出土している遺物の多くが、完形、正位の状態で検出されていることから、住居が機能している段階で消失した可能性が考えられる。カマドは全体的に残りが良く、使用頻度は高いようで、袖の内側部分と火床部が赤化し、カリカリの状態検出できた。カマド内からは土器片しか出土しなかったが、本遺構に伴う出土遺物の85%がカマド周辺に集中している。出土遺物で図示できたのは26点である。

1~10は丸底の土師器杯である。1はカマド右袖先端部近くの床面から正位の状態で出土した。遺存度は90%で底部は丸底、口縁部下には弱い一段の稜をなし、口縁部はやや開き気味に立ち上がる。口径13.7cm、器高4.5cmを測る。色調は外面が橙色、部分的に明黄褐色、内面が橙色を呈している。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面

に手持ちヘラケズリ後ナデ、内面にヘラケズリ後ナデが施されている。2はカマド焚口部の床面から正位の状態出土した。完形で底部は丸底、口縁部下には弱い一段の稜をなし、口縁部はやや開き気味に立ち上がる。口径13.8cm、器高4.6cmを測る。色調は内外面ともに橙色を呈しているが、外面に一部黒斑が見られる。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面に手持ちヘラケズリ後ナデ、内面にヘラケズリ後ナデが施されている。3はカマド右袖先端部近くの床面から正位の状態出土した。完形で底部は丸底、口縁部下には弱い一段の稜をなし、口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、全体的に歪んでいる。口径12.5cm、器高4.7cmを測る。色調は外面にぶい橙色、部分的に赤褐色、内面が淡橙色を呈している。内面体部は円形に黒変している。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒・白色針状物質を少量含み密で、焼成は良好である。調整は外面口縁部にヨコナデ、体部から底部に手持ちヘラケズリ後ナデ、内面にナデが施されている。4はカマド右袖に近接する床面から正位の状態出土した。完形で底部は丸底、口縁部下には一段の稜をなし、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。口径14.2cm、器高3.3cmを測る。色調は内外面ともに橙色を呈しているが、内外面ともに部分的な黒斑が見られる。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は外面口縁部にヨコナデ、体部から底部に手持ちヘラケズリ、その後体部中位に粗いヘラミガキ、内面全体にヘラミガキが施されている。5は南西壁近くの床面から破片の状態出土した。遺存度は30%で底部は厚みのある丸底、口縁部下には弱い一段の稜をなし、口縁部はやや開き気味に立ち上がる。復元口径15.8cmを測る。色調は外面が橙色、部分的に黒色、内面が明赤褐色、部分的に黒色を呈している。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒・白色針状物質を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面は磨耗が激しく不明瞭であるが手持ちヘラケズリ後一部ヘラミガキ、内面にヘラミガキ後ナデが施されている。6は南東壁コーナー近くの床面から正位の状態出土した。ほぼ完形で底部は丸底、口縁部下には一段の稜をなし、口縁部は垂直気味に立ち上がる。底部には焼成後に内面から開けられた径3mmの穿孔がある。口径11.7cm、器高4.5cmを測る。色調は内外面ともに明赤褐色を呈しているが、二次焼成を受けており内外面の広範囲に煤が付着している。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒・白色針状物質を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面に手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ、内面にナデ、一部ヘラミガキが施されている。7は南東側支柱穴覆土上面から正位の状態出土した。完形で全体的に歪みがあり底部は丸底、口縁部下には一段の稜をなし、口縁部は「く」の字状に内湾する。口径11.0cm、器高4.6cmを測る。色調は内外面ともに広範囲に黒斑があり黒色を呈している。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面に手持ちヘラケズリ後ヘラミガキ、内面にヘラミガキが施されている。8はカマド左袖に近接する床面から正位の状態出土した。口縁部を一部欠損する以外は完形で、底部は厚みのある丸底、口縁部下には一段の稜をなし、口縁部は「く」の字状に内湾する。口径13.1cm、器高5.6cmを測る。色調は外面が明赤褐色、内面が橙色を呈している。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒・白色針状物質を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面にヘラケズリ後ナデ、内面にヘラミガキ後ナデが施されている。9はカマド右袖部に近接する床面から、3と接するような状態で出土した。口縁部を一部欠損する以外は完形で、底部はやや薄めの丸底、口縁部下には一段の稜をなし、口縁部は緩やかに内湾する。口径11.5cm、器高4.3cmを測る。色調は内外面ともに橙色からぶい褐色を呈している。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部



第144図 SI-076 (1)

の内外にヨコナデ、外面に手持ちヘラケズリ後ナデ、内面に粗いヘラケズリが施されている。10はカマド左袖部に近接する床面から、8に接する状態で出土した。遺存度は80%で、底部は厚めの丸底、口縁部下には弱い一段の稜をなし、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。全体の器形はやや歪んだ半球状を呈している。口径11.6cm、器高6.6cmを測る。色調は内外面ともに赤褐色を呈しているが、外面の一部はにぶい橙色である。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、内外面ともに粗い手持ちヘラケズリが施されており、特に外面は器面全体に凹凸ができるほど強く削られている。

11・12・14・15は土師器小型甕である。11はカマド右袖脇の床面から正位の状態でも出土した完形品である。底部はやや上げ底気味で、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。口径12.9cm、底径6.6cm、器高8.5cm、最大径は胴部上位にあり14.0cmを測る。色調は内外面ともに明赤褐色を呈しているが、内面の底部は橙色である。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒・白色針状物質を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面に粗い手持ちヘラケズリ後ナデ、内面にナデ、底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。12はカマド右袖に近接する床面から横位の状態でも出土したほぼ完形品である。底部はやや張り出し気味で、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。器形は全体的に歪みが激しく、口縁部は波打っている。口径15.9cm、底径8.6cm、器高14.1cm、最大径は口唇部にあり16.2cmを測る。色調は内外面ともに橙色を呈しているが、底部内外面は黒褐色である。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面に粗い手持ちヘラケズリ後ナデ、内面にヘラケズリ後ナデ、底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。14はカマド右袖に近接する床面から横位の状態でも出土した。遺存度90%で底部は上げ底で、口縁部は外反気味に立ち上がる。器形は全体的に歪みがあり、口縁部はやや傾斜気味である。口径12.3cm、底径7.0cm、器高19.1cm、最大径は胴部やや上位にあり12.7cmを測る。色調は外面がにぶい黄橙色、部分的に橙色、内面がにぶい黄褐色を呈している。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面に手持ちヘラケズリ後ナデ、内面にナデ、底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。15は覆土中面及び床面出土の土器片が接合した。遺存度は70%、底部は上げ底気味で、口縁部は緩やかに外反する。口径14.8cm、底径7.0cm、器高14.6cm、最大径は胴部下位にあり16.0cmを測る。色調は内外面ともに橙色を呈している。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面に手持ちヘラケズリ後ナデ、内面にナデ、底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。

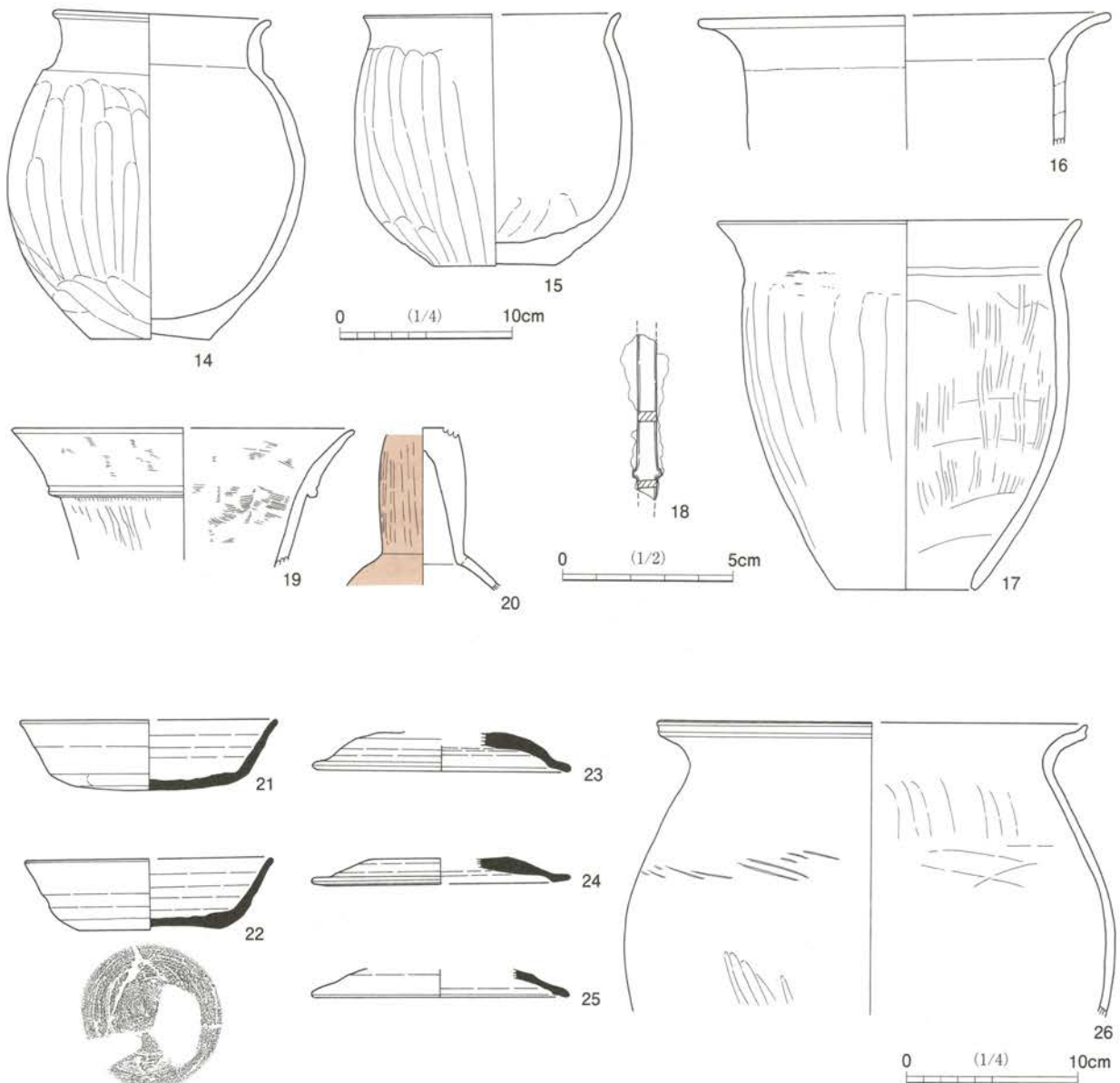
13・19は土師器壺である。13はカマド左袖近くの床面から正位の状態でも押し潰された形で出土した。遺存度は80%、底部は小さく上げ底気味で、口縁部は「く」の字状に外反する。口径13.0cm、底径6.6cm、器高24.1cm、最大径は胴部中位にあり21.5cmを測る。色調は外面が明赤褐色、一部橙色、内面が黒褐色、部分的に橙色を呈している。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面に手持ちヘラケズリ後ナデ、内面にナデ、底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。19は出入口施設用の小穴近くの床面から出土した、頸部から口縁部にかけての破片である。遺存度は10%、口縁部下には一条の隆線が巡り、口縁部は緩やかに外反する。復元口径19.6cmを測り、色調は内外面ともに橙色を呈している。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒・白色針状物質を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、一部ハケメ、頸部の外面にヘラケ

ズリが施されている。

16は土師器甕の口縁部片で覆土中面から出土した。復元口径23.6cmを測り、色調は外面が明赤褐色、内面が橙色を呈している。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒・白色針状物質を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面に手持ちヘラケズリ後ナデ、内面にナデが施されている。

17は土師器甕である。出入口施設用の小穴を中心に広範囲の床面から出土した破片が接合した。遺存度は90%、口径20.8cm、底孔径8.2cm、器高21.3cmを測る。色調は内外面ともに橙色を呈しているが、二次焼成を受けており部分的に煤が付着している。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面に手持ちヘラケズリ後ナデ、内面にヘラケズリ後ヘラミガキ及びビナデが施されている。

18は鉄鏃で、篋被周辺の破片である。方形（棘状）突起がみられる。カマド左袖脇の覆土中面から出土した。棒状部の幅5～6mm、厚さ3mm、茎の幅は5mm、厚さ2mmを測る。



第145図 SI-076 (2)

20は土師器高杯の脚部片で覆土中面から出土した。色調は外面には赤彩が施されており赤褐色、内面が橙色を呈している。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は外面にヘラミガキ後ナデ、内面にヘラケズリ後ナデが施されている。

21～26はいずれも覆土中面から上面からの出土で、いわゆる流れ込みの遺物である。21・22は須恵器杯で茨城産である。21は底部がやや丸味を帯び、安定感に欠ける。遺存度は50%、復元口径14.7cm、復元底径8.8cm、器高4.1cmを測る。色調は内外面ともに灰黄色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は内外面ともにロクロナデが施されている。底部外面は手持ちヘラケズリが全面に施され、切り離し技法は不明である。22は外面底部がやや上げ底気味で、この部分のみ黒色を呈している。遺存度は40%、復元口径14.2cm、復元底径8.3cm、器高4.0cmを測る。色調は外面がにぶい褐色、内面がにぶい橙色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は体部内外面ともにロクロナデが施されている。底部周縁は回転ヘラケズリが全面に施され、切り離し技法は不明である。

23～25はいずれも摘部を欠損する須恵器蓋で、茨城産である。23は復元口径14.4cmを測り、色調は外面が灰黄色、内面が灰色、一部灰黄色を呈している。胎土・焼成ともに良好である。調整は内外面ともにロクロナデが施されている。24は復元口径13.2cmを測り、色調は内外面ともに灰黄色を呈している。胎土・焼成ともに良好である。調整は内外面ともにロクロナデが施されている。25は復元口径13.4cmを測り、色調は外面が灰黄褐色、内面が灰黄色、一部灰黄色を呈している。胎土・焼成ともに良好である。調整は内外面ともにロクロナデが施されている。

26は土師器甕の上半部片である。復元口径24.6cmを測り、色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄褐色、部分的に灰黄褐色を呈している。胎土は粗で焼成は良好である。調整は外面にヘラケズリ後ナデ、内面にヘラナデ後ナデが施されている。

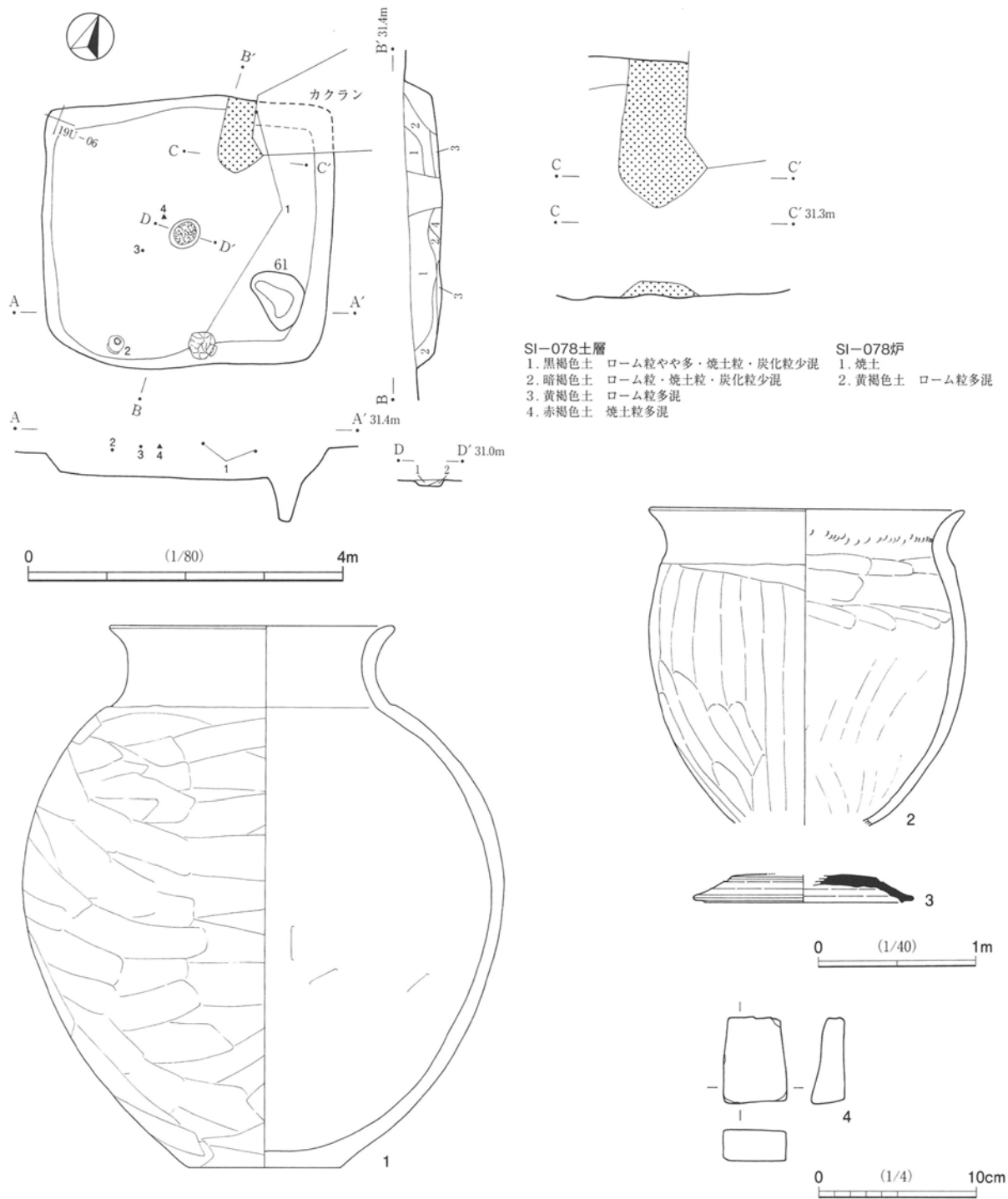
その他、図示していないが、軽石小片が1点出土している。

SI-078 (第146図, 図版51・260・317)

遺跡南部南寄りの19U-06区に位置し、平面形は方形を呈す。規模は3.4m×3.7m、床面積は9.40㎡、深さは0.42mを測り、主軸方位はN-22°-Wをとる。本跡のほぼ中央部を近年の溝が東西に向かって走り、北東隅も土坑状の攪乱が入っているため遺存状態はあまり良くない。炉とカマドを併用し、壁の立ち上がりはなだらかで、すり鉢状を呈している。炉は遺構のほぼ中央に位置し、焼土部分はカリカリに硬化している。カマドは、北東隅に設置されていたと思われるが、左袖部の一部を残して、大部分が土坑状の攪乱によって破壊されている。遺物で図示できたものは4点のみである。

1・2は土師器甕である。1は覆土上面から出土したものが接合した。遺存度は90%、口径17.8cm、底径9.5cm、器高34.4cm、最大径は胴部中位にあり30.6cmを測る。色調は外面が橙色、内面が明褐色を呈し、外面には部分的に黒斑が見られる。胎土は長石・雲母・赤色スコリア・小礫が少量含まれ密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。2は底部を欠損する以外はほぼ完形品で、覆土上面から伏せられた状態で出土した。口径19.5cmを測り、色調は外面が橙色及びにぶい褐色、内面がにぶい褐色を呈している。胎土は石英・長石・雲母・スコリア・砂粒が少量含まれ密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面に手持ちヘラケズリ、内面にヘラケズリ後ナデが施され、内面くびれ部に連続爪痕が1/4周見られる。

3は須恵器蓋で茨城産である。復元口径12.5cmを測り、色調は内外面ともに黄灰色を呈している。胎土・



第146図 SI-078

焼成ともに良好である。調整は外面摘部周縁に回転ヘラケズリ，他はロクロナデ，内面にロクロナデが施されている。

4は砥石である。石材は流紋岩質凝灰岩である。

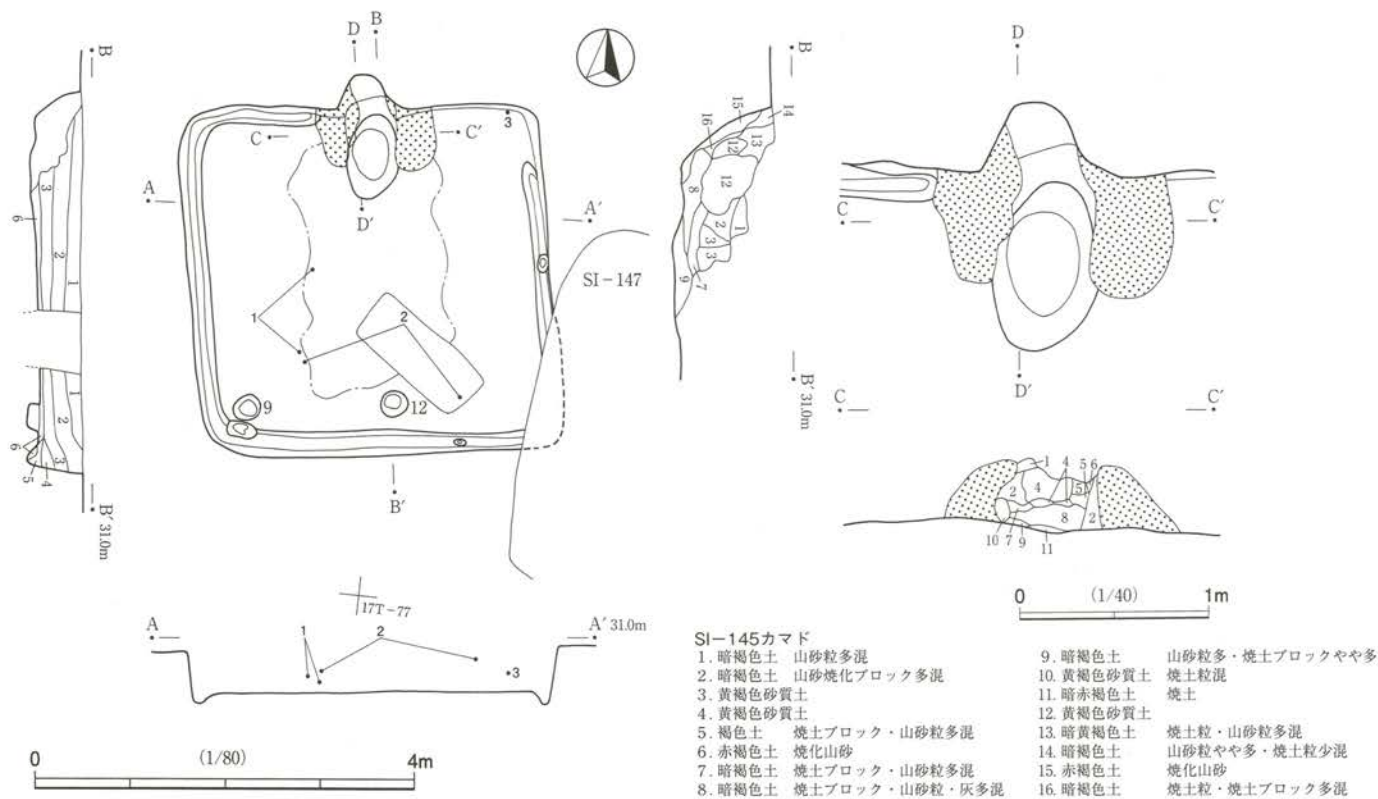
SI-145 (第147図, 図版85)

遺跡南部西端の17T-66区に位置し，平面形は方形を呈す。規模は3.7m×3.9m，床面積は13.06㎡，深さは0.49mを測り，主軸方位はN-9°-Wをとる。南東コーナー部分をSI-147に切られている。北壁中央部にカマドをもち，主柱穴は見られず，カマド対壁側の南壁付近に出入口施設用のやや浅めの小穴をもつ。

カマド周辺から、相対する出入口施設のための小穴に向けて、縦長の状態で床面が硬化している。カマドから北東隅の部分を除いて、深さ1~7cmの壁周溝がほぼ全周しており、北西側は浅く、南東側は深い。カマドは全体的に残りが良く、使用頻度は高いようで、袖の内側部分と火床部が赤化し、カリカリの状態で見出された。遺物はほとんどが床面からやや浮いた状態で出土したが、いずれも土器の小片で図示できたのは3点のみである。

1は土師器杯で遺存度は20%、底部欠損しているが丸底と思われる。口縁部下には一段の稜をなし、口縁部はやや開き気味に立ち上がる。復元口径13.4cm、残存器高4.8cmを測る。色調は内外面ともに橙色を呈し、全面に赤彩が施されている。また、内外面ともに部分的に煤が付着している。胎土は赤色スコリア・砂粒をやや多めに含み粗で、焼成は普通である。調整は二次焼成による剥落のため不明瞭であるが、口縁部の内外にヨコナデ、体部内外面にヘラナデが施されているようである。

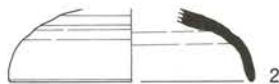
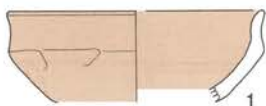
2は須恵器蓋で遺存度は20%、復元口径12.7cm、残存器高3.8cmを測る。色調は外面が黄褐色、内面が灰黄色を呈す。胎土は長石・砂粒・小礫を少量含み密で、焼成は良好である。調整は天井部周辺に回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデが内面まで施されている。



SI-145土層

1. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒少混
2. 暗褐色土 ロームブロック多・ローム粒・焼土粒少混
3. 黒褐色土 ローム粒少・ロームブロック極少混
4. 暗褐色土 ロームブロック多・焼土粒少混
5. 黄褐色土 ロームブロック多混
6. 暗褐色土 ロームブロック多・焼土粒少混

0 (1/4) 10cm



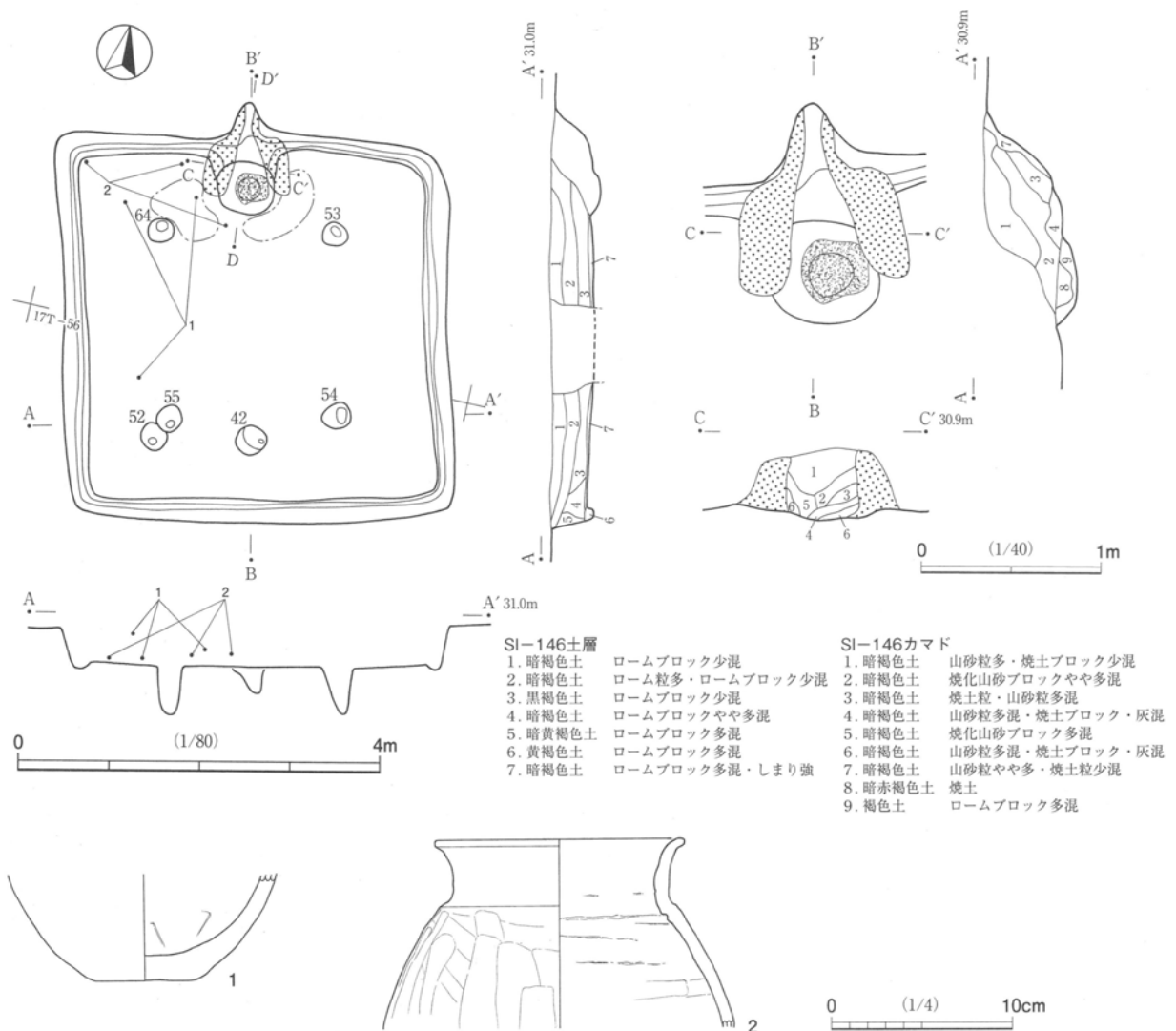
第147図 SI-145

3は土師器甕で遺存度は20%、復元底径8.0cmを測る。色調は外面が橙色、内面がにぶい橙色を呈している。胎土は長石・金雲母・砂粒・小礫を少量含み粗で、焼成は普通である。調整は外面にミガキ、内面にヘラナデが施されている。底部外面には木葉痕を残す。

SI-146 (第148図, 図版85)

遺跡南部西端の17T-46区に位置し、平面形は方形を呈す。規模は4.2m×4.3m、床面積は16.20㎡、柱穴間面積は4.11㎡、深さは0.47mを測り、主軸方位はN-14°-Wをとる。他遺構との重複はなく単独である。北壁中央部にカマドをもち、主柱穴は4本で、カマド対壁側の南壁付近に出入口施設用のやや深めの小穴をもつ。カマド周辺部のみ床面が硬化しており、床面は貼床である。壁周溝は全周しており深さ3~9cmを測り、四隅は若干浅めになっている。カマドは全体的に残りが良く、使用頻度は高いようで、袖の内側部分と火床部が赤化し、カリカリの状態で検出できた。出土遺物は比較的少なく、いずれも土器の小片で図示できたのは2点のみである。

1・2は土師器甕で、いずれも数点の破片が接合したものである。1は底部片で遺存度は25%、底径5.6cmを測る。色調は外面が赤褐色、内面が橙色を呈している。胎土は赤色スコリア・小礫を少量含み密で、焼成は良好である。調整は二次焼成のため器面の剥落が激しく不明瞭で、外面はほとんど調整の単位が見

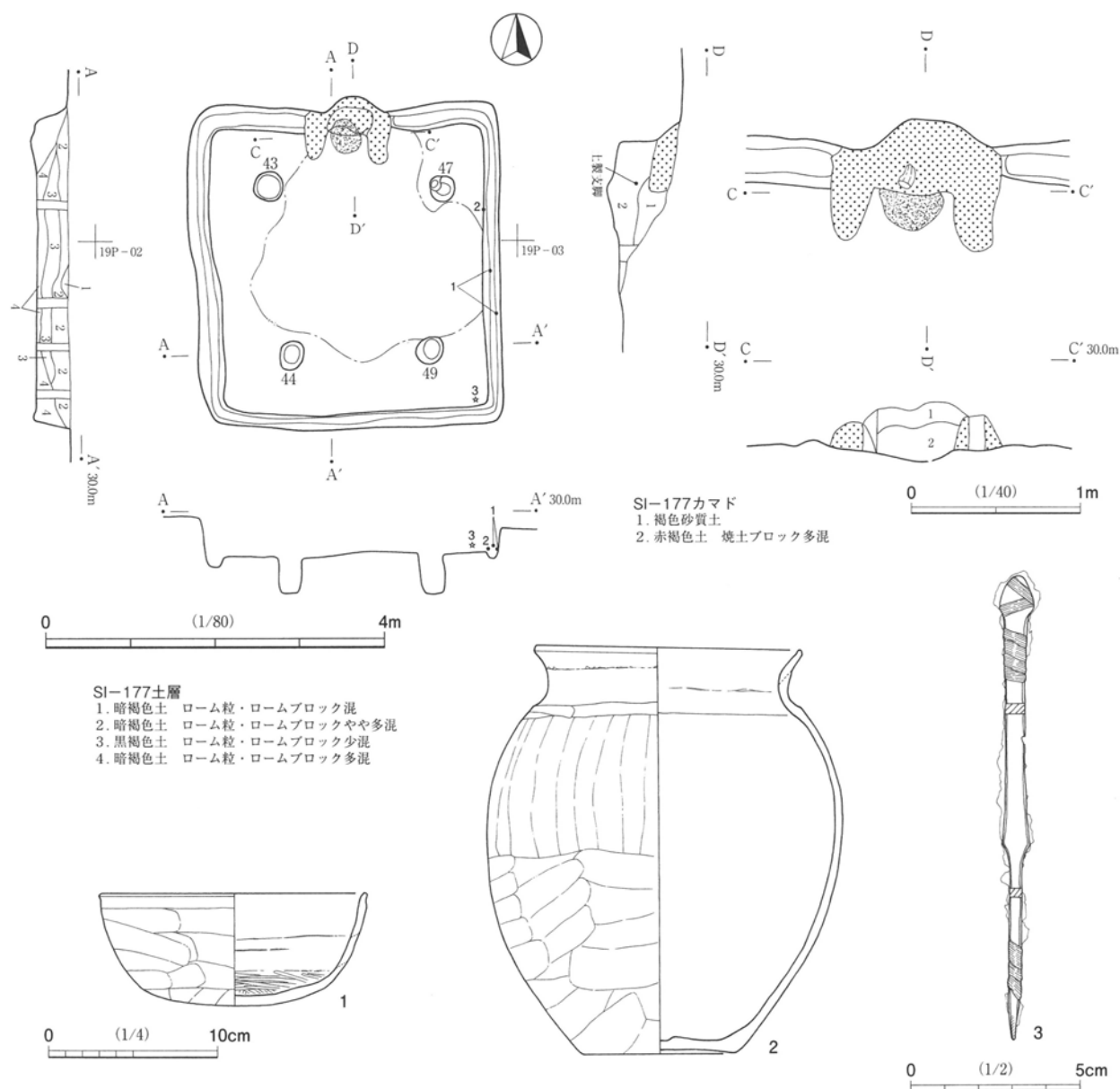


第148図 SI-146

えない。内面にはヘラナデが施されているのがかろうじて見える。2は胴部上半部から口縁部にかけての破片で遺存度は40%，口径13.4cmを測る。色調は内外面ともに橙色を呈している。内外面ともに二次焼成を受けており部分的に煤が付着している。胎土は石英・砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ，外面にヘラケズリ後一部ヘラナデ，内面にヘラナデが施されている。

SI-177 (第149図, 図版97・308)

遺跡北西部の19P-02区に位置し，平面形は方形を呈す。規模は，3.8m×3.7m，床面積は10.52㎡，柱穴間面積は3.50㎡，深さは0.38mを測り，主軸方位はN-1°-Wをとる。他遺構との重複はなく単独であるが，近年の耕作時の攪乱が縦横に40~50cmおきに入り込んでいる。北壁中央部にカマドをもち，主柱穴は4本で，カマド周辺から主柱穴間及び，東部壁周溝にかけて硬化している。壁周溝は全周し，全体的には深さは4~8cmだが，西側のみ，部分的に12cmほどのところがある。カマドの遺存状況は非常に良く，天井部分まで破壊されずに検出できた。火床部やや奥に，奥に向かって倒れた状態で支脚が出土した。この



第149図 SI-177

支脚は取り上げ時に粉々になり実測不能となった。出土遺物は比較的少なく、図示できたのは3点のみである。

1は底部やや丸底気味の土師器杯の完形品である。口径15.4cm、底径10.7cm、器高6.6cmを測る。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、部分的に煤が厚く付着している。このことにより灯明具として利用された可能性もある。胎土・焼成ともに良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面に手持ちヘラケズリ後ナデ、内面底部にヘラミガキ、体部にナデが施されている。底部外面には手持ちヘラケズリが全面に施され、切り離し技法は不明である。

2はやや上げ底気味の土師器甕で遺存度は85%、口径15.5cm、底径8.9cm、器高24.1cm、最大径は胴部やや上位にあり20.9cmを測る。色調は内外面ともに赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は口縁部の内外にヨコナデ、外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。

3は長頸の鉄鏃で、完形である。刃部は鑿箭式であるが、鏃膨れが著しい。茎との境の棒状部はやや裾広がりとなるが、図示した右側は鏃のためやや不明瞭である。刃部から棒状部の上部にかけて、桜の皮などの樹皮と思われる植物繊維が巻かれている。しっかりと巻いてあるため、二次的な付着ではない。刃部を保護する目的で巻かれたものであろうか。また、茎にも繊維が巻き付けられているが、これは筥に挿入するための処置であろう。全長は13.7cm、刃部から棒状部にかけての長さは8cm、茎長は5.7cmである。刃部と棒状部の境はやや不明瞭であるが、刃部の長さはおよそ1.2cm、棒状部の長さは6.8cmである。刃部幅は1.05cm、棒状部幅（断面実測部位）は0.6cm、棒状部厚0.3cm、筥被幅0.8cm、茎厚2.5mmである。

第4節 古墳

本遺跡から検出された古墳はSX-001・005・007・008・009・018の円墳6基、SX-017の方墳1基の計7基である。SX-017は、これまで方形周溝状遺構または方形墳墓といわれるものと同様の遺構である。遺構名称にはこだわらないが、本項では方墳とした。なお、時期は7世紀代以降に下降する可能性があるが、本項で掲載した。いずれの古墳も墳丘はすべて削平されており、周溝のみの検出である。ほとんどすべての古墳は、遺跡中央部から南部にかけて舌状に張り出す台地上に位置する。

SX-001（第150～157図、図版14・300・301・307・308）

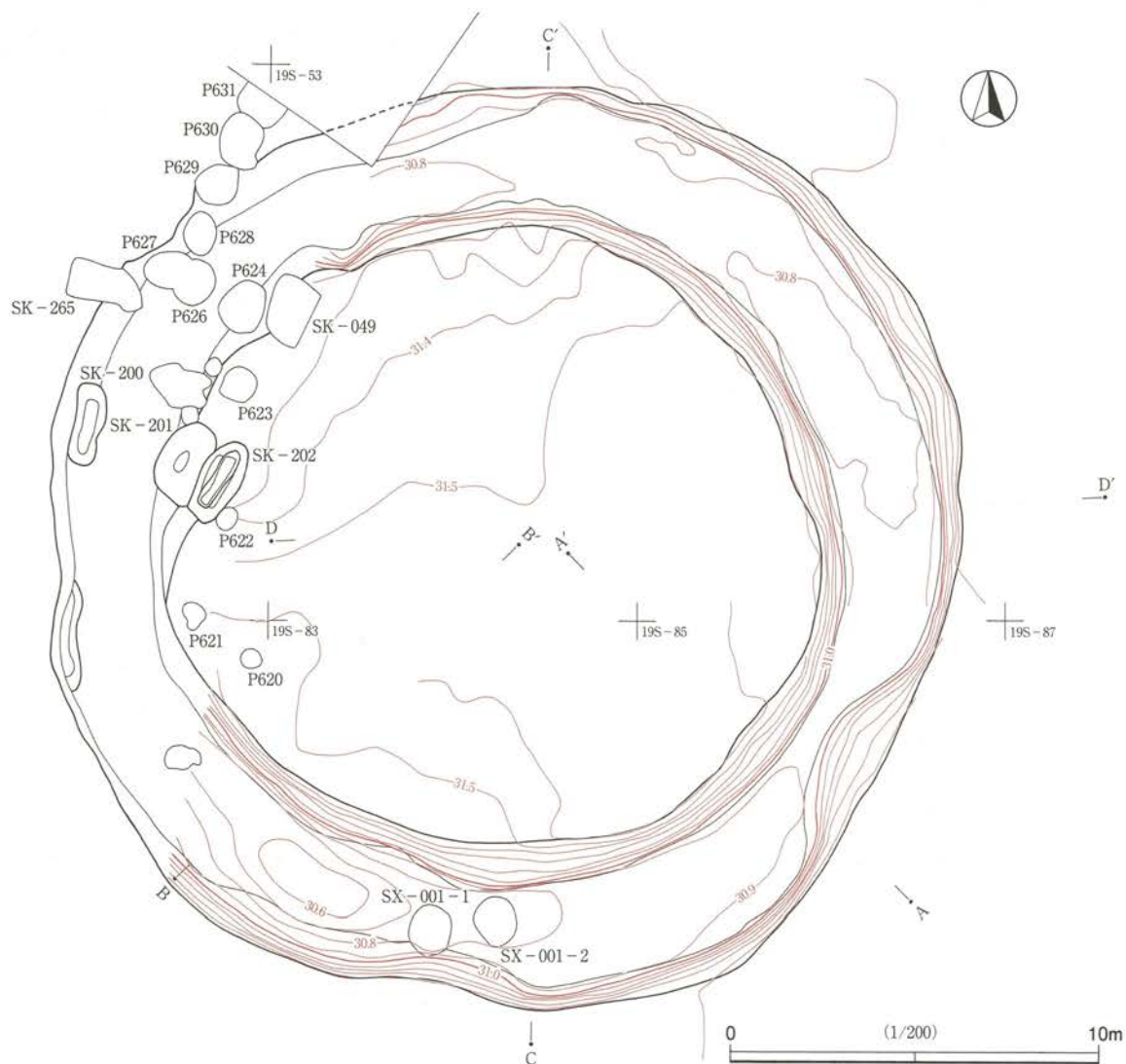
遺跡南部北寄りの19S区に位置する円墳である。地形的には南西側から入る谷の谷頭に近い台地縁辺部にあたる。墳丘は削平されているが若干の起伏が認められたため、調査前の測量をおこない第150図で示した。地元の話によれば墳丘の大部分は耕作に伴って削平したとのことであり、その際直刀らしきものが出土したとのことである。このことをふまえると、本円墳調査前には埋葬施設は破壊されていた可能性があり、今回の調査で埋葬施設が検出されなかったことと合致する。古墳本来の盛土は今回の調査で約30cm前後残っているのが確認されたが、ほぼ周溝のみの遺構検出にとどまった。覆土は自然埋没の公算が大きい。墳丘長は、周溝底面内側の直径で約18mで、周溝外縁を含めた全長は約25mである。調査時における周溝底からの墳丘高は約1.1mで、周溝の幅は約4m、確認面からの深さは0.8m前後である。周溝南東側の一部が狭くなっており、テラス状を呈している。周溝断面は浅い逆台形をなし、底面は全体的に平らである。南側周溝内底面からは2基の円形の土坑（SX-001-1・SX-001-2）が検出された。この土坑は周溝が埋まる前の周溝底面から掘り込まれており、遺物の出土はないが本古墳とほぼ同一時期と考えられる。西側の土坑（SX-001-1）からは炭化物が出土し、掘りかたの一部に熱を受け炭化した部分が

認められた。また、周溝の西側から北西側にかけては土坑・ピットと重複しているが、西側周溝外縁部から検出された土坑（SK-200）は、周溝底面から掘り込まれており、遺物の出土はないが本古墳とほぼ同一時期と考えられる。

墳丘下旧表土層中及び周溝内覆土からは、須恵器・土師器・鉄製品・石製品等が出土した。小さな破片まで含めると出土遺物の総数は2000点をこえる。本古墳の構築時期については、墳丘下から石製模造品2点、南側周溝の底面より約20cm浮いた状態で須恵器の大甕が出土しているが、決定的な決め手はない。しかし、その他の遺物の出土状況も含め、推察すれば7世紀代が妥当と考えられる。出土遺物で図示できた



第150図 SX-001発掘前測量図

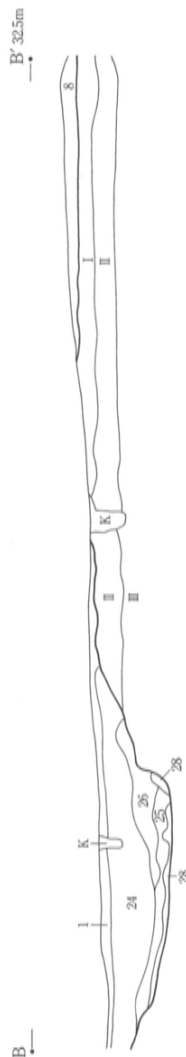
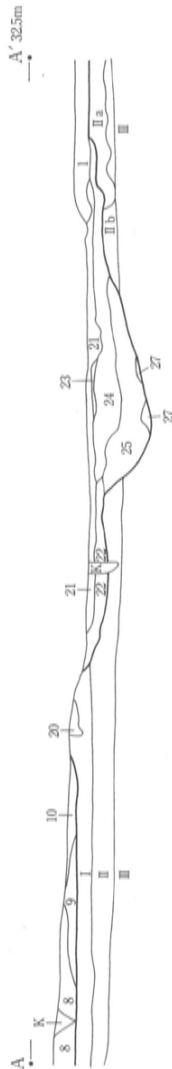
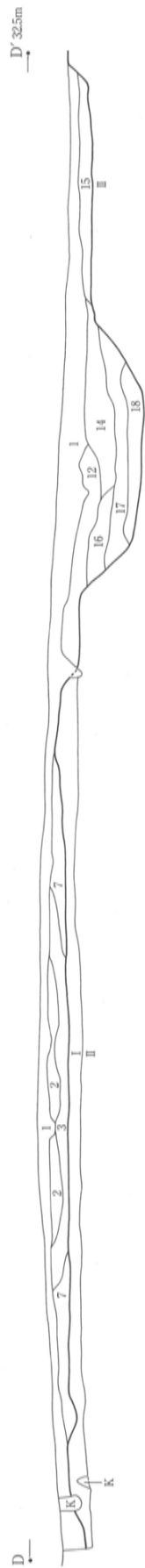
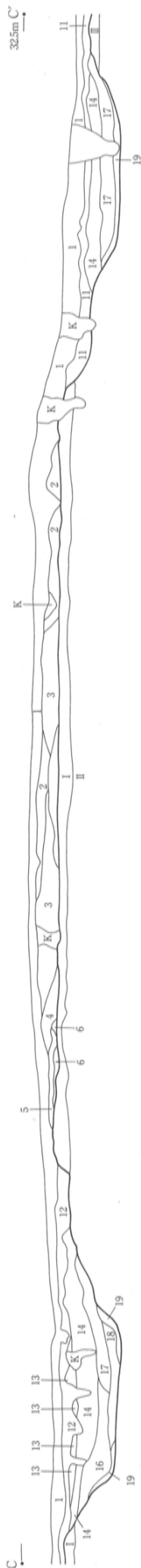


第151図 SX-001

ものは23点である。

1は滑石製の剣形模造品ではほぼ完形品である。墳丘下の旧表土上面から出土した。全長7.7cm・幅（断面部位）2.6cm・厚（断面部位）0.7cmである。

2～4は鉄製品で、2と3は鍬、4は斧である。2の鉄鍬は周溝南側やや西寄りのほぼ中央部で底面から約70cm浮いた状態で出土した。刃部はやや広身の長三角形で、逆刺をもつ。頸部の一部から茎部にかけて欠損している。全長92.5mm・鍬身長50.0mm・鍬身幅24.5mm（断面部位）12.5mm・鍬身厚（断面部位）3.0mm・逆刺長7.4mm・逆刺幅（断面部位）3.5mm・逆刺厚（断面部位）1.5mm・頸部残存長50.0cm・頸部幅（断面部位）4.0mm・頸部厚（断面部位）4.0mmを測り、重量は17.3gである。頸部は錆膨れがいちじるしいが、茎に近いところまで遺存していると思われる、やや短いタイプである。逆刺は先端まで遺存しているのか、欠損しているのか判然としない。欠損していてもわずかである。3の鉄鍬は周溝南側のほぼ中央部で底面から約20cm浮いた状態で出土した。鍬身両先端部及び茎部の一部を欠損する。広身の短頸鍬で、刃部は雁又式である。頸部から刃部へはなだらかに移行している。全長80.8mm、鍬身～頸部長37.4mm・頸部幅（断面部位）9.0mm、頸部厚2.8mmである。また、残存する刃部全体の幅は42.0mm、片側の刃部幅（断面部位）は7.8mm、

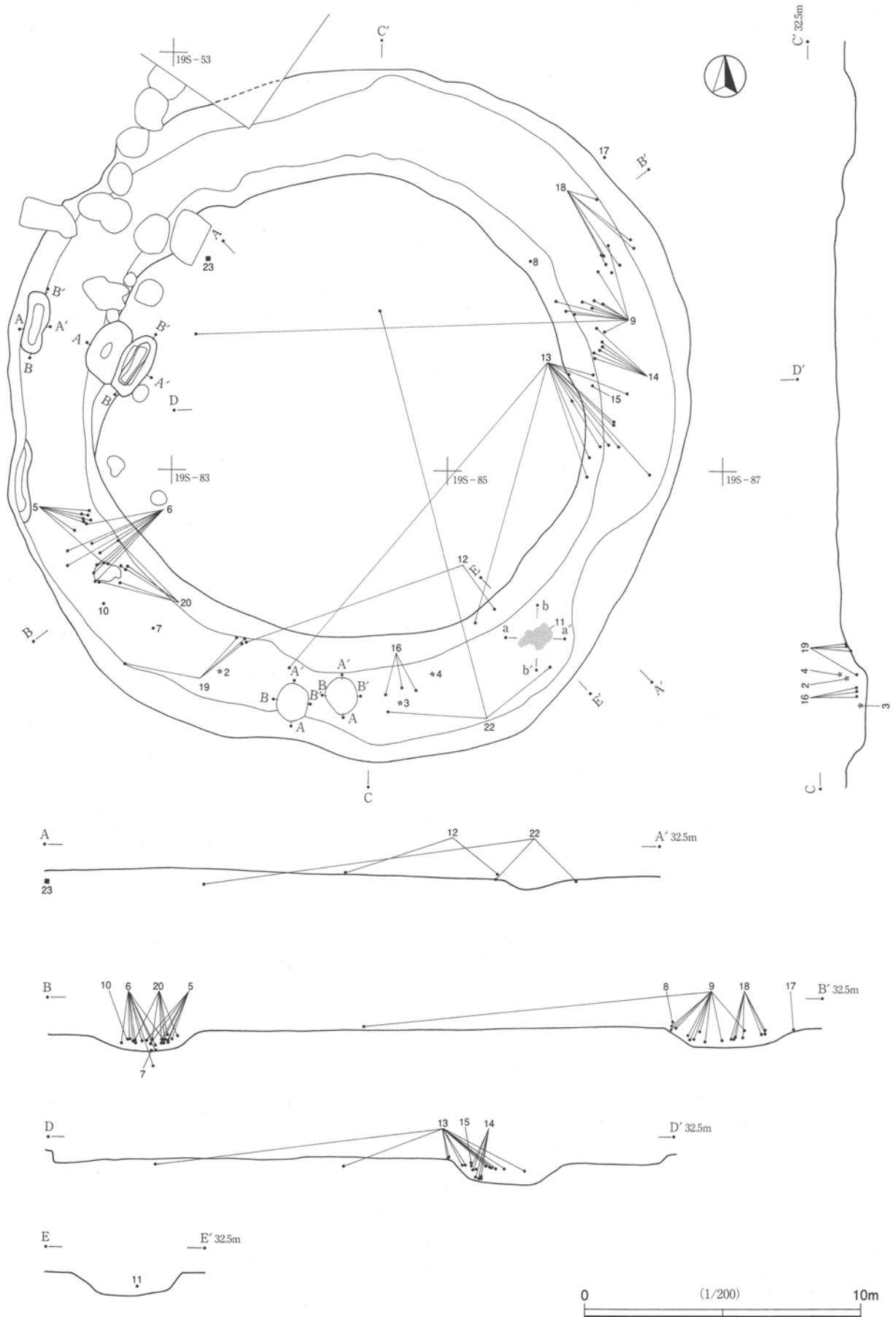


- 21. 暗褐色土 ソフトローム混
- 22. 暗褐色土 ソフトローム混 21層より暗
- 23. 暗褐色土 ソフトローム
- 24. 暗褐色土 灰褐色土水玉状に含
- 25. 黒褐色土 ローム粒・砂粒含
- 26. 暗褐色土 灰褐色土水玉状に含
- 27. 褐色土 ソフトローム混
- 28. 黒褐色土 ローム粒少含 粘性強
- I. 暗褐色土 旧表土
- II. ソフトローム ロームアブロック・黒色土混

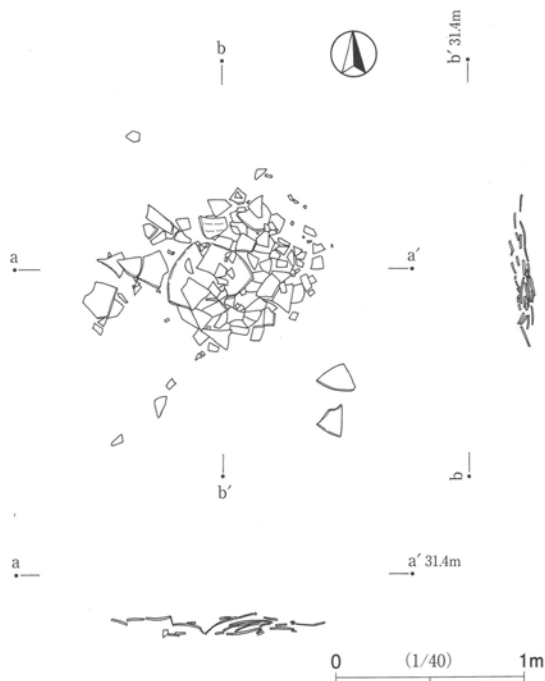
- 11. 黒褐色土 微細な砂粒 ローム粒含
- 12. 暗褐色土 ローム粒少含 炭化物粒・焼土粒含 ややしまる
- 13. 暗褐色土 12層に似る 炭化物粒・焼土粒含 ややしまる
- 14. 黒褐色土 ローム粒含
- 15. 暗褐色土 黒色土・ロームアブロック混
- 16. 暗褐色土 小ロームアブロック混 黒色土混
- 17. 暗褐色土 小ロームアブロック少混 16層に比し暗
- 18. 黒褐色土 ロームを斑状に少含 粒子密
- 19. 暗褐色土 斑状にローム混
- 20. 暗褐色土

- SX-001土層**
- 1. 表土
 - 2. 明褐色土 ロームアブロック混
 - 3. 明褐色土 ロームアブロック多混 2層より明
 - 4. 暗褐色土 褐色土を斑状に混
 - 5. 暗褐色土 褐色土を斑状に混 黒褐色を呈す
 - 6. 暗褐色土 4層に比し褐色土少
 - 7. 明褐色土 4層に類似 やや暗
 - 8. 暗褐色土 2層に似る ロームアブロック少 やや暗
 - 9. 暗褐色土 ハードロームアブロック ソフトローム
 - 10. 暗褐色土 しまりなし
 - 11. 暗褐色土 しまり有
 - 12. 暗褐色土 ハードローム ソフトローム
 - 13. 暗褐色土 ソフトローム

第152図 SX-001土層断面



第153図 SX-001遺物出土状況



第154図 SX-001大甕出土状況

刃部厚（断面部位）1.8mmである。茎は残存長41.4cm・茎幅（断面部位）4.2mm・茎厚（断面部位）3.6mmを測る。重量は10.5gである。篋被は、方形（棘状）突起が現状でも、顕著に遺存している。4の鉄斧片は周溝南側やや東寄りで墳丘側の覆土上面から出土した。刃先がやや広くなり肩は見られず、刃先部分を欠損している。上部は鉄板を両側から直角に折り曲げ袋状にしている。残存長73.0mm・袋部推定幅27.0mm・袋部推定厚14.6mmを測り、重量は29.6gある。

5～9は土師器である。5の杯は周溝南西側ほぼ中央部分の覆土中面から出土した土師器片が接合したものである。遺存度は85%で口縁部分を欠損する。やや浅めの体部をつくる丸底で、口縁部が緩やかに内湾するため、外面体部と口縁部の境には稜が生じている。内面全体と外面の底の部分を除いて赤彩が施されているため、全体的ににぶい赤褐色を呈している。胎土・

焼成ともに良好で、調整は外面底部には手持ちヘラケズリ・口縁部周縁にはヨコナデが、内面全体にナデが施されている。

6～8は高杯である。6は周溝南西側の覆土中面から出土した土師器片が接合したもので、遺存度70%である。杯部は口縁部と体部の間に稜を設けず口径は14.1cm・器高は10.1cm、脚部はやや低めの柱部から大きく裾が広がり、裾径は9.2cmを測る。脚部内面を除く内外面に赤彩が施され、全体的ににぶい赤褐色を呈している。胎土・焼成ともに良好で、調整は外面の脚部に縦方向のヘラケズリ・杯部にヘラナデが、杯部の内面にナデが施されている。7は周溝南西側中央部の底面から出土した。遺存度は80%で脚の裾部を欠損する。口径14.0cmで規格は6とほぼ同一であると思われる。8は周溝北東側墳丘寄りの覆土上面から出土した高杯の脚部片である。柱部分は低く若干直線的に立ち、復元裾径7.5cmのやや小さめの裾が広がる。

9は甕で、周溝東側やや墳丘寄りの覆土上面から中面にかけて出土した数点と、墳丘下旧表土中の1点が接合したものである。胴部は球状を呈すと思われ、復元口径は17.4cmを測る。色調は外面でにぶい褐色・内面で褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は内外面ともにヘラナデが施されている。

10は須恵器の横瓶で、周溝南西側の覆土上面から出土した。胴部は両側面が丸味を帯び俵状である。復元胴部最大長45cm・径22cm、復元口径11.5cm・器高28cmを測る。

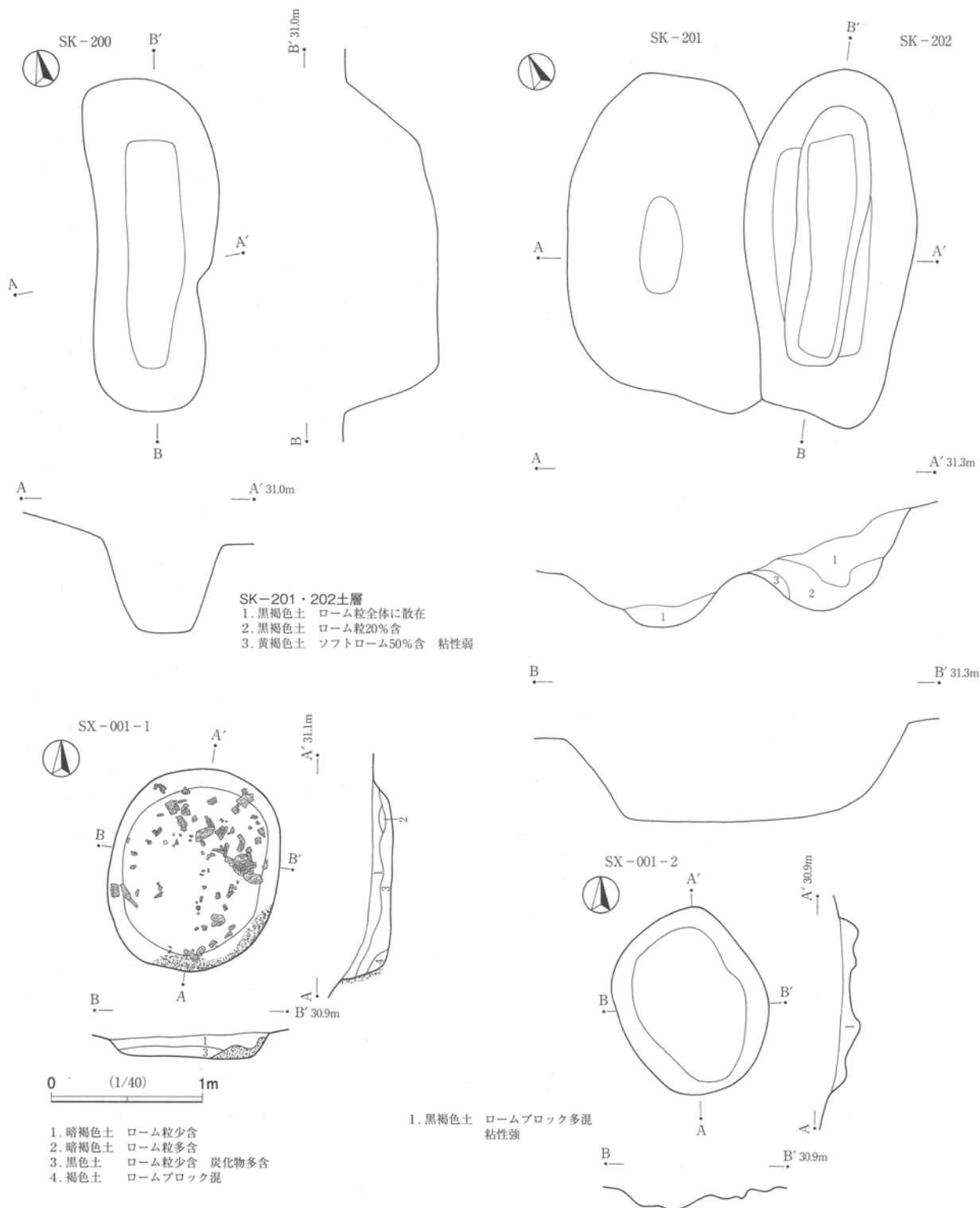
11は東海産の須恵器の大甕で、周溝南東側中央の底面から約20cm浮いた状態で出土した。押し潰されたような状態で出土したので、出土状況は別図で示した。遺存度は30%程度で胴部の一部と底部を欠損している。全体的に歪みがあるため平均的な箇所を計測をした。復元口径44.2cm・残存器高77.6cmを測る。色調は内外面ともに灰色を呈している。胎土には乳白色の微細粒を多く含み、焼成は普通である。頸部は口クロ調整が施され、外面は鋸歯状工具による施文と小さな円形の浮文が二段巡っている。胴部は外面にハケメ・内面に叩きによる調整が施されている。外面肩部には灰釉がかかっている。

12は須恵器の長頸壺で、周溝南側覆土上面のかなり離れて出土した2点が接合したものである。色調は

内外面ともに灰黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。調整は内外面ともにロクロナデが施されている。が激しく不明瞭であるがナデが施されている。外面には自然釉がかかっている。

13は千葉産の須恵器の大甕で、周溝東側から南側にかけての覆土上面から出土したもの接合した。復元口径は40cmである。内外面ともにロクロナデが施されている。

14~16は土師器の杯である。14は周溝東側やや墳丘寄りの覆土上面から下面にかけて出土したものが接



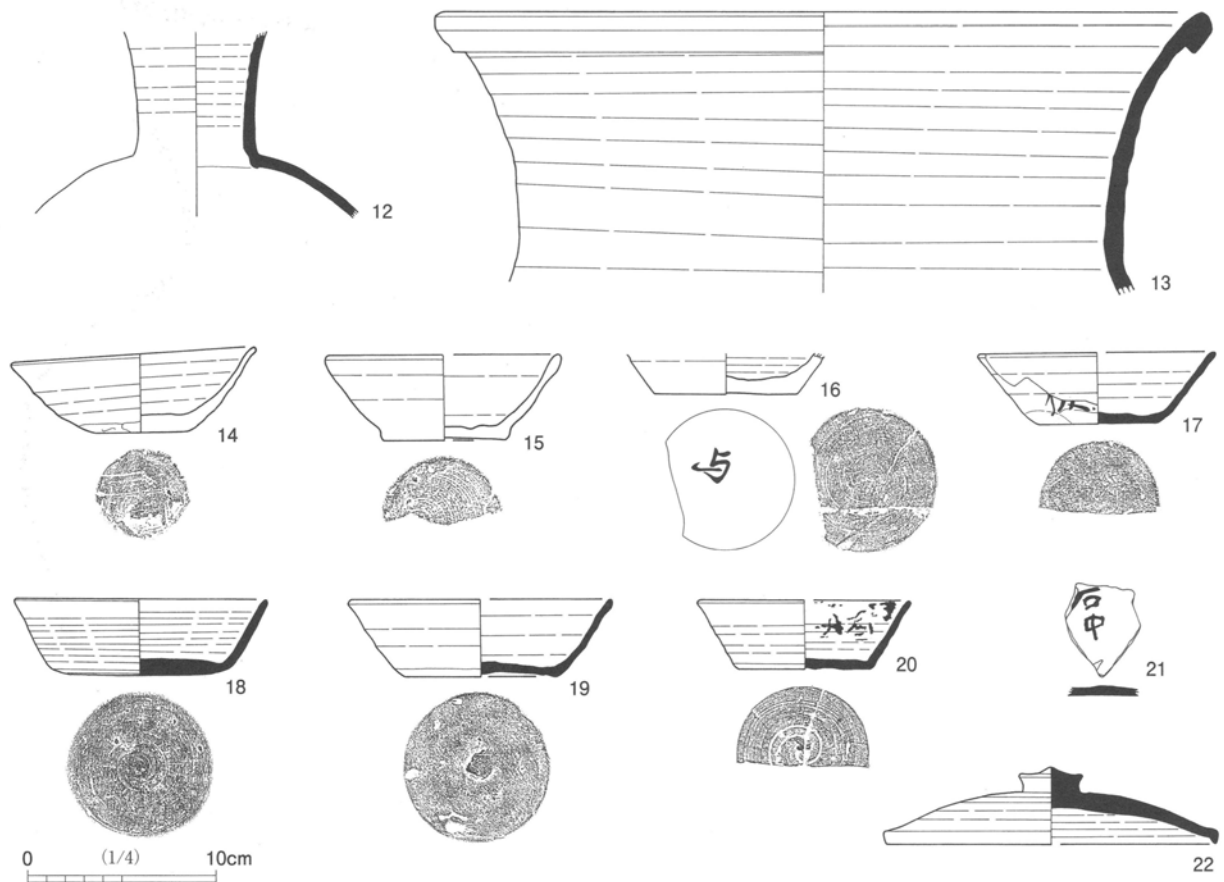
第155図 SX-001内土坑



第156图 SX-001出土遺物 (1)

合したものである。遺存度は90%で若干の歪みがある。口径12.6cm・底径4.8cm・器高4.5cmである。色調は内外面ともに橙色で、胎土・焼成ともに良好である。調整は内外面ともにロクロナデで、外面底部周縁部はヘラケズリが施されている。切り離し技法は回転糸切り後に全面に手持ちヘラケズリが施されている。15は周溝東側墳丘寄りの覆土上面から出土した。復元口径12.2cm・復元底径4.6cm・器高6.5cmである。色調は外面がにぶい赤褐色・内面がにぶい褐色を呈しており、胎土・焼成ともに良好である。調整は内外面ともにロクロナデが施され、切り離し技法は回転糸切りである。16は周溝南側の中央部覆土中面から出土した。底径7.5cmで底部海面には「与」の墨書が認められる。色調は内外面ともににぶい褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は内外面ともにロクロナデが施され、底部外面は全面に回転ヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。

17~21は須恵器の杯である。17は北東側の周溝外から出土した。体部外面に墨書が認められるが遺存状態が悪く内容については不明である。復元口径12.4cm・底径6.3cm・器高3.8cmである。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は内外面ともにロクロナデが施され、底部外面及び底部周縁部は手持ちヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。18は周溝北東側の覆土上面から中面にかけて出土したものが接合した。復元口径13.0cm・底径7.4cm・器高4.2cmである。色調は内外面ともに黄灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は雲母・長石・石英をやや多めに含み密であり、茨城産と思われる。調整は内外面ともにロクロナデが施され、底部外面及び底部周縁部は回転ヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。19は周溝南側やや西寄りの覆土上面から出土した。復元口径13.6cm・底径8.0cm・器高4.1cmである。色調は内外面ともに黒褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は内



第157図 SX-001出土遺物(2)

外面ともにロクロナデ・底部周縁部は回転ヘラケズリが施されている。底部外面は若干上げ底気味で、回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリが施されている。20は周溝南西側の覆土上面から出土した。復元口径11.0cm・底径7.0cm・器高3.7cmである。色調は内外面ともに黄灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は内外面ともにロクロナデ・底部周縁部は回転ヘラケズリが施されている。底部外面は若干上げ底気味で、回転ヘラ切り後回転ヘラケズリが施されている。内面には漆が部分的に付着している。21は周溝覆土内一括で取り上げた、外面に墨書が認められる底部片である。遺存が悪いため内容は不明であるが、「石中」とも「右中」とも読みとれる。

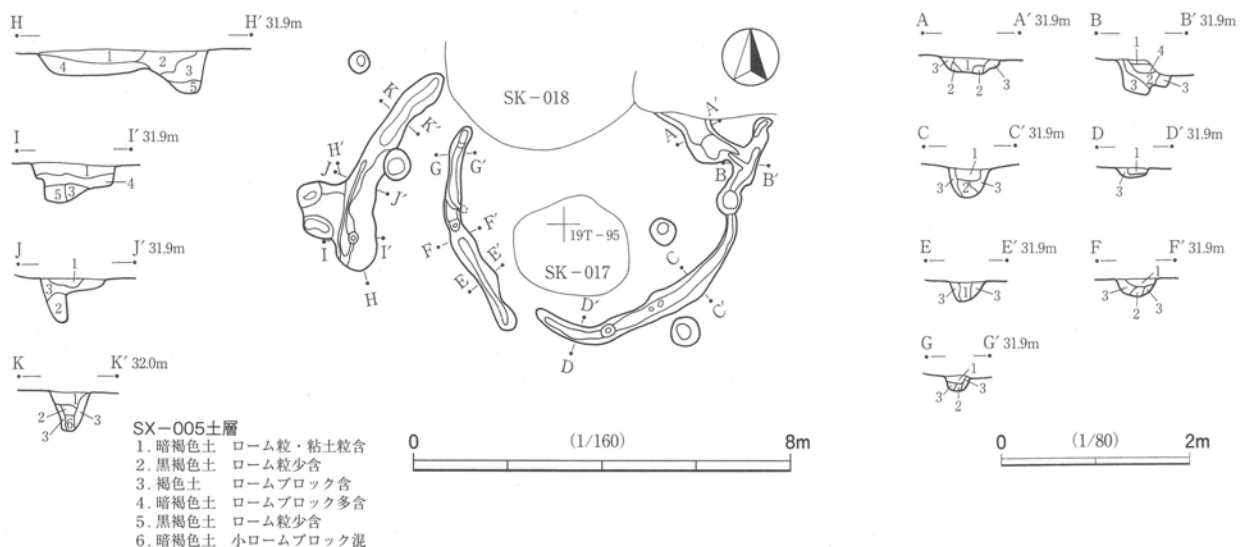
22は須恵器の蓋で、墳丘下旧表土中から出土した破片と、周溝覆土上面から出土した破片とが接合したものである。復元口径17.3cm・摘部の最大径3.4cm・摘高1.4cmである。色調は内外面ともに灰色で、胎土・焼成ともに良好である。調整は外面摘周縁部に回転ヘラケズリが施されている以外は全面ロクロナデである。

SX-005 (第158図, 図版15)

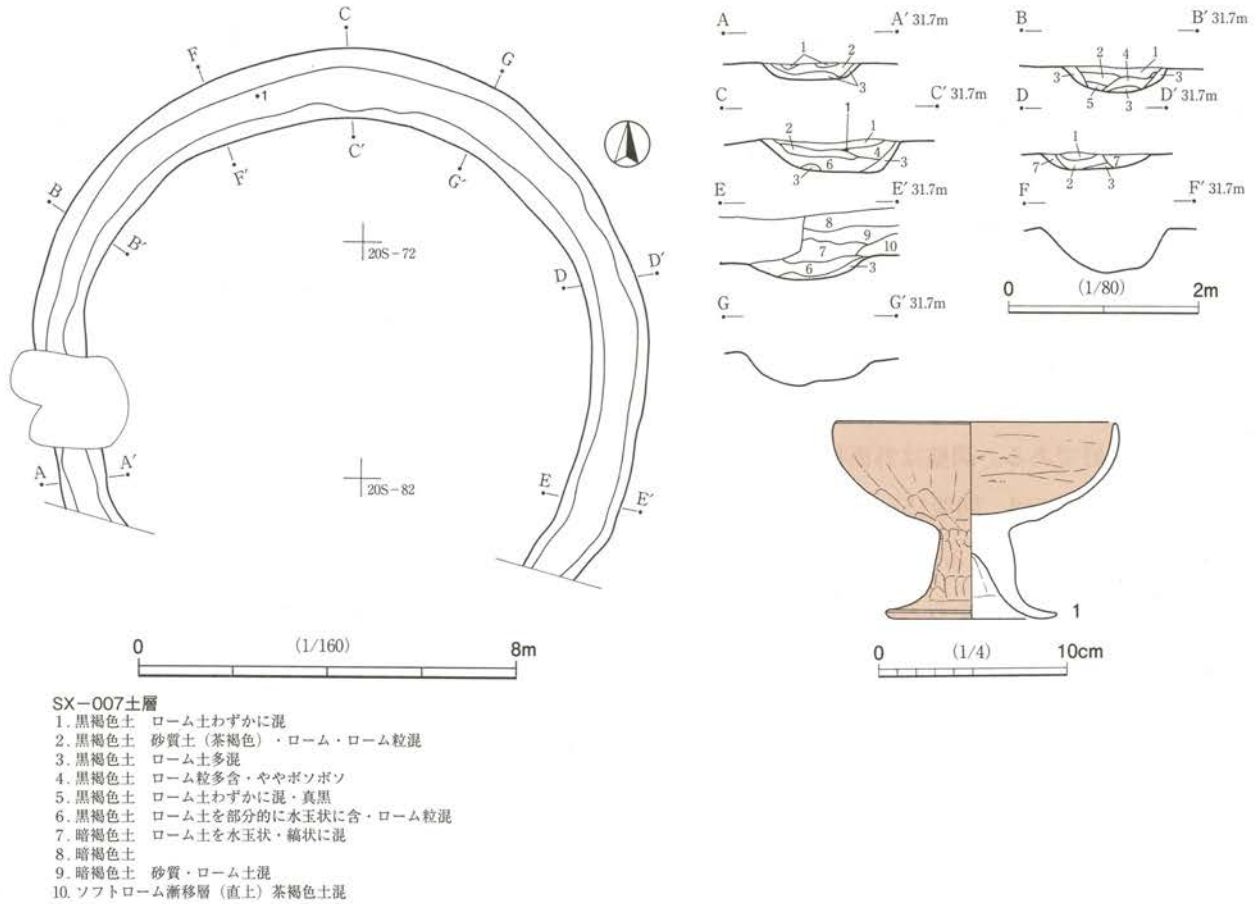
小規模円墳と思われる。盛土は遺存せず、周溝のみが検出された。遺跡南部南寄りの19T-95区に位置し、地形的には南西側から入る谷の谷頭やや東側の台地縁辺部にあたる。本跡は他遺構との重複が著しく、北側部分でSK-018とSI-026に切られており、周溝がどのように巡るのか不明な点があるが、周溝は南側でとぎれ全周しない。小規模古墳であることもあり、この部分を陸橋と捉えて良いのか疑問が残る。周溝底内側における墳丘長は約5.7m、全長は6.2mである。周溝幅は0.3m~0.5m、確認面からの深さは0.1m~0.3m、周溝底面は場所によって異なるが平らな部分は少ない。覆土は自然埋没の公算が大きい。本跡西側には同様な溝状遺構が検出されたが、本跡に伴うものかどうかは判断しがたい。遺物は出土せず、時期決定根拠に乏しいが、選地や周溝覆土の状況からみてSX-001とほぼ同時期とみるのが妥当であろう。

SX-007 (第159図, 図版15・301)

中規模円墳と思われる。盛土は遺存せず、周溝のみが検出された。遺跡中央部南寄りの19S-59区に位置し、地形的には南側に馬の背状にのびる台地のやや東側台地縁辺部にあたる。本跡南側はSD-002に切られており、周溝南側の状況は不明である。周溝底内側における墳丘長は約11.0m、全長は約13.2mである。周溝幅は1.2m~1.4mでほぼ均一であるが、確認面からの深さは0.4m~1.0mでやや不均一である。周



第158図 SX-005



第159図 SX-007

溝底面は平らで、断面は緩やかに立ち上がる逆台形状を呈している。覆土は自然埋没の公算が大きい。遺物は周溝覆土内及び墳丘下旧表土中から出土しているが、図示できたものは1点のみで、時期決定根拠に乏しいが、選地や周溝覆土の状況からみてSX-001とほぼ同時期とみるのが妥当であろう。

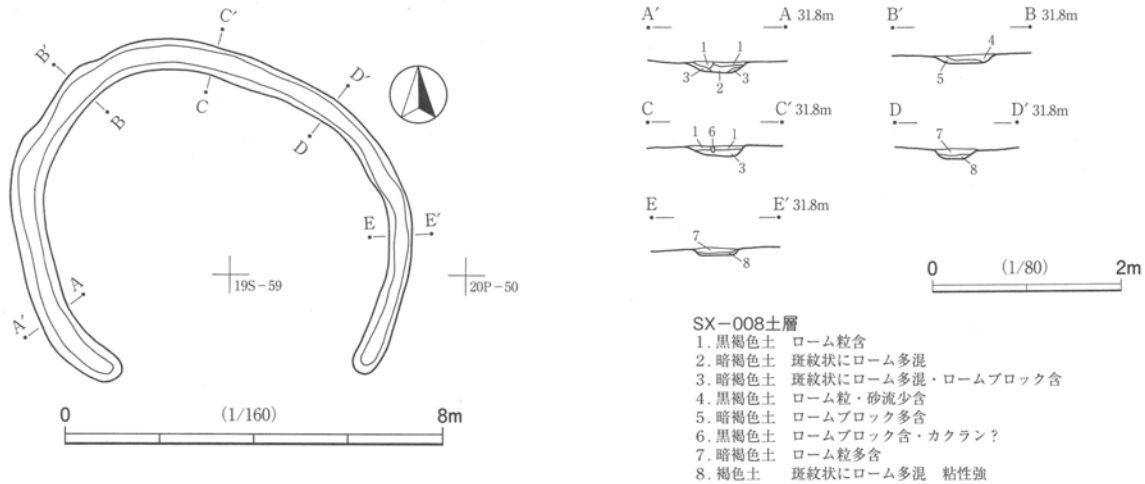
1はほぼ完形品の土師器の高杯で、周溝北側の覆土上面から出土した。杯部は口縁部と体部の間に稜を設けず口径は14.7cm・器高は9.1cm、脚部はやや低めの柱部から大きく裾が広がり、裾径は9.1cmを測る。脚部内面を除く内外面に赤彩が施され、全体的ににぶい赤褐色を呈している。胎土・焼成とも良好で、調整は外面の脚部に縦方向の手持ちヘラケズリ・杯部にナデが、杯部の内面にナデが施されている。

SX-008 (第160図, 図版15)

小規模円墳と思われる。盛土は遺存せず、周溝のみが検出された。遺跡南部東寄りの20S-72区に位置し、地形的には南側に馬の背状にのびる台地中央部にあたる。周溝は南側で途絶え、全周しない。周溝底内側における墳丘長は約7.3m、全長は約8.5mである。周溝幅は0.5m~0.6mで、確認面からの深さは20cm前後できわめて浅い。周溝底面は平らで、断面は緩やかに立ち上がる逆台形状を呈している。覆土は自然埋没の公算が大きい。遺物は周溝覆土内から出土しているが、図示できたものはなく、時期決定根拠に乏しいが、選地や周溝覆土の状況からみてSX-001とほぼ同時期とみるのが妥当であろう。

SX-009 (第161図, 図版16)

遺跡中央部やや東寄りの20S-00区に位置する円墳と思われる。北側部分は道路建設により大きく削平を受けているため、周溝の全体像は捉えることができなかった。地形的には南側に馬の背状にのびる台地



第160図 SX-008

中央部にあたる。盛土は遺存せず、周溝のみが検出された。墳丘長は、周溝底面内側の直径で約14.6mである。周溝の幅は2.7m～3.6m、確認面からの深さは0.36m～0.48mである。覆土は自然埋没の公算が大きい。周溝断面は浅い逆台形をなし、底面は全体的に平らである。墳丘下旧表土層中及び周溝内覆土からは、小さな破片まで含めると出土遺物の総数は120点をこえる。本跡の構築時期については、墳丘下旧表土層中及び南東側周溝の底面から土師器の高杯が出土しているが、決定的な決めてはない。しかし、その他の遺物の出土状況も含め、推察すれば7世紀代が妥当と考えられる。出土遺物で図示できたものは4点のみである。

1は土師器の杯片で、周溝南側底面から出土した。復元口径12.4cmで、色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は外面に手持ちヘラケズリとナデ・内面にナデが施されている。

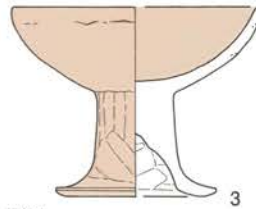
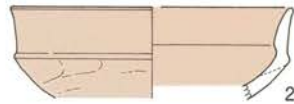
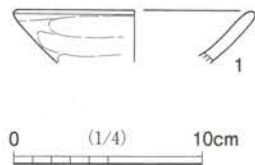
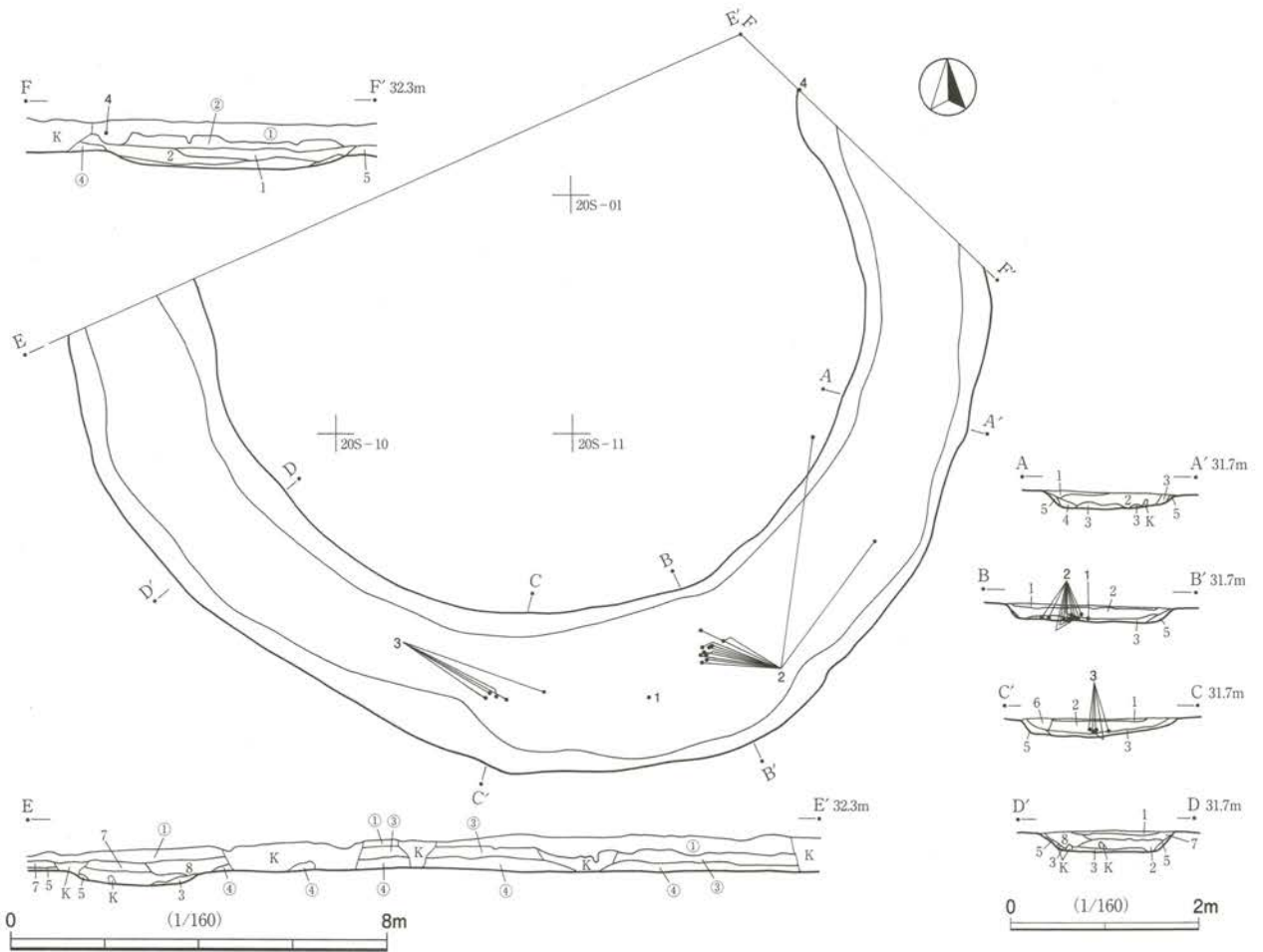
2は内外面が赤彩された土師器の碗片で、周溝南東側底面及び墳丘下旧表土中から出土した破片が接合した。復元口径14.6cmで、色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は外面に手持ちヘラケズリとナデ・内面にナデが施されている。

3はほぼ完形品の土師器の高杯で、周溝南側の覆土下面から出土した。杯部は口縁部と体部の間に稜を設けず口径は12.8cm・器高は10.0cm、脚部はやや低めの柱部から大きく裾が広がり、裾径は8.4cmを測る。脚部内面を除く内外面に赤彩が施され、全体的ににぶい赤褐色を呈している。胎土・焼成とも良好で、調整は外面の脚部に縦方向の手持ちヘラケズリ・杯部にナデが、杯部の内面にナデが施されている。

4は須恵器の高杯片で、周溝内一括で取り上げた。色調は内外面ともに灰褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は外面に回転ヘラケズリとロクロナデ・内面にロクロナデが施されている。

SX-017 (第162図)

遺跡南部西寄りの18T-70区に位置する小規模方墳と思われる。地形的には遺跡南部西側に舌状にのびる台地やや南寄りにあたる。盛土は遺存せず、周溝のみが検出された。主軸はN-40°-Wで、西側コーナー部分で周溝は途絶え全周しない。西側はSB-063、南側はSB-068、北側はSI-107とそれぞれ重複している。周溝底面内側における墳丘長は約5.2m、全長は約6.4mである。周溝の幅は約0.56m、確認面からの深さは0.2mで浅めである。覆土は自然埋没の公算が大きい。周溝断面は浅い逆台形をなし、底面は全



SX-009土層

- 1. 黒褐色土層～褐色土
ローム粒混入
- 2. 黒褐色土層～褐色土
ローム粒混入・砂質っぽい
- 3. 黒褐色土層～ローム粒子
ソフトローム混入・②よりも粒子荒い
- 4. 黒褐色～ローム土
ハードローム粒混入
- 5. 黒褐色土層～ソフトローム
ハードロームをブロック状に混入

- 6. 褐色土層～ソフトローム
ハードロームブロックを多く混入
- 7. 黒褐色土層～褐色土を
水玉状に混入
- 8. 黒褐色土層～褐色土
水玉状に混入
ソフトローム・ハードローム粒混入

- ①表土攪乱 耕作上
- ②暗褐色土 ロームブロック少量含有
砂質でサラサラしている
周溝覆土の最上層
- ③黒褐色土 旧表土による古墳
の封土
- ④褐色土 古墳の封土
粒子はかなり密

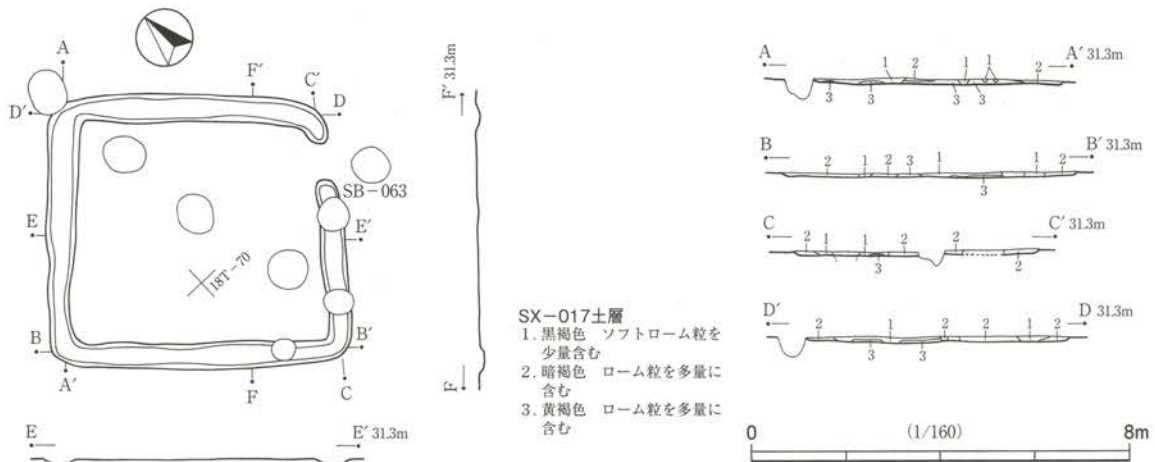
第161図 SX-009

体的に平らである。周溝内覆土からは、遺物が数点出土したが図示できたものはない。本跡の構築時期については、決定的な決め手はない。しかし、その他の遺構との関連から推察すれば7世紀代が妥当と考えられる。

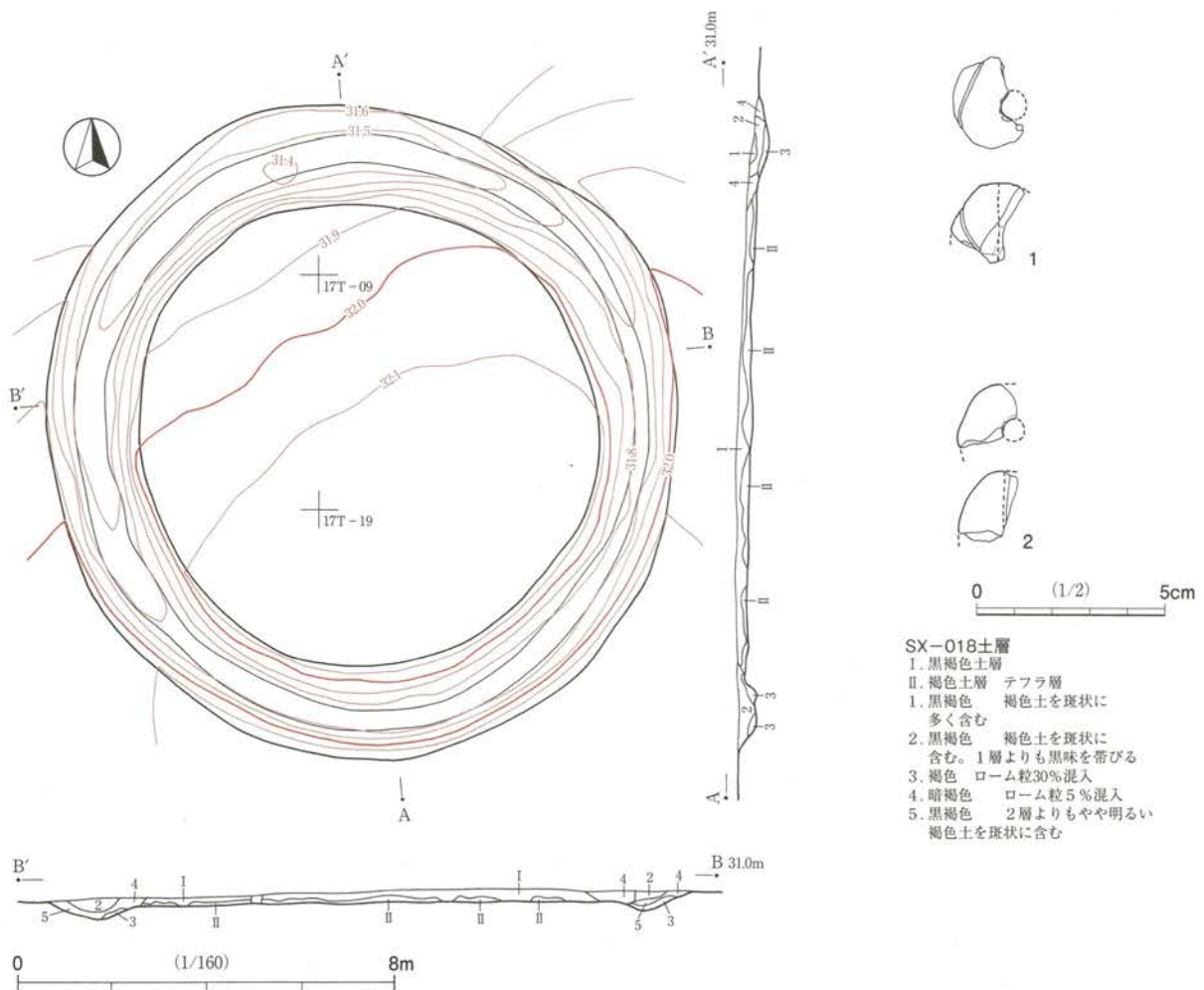
SX-018 (第163図, 図版16)

遺跡南部西端の17T-09区に位置する円墳である。地形的には遺跡南部西側に舌状にのびる台地やや北寄り先端部にあたる。盛土は遺存せず、周溝のみが検出された。周溝はほぼ正円で全周し、他遺構との重複はない。周溝底面内側における墳丘長は直径約11.6m, 全長は約13.9mである。周溝の幅は約1.64m～

2.10m, 確認面からの深さは0.4mである。覆土は自然埋没の公算が大きい。周溝断面は底面の幅が若干小さい逆台形をなし、底面は全体的に平坦である。墳丘下の旧表土層中及び周溝の覆土内から計160以上の遺物が出土しているが、その多くが本跡には伴わない流れ込みで、図示できたものは2点のみである。本跡の構築時期については、決定的な決め手はない。しかし、その他の遺構との関連から推察すれば7世紀代が妥当と考えられる。



第162図 SX-017



第163図 SX-018

第5節 遺構外出土遺物

第164図1～7は古墳時代以外の遺構およびグリッドから出土した遺物である。

1・2は土師器高杯である。1は杯部底部から脚部の破片であり、2は脚部の破片である。1は脚部外面と杯部内外面に赤彩が施されている。なお、杯部の破片があり、同一個体と思われるが、接合しない。その破片から1の杯部は須恵器杯身模倣と思われるが、口縁部の遺存が少ないため、やや判然としない。2も脚部外面に赤彩されていると思われるが、器面が荒れているため不明瞭である。1が出土したP-630は古墳SX-001に近接する土坑である。本来SX-001にあった土器がP-630に混入したのであろう。

3は須恵器甕で、大型品である。推定口径は27.4cmである。胴部外面は平行タタキが施され、灰緑色の自然釉が掛かっている。胴部内面は同心円文の当て具痕があるが、ナデのために痕跡は薄く、一部は消えている。胎土は白色粒・黒色粒を含む。小石の含有は少なく、比較的緻密な胎土である。色調はやや黄色味を帯びた灰色である。焼成は良好である。湖西窯産の須恵器と思われる。

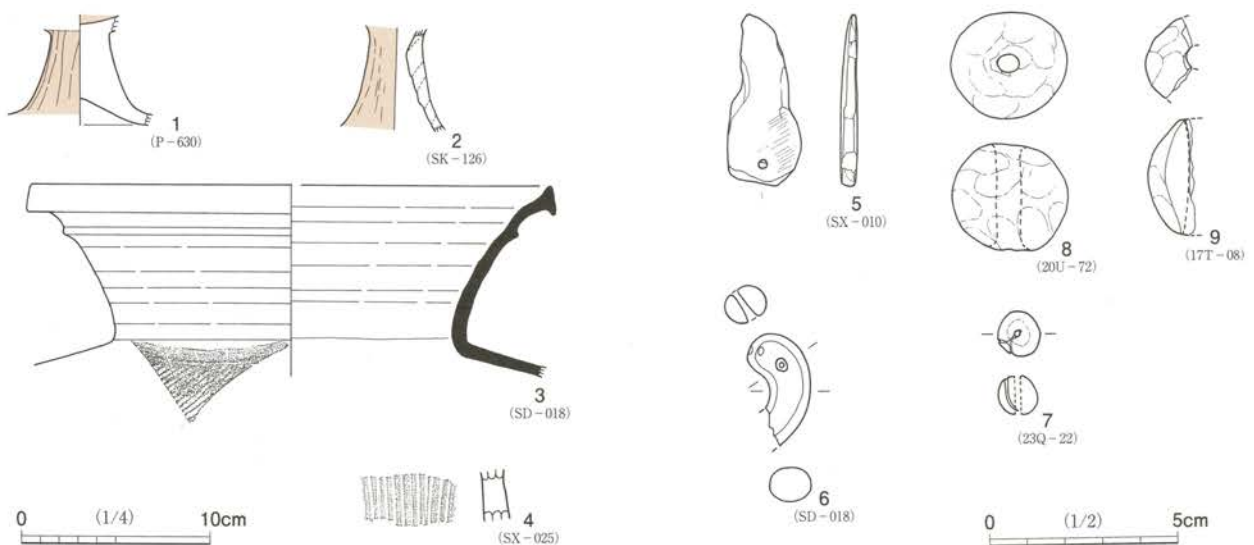
4は埴輪である。外面は粗いハケメが、内面はヘラナデが施されている。色調は明赤褐色で、焼成は良好である。円筒埴輪と思われるが、小片のため断定しがたい。

5（図版314）は滑石製の剣形模造品である。左図の左側上部が欠損している。右側の側面は磨られて滑らかである。長さは4.5cm、最大幅は1.9cm、厚さは5mm、孔径は2mm、重さは5.04gである。色調は灰黒色である。

6（図版314）は瑪瑙製の勾玉である。尾部を欠損する。現存長は3cm、頭部の幅は1.1cm強、厚さは0.9cmである。孔径は1mm強～3mm弱である。重さは5.32gである。色調は暗灰緑色で、表面は縞状をなす。

7（図版314）は瑪瑙製の丸玉である。長さは1.2cm、厚さ・幅は1.0cmである。孔径は1.5mm～2.0mmである。重さは2.15gである。色調は乳白色で、一部に半透明の部分がある。

8・9（図版318）は土玉である。8は完形で、長さは2.8cm、径は2.8cm～3.1cmである。孔径は6.5mm～8mmである。重さは22.62gである。9は一部の破片で、長さは3.1cmである。重さは6.01gである。8・9とも色調は黄褐色を主として、一部に黒ずむ部分がある。焼成は良好である。



第164図 古墳時代遺構外出土遺物

千葉県教育振興財団調査報告第557集

四街道市小屋ノ内遺跡(2)

－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－

[第1分冊]

平成18年10月2日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 独立行政法人 都市再生機構
財団法人 千葉県教育振興財団
千葉県四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 正文社
千葉県中央区都町1丁目10番6号
